愛知教育大学
年次報告書

ANNUAL REPORT AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

2024

はじめに

本学でも，法人化後１年余りが経過した。その間，解決しなければならない課題も明らかになってきた。その主なものは次の六つである。

⑴ 効率化係数１％削減への対応

運営費交付金の積算ベースとなる教員定数は，標準教員数と特定教員数に分類され，特定教員数に対して効率化係数１％削減の対象となっている。本学の場合毎年約4,600万円が削減されることとなる。この削減は，もし人の雇用に置き換えれば，毎年４・５人ずつ教授を削減することとなる。このことにどのように対応するのか。中期目標・計画の期間６年間の対応策が求められるところである。

⑵ 大学，文部科学省及び財務省との関係

法人化前には，新規事項・事業の要求を行うに当たっては，文部科学省を念頭に概算要求を行い，大学と文部科学省との間で詰めを行い，文部科学省で認められれば，それが財務省に要求され，例外を除いて財務省に上がったものは，採択され，予算化される仕組みであった。しかし，法人化後は，時間的余裕もなかったためではあろうが，大学と文部科学省との詰めも十分でなく，さらに文部科学省から財務省に上がったものも，かなりの部分が採択されなかった。今後，大学，文部科学省及び財務省との関係を適切に構築する必要がある。

⑶ 教育改善

教員養成系大学における抜本的な教育改善が求められている。まず，教科などの各教育単位において，養成すべき教師像を明確にする。そして，現在の入学生の学力・気質等をも十分に考慮しながら，その教師を育成するための授業内容・方法等をその教育単位全体で議論し，全員のコンセンサスを得ることが重要である。教員養成系大学・学部の教科専門教育については，教員養成系大学・学部独自の教育が必要となり，設定した教育目標がどれだけ実現出来たかを評価されることとなる。

⑷ 教職員が国家公務員でなくなったことに伴う問題

法人化に伴って，教職員が国家公務員でなくなり，＜労働基準法＞が適用されるようになったことである。このことにより，勤務終了時間以降の残業がとても厳しくなっている。課長等の業務命令で残業手当がでない場合には，原則残業は認められない，というものである。以前ですと，遣り残した仕事は居残って片付けていたが，そのことがなかなか難しいこととなっている。

⑸ 大学機関別認証評価

法人化後すべての大学が７年ごとに外部の認証機関（国立大学の場合には認証評価・学位授与機構）から大学の教育研究，管理運営等について評価を受けることとなる。本学では，2007年に認証評価を受けることとしてその準備を進めている。

⑹ 大学教職員の意識改革

法人化前の国家公務員としての意識からまだ脱し切れていない。学生が居てこその大学，組織である。何はともかく，入学して来た学生に付加価値をつけ，満足感をもって卒業してもらうことを大前提にすべきである。そのためには教育の側面においても十分練られた教育内容を教授し，色々な場面において学生支援も十分に行うことが求められる。さらに，財政的にも十分な効率化を図り，無駄をなくすることが求められている。

目　　次

はじめに

愛知教育大学の現状

第１章　教育活動 …… 1
第１節　学　部 …… 1
1　入学者選抜 …… 1
（学生選抜の方法，志願者数，合格者数，入学者数）
2　在学者・休学者・退学者・留年者数，卒業者数 …… 2
3　教務関係 …… 4
（カリキュラム，成績評価・単位数の制限，免許状取得，単位互換など）
4　教育実地研究 …… 6
5　介護等体験 …… 9
6　インターンシップ …… 10
7　学生生活関係 …… 11
（奨学金・授業料免除，福利施設関係，入学者へのアパート紹介，学生の課外活動，学生相談室，指導教員制，学内交通対策）
8　学生の健康管理，学生相談 …… 15
9　卒業生の進路，就職問題への取り組み …… 19
第２節　大学院 …… 22
1　入学者選抜 …… 22
2　在学者数 …… 23
3　修了者数及びその進路 …… 23
4　学位論文 …… 24
（修士学位論文一覧）
5　教務関係 …… 31
（科目と単位数，教育評価，成績評価・単位認定，免許状取得など）
第３節　ファカルティ・ディベロップメント活動 …… 33
1　新任教官等研修会 …… 33
2　ファカルディ・ディベロップメント研修会 …… 34

第２章　研究活動 …… 35
第１節　講座の概要 …… 35
第２節　研究成果の公表と活用 …… 48
（本学における学会の開催／講座間の共同研究／学内講演会及びシンポジウム／研究雑誌の発行など）
第３節　教員の国際学術交流 …… 59
1　研究者の派遣 …… 59
2　外国人の採用 …… 59
3　外国人研究者の受入 …… 60

第３章　学生の国際交流 …… 61
第１節　留学生の受入 …… 61
1　留学生の受入状況 …… 61
2　授業以外の指導（チューター制度等） …… 61
3　卒業・修了後，帰国後の状況 …… 62
4　教員研修留学生の学習・研究の実状 …… 62
5　放課後学習チューター …… 62
6　学力向上支援事業 …… 64
第２節　在学生の海外留学・研修 …… 66
1　海外留学・研修の方針と現状 …… 66
2　大学間交流 …… 66

第４章　社会との連携 …… 69
第１節　公開講座等 …… 69
1　公開講座 …… 69
2　科目等履修生，研究生 …… 71
3　フレンドシップ事業 …… 73
4　大学祭，子どもまつり等 …… 79
第２節　相談事業 …… 80
1　障害児治療教育センター …… 80
2　教育実践総合センター …… 82
第３節　施設開放 …… 84
1　附属図書館 …… 84
2　体育施設など …… 84

第５章　管理運営の概要 …… 85
第１節　組織運営機構 …… 85
第２節　教育及び研究組織 …… 86
1　教育組織 …… 86
2　研究組織 …… 89
第３節　教員の構成 …… 90
1　学部・大学院・センター・非常勤講師 …… 90
2　リサーチアシスタント（ＲＡ）・ティーチングアシスタント（ＴＡ）…… 91
3　教員の構成 …… 92
4　採用・昇任の手続き・基準・公平性 …… 93
5　教員の兼職の状況 …… 96

第６章　附属施設の概要 …… 97
第１節　附属学校 …… 97
（入学者選抜（選抜の方法，志願者数，合格者数・入学者数，帰国子女などの受入数）／在籍数／留年生・休学者・退学者数／卒業生の進路／教務関係（カリキュラム，成績評価）／学務関係（奨学金，授業料免除，課外活動など）／健康管理／その他）
1　附属名古屋小学校 …… 97

2　附属岡崎小学校 …… 101
3　附属名古屋中学校 …… 104
4　附属岡崎中学校 …… 108
5　附属高等学校 …… 111
6　附属養護学校 …… 115
7　附属幼稚園 …… 118
第2節　附属図書館 …… 120
第3節　センター …… 123
1　21世紀教育創造センター …… 123
2　教育実践総合センター …… 124
3　障害児治療教育センター …… 129
4　保健管理センター …… 130
5　情報処理センター …… 133
6　理系機器共同利用センター …… 134

第7章　施設整備 …… 139

第8章　教員の教育研究活動 …… 141

法人化後の取り組み …… 343

あとがき …… 347

愛知教育大学憲章 …… 348

愛知教育大学の現状

第１章　教育活動

第１章　教育活動

第１節　学部

１　入学者選抜

平成17年度大学入学者選抜について，推薦入学試験は12月４日，５日に実施し，出願状況は216名（前年度241名）であった。個別学力検査（第２次試験）は，前期日程試験を２月25日，26日に，後期日程試験を３月12日，13日にそれぞれ実施した。出願状況は，前期日程1,573名（前年度1,634名），後期日程1,988名（前年度1,675名）であった。

平成17年度　入学試験　入学状況一覧（帰国・外国人除く）

課程	系・専攻・コース	定員	志願者			受験者			合格者			追加合格者			入学者		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
初等教育	幼児教育系	18	12	80	92	10	67	77		19	19				19		19
	教育科学系	22	37	69	106	31	59	90	10	15	25				8	15	23
	人文社会系	95	185	172	357	132	122	254	52	53	105				49	53	102
	自然系	80	179	82	261	129	61	190	60	29	89				56	27	83
	芸術系	50	23	155	178	18	118	136	6	48	54				6	46	52
	生活・スポーツ系	45	79	112	191	49	79	128	15	36	51				15	36	51
中等教育	教育科学専攻	6	7	2	9	7	1	8	6		6				6		6
	国語・書道専攻	13	29	46	75	21	35	56	10	6	16				9	6	15
	社会専攻	9	29	3	32	19	3	22	13	1	14				10	1	11
	数学専攻	14	45	10	55	31	6	37	13	3	16				13	3	16
	理科専攻	16	34	22	56	26	15	41	13	7	20				12	7	19
	音楽専攻	6	9	21	30	7	19	26	4	3	7				3	3	6
	美術専攻	6	1	11	12	1	9	10	2	5	7				2	5	7
	保健体育専攻	6	16	5	21	15	5	20	5	3	8				5	3	8
	技術専攻	10	54	7	61	42	6	48	15	1	16				15	1	16
	家庭専攻	5	3	18	21	3	18	21	1	5	6				1	4	5
	英語専攻	14	25	13	38	22	10	32	12	6	18				11	5	16
障害児教育		25	30	99	129	22	80	102	6	22	28				5	22	27
養護教諭		40	4	152	156	3	113	116	1	43	44				1	42	43
教員養成課程		480	801	1079	1880	588	826	1414	244	305	549				227	298	525
国際理解教育	国際文化コース	110	204	512	716	144	329	473	36	97	133				33	81	114
	日本語教育コース	20	8	55	63	4	28	32	4	22	26				3	19	22
生涯教育	共生社会コース	30	35	162	197	15	111	126	7	30	37				7	24	31
	スポーツ健康コース	30	78	39	117	53	33	86	27	11	38				25	8	33
	造形文化コース	35	28	101	129	20	83	103	7	35	42				7	33	40
情報教育課程		90	243	128	371	181	87	268	72	31	103				68	29	97
環境教育課程		80	164	140	304	115	92	207	49	44	93				46	40	86
学芸４課程		395	760	1137	1897	532	763	1295	202	270	472				189	234	423
初等教育教員養成課程		310	515	670	1185	369	506	875	143	200	343				134	196	330
中等教育教員養成課程		105	252	158	410	194	127	321	94	40	134				87	38	125
障害児教育教員養成課程		25	30	99	129	22	80	102	6	22	28				5	22	27
養護教諭養成課程		40	4	152	156	3	113	116	1	43	44				1	42	43
国際理解教育課程		130	212	567	779	148	357	505	40	119	159				36	100	136
生涯教育課程		95	141	302	443	88	227	315	41	76	117				39	65	104
情報教育課程		90	243	128	371	181	87	268	72	31	103				68	29	97
環境教育課程		80	164	140	304	115	92	207	49	44	93				46	40	86
合計		875	1561	2216	3777	1120	1589	2709	446	575	1021				416	532	948

2　在学者・休学者・退学者・留年者数，卒業者数

在学者数（平成16年５月１日現在），休学者数（平成16年４月１日～平成17年３月31日）

課程＼学年		1　年	2　年	3　年	4　年	計	理　由	
教員養成課程	在学者数				〔14〕			
	休学者数				8	8		
	比　率				57.1%		経済事情	14
総合科学課程	在学者数				〔16〕		家庭の事情	6
	休学者数				6	6	一身上の都合	33
	比　率				37.5%		私費留学	16
教員養成４課程	在学者数	〔515〕	〔506〕	〔491〕	〔535〕		傷病	6
	休学者数	1	7	9	9	26	方針変更	2
	比　率	0.2%	1.4%	1.8%	1.7%		計	77
学芸４課程	在学者数	〔409〕	〔413〕	〔404〕	〔445〕			
	休学者数	2	2	8	25	37		
	比　率	0.5%	0.5%	2.0%	5.6%			
計	在学者数	〔924〕	〔919〕	〔895〕	〔1,010〕	〔3,748〕		
	休学者数	3	9	17	48	77		
	比　率	0.3%	1.0%	1.9%	4.8%	2.1%		
前年度の状況	比　率	0.3%	1.0%	1.4%	3.5%	1.6%		

退学者数（　）内は除籍者数で外数（平成16年４月１日～平成17年３月31日）

課程＼学年		1　年	2　年	3　年	4　年	計	理　由	
教員養成課程	在学者数				〔14〕			
	退学者数				2	2		
	比　率				14.3%		方針変更	23
総合科学課程	在学者数				〔16〕		経済事情	1
	退学者数				6	6	一身上の都合	4
	比　率				37.5%		授業料未納	(3)
教員養成４課程	在学者数	〔515〕	〔506〕	〔491〕	〔535〕		死亡	(2)
	退学者数	0	3	2	3	8		
	比　率	0.0%	0.6%	0.4%	0.6%		計	28(5)
学芸４課程	在学者数	〔409〕	〔413〕	〔404〕	〔445〕			
	退学者数	3	2(1)	2	5(4)	12(5)		
	比　率	0.7%	0.5%	0.5%	1.1%			
計	在学者数	〔924〕	〔919〕	〔895〕	〔1,010〕	〔3,748〕		
	退学者数	3	5(1)	4	16(4)	28(5)		
	比　率	0.3%	0.5%	0.4%	1.6%	0.7%		
前年度の状況	比　率	0.2%	0.7%	0.7%	1.9%	0.9%		

留年者数（平成16年４月１日現在）

年数／課程	留年年数内訳		計	前年度
	１年	２年以上		
教員養成課程		14	14	60
総合科学課程		16	16	66
教員養成４課程	31		31	
学芸４課程	51		51	
計	82	30	112	126

平成17年３月卒業者数

課程	在籍者数(a)	卒業延期者						卒業者数		
		在学期間不足		単位不足		計 (b)		(a)－(b)		前年度
小学校課程	5	0	0.0%	2	40.0%	2	40.0%	3	60.0%	60.0%
中学校課程	3	0	0.0%	2	66.7%	2	66.7%	1	33.3%	55.0%
特別教科課程	1	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%	0	0.0%	50.0%
教員養成課程　合計	9	0	0.0%	5	55.6%	5	55.6%	4	44.4%	59.6%
国際文化	2	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	100.0%	81.8%
人間社会	3	0	0.0%	1	33.3%	1	33.3%	2	66.7%	37.5%
情報科学	1	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%	0	0.0%	80.0%
総合理学	4	0	0.0%	4	100.0%	4	100.0%	0	0.0%	52.9%
総合造形	3	0	0.0%	1	33.3%	1	33.3%	2	66.7%	25.0%
総合科学課程　合計	13	0	0.0%	7	53.8%	7	53.8%	6	46.2%	60.8%
初等教育課程	327	6	1.8%	18	5.5%	24	7.3%	303	92.7%	94.0%
中等教育課程	131	1	0.8%	18	13.7%	19	14.5%	112	85.5%	91.0%
障害児教育課程	26	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	26	100.0%	100.0%
養護教諭課程	44	2	4.5%	0	0.0%	2	4.5%	42	95%	93.3%
教員養成各課程　合計	528	9	1.7%	36	6.8%	45	8.5%	483	91.5%	93.5%
国際理解教育	145	12	8.3%	16	11.0%	28	19.3%	117	80.7%	84.3%
生涯教育	104	3	2.9%	7	6.7%	10	9.6%	94	90.4%	93.1%
情報教育	101	5	5.0%	22	21.8%	27	26.7%	74	73.3%	80.9%
環境教育	85	2	2.4%	11	12.9%	13	15.3%	72	84.7%	88.9%
学芸４課程　合計	435	22	5.1%	56	12.9%	78	17.9%	357	82.1%	86.7%
総合計	985	31	3.1%	104	10.6%	135	13.7%	850	86.3%	87.5%

3　教務関係

⑴　カリキュラム

平成12年度から改編した新教育課程も平成15年度をもって一巡したことから，専門教育科目において，開設学年の変更等の特例的な運営をできるだけ是正し，学生が迷わないように理解しやすいカリキュラム運営を行うよう，履修課程表の一部改正を行った。

⑵　成績評価

成績評価は，「定期試験の結果及び受講状況等を総合して行う」こととなっており，このことは共通科目委員会が行った調査でも実証されている（詳細は愛知教育大学共通科目委員会『教養と教育（第２号）』p.178～p.204 参照）。また，評価基準は従前どおりである。

⑶　履修登録単位数の制限（キャップ制）

各学期の履修登録単位数は，学期ごとに20単位を上限としている（なお，現在は，選択科目の及び自由科目の選択幅の拡大を考慮して22単位で運用している。）。ただし，卒業研究を履修する学年においては，各学期17単位までとし，卒業研究の単位は含まないものとする。これは，学生の主体的な学習を促し，教室における授業と学生の教室外学習を合わせた充実した授業展開を実現するために実施している。

⑷　教育職員免許状取得状況

平成17年３月卒業者の教育職員免許状取得状況は，下表のとおりである。

平成17年３月卒業者の教育職員免許状取得状況

課程	卒業者数	教員免許状の種類												
		小１種	小２種	計	中１種	中２種	計	高１種	幼１種	幼２種	計	聾学１種	養学１種	養教１種
初等教育教員養成課程	303	302	1	303	255	21	276	229	19	113	132			
		99.7%	0.3%	100.0%	84.2%	6.9%	91.1%	75.6%	6.3%	37.3%	43.6%			
中等教育教員養成課程	112	98	5	103	112		112	118						
		87.5%	4.5%	92.0%	100.0%		100.0%	105.4%						
障害児教育教員養成課程	26	26		26		23	23			20	20	8	18	
		100.0%		100.0%		88.5%	88.5%			76.9%	76.9%	30.8%	69.2%	
養護教諭養成課程	42				34		34	45						42
					81.0%		81.0%	107.1%						100.0%
国際理解教育課程	117				33		33	35						
					28.2%		28.2%	29.9%						
生涯教育課程	94				23		23	33						
					24.5%		24.5%	35.1%						
情報教育課程	74				12		12	48						
					16.2%		16.2%	64.9%						
環境教育課程	72				34		34	33						
					47.2%		47.2%	45.8%						
小学校課程	3	3		3	3		3	3						
		100.0%		100.0%	100.0%		100.0%	100.0%						
中学校課程	1	1		1	1		1							
		100.0%		100.0%	100.0%		100.0%							
総合科学課程	6													

⑸ 単位互換

平成16年度に行った単位互換の状況は下表のとおりである。（　）内の数字は前年度実績を表す。

① 入学前の既修得単位の認定

認定者数（人）	認定状況				
	1～4単位	5～9単位	10～14単位	15～19単位	20～単位
2　(3)	1	1	0	0	0

② 大学以外の教育施設等における学修の単位認定

・修得単位別

認定者数（人）	認定状況			
	1単位	2単位	3単位	4単位
9　(4)	5	4	0	0

・学修の種類別

認定者数（人）	認定状況		
	英検	トフル（TOEFL）	トーイック（TOEIC）
9　(4)	0	2	7

③ 海外留学中に修得した単位の認定

認定者数（人）	認定状況				
	1～4単位	5～9単位	10～14単位	15～19単位	20～単位
1　(0)	0	1	0	0	0

④ 単位互換に関する包括協定により修得した単位の認定

認定者数（人）	認定状況			
	1単位	2単位	3単位	4単位
5　(2)	0	5	0	0

4　教育実地研究

本学の教育実地研究は，教員養成4課程の学生が，所属する課程に応じた学校において履修が義務づけられている主免実習，選択として副免許状を取得するための副免実習，主免と異なる学校及び児童・生徒と理解するための実習である隣接校種実習，さらには，学芸4課程の学生のうち，免許状を希望する者のみが履修する教育実習と，大きくこの三つに分けることができる。それと基礎実習及び応用実習も選択科目として実施している。

それぞれの実施状況は以下のとおりである。なお，障害児教育教員養成課程，特殊教育特別専攻科及び臨時教員養成課程の特殊教育実習は上記区分け以外の別表記とした。

主免実習（教員養成課程）　　※（ ）内の数字は養護実習生を内数で示す。

実習期間	実習校種	学校種	学校数	実習生数
9月27日㈪～10月22日㈮〔4週間〕	小学校	愛知県協力学校	121	202（32）
		名古屋市協力学校	17	33（ 3）
		附属小学校	2	118（ 6）
		小計	140	353（41）
	中学校	愛知県協力学校	32	36
		附属中学校	2	71
		小計	34	107
	幼稚園	愛知県内協力園	6	9
		附属幼稚園	1	11
		小計	7	20
9月27日㈪～10月22日㈮〔4週間〕	高等学校	附属高等学校	1	5
		小計	1	5
計			182	485（41）

隣接校種・副免実習（教員養成課程）・教育実習（学芸４課程）

実習期間	実習校種	学校種	学校数	実習生数
5月31日(月)～ 6月11日(金)〔２週間〕 又は 5月31日(月)～ 6月25日(金)〔４週間〕	小学校	附属小学校	2	92（2週間）
	中学校	愛知県協力学校	161	168（2週間） 119（4週間）
		名古屋市協力学校	7	45（2週間）
		附属中学校	2	48（2週間） 22（4週間）
		小計	170	402
	高等学校	愛知県協力学校	23	29（2週間） 1（4週間）
		附属高等学校	1	20（2週間） 20（4週間）
		小計	24	70
計			196	564

特殊教育実習（障害児教員養成課程・特殊教育特別専攻科・臨時教員養成課程）

実習期間	実習校種	学校種	学校数	実習生数
5月31日(月)～ 6月25日(金)〔４週間〕	養護学校	愛知県協力学校	5	8
		附属養護学校	1	10
		小計	6	18
	聾学校	愛知県協力学校	5	8
	計		11	26
9月27日(月)～ 10月８日(金)〔２週間〕	養護学校	愛知県協力学校	11	19
		名古屋市協力学校	2	2
		附属養護学校	1	10
		小計	14	31
計			25	57

総計	403	1106（41）

基礎実習（所属別）

課　　程	学 生 数	参加者数	参加率（%）
初等教育教員養成課程	322	317	98.4
中等教育教員養成課程	117	116	99.1
障害児教員教員養成課程	29	29	100.0
養護教諭養成課程	42	41	97.6
計	510	503	98.6

基礎実習（実習校別）

学　校　名	参加者数
名古屋小学校	175
岡崎小学校	170
名古屋中学校	58
岡崎中学校	56
高　等　学　校	26
養　護　学　校	＊29
幼　　稚　　園	18
計	503

＊岡崎小学校参加者（障害児教育教員養成課程）の再掲

応用実習（実習校別）

学校名	参加者数
名古屋小学校	12
岡崎小学校	1
名古屋中学校	2
岡崎中学校	0
高　等　学　校	1
養　護　学　校	6
幼　　稚　　園	6
計	28

5　介護等体験

本学の介護等体験は，教員養成課程（障害児教育は除く）の学生は，１年次に附属養護学校において２日間の体験を実施し，２年次に県内の社会福祉施設で５日間の体験を実施している。

また，学芸課程の学生は，３年次において県内の公立特殊教育諸学校で２日間，及び県内の社会福祉施設で５日間の体験を実施している。

2004年度の実施状況は，次のとおりである。

〔附属学校〕

受 入 機 関 等	学校数	人　数
附属養護学校	1	486

〔県内公立特殊教育諸学校〕

受 入 機 関 等	学校数	人　数
聾学校	2	64
養護学校	4	154
合　　計	6	218

〔県内社会福祉施設〕

受入機関等	学校数	人　数
特別養護老人ホーム	10	94
養護老人ホーム	5	52
老人デイサービスセンター	18	175
身体障害者サービスセンター	2	35
知的障害者更生施設	10	96
知的障害者授産施設	5	54
知的障害児通園施設	3	27
身体障害者療護施設	——	——
身体障害者授産施設	3	29
児童養護施設	2	25
肢体不自由児施設	3	32
児童福祉施設	1	10
老人福祉施設	1	10
生活保護授産施設	1	10
母子生活支援施設		
合　　計	64	649

6　インターンシップ

平成16年度　インターンシップ（就業体験）実施結果

学年	課程･専攻･コース	受入先	期間	備考
3	国際文化コース	名古屋法務局	平成16年８月23日～ ９月３日（実働10日間）	東海地域 推進協議会
3	〃	㈱エヌティーセブンス	平成16年７月19日～ ７月31日（実働10日間）	〃
3	〃	㈶あいち女性総合センター	平成16年９月１日～ ９月15日（実働13日間）	〃
3	〃	名古屋市中村区役所	平成16年７月27日～ ８月９日（実働11日間）	〃
3	〃	トヨタカローラ愛豊㈱	平成16年９月９日～ ９月22日（実働９日間）	〃
3	〃	和歌山県庁	平成16年８月23日～ ８月27日（実働５日間）	和歌山県 経営者協会
2	共生社会コース	東海農政局	平成16年８月23日～ ９月３日（実働10日間）	東海地域 推進協議会
2	〃	名古屋市東区役所	平成16年７月27日～ ８月９日（実働11日間）	〃
2	造形文化コース	愛知教育大学	平成16年８月23日～ ９月１日（実働８日間）	個人出願
2	情報教育課程	㈱ラックスクエア	平成16年７月26日～ ８月６日（実働10日間）	東海地域 推進協議会
3	〃	㈱ユーフィット	平成16年８月16日～ ８月27日（実働10日間）	〃
3	〃	西日本電信電話㈱	平成16年８月27日～ ９月９日（実働10日間）	〃

計12名（内，東海地域インターンシップ推進協議会10名）

7　学生生活関係

⑴　奨学金・授業料免除

①　平成16年度日本学生支援機構奨学生採択状況

学年	種　　別	申　請　者　数	推薦・採択者数
１年	第一種（無利子）	在学採用　115名（内訳は次のとおり） 第一種のみ・・・・・・・・・・・・・25名 第一種または第二種・・・・・・・・58名 第二種・・・・・・・・・・・・・・・25名 併用貸与　・・・・・・・・・・・・・7名	予約　57名 在学　76名
	第二種（有利子）		予約　53名 在学　41名
２年以上	第一種（無利子）	38名（内訳は次のとおり） 第一種のみ　・・・・・・・・・・・・・1名 第一種への移行　・・・・・・・・・・1名 第一種または第二種・・・・・・・・17名 併用貸与　・・・・・・・・・・・・・2名 第一種追加（併用貸与）・・・・・・・1名 第二種・・・・・・・・・・・・・・・15名 緊急採択（第二種）・・・・・・・・・1名	9名
	第二種（有利子）		30名

※第二種採択者数には併用貸与者を含む

②　平成16年度授業料免除実施状況

学種	学年	前期						後期					
		申請者	基準外	免除許可				申請者	基準外	免除許可			
				全免	半免	一部全	一部半			全免	半免	一部全	一部半
学部	1	44	6	33	5			48	6	30	12		
	2	65	8	41	16			68	11	45	12		
	3	59	6	37	16			55	6	33	16		
	4	68	6	49	13			65	6	48	11		
特専		2		1	1			2		2	4		
大学院	1	38	7			29	2	31				27	4
	2	32	5			26	1	33	3			30	
計	計	308	38	161	51	55	3	302	32	158	51	57	4

注１）一部全は，全額免除相当の一部免除を表し，免除額は前期210,000円，後期208,400円
注２）一部半は，半額免除相当の一部免除を表し，免除額は前期105,000円，後期104,200円

国立大学の法人化に伴い，法人としての制度設計を行い免除を許可した。

本学として，従来の免除制度を改定した点は次のとおり。

・学種毎の選考とし，附属学校を優先する制度としたこと

・積算された免除可能額に１名分の調整額を設け，免除可能額を超える免除を可能としたこと

・従来の全額・半額に加え一部免除を認め，免除該当者全員に支援を可能としたこと

これらの結果，H15年度には免除可能額の不足により，基準を満たしながら不許可となる者が生じていたが，大学院生を一部免除とすることにより，学部学生の該当者全員を許可することができた。

また，附属学校の生徒を優先して許可することで，期毎のばらつきが無くなり，当該生徒が安心して修学できることとなった。

実務的な点では，一連の事務処理を市販のプログラムソフト（ACCESS）により電算化，各

種審査資料の充実や授業料徴収部局への電子データ提供等，業務改善を図った。

なお，学生へ積極的に審査状況を伝えることにより，学生サービスを充実した。

（主な事例は次のとおり）

ア　学力基準により免除が認められなかった者への指導

本人に不許可となった原因が修学状況であることを伝え，努力するよう指導した。

イ　審査結果が前回と大きく異なる者については，その理由を伝えることにより，今後の申請に向けて制度の理解を図った。

【参考資料】

年度 / 区分	H15年度（法人化前）		H16年度（法人化後）	
	前　期	後　期	前　期	後　期
申請者	321	280	308	302
学内選考許可者	214	212	270	270
超過免除申請者	59	39		
超過免除許可者	0	0		
授業料収入に対する免除額積算%	5.3%		5.8%	
免除可能額	55,348,186	54,874,716	60,952,322	60,579,420
免除実施額	55,335,000	54,814,200	60,969,600	60,582,400

注１）学部，大学院，専攻科の合計を記載
注２）H16年度の免除可能額・実施額は附属を含めた法人全体の計

③　平成16年度入学料免除実施状況

従来，文部科学省において全国的な審査が行われていたが，国立大学の法人化に伴い，法人としての制度設計を行い免除を許可した。

選考内容　申請者10名　全免４名　半免２名　不許可４名

なお，本学として，従来の免除制度を改定した点は次のとおり。

・学種毎の選考を基本とし，附属学校，学部を優先する制度としたこと
・積算された免除可能額に１名分の調整額を設け，免除可能額を超える免除を可能としたこと
・従来の全額・半額に加え一部免除を認め，幅広い支援を可能としたこと

⑵　福利施設関係

福利施設運営にあたり締結した業務委託契約に基づく福利厚生協議会を開催し，委託先である愛知教育大学生活協同組合と意見交換を行った。主な意見は次のとおり。

・法人の財政見込みが厳しいことから，厨房機器の修理・更新について使用者である生協側も積立等による自主的な維持・管理も検討願いたい。（大学側）
・学内のペットボトル処理や井ヶ谷荘（非常勤宿泊施設）運営の業務委託等，大学の管理・運営の一部を請け負う新しい協力業務を行うこととなった。（生協側）

全体として，法人化を契機に，これまでの関係を維持し相互が協力体制を図ることを確認した。

⑶　入学者へのアパート紹介

これまで，希望者者に大学周辺の物件を資料にまとめ提供してきたが，地域の民間活力導入を検討し，大学周辺の物件を多く担当する不動産業者３社を選定，入学手続時に「不動産紹介コーナー」を設け，希望者に物件紹介を依頼した。これにより，入学者が多くの情報から物件を選ぶことが可能となり，学生サービスが向上した。

⑷　学生の課外活動

①　課外活動団体数と加入者数

系別		体育系団体	文化系団体	計
団体数（未公認含む）		51	29	80
加入者数	男	751	307	1,058
	女	797	597	1,394
計		1,548	904	2,452

②　第53回東海地区国立大学体育大会成績一覧表（第３位まで）

（平成16年度当番大学：静岡大学）

男子団体	女子団体
	第１位：ソフトテニス，剣道，アーチェリー
第２位：硬式野球，ソフトテニス，サッカー，ハンドボール，少林寺拳法	第２位：陸上競技，バスケットボール
第３位：水泳，準硬式野球	第３位：水泳，弓道

③　第49回東海地区国立大学文化祭

（平成16年度当番大学：豊橋技術科学大学）

参加団体

美術部門：書友会

音楽部門：男声合唱団，混声合唱団，フォークソング部，軽音楽部，ア･カペラサークルプルミエ

演劇部門：なし

④　ボランティア活動

名古屋市トワイライトスクール参加者14名（女：14名）

名古屋市ふれあいフレンド参加者20名（女：15名）

豊川市学びとふれあい子ども教室21名（女：14名）

⑤　第15回リーダーシップセミナー

サークル活動の一層の活性化を図るため，各サークルの抱えている諸問題を話し合い，リーダーとしての資質向上を図る。また，サークル間の親睦を深める。

会場：刈谷勤労福祉会館

参加団体：17団体30名

講演会

講師：保健体育講座助教授　筒井清次郎

演題：「部活動に活かすスポーツ心理学」

討議：各クラブ・サークルの抱える問題点ほか

⑸　学生相談室

学生相談室は開設６年目を迎え，就職厚生課内に設置されていて，利用者や相談員から場所や広さ等が適さないといわれていた相談室を，大学会館１階に移転して，より静かな環境の中での相談が可能になった。また，移転に伴い設備品も徐々に整備され，『箱庭療法』用具の設置や心理学関係の書籍等の購入により，いっそう相談室らしくなってきた。

相談件数は下記の表のとおりである。相談内容では，家庭家族，進路に関する相談が多く見ら

れた。学生相談は全ての学生が対象であり，大学の教育活動の一環として，今後は専任相談員が常駐していていつでも気楽に相談できる体制づくりが望まれる。

期　　間	相談員数	相談件数	面接回数（含電話面接）
1年目　'98.10〜'00.3	5	32	244
2年目　'00.4〜'01.3	4	14	137
3年目　'01.4〜'02.3	5	23	79
4年目　'02.4〜'03.3	5	39	150
5年目　'03.4〜'04.3	5	34	143
6年目　'04.4〜'05.3	5	27	109

⑹ 指導教員制

指導教員制については,『学生生活』に主旨や目的，指導教員が行う内容を掲載し，ガイダンス時にも説明を行うなど，新入生にも理解されるよう努めた。また，昨年に引き続き『学生生活』を指導教員が活用するための簡単なマニュアルの作成も行い，全教員に『学生生活』と共に配付した。

今後は，さらにマニュアルの整備を行っていく予定である。

⑺ 学内交通対策

① 巡視員による構内交通巡視の実施

前年度に引き続きシルバー人材センターからの派遣巡視員による学内駐車場等の巡視を実施した。派遣巡視員に毎日の巡視結果を記録願い，違反者に対しての警告シールの貼付，更にはチェーン取り付けの罰則などの実施をすすめた。前年度よりは学生の駐車マナーの改善と駐車違反者の減少があった。次年度も引き続き実施する予定である。

② 交通安全講習会の開催

昨年に引き続き学生支援担当学長補佐を講師として，本学での運転，駐車マナー等学内の交通ルールについて，講習会を1回実施した。

③ 今後の方針

学内の駐車・駐輪に関しては，様々な問題が山積しており，学生支援委員会としては，今後も学生への交通安全や駐車・駐輪マナーの啓蒙活動を推し進めたい。

8　学生の健康管理，学生相談

⑴　はじめに

1958年（昭和33年）に学校保健法が制定された後，1964年（昭和39年）に国立大学設置法が改正され，それ以降，全国の国立大学に保健管理センターが設置された。1966年（昭和41年）の文部省大学学術局の通達「保健管理センターの設置について」の中で規定されている大学保健管理センターの役割は，その当時，流行していた三大「学校病」つまり結核，流行性結膜炎（トラホーム），寄生虫の感染性疾患に対する健康管理及び相談業務を行うことが中心であった。その当時，大学保健管理センターに勤務する医師は，全国的に放射線科や呼吸器科の医師が殆どであった。その後，既に欧米で注目されていたWaltersが提唱した若者に見られる無気力症（student apathy）が日本でも注目されるようになった。日本では笠原が退却神経症という概念を提唱し，大学生のメンタルヘルスが注目されるようになり，大学生の保健管理の中でメンタルヘルスの占める割合が急速に増加した。この動向に沿って精神科医が全国の大学保健管理センターで勤務するようになったという経緯がある。

昨今では，身体面では，痩せ・肥満，運動不足，喫煙，不規則な食生活など，不適切な生活習慣をもつ学生の増加が特徴的であり，精神面では，摂食障害，リストカット，自殺などの問題行動を有する学生の増加が特徴的である。最近では平成15年５月１日に施行された「健康増進法，健康日本21」を受けて，学内的に禁煙活動，生活習慣病予防，メンタルヘルス対策を推進する必要が生じている。つまり健康に対する意識改革が大学保健管理の活動において重要になっている。

⑵　学生に対する健康管理

本学における学生に対する健康管理体制は，これまで厚生課保健担当と保健管理センターが協力して遂行してきた。平成16年４月より国立大学は独立行政法人化されて，本学は国立大学法人となった。それに伴い本学の厚生課保健担当は学生支援部就職厚生課保健業務係へと組織の改変が行われたという経緯がある。現在，本学には約4000名の学生（学部生・大学院生・一年課程・科目等履修生などの総称）が在籍しているが，学生に対する健康管理の基本的なあり方は，独立行政法人化の前後で変わっていない。次に現在保健管理センターで行われている学生の健康管理の現状について述べる。（※保健管理センターの他の活動については，保健管理センターの章を参照）

学生の健康管理の柱は，①健康教育，②健康診断，③健康相談，④一般診療からなる。

①　健康教育

ⅰ）健康講座：年２回（６月，１月）にテーマを選んで，学生の健康講座を行っている。毎年，精神保健や生活習慣に関するテーマが選ばれる。

ⅱ）教育実習の事前指導：教育実習を行う学生に対して，教育実習中の健康管理に関する指導を行っている。

ⅲ）救急蘇生法講座：毎年７月にクラブリーダーを中心に，刈谷消防署の救命救急士を招いて，心肺蘇生法の講習を開催している。これは夏期休暇に増える事故を防止する対策として行っている。

ⅳ）クラブリーダー会：毎年３月にクラブリーダーを中心に，部活動を行うに当たっての健康管理に関する指導を行っている。

②　健康診断

ⅰ）学生定期健康診断：全学生を対象に毎年４月上旬に約１週間の予定で行われている。健診の際に「生活習慣に関する健康度テスト」と「内科健診スクリーニングアンケート」を実施し，内科診察を含めて，心身の健康の評価を行っている。さらに新入生（大学・大学院１年生）に対しては，心身の健康に関するアンケートを行い，心身の健康調査を行っている。健

診結果に基づき学生の就職や大学院進学に必要な健康診断証明書を発行している。

ii）放射線従事者特定検診（RI特定検）：放射性物質を用いた研究に従事している学生を対象に，毎年５月と11月に検診を行っている。

iii）留学生健康診断：留学生を対象に毎年11月に採血を中心として健康診断を行っている。これは留学生の疾病のスクリーニングを目的にしている。

iv）アルコールパッチテスト：これは大学生協職員と連携し，学生のアルコール被害を予防する目的で毎年４月に行っている。

③　健康相談

i）健診の事後指導：４月の学生定期健康診断の結果を元に，守秘義務遵守の上で，全学年の中で必要と思われた学生に対して，４月中に身体的問題に対する事後指導を行い，新入生の中で必要と思われた学生に対して，６月中に精神的問題に対する事後指導を行っている。これらは医師が担当している。

ii）痩せ・肥満指導：４月の学生定期健康診断の結果を元に，全学年の中でBMI（body mass index）が29.6以上および16.5以下の学生を対象に，毎年５月に健康相談を行っている。これらは看護師・保健師が担当している。

iii）月経障害指導：４月の学生定期健康診断の結果を元に，全学年の中で，希望者および必要と思われた学生に対して，毎年９月に健康相談を行っている。これらは看護師・保健師が担当している。

iv）生活習慣指導：４月の学生定期健康診断の生活習慣に関するアンケートを元に，全学年の中で，必要と思われた学生に対して，毎年11月に健康相談を行っている。これらは看護師・保健師が担当している。

v）一般健康相談：一年を通じて学生から希望があった際に随時健康相談を行っている。医療機関の紹介，疾病についての一般的な相談，メンタルヘルスに関する相談など様々な相談に応じている。これは医師および看護師・保健師が担当している。保健管理センターにおけるメンタルヘルスに関する健康相談は，学生支援課における学生相談とは異なる。（※学生支援課における学生相談については，学生支援課の報告を参照）。

④　一般診療

本学の保健管理センターは，診療所として保健所で登録されており，一年を通じて，以下の診療行為を行っている。i）内科系：発熱，下痢，便秘，頭痛，感冒などの症状に対する対症処療法を行っている。ii）外科系：擦傷，切傷，打撲，などの小外傷に対する応急処置を行っている。これらはプライマリケアのみであり，医療機関での治療が必要と判断されば，速やかに医療機関を紹介している。iii）精神科系：インテーク面接の後，必要に応じて診断面接を経て，ストレスコントロールを主とした心理教育，精神療法，医療機関への紹介などに振り分けて，病態水準に応じた対応をしている。

⑶　2004年の活動の概要

2004年度に行われた学生の健康管理および学生相談は，基本的に例年通りの企画運営で実施された。但し，独立行政法人化をめぐるここ数年の動向として，大学全体で経費の削減が進んでおり，保健管理センターにおける学生の健康管理および学生相談の活動もこれと無関係ではない。このような動向に適合すべく，保健管理センターでは積極的に業務の効率化を進めている。これが2004年度における学生の健康管理と学生相談の特徴である。以下に特記事項を述べる。

学生の健康教育活動として，学生および教職員を対象にした年に計２回の健康講座を開いた。第１回は藤田定教授が「自殺予防について」（平成16年６月16日）というタイトルで，第２回は岡田暁宜助教授が「生活習慣と胃潰瘍－ストレスから感染まで－」（平成17年２月２日）という

タイトルで講演を行った。健康相談活動および一般診療活動として，保健管理センターで購入する薬剤費をさらに抑制するために，医療施設との連携を強化するという方向性で，学生への対応を進めた。保健管理センターにおける学生相談（健康相談）の保健統計の一部を示す。2004年度の健康相談件数は身体的健康相談は632件，精神的健康相談は，517件であった（前年度は，それぞれ581件，503件）。医療機関への紹介件数は，全体で，311件であった（前年度は，260件）。さらに詳細な保健統計は，IRIS HEALTH（愛知教育大学保健管理センター紀要）を参照していただきたい。

⑷　2005年の課題と展望

①　健康管理体制について：2004年度末で精神科医である藤田定教授（本学６年間勤務）の辞職と岡田ミキ看護師（本学10年間）の定年退職に伴い，2005年度より独立行政法人産業医学総合研究所より労働衛生コンサルタントの資格を有する久永直見医師（専門は産業医学，労働衛生）と本学非常勤の荒武幸代保健師・看護師が常勤となった。新任の久永直見教授には，大学教職員の安全衛生管理体制のみならず，学生の保健管理体制づくりにも大きな期待が寄せられている。本学は長い間，精神科医２名という全国の大学保健管理センターでも珍しい保健管理体制で，大学保健管理業務に精力的に取り組んできた。これは本学がメンタルヘルスを特に重視していることの表れであった。だが2005年度からは精神科医１名減となったことで，学生に対するメンタルヘルス活動の停滞が懸念される。それを補うために，メンタルヘルス活動の効率化と学外機関との連携，そして何より地道な努力が求められる。殆どの全国の中規模大学の保健管理センターでは，内科医１名，精神科医１名という体制で保健管理業務が行われている。2005年度より本学では，産業保健の専門医１名，精神科医１名という本学の新体制は，全国に先駆けた新体制であるので，全国的にも注目度が高い。

　また本学の保健管理センターでは，現在，１名の常勤看護師と２名の非常勤看護師（30時間と16時間）という体制で，保健活動が行われている。５年前には２名の常勤看護師が在籍していたことから時代からすれば，保健管理センターは人員削減の渦中にある。2004年度からの独立行政法人化によって教職員の安全衛生管理に注がれる看護師活動の需要は増しているので，専門職の負担増は保健管理業務の充実を図る上で，重大な問題である。2004年度に新聞等を介して非常勤看護師（技術補佐員）を公募したところ，応募者は極めて少なかった。これは以前には見られなかった現象である。本学の看護師・保健師は，学生だけでなく教職員の健康管理に不可欠の職種であり，大学として有用な人材を確保することが求められている。本学看護職への応募者が激減したことについて徹底解明し，必要な方策を打ち立てる必要がある。また保健管理業務の一層の効率化が求められている。例えば，学生の健康診断書の自動発行は多くの大学で人員削減と並行して行われているが，本学でも検討が必要である。

②　特定化学物質・有機溶剤について：独立行政法人化に伴い，特定化学物質・有機溶剤の使用する職員に対して特殊健康診断を行う義務が生じている。これらの物質を実験研究において使用する学生に対しては，労働安全衛生法では規定されていない。だが事前に学生に安全教育を行い，必要であれば，適切な検診を行う必要がある。

③　学校医のあり方について：現在，本学に契約した学校医は計４名いるが，その活動は４月の学生定期健康診断での健診活動が主である。本学全ての活動の合理化と効率化を考えて，健診の外注化も視野に入れて，健診体制を見直す必要がある。

④　新入生に対するアンケートについて：これまで大学受験の願書を提出する際に，受験生には健康診断書を提出する義務があったが，2005年度からそれが撤廃されたので，学生の健康情報を入学前に得ることができなくなった。これを補うべく2005度より，新入生に対する健康アンケートを強化することで，新入生の健康管理活動を充実させる必要がある。

⑤　安全衛生との連携について：独立行政法人化に伴って，学内の様々な組織改革が進められている。学生に対する健康管理および学生相談についても，その関連領域について，効率化のために協力と連携を進めてゆく必要がある。

⑥　学生相談との連携について：学生相談と保健管理センターは違った視点から学生への支援を行って来たが，今後，総合センター「健康安全・環境保全センター（仮称）」構想もあり，その必要性に応じて，協力・連携・統合を図っていく必要があると考えらる。

⑦　健診データの活用をめぐって：これまで学生定期健康診断のデータの統計的利用は必ずしも十分とは言えない。そのためには統計処理の効率化が必要である。それは他大学では既に定着しつつある健康診断書の自動発行にもつながるものである。

⑧　ホームページの利用をめぐって：これまで保健管理センターのホームページを通じて，保健管理活動を紹介し，情報提供に努めてきたが，その情報更新は迅速とはいえなかった。今後，迅速な情報更新が求められる。

9　卒業生の進路，就職問題への取り組み

平成16年度に，就職支援担当教員連絡会実施の学生就職活動の支援策は次表のとおりである。

⑴　教員就職支援策の一つである教員就職相談員事業において，小論文等の添削・種別の面接指導等も含め，幅広い指導・相談を第二次試験の直前まで30回にわたり展開した。制度の利用が効果的であることがうかがえ，学生からもこの就職相談員事業について相談日拡大等の要望が出ているところである。

ただし，次年度は，予算都合により相談日の縮小等が懸念されているところである。

なお，県内公立学校教員採用試験の合格率は，前年より3.7%アップし，56.0%（教員養成課程に限れば，2.5%アップの59.4%）となっている。

⑵　企業就職支援策の一つである企業研究セミナー事業は４年目となるが，授業日程の都合で日程短縮を余儀なくされたが，企業研究方法等の事前ガイダンスを行った上で，２月22日・23日の２日間にわたり開催した。参加企業82社，参加学生数延べ283名であり，企業の人事採用担当者・参加学生のアンケート調査結果では高い支持を得ているところである。

なお，次年度は授業計画がさらにタイトで，当セミナー編成に苦慮している。

⑶　新たに，教員就職ガイダンスの構成を一部アレンジし，高校教員就職も視点に入れた講演を実施した。

さらに，試みに受験対策直結タイプの愛知県教採試験直前対策ゼミナールを実施し，学生の好評を得ている。

企業就職支援では，より具体的な就職試験対策特訓講座の新設のほか，理事・監事，就職支援教員等による求人企業開拓のための企業訪問を進めている。

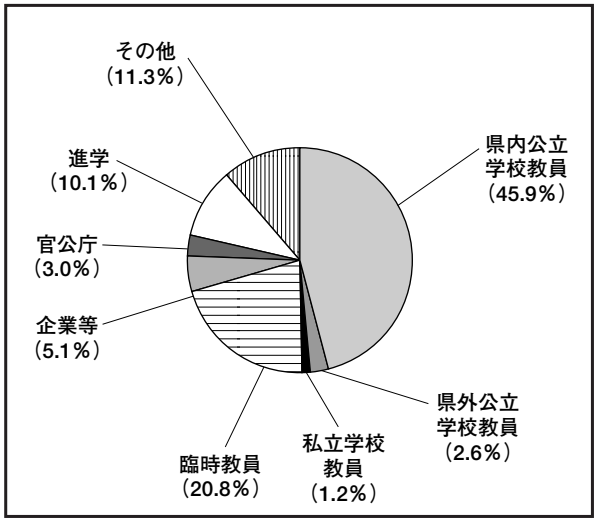
⑷　定例の２年生就職ガイダンスを１年生にも参加拡大し，就職情報社担当者の具体的講演を加え，低学年からのキャリア形成・職業観の醸成等に資することとした。

月	教　員　就　職	公 務 員 就 職	企　業　就　職
4	Ⅳ教員採用試験セミナー⑦ Ⅳ教員採用試験模擬テスト	Ⅳ公務員試験模擬テスト	
5	Ⅳ教員就職相談⑤ Ⅳ教員採用試験セミナー④ Ⅳ教員就職ガイダンス（試験説明会） Ⅳ教員就職ガイダンス（模擬面接） Ⅳ教員採用試験模擬テスト②	Ⅳ公務員試験模擬テスト	
6	Ⅳ教員就職相談③ Ⅳ教員採用試験模擬テスト②	Ⅳ公務員試験模擬テスト Ⅲ公務員就職ガイダンス（試験概要）	
7	Ⅳ教員就職相談⑨ Ⅳ愛知教採試験直前対策ゼミナール Ⅳ教員採用試験直前アドバイスセミナー Ⅲ教員就職ガイダンス(概要等)	Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ企業就職ガイダンス（就職活動の概要）
8	Ⅳ教員就職相談⑬		
9		Ⅲ公務員就職ガイダンス（国・市町村採用人事担当者概要説明）	Ⅲ企業就職ガイダンス（就職市場の現状，就職活動体験報告）
10	Ⅰ・Ⅱ２年生就職ガイダンス（低学年からの職業観の醸成，職業意識の確立）		
		Ⅲ公務員就職ガイダンス（体験報告）	
11	Ⅲ教員採用試験学習アドバイスセミナー		Ⅲ企業就職ガイダンス（実際等） Ⅲ企業就職ガイダンス（エントリー等）
12	Ⅲ教員採用試験模擬テスト Ⅲ教員就職ガイダンス（試験対策等）	Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ企業就職ガイダンス（OB説明・模擬面接等）
1		Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ企業就職ガイダンス（女性のための就職活動等）
2		Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ企業就職ガイダンス（企業研究） Ⅲ企業研究セミナー【２日間】
3	Ⅲ教員採用試験模擬テスト Ⅲ教員採用試験学内集中講座⑩	Ⅲ公務員試験模擬テスト	Ⅲ就職試験対策特訓講座（＊）

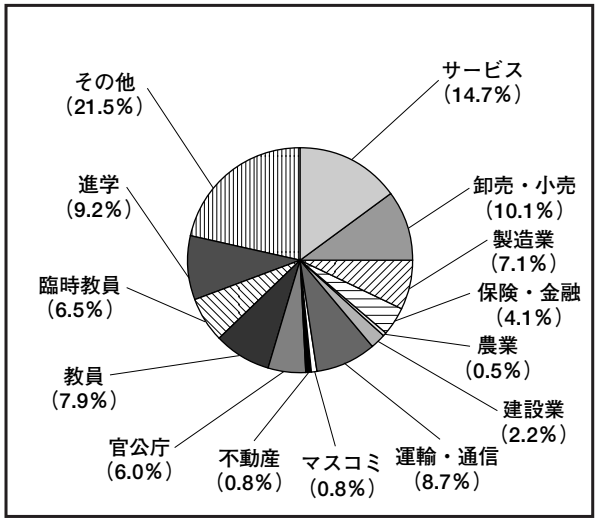
⑴事項名称の前のローマ数字は対象学年，事項名称の後の○付き数字は開催回数であり，無印は１回開催。
⑵大学院学生の進路及び就職活動への取り組みは，学部学生と一体的に実施している。

平成16年度　卒業修了生進路状況

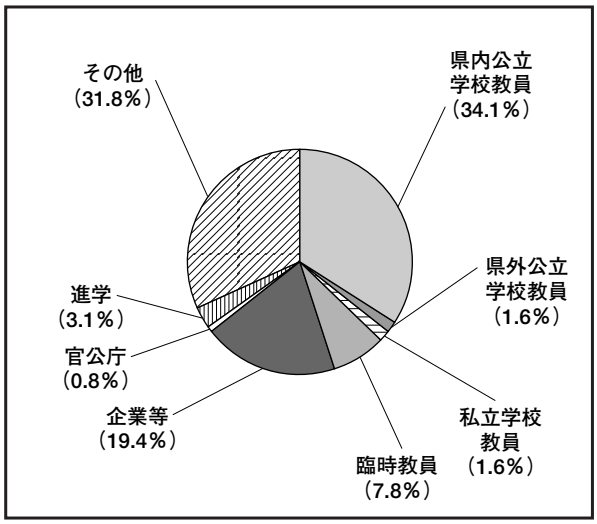
教員養成４課程　495名



学芸４課程　368名



大学院　129名



課程等	卒業者数	就職																その他		
		教員			企業等											官公庁	計	進学者	その他	計
		教員	臨時教員	小計	建設業	製造業	卸売・小売	保険・金融	不動産業	運輸・通信	電気・ガス・水道	マスコミ	農業	サービス業	小計					
教員養成４課程	495	246	103	349	0	9	4	2	0	0	0	0	0	10	25	15	389	50	56	106
学芸４課程	368	29	24	53	8	26	37	15	3	32	0	3	2	54	180	22	255	34	79	113
学部計	863	275	127	402	8	35	41	17	3	32	0	3	2	64	205	37	644	84	135	219
大学院	129	48	10	58											25	1	84	4	41	45

注：本表は、平成16年９月卒業・修了者を含む。（旧教員養成課程は教員養成４課程に、総合科学課程は学芸４課程に含みます。）

第２節　大学院

１　入学者選抜

平成17年度大学院教育学研究科入学者選抜試験は，第一次募集を平成16年10月２日・３日に，第二次募集を平成17年２月５日・６日にそれぞれ実施した。出願状況は，一次募集においては，186名，二次募集においては，57名の出願があった。

また，現職教員の出願者は46名，受験者は43名あり，27名が合格し，うち24名が入学している。

平成17年度　大学院教育学研究科（修士課程）入学試験実施状況一覧

区分／専攻	定員	志願者			受験者			合格者			入学者		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
学校教育専攻	27	(7) 25	(7) 20	(14) 45	(7) 25	(6) 19	(13) 44	(2) 20	(5) 19	(7) 39	(2) 16	(5) 15	(7) 31
国語教育専攻	7	7	(1) 3	(1) 10	6	(1) 2	(1) 8	6	(1) 1	(1) 7	6	(1) 1	(1) 7
英語教育専攻	9	(2) 1	6	(2) 7	(2)	5	(2) 5		5	5		5	5
社会科教育専攻	14	(2) 8	(1) 7	(3) 15	(2) 8	(1) 5	(3) 13	(1) 6	(1) 4	(2) 10	(1) 6	(1) 4	(2) 10
障害児教育専攻	12	5	7	12	5	6	11	2	3	5	2	3	5
数学教育専攻	11	(1) 12	(1)	(2) 12	12	(1)	(1) 12	10	(1)	(1) 10	10	(1)	(1) 10
理科教育専攻	17	(5) 16	8	(5) 24	(5) 15	6	(5) 21	(3) 11	6	(3) 17	(3) 10	5	(3) 15
芸術教育専攻	19	(1) 4	(2) 21	(3) 25	(1) 4	(2) 19	(3) 23	3	(2) 19	(2) 22	3	(2) 17	(2) 20
保健体育専攻	8	(1) 9	1	(1) 10	(1) 8	1	(1) 9	6	1	7	6	1	7
家政教育専攻	9		(2) 6	(2) 6		(2) 6	(2) 6		(2) 6	(2) 6		(2) 6	(2) 6
技術教育専攻	5	(2) 2		(2) 2	(2) 2		(2) 2	(2) 2		(2) 2	(2) 2		(2) 2
養護教育専攻	3		7	7		7	7		7	7		6	6
学校教育臨床専攻	9	14	54	68	13	52	65	4	11	15	4	9	13
合計	150	(21) 103	(14) 140	(35) 243	(20) 98	(13) 128	(33) 226	(8) 70	(12) 82	(20) 152	(8) 65	(12) 72	(20) 137

（　）内数字は定員外の外国人留学生特別選抜で外数

2　在学者数

大学院教育学研究科の在学者数は平成16年５月１日現在，下記のとおりである。

専攻	学校教育					国語教育	英語教育	社会科教育	障害児教育	数学教育	理科教育	芸術教育		保健体育	家政教育	技術教育	養護教育	学校教育臨床	合計
学年	教育	心理	幼児	生活	総合							音楽	美術						
1年	7	9	2	5	10	8	6	20	4	9	16	4	13	10	6	5	6	16	156
2年	12	12	3	5	14	8	2	9	11	10	21	13	17	4	6	4	7	24	182
計	19	21	5	10	24	16	8	29	15	19	37	17	30	14	12	9	13	40	338

3　修了者数及びその進路

平成16年度の修了者数は次項の学位論文名等一覧に数えるように９月修了者２人，３月修了者127人，合計129人である。

次に，大学院学生の進路及び就職問題への取り組み等については，学部学生と一体的に取り扱っているので，進路等については前節の「９　卒業生の進路，就職問題への取り組み」を参照されたい。

専攻名		２年在学者数	９月修了者数	３月修了者数	合計
学校教育専攻	教育学分野	12		8	8
	教育心理学分野	12		8	8
	幼児教育分野	3		2	2
	生活科教育分野	5		3	3
	総合教育開発分野	14		11	11
国語教育専攻		8		6	6
英語教育専攻		2		2	2
社会科教育専攻		9		5	5
障害児教育専攻		11		8	8
数学教育専攻		10		8	8
理科教育専攻		21		17	17
芸術教育専攻	音楽分野	13		10	10
	美術分野	17		14	14
保健体育専攻		4		2	2
家政教育専攻		6		4	4
技術教育専攻		4		2	2
養護教育専攻		7		6	6
学校教育臨床専攻		24	2	11	13
合計		182	2	127	129

4　学位論文

専攻	領域	氏名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
学校教育	教育基礎学	金　明哲	『心のノート』から見た日本の道徳教育 －「心の教育」が目指すものとその問題点－	平成17年３月	修士（教育学）	森重　義彰 副　山口　匡
	教育実践学	伊藤　幸子	准看護師の今後の職業生活における生き方の研究 －准看護師の通信教育課程入学に関する看護師・准看護師の意識を中心にして－	〃	〃	竹内登規夫
	教育実践学	許　周鶴	不登校と学習意欲に関する研究	〃	〃	寺西　和子 副　折出　健二
	教育実践学	中曽　俊幸	大学生の就職活動に関する研究 ～満足のいく内定獲得のために～	〃	〃	竹内登規夫
	教育実践学	長谷川　真	体験主義を乗り越える「総合的な学習の時間」に関する研究 ～批判的思考力を育む実践を通じて～	〃	〃	子安　潤
	教育実践学	福島　賢二	教育における平等論 －教師の専門職性に着目して－	〃	〃	斎藤　秀平
	教育実践学	三浦　文恵	役割への同化と異化を通した道徳の授業 －読み物資料を用いた「道徳の授業」の分析を中心に－	〃	〃	子安　潤 副　藤井　啓之
	教育心理学	伊藤公一郎	動機と行動の関連性についての素朴理論 The naive theory about relationships between motives and behaviors	〃	〃	池上　知子
	教育心理学	加藤　弘美	２～３歳児における自己とモノのビデオ映像理解 Young children's understanding of self and object video image	〃	〃	中野　靖彦
	教育心理学	清田　将之	理想と現実とのズレがもたらす教師への影響について －理想の教師像に着目し，ズレの正の意味を追求する－	〃	〃	鈴木　眞雄
	教育心理学	黒柳　諭	不登校生徒の学校外活動による環境刺激と行動の変容に関する考察	〃	〃	鈴木　眞雄
	教育心理学	堀田　千絵	誤記憶の生成メカニズムに関する研究 －指示忘却パラダイムを用いて－ A study on mechanisms underlying false memories: Using the directed forgetting paradigm	〃	〃	池上　知子
	教育心理学	右高　令子	心理的ストレスが学校ぎらい感情に及ぼす影響 －学校ストレスと家庭ストレスに着目して－	〃	〃	原口　芳明 副　菊島　勝也
	教育心理学	山田　美里	スクールカウンセラーと心の教室相談員のストレスに関する研究	〃	〃	原口　芳明 副　菊島　勝也
	幼児教育	五十嵐　望	男性保育者のいる環境 ～男性保育者の保育事例の報告とそれに基づく今後のあり方への一提言～ The Environment For Infants That Being With Male's Kindergarten Teacher ～Reports Of Some Infant Education By Male's Kindergarten Teacher And The Proposal In The Future～	〃	〃	村岡　眞澄 副　山口　雅史
	幼児教育	大木とも子	幼児期における内的作業モデルと思いやり行動との関係 The Relationship between Internal Working Models and helping behavior in preschool children.	〃	〃	梅澤由紀子 副　山口　雅史
	生活科教育	太町　智	生活科・総合的な学習の時間における子どもの「参加」についての研究	〃	〃	布谷　光俊 副　中野　真志
	生活科教育	中川　雅代	生活科学習において感性の育成を図る教材開発研究	〃	〃	布谷　光俊 副　野田　敦敬

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
学校教育	国際理解教育	太田　志帆	外国人児童を取りまく教育観に関する研究 －小学校教師とブラジル人児童の親の調査より－	平成17年３月	修士(教育学)	岡田　安代
	国際理解教育	河口　幸子	外国人児童の教科学習支援に関する研究 ～小学校算数授業に見られる発問形式の分析を中心に～	〃	〃	岡田　安代
	国際理解教育	陳　思穎	台湾における社会人のための初級日本語教科書開発に関する研究 －日本文化に関する語彙の視点から－	〃	〃	岡田　安代
	国際理解教育	董　青	中国人日本語話者の断り行動に関する考察 －接触場面と中国社会における行動の変化について－	〃	〃	岡田　安代
	国際理解教育	PHYO MA MA	日本語・ミャンマー語指示詞の対照研究	〃	〃	田村　建一 副　北野　浩章
	情報教育	高　欽	授業者のためのマルチメディア教材検索システム	〃	〃	中津　楢男
	情報教育	徐　鶴俊	シミュレーションを活用した物理教材の開発とその教育的評価 －中国人中学生を対象とした授業実践研究－	〃	〃	平田　賢一 副　野崎　浩成
	情報教育	CHU YUANDE	中国西部少数民族地区の情報教育のあり方の研究 －中日比較研究を通して－	〃	〃	平田　賢一 副　伊藤　俊一
	情報教育	李　丹	Web技術を利用した教育用コンテンツに関する研究	〃	〃	中津　楢男 副　中西　宏文
	教育基礎学	榊原　紀子	小学校における不登校児に関する社会学的考察 －「元気な不登校児」に着目して－	〃	〃	森重　義彰 副　阿形　健司
	教育心理学	友松　光代	一輪車の教育的効果に関する考察	〃	〃	鈴木　眞雄
	生活科教育	堀田　和也	生活科教育における人とのかかわりを重視した単元開発に関する実証的研究	〃	〃	布谷　光俊 副　野田　敦敬
	国際理解教育	安　美蘭	日本語・中国語・朝鮮語における感謝表現の対照研究	〃	〃	田村　建一
	国際理解教育	金　花	日本語・中国語・朝鮮語における呼称の対象研究 －非親族への呼格的用法をめぐって－	〃	〃	田村　建一 副　土岐留美江
国語教育	国語科教育学	伊藤　慎悟	方言教材の歴史的変遷についての研究	〃	〃	中田　敏夫
	国語科教育学	小崎　雅子	《自分》と向き合うことのできる文学教育の構築を目指して ～安部公房作品を対象に～	〃	〃	佐藤　洋一
	国語科教育学	常原　拓	小説教材における授業研究論 －村上春樹の短編を例に－	〃	〃	佐藤　洋一
	国語科教育学	野々山友理	説明的文章の学習で養うべき「洞察力」とは何か －高等学校国語科教材を中心に－	〃	〃	佐藤　洋一
	国語科教育学	林　良音	教材としての『更級日記』について	〃	〃	有働　裕
	国語科内容学	中島　大策	明治期日本語における仮名表記方法の研究	〃	〃	高瀬　正一 副　矢島　正浩

専攻	領域	氏名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
英語教育	英語科教育学	黒宮　彩子	An Attempt to Develop Communicative Competence :A Task-Based Approach to Grammar Instruction	平成17年３月	修士(教育学)	杉浦　正好
	英語科内容学	陳　秀蘭	A Constructional Approach To Resultatives	〃	〃	小泉　直
社会科教育	社会科教育学	飯味加菜子	紛争解決能力育成のための実践的社会科教育 －戦争と平和を教材として－	〃	〃	舩尾日出志 副　土屋　武志
	社会科教育学	金　成龍	中国の中学校における法関連教育カリキュラムの研究 －日本の社会科教育を視野に入れつつ－	〃	〃	舩尾日出志 副　魚住　忠久
	社会科教育学	中山　陽介	歴史学習にとっての見地の意義 －Ｊ・フーンの『歴史教授学』に示唆を得て－	〃	〃	舩尾日出志
	社会科教育学	村木　俊介	「先見」を育てる社会科教育の一考察	〃	〃	舩尾日出志 副　魚住　忠久
	社会科教育学	楊　姫延	歴史学習における日中戦争（中日戦争）認識 －中国と日本の歴史教育の比較から－	〃	〃	舩尾日出志 副　土屋　武志
障害児教育	障害児教育学	今尾貴美子	聴覚障害児の作動記憶に関する一考察	〃	〃	都築　繁幸
	障害児教育学	小　眞奈美	知的障害養護学校における個別の指導計画に関する一考察	〃	〃	都築　繁幸
	障害児教育学	田中　貞子	高等教育機関における軽度発達障害学生への学習支援方法に関する一考察	〃	〃	都築　繁幸
	障害児教育学	永野　智子	軽度発達障害児の学校生活スキルとストレス反応の関連についての一考察	〃	〃	都築　繁幸
	障害児教育学	樋口　玲子	早期療育としての自閉症児への音楽療法 －対人関係性の発達論的視点から－	〃	〃	神野　秀雄 副　吉岡　恒生
	障害児教育学	森　智美	聴覚障害児の概念の分類発達に関する研究	〃	〃	都築　繁幸
	障害児教育学	河野　功一	広汎性発達障害児の発達と幼稚園におけるコンサルテーションに関する一考察	〃	〃	池田　勝昭 副　佐野　真紀
	障害児教育学	片桐ユリ子	知的障害養護学校におけるセンター的機能の一考察	〃	〃	都築　繁幸
数学教育	数学科教育学	大川　修	算数の授業における復唱法の機能の考察	〃	〃	志水　廣
	数学科教育学	大橋　宗秀	数学的な問題解決能力の育成 －基になる考えを核とした指導を通して－	〃	〃	佐々木徹郎 副　山田　篤史
	数学科教育学	神谷　佳和	算数授業における「○つけ法」の意義と効果的活用に関する一考察 ～机間指導の「声かけ」に着目して～	〃	〃	志水　廣
	数学科教育学	程　新智	数学教育における「数学的帰納法の考え方」についての研究	〃	〃	佐々木徹郎
	数学科内容学	大倉　正	完全グラフにおける最大・最小カット問題の確率論的研究	〃	〃	石戸谷公直 副　鈴木　将史

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
数学教育	数学科内容学	谷　泰旭	平面２次多項式ベクトル場がcenterを持つための必要十分条件について	平成17年３月	修士（教育学）	石戸谷公直 副　小谷　健司
	数学科内容学	濵田　和浩	Collatzの手続きに関連したある関数のSchwarz導関数	〃	〃	浦田　敏夫
	数学科教育学	都築功二郎	数学教育においてポートフォリオを取り入れた指導と評価に関する考察	〃	〃	佐々木徹郎 副　山田　篤史
理科教育	理科教育学	高田　光伸	コンセプトマップによる自己モニタリングと概念形成	〃	〃	遠西　昭壽
	理科教育学	竹中　　淳	科学観や理科授業観が授業に与える影響について	〃	〃	吉田　　淳
	理科教育学	陳　紫韜	理科教師と教師をめざす学生が保持する科学観と教授法の関係 －中日両国における調査から－	〃	〃	遠西　昭壽
	理科教育学	永田　祥子	学校と博物館との連携に関する研究 －イギリスを中心として－	〃	〃	川上　昭吾
	理科内容学	石橋　太郎	歪んだ構造を持つクロムポルフィリン錯体の合成と反応	〃	〃	稲毛　正彦
	理科内容学	近藤　幸子	Ｎ－アセチルガラクトサミン４硫酸６－０－硫酸転移酵素遺伝子ノックアウトマウスの作製	〃	〃	羽渕　脩躬
	理科内容学	白銀　洋子	局所銀河群の起源と高速度雲に関する研究	〃	〃	澤　　武文
	理科内容学	鈴木　美佳	スルフィドおよびスルホキシドを含むＲｕ（Ⅱ）錯体の合成と光反応性の検討	〃	〃	長沼　　健 副　中島　清彦
	理科内容学	全　　春苗	環境動態における腐植物質の役割と化学性	〃	〃	長沼　　健
	理科内容学	津田　大輔	超潤滑系の物理　Ｃ60インターカレートグラファイトフィルムの超潤滑	〃	〃	三浦　浩治
	理科内容学	冨安美紀子	Cymbidium属の非還元配偶子形成に関する研究	〃	〃	市橋　正一
	理科内容学	中井　健人	三河地方新城トーナル岩の変形組織	〃	〃	三宅　　明
	理科内容学	中道　圭一	三河山地西縁花崗岩丘陵地における二次林植生	〃	〃	森山　昭雄
	理科内容学	花井　隆晃	愛知県およびその周辺地域におけるミゾソバ（タデ科）の分類学的再検討	〃	〃	市橋　正一 副　渡邊　幹男
	理科内容学	前島　　登	遅効性肥料及び植え込み材料がファレノプシスの育成と鉢からの肥料要素の流出に及ぼす影響に関する研究	〃	〃	市橋　正一
	理科教育学	小林　夕也	理科授業におけるデジタルコンテンツの開発と実践に関する研究	〃	〃	吉田　　淳
	理科内容学	安藤　享平	特異銀河Arp215(NGC2782)の構造に関する研究	〃	〃	澤　　武文

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
芸術教育	音楽科内容学	安藤ともみ	（演奏）スクリャービン作曲　幼想曲 （論文）ピアノ教育とピアニストにおける＜正しい姿勢＞について	平成17年３月	修士（教育学）	武本　京子 副　村尾　忠廣
	音楽科内容学	飯田くるみ	念仏系歌謡におけるエイサーについて	〃	〃	滝澤　達子 副　村尾　忠廣
	音楽科内容学	立松とし枝	（演奏）ラヴェル作曲「夜のガスパール」 （論文）ラヴェル作曲「夜のガスパール」演奏における曲想にふさわしいタッチを習得するための一考察	〃	〃	武本　京子 副　新山王政和
	音楽科内容学	戸伏　真紀	（演奏）ショパン・24のプレリュードより （論文）幼稚園と小学校の一貫性を目指した子どもの音楽表現について	〃	〃	隈本　浩明 副　小泉　恭子
	音楽科内容学	中村　悦子	（演奏）リスト作曲「ダンテを読んで」 （論文）ピアノ演奏における芸術的逸脱の一考察 ―リスト作曲「ダンテを読んで」を契機として	〃	〃	武本　京子 副　滝澤　達子
	音楽科内容学	夏目真悠子	（演奏）シューマン作曲　KLAVIERSONATE fis-moll　OPUS11 （論文）ドイツ・リートにおけるピアノ伴奏法に関する研究 ～シューベルトの『セレナーデ』を題材とした音響分析ソフトウェア　Computerized　Speech Lab(CSL)4400 によるタイミングの検証より～	〃	〃	隈本　浩明 副　村尾　忠廣
	音楽科内容学	西田奈津子	（演奏）S．W．ラフマニノフ作曲　ピアノソナタ第２番　OP.36（1931年改訂版）全楽章 （論文）S.W.ラフマニノフ作品におけるペダリングについて ～ピアノソナタ第２番OP.36全楽章を中心に～	〃	〃	栗原　一身 副　滝澤　達子
	音楽科内容学	水野　美穂	（演奏）コレルリの主題による変奏曲　作品42（S．ラフマニノフ） （論文）フォリアの概念と構造及びその変遷について	〃	〃	隈本　浩明 副　村尾　忠廣
	音楽科内容学	矢田由紀子	（演奏）バッハ＝ブゾーニ　無伴奏ヴァイオリンパルティータ第２番より“シャコンヌ” （論文）我が国におけるピアノ入門教材の変遷 ～我が国における近年の動向調査を中心として～	〃	〃	隈本　浩明 副　村尾　忠廣
	音楽科内容学	茹賢　古麗	（演奏）ドビュッシー映像より　1.水に映る影　2.金色のさかな （論文）子どものピアノ指導についての考察　初心者への学習方法の導入	〃	〃	栗原　一身 副　小泉　恭子
	美術科教育学	都築　睦美	北川民次の美術教育観の研究	〃	〃	礒部　洋司 副　藤江　　充
	美術科教育学	宮城島喜弘	鑑賞と表現の統合を目指した美術教育の研究	〃	〃	藤江　　充 副　礒部　洋司
	美術科内容学	浅野　多恵	（作品）Pieces （論文）多重織の種類と構造	〃	〃	黒澤　千春 副　浅野　和生
	美術科内容学	梅田　泰輔	（作品）手びねりによる石膏鋳造 （論文）手びねりによる鋳造作品制作考察	〃	〃	黒澤　千春 副　遠藤　　透
	美術科内容学	加藤　克俊	（作品）ripple （論文)「螺旋をテーマとする動く造形」の制作過程に関する研究	〃	〃	黒澤　千春 副　樋口　一成
	美術科内容学	加藤　真也	（作品）雨あがる LOVE & PEACE 曼陀羅 （論文）知的障害養護学校における美術教育	〃	〃	宇納　一公 副　遠藤　　透
	美術科内容学	金井さつき	（作品）はじまりと終わりのあいだ （論文）近代日本ガラスの展開	〃	〃	黒澤　千春 副　アイビー・ピーター
	美術科内容学	川村　友紀	（作品）はじまりのおわりに （論文）ソフトグランドの油の研究	〃	〃	野澤　博行 副　松本　昭彦

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
芸術教育	美術科内容学	小路　麻友	（作品）a box in a box （論文）ディープエッチングにおける白インクの表現効果	平成17年３月	修士(教育学)	野澤　博行 副　松本　昭彦
	美術科内容学	鈴木　理代	（作品）GLASS WORKS 2005 （論文）ガラスとお茶道具	〃	〃	黒澤　千春 副　アイビー・ピーター
	美術科内容学	都築　美咲	（作品）「想念」「遥か」 (論文)「ものづくり」による環境教育	〃	〃	宇納　一公 副　遠藤　　透
	美術科内容学	馬渕　永悟	（作品）従属 subordiration （論文）ガラスを吹くにあたって	〃	〃	黒澤　千春 副　アイビー・ピーター
	美術科内容学	仁藤明日美	Gustav Klimt －女性肖像画の変遷についての考察－	〃	〃	浅野　和生 副　安田　篤生
	美術科内容学	吉見佳代子	（作品）Kaleidoscope works 2005 (論文)万華鏡 Kaleidoscope について	〃	〃	黒澤　千春 副　アイビー・ピーター
保健体育	保健体育科教育	田中　健司	高等学校におけるソフトボール授業に関する研究	〃	〃	村松　常司 副　吉田　　正
	保健体育科内容	于　　江永	中国におけるスポーツ指導者養成制度改革の課題に関する研究	〃	〃	野々宮　徹
家政教育	家庭科内容学	張　　美花	中国におけるファーストフードの状況 －日本のファーストフードの発展状況から	〃	〃	西村　敬子
	家庭科内容学	岡田　和憲	高齢者による生活空間の評価に関する研究 －ケアハウスにおける談話スペースの検討－	〃	〃	小川　正光
	家庭科内容学	深谷　由佳	尿素生合成の調節機構におけるタンパク質栄養の役割に関する研究	〃	〃	早瀬　和利
	家庭科教育学	外山　広美	「子ども参加」の視点にたった家庭科の授業づくり	〃	〃	野田満智子 副　山田　　綾
技術教育	技術科内容学	岩田　　航	高周波スパッタリングによるＺｎＯ薄膜の作製に関する研究	〃	〃	清水　秀己
	技術科内容学	朴　　昌浩	ファレノプシス栽培における施肥要素と光合成に関する研究	〃	〃	橘田　紘洋 副　太田　弘一
養護教育	養護教育学	近藤　充代	高等学校におけるピア・サポートに関する研究 －生徒保健委員会活動としての試み－	〃	〃	坂井　　誠
	養護教育学	下村　淳子	養護教諭の力量向上につながる自主的研修のあり方に関する研究	〃	〃	野村　和雄 副　後藤ひとみ
	養護教育学	趙　　永浩	中国の中高生の蓄積的疲労に関する調査	〃	〃	古田　真司
	養護教育学	中川　朋美	ウォーキングによる自律神経機能の改善効果に関する研究	〃	〃	佐藤　和子 副　桜木　惣吉
	養護教育学	森田のり子	「養護教諭の専門性」の明確化に関する研究	〃	〃	野村　和雄
	養護教育学	圓岡　和子	知的障害養護学校における養護教諭の役割に関する研究 ～学校保健活動の実態から～	〃	〃	野村　和雄 副　後藤ひとみ

専攻	領　域	氏　名	学位論文名又は演奏・作品及び関連論文名	学位授与年月	学位の名称	指導教員
学校教育臨床	学校教育臨床	鬼頭　鑑一	工業高校における不登校生徒への教育相談の特徴の検討と課題	平成16年 9 月	修士(教育学)	生島　博之
	学校教育臨床	冨田　御夫	アルコール依存症，断酒継続者のロールシャッハ反応についての一考察 （断酒継続と自助グループの役割について）	〃	〃	佐藤　勝利
	学校教育臨床	石井　幸代	不登校女子生徒の友達関係に関する臨床心理学的研究 －適応指導教室の果たす役割について－	平成17年 3 月	〃	生島　博之
	学校教育臨床	伊藤紗智子	高機能広汎性発達障害児のきょうだいにおける体験とそれにまつわる「思い」についての考察 －「自分らしさへの道程」を含めた臨床的検討－	〃	〃	岸　　良範
	学校教育臨床	加藤みすず	子育て不安を抱える母親の母子画にあらわれる特徴について	〃	〃	佐藤　勝利 副　下村　美刈
	学校教育臨床	栗城のり恵	遊戯療法における遊びの治療的意味に関する研究	〃	〃	岸　　良範
	学校教育臨床	児嶋しほり	遊戯療法における攻撃と甘えに関する一考察	〃	〃	岸　　良範 副　清水　秀美
	学校教育臨床	五葉眞砂子	Jung, C.G. の心理学的タイプからみた夢へのアプローチ ～夢インタビューを通して～	〃	〃	岸良範 副　齋藤眞
	学校教育臨床	田畑　　恵	＜裏切り＞の臨床心理学的研究 治療関係での重要な依存対象からの見捨てられに対する陰性感情の再現と治療のあり方	〃	〃	生島　博之
	学校教育臨床	中神　友希	心身症への心理的アプローチについての一考察 －蕁麻疹を主訴とする小学校 2 年男子の遊戯療法－	〃	〃	生島　博之
	学校教育臨床	堀部　京子	攻撃的な行動が目立つ小学低学年男児の箱庭療法の有効性	〃	〃	生島　博之
	学校教育臨床	和田　剛宗	クライエントの「異界」と遊びの水準 －先天性の身体障害児との遊戯療法を通して－	〃	〃	佐藤　勝利
	学校教育臨床	河辺　順子	小学校 4 年生におけるアサーション・トレーニングの効果について －子どもの主張性，対人不安感，対人的自己効力感の変化からの一考察－	〃	〃	生島　博之 副　下村　美刈

5　教務関係

⑴　大学院教育学研究科開設科目と修了に必要な単位数

以下のとおりである。

<table>
<tr><th colspan="2" rowspan="2">開設科目
所属専攻</th><th colspan="5">学校教育専攻科目</th><th colspan="2">教科教育専攻科目</th><th rowspan="2">障害児教育専攻科目</th><th rowspan="2">養護教育専攻科目</th><th rowspan="2">学校教育臨床専攻科目</th><th rowspan="2">特別研究科目</th><th rowspan="2">自由選択科目</th><th rowspan="2">合計</th></tr>
<tr><th>教育分野科目</th><th>教育心理分野科目</th><th>幼児教育分野科目</th><th>生活科教育分野科目</th><th>総合教育開発分野科目</th><th>教科に関する教育学科目</th><th>教科に関する内容学科目</th></tr>
<tr><td rowspan="5">学校教育専攻</td><td>教育学分野</td><td>12
(4)
※注</td><td>2</td><td></td><td></td><td>2</td><td rowspan="5">4</td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5"></td><td rowspan="5"></td><td rowspan="6">4</td><td rowspan="6">6</td><td rowspan="6">30</td></tr>
<tr><td>教育心理学分野</td><td>2</td><td>12</td><td></td><td></td><td>2</td></tr>
<tr><td>幼児教育分野</td><td colspan="2">4
（両分野にわたり履修）</td><td>10</td><td></td><td>2</td></tr>
<tr><td>生活科教育分野</td><td colspan="2">4
（両分野にわたり履修）</td><td></td><td>10</td><td>2</td></tr>
<tr><td>総合教育開発分野</td><td colspan="2">4
（両分野にわたり履修）</td><td></td><td></td><td>12
(4)
※注</td></tr>
<tr><td rowspan="2">教科教育専攻</td><td>教科教育学領域</td><td colspan="3" rowspan="2">4
（両分野にわたり履修）</td><td rowspan="2">2</td><td>10</td><td>4</td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>教科内容学領域</td><td>6</td><td>8</td></tr>
<tr><td colspan="2">障害児教育専攻</td><td colspan="3">4
（両分野にわたり履修）</td><td>2</td><td rowspan="2">4</td><td></td><td>10</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">養護教育専攻</td><td colspan="3">4
（両分野にわたり履修）</td><td>2</td><td></td><td></td><td>10</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">学校教育臨床専攻</td><td colspan="3">4
（両分野にわたり履修）</td><td>2</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>14</td></tr>
</table>

※注：12単位中の４単位は，所属分野の他の領域で開設する科目から履修する。

⑵ 教育評価・単位認定

学位論文等の指導・助言を行う指導教員を専攻に属する教員から定めている。学期を前期，後期の２学期に区分し，各授業科目の授業は原則として15週にわたる期間を単位として行っている。昼間開講コースは学部と同じく原則として月曜日から金曜日までの各４時限（水曜日は２時限）で実施し，昼夜開講コースは火・水・金曜日の夜間各２時限と土曜日４時限とで実施している。他に集中講義の形をとるものもある。

平成16年度に予定された授業数は昼間開講で348，夜間開講で251であり，このうち名古屋市内に夜間開設しているサテライトキャンパスにおける予定授業数は20であった。このほか，土曜日開講は28，集中講義は49であった。なお，平成15年度から名古屋市内に開設しているサテライトキャンパスを附属名古屋中学校に移転している。

⑶ 成績評価・単位認定，学位の授与

教育学研究科の成績評価・単位認定の在り方・基準については，教育学研究科に特に定めがなく，教育学部に準じている。大学院規程第34条によって，教育学研究科独自に定めるもののほかは学則を準用するとされている。

修士の学位は，学位規程により，「教育学研究科に２年以上在学し，所定の単位を修得し，学位論文審査及び最終試験に合格した者に授与する。」と規定されている。

本学教育学研究科としての学位授与の方針と方法は，学位論文審査手続要領に定められている。学生は，最初に指導教員の指導を得て修了予定年度の９月30日までに学位論文題目申告書を提出し，２月10日正午までに論文を提出する。なお，学生の諸事情により９月に修了することも可能であり，この場合は，５月20日までに学位論文題目申告書を提出し，７月31日正午までに論文を提出することになっている。指導教員は，学位論文審査及び最終試験委員の候補者を当該専攻内の教員から指導教員（主査）を含め３名以上選出し，運営委員会の承認を得たうえで審査に当たる。これを経て，学位論文の審査及び最終試験の結果は教授会に報告され，学位授与の可否を審議決定される。

⑷ 教育職員免許状の取得

小学校，中学校，高等学校，幼稚園，養護学校又は養護教諭１種免許状の所要資格を有する者で，大学がそれぞれ当該免許状に必要と定めた科目から24単位以上を修得することにより専修免許状が取得できる。

平成16年度修了者のうち，大学から一括申請で取得した免許取得状況は次のとおりである。

○９月修了者

・申請者なし

○３月修了者

・小学校教諭専修免許状　　33件
・中学校教諭専修免許状　　46件
・高等学校教諭専修免許状　43件
・幼稚園教諭専修免許状　　２件
・養護学校教諭専修免許状　１件
・養護教諭専修免許状　　１件

第３節　ファカルティ・ディベロップメント活動

１　新採用教育職員等研修会

新採用教育職員等に対し、研修を行った。採用教育職員・事務職員の参加者は12人であった。なお、その内容は以下のとおりである。

⑴　実施要領

①　目　的

新採用教育職員等に対し、研修として大学等における教育研究のあり方、本学の諸課題等について説明し、その職務の遂行に必要な基本的事項を修得させ、大学運営の理解を深めさせることを目的とする。

②　対　象

・平成15年４月２日から平成16年７月１日までの間に採用された教育職員
・平成15年４月２日から平成16年４月１日までの間に採用された事務職員等
・その他特に希望する者

③　日　時

平成16年７月27日㈫　13:30～17:00

④　場　所

愛知教育大学本部　第三会議室

⑤　研修日程及び内容

13：30～13：35　開会挨拶
13：35～13：40　研修日程等説明
13：40～14：00　愛知教育大学の現状と課題（学長）
14：00～14：45　法人化で大学はどう変わるべきか？（理事（学術総務担当））
　休　　憩
15：00～15：30　本学のカリキュラムと授業運営（理事（教務企画担当））
15：30～16：00　学生支援等（理事（学生支援担当））
16：00～16：30　国立大学法人の当面の課題（事務局長）
16：30～17：00　附属学校（附属学校部長）
17：15～18：00　懇談会（生協）

⑵　配付資料

①　今後の国立の教員養成系大学・学部の在り方について
②　本学のめざす教員養成の在り方
③　愛知教育大学の改革構想
④　2004案内　愛知教育大学大学院教育学研究科　募集案内
⑤　学部と大学院の連携による６年一貫教育養成コースの設置
⑥　新採用教育職員等研修会資料（教務関係）
⑦　履修の手引（平成16年度）（教育職員は各自持参）
⑧　教育学研究科学生便覧（平成16年度）（教育職員は各自持参）
⑨　新採用教育職員等研修会資料（学生支援関係）
⑩　新採用教育職員等研修会資料（入試関係）
⑪　求人のための大学案内
⑫　国立大学法人の課題－財務を中心に－

⑬　本学の教育研究体制と改革の進行状況（附属学校園）

2　ファカルティ・ディベロップメント研修会

役員会主催でこれからの法人評価及び認証評価等に対応するために本学として必要な取組等について，現段階での情報を学内に周知し，今後の協力を依頼するために研修会を開催した。当日の参加者は95名であり，その内容は以下のとおりであった。

実施要領

①　目　的

国立大学法人及び学校教育法に基づいて，大学全体の業務についてそれぞれの評価委員会及び評価機関の評価を受けなければなりません。その第一段階として教員に直接関わる評価項目等を中心に説明及び意見交換を行う。

②　対　象

本学教職員

③　日　時

平成17年２月９日㈬　15時30分～17時

④　場　所

愛知教育大学　第二共通棟431教室

第 2 章　研究活動

第 2 章　研究活動

第 1 節　講座の概要

生活科教育講座

本講座に所属する教員は 4 名（教授 1 名，助教授 2 名，助手 1 名）で，本学においては小講座である。本学は，生活科が全面実施された平成 4 年には，学内定員の振り替えで教授 1 名を，さらに平成 9 年からは，純増（全国初）で助教授 1 名を採用し，生活科教育の充実に努めてきた。平成12年の改組により，教員定員 4 名の生活科教育講座が，全国で初めて設置された。しかしながら，学部に学生をもっていないのが課題である。

また，大学院教育学研究科学校教育専攻生活科教育分野を平成14年度から開設した。これは全国唯一である。平成16年度は 9 名の院生であった。平成17年度入試で，新たに 7 名が入学することが決まり，平成17年度は13名となり，充実・発展に努めている。

本講座の研究は，教育現場に根ざした立場で進められている。各教員が県内外の幼稚園，小・中学校，教育センターなどと連携しながら研究を進めている。その成果を，著書，論文，口頭発表などで広めてきている。とりわけ，平成16年度は，愛知県総合教育センターと連携し，法制化された10年経験者研修で「生活科」を選択した教師への研修を講座で全面的に引き受け，夏休みに 4 日間大学にて実施した。また，4 名の講座であるが，平成16年度は，合計 3 件の科学研究費補助金を受け，今日的な課題に対応する研究を進めている。

また，教育面では，実際の授業を見学したり，自然観察実習園などを活用して体験的に教材を理解させたりしながら，常に子どもの姿をイメージさせることを大切にした授業を行っている。これらは学生からも大変好評であり，学生アンケートの結果にもその一端が現れている。

障害児教育講座

教員組織は，教授 4 （内，学長補佐 1 名含む），助教授 3，講師 1 の計 8 名である。専門分野は，知的障害教育 2 名，聴覚言語障害教育 2 名，肢体不自由教育 2 名，社会福祉 2 名である。このうち，社会福祉を除く 6 名が主として障害児教育教員養成課程の学生を担当し，社会福祉 2 名が生涯教育課程共生社会コース人間関係履修モデルの中で社会福祉を専攻する学生の教育をそれぞれ担当している。さらに，これらの学生の教育には，本学附属障害児治療教育センターに所属する教員 2 名の協力を得ている。

障害児教育教員養成課程は，養護学校教諭免許状が取得できる知的障害教育コースと肢体不自由教育コース，聾学校教諭免許状が取得できる聴覚言語障害教育コースがあり，学生定員は，1 学年あたり25名であるが，各学年ともに25名以上が在籍している。

カリキュラムは，今日における障害児教育の流れをとらえて，重度障害や軽度発達障害等の講義・演習も行いながら，臨床実地研究（施設実習など）等の実践的内容を含むものとなるようにしている。本講座ではその他に，1 年間の課程として特殊教育特別専攻科（知的障害教育専攻：定員30名）と臨時教員養成課程（1 年課程：肢体不自由教育教員養成課程，情緒障害教育教員養成課程：各20名）の三つの課程が設置されている。これらの課程には愛知県教育委員会から 4 名，名古屋市教育委員会から 2 名の計 6 名の現職教員が派遣されている。

生涯教育課程共生社会人間関係履修モデルでは，社会福祉士の受験資格と高校福祉免許状が取得できるようにカリキュラムが構成されている。学生の教育にあたっては，講義・演習のみならず，福祉現場との連携を重視し，施設実習等に力を入れたものとなっている。

教員は，地域社会との連携を重視した支援活動を積極的に行っている。脳性マヒ児･者の動作訓練会や軽度発達障害児の学習支援プログラムを月例で，脳性マヒ児の合宿訓練会を夏季に行っ

ている。言語障害・脳性マヒ・学習障害等の臨床活動も来談者のニーズに応じて相談活動を継続して行っている。また，地域の障害児相談会の相談員や各地区の就学指導委員として専門家の立場から貢献している。刈谷市特殊教育推進協議会の各種行事に障害児教育専攻の学生を中心として学生ボランティアを派遣し，地域貢献を行っている。さらに，養護学校等の学校評議員として，それらの学校の教育等に関して助言者としての貢献をしている。

障害を有する学生への特別支援として，主として障害児教育専攻に在籍している重度の障害学生４名（聴覚障害３名と下肢障害１名）を支援するために本講座内に障害学生支援委員会を設置し，障害学生のニーズに対応するとともに関係部局への要望窓口となっている。

幼児教育講座

本講座は，幼児教育学，幼児心理学，児童福祉・障害児保育を研究分野とする教員各１名と，保育内容学を研究分野とする教員，（領域「健康」,「表現」）各１名ずつの計５名の構成である。

幼児教育講座の研究分野は，幼児教育の性格上，幅広いものであるが，基礎的研究，原理的な研究とともに，それぞれ分野で実践的内容の研究に関心をむけてすすめている。また，現在の幼児教育をめぐる課題や状況の変化に積極的に対応するため，保育士養成に関わり，育児支援，家族援助論，特別支援教育等も研究領域としてカヴァーしている。講座の教員はそれぞれの研究成果の発表し，教育にその成果をいかすとともに，附属幼稚園と共同し研究を推進し，また，地域の幼稚園，保育所との連携を保ちつつ研究と教育をすすめている。

それぞれ教員の研究は以下のとおりである。村岡教授は，これからの保育者養成のあり方やカリキュラムに反映させるために，保育者の専門性を主に「身体性」の視点から追求し，今年はこれに加えて，領域「健康」に関わる専門性について考察を行った。また，従来からのテーマである，幼児の運動発達や健康と環境の関連について，技術教育講座，養護教育講座教員と共同して全国的調査を行った。梅澤教授は，基礎的研究として，継続して幼児の音楽的，リズム的表現の様態の観察し，考察をすすめている。記述分析により幼児の表現の捉え方を明らかにすることで保育内容の実践的問題の解明したいと意図している。また，幼児の表現遊びや劇表現活動の分析を行い，保育実践の場面における，表現指導・援助の内容やその方向性の検討に着手している。福祉・障害児保育分野の小川助教授は，児童福祉や障害児保育を中心に共著をいくつか刊行し，保育所・幼稚園・通園施設の先生方と「気になる子どもの」について園内で検討し，今後の指導方法を明らかにしようと取り組んでいる。新井助教授は，幼児期の学びのあり方をテーマとし，幼児が生活の中でどのようなことを学んでいくのか，また，どのようなことを学ぶのが重要なのかということについて，主として，知的発達に関わる面を中心に検討を行った。また，保育実践を支える保育の諸条件の解明する観点から，保育制度も，保育所で働く当の保育者や，そこで生活する子どもの立場からの改革がされるべきだとし，愛知県内の保育者対象に，一クラスあたりの人数や保育者の負担感についての調査を実施した。発達心理学の山口助教授は,「親になるということはどういうことなのか」をテーマに研究を継続し，面接による方法で，親になる発達過程についての分析を行っている。このことは現在必要とされる家族援助論や，家庭との連携という保育の実践的課題に反映される内容である。また，幼児期の自己形成過程に関する研究として，人間関係の観点から遊びを捉え，３歳児の遊びの成立要因の考察をすすめている。

養護教育講座

養護教育講座は定員10名で，専門分野は養護学，看護学，学校保健，微生物，環境保健学，精神保健，公衆衛生学，健康管理学，生理学，内科学，外科系医学，栄養学などであり，教員はそれぞれ独自の研究分野を持っている。養護教育講座の研究組織としての理念でありかつ目標としていることは，教員それぞれの分野での研究成果及び講座としての共同研究の成果を養護教諭養

成課程や大学院養護教育専攻の学生の教育・研究に反映させること，学校保健関係の学会や研究会への貢献，現場の養護教諭の研究指導，地域社会への貢献，教科書等の執筆等に反映させることである。

教員それぞれの分野での研究例を示すと次のようになる。

養護教育学，学校保健分野では「養護教諭の研究能力に関する研究」,「健康教育の評価をどのように考えるか」,「これからの健康教育の新しい視点」等，看護学分野では「教育学部養護教諭養成の看護学授業」,「心身に障害を持つ人を学生が理解するための看護・教育学的研究」等，微生物・環境保健学分野では「青少年の健康意識・行動と歯科保健行動」,「フッ素導入と養護教諭の執務」等，精神保健分野では「不適応障害に対する臨床心理学的観点からのストレスマネジメント」等，健康管理学分野では「女性や児童・生徒のライフスタイルと不定愁訴について」等，生理学分野では「情動とシナプスの可塑的変化に関する研究」等，栄養学分野では「幼児期の食生活習慣と親の健康習慣の関連性」等について研究している。

また，2004年には講座全教員，附属養護教諭及び教育委員会メンバーによる「養護教諭養成課程のカリキュラム等」の研究プロジェクトを立ち上げ，教育改善経費（学長裁量経費）としても採択され鋭意研究をすすめている。

以上のように，養護教諭や養成教育に直接関わる研究から，基礎的研究まで幅広く研究が行われ，養護教諭養成教育に貢献している。

学校教育講座

本講座は30名の教員定員を持つ研究組織であるが，2004年度現在で欠員が３名あり，27名の教員によって運営されている。教員組織は大きく教育学系と心理学系の２つから構成されている。それぞれの専門分野は，教育学系では，教育哲学・教育史・教育方法学・生徒指導学・教育制度学・教育社会学・社会教育学・職業指導・進路指導・学校図書館学等の各分野，心理学系では，教育心理学・発達心理学・臨床心理学の各分野というように，教育に関する幅広い研究分野をカバーしている。21世紀を迎え社会状況が大きく変化する中で，教育をとりまく状況はますます複雑化し，解決されなければならない課題が山積している。本講座では，学校教育を中心にすえつつも，社会教育・家庭教育・生涯教育をも視野に入れた広汎な教育事象や，児童・生徒を中心に人間の発達・学習を巡る諸問題について，多面的かつ総合的に追究することによって，学校やその他の教育現場の期待と要請に応えるべく研究・教育を展開している。

所属教員の専門領域は多岐にわたっており，講座全体としての特定のテーマによる研究は行われていないが，それぞれの教員ごとに積極的な研究活動が推進されている。2004年度の研究費の交付状況について，代表者となっている件のみをあげると，科学研究費補助金は４件（基盤研究（C） ２件，若手研究（B） ２件），教育改善推進費（学長裁量経費）のプロジェクトは１件の採択を受けている。

本講座は，学部教育においては，教育科学専攻学生及び共生社会コース学生の専門教育のほかに教員養成課程の「教職に関する科目」を担当するほか,「社会教育主事」基礎資格関連科目及び「得意分野を持つ個性豊かな教員」の養成の一環として「学校図書館司書教諭」の資格取得にも責任を負っている。また，関連の諸講座と連携して,「学芸員」資格の取得にかかわる授業を担当している。

大学院教育については，学校教育専攻，学校教育臨床専攻及び学校教育専攻総合教育開発分野国際理解教育領域の専任あるいは兼担として，その充実に寄与してきている。さらにまた，現職教員の要求に応じた実践的で臨床的な教育研究を推進できるよう，関連講座や教育実践総合センターとの協力態勢を整え，積極的にサポートしている。

教育臨床学講座

本講座は大学院学校教育臨床専攻（臨床心理学コース）の主幹講座であり，現職教員のリカレント教育並びにスクールカウンセラーを中心とする臨床心理士養成を任務としている。そのために，その活動・運営は学校教育臨床専攻と一体であり，学校教育臨床専攻の沿革及び活動内容を述べることで，教育臨床学講座の概要としたい。

その沿革については，従来，本学では，臨床心理士の養成は，大学院教育学研究科の学校教育専攻（発達・臨床心理学専修）及び障害児教育専攻（人間関係専修）の二つのコースが負ってきた。すでに平成12年度までに，学部・専攻科等の卒業者を含めて87名の臨床心理士を世に送り出してきた。しかしながら，指定大学院制の発足に伴って，臨床心理士養成コースをひとつに絞り込む必要が生じた。折しも，不登校や「いじめ」の問題，退学，怠学やアパシーの問題，さらにはいわゆる「学級崩壊」等々の学校教育を巡る子どもたちの問題が深刻化する中で，教員養成系大学には，これらの問題の実践的な研究とそれに適切に対応できる人材の養成が求められていた。

そこで本学では，平成９年度に教育実践総合センターを立ち上げ，同年９月には同センター内に心理教育相談室を開設し，相談活動を開始した。以来，この心理教育相談室の活動は，本学の臨床研究と臨床実践の中心となり，学内の臨床系教官を臨床心理士の養成に向けて結集させる契機となった。学校教育臨床専攻発足後は，学生の実習，教官の実践研究の場となっている。

本学における大学院学校教育臨床専攻（臨床心理学コース）は，このような背景のもとに，スクールカウンセラーをはじめとする教育臨床の専門家（臨床心理士）の養成を目途に，平成12年度に新設され，同時に教育臨床学講座は発足した。そして平成14年度に学校教育臨床専攻は日本臨床心理士資格認定協会の第１種指定を受け，現職教員等が（在職のままで）臨床心理士受験資格を取得し得る数少ない大学院の１つとなった。本専攻は学部に基礎をもたない独立専攻大学院であり，当初は夜間専攻大学院として出発した。しかし，学内外のニーズに鑑み，平成14年度からは昼夜開講の大学院として充実を図ることになり，現在に至っている。なお，本専攻発足以前とその後のにおける臨床心理士の合格者数は平成16年度までで120名を超えている。

国語教育講座

本講座は，国語科教育・国文学・国語学・中国哲学・中国文学・書写書道・国際理解教育等の多様な教育研究分野の教員19名によって構成されている。講座としての目標は，基本的にはこれら各分野における学問研究を修めるとともに，これらを基盤とした理論的，歴史的，実践的な国語科教育学・国際理解教育に関わる研究と教育とを深めることである。

国語教育は，思考と認識，想像力と創造力等の根幹を成す言語能力の育成に関わるという意味で，小・中・高校における全教科の基礎基本ともいうべき学問・教育領域である。また今日，学校教育に求められている「生きる力」を培うための必須領域として，「総合的な学習の時間」「発展学習」等を支え，生かしていくための中核的役割を担っているということができる。

講座の所属教員は，教員養成課程と国際理解教育課程の二課程にまたがっているが，それぞれの課程に所属する学生への教育には，講座全体としてできる限る協力体制をとることを原則として対処している。当然のことながら，研究・教育におけるそれぞれの課程の特色を生かしていくことを前提としてはいるが，卒業研究の内容によっては課程を超えての指導が受けられるようにするなど，学生の希望を最大限に受け入れるべく，講座全体で努力を重ねている。

なお，講座構成員から理事１名が選ばれて授業担当が不可能な状況にあり，また，以前から欠員となっている分野もあるため，授業運営が極めて困難な状況にあることを訴えて，２名の教員の補充を要望したが受け入れられなかった。

日本語教育講座

国際化が進む現代社会にあって，日本及び海外で日本語教育の必要性がますます高まっている。本講座は，主に以下の五つの分野を柱として，広く国際理解教育も視野に入れた教育・研究をめざしている。

1　言語一般：言語の類型と普遍性，日本語と他の言語との対照研究，日本語の音声・音韻，語彙・意味，文法，表記など，日本語の構造に関する体系的な研究。
2　言語と教育：外国語として日本語を教えるための教授法の研究。
3　言語と文化：世界と日本の文化，異文化間接触（留学生教育、児童生徒の文化間移動等）の研究。
4　言語と社会：地域・世代・性などによる言語変異や言語政策など，社会との関わりにおける言語の研究。
5　言語と心理：言語発達やバイリンガリズムなどの研究。

現在の本講座の具体的な目標及び課題は以下のとおりである。

1　日本語教育において，上記五つの分野の知識が有機的に活用できるような人材の育成及びその方法論を研究する。
2　現在，日本語教育コースの卒業生は広く国内外で日本語を教える職に就いて活躍しているが，今後もさらにこれを発展させ世界の日本語教育に貢献できるようにする。そのために海外の日本語教育機関との交流，連携を推進する。
3　日本語の教育実習の場を拡大する。現在，日本語の教育実習は正規の授業としては学内の留学生を対象としたものが中心だが，一部の学生は夏休み，春休み等を利用して，タイ，中国，アメリカ等の学術交流協定校や日本語教育機関に自主的に実習に出かけている。今後はこれをさらに多くの国で実施できるように交渉する。海外での実習は2005年度から単位認定がなされることになった。
4　地域との連携を深める。日本語教育コースの多くの学生が，この地域に住む外国人やその子弟に対する日本語教育にボランティアとして関わっている。この活動についても2005年度から単位認定がなされることになった。今後，特に小中学校における外国籍児童生徒の日本語教育について，地域との連携の上で緊急の課題として取り組む必要があると考える。
5　日本，世界に向けての情報発信。日本語教育コースの特色，目的を広く世界に紹介し，この分野への理解を深めるとともに，優秀な人材の確保に努める。方法としては，ホームページの充実などが考えられる。

社会科教育講座

本講座は，社会科教育学，国際理解教育学，哲学，倫理学，歴史学，思想史学，比較文学など，多様な教育研究分野によって構成されている。教育組織としては，初等・中等教員養成課程の社会専攻の四専修（哲学・史学・地理学・法経社）と，国際理解教育課程の国際文化コースにまたがっている。

入試，卒業，予算，人事など，講座単位で行われる活動以外は，おおむね専修単位で教育研究活動が行われている。

（哲学専修の活動）

専修代表は渋谷，教務委員は吉田，入試問題作成委員として中野（生活科）に参加していただいている。

渡辺は教育研究評議会評議員を務めている。

（史学専修の活動）

教育活動としては，教員養成課程の目黒（中国近代史），西宮（日本古代史），黒川（ロシア史），

土屋（社会科教育）と国際文化コースの見崎（フランス近代史），松島（日本中世史）が協力して，学生の指導にあたっている。

研究活動としては，各自が論文を執筆し，それぞれ専門の研究を深化させることが第一である。教育活動とも関わるが，年一回の愛知教育大学歴史学会を開催し，歴史研究や社会科教育実践の報告などと，講演の二本立てで行っている。また，『歴史研究』を年一回発行し，卒業生を中心とする会員とともに関係機関に配布し，研究及び教育の研鑽に努めている。

専修内での役割については，それぞれローテーションで分担を決め，加重負担にならないようにし，職務を遂行している。

地域社会システム講座

1　理念・目標

本講座は，急激に変動する21世紀の現代社会・国際社会と地理的環境を，体系的に有機的に「地域社会システム」として捉え，社会科学的・地理学的・民俗学的視点から，今後益々必要とされる社会調査，フィールドワーク，計量的解析の実験的手法を用いて，教育研究を行うことを目標とする大講座である。

この教育分野は，⑷現代社会の政治，法律，経済，人間社会，⑹国際理解教育としての国際政治，国際人権法・比較法，国際経済，比較社会・コミュニケーション，⑹地理学・国内外の地誌，環境教育，民俗学である。教育の運営面においては，全学的共通科目，教員養成課程の社会科の専門科目と国際理解教育課程（国際文化コース）の専門科目等を担当し，その学生指導に当たる。

本講座の研究の目標は，社会諸科学，地理学，民俗学の隣接科学が学際的に大講座を形成することによって，その研究対象を体系的・多角的に研究すること，更にまた，実験的実証的研究手法を駆使することによって，激動する21世紀の現代社会・国際社会と地理的環境の事象を動態的実証的に分析研究することである。

2　定員と現員（平成16年度）

当該講座の定員は15名（教授８名，助教授７名）であり，平成16年度の専門分野別の現員は，地理学（教授２名，助教授１名），法律学（教授２名），政治学（教授２名），経済学（教授２名，講師１名），社会学（助教授３名），民俗学（教授１名）の計14名（教授９名，助教授４名，講師１名）であった。

3　人事

当該講座定員は，平成15年４月１日より15名（教授８名，助教授６名，講師１名）となっている。

〔地域社会システム講座の定員と現員〕　（平成17年３月）

定員		現員			
教　授	助教授	専門分野	教　授	助教授	講　師
8　名	7　名	地　理　学	2	1	
		法　律　学	2		
		政　治　学	2		
		経　済　学	2		1
		社　会　学		3	
		民　俗　学	1		
15　名		14　名	9	4	1

4　講座教員の専門分野

〔教員の専門分野〕　（平成17年 4 月現在）

阿部　和俊	教　授	人文地理学，都市地理学	梅下　隆芳	教　授	経済学，経済政策，経済投資論
岩崎　公弥	教　授	人文地理学，歴史地理学	松岡　和人	教　授	経済学，国際金融論
伊藤　貴啓	助教授	人文地理学，農業地理学	水野　英雄	講　師	経済学，国際経済学
青嶋　　敏	教　授	民法，法社会学	石丸　　博	助教授	社会学，官僚制，組織論
清田　雄治	教　授	公法学，憲法	足立　重和	助教授	社会学，環境社会学，社会調査論
近藤　潤三	教　授	政治学，ドイツ近代政治思想	中筋由紀子	助教授	社会学，比較社会，比較文化
渡辺　雅弘	教　授	政治学，ギリシャ政治思想	野地　恒有	教　授	民俗学，博物館学

外国語教育講座

本講座は，旧第一部外国語教室及び旧総合科学課程国際文化コースの英米文化選修とヨーロッパ文化選修の一部を統合して平成12年度から大講座として発足した。

本講座は研究面では，言語の理論的・実践的研究，文学研究，諸外国・地域の文化に関する多角的研究，及びこれらの研究を踏まえた上での外国語教育の研究を行っている。教育面においては，中等教育教員養成課程英語専攻の学生（入学定員14名）及び国際理解教育課程国際文化コース欧米文化履修モデルの学生（受け入れ学生数50名）の専門科目を担当し，実践的で高い語学力と指導力を持ち，現代社会が直面している諸課題に対応できる複眼的で柔軟な思考力を持った，質の高い英語教員及び国際理解教育を推進しうる人材の育成をめざしている。また，全学的には，共通科目の教育において，外国語科目及び英語コミュニケーションの担当講座として，外国語運用能力，異文化理解，学問の基礎能力の育成を図っている。さらに，大学院英語教育専攻（入学定員 9 名）の責任講座として，高度な実践的能力を備えた英語教員及び研究者の育成に努めている。

本講座の教員定員は24名（教授12名，助教授12名）であるが，平成16年度末の現員は22名（教授 9 名，助教授13名）で 2 名の欠員がある。

数学教育講座

数学教育講座は，平成12年 4 月の組織改編時に計20名の陣容でスタートした。組織改編時の学内教員定員は21名とされているので，欠員 1 名抱えていることになるが，これは今に至るまで解消されていない。平成16年 3 月と平成17年 3 月に教授各 1 名が定年退官，平成16年度に助手 2 名が他大学へ転出した。平成17年度初めに講師 1 名（確率論）が新しく着任したので平成17年度から欠員 4 名，現員17名の講座運営になっている。専門分野の内訳は，数学教育学 4 ，代数学 3 ，幾何学 3 ，解析学 3 ，位相数学 1 ，確率論 3 である。

本講座の担当学生数は，初等教育教員養成課程算数専攻37名，中等教育教員養成課程数学専攻14名，情報教育課程情報数学履修モデル30名の計81名と規定されているが，学生現員は学年によって多少ばらつきがある。今年度学生数は以下の通りである。

	算数専攻	数学専攻	情報数学	計
平成13年度入学生	41	15	17	73
平成14年度入学生	42	15	19	76
平成15年度入学生	38	15	33	86
平成16年度入学生	43	14	36	93

本講座は，論文発表や学会参加以外にも多岐にわたる研究活動や啓蒙活動を展開している。列挙すると，検定教科書の編集作業への参加，各種教育実践研究会への参加と助言，学長裁量経費によるブックレットの執筆，公開講座の開講，合宿形式の授業研究会の開催，附属学校との連携，

数学教育改善のための国際協力等である。これらのうちいくつかについて以下に述べる。

1　ブックレットの執筆

本講座は平成13年度より学長裁量経費により理科教育講座との共同で，自然科学の啓蒙を目的としたブックレットを発行している。現在，第３号まで発行。既刊の第１号，第２号は全国主要公立図書館へ寄贈している。さらに中学・高校での発展的授業の教材としての活用を検討中である。

2　公開講座の開催

平成16年度の公開講座

・小学校教員向け：「算数好きにする授業力，パート２」（６月19・20日）志水

・教員及び一般向け：「数学再入門」（10月２・16日）金光他３名

3　合宿形式での授業研究会の開催

本講座では過去20年以上継続して，新城市の小中学校における合宿形式の授業研究会を行ってきた。平成16年度も志水，小谷，蒔苗教員の指導のもと，大学院生・学部生30名余りが参加した授業研究を行った。

4　附属学校と連携した活動

教育実践総合センターと附属学校園との共同研究会に本講座教員数名が参加した。附属小中高等学校で行われる研究発表会に多数の教員が参加し，指導・助言を行った。この他に，本講座と附属学校の教員で学校数学研究会を運営し，講演や研究会での指導・助言を行った。

5　数学教育改善のための国際協力

国際協力機構（JICA）のプロジェクト「カンボジア理数科教育改善計画」（1999年８月～2005年３月）が最終年度を迎え，これまで同プロジェクトに関わってきた浦田，石戸谷，鈴木，小谷の各教員による支援の成果が最終資料にまとめられた。

また，さらに継続して，カンボジアのカリキュラム・教科書開発を内容とする第２段階のプロジェクトが2005年度に開始される予定となっているが，2004年度に行った準備協議においても，数学教育講座の教員は重要な役割を果たしており，プロジェクト実施に際しても中心的な役割を担うものと思われる。

情報教育講座

本講座は，旧情報科学選修のスタッフに旧数理科学選修のスタッフの一部を加え，2000年４月に発足した。さらに学内共同施設である情報処理センターの定員も抱え，2005年４月において，教授４名，助教授７名，講師２名，助手２名で構成されている。講座スタッフの研究領域は，教育工学，情報教育，情報処理，情報基礎，メディア開発，認知科学，計算機・ネットワークと多岐にわたるが，考え方や必要な知識に共通点も多く，領域の垣根を低くし，意見交換の機会を増やしながら，研究及び教育の充実に努めている。

教育においては，本講座は，情報教育課程に携わっている。数学教育講座と連携し，情報と数学の教育者や，社会において情報科学の分野で活躍できる人材を育成している。情報教育課程の学生定員は90名である。学生は，２年生進級時に，情報教育，メディアコミュニケーション，情報数学の３モデルに分かれる。本講座は，主として，情報教育及びメディアコミュニケーションモデルの学生（約60名）の教育に責任を負っている。

また本学では，課程等に関係なく，入学者全員に対して情報リテラシ教育を行っている。本講座は，この教育の企画・運営等に関して，中心的な役割を果たしている。

さらに，本講座のスタッフは，各附属学校に導入されているコンピュータネットワークやシステムの保全や改良に大きく貢献している。

理科教育講座

平成16年度（2004）の理科教育講座は，物理学領域８名，化学領域８名，生物学領域９名，地学領域９名，及び理科教育領域４名の５領域からなる教員数38名で構成された大講座である。講座の定員は41名であるが，昨年度定年を迎えた３名の教員補充が１名だけにとどまり，また，本年度で定年を迎えた２名の教員補充も１名であったため，この間教員数の減少傾向が続いており（2005年度は37名の予定），各専門領域での学生指導に支障をきたしつつある。このような状況ではあるが，各領域における教員の研究レベルは高く，科学研究費や各種団体からの研究交付金の受給者も多く，国際的に活躍している研究者が目白押しである。また教育大学特有の研究費に恵まれない状況の下でも特許申請もなされている。高度な専門的知識を評価されて，教育関係のみならず各種公共団体等の専門委員として社会的活動にも貢献している。

本講座は，初等教育教員養成課程の自然系理科専攻と中等教員養成課程の理科専攻，および環境教育課程の学生数140名の教育を担当しており，それぞれの課程に沿ったカリキュラムの充実を図っている。また、卒業研究では高度な研究指導により，教育界，産業界はもとより，本学大学院のみならず他大学大学院の進学も含めた優秀な人材育成を実現している。本理科講座のもとにある大学院は，夜間大学院等，現職教員をも視野に入れた理科教育学領域と理科内容学領域，及び学校教育学専攻総合教育開発分野環境教育領域を併せ持つ充実した教育・研究体制が敷かれている。下記に記したのは，理科教育講座の各領域の教員が現在進めている主な研究テーマである。

物理学領域

○ニュートリノ振動実験
○素粒子論的宇宙論
○ニュートリノ・エマルジョン反応の研究
○強相関電子系の物性
○摩擦と超潤滑
○細管内を伝播する強い分散音波
○半導体光物性
○複雑電子化合物の安定化機構の研究

化学領域

○簡易環境分析法の開発と実践
○プロテオグリカン硫酸化の生物機能
○硫酸転移酸素の生物学的意義解明を目的とした糖鎖の合成
○理論化学計算を用いた有機金属錯体の反応機構に関する研究
○有機金属ナノクラスターの創製：構造と機能制御
○金属錯体の反応性に関する研究
○金属錯体や有機金属化合物の機能と構造
○生物発光機構化学発光機構，及びその関連物質の科学的研究

生物学領域

○魚類色素胞の一次反応に関する研究
○ラン科植物の増殖と栽培に関する研究
○日本列島の維管束植物の多様性とその保全
○高等植物のポリアミン代謝酵素に関する研究
○マメ科植物と根粒菌の共生機構
○ゾウリムシの無菌培養に関する研究
○昆虫の受精及び単為発生のメカニズム

○日本産維管束植物の分子系統と種分化
○植物の種間雑種及び三倍体形成機構に関する研究

地学領域

○大気中の超低周波音波及び重力波に関する研究
○森林生態系と地形地質との関係に関する研究
○帯状流の変動指数と異常気象の関係に関する研究
○局所銀河群の起源と力学に関する研究
○新第三紀・第四紀の脊椎動物化石と層序の研究
○領家帯の熱史に関する研究
○ブラックホール周辺における天体現象の理論的研究
○大陸地殻構造に関する研究
○地質調査と磁気測定による地質岩石科学の探求

理科教育学領域

○自然科学概念構成の国際比較、環境教育国際協力：特に日・タイ間の比較研究及び国際協力の実践的研究
○理科教育論、生物教材研究、及び学校と博物館研究
○新科学哲学からの理科教育方法論再考
○理科のカリキュラム開発研究（特にエネルギー教育）、理科デジタルコンテンツ開発と評価、理科の授業研究、及び理科教師教育の検討

音楽教育講座

平成16年度は次のような専任教員10名によって講座の教育・研究・運営が行われた。

音楽科教育学・弦楽器：教　授　村尾忠廣
管楽器：助教授　新山王政和
応用音楽学：助教授　小泉恭子
ピアノ：教　授　栗原一身
教　授　隈本浩明
教　授　武本京子
声楽：教　授　中川洋子
助教授　林　剛一
作曲・音楽理論　：講　師　橋本　剛
音楽学・音楽科教育学：教　授　滝沢達子

〔教育活動〕

教育面においては将来原則的に教師を目指す学生にとってより豊かな実践的学習となるよう各教員の専門分野を十分に活用しながら試行錯誤を繰り返しつつ，魅力あるそして何よりもわかりやすい教育及び指導に努めている。

〔教員の研究及び活動の概要〕

（論文・演奏等の詳細は第８章　教員の教育研究活動を参照のこと）

村尾忠廣（音楽科教育学）は先年度にひき続き国内外の音楽教育学会の要職にあり，数々の学会の開催及び運営にあたっている。研究発表・講演も活発に行われ，その一連の内容は科学研究費による研究「視覚フィードバックにおけるフラットシンギングの測定と治療法の研究」に関するもの，和洋折衷の唱歌の構造に関する研究等である。教育面においては，音楽科教育法の授業で課程認定審査委員による非常に高い授業評価を受けた。

新山王政和（音楽科教育学）は動作タイミングとビートの関係に関する分析的研究，音高ピッ

チの知覚に関する分析的研究　教育現場の教師と共同で行った授業研究等について論文を発表し，其の内の一本がコニカミノルタテクノロジーセンターより「イメージングに関する研究論文」優秀賞を受賞した。演奏分野では，派遣依頼を受けてオーケストラにおいてファゴットの演奏活動を行った。

小泉恭子（音楽科教育）現在の主な研究テーマはポピュラー音楽とジェンダーに関してである。

栗原一身（ピアノ）は学部及び大学院におけるピアノ実技教育の充実に専念した。

隈本浩明（ピアノ）は声楽・管，弦楽器とのアンサンブルにおける楽曲の解釈，ピアノ奏法の研究を行っている。

武本京子（ピアノ）はウィーンフィルハーモニー首席クラリネット奏者エルンスト・オッテンザマー氏とデュオリサイタルを４ヶ所で行い，ウェーバーとシューマンのクラリネットとピアノのための作品で「グランドデュオ」のＣＤを制作し、各紙で推薦ＣＤに選ばれた。「楽曲イメージ奏法」研究会を開き，音楽と文学と美術を融合して奏法を導く「楽曲イメージ奏法」の研究発表も行った。その他，名古屋市文化振興事業団評議員，公開講座など社会活動も活発に行った。

中川洋子（声楽）は日本歌曲，ドイツ歌曲を中心に研究を行い演奏発表のみならず小・中学校での歌唱指導等の活動を通して研鑽に努めている。また介護施設等でのボランティアコンサートも行っている。

林剛一（声楽）はソロをはじめ，オペラ・宗教曲等の分野での楽曲の解釈・分析を深め，演奏活動を通じて研鑽に努めている。

橋本剛（作曲）は合唱曲や器楽曲・劇音楽などを作曲。東京・愛知・大阪・福岡・長崎各地での発表を通して自らの方法論追究に努めている。

滝沢達子（音楽学・比較音楽教育学）はタイのマヒドン大学主催の国際音楽教育セミナーに招かれキー・ノートスピーカーとして「音楽教育の哲学」「日本における音楽教育」など４トピックの講演とワークショップを行った。またロシアモスクワ教育大学主催の「優秀な音楽教員の育成」のシンポジウムに招かれ国際音楽教育学会の改革委員の一員として「グローバル社会における音楽教育―日本のケース」を講演し，かつ同国西シベリアのカンティマンシスク芸術教育センターで日本の伝統音楽教材のワークショップを行った。

〔社会的活動〕

・附属学校及び各地域教育研究大会における助言者。
・本大学連帯事業の一環としての学校支援で小・中学校からの依頼による合唱指導。
・院生有志による小学校，介護施設等への訪問で歌唱及び器楽の指導と演奏を行った。

〔その他の行事〕

・ ５月に恒例の新入生合宿研修を洲原池に隣接する勤労福祉会館にて行った。
・12月にはこれも恒例の講座主催学内演奏会を行った。
・年を越して３月には名古屋電気文化会館コンサートホールにて，平成16年度卒業・修了演奏会を行った。今回は新任教員橋本剛氏作曲による合唱曲も披露され，より充実した内容となった。

美術教育講座

本講座は，美術科教育・絵画・版画・彫刻・デザイン・プロダクトデザイン・工芸・陶芸・漆芸・織・金属造形・ガラス造形・西洋美術史・日本美術史を専門とする教員で構成されている。今年度の転退出者や新任者はなかった。

教育面においては，初等教育教員養成課程芸術系図画工作専攻，中等教育教員養成課程美術専攻，生涯教育課程造形文化コースに所属する学生の教育，及び大学院芸術専攻美術領域の教育と研究指導を担当している。

芸術は人間の重要な精神活動のひとつであるが，本講座では，造形美術における創造的な意味

と価値を，表現行為や歴史的側面を中心とした幅広い思索，人間の成長や営みへの考察を通して希求することを目標にしている。各教員の多岐にわたる専門分野のうち，美術科教育分野は人間の成長・学習過程と美術の関わりを探求し，美術・工芸の実技制作分野は制作表現活動を通してその創造的価値の実現を図るものである。また，美術史分野は，過去に制作された作品の歴史的意味を解明するとともに，他者や自己の文化的基盤の理解を目指している。現代社会においてもますます重要性を増している美術について，多面的かつ具体的に取り組んでいるのが本講座の研究活動である。

2004年度末には，美術科卒業・修了制作展が名古屋市博物館において，また造形文化コース卒業制作展が名古屋市中区市民ギャラリーにおいて開催された。

保健体育講座

本年度は，本学の大学法人化の初年度にあたり，大学全体の機構・制度の変革につれてやはり大きく様変わりした。中でも今までは民主主義尊重のもと，大学全体の合意に至るまで教授会で慎重に議論を積み上げてきた。そのためには多くの委員会で原案作成のための労力が費やされ，20名いる当講座教員の約半数は何らかの委員会に所属し，会議会議が続く有様であった。しかし，本年度からは教授会は年４回に減り，多くは評議会の審議，大事なことは役員会等上部組織の意向で大学が運営されるようになり，会議は大幅に減った。だが講座代表が評議員を兼ね，その中でまた各理事のもと委員会を構成，その下の専門委員会にも所属して細々とした実務をこなすかのような実態が現れ，校務負担の偏りが出てきたように見える。大所帯ともいえる当講座からは２名の評議員がこれにあたっているが，講座運営と絡め，全体のバックアップの必要性がある。

教育体制については，教員養成課程の学生と学芸課程（生涯教育；スポーツ・健康）の学生の両方にわたって，全教員が係わる体制をとっている。学生にとっても，講義，実技の合同授業等で同じ講座の学生として一体感が芽生えていることと思う。これは５，６年を経る最新の大学改革から一貫しており，全学でも誇ってよい講座体制といえる。

教授組織としては，大学院研究科のうち，「体育科教育学」のマル合教授の定年退官後の補充が数年にわたって滞っていた。採用募集人事は３度繰り返されたが結実せず，外からの招聘をあきらめ，内部の運動学領域より吉田正教授に移籍を依頼して，ようやく欠陥を解消することができた。（その後は同じ体育科教育学の，教授ではなくて若手助教授または助手の募集に切り替えて採用人事をすすめている）

講座構成員の研究活動・業績等は後述第２節の研究成果の保健体育講座を参照されたい。

技術教育講座

技術教育講座は，学部における技術専攻及び大学院教育学研究科における技術教育専攻の教育担当教員で構成されている。

本専攻で行われる技術教育の理念は，技術科教員として不可欠な学問的専門内容の修得と共に，技術的課題解決力（合理的な手法によってものを作り上げる力）などの実践的能力を育成し，併せて社会的に有為な人間形成を図るところにある。したがって，所属教員の研究も技術教育に関わった内容が中心となっているが，学生の進路は教育界のみでなく，産業界にも進出しているため，広範囲な対応を図っている。

講座の抱える専門領域は，木材加工，金属加工，電気，機械，栽培，情報及び技術科教育法と広範囲にわたっている。したがって研究内容も多岐にわたり，ますます進歩・発展しつつあるコンピュータ・情報通信技術（ＩＴ）から自然環境を考慮した農作物の生産をも視野に入れながら，エネルギー変換・制御・利用技術や各種の材料の加工技術など生産活動の基盤となる様々な技術を対象とすることはもとより，技術と地球環境との関わりや成長期にある子どもの知・情・意に

わたる全面的な発達を促す上で有効な学習課題と考えられる各種の技術についても重要な研究教育対象としている。同時に，技術教育の授業分析を進め，技術科教員として必要不可欠な実践的指導力を育成するための教育活動を行っている。

さらに，本講座の持つ技術に関する専門的造詣を国際的にも活かすべく，国際協力機構（JICA）に協力し，開発途上国の技術教育指導者の研修をも研究活動の対象としている。

家政教育講座

本講座の教育研究領域は，食物，被服，住居，家族，家庭経営，保育，生活環境，家庭科教育という，生活に関わる広範囲の分野を扱っている。各領域ごとに，独立した教育研究の体系を形成しているが，それらを「生活」という視点から総合化した構成を行い，教員相互が領域を超えた協力を行っている。今日の生活にみられる問題を積極的に取り上げ，発生する要因，メカニズムを明らかにし，解決する筋道を構想するという，実践的で科学的な分野であるため，社会的な期待も大きい。

研究成果は，自治体の生活関連施策やまちづくり，地域の商品開発や生活改善，教育現場の授業改善などに生かされている。また，社会の現場と連携した場に院生・学生も参加することを通じて，実践的な教育内容としている。

平成16年 4 月の構成は，教授 6 名，助教授 6 名，計12名となった。平成16年度には，家庭科教育領域・助手 1 名の公募を実施した。しかし，少子化の状況の中で重要さを増している保育領域の担当者は不補充のままである。

本講座に所属する教員が行った研究成果の一部と，修士論文の梗概，卒業研究の題目は，平成17年 3 月に発行した「家政教育講座研究紀要　第36号」にまとめられている。

第２節　研究成果の公表と活用

（本学における学会の開催/講座間の共同研究/学内講演会及びシンポジウム/研究雑誌の発行など）

生活科教育講座

１　本学における学会の開催

⑴　日本生活科・総合的学習教育学会愛知県支部の例会を３回開催し，県内会員の生活科及び総合的学習の研究に寄与した。

第１回（５月８日）野田敦敬　講演「生活科学習の改善に向けての調査研究」約50名参加

第２回（７月23・27・28・29日の午後）全教員　県内より延べ約50名参加

討論会「生活科の授業の在り方，年間計画の立案，評価など」

第３回（２月19日）県内より約30名参加　修士論文発表会

・３名の修士論文の発表及び質疑，教員からのコメント

⑵　平成13年４月より，日本生活科・総合的学習教育学会の事務局を本講座スタッフが担当しており，平成16年度も年次大会（高知大会）の開催に尽力した。

２　講座間の共同研究

⑴　大学・附属学校共同研究会における研究

幼児教育及び小学校低学年教育分科会において，久野教員を中心にして，幼児教育講座教員及び附属幼稚園教員などと共に数回研究会を開催し，幼小連携の在り方について研究を深めた。生活科分科会においては，野田教員がとりまとめを行っている。

⑵　他講座学生の卒業研究指導への協力

野田敦敬：自然系理科教育領域の学生４名の指導

中野真志：人文系哲学専修の学生５名の指導

３　学内講演会及びシンポジウム

公開講座「総合学習の実践的課題に応える」での講演

2004年６～７月　布谷光俊，野田敦敬，中野真志，久野弘幸が各１回ずつ担当

４　研究雑誌の発行

他大学教員，本講座教員，大学院生，県内小学校教師など13本の論文を掲載した本講座研究紀要『生活科・総合的学習研究』第３号を発行し，全国，県内の研究者及び小学校教師に配布した。

障害児教育講座

１　本学における学会の開催

講座が主催した学会はない。

２　講座間の共同研究

本講座の教員が治療教育センターと情報処理センターにそれぞれ１名，兼任している。治療教育センター発行の「治療教育学研究」には，兼任教員の他に講座教員も論文を投稿し，成果を公表している。

３　学内講演会及びシンポジウム

本講座の教員が「愛知教育大学ＬＤ研究会」，「愛知・特別支援教育フォーラム」を開催している。また，本講座教員が「聴覚言語障害研究会」の事務局を担当し，年四回，研究会を開催し，学外関係者との連携を取りながら地域貢献している。

４　研究雑誌の発行

講座教員の個人研究，共同研究等を「障害者教育・福祉学研究」において報告予定である。

幼児教育講座

1　本学における学会の開催

2004年度はない。

2　講座間の共同研究

「幼・小連携」は幼児教育における重要なテーマの一つであるが，生活科教育講座に協力を得て，附属幼稚園の教員と幼児教育の実践を中心に数回研究会を開き，共同研究を行っている。また，講座単位ではないが，村岡教授は技術教育講座，養護教育教育講座教員との共同研究で全国的調査を継続している。

3　学内講演会及びシンポジウム

「歌はどこからやってくるか――乳幼児の自発的歌唱行動から」の演題で，金城学院大学南曜子氏による講演会を開催した。（平成17年 2 月 7 日）

4　研究雑誌等の発行

今年度は講座紀要　愛知教育大学「幼児教育研究」第12号　2005年 を刊行した。

養護教育講座

1　本学における学会の開催

2004年度はない。

2　講座間の共同研究

講座間では個人レベルでの共同研究は継続しているが，講座全体での共同研究で2004年度に発表したものはない。

3　学内講演会及びシンポジウム

講座が主催したものはない。

4　研究雑誌等の発行

1996年度より「卒業研究論文集」を編集発行しており，2005年 3 月に第 8 巻を発行した。

5　教育研究活動

講座全教員，附属養護教諭及び教育委員会メンバーによる「養護教諭養成課程のカリキュラム等」の研究プロジェクトを立ち上げ，教育改善経費（学長裁量経費）としても採択され鋭意研究をすすめている。

また，養護教育学・看護学教員による「あいの会」の研究活動は長期にわたり実施しており，2004年度も年に数回実施し，現職の養護教諭との共同研究や現職の養護教諭の研究指導に貢献している。

学校教育講座

1　本学における学会の開催

2004年度には，教育学分野において以下の学会が開催された。

日本カリキュラム学会第15回大会

開催期間　2004年 7 月 3 ～ 4 日

準備委員会委員長　寺西和子

2　講座間の共同研究

2004年度には，講座間での共同研究は行っていない。

3　学内講演会及びシンポジウム

2004年度には，学内講演会及びシンポジウムは行っていない。

4　研究雑誌の発行

本講座としては研究雑誌を発行していない。

教育臨床学講座

1　本学における学会の開催

平成16年度は開催していない。

2　講座間の共同研究

本講座は，学校教育臨床専攻の主幹講座であり，同専攻の運営は本講座を中心としながら，学校教育講座，教育実践総合センター等，講座間の協力のもとでなされている。そのために同専攻の活動，特に教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ及び教育臨床実習Ⅰ・Ⅱにおいて行われる事例研究は，実習という形態をとりながらそれぞれの講座の教官の出席のもとに共同研究という形になっている。その成果は毎年発行される「愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室紀要」として結実している。

3　学内講演会及びシンポジウム

本学を卒業，終了した臨床心理士並びに，本講座が中心となる学校教育臨床専攻の修了生，在校生を対象とした，「愛知教育大学心理臨床家の集い」の開催及び運営に本講座，専攻の関係する教員がその任にあたった。参加者は100名を超えた。

4　研究雑誌の発行

本講座を中心とした学校教育臨床専攻と，教育実践総合センターとの共同編集として，「愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室紀要」を毎年発行しており，平成16年度は第６号を発行した。

国語教育講座

1　本学における学会の開催

特になし。

2　講座間の共同研究

国語教育講座・社会科教育講座，地域社会システム講座に所属する教員有志によって日本文化研究の研究史を発行している。

3　学内講演会及びシンポジウム

開催日　平成16年12月２日

演　題　文体解析からみえるもの

講　師　古瀬　順一氏（聖徳大学教授）

要　旨　文体研究の一手法として計量的に文体を解析する方法があること，またその分析によってどのような知見が得られるかということについて，川端康成の諸作品や日蓮遺文を取り上げながらご講演をいただいた。読点や助詞の用法に「個の属性」が表れること，また計量分析の結果を「顔形グラフ」により系統性を視覚的に分かりやすく示し得ることなど，学生が興味を持ちやすく，かつ内容理解をしやすいよう配慮されたお話であった。

4　研究雑誌の発行

⑴　『国語国文学報』63号，愛知教育大学国語国文学研究室発行。（毎年１回発行）

⑵　『日本文化論叢』13号，愛知教育大学日本文化研究室発行。（毎年１回発行）

⑶　『愛知教育大学大学院国語研究』13号，愛知教育大学大学院国語教育専攻発行。（毎年１回発行）

日本語教育講座

1　本学における学会の開催

平成17年２月11日㈮に愛知教育大学国際教育学会第４回研究大会を本学において開催した。本

学会は，日本語教育コース，大学院国際理解教育領域の卒業生・在学生等を中心に結成され，事務局を本講座内においている。平成16年度は学術講演会との合同開催とし，大学院生 4 名が研究発表を行い，学内外から58名の参加者があった。

2　講座間の共同研究

講座全体としての共同研究ではないが，以下の公開講座の開催にさいして外国語教育講座との間で研究協力が行われた。

⑴「コミュニケーション重視の英語教育のあり方」
⑵「小学校での効果的な英語教授法」
⑶「ネイティブの先生を通して世界を知ろう」

3　学内講演会

平成17年 2 月11日㈮に愛知教育大学国際教育学会と共催で次の学術講演会を開催した。
講師：名古屋大学教授　釘貫　亨氏
演題：五十音図と日本語研究

4　研究誌の発行

『日本語教育と異文化理解』第 4 号（愛知教育大学国際教育学会）を発行した。日本語教育コースの卒業生，及び大学院国際理解教育領域の大学院生等を中心に国内外から10本の論文が寄せられた。

社会科教育講座

学会

「愛知教育大学社会科教育学会」
学会・総会を2005年 2 月19日に実施。
第 1 部で 5 名の院生の研究発表があった。
飯味加菜子：「紛争解決能力育成のための実践的社会科教育―戦争と平和を教材として―」
金成龍：「中国の中学校における法関連教育のカリキュラムの研究―日本中学校社会科教育を視野に入れつつ―」
中山陽介：「歴史学習にとっての見地の意義― J . フーンの『歴史教授学』に示唆を得て―」
村木俊介：「『先見』を育成する社会科教育の一考察」
楊姫延：「歴史学習における中日戦争（日中戦争）認識―中国と日本の歴史教育の比較から―」
第 2 部では魚住忠久会長が最終講義「グローバル教育の20年―回顧と展望―」を行った。魚住研究室出身者たちを筆頭に，講義を聴くために会場に集まったのは200名という多数の人々であり，201講義室は満員となった。

舩尾日出志

「愛知教育大学哲学会」（会長：渡辺和靖）
2004年 8 月28日㈯に公立学校共済組合蒲郡荘において、研究大会を開催した。以下の発表があった。
「カントにおける「自己」概念」佐藤明徳
「西洋近代における情念論の系譜」吉田健太郎
「愛知教育大学歴史学会」（会長：目黒克彦）
2004年度の学会において以下の研究報告と講演が行われた。

研究報告

①「古代の都城と『氏寺』」永谷巧（藤岡町立中山小学校）
②「フランス第三共和政下のフリーメイソンとフェミニズム」見崎恵子（愛知教育大学）

講演

「日本の荘園制はなぜ教えにくいか」岡野友彦氏（皇學館大学文学部）

機関誌

『哲学と教育』（ISSN 288-2558）第52号（2004年 3 月31日）

①「子供の問題行動の歴史についての一考察」西谷寿

②「教養教育模型（刈谷モデル2005）――因果律模型と諸学の統一模型――」加藤雅弘

③「戦争と平和をどう語ってきたか⑴」野田隆稔

④「金子みずゝの初期作品とその思想」石黒景子

⑤「長野まゆみ　初期作品研究」菅野まり子

⑥「土田杏村の初期思想――「入信問題」を中心に――」川合大輔

⑦「萩原朔太郎研究・補遺（そのⅡ）」渡辺和靖

『探究』（第15・16合併号）を2004年11月 6 日に発行（愛教大で開催された日本社会科教育学会の研究大会に併せて）。

「グローバル化する地域・国家・世界と教師」と銘打つ特集号であり，魚住忠久氏の巻頭言（特集テーマに寄せて）以下，我が国のみならず韓国，ドイツ，アメリカ，インドネシアからも玉稿が寄せられた。

地域社会システム講座

（地理学専修）

1　本学における学会の開催

2004年 6 月に，愛知教育大学地理学会を本学において開催した。本学会は旧地理学教室（現地理学専修）に事務局を置き，学会員（330名ほど）の会費により運営されている。毎年この時期に，学会総会及び学術発表会を開催し，今年度は次の 2 つの学術発表が行われた。

山本朋宏（愛知教育大大学院）：高齢者の生活環境に関する地理学的考察
－岡崎市を事例として

橋本　宰（知立市立八ッ田小学校）：小学校における地域地図を活用した社会科学習
－小 6「江戸時代の池鯉鮒」の実践を通して

2　学内講演会

2004年 6 月に，愛知教育大学地理学会大会と連動させて，本学において学内講演会を開催した。講師は，椙山女学園大学の季増民氏で，演題は，「中国の工業発展と地域変貌」であった。スライドを用いながら，分かり易く中国の工業発展に伴う地域の変化をお話しいただいた。

3　研究雑誌の発行

地理学専修に事務局を置く愛知教育大学地理学会は，毎年 2 冊の学術雑誌「地理学報告」を刊行している。2004年度は 6 月に第98号（総頁69ページ〉，12月に99号（総頁64ページ）をそれぞれ刊行した。それぞれの内容は次の通りである。

「地理学報告」第98号

論　説　安積紀雄：東京湾における営業倉庫の立地

寺本　潔・山口美穂子：沖縄県石垣島白保における子どもの知覚環境の構造
－写真投影法を中心として－

季　増民：上海大都市圏における工業団地の形成と地域の変貌
－江蘇省昆山市を事例にして－

「地理学報告」第99号

論　説　北川博史：インドにおけるIT産業の地域的展開

北田晃司：主要都市の人口およびその増加率からみたトルコ・イランの都市システム

山野明男：干拓地における土地利用の変更と営農の特色

－岡山県笠岡干拓地を事例として－

紀　行　山田正浩：韓国調査旅行記－'03年８月のフィールドノートから

なお，「地理学報告」は，会員のみならず学内80余の研究機関・図書館などに寄贈しており，交換としてこれら機関より各種の地理学関係の研究誌や報告の寄贈を受けており，研究・教育に役立てている。

（法経社専修）

１　本学における学会の開催

特になし。

２　講座間の共同研究

特になし。

３　学内講演会及びシンポジウム

特になし。

４　研究雑誌の発行

『社会科学論集』第42・43合併号を発行（2005年３月）。

（国際社会）

１　本学における学会の開催

特になし。

２　講座間の共同研究

特になし。

３　学内講演会及びシンポジウム

特になし。

４　研究雑誌の発行

『社会科学論集』第42・43合併号を発行（2005年３月）。

（日本文化）

研究雑誌の発行

『日本文化論叢』第13号，2005年３月刊。（この研究雑誌は，国語教育講座・社会科教育講座・地域社会システム講座にまたがる教員により発行されている。）

外国語教育講座

１　本学における学会の開催

愛知教育大学英語英文学会第11回研究発表会が2004年９月18日に本学講堂会議室において開催された。出席者30名。修士論文中間報告会に続いて４件の研究発表が行われた。

２　講座間の共同研究

特になし

３　学内講演会及びシンポジウム

⑴　日時：2004年11月26日
　　場所：第二共通棟421教室
　　講師：神谷昌明（豊田高専教授）
　　演題：「コーパスを利用した英和辞典編纂」

４　研究雑誌の発行

⑴　愛知教育大学英語研究室より『外国語研究』第38号が発行された。執筆者５名。

⑵　愛知教育大学英語英文学会よりCLARITAS Vol.18が発行された。執筆者４名。

数学教育講座

1　本学における学会の開催

・第35回　愛知教育大学数学教育学会研究大会

日時：平成16年12月11日㈯

場所：愛知教育大学自然科学棟

主催：愛知教育大学数学教育学会

（協力：愛知教育大学，数学教育講座，後援：愛知県教育委員会）

愛知県内を中心とする小学校，中学校，高等学校の教員が集まって授業実践研究を発表・討論しあい，本講座教員が講演の他指導・助言を行った。特別講演として奈良教育大学教授重松恵一氏の「メタ認知の育成と算数・数学教育」があった。

・第16回高校数学発展研究会　研究発表会及び特別講演会

日時：平成17年２月13日㈰

場所：愛知教育大学自然科学棟数学共同研究室

愛知教育大学卒業生を中心とする高等学校教員で組織された研究会。特別講演は勝野元薫氏（南山国際高等・中学校教諭）による「古代の数学に学ぶ―てこの原理で積分を―」

2　講座間の共同研究

平成16年度はなし。

3　学内講演会及びシンポジウム

平成16年度はなし。

4　研究雑誌の発行

愛知教育大学数学教育学会誌「イプシロン」第46巻

情報教育講座

1　本学における学会の開催

なし

2　講座間の共同研究

なし

3　学内講演会及びシンポジウム

本講座の中西は，平成16年12月，愛知教育大学附属高校との連携協力の一事業である「アカデミック・クエスト講座」において講師を務めた。高校生に大学講義レベルの内容をわかりやすく話し，教養を身につけてもらうとともに進路選択にも役立ててもらおうという目的の講座である。「パソコン雑学講座（コンピュータはストーブだった?!）」というタイトルで，コンピュータの歴史の紹介から始まり，パソコンの組み立て体験も行い，大変好評であった。

本講座の江島と梅田は，愛知教育大学公開講座「学校におけるホームページ制作演習―デジタルビデオによる情報発信を中心に―やさしいWebページ講座」を行った。

JICA国別特設サウジアラビア「学校教育改善」コースに，本講座の江島，梅田，安本が携わった。江島は，コースリーダー及び講師を務め、Computer-Assisted Instruction and Computer-Assisted Instruction Systems in Japan という題目で講演を行った。梅田は，講師を務め，Information Education at Senior High Schools in Japan about the general subject “Information” という題目で講演を行った。安本は，講師を務め，Maintenance of School Computers and Network Systemsという題目で講演をした。

本講座の安本は，JICA集団研修産業技術教育IIの講師を務め，Spread of the Internet throughout Japan and the Internet Technology という題目で講演をした。

本講座の，平田，安本，野崎，江島，梅田の共同研究として，「アジア諸国等におけるITを利

用した遠隔教育プロジェクト」が，2004年度プロジェクト経費（学長裁量経費）のG.P.等先行投資型プロジェクト経費に採用され，成果をあげた。このプロジェクトは，2005年度にも継続して研究が行われる。

本講座の中津・野崎は，昨年度に引き続き，学校教育講座の多鹿秀継氏が代表者である科研費「子どもの算数問題解決と転移を促す知識の構成の分析と支援に関する研究」（基盤(B)(2)）に研究分担者として参加し，主に，自己説明による算数文章題の解決支援を行うためのコンピュータプログラムの研究を行った。

本講座の竹田は，平成16年11月に附属高校シンポジウム・ 情報分科会において共同研究者（従来の「助言者」）を務めた。この分科会には学内外からの多数参観者があり，大変盛況であった。

本講座の竹田は，本学附属高等学校において平成15年度から実施された普通教科「情報」の授業研究を，附属高校の野田教諭・稲垣教諭・富安教諭らと前年度の経験と反省を土台として平成16年度も継続的に行った。具体的には，TT（Team Teaching）における本課程学生のTA（Teaching Assistant）制度の企画と導入・運営，年間 3 回の授業研究会，関係教官とTAとによるメーリングリストでの授業カリキュラムと実施の議論等を行った。また，情報交換システムとしてWikiを導入し授業情報の収集・蓄積や，本講座の竹田・高橋が開発開発した相互評価システムを使用した授業実践を行うなど新しい試みを初めた。なお，この授業実践の成果をまとめた，『相互評価システムを利用した教科「情報」の授業実践』（吉田（M1），竹田，野田，高橋共著）の論文は，第67回情報処理学会全国大会奨励賞を受賞した。

4　研究雑誌の発行

情報分野には，多くの学会がある。それぞれの学会活動は非常に活発であり，多様な論文誌を発行している。本講座のスタッフは，相互に，アイディア等について情報交換や議論は行うが，研究領域が多岐にわたるため，成果の発表はそれぞれに適した論文誌上で行っている。そのため，講座としては研究雑誌を発行していない。

音楽教育講座

1　本学における学会の開催

なし

2　講座間の共同研究

平成16年度共通科目プロジェクト「人間と性のカリキュラムと教材の開発」の報告書を作成。

3　学内講演会

なし

4　研究雑誌の発行

なし

美術教育講座

1　本学における学会の開催

2004年 9 月，造形文化コースにおいてGlass Educator Network（ガラス教育者ネットワーク）全国大会を開催し，全国から約500人が参加した。

2004年 9 月，知立市文化会館にて，ちりゅう芸術創造協会の主催，愛知教育大学・知立市・知立市教育委員会の共催で，展覧会「ガラスアート博覧会in知立2004」を開催した。

2　講座間の共同研究

特になし。

3　学内講演会及びシンポジウム

なし。

4　研究雑誌の発行

2004修士論文・修了関連論文概要・修了制作作品集

保健体育講座

1　本学における学会の開催

○愛知教育大学体育学会

・総会及び講演会　6月19日㈯開催

講演は「体育科教育の基本的研究課題を考える」の演題で，兵庫教育大学名誉教授　小林篤先生にお願いした。

講演要旨：「心と体を一体としてとらえる体育」とは。「体ほぐしの運動」の小中高一貫のカリキュラム試案。運動の楽しさや喜びを味わう体育の実践研究例提示。体育科教育の研究課題について今後の展望。

・研究発表会　11月20日㈯開催

会員による8題の発表がなされた。日頃の授業実践の中からの貴重な研究成果が，多彩な発表機器を媒介としてリアルに発表され，活発な質疑がなされた。

なお，本学会は，保健体育講座（旧体育教室）の卒業生を主体とした学会であるが，50年を経過した本年より，より学会としての研究面を強化していく体制がとられており更なる成果が期待される。

2　講座間の共同研究

本年度特に該当する活動はなかった。

3　学内講演会及びシンポジュウム

本年度特に該当する活動はなかった。

4　FD

講座としてのサバティカル制度が用意されてはいるが，これを活用するものはいなかった。大学の法人化初年度，それに伴う学内の変革・整備が落ち着かず，また一方で非常勤時数の大幅な削減により，授業負担の増加，授業運営の見通しがつかみにくいことなどが出にくい要素と思われる。

講座としてのFDへの取り組みは特にしていないが，教員個々では学問研究以外にも実技研修，特に運動系の部活動の指導及びハイレベルな学生選手権大会への参加・指導等，自分の専門性を生かした研鑽をしているものが多くいる。

5　研究雑誌の発行

⑴　愛知教育大学体育学会　研究報告　第56号　2004

巻頭言，研究論文8題，会則，役員，総会報告等を掲載した。（愛知県下教育機関に配布）

⑵　愛知教育大学保健体育講座　研究紀要　No.29　2004

講座員を著者とした研究論文7題，修士論文要旨2題，講座全教員の研究業績一覧（全国の教員養成系大学に送付）

⑶　愛知教育大学保健体育講座　体育・スポーツ・健康卒業論文集　Vol. 17　2004

当講座に所属する初等：生活スポーツ系　体育専攻26名，中等：保健体育専攻7名並びに生涯教育課程：スポーツ・健康コース25名，あわせて58名分の論文要旨を掲載（全国の教員養成系大学に送付）

（いずれの出版物も詳細は現物を参照されたい）

技術教育講座

1　本学における学会の開催

本講座が主催して，平成11年度より行ってきた国際協力機構（JICA）集団研修「産業技術教育」コースが，新たに平成16年度より「産業技術教育II」としてはじまり（2004.6.21-7.30），また，平成15年度より，サウジアラビア「教育カリキュラム開発」研修コースを16年度も 1 ヶ月間開催し（2005.1.14-2.18），開発途上国への支援を鋭意行っている。

大学・附属学校共同研究会（技術部会）を開催した（2004.8.18）。

2　講座間の共同研究

本講座の研究領域は多岐にわたるため，講座全体が他の講座と共同研究をすることは非常に難しい。しかしながら，学際的な研究では研究テーマに応じて幅広く研究グループを構成し，研究活動をしている。

平成16年度から家政学講座の小川正光教授を代表として美術教育講座・技術教育講座の教員が共同で，「環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究」（大学教育研究重点配分経費）を行っている。また，本講座の大西研治教授を代表として情報教育講座・技術教育講座の教員が共同で，「世界約30カ国に向けた教育協力のためのテキスト作成とネットワークの構築」（学長裁量経費）を行っている。

3　学内講演会及びシンポジウム

講座内講演会は，新しい産業技術や教育界の状況をテーマとして毎年行われている。本講演会は主として学生の社会参加のための啓発的な内容となっている。平成16年度は，日程的に厳しいものがあり，開催されなかった。

公開講座として，専修免許修得のための免許法認定公開講座を技術科教員対象に，夏期・冬期休業中に行った。「木材加工教育特論」，「機械教育特論」，「技術科教育特論」の 3 講座を開講した。

また，昨年度に引き続き，平成16年度フレンドシップ事業を，事業名称を「たのしいものづくり」と題して，平成16年10月 9 日㈯～11月27日㈯の 7 週にわたって，7 テーマを地域の子どもを対象に開講した。

さらに，非定期であるが，外国の教育者や研究者が本講座を訪問するごとに，その国の技術教育などに関する話題を中心にした講演会を開催している。例えば，平成16年度は，台湾師範大学・李隆盛教授による「台湾における技術教育」である。

4　研究雑誌の発行

愛知技術教育学会において学会誌「技術研究」を発行してきた。

家政教育講座

1　本学における学会の開催

⑴　平成16年 6 月12日，日本教育大学協会家庭科部門東海地区総会を，ホテルルブラ王山（名古屋市千種区）において本講座の運営により開催した。学習会では「地域と連携した実践」について，各大学で実施している事例紹介と討議が行われた。

⑵　平成16年 9 月19日，日本家庭科教育学会東海地区会の総会・研究会を本学において開催した。研究会では，「工芸作物の栽培ともの作り―天然染料となる作物を育て，羊毛でホームスパンとフェルト作品を作ろう―」と題し，日下部信幸氏（本学名誉教授）による講演と，作品制作指導を受けた。

2　講座間の共同研究

⑴　学長裁量経費・重点教育研究費により，以下の 3 課題を実施している。

①　環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究：利用者が使いやすく自然環境とも

共生した省エネルギー・循環型環境のあり方を，本学の美術・技術・家政棟を対象として具体的に提案しようとしている。

② 食品成分による脳機能の変動に関する栄養学的研究：食品成分であり精神ストレスを軽減することが期待されているGABAと脳機能の関係について明らかにすることにより，学校教育が直面している諸問題の解決に寄与することを目指している。

③ 男女共同参画実現のための高等教育のカリキュラム開発及び学習・研究環境の整備プランの検討：男女共同間隔実現のためのカリキュラムの検討，カリキュラムの提案，学習・研究環境を保障する具体策の立案を行う。

⑵ 平成16年度共通科目プロジェクト研究で，以下の課題を実施した。

「人間の性」のカリキュラムと教材の開発：「人間と性」の授業実践報告，教材開発，カリキュラムの提案などを行った。

3 学内講演会及びシンポジウム

本年度は実施していない。

4 研究雑誌の発行

家政教育講座研究紀要 第36号，2005.3。

第３節　教員の国際学術交流

１　研究者の派遣

平成16年度に従来の「在外研究員」制度が廃止され，新たに「海外先進教育研究実践支援プログラム」として，大学改革推進等補助金制度が発足した。

今まで，「在外研究員」制度は，個人の教授・研究能力の向上を目的としていたものに対して，新たに制度化された「海外先進教育研究実践支援プログラム」は，大学のビジョンの基に学長を中心とするマネジメント体制の下で，教職員を海外の教育研究機関等に派遣し，先進的な研究や優れた教育実践に参画させることにより，教職員の教育研究能力の向上を図り，大学等の教育の改善に資することを目的としている。

対象機関は，従来の「在外研究員」が，国立大学等（国立短期大学，国立高専，大学共同利用機関等）であったものが，公・私立大学等も含めた幅広い機関を対象としたものと変化した。

なお，平成16年度の採択状況は，全国で400件となっており，本学は２件（２名）が採択された。

２　外国人の採用

◇外国人教員◇

職名／国籍	教授	助教授	講師	計	当初採用年月日	任期	分野
フランス共和国		1		1	H６．４．１	任期なし	フランス語・フランス現代社会
連合王国	1			1	H12. ４．１	〃	英語・言語学
中華人民共和国		1		1	H13. ４．１	〃	中国語
オーストラリア		1		1	H14. ４．１	〃	英語科教育
アメリカ合衆国			1	1	H14. 10. １	〃	造形(ガラス美術)
アメリカ合衆国		1（1）		1	H15. ４．１	〃	英語科教育
ドイツ連邦共和国			1	1	H16. ４．１	〃	ドイツ語・ヨーロッパ事情
計	1	4（1）	2	7			

（　）は，女性の人数で内数

◇外国人教師◇

国籍	人数	期間	分野
フィンランド共和国	1（1）	平成２年10月～	造形（染織）
計	1（1）		

（　）は，女性の人数で内数

◇非常勤講師◇

国　　籍	人　数	採用専攻名
連　合　王　国	1	国際文化
大　韓　民　国	2（1）	国際文化
中華人民共和国	3（2）	国際文化
フランス共和国	1	美術
アメリカ合衆国	1	英語
チェコ共和国	1	造形文化
カ　　ナ　　ダ	1	国際文化
計	10（3）	

（　）は，女性の人数で内数

3　外国人研究者の受入

平成16年度は5名の外国人研究者（韓国2名，中国2名，台湾1名）を受け入れて共同研究等を実施した。

また，ODA（政府開発援助）の一環として，独立行政法人国際協力機構（JICA）が実施する集団研修と国別研修を平成16年度においては，年3回実施した。集団研修については，「産業技術教育」研修コースとして，平成11年度から実施しており，平成15年度で5年間の研修期間は終了したが，各国からの強い要望もあり，平成16年度からは，「産業技術教育Ⅱ」として，再スタートした。本研修は，本学が中部地区に立地し，中部地区が日本の産業の中心地であることを活用し，講義に加えて企業見学等を組み入れたプログラムである。例年，募集定員を大幅に上回る諸外国からの申込みがあるものであり，「産業技術教育」という自国の産業育成という意味からも友好な国際貢献と考え，今後とも継続させていく方針である。なお，平成16年度は，10か国から10名の外国人研修員を受入れている。

国別研修については，「教育カリキュラム開発」と「学校教育改善」の2研修コースを実施した。「教育カリキュラム開発」研修コースについては，平成15年度から実施されており，今年で2年目であり，「学校教育改善」研修コースについては，本年度から実施したものである。共に，サウジアラビア王国の1国を対象にした研修である。サウジアラビア王国は，資源を持たない日本を世界第2位の経済大国に押し上げた日本の教育制度を高く評価しており，この研修を通じて，国の教育カリキュラム編成と学校教育改善に活かすことを目的としている。2研修コースとも，本学が教員養成大学ということもあり，その研修のカリキュラムには充実した内容を誇っており，研修生からの評価も高い。平成16年度は，「教育カリキュラム開発」研修コースが9名，「学校教育改善」研修コースが8名の研修員を受入れている。

第 3 章　学生の国際交流

第３章　学生の国際交流

第１節　留学生の受入

１　留学生の受入状況

本学の留学生は100名を超えた。しかし，全国の他大学と比較すると，本学では，正規生など大学に常時いる留学生が比較的少なく，一般学生と交流する機会が少ない状態にあるといえる。やはり,フルタイムで大学に学ぶ留学生が増えることが大学の国際化にとって重要なことである。

平成15・16年度国費留学生内訳

年　度	総　数	男	女	教員研修留学生	研究留学生			学部留学生
					院２年	院１年	研究生	学部４年
15	8	2	6	4		2	2	
16	9	3	6	4	2	2	1	

平成15・16年度私費留学生内訳

年度	総数	男	女	院２年	院１年	学部１年	学部２年	学部３年	学部４年	院研究生	学　部研究生	特別聴講学生	科目等履修生
15	93	42	51	13	24	3		2	1	3	41	5	1
16	92	40	52	26	22	2	3		2	2	30	4	1

平成15・16年度国別留学生数

年度	総数	中国	韓国	台湾	バングラデシュ	ミャンマー	フィリピン	タイ	ラオス	アルゼンチン	アメリカ	ロシア
15	101	81	5	2	4	3	1	4			1	
16	101	81	3	4	2	5	1	1	1	1	1	1

２　授業以外の指導（チューター制度等）

本学にも，文部科学省によって支えられた在籍期間１年を超える留学生に対するチューター制度があり，各々の指導教員の研究室の大学院生又は学部４年生が担当している。彼らの活躍は，国際交流委員会にも事務方から報告され確認している。毎月，チューター報告書が留学生係に提出され，それには，彼らの十分すぎる活動が報告されており，彼らの活動は，専門指導教員の指導の下で，専門分野における研究の助言や，その翻訳の援助，そして，日常生活面での援助，すなわち，買物や銀行，市役所での公的手続きの援助，また，休日のピクニックや学会等の旅行での世話，時としては病院の通院の手助けなどに及んでいる。

また，本学には，上記のチューターのほか，留学生の勉学に対するサポートとして，日本語の学習を援助する学生のボランティアがいる。すなわち，主として日本語教育コースの学生が自分達の研修を兼ねて，各留学生に日本語のボランティアとしてついている。彼らは，日常生活や事務手続き上の日本語ばかりでなく，留学生の専門教育における勉学についても，用語の解説や翻

訳に重要な役割を果たしている。平成16年度は，１年生から４年生までの17名が留学生の求めに応じて活動を行った（表１）。特に，来日間もなく，まだ日本語能力が十分でない留学生は，日本語についての知識と関心が高く，彼ら留学生の日本語の学習に根気よく付き合う日本語教育コースの学生の活動が高く評価されている。一方，これは日本人学生にとっても異文化理解と専門への勉学意欲を高める貴重なチャンスにもなっている。

表１　平成16年度日本語ボランティア数

日本語教育コース１年	２名
日本語教育コース２年	０名
日本語教育コース３年	13名
日本語教育コース４年	２名
計	17名

３　卒業・修了後，帰国後の状況

現在，文部科学省では，留学生の卒業・修了後の状況について関心を抱いているが，本学国際交流委員会としては，特に留学生全体の卒業・修了後について組織的には把握していない。しかし，教員研修留学生や国費留学生，短期交換留学生等，公的機関からサポートされている留学生については，帰国している事実を把握している。帰国後の状況については，各指導教員が研究上の連絡をとっているものも多い。タイ王国からの留学生及び研究者については，私的にではあるが，タイ国愛知教育大学帰国留学生同窓会が組織されており，名簿が整備されている。また，ミャンマー及び韓国においても愛知教育大学帰国留学生同窓会が設立されており，委員会のプロジェクトとして，各国での帰国留学生（いわゆる同窓生）を把握し，組織的な名簿作りを行い，かつ，同窓会パンフレットを発行している。今後，可能な国々では同窓会を開催し，組織としての同窓会を発足させることが期待される。

また，独立行政法人日本学生支援機構の帰国外国人研究者短期招聘プログラム（いわゆる５年後研修）では，本学は，ほぼ毎年，その受入れを認めてもらって研究者を招聘しており，定員から推定して，本学は熱心に招聘している大学であると推定される。また，このことは，帰国した留学生たちが母国で研究・教育者として活躍していることを示しており，本学の留学生教育の成果を裏付けるものであるといえる。

４　教員研修留学生の学習・研究の実状

教員研修留学生の専門分野における専門教育は各指導教員に任されており，各指導教員による研究室での指導・研究であるので，委員会の責任で言及することはできない。しかし，最後に提出される指導教員の指導報告書，紀要等の論文発表，学会等での発表から，日本人学生と同レベル以上の研究成果を上げている者が多いことがわかり，本学の専門教育は充実していると言える。

５　放課後学習チューター

⑴　趣旨

放課後の学習相談を始めとした児童生徒へのきめ細かな指導を一層充実させ，学習上のつまずきの解消や学習意欲の向上を図るとともに，教員志望者の将来の教員としての資質・能力の向上につなげる等の観点から，教員志望者等を「放課後学習チューター」として活用するための方策等について実践的な調査研究を行う。（文部科学省調査研究事業）

この調査研究は平成16年度で終了した。

⑵　本学協力校

東郷町立東郷中学校　　七宝町立七宝小学校（名古屋女子大学も協力）
刈谷市立富士松東小学校　　新城市立新城中学校（愛知大学も協力）

⑶　平成16年度における各学校への協力状況

①　東郷町立東郷中学校

イ　チューター予定人数　10名
ロ　勤務曜日　チューターの出勤可能曜日
ハ　勤務時間　午前８時30分～11時30分（夏季休業中）
　　午後３時30分～４時30分
　　午後１時～４時（冬季休業中）
ニ　勤務期間　平成16年８月～平成17年３月
ホ　本学学生の勤務状況結果
　　チューター人数　23名　延べ296回勤務
ヘ　成果及び課題　中学校における放課後学習相談のあり方について，方向性が見えてきた。中学において，部活動は重要な教育活動となっており部活動とチューターの両立は大きなテーマだった。長期休業中の午後やテスト週間等の時間に限定して行えば，部活動の時間を確保しつつ，学習成果も上げられる。また，様々な事業で学生を必要としているため，学生の奪い合いのような状況があった。今後，同じような趣旨の事業で学生をあてにしていくと，人材が確保できなくなる。（学校の所見）

②　七宝町立七宝小学校

イ　チューター予定人数　10名（含，名古屋女子大学）
ロ　勤務曜日　毎週金曜日
ハ　勤務時間　午後２時～５時
　　長期休業中は午前９時～11時
ニ　勤務期間　平成16年４月～平成17年３月
ホ　本学学生の勤務状況結果
　　チューター人数　16名　延べ187回勤務
　　＊夏休み（10日間）　チューター人数　10名　延べ40回勤務
ヘ　成果及び課題　保護者，参加学生，職員のいずれからも好評であった。
　　本事業は２年目にあたり，昨年度の課題をもとに取り組みを見直した結果，つまづきの解消と学習意欲の向上に一定の成果が見られた。（学校の所見）

③　刈谷市立富士松東小学校

イ　チューター予定人数　16名（長期休業中は33名）
ロ　勤務曜日　毎週月，水，木曜日
ハ　勤務時間　午後３時10分～４時10分（５月～２月）
　　午前９時00分～10時30分（長期休業中）
ニ　勤務期間　平成16年５月～平成17年２月
ホ　本学学生の勤務状況結果
　　チューター人数　94名　延べ　789時間勤務
　　＊夏休み（５日間）　チューター人数　29名　延べ180時間勤務

＊冬休み（４日間）　チューター人数　42名　延べ114時間勤務

ヘ　成果及び課題　児童も学生も楽しそうに学習していうことがなによりである。授業中にぼんやりと過ごしがちな児童がゆっくり学習できる場があることの意義は大きい。課題として，学生の授業時間と児童の下校時間を調整するのが難しい。学習内容をすべて教師が決めていたので学習効果は大きかったが教師は準備が大変であった。（学校の所見）

6　学力向上支援事業

⑴　趣旨

補充学習や学習方法・学習習慣の支援・助言など，学校全体で児童生徒へのきめ細かな学習支援・相談を一層充実させ，学習上のつまづきの解消や学習意欲の向上を図るため，教員志望者・教員経験者等（教員志望の学生・教員免許保有者・退職教員等）の意欲・情熱を持った地域の人材を「学力向上支援員」として活用するための方策等について実践的な調査研究を行う。（文部科学省調査研究事業）

この調査研究は 平成17年度も⑵に掲げる学校で引き続き実施される。

⑵　本学協力校

小牧市立米野小学校　　東郷町立東郷小学校　　豊明市立豊明中学校
豊田市立堤小学校　　豊田市立朝日小学校　　豊田市立前林中学校

⑶　平成16年度における各学校への協力状況

①　小牧市立米野小学校

イ　チューター予定人数　10名

ロ　勤務曜日　月曜・木曜

ハ　勤務時間　午後２時40分～４時40分

ニ　勤務期間　夏季・冬季休業中及び７月～12月

ホ　本学学生の勤務状況結果

チューター人数　７名　延べ66回

ヘ　成果及び課題　愛教大以外にも学生としては国立大学２校，私立大学３校の支援を受けて実施したが概ね好評であった。次年度は希望曜日に継続できる方を望む。（学校の所見）

②　東郷町立東郷小学校

イ　チューター予定人数　25名

ロ　勤務曜日　月曜・木曜・金曜

ハ　勤務時間　８時45分～12時25分，15時～16時，長期休業中は９時～11時

ニ　勤務期間　６月～３月

ホ　本学学生の勤務状況結果

チューター人数　31名

ヘ　成果及び課題　本年度は，３・４年生の算数における下位児童を中心に支援のあり方を模索してきた。児童の意欲，計算力に向上が見られた。しかし，次のような今後の取り組みが求められていることが分かった。「支援員の授業での役割」「習熟度別授業導入」「支援員との連携の手立ての工夫」「比較的取り組みやすい算数で行ってきたが，他教科についても考えていきたい」「授業中支援を中心に推進したい」。

これらについて研究することでより効果的な学力向上支援のあり方を探っていきたい。（学校の所見）

③　豊明市立豊明中学校

イ　チューター予定人数　18名

ロ　勤務曜日　月曜

ハ　勤務時間　午後３時～５時頃

ニ　勤務期間　夏季休業中及び９月～２月

ホ　本学学生の勤務状況結果

チューター人数　14名　延べ183回

ヘ　成果及び課題　支援者の確保ができないと進めることが困難な事業であるが，大学生は本来の授業の関係で，本校の支援日に合わせて活動することが難しい。また支援者の人数も足りなく大変であった。次年度も日によっては人数が足りなくなるなどの問題点が出そうである。学生の支援者は，大変熱心に行ってくれるのでありがたい。（学校の所見）

④　豊田市立堤小学校

イ　チューター予定人数　５名

ロ　勤務曜日　毎曜日

ハ　勤務時間　可能な限り

ニ　勤務期間　９月～３月

ホ　本学学生の勤務状況結果

チューター人数　４名　延べ　601時間

ヘ　成果及び課題　平常の授業においてT.Tとして学習支援にあたっていただいた。授業の中で個にあった指導ができ，児童のおちこぼれを少なくするのに大いに効果があった。課題としては，学生も自分自身の授業があり，特に前期においては，小学校へ勤務できる時間が非常に少ないのが現状である。連絡を取り合いながら可能な限り勤務していただけるとありがたい。（学校の所見）

⑤　豊田市立前林中学校

イ　チューター予定人数　午前・午後各３～５名

ロ　勤務曜日　月～金

ハ　勤務時間　午前３時間，午後３時間

ニ　勤務期間　長期休業中（夏季26日，冬季６日）

ホ　本学学生の勤務状況結果

チューター人数　13名　延べ189回

ヘ　成果及び課題　学生の支援員を含めたことにより，より多くの複数指導者による指導が可能となり，個々の生徒や配慮を要する生徒によりきめ細かく対応できるようになった。教員を目指す学生にとっても貴重な体験の機会となっている。募集においては，大学生も多忙であり，確保が難しい。（学校の所見）

第２節　在学生の海外留学・研修

１　海外留学・研修の方針と現状

学生の海外留学は，かなり多いと思われるが，公的なものを除き，把握されていない。それは，海外留学の場合，授業料や就学年限の関係で，休学をして留学する場合が多いからで，その場合，実質的に留学であっても，公的には留学といえるのか，はっきりしないことが多いからである。休学届の理由欄に私費留学のためとあっても，その事実を把握する手段がないこともある。

以下に短期交換留学生等，公的な派遣留学の数を示す。

年　度	総　数	アメリカ	韓　国	タ　イ	ニュージーランド
15	5	1	2	1	1
16	6	2	2	2	

２　大学間交流

⑴　国際交流協定の新規締結等について

①　台湾：国立彰化師範大学

学術交流に関する協定及び留学生交換に関する実施計画を締結し，平成16年５月９日に国立彰化師範大学において調印式を行った。

②　タイ：AUE・ラジャバッドコンソーシアム

1996年５月２日にタイ・ラジャパット・インスティチュート協議会事務局と学術交流に関する協定を締結，その後，1997年３月31日に留学生交換に関する実施計画書の調印を行ったが，2004年のタイの法律の改正により，ラジャパット・インスティチュート協議会が発展的消滅となり，傘下の各ラジャパット・インスティチュートがそれぞれラジャパット大学に昇格となった。そのため，従来の協定書は無効となったため，2004年11月25日に本学とタイの９大学との間で，AUE・ラジャパッドコンソーシアムを結成し，代表幹事校であるチェンライラジャバット大学において，学術交流に関する協定及び留学生交換に関する実施計画を締結し，調印式を行った。

③　インドネシア：国立スラバヤ大学

学術交流に関する協定及び留学生交換に関する実施計画を締結し，平成17年３月25日に本学において調印式を行った。

⑵　関連行事

●2004年ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業大学生交流プログラム

「KORA教育文化交流」

日　時　平成16年９月７日～９月19日

開催地　大韓民国（釜山市，晋州市，大邱市，ソウル市）

参加者　13名（学生10名，引率者３名）

主な企画

・韓国の大学祭に「お好み焼き屋」を出店，韓国の大学生と共同作業を行うことにより，相互理解を深める。

・韓国の小学校において，初等教育の内容理解と音楽の授業「日本の童謡」を参加学生が実施する。

・日本が朝鮮半島を侵略した地である晋州市，朝鮮半島南北分断の板門店を見学，平和認識

を高める。

・前半のプログラムで経験した日本の朝鮮半島侵略をテーマに，釜山日本人学校で交流授業として成果発表を行う。

・韓国国際教育振興院において，韓国の人材育成について学び，「国際的な人材育成」についてセッションを行う。

●「日本教育文化通信使」シンポジウム―教員養成系大学学生による教育文化交流―

（上記，ユネスコ交流事業のフォローアップ事業として開催）

日　時　平成16年11月６日㈯　13：30～16：00

場　所　名古屋国際センター（別棟ホール）

内　容

・参加学生等からの交流報告

・特別講演―学生交流に期待するもの―

　大韓民国　晋州教育大学校　学生部長　李　榮晩　教授

・参加学生からの研修報告

第 4 章　社会との連携

第４章　社会との連携

第１節　公開講座等

１　公開講座

平成16年度愛知教育大学公開講座　開設一覧表

No.	講座名	日時	受講対象	定員	受講者数	場所	総時間
1	コミュニケーション能力を高めるストラテジー	５月22日(土)　10：20～16：10 ５月23日(日)　10：30～16：10	中・高校の英語教員，英語教育関係者	40	7	名古屋市生涯学習推進センター	9
2	楽しく絵が描けるキミ子方式入門	６月５・12・19・26日，７月３日 （毎週土曜日）13：30～16：00	一般・教員	30	9	愛知教育大学	12.5
3	※※聖人を出す社会・出さない社会	６月５・12・19日，７月３日(土) 13：00～16：00	一般	30	1	愛知教育大学	12
4	学校教育臨床－事例研究Ａ－	６月５日(土)～2005年３月５日(土) 14：00～17：00	教員・保育士	30	6	豊川市勤労福祉会館	27
5	新しい美術鑑賞教育	６月５・19日，７月３日(土) 10：00～13：00	教員・美術館関係者	20	6	愛知教育大学	9
6	総合学習の実践的課題に応える	６月５・12・19・26日，７月10日(土) 10：00～12：00	小・中学校教員	50	7	愛知教育大学	10
7	箱庭づくり体験	６月６日(日)　10：00～16：00 ６月26日(土)　13：00～17：00	一般	30	24	愛知教育大学	9
8	算数好きにする授業力　パート２	６月19日(土)・20日(日) 10：00～	小学校教員等	150	140	愛知教育大学	12
9	学校教育臨床－事例研究Ｂ－	６月19日(土)～2005年３月19日(土) 14：00～17：00	教員・保育士	30	15	碧南市文化会館・碧南市東部市民プラザ	27
10	小学生を対象としたおもしろ科学実験教室	７月３日(土) 10：00～12：00	小学生	40	14	愛知教育大学	2
11	小学校における効果的な英語教授法	７月22日(木) 9：30～16：30	小学校教員	40	9	愛知教育大学	7
12	学校におけるホームページ制作演習	７月24日(土)・25日(日) 10：00～15：00	教員	7	5	愛知教育大学	8
13	※学校教育と経済学－総合学習への取り組み	７月24・31日，８月７日（毎週土曜日） 10：30～12：30	教員・教育関係者・一般	50	－	愛知教育大学	6
14	学校栄養学演習Ⅰ（免許法認定公開講座）	７月29日(木)～31日(土)　9：10～16：30 ８月１日(日)　9：10～15：45	養護教諭１種免許状所持者	30	22	愛知教育大学	30
15	子どもを活かす授業	７月30日(金) 10：00～16：00	教員・教育に関心のある方	20	7	愛知教育大学	5
16	機械教育特論（免許法認定公開講座）	８月２(月)～４(水)　9：10～16：30 ８月５日(木)　9：10～15：45	技術科教員	20	2	愛知教育大学	30
17	※遺伝子を調べてみよう	８月３日(火) 9：00～17：00	理科教員	15	－	愛知教育大学	8
18	木材加工教育特論（免許法認定公開講座）	８月９(月)～11(水)　9：10～16：30 ８月12日(木)　9：10～15：45	技術科教員	20	5	愛知教育大学	30
19	教育臨床セミナー	８月18日(水)～20日(金) 9：30～16：30	教員・教育関係者	80	30	愛知教育大学	17
20	※※ものづくりとエネルギー変換	８月20日(金) 10：00～16：00	技術科教員・教育関係者	20	2	愛知教育大学	5
21	「食」を考える	８月21日(土)　10：00～17：10 ８月22日(日)　13：00～17：10	教員	30	37	愛知教育大学	10
22	身近にいる外国人とのコミュニケーション	８月21日・28日(土) 10：30～16：20	一般	30	19	名古屋市生涯学習推進センター	9
23	学校における健康管理の新たな課題への対応	８月23日(月)　9：00～17：00 ８月24日(火)　9：00～14：00	養護教諭	60	10	愛知教育大学	13

No.	講座名	日時	受講対象	定員	受講者数	場所	総時間
24	美術愛好家のための銅版画入門	8月28日，9月4・11・18・25日 （毎週土曜日）14：00～17：00	一般	20	13	愛知教育大学	15
25	ドルトによる子どもの新しい教育法	9月4・11・18・25日（毎週土曜日） 14：00～16：00	一般	30	5	愛知教育大学	8
26	数学再入門	10月2・16日(土) 10：00～15：30	一般・教員	20	2	愛知教育大学	8
27	※数学コンテストの問題に挑戦！	10月2・16日(土) 10：00～15：30	高校生	30	－	愛知教育大学	8
28	障害児治療教育セミナー	10月2・16日，11月6・20日，12月4・ 18日(土)　15：00～17：30	教員・保育士・ 関連施設職員等	15	18	愛知教育大学	15
29	※※ネイティブの先生を通して世界を学ぼう	10月16・30日（毎週土曜日） 10：20～16：20	一般	40	5	愛知教育大学	13
30	伊勢物語の世界	10月30日，11月13・20・27日，12月11日 (土)　10：00～12：00	一般	100	26	愛知教育大学	10
31	中学生を対象としたおもしろ科学実験教室	12月4日(土) 10：00～12：00	中学生	40	6	愛知教育大学	2
32	学校精神保健演習Ⅰ（免許法認定公開講座）	12月23日(木)～25日(土)　9：10～17：30 12月26日(日)9：10～15：45	養護教諭1種免 許状所持者	30	37	愛知教育大学	30
33	※技術科教育特論Ⅰ（免許法認定公開講座）	12月25日(土)～27日(月)　9：10～16：30 12月28日(火)　9：10～15：45	技術科教員	20	－	愛知教育大学	30

※都合により開催を中止した
※※都合により日程を変更した

２　科目等履修生，研究生

⑴　科目等履修生受入状況

〔学部〕

（受入状況）

	前期のみ	後期のみ	通　　年	計
一　般	8	11	13	32
外国人	1	0	0	1

（入学目的）

一般科目等履修生の場合，入学目的をみると半数以上の20名が免許状取得（上級免許状取得を含む。）を目的としており，その内訳は以下のとおりである。

免許状取得					勉学のため	計
小 学 校	中 学 校	高等学校	幼 稚 園	養護教諭		
0	1	14	0	5	12	32

（単位の修得状況）

一般科目等履修生の場合，総履修科目数126に対し118科目，単位修得率は93.7%である。

外国人科目等履修生の場合は，総履修科目数５に対し４科目，単位修得率は80.0%である。

〔大学院〕

（受入状況）

	前期のみ	後期のみ	通　　年	計
一　般	1	1	1	3

（入学目的）

入学目的は，２名が勉学を目的とし，残り１名が専修免許状取得を目的としている。

（単位の修得状況）

総履修科目数６に対し６科目，単位修得率は100%である。

⑵　平成16年度研究生等受入状況

（受入状況）

種別／年度	日本人研究生	外国人研究生	計
平成16年度	9	13	22

種別 年度	特殊教育 内地留学生	教職員派遣研修 （理科教育）	教職員派遣研修 （産業教育）	現職教育派遣 内地留学生	計
平成16年度	0	1	0	4	5

（入学目的）

研究生については，大学で学んできた研究題目について，さらに高度な知識，技術を習得する目的をもって入学する。

特殊教育内地留学生については，特殊教育諸学校の教員が特殊教育に関する専門的な知識及び技術を習得し，資質の向上と指導力の充実を図る目的をもって入学する。

教職員派遣研修（理科教育）については，諸学校において理科教育を担当する教員が理科教育に関する基礎的研究を行い，資質の向上とその指導力の強化を図る目的をもって入学する。

教職員派遣研修（産業教育）については，諸学校において産業教育を担当する教員が産業教育に関し必要な知識及び技術を習得し，資質の向上と指導力のかん養を図る目的をもって入学する。

現職教育派遣内地留学生については，諸学校の教員が学校教育に関する知識及び技術を習得し，資質の向上と指導力の充実を図ることを目的をもって入学する。

３　フレンドシップ事業

⑴　保健体育講座におけるフレンドシップ（合屋　十四秋）

この事業の目的は，学生が将来の教員の資質としての「実践的指導能力の開発，啓蒙」などを推進するために夏休みのプール解放授業を利用して，子供たちと学生との直接体験によるふれあいから「教えること」の楽しさや喜びに触れさせることである。また，子供たちにとって「体を動かすこと」のおもしろさや楽しさを学生と共に学び共感できる態度の育成もねらいとしている。一方，受講する学生は，実際にこの経験を教育実習（主免，隣接校ともに）で直接教える機会が全くないのが現状である。特に，体育を専門とする本講座の専攻学生さえも，卒業するまでに「こども」と実際にふれ合いながら教材研究を行うチャンスがない。これは教員養成大学としてしての機能を全く果たしていないと言っても過言ではない。体育の教科の中でも，水泳は，できたときの達成感が明確に表れる。しかし，ただ単に，水泳の技術の伝達のみに終わって欲しくない。大学で学ぶ本来の意義は，物事の「本質に迫る」ことである。なぜ，水泳という教材が学校教育の中で必要なのか？その中身は現状のままでよいのか？スイミングスクールで教えている内容とどこが違うのか？我々の生活の中で水泳はどのように位置づけられるのか？など，「本事業の背景となる水泳の授業理念」を参考にしてこれからの水泳教材研究を工夫，改善，挑戦してもらえるような一助になればと考えている。

以下に本年度の実施概要を報告する。

①　導入：大学での事前トレーニング

７月29～30日（本学教員による実技と指導法の事前講習，模擬授業の計画，実践，評価，反省までの一連の流れとミニ教材研究と教案づくり）

②　展開Ⅰ：[1]８月４～６日，富士松北小学校に出向いて水泳指導。特に，水泳があまり得意でない，または運動が苦手な子供たち35名を指導の対象として，担当教諭と連携をとって実施した。

③　展開Ⅱ：[2]８月23～25日，東山小学校にて児童64名を対象に上記と同様の展開を行った。

④　実施内容：指導対象は，３年生を中心とした10m以下の泳力の初心者であり，学生１人当たり３～５名の児童を指導する体制をとった。指導目標は，（あ）児童が水泳を好きになる，（い）25m程度まで泳げるようになる，こととし指導プログラム（指導案）を作成した。

⑤　指導展開例：導入として，全体，班別に鬼ごっこや輪くぐりなどの水慣れから潜る，浮くといった水中動作を楽しみながら獲得し，伏し浮き，背浮き，けのび，泳法へと展開した。以下，次の様な流れに沿って指導した。

１）ボビングからその場でのフローティング

２）浮く、沈む、進むことの初歩

３）泳法、泳力獲得へのプログラム

⑥　関係機関との協議の実績

１）本学教員と校長，教頭，教務主任との打ち合わせ（実技指導の日程，指導内容，方法，安全対策，現職教員との協力体制など：３月上旬）。

２）実施結果の報告・協議会（９月17日）

実施結果とその反省，討議，評価，フィードバックなどを本学教員と学生とで行った。

３）講師に鳴門教育大学生活スポーツ系の教員各１名，本学教員３名で実施した事業の記録をDVDに記録，保存する方法論などを討議し，これらの成果をまとめ，本事業報告書を作成，印刷することを確認した。

⑦　指導後の感想，レポート分析，指導報告会のまとめより

１）水泳レポート35件のまとめ

指導体験のレポートについて教師省察研究で注目されている「反省的実践」から「成果」「課

題」「改善案」の3カテゴリーで記述を抽出した結果，「成果；127件」には「25m泳げた」「バタ足で進むことができた」などの達成状況，「言ったことをみんなやってくれた」など計画の履行に関する内容であった。「課題；84件」には「言ったことができなかった」「時間が足りなかった」などがあった。「改善案；21件」は指導に関する改善案がわずかであり，教材研究も含め，技術や指導法の理解を深める必要があると思われた。その他，「展望」については「教育実習に活かせる」など，指導経験を能動的に活用しようとする記述が目立った。

2）指導後の教員との協議会における学生の反省

・子供と溶け込むことが主となってしまった結果，水泳指導ではなく遊泳という雰囲気となった。また，危険行為などの注意がしづらくなった。
・計画から大幅にペースがずれた。
・子供たちの動きを把握できず，視界に入らない子供が生じた。
・導入プログラムを意識して行ったが，遊びの要素が主となってしまい単調で泳法につなげる工夫が足りなかった。
・指導にあたり，言葉の使い方，例えば，泳法や練習メニューについての専門用語を使い，理解できない子供がいた。
・目標を明確にしなかったため，ゴールを見据えてのプログラム進行ができなかった。

予想以上に経験や知識が足りず，系統的な指導ができなかったことを自覚した。

本年度実施の様子は以下の通り。

次年度はさらに1校追加して，全体で3校実施することにした。附属学校との連携，協力を推進させるために，附属岡崎小学校との打ち合わせ協議の結果，これまでの実施実績と同様のスタイルを踏襲して行うことにした。本学専任教員と附属小学校教員の協力体制のもと，実践的指導力の強化内容，方法を相互に模索し，今後の検討課題に貢献できることを期待している。

⑵ 障害児教育・福祉支援フレンドシップ（障害児教育講座　都築　繁幸）

1　はじめに

障害児教育専攻では，学生が障害児教育関連の教員免許状を取得するために様々な講義，演習が開講されている。学生は，学内における臨床活動のみならず，実際の教育の現場における活動に参加したいという気持ちが強く，学外における教育臨床体験を望む声が大きい。

そこで刈谷市教育委員会，障害福祉課等との連携・協力関係のもとに平成13年度から学生のボランティア活動を講義・演習の一部に組み込んだり，それらの時間外に積極的に関わるように支

援してきた。

２　活動の実際

①　刈谷市つくし作業所における実践：教職科目「障害児教育」

夏休みに「刈谷市つくし作業所レスパイト活動」への参加を呼びかけたところ，受講生100名のうち，15名が参加した。夏休み中のために学生は，自分の都合の良い時間を選び，大半の学生が２日間の体験を行った。

②　刈谷市築地町子育て支援竹の子会における実践：特別専攻科「障害児教育概論」

この活動には，学生は，５人参加した。この活動には，早期教育に関心を持ち，将来，施設やセンターに就職したい学生に限定して募集し，自主的にセミナーを開いてから参加した。

③　刈谷市小中学校特殊学級合同行事への参加の実践：障害児教育専攻「障害児教育概論」

この活動には，市内の特殊学級に学ぶ児童生徒全員とその保護者の一部も参加し，保護者との交流を経験する良い機会となっている。この活動には，すでに体験した２年生，３年生も加わり，毎回，総勢30名を越す学生が参加している。

④　刈谷市内小学校特殊学級における体験実習：障害児教育専攻「聴覚障害児指導法」

学生は，各自の空き時間を利用して，概ね，週１回，午前中，１年間にわたって特殊学級の補助者として教育活動に参加している。現在，３名が参加している。

３　おわりに　―平成17年度の新たな活動に向けて―

この活動に参加する学生は，気持ちのこもった心優しい学生であり，体験することに意義を求めており，単位認定の要求を強く望んでいない。しかし，教員側（都築）からすれば，更に組織的・計画的に行って将来的には「単位認定科目」として承認されるように実績を積んでいきたいと考えている。平成17年２月に刈谷市小中学校特殊学級校長会との話し合いを行い，正式に教育委員会に申し入れ，連携の覚書を結ぶ運びになっている。

⑶　フレンドシップ事業社会科部門報告（土屋　武志）

2004年度は「愛知教育大学地域連携フォーラム」において知立市立来迎寺小学校及び刈谷市立富士松北小学校児童とともにフォーラムのワークショップに参加し学習する活動を実施した。この実施にあたっては，社会科教育Cの授業の中で行うため，担当の土屋武志と非常勤講師の山田孝によって社会科地域学習に関する講義を事前に実施している。また，大学近くの農場での作業体験（ブドウの袋掛等）も行うなどの体験的活動を通じて，子供との接し方等を考察させた。

このような授業実施にともなう問題点は，子ども（学校）の授業カリキュラムと学生（大学）の授業カリキュラムとの調整が難しいため，この事業に参加する学生によっては，他の授業を欠席せざるを得ない場合があることである。

大学教員の理解のもと，これまで学校授業日に実施してきた。今後，この事業を拡大させるために，大学の授業カリキュラムの大幅な改善が必要と考えられる。たとえば，２時間続きの授業（つまり午前若しくは午後が学外での活動に利用可能な授業カリキュラムなど）を設定する等である。

参加した学生（２年生約60名）のこの事業への満足度が高いだけに，今後，検討していきたい課題である。

⑷　美術教育講座におけるフレンドシップ（宇納　一公）

○担当教員

藤江充，宇納一公，樋口一成，中島晴美，IVY.Peter

○連携・協力機関

愛知県教育委員会，知立市教育委員会，知立市立知立小学校，知立市立来迎寺小学校，知立市

立知立中学校，愛知教育大学非常勤講師１名，岐阜大学（助教授１名），愛知学泉短期大学（助教授１名），東京国立近代美術館（工芸課長１名），茨城県陶芸美術館（主任学芸員），ちりゅう芸術創造協会（館長，学芸員），知立市文化会館，　知立文化協会，名古屋市美術館，愛知県美術館

○フレンドシップ事業の実績

プロジェクトごとに担当教員が窓口となり以下の日程で協力機関の担当者と打ち合わせの機会を持ち準備をした。学生は，交流事業と造形活動の計画作り・実験授業の実施を通して子どもたちの行動を観察し理解を深めるとともに，教育的スキルのレベルアップを図ることが出来た。

①　ガラス教育プログラム（担当：IVY.Peter）

連携校　：知立小学校　志賀篤夫校長　0566-81-1371
学級活動，教科指導の中での実践　担当：児玉竜二先生
第一回うち合わせ　６月９日㈬15時30分から宇納教員が依頼と概要説明
実験授業は７月７日㈬13時05分スタート。知立芸術創造協会館員も参加
参加人数：造形文化ガラスコース12名と知立小学校５年生１クラス30名

連携校　：知立中学校　鈴木徳治校長　0566-81-1370
部活動の中での対応・・・担当：美術教科主任小林義和先生
院生によるバーナーワーク指導を夏期クラブ活動の時に実施。

参加人数：中学生６名

連携施設：知立市文化会館パティオ池鯉鮒
ガラスアート博覧会in知立2004の展覧会にフレンドシップ事業で作った生徒のガラス作品を出品し学生作品と一緒に展示して地域に公開した。
開催期間　９月14日～26日

②　彫塑教育プログラム（担当：宇納一公）

連携校　：来迎寺小学校　前田英子校長　0566-81-1373　校務主任　鈴木健二（美術）
総合的学習の中での対応
第一回打ち合わせ　６月９日㈭14時30分から宇納教員が依頼と概要説明

参加人数：図工美術学生１年29名と院生１名４年生２名，来迎寺小学校４年生２クラス75名
学生の挨拶，授業観察，交流事業の実施　７月13日
実験授業は小学校体育館を会場とし全日で計画。10月27日㈬実施（実施計画の詳細は別紙資料２参照）

③　陶芸教育プログラム(担当：中島晴美)

連携校　：知立中学校　鈴木徳治校長　0566-81-1370
部活動の中での対応（中学生7名）・・・担当：美術教科主任小林義和先生

実施　　愛知教育大学美術教育講座造形棟陶芸実習室で陶芸絵付け体験の指導とろくろ制作の観察を紹介。

参加人数：学生７名　12月18日㈯

④　鑑賞教育プログラム（担当：藤江　充）

夏期フレンドシップ事業は大学の決定がずれたため未実施。愛知県美術館にて一部実施。院生１名が美術館にてギャラリートークとワークシートの試作を通して学芸員やアーティストから指導を受けながら子ども達との交流を深めた。

⑤　フレンドシップ事業報告書の発刊（担当：藤江，宇納，樋口，中島，IVY.Peter）

1999年から2004年フレンドシップ事業までの資料をまとめ，広く学内学外に紹介をすることを目標に編集作業を進めている。（資料集は2005年８月に刊行予定）

○当該事業を企画，運営するための関係機関との協議の実績（協議会・シンポジウム等）

・企画運営協議会

各協力校にて，校長先生並びにクラス教諭と担当教員，担当教諭と大学生，大学生と小学生による打ち合わせの機会を持った。学生は，自己紹介の方法や造形活動の計画，指導案作りの準備を進めた。プレ授業の実施を通して，小学校の担任からは児童の発達段階の様子や指導法について助言をいただき，大学では，美術教室専門教員からの指導のもと，実験授業に向けて毎日夜遅くまで学生同士の協議が行われた。担当教員は，学生の主体性を第一にして，最後まで適切な助言と材料の発注や環境整備といった補助的な指導のみ行うことに努めた。

・講演会とシンポジウム

彫塑教育プログラムでは，実施計画をもとに来迎寺小学校にて実験授業（10月27日）が行われ，実施当日の授業終了後に，授業を参観された講師の方々，小学校担任教諭並びに大学教員と学生による協議会が実施された。子どもたちの行動を観察し理解を深める為に，様々な専門家からの生きた意見交換が実現した。なお，陶芸教育プログラムでは平成16年12月９日に上絵講師菊池氏による実技指導，平成17年１月22日金子賢治氏による「美術教育と日本の工芸」，２月２日は戸舘和子氏の講演会と協議会が開催され，造形の在り方と教育について考える機会を持った。

ガラス教育プログラムでは，平成16年９月18日㈯愛知教育大学を主催校にＧＥＮ（ガラス教育ネットワーク会議）を大学会館で開催。本学学長，担当教員の宇納，IVY.Peterを交えて，ガラス教育関係の大学，研究所の人たちによるシンポジウムを開いた。

〇学生，協力校の意見等

・学生からの意見：

学生からの意見は様々であったが，自分たちの考え方が非常に甘かったことを指摘した意見が多くあった。そして事前の準備と話し合いが大切であり，どうやったら児童が話を聞いてくれるか考え込んでいたときに，担任の先生方のお話，先輩たちの児童に対する態度，アプローチの仕方，講師の方の指摘がこの事業のなかで勉強になったという意見が多数を占めた。

・小中学校担任教諭からの意見：

学生達の様子について，プレ授業の時よりもずっとずっと声かけや話の持っていき方が良くなって勉強されたなという感想や，どの学生グループも導入に非常に工夫がされて熱意が子供にも伝わってきたと言う前向きな意見が多かった。小学生は学年による発達段階によって，子どもたちのグループ活動がスムーズにいかないことが多いのだが，造形あそびではどの子も同じ目標に向かって頑張っていて普段小学校では見られない協力の様子に驚きましたという意見や，本当に貴重な体験だったというフレンドシップ事業の教育的意義を挙げる意見も戴いた。（来迎寺小学校校長の意見）また，普段から造形活動に消極的な子供も，新しい技法や表現方法を知る機会を得て今後も継続した連携を希望する中学校教諭の意見もあった。

〇問題点・改善点，その他特記事項

今回の一番困った点は，プレ授業も実験授業もそして準備を含めた協議会などの日程が，非常に時間的な制約の中での実施であったことである。小学校，中学校，大学での平常授業の中では対応出来ず，多くの教科の先生方の協力の上に成り立っていることであった。小学校では，学校行事の総合学習の一環として取り入れてスケジュールを調整してもらい，中学校では，土曜日と夏期休業中のクラブ活動の中で対応をしていただき，大学ではフレンドシップ事業の実施への対応として諸先生方にご理解を得たことである。今後は，参加学生，受け入れ校の行事，季節的な制約，大学の行事等しかるべき調整をした上での計画づくりをするため，大学側は年

度当初からこのフレンドシップ事業の実施を可能にするような予算付け等を改善点として検討をお願いしたい。またこのフレンドシップ事業の今回の試みは，非常に多くの成果をもたらしており，今後美術教室のカリキュラムのなかで取り込まれることが出来れば良いと考える。特に基礎実習と主免実習，副免実習と連携するような総合的教育実習システムの中に位置付けられるならば，他教科も含めた新しい実習のスタイルが可能ではないかと思う。

⑸ 技術教育講座におけるフレンドシップ（清水　秀己）

「大学等地域開放特別事業『大学Jr.サイエンス＆ものづくり』」として，平成14年度・平成15年度に“ものづくり離れ対策”，“完全学校５日制対応”で事業名称“たのしいものづくり”を実施してきた。平成14年度は学生の参加はボランティアとして，平成15年度は“総合演習２”の授業の一環としてこの事業に参加した。その結果，参加者には「ものづくり」を本当にたのしく体験していただけ，かつ学生達はこの「たのしいものづくり」事業を通して，子供達とふれあい，子供の気持ちや行動を理解し，教師になるための実践的指導力の基礎を身につけるために大いに役立ったと考える。

平成16年度は過去２回の経験と結果より，事業名称「たのしいものづくり」として「フレンドシップ事業」に応募し，採択されたので実施に至った。その実施計画として，事業名称“たのしいものづくり”，事業のタイプを“平成16年10月９日㈯～平成16年11月27日㈯の連続開催事業”，“完全学校５日制対応型”，事業実施場所を“本学技術教育講座実験・実習室”とし，授業科目を“総合演習Ⅱ＜教職科目（教職に関する科目）教育科目㈵＞”を開設科目に対応させた。主な対象者を“小学生・中学生（保護者も参加可）”，地方公共団体等の連携による実施計画を教育委員会は“刈谷市教育委員会，知立市教育委員会，豊明市教育委員会，名古屋市教育委員会，愛知県教育委員会”，マスコミとの連携は“刈谷ホームニュース，知立くらしのニュース，中日新聞，こどもわくわくニュース”とした。

No.	テーマ	実施日	講師	参加児童生徒
1	電池のいらないラジオをつくろう	10月９日	清水秀己	9名
2	金属を溶かしてキーホルダーをつくろう	10月16日	大西研治	15名
3	こんなに簡単にできる!?もやし，スプラウト，カイワレダイコン，ミニダイコン，ネギの栽培サツマイモほりと焼きイモ	10月23日	太田弘一	14名
4	プロペラひこうきをつくろう	10月30日	加藤正義	13名
5	匠の技にチャレンジしよう	11月６日	橘田紘洋	9名
6	紙すき器とハガキをつくろう	11月20日	宮川秀俊	15名
7	迷路を脱出するロボットをつくろう	11月27日	鎌田敏之	12名

今まで以上に，小学生や中学生，そして保護者の方にものづくりのたのしさを実感していただき，かつ「フレンドシップ事業」ということで，学生が実践的指導力の基礎を身につけることができるために，昨年度の反省も含めて，技術教育講座教員７名並びに受講学生は綿密な実施計画を立てた。その結果，昨年度以上に有意義な事業になったと考える。関係教育委員会，近隣の学校のご協力もあり，16年度は参加者も多く，盛況で終えることができた。しかしながら，事業の目的である“ものづくり離れ対策”並びに“学生の実践的指導力の基礎を身につける機会”を成就するためには，今後も継続して行っていかなくてはならないと考えている。

４　大学祭，子どもまつり等

大学祭は，学生組織による大学祭実行委員会が中心となって，クラブ・サークルの発表・模擬店・スポーツ祭典など多くの催し物を企画し実行している。

また，例年，大学祭の前週の日曜日に子どもまつりを実施している。近隣の小学生を対象として，ゲームをしたり，物づくりなどをして，一日中，学生と子どもが遊びまわる催し物で，保護者からも好評を博している。秋にはミニミニ子どもまつりも実施している。

いずれの企画も，地域社会との交流の意味から，より活発に継続的に実施することが望まれる。

平成16年度のそれらの内容は次のとおりである。

◎第35回大学祭　テーマ「芽生え」

日　　時：平成16年５月19日㈬～5月23日㈰
参加学生：約2,000名
企　　画：スポーツの祭典　5 /19㈬～ 5 /21㈮
お笑い企画　5 /22㈯
ステージ　5 /22㈯～ 5 /23㈰
フリーマーケット・独自企画・模擬店　5 /22㈯～ 5 /23㈰
献血　5 /22㈯

◎第35回子どもまつり

日　　時：平成16年５月16日㈰
参加学生：約100名
子ども参加人数：約1,300名
企　　画：人形劇「小さなかいじゅう，大きなかいじゅう」「ステージの悩めるヒーロー」
人形劇「おんどりと２枚の金貨」と紙芝居
ミュージカル「キッチンパニック！」
パズル　算数のおもちゃ箱
演劇「太郎のふしぎな旅」　びつくリックＢＯＸ
めかふらわーるど　日本ヴギウギレース
おめんづくり　とばせ　まわせ　ふくらませ
野原でらんらんボーリング　おおきなりんごの木の下で
ふしぎ探検隊　フリスピーン

◎第28回ミニミニ子どもまつり

日　　時：平成16年12月12日(日)
参加学生：約250名
子ども参加人数：約300名
企　　画：人形劇「てぶくろ」　紙芝居「すてきな三人組」
ぬりえコンクール　サンのわくわくクリスマス
おれいにうたいましょう　わくわくじっけんきょうしつ
つくってワクワク牛乳パック　らんらんサンタのハッピープレゼント
さんすうのおもちゃばこ　みんなでどきどき玉投げ
作って遊ぼうクリスマス　学ボラフレンドリーパーク

第２節　相談事業

１　障害児治療教育センター

本センターの目的は，障害児治療教育の実践を通して，障害のある子どもの教育原理や教育方法を明らかにしようとするものである。本センターでは，定期的・継続的に教員，技官，学生，院生が障害児との治療教育的かかわりを実践している。この臨床活動を通して障害児の治療教育の原理を探求し，学生・院生に臨床実習の場を提供し，さらに両親をはじめとして学校や地域社会に貢献しつつ連携を深めようとするものである。以下平成16年１月より12月までの１年間の相談活動（治療教育の実践）を報告したい。

表１　平成16年１月より12月までの相談総ケース（158件）の経過

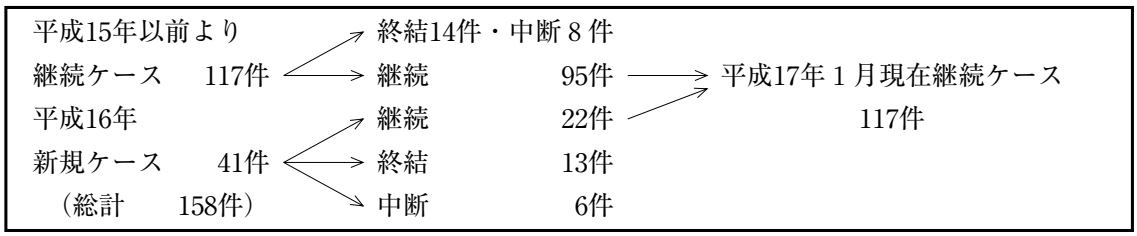


表１に示したように，平成16年の１年間に新規に来談したケースは41件であり，平成15年以前より継続して来談し治療教育を行っているケースは117件であった。障害児の親の訴える子どもの問題行動などは，短期間に容易に改善することは難しく，継続して来所することを希望する場合が多く，平成17年１月現在117件のクライエントが来所している。発達障害児の治療教育に対する需要は増え続けるばかりである一方，学生，院生も含めたセンターのスタッフは限られているため，治療申し込みに対し，引き受けて相談にまで至るケースよりも，お断りしたり，他機関を紹介したりするケースのほうが多いのが現状である。

表２　平成16年１月～12月までの相談総ケースの年齢別内訳

	０～３歳	４～６歳	小学生	中学生	（高校生）	19歳以上	合計
男	12	16	45	22	12	13	120
女	1	7	9	8	2	11	38
計	13	23	54	30	14	24	158

表２には，来談ケースの年齢別内訳を示した。小学校年齢段階の子どもが多いが，幼児期から成人にいたるまで幅広く来所していることがわかる。幼児期にインテーク（初回面接）して，長期間フォロウしているケースも多い。なお，来談ケースの多くは，特殊学級や養護学校に在籍しており，（高校生）には，養護学校高等部や専門学校の生徒も含まれている。また，小学校，中学校の通常学級や保育園，幼稚園に通う軽度発達障害児など，今後の特別支援教育の対象となる子どもも多い。

表３　平成16年相談総ケースの診断別内訳

広汎性発達障害（自閉症）	100
知的障害	18
注意欠陥/多動性障害（ＡＤＨＤ）	6
学習障害（ＬＤ）	7
不登校	8
黙症	5
情緒障害	5
神経症等（人格障害，うつを含む）	9
計	158

表３には，診断別内訳を示した。自閉症，アスペルガー障害等を含む広汎性発達障害の子どもが多く，いわゆる発達障害の範疇に入る子ど

もたちが約87%を占めており，このような子どもたちへの治療教育の実践が本センターの特色とも言えよう。新規の相談依頼の場合，「なんとか（もっと）ことばをしゃべるようになってほしい」という親の訴えを頻繁に聞く。親には定期的あるいは随時相談に乗り（親面接），子どもにはプレイセラピー（通常週１回50分）を継続的に実施しながら，治療教育を進めている。本センターに来所するケースは，このように発達全般に深く関わった問題を背景にもっており，長期にわたって継続して来所されることが多くなる。

表４は，平成16年１月より12月までの１年間の本センターの相談活動の実際を示したものである。臨床活動の中心は，プレイセラピーの実践と親面接（カウンセリング）であり，両者を合わせて延べ件数は3,073件となった。また，教員の指導の下，音楽療法士資格をもった大学院生が数名の幼児に対して音楽療法を行い，延べ55セッションもたれた。比較的長期にわたって継続して相談に乗っている場合やクライエントの事情によっては，手紙（47件）とかＥメール（７件）による方法もとられている。電話による相談は延べ44件であった。なお心理検査（25件）は，田中ビネー知能検査，WISC－Ⅲ知能検査や新版K式発達検査等を実施している。

以上のように，来談児（者）に対するプレイセラピーや親面接，音楽療法，電話相談等全て含めると延べ件数3,257件となった。

表４　臨床活動（平成16年：月別統計）

	１月	２月	３月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	総計
プレーセラピー	184	187	142	124	190	184	218	43	179	170	212	188	2021
カウンセリング（親面接を含む）	94	89	98	85	108	96	107	34	97	66	97	81	1052
音楽療法	3	4	4	2	6	6	7	1	4	5	7	6	55
心理検査（フィードバックを含む）	2	0	3	1	1	2	4	2	0	3	5	2	25
手紙相談	3	4	4	5	3	1	5	3	3	5	6	5	47
Ｅメール相談	1	2	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0	7
電話相談	2	2	2	5	5	7	8	2	1	2	3	5	44
コンサルテーション	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	3
スーパービジョン	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3
総　計	289	289	255	222	313	297	351	86	284	253	331	287	3257
ケース会議	0	2	0	2	3	4	2	0	2	3	3	3	24

2　教育実践総合センター

本年度に，教育実践総合センターでは，以下の相談活動を行った。

⑴　ＦＡＸ，Ｅメールによるいじめ相談

センター発達支援基礎研究分野が中心となり，ＦＡＸ及びＥメールによるいじめ相談に応じた。ここでは件数は少ないが，内容的には深刻な問題が寄せられており，必要に応じて関係者等と連絡を取りながら適宜対処してきた。

なお，相談の責任者はセンター教員であるが，大学院生，学部学生及び一般の方々を含んだ“いじめについて語る会”を組織し，寄せられた問題の本質を共有し，その解決の糸口を見出すための論議を通して，大学院生や学部学生の教育の一端を担ってきた。

事　　項	対　象	件　数	時　間	担　当　者　等
ＦＡＸ・Ｅメールによるいじめ相談“ＳＯＢＡ”	一般	1	随時	折出健二，川北稔，いじめについて語る会メンバー

⑵　面接教育相談

センター教育臨床分野が中心となり，愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室を運営してきた。ここでは，いじめ・不登校をはじめとする面接教育相談に応じてきており，毎週１回１時間の親子併行面接を基本として，カウンセリング，箱庭療法，プレーセラピー，等の技法を用いたインテンシィヴな心理療法を行ってきた。

同時に，この面接教育相談は学校教育臨床専攻臨床心理学コースの大学院生の臨床教育の場にもなっており，臨床心理士資格をもつ教員（センター教員並びにセンター研究員）がスーパーヴァイズをしながら，大学院生にも担当させてきた。また，ほぼ月３回の割合でケースカンファレンスを持ち，ケース検討を行う中で，大学院生の臨床教育の一環としてのグループ・スーパーヴィジョンに充ててきた。

本年度（平成15年12月１日～16年11月31日）の面接教育相談の概要は以下の通りである。

事　　項	対　象	人　数	時　間	担当者等
①外来面接相談	一般	208	3,347	生島博之，他学内
②対教師等相談	教員等	97	116	臨床心理士教員

内訳：

①外来面接相談

受付ケース数	126（208人）	総面接回数	3,347回
前年度からの引継ぎ	53（ 91人）	総面接時間	3,347時間
新規受付	73（117人）	面接回数範囲	１～53回

＜問題別＞

不登校・不登校傾向	38	家庭内暴力	2
対人関係の問題	10	いじめられ	0
場面緘黙	3	育児不安	0
遺尿・吃音・チック	5	強迫傾向	2
発達障害	5	虐待	0
感情のコントロール	2	対人恐怖症	3
非行・怠学	2	摂食障害	3
落ち着きがない・易怒性	6	不眠	1
生活の乱れ	9	その他	29
自分（の性格）について	6		

＜面接形態別＞			
単独面接（本人）	25	父母子併行面接	9
親（母）面接	16	母子併行面接	76
＜年齢区分別＞			
幼　児	5	高校生，16～20歳	20
小学生	55	成　人	13
中学生	15	親による子の相談	100
＜帰結別＞			
終　結	44	中　断	21
継続中	138	経過観察	5
②対教師等相談			
受付ケース数	74	総面接回数	80回
前年度からの引継ぎ	9	総面接時間	116時間
新規受付	65		
＜問題別＞		＜帰結別＞	
幼稚園・保育園学級運営	4（ 6人）	終　結	70
学級運営	44（52人）	継続中	4
スクールカウンセラーへのスーパービジョン	16（16人）		
こころの教室相談員などへのスーパービジョン	3（ 3人）		
電話相談員へのスーパービジョン	2（11人）		
適応指導教室指導員へのスーパービジョン	3（ 7人）		
その他	2（ 2人）		

第３節　施設開放

１　附属図書館

本学附属図書館において，1996年８月１日から地域開放の一環として，調査・研究を目的とした初等中等教育教員を含む学外者に対して，所蔵する資料を大学の教育研究に支障のない範囲内での館内閲覧，館外貸出等の利用提供を開始した。2000年度より夜間大学院及び昼夜コースが発足したのにあわせ，授業開講日の週３日（火・水・金曜日）は22時，月・木曜日は20時まで，また，土曜日は休業期間中を除いて10時から16時まで開館している。

また，2002年度には試行的に日・祝日の開館を実施し，さらに，2003年度より利用者の便を考慮して，授業開講日の月～金は22時まで，また，土・日・祝日は休業期間中を除いて11時から17時まで開館している。

以上のように，附属図書館としても学外利用者に利用し易い環境づくりをすすめてきている。

学外者利用状況

貸出人数（人）	貸出冊数（冊）
530	1,213

２　体育施設など

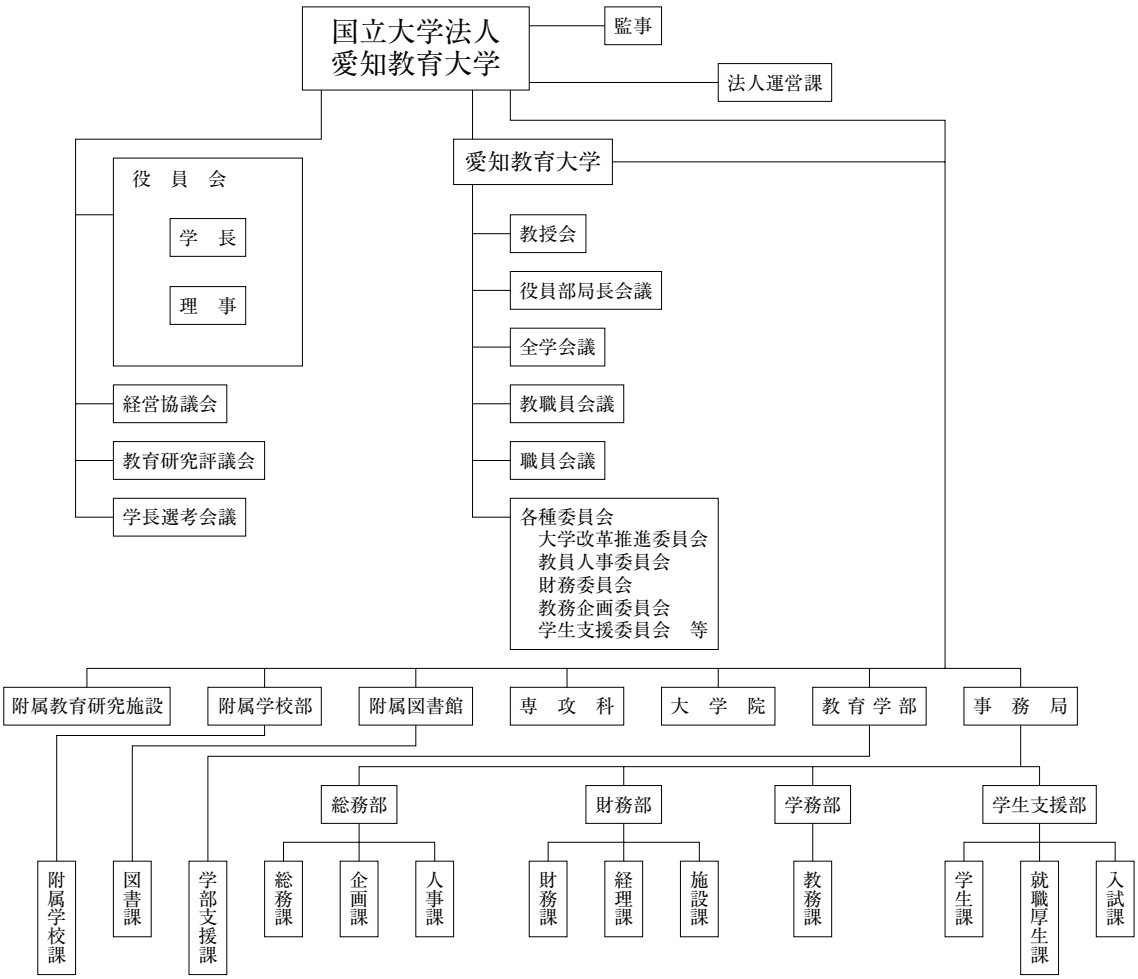
使用場所	件　数	延日数	相　手　方	目　　的	使用料
野球場	27	27	個人	野球練習・試合	有料
陸上競技場	2	2	愛知県サッカー協会	体力テスト	有料

第５章　管理運営の概要

第５章　管理運営の概要

第１節　組織運営機構

平成16年度からは，以下のような組織運営機構に改革をした。



第２節　教育及び研究組織

１　教育組織

本学の教育組織は，平成12年度からの改革に基づいて以下のように改編した。その基本的な考え方は，教員養成４課程と学芸４課程の相互補完による教育の充実である。

なお，教員免許状の他に，希望する学生には，次の資格が取れるようになっている。

①社会教育主事　②社会福祉主事　③学校図書館司書教諭　④学芸員
⑤保育士　⑥社会福祉士（受験資格）　⑦甲種危険物取扱者（受験資格）

ただし，①②③は全学生が，④は社会専攻，理科専攻，図画工作専攻，美術専攻，国際文化コース，造形文化コース，環境教育課程の学生が，⑤は幼児教育系の学生が対象である。なお，⑥は共生社会コースの学生が，⑦は環境教育課程の学生が対象で，受験資格の取得ができる。

⑴　教育学部

教員養成４課程

●初等教育教員養成課程

・幼児教育系＝幼児教育専攻（主免：幼稚園教諭１種免許状)(副免：小学校教諭１種免許状）
・教育科学系＝教育科学専攻
・人文社会系＝国語専攻，社会専攻
・自然系＝算数専攻，理科専攻
・芸術系＝音楽専攻，図画工作専攻
・生活・スポーツ系＝体育専攻，家庭専攻

（主免：小学校教諭１種免許状）
（副免：中学校教諭１種免許状；専攻教科
高等学校教諭１種免許状；専攻教科
幼稚園教諭２種免許状）

●中等教育教員養成課程

・教育科学専攻：（主免の教科は希望免許教科による）
・国語・書道専攻
・社会専攻
・数学専攻
・理科専攻
・音楽専攻
・美術専攻
・保健体育専攻
・技術専攻
・家庭専攻
・英語専攻

（主免：中学校教諭１種免許状；専攻教科）
（副免：小学校教諭１種免許状
高等学校教諭１種免許状；専攻教科）

●障害児教育教員養成課程

（主免：養護学校又は聾学校の教諭１種免許状，小学校教諭１種免許状）
（副免：中学校教諭２種；希望免許教科，幼稚園教諭２種免許状）

●養護教諭養成課程

（主免：養護教諭１種免許状）
（副免：中学校及び高等学校教諭１種免許状：保健，高等学校教諭１種免許状；看護）

学芸４課程

●国際理解教育課程

・国際文化コース　（中学校教諭１種免許状；国語又は社会又は英語，及び，高等学校教諭１種免許状；国語又は地理歴史又は公民又は英語）

・日本語教育コース　　（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；国語又は英語）

●生涯教育課程

・共生社会コース　　（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；家庭又は福祉）

・スポーツ・健康コース　（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；保健体育）

・造形文化コース　　（中学校教諭１種免許状；高等学校教諭１種免許状；美術・工芸）

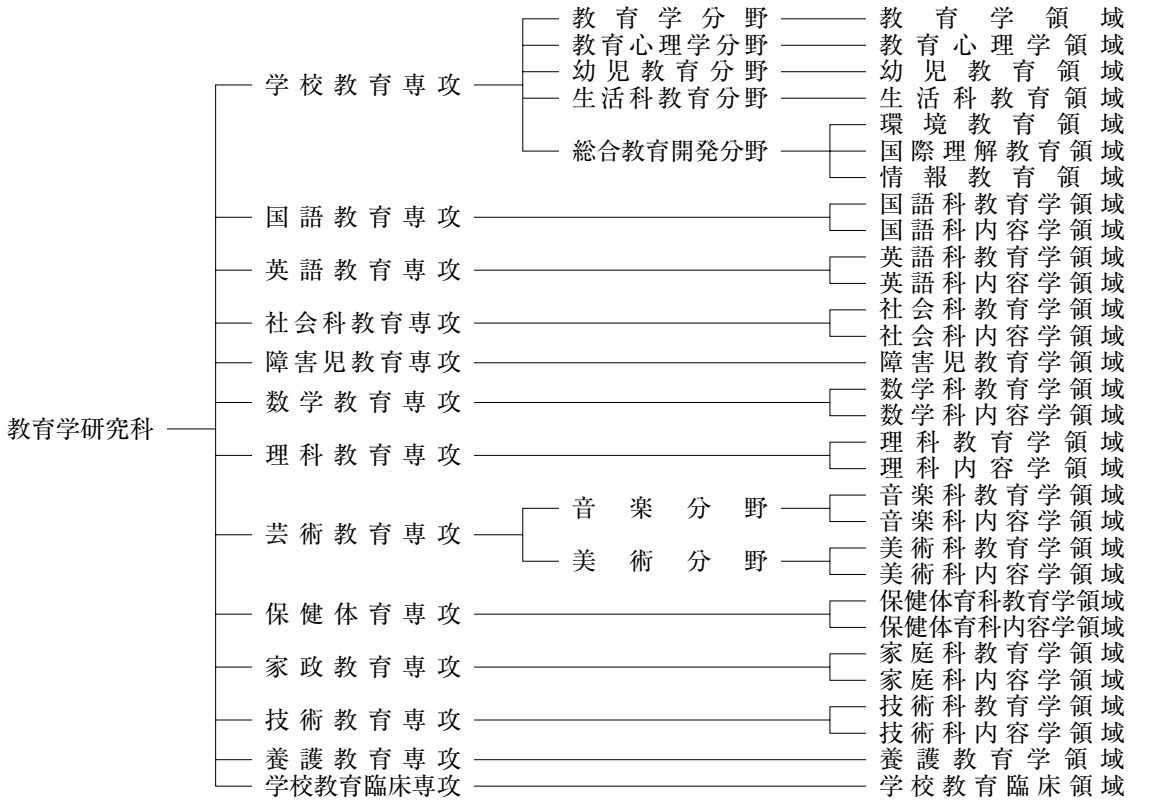
●情報教育課程（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；数学，高等学校教諭１種免許状；情報）

●環境教育課程（中学校教諭及び高等学校教諭１種免許状；理科）

⑵　大学院

本学の大学院に置かれている研究科は教育学研究科（修士課程）である。平成12（2000）年度には，入学定員がそれまでの110名から150名に増員され，新たに学校教育臨床専攻が設置された。同じく平成12（2000）年度からは，昼間開講コースに加え昼夜開講コースを設け，現職教員等の入学に便宜を図っている。

研究科を構成する専攻（分野）及び領域は次のとおりである。



なお，平成13（2001）年度には，学校教育臨床専攻に，臨床心理士の受験資格を取得できる臨床心理学コースが設置された。

⑶　専攻科（修業年限１年，入学資格は，小・中・高校又は幼稚園の教諭の普通免許状を有する者など）

●特殊教育特別専攻科知的障害教育専攻（養護学校教諭１種又は２種免許状）

⑷　臨時教員養成課程（１年課程）（入学資格は，小・中・高校及び幼稚園のうち，いずれかの普通免許状を有する者）

●肢体不自由教育教員養成課程（養護学校教諭１種又は２種免許状）

●情緒障害教育教員養成課程（養護学校教諭 1 種又は 2 種免許状）

２　研究組織

本学の研究組織は，平成12年度から，教室等の制度から大講座制へと変革をした。

21世紀の教育を担う教員の養成のあり方を踏まえ，実践的指導力等を持った質の高い教員の養成，教育の現代的課題や社会のニーズへの対応をめざして，19の大講座に再編した。そして，教育研究の進展や社会的需要に応えて，教育研究活動を柔軟且つ弾力的に進められるようにした。

その大講座及び各附属センターと主な教育研究分野は，以下に示すとおりである。

講　座	教　育　研　究　分　野　の　概　要
国語教育	国語学，国文学，漢文学，書道，国語科教育，中国文学，中国哲学，東洋学，国際理解教育
日本語教育	言語学，日本語学，日本語教育学，日本文化，国際理解教育
社会科教育	歴史学，哲学，倫理学，宗教学，思想学，比較文化，社会科教育，環境教育，国際理解教育
地域社会システム	地理学，地誌，法律学，政治学，社会学，経済学，社会科学，民俗学，環境教育，国際理解教育
数学教育	代数学，幾何学，解析学，位相数学，応用数学，確率論，統計学，コンピュータ，情報数学，数学科教育，情報教育
情報教育	情報教育，情報工学，情報科学，情報社会学，認知科学，情報数学
理科教育	基礎物理学，応用物理学，無機物理化学，有機化学，分類形態学，生理生態学，天文・地球物理学，地質鉱物学，理科教育，環境教育，地球環境論
生活科教育	生活科教育
音楽教育	声楽，器楽，作曲・指揮法，音楽理論，音楽史，音楽科教育
美術教育	美術科教育，絵画，彫刻，デザイン，美術理論・美術史，総合造形
保健体育	体育実技，体育学，運動学，衛生学・公衆衛生学，学校保健学，保健体育科教育
技術科教育	木材加工，金属加工，機械，電気，工学，栽培，情報基礎，工業科教育，技術科教育
家政教育	生活経営，被服学，食物学，住居学，保育学，生活環境情報，家庭科教育，生涯教育
外国語教育	英語学，英米文学，英語コミュニケーション，比較文化，言語学，社会学，ドイツ文学，フランス文学，英語科教育，国際理解教育
障害児教育	障害児教育学，障害児心理学，障害児病理，障害児保健，肢体不自由児教育，聴覚言語障害児教育，精神医学，発達・臨床心理学，社会福祉学，生涯教育
幼児教育	幼児教育，幼児心理，保育内容の研究
養護教育	養護学，衛生学，公衆衛生学，学校保健学，栄養学，解剖生理学，微生物学，免疫学，精神保健学，看護学
学校教育	教育方法学，教育課程，教育実践学，集団教育学，道徳教育，生活指導学，教育哲学，教育史，教育社会学，教育制度学，教育経営学，学校図書館学，社会教育学，職業指導，進路指導，キャリアガイダンス，教育心理学，学習心理学，社会心理学，発達心理学，臨床心理学，人間関係，生涯教育
教育臨床学	教育臨床実践学，学校社会臨床学，学校心理学
教育実践総合センター	教育心理学，臨床心理学，教育工学，教育実践学
障害児治療教育センター	障害児治療教育学，障害児臨床心理学，障害児臨床教育学
保健管理センター	精神医学

以上のように，19講座・３センターである。なお，教育臨床学講座は，大学院教育学研究科に置かれている。

第３節　教員の構成

１　学部・大学院・センター・非常勤講師

◇教員（常勤）◇　　平成17年３月31日現在

	講座等名	教授	助教授	講師	助手	計
教育科学	生活科教育	1	2		1	4
	障害児教育	4	3（1）	1		8（1）
	幼児教育	2（2）	3（1）			5（3）
	養護教育	5（1）	5（3）			10（4）
	学校教育	14（2）	8（1）		3（1）	25（4）
	教育臨床学	1	1（1）		1（1）	3（2）
	教育実践総合センター	2	1	1		4
	障害児治療教育センター	1	1			2
人文社会科学系	国語教育	11	7（1）			18（1）
	日本語教育	3（2）	3（2）		1（1）	7（5）
	社会科教育	12（1）	4			16（1）
	地域社会システム	8	6（1）	1		15（1）
	外国語教育	9（1）	10（2）	3（1）		22（4）
自然科学系	数学教育	10	6		2（1）	18（1）
	情報教育	4	7	1	3（2）	15（2）
	理科教育	24	13		1	38
創造科学系	音楽教育	6（3）	3（1）	1		10（4）
	美術教育	8	6	2		16
	保健体育	11（1）	6（1）		3	20（2）
	技術教育	5	2			7
	家政教育	6（3）	6（4）			12（7）
	保健管理センター	1	1			2
合計		148（16）	104（19）	10（1）	15（6）	277（42）

（　）は女性の人数で内数

◇非常勤講師◇　　（平成16年度のべ任用数）

	男	女	計
教育科学系	44	36	80
人文社会科学系	52	37	89
自然科学系	68	9	77
創造科学系	55	32	87
大学院関係	36	5	41
センター	1	1	2
合計	256	120	376

２　リサーチアシスタント（ＲＡ）・ティーチングアシスタント（ＴＡ）

	男	女
ティーチングアシスタント	16	20

	男	女
リサーチアシスタント	2	1

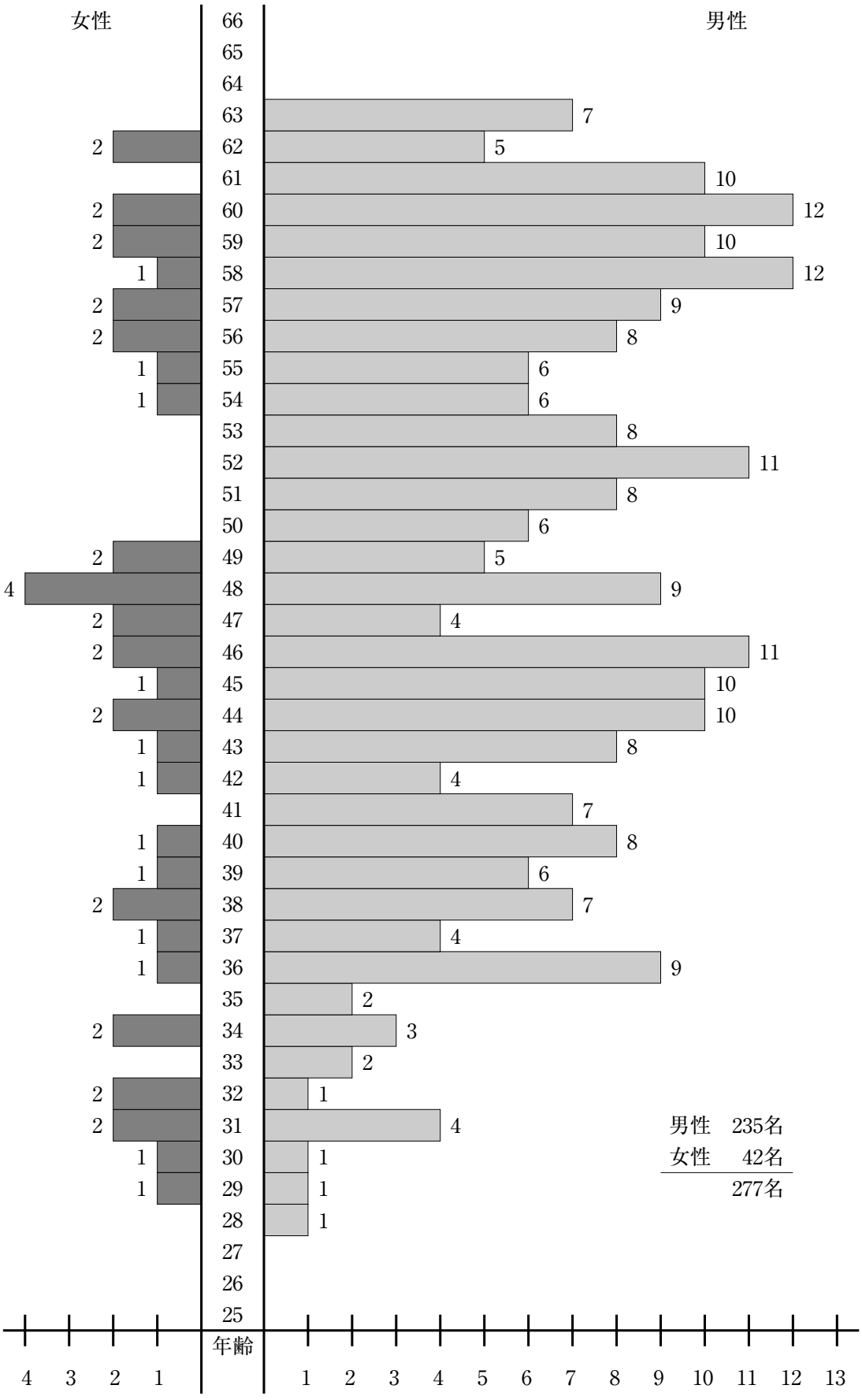
専攻名	入学定員	16年度 TA数	15年度 TA数
学　　校	27	6（ 4）	4（ 2）
国　　語	7		2（ 2）
英　　語	9		
社　　会	14	3（ 2）	2（ 1）
障 害 児	12		
数　　学	11		2
理　　科	17	11（ 5）	9（ 7）
芸　　術	19	9（ 7）	9（ 5）
保　　体	8		3
家　　政	9	1（ 1）	1
技　　術	5	4	5
養　　護	3	2（ 1）	
臨　　床	9		
計	150	36（20）	37（17）

（ ）は女性の人数で内数

専攻名	定員	16年度 RA数	15年度 RA数
理科（物理）	17	3（ 1）	4（ 1）

（ ）は女性の人数で内数

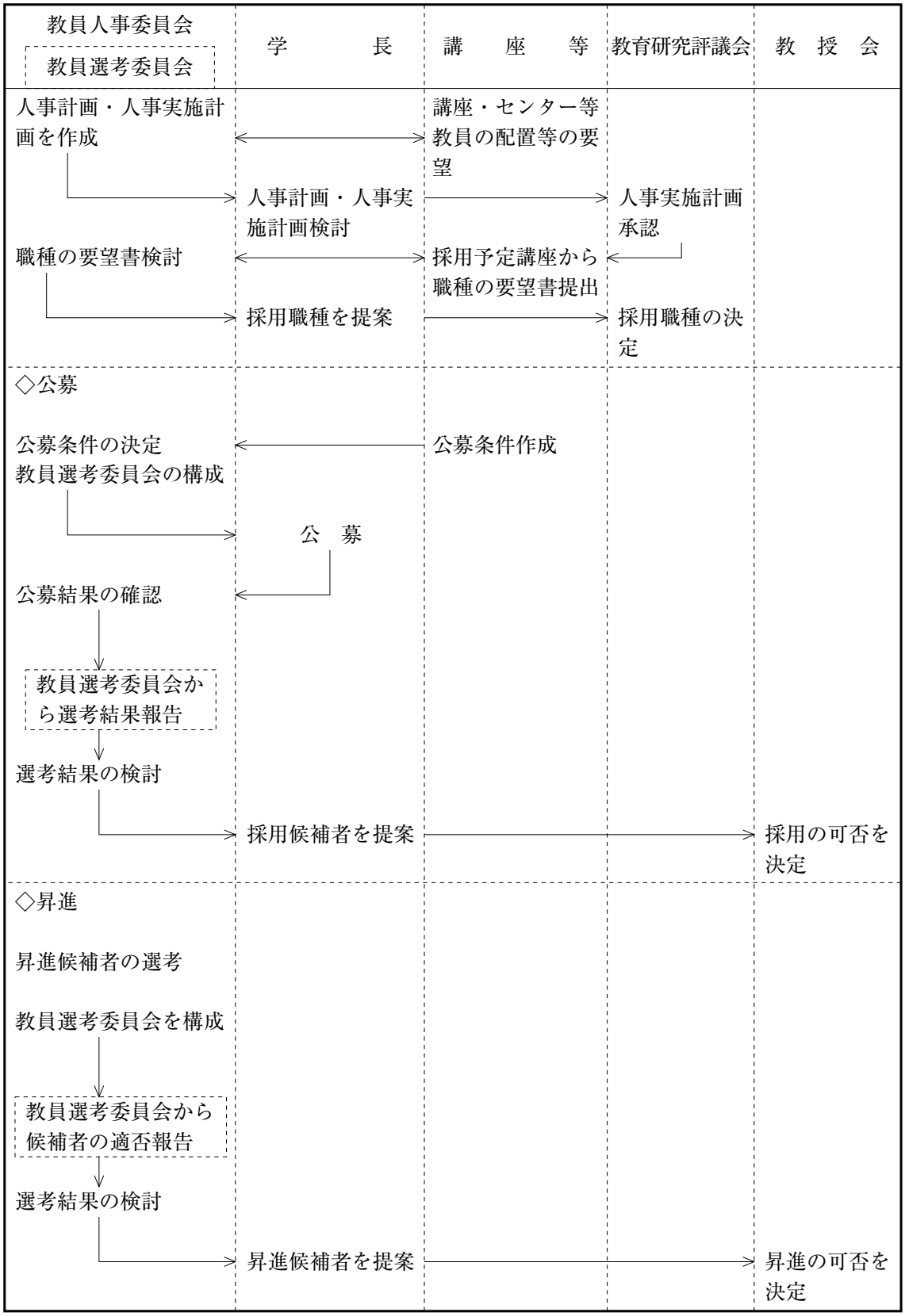
3　教員の構成（平成17年３月31日現在）



４　採用・昇進の手続き・基準・公平性

◎　採用・昇進の手続き

教員の採用及び昇進人事に関する各種委員会等の役割は下記のとおり。



◎　**本学の教員選考基準**

大学設置基準（昭和31年文部省令第28号）で規定している，教授，助教授及び講師の資格に関し，教育上の能力の重視，外国の大学における教育歴の評価等を行っている。

愛 知 教 育 大 学 教 員 選 考 基 準

（2004年５月12日制定）

（趣旨）

第１条　大学の教員職員の採用及び昇進は，以下の基準に基づき，選考により行うものとする。

（教授）

第２条　教授の選考は，次の各号のいずれかに該当し，かつ，本学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有すると認められる者について行う。

一　博士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む。）を有し，研究上の業績を有する者

二　研究上の業績が前号の者に準ずると認められる者

三　大学において教授，助教授又は専任の講師の経歴（外国におけるこれらに相当する教員としての経歴を含む。）のある者

四　芸術，体育等については，特殊な技能に秀でていると認められる者

五　専攻分野について，特に優れた知識及び経験を有すると認められる者

（助教授）

第３条　助教授の選考は，次の各号のいずれかに該当し，かつ，本学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有すると認められる者について行う。

一　前条各号のいずれかに該当する者

二　大学において助手又はこれに準ずる職員としての経歴（外国におけるこれらに相当する職員としての経歴を含む。）のある者

三　修士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む。）を有する者

四　研究所，試験所，調査所等に在職し，研究上の業績を有する者

五　専攻分野について，優れた知識及び経験を有すると認められる者

（講師）

第４条　講師の選考は，次の各号のいずれかに該当する者について行う。

一　第２条又は前条に規定する教授又は助教授となることのできる者

二　その他特殊な専攻分野について，本学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有すると認められる者

（助手）

第５条　助手の選考は，次の各号のいずれかに該当する者について行う。

一　第２条から前条までに規定する教授，助教授，又は講師となることのできる者

二　学士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む。）を有し，２年以上の教育又は研究の職務に従事し，かつ，専攻分野について修士課程修了以上の能力を有する者

附　記

１　この基準は，2004年５月12日から実施し，2004年４月１日から適用する。

◎　採用手続等について

本学教員の採用及び昇進に関しては，愛知教育大学教員選考基準に基づき，教員選考委員会，教員人事委員会の議を経て，教授会において候補者を選考している。

採用については，公募により広く人材を募っており，又，公平性を確保するため，教授会への附議資料として順位第 2 位の者（氏名は伏せて）の業績等についても公表している。

昇進候補者の選考にあっては，本人が提出した「研究，教育，管理運営及び社規的活動等に係る業績一覧」等に基づいて，教育実績及び研究実績等の総合的な評価を行っている。

また，これらの業績評価のための「研究，教育，管理運営及び社会的活動等に係る業績一覧」の評価資料については，研究業績の点数化及び教育評価の方法等について，評価の公平性，客観性確保の観点から，教員人事委員会で不断の検討を行っている。

5　教員の兼職の状況

兼業にあたっては，種類，内容，承認手続，件数及び時間数等が就業規則及び職員兼業規程で定められているが，９月29日開催の第３回教授会において，研究・教育・学内運営，特に学生指導を充実させる観点から件数及び時間数については，平成17年度から週２件４時間とすることが了承された。

兼業の種類及び内容は次のとおりである。

1　営利企業の役員等を兼ねる場合

2　営利企業の役員等以外の兼業

主に，①国立大学法人，国立高等専門学校法人，公私立学校，専修学校，各種学校等の非常勤講師に従事する場合　②公私立病院，診療所等の非常勤医師に従事する場合　③国，地方公共団体の審議会委員等に従事する場合などがある。

3　自ら営利を目的とした事業を行う場合

主に，①大規模な農業等営む場合　②アパート等の賃貸の場合　③駐車場や土地の賃貸の場合などがある。

職員は，上記の兼業を行おうとする場合は，事前に兼業承認申請書を提出し，学長の承認を得てから実施しなければならない。ただし，１の営利企業の役員等を兼ねる場合については，教育研究評議会の議を経ることとなっている。

なお，平成16年度における本学教員の学外での兼業は下表のとおりである。

兼業先又は内容等	件　数
国立大学法人	48
公私立大学（短大含む。）	145
専修学校・専門学校	17
審議会委員等（教育委員会）	41
〃　（地方公共団体）	36
〃　（その他）	7
国の機関	4
講習会・研修会講師	8
病院・診療所等	9
その他	9
計	324

第 6 章　附属施設の概要

第 6 章　附属施設の概要

第 1 節　附属学校

1　附属名古屋小学校

⑴　入学者選抜

○　公　示

平成17年度　第 1 学年入学児童募集について

1　応募資格
⑴　平成10年 4 月 2 日から平成11年 4 月 1 日までの間に生まれた者
⑵　本校指定の地域内に居住する者（小学校区を単位とする）
2　募集人員
男児　40名程度　　女児　40名程度
3　募集要項・願書渡し期間
平成16年11月29日㈪～平成16年12月 2 日㈭　本校事務室
午前 9 時から午後 4 時まで
4　願書受付期間
平成16年12月14日㈫～平成16年12月16日㈭　本校帰国校舎
午前 9 時から正午までと，午後 1 時から午後 2 時まで　16日のみ午前 9 時から正午まで
5　学校説明会
平成16年11月29日㈪　本校体育館
午後 1 時30分から午後 2 時30分まで（受付：午後 1 時から）
6　選考についての説明会及び健康相談
平成17年 1 月14日㈮
7　選考
第一次選考日　平成17年 1 月18日㈫，19日㈬
第二次選考日　平成17年 1 月21日㈮
8　その他
⑴　出願手続き並びに選考の詳細については，11月29日㈪から配付の募集要項を参照のこと
⑵　本校指定の地域は本校正門に掲示してある小学校区一覧表を見て判断のこと
平成16年11月 1 日　愛知教育大学附属名古屋小学校

○　募集予定人員，応募者数，倍率

	男　児	女　児	合　計
平成16年度　第 1 学年児童数	80名	80名	160名
附幼からの推薦入学合格者数	31名	32名	63名
募集予定人員	49名	48名	97名
応募者数	150名	181名	331名
倍率	3.69倍	3.13倍	3.41倍

○　合格者
男児　80名　女児　80名　　合計　160名

⑵ 在籍数

平成17年３月１日現在

学年	組	男	女	計	学年	組	男	女	計	学年	組	男	女	計
1年	1	19	20	39	2年	1	20	19	39	3年	1	21	19	40
	2	18	20	38		2	20	19	39		2	20	20	40
	3	20	19	39		3	20	19	39		3	20	18	38
	計	57	59	116		計	60	57	117		計	61	57	118

学年	組	男	女	計	学年	組	男	女	計	学年	組	男	女	計
4年	1	20	16	36	5年	1	20	20	40	6年	1	18	20	38
	2	20	19	39		2	20	19	39		2	17	20	37
	3	20	19	39		3	20	19	39		3	19	20	39
	4	20	18	38		4	19	20	39		4	19	20	39
	5	5	3	8		5	5	7	12		5	4	2	6
	計	85	75	160		計	84	85	169		計	77	82	159
										合計		424	415	839

４―５，５―５，６―５ は，帰国学級

⑶ 留年生・休学者・退学者数

いずれもなし

⑷ 卒業生の進路

平成16年度　卒業生			私立	金城学院中学校	6名
	合計	159名		春日丘中学校	6名
国立	附属名古屋中学校	82名		名古屋中学校	3名
	附属名古屋中学校（帰国）	3名		南山国際中学校	3名
87名	名古屋大学附属中学校	2名		南山中学校女子部	1名
公立	名古屋市立振甫中学校	1名		愛知中学校	1名
	名古屋市立新郊中学校	1名		椙山中学校	2名
	三島市立北中学校	1名		南山中学校男子部	2名
	東京都江東区立大島中学校	1名		ラ・サール中学校（鹿児島県）	2名
5名	郡山市立第二中学校	1名		早稲田中学校（東京都）	2名
私立	東海中学校	18名		聖霊中学校	1名
	愛知淑徳中学校	9名		豊島岡女子学園（東京都）	1名
	滝中学校	7名	67名	愛光中学校（愛媛県）	1名

⑸ 教務関係

○　各学年の授業日数

	1　学　期					2　学　期						3　学　期				総合計
	4	5	6	7	合計	8	9	10	11	12	合計	1	2	3	合計	
1　年	15	18	22	12	67	1	20	20	20	9	70	16	19	14	49	186
2　年	15	18	22	12	67	1	20	20	20	9	70	16	19	14	49	186
3　年	15	18	22	12	67	1	20	20	20	9	70	16	19	14	49	186
4　年	15	18	22	12	67	1	20	20	20	9	70	16	19	14	49	186
5　年	15	18	22	12	67	1	20	20	20	9	70	16	19	14	49	186
6　年	15	18	22	12	67	1	20	20	20	9	70	16	19	11	46	183

○　各学年の月別授業時数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10月	11月	12月	1 月	2 月	3 月	総合計	家庭学習
1 年	55	107	105	50	2	103	114	93	55	94	101	58	935	24
2 年	68	113	109	51	2	106	119	96	57	98	105	58	983	24
3 年	72	120	116	53	2	113	128	104	61	104	112	61	1047	24
4 年	74	123	120	53	2	116	131	105	63	106	116	62	1072	24
5 年	74	124	121	61	2	117	132	106	64	107	118	62	1089	22
6 年	74	124	121	54	2	117	132	106	64	107	118	47	1064	20

○　各学年の各教科・領域における時間割編成について

年	国語	書写	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	学活	総合	コン
1	7	1		3.35		3	2	2		2.65	1	1	1.20	0.59
2	7	1		4.43		3	2	2		2.57	1	1	1.00	0.57
3	5.71	1	2	4.29	1.94		1.71	1.71		2.57	1	1	4.01	0.83
4	5.71	1	2.43	4.34	2.17		1.71	1.71		2.57	1	1	4.40	0.83
5	5.14	1	2.57	3.91	2.29		1.43	1.43	1.71	2.57	1	1	3.51	0.83
6	4	1	2.86	4.29	2.31		1.43	1.43	1.57	2.57	1	1	2.94	0.83

※　書写は国語の時間数のうちであるが，時間割編成上，専科担任となる場合も多いので，別記してある。

⑹ 学務関係

○　奨学金，授業料免除　なし

⑺ 健康管理

○　発育測定

		男　　子			女　　子		
	学年	附属小平均	愛知県平均	全国平均	附属小平均	愛知県平均	全国平均
身長	1	117.5	116.6	116.8	115.5	115.5	115.8
	2	121.9	122.5	122.6	122.8	121.2	121.6
	3	128.3	127.5	128.1	126.8	127.1	127.5
	4	134.6	132.8	133.5	133.9	132.9	133.5
	5	138.6	138.7	138.9	140.9	139.8	140.2
	6	145.7	144.9	145.1	145.4	146.4	146.9
体重	1	21.5	21.4	21.6	20.5	20.8	21.1
	2	23.5	24.0	24.3	23.0	23.2	23.6
	3	27.2	26.9	27.5	26.5	26.1	26.7
	4	31.7	30.3	31.0	29.6	29.4	30.3
	5	33.6	34.1	34.7	35.0	33.5	34.5
	6	39.4	38.6	39.0	37.8	38.5	39.6
座高	1	65.2	65.0	65.0	64.8	64.6	64.6
	2	67.5	67.8	67.8	68.2	67.2	67.3
	3	70.1	70.1	70.3	69.4	70.0	70.1
	4	73.5	72.4	72.7	73.1	72.5	72.8
	5	74.8	75.0	75.1	76.3	75.9	75.9
	6	78.2	77.8	77.8	78.8	79.0	79.4

※　下線は全国平均を上回るもの

○　歯科検診

学年	検 査 人 数	う歯なし者数	う歯所有者数	その他の歯疾患
1 年	120	66	24	4
2 年	119	57	25	4
3 年	119	43	32	5
4 年	159	72	28	7
5 年	165	73	25	4
6 年	157	90	18	7
合計	839	401	152	20

2　附属岡崎小学校

⑴　入学者選抜

○　選抜の方法

・第一次選考	面接・教育テストにより，総合判定し，入学適格者を決定する。 その際，入学適格者が募集人員を超えない場合は，そのまま合格者とする。
・第二次選考	第 1 次選考の結果，入学適格者が募集人員を超える場合には，第 2 次選考（抽選）により合格者を決定する。

○　募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等

	男子	女子	備　　考
募集人員	60	60	
志願者数	74	76	男子3名，女子2名受検辞退
合格者数	60	60	
入学者数	60	60	

○　帰国子女受け入れ数

学年人数	学年人数
1年 1名 女	4年 2名 男1女1
2年 1名 男	5年 1名 男
3年 0名	6年 2名 女2

男子3名　　女子4名　　合計7名

⑵　在籍数

男子　357　　女子　357　　合計　714　　H17.3.15現在

学年	学級	男子	女子	計	学年	学級	男子	女子	計
1 年	1	20	20	40	4 年	1	19	20	39
	2	20	20	40		2	20	19	39
	3	19	21	40		3	19	20	39
2 年	1	20	20	40	5 年	1	20	20	40
	2	20	20	40		2	20	20	40
	3	19	20	39		3	20	20	40
3 年	1	21	19	40	6 年	1	19	20	39
	2	21	19	40		2	19	20	39
	3	21	19	40		3	20	20	40

⑶　留学生・休学者・退学者数

いずれも　なし

⑷ 卒業生の進路　　平成16年度　　卒業生　　118名

	学　校　名		学　校　名		学　校　名
国　立	愛知教育大学	公　立	〈岡崎市内〉	私　立	〈岡崎市内〉
	附属岡崎中学校		甲山中学校　1名		岡崎学園中学校 4名
	93名		南中学校　2名		三河中学校　4名
			竜海中学校　2名		〈愛知県内〉
			城北中学校　1名		金城中学校　2名
			矢作中学校　1名		南山中学校　1名
			葵中学校　1名		星城中学校　1名
			美川中学校　1名		〈愛知県外〉
			〈岡崎市外〉		洛星中学校　1名
			三島市立北中学校		皇學館中学校　1名
93名		10名	1名	15名	秀明中学校　1名

⑸ 教務関係

○　各学年の年間授業日数

	1学期	2学期	3学期	授業日数		1学期	2学期	3学期	授業日数
1年生	67日	70日	49日	186日	4年生	69日	70日	49日	188日
2年生	69日	70日	49日	188日	5年生	69日	70日	49日	188日
3年生	69日	70日	49日	188日	6年生	69日	70日	46日	185日

○　時間数配当【授業時間数】

区分	教　科　領　域									生活領域				総計
	国	社	算	理	音	図	家	体	F	道	特	く	英	
1年	8	／	3	／	2	2	／	2	1	1	1	3	／	23
2年	8	／	4	／	2	2	／	2	1	1	1	3	／	24
3年	6	2	4	2	2	1	／	2	2	1	1	3	／	26
4年	6	2	4	2	2	1	／	2	3	1	2	3	1	29
5年	5	2	4	2	1	1	2	2	4	1	2	3	1	30
6年	5	2	4	2	1	1	2	2	3	1	2	3	1	30

Fについて
1年＝算，体
2年＝算，体
3年＝国，算，図，体
4年＝国，社，算，理，図，体
5年＝社，算，理，音，図，体
6年＝算，理，音，図，体
※有効な学習が展開できるように柔軟に対応する

⑹ 学務関係

○　奨学金，授業料免除　　なし

○　課外活動（部活動）

部活動名	活　動　期　間	活　動　時　間
ソフトボール部	年間を通して	月～金
水泳部	6月～8月　市内大会まで	月～金
陸上部	8月～9月　市内大会まで	※体育部の計画による
合唱部	年間を通して	※音楽部の計画による
器楽部	年間を通して	※音楽部の計画による

(7) 健康管理

○　発育測定

		男　　子			女　　子		
	学年	附属小平均	愛知県平均	全国平均	附属小平均	愛知県平均	全国平均
身長	1 年	117.1	116.3	116.7	116.4	115.5	115.8
	2 年	122.7	122.1	122.5	120.5	121.5	121.6
	3 年	127.0	127.8	128.2	127.1	126.7	127.4
	4 年	133.7	133.4	133.7	132.7	132.8	133.5
	5 年	139.3	138.8	139.0	139.6	139.6	140.2
	6 年	144.7	144.9	145.2	145.7	146.5	147.1
体重	1 年	21.7	21.3	21.7	20.9	21.0	21.2
	2 年	23.5	24.0	24.4	22.6	23.7	23.8
	3 年	26.2	27.8	27.8	25.5	26.5	26.9
	4 年	30.9	31.0	31.3	28.4	29.8	30.5
	5 年	34.4	34.7	34.9	31.6	34.0	34.7
	6 年	37.1	38.9	39.4	36.8	39.1	40.0
座高	1 年	64.4	64.8	65.0	64.5	64.5	64.6
	2 年	67.2	67.6	67.7	66.6	67.4	67.4
	3 年	69.2	70.2	70.4	69.0	69.8	70.1
	4 年	72.3	72.7	72.8	71.5	72.5	72.8
	5 年	75.0	75.1	75.1	74.8	75.7	76.0
	6 年	77.3	77.7	77.9	78.3	79.2	79.5

○　歯科検診

学年	人　　数	う歯なし	処置完了者	未処置あり	%
1 年	120	33	26	61	50.8
2 年	119	33	52	34	28.6
3 年	120	30	50	40	33.3
4 年	117	23	43	51	43.6
5 年	120	18	40	62	51.7
6 年	118	30	40	48	40.7
合計	714	167	251	296	41.5

3　附属名古屋中学校

⑴　入学者選抜

①　応募資格

・平成17年３月小学校卒業見込みの者

・本校の特性（教育研究校・教育実習校）に応えうる心身ともに健康な者

・平成17年４月１日以降，愛知県内に保護者とともに居住し，通学に要する時間に無理のない者

・本校を第一志望とする者

②　選抜の方法

・第一次選抜：調査書の審査及び基礎的学力（国語・算数）の検査

・第二次選抜：抽選

③　志願者数その他

	募集人数	志願者数	推薦入学者数	一般合格者数
男子	160	99	32	41
女子		106	50	37
合計	160	205	82	78

④　帰国生徒の受け入れについて

ア　応募資格

平成17年３月末までに，わが国の小学校課程，あるいは，これと同程度の課程を修了する者で，次の資格をすべて有する者

・保護者の海外勤務に伴う在外生活経験年数が３か年以上，帰国後１か年以内を原則とし，日本国籍を有する者

・在留国での通学校が現地校及び国際学校であった者

・平成４年４月２日から平成５年４月１日までに生まれた者

・保護者とともに居住し，本校への通学に要する時間に無理のない者

ただし，在外生活経験年数，帰国後の年数，在留地での通学校については，本人の実態によって考慮する場合がある。

イ　選抜の方法

書類・基礎的学力（国語，算数）の検査・面接（本人及び保護者）を総合して判断する。

ウ　志願者数その他

	募集人数	志願者数	推薦入学者数	一般合格者数
男子	15	0	3	2
女子		0	0	2
合計	15	0	3	4

⑤　編入学

一般学級，帰国学級ともに定員に空きがあれば上記①に準じた検査により受け入れる。

ただし，受け入れの期限は，ともに３年生の８月末日までとする。

⑵ 在学生数（内帰国生徒数）平成17年 3 月 1 日現在

	1　年	2　年	3　年	合　計
男子	80（ 6）	78（ 8）	75（ 5）	233（19）
女子	87（ 5）	92（ 5）	96（ 6）	275（16）
合計	167（11）	170（13）	171（11）	508（35）

⑶ 転出入生徒数（内帰国生徒数）

	1　年	2　年	3　年
転出生徒	6（6）	2（2）	0
転入生徒	6（4）	7（5）	4（3）

⑷ 卒業生の進路

国　立	公　立	私　立	県　外	海　外
14	92	54	9	1

⑸ 教務関係

① 教科等時間数及び日課表・週予定表

必修教科，選択教科，総合的な学習の時間，学校行事などをより効果的に行うため，１年間を下記のとおりに３期に分け，それぞれ違った時間割を組んでいる。

第１期（４月12日：第１週～７月17日：第15週）

第２期（９月１日：第16週～11月26日：第28週）

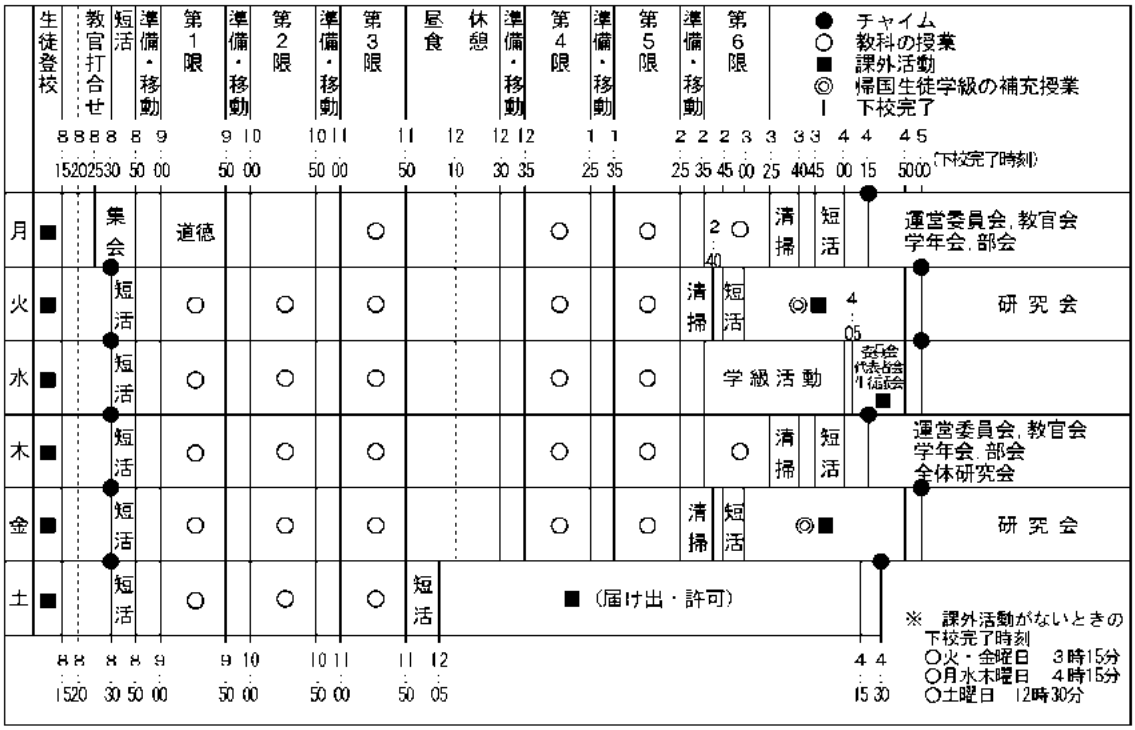
第３期（11月30日：第29週～

３年生３月４日：第40週

１・２年生３月18日：第42週）

		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語	合計
1年生	第1期	4	3	3	3	2	2	3	2	3	25
	第2期	4	3	3	3	2	1	2	2	3	23
	第3期	4	3	3	3	2	1	3	2	3	24
2年生	第1期	3	3	3	3	2	1	3	2	3	23
	第2期	3	3	3	3	1	1	2	2	3	21
	第3期	3	3	3	3	1	1	3	2	3	22
3年生	第1期	3	3	3	3	1	1	2	1	3	20
	第2期	3	2	3	2	1	1	3	1	3	19
	第3期	3	3	3	2	2	1	3	1	3	21

平成16年度　日課表・週予定表



② マイタイム

第2期から第3期にかけて，週2時間，20週にわたり，子どもたち一人一人が，興味・関心のある事柄から課題を設定し実施している。平成16年度の講座と活動人数は，表のとおりである。

No.	講　座　名	活動人数	No.	講　座　名	活動人数
1	国際協力	15	12	卓球	30
2	将棋	30	13	楽器	20
3	連弾ピアノ	16	14	アコースティックギター	14
4	朗読・アナウンス	25	15	ザ・サイエンス	10
5	ロボットコンテスト	30	16	ディベート	18
6	ジオラマづくり	20	17	バード・ウォッチング	17
7	食文化	24	18	百人一首の世界	21
8	手芸	25	19	歴史追究	21
9	イラスト	30	20	夢（机上）旅行	20
10	バドミントン	35	21	大道芸	21
11	硬式テニス	36	22	オセロ	31
			合　　計		509

③ 各種行事

・避難訓練（5，11月）

・学校祭（10月），合唱祭（2月）

・宿泊行事　1年：車山の生活（6月）　2年：小豆島の生活（6月）　3年：長崎の生活

（5 月）

・教育講演会　年 2 回実施（環境・国際理解・情報・性の中から二つ）

・クラスマッチ　1・2 年：5 月、3 年：6 月

⑹ 学務関係

① 部活動

部　名	人数	部　名	人数	部　名	人数
バスケットボール	58	ソフトテニス	75	バレーボール	25
サッカー	39	野　球	38	剣　道	44
コンピュータ	8	卓　球	21	陸　上	17
吹 奏 楽	20	美　術	20	合　唱	32
合　計		397			

② 生徒会活動

・生徒総会（6，1 月）

・委員会

文化委員会・放送委員会・運動委員会・美化委員会・図書委員会・新聞委員会・保健委員会

⑺ 健康管理

① 発育測定（4 月）

② 健康診断（4 月：尿検査・心電図・結核検診・耳鼻科検診）

（5 月：内科・検診・歯科検診・眼科検診）

③ 学校保健委員会（7，2 月）

④ 教育相談（5，10，1 月）

4　附属岡崎中学校

⑴　入学者選抜

平成16年度入学者選抜は，240名を越える応募者があり，第一次選抜として国語，理科，社会，算数の学力試験と集団面接を行った。小学校から届けられた書類の審査，学力検査，面接検査の結果を総合的に判断し，全職員参加の判定会議にて入学適格者を選出した。さらに第二次選抜として抽選を行い，本校入学予定者166名を決定した。

⑵　在学生

・１年生　男子　82名　　女子　80名　　合計　162名
・２年生　男子　83名　　女子　80名　　合計　163名
・３年生　男子　75名　　女子　91名　　合計　166名

⑶　留年生・休学者・退学者数　※一切なし

⑷　卒業生の主な進路

【国立】愛教大附属高校　豊田工業高等専門学校
【公立】岡崎高校　岡崎北高校　岡崎西高校　岡崎東高校　豊田西高校　豊田南高校
西尾高校　刈谷高校　刈谷北高校　安城東高校　知立東高校　国府高校
千種高校　豊橋東高校　明和高校　菊里高校　静岡県立沼津東高校
【私立】岡崎城西高校　光ヶ丘女子高校　人間環境大学岡崎学園高校　愛産大三河高校
滝高校　星城高校　安城学園高校　愛知淑徳高校　中京大中京高校　名城大附属高校
桜丘高校　慶應義塾高校　慶應義塾湘南藤沢高校　日本音楽高校　清風高校

⑸　教務関係（カリキュラム・成績評価）

教科の学習や総合的な学習の時間を活用した学習では，問題解決的学習過程をカリキュラムの根底においている。その中で，学ぶ意欲をもち，学び方を身につけ，本気で学ぶ子どもの姿をめざしてきた。9 教科と総合的な学習の時間を利用した活動において，教師の手だてや個への支援，適切な評価を行うことで，子どもが自ら学びを築いていく姿が築かれつつある。

⑹　学務関係（奨学金・授業料免除・課外活動）

奨学金，授業料免除を受けている生徒はいないが，就学援助「準要保護家庭」を受けている家庭が７家庭ある。課外活動としては13種類の部活動が生徒の自主的な運営で行われている。本年度の主な部活動結果は，水泳部の東海大会出場のほか，文化的部活動でも，さまざまな分野で活躍している。

⑺　健康管理

本年度の定期健康診断の実施計画は以下の通り。

●目　的
・自分の健康状態を知り，健康に関心をもち，常に健康の保持に心掛ける生徒を育てる。
・自分の疾病，異常の早期発見，治療，矯正に進んで努力できる生徒を育てる。

●実施内容と該当学年

	１　年	２　年	３　年	職　員	月　　日
身　体　測　定	○	○	○	○	１，２年： ４月13日 ３年：４月９日
視　力　測　定	○	○	○	○	
聴　力　測　定	○		○	○	
内　科　検　診 結　核　健　康　診　断	○	○	○		１年：４月28日 ２年：５月12日 ３年：４月12日
歯　科　検　診	○	○	○		４月22日
眼　科　検　診	○	○	○		５月11日，21日
耳　鼻　科　検　診	○				５月14日
心　電　図　検　査	○			●	４月20日
尿　検　査	○	○	○	○	４月27日
X　線　撮　影				○	５月13日
オリ合宿事前健康相談	☆				４月28日
２年宿泊活動事前健康相談		☆			５月12日
３年宿泊活動事前健康相談			☆		４月12日
体育大会事前健康相談	☆　●	☆　●	☆　●		９月６日

○‥全員　　●‥抽出　　☆‥希望
＊プール水質検査　７月９日　　＊保健委員会（入試）　１月14日

⑻　その他

・研究活動

平成16年10月５日㈫に，「学びたい！　－子どもが「本気で学ぶ」授業の実現から－」を研究主題とし，第37回生活教育研究協議会を開催した。多くの方々の参加を得て，全体発表，公開授業，さらに研究協議会を行い，４年計画の２年次にあたる本研究に対するご意見をうかがった。この会にあわせて，本研究の総論，教科論を一冊にまとめた204頁におよぶ「研究のあゆみ２」が発刊された。

・研究における地域への貢献

平成16年度の附属岡崎中学校に定期的に訪問し指導を受けた研究員は３名。

また，本校職員が平成16年度に各地域の研究会へ出向いて指導したのは50件を数え，さらに，本校への研究視察における来校者は34名。平成16年度科学研究費補助金（奨励研究Ｂ）について，本校から１名が採択され，研修活動に励んだ。

・教育実習

●前期実習　５月31日㈪～６月25日㈮

●後期実習　９月27日㈪～10月22日㈮

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	家庭	技術	英語	計
前期	6	5	5	5	4	3	5	2		8	43
後期	5	5	5	5	3	2	2	2	1	5	35

※内容：指導講話　授業観察　授業参加　授業実習　指導授業事前指導会
指導授業観察　指導授業事後指導会　研究授業　学級別指導会　教科別指導会
清掃指導　給食指導　部活動参加　特別研究授業（後期）

●基礎実習

9 月 6 日(月)～ 9 月10日(金)

Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	Eグループ	計
11	12	11	13	9	56

※内容：施設見学　授業観察　グループ間討議　環境整備

５　附属高等学校

⑴　平成17年度入学者選抜（選抜方法，志願者数・合格者数・入学者数，帰国子女の受入数）

①　選抜方法

ア　連絡入学の選抜方法

調査書，作文，面接をもとに総合的に判定する。

イ　推薦選抜の選抜方法

推薦書，調査書，作文，面接により総合的に選抜する。

ウ　一般選抜の選抜方法

学力検査（国語，数学，英語），調査書，面接，その他の資料により総合的に選抜する。

エ　海外帰国子女選抜の選抜方法

学力検査（国語，数学，英語），面接，書類審査を総合して行う。

②　志願者数

連絡入試　24名，公募制推薦選抜　51名，指定校制推薦選抜　６名，一般選抜　172名，海外帰国生徒選抜　２名

③　合格者数

連絡入試　17名，公募制推薦選抜　37名，指定校制推薦選抜　６名，一般選抜　138名，海外帰国生徒選抜　２名

④　入学者数

連絡入試　17名，公募制推薦選抜　37名，指定校制推薦選抜　６名，一般選抜　136名，海外帰国生徒選抜　２名

⑵　在学生数（平成17年３月１日現在）

１学年　169名（男　56名　女 113名）
２学年　198名（男　79名　女 119名）
３学年　169名（男　58名　女 111名）
全学年　536名（男 193名　女 343名）

⑶　卒業生の進路（卒業者数　169名 ＜男58名　女111名＞）

国公立大学	４名（男１名　女３名）	私立大学	72名（男30名　女42名）
公立短期大学	０名（男０名　女０名）	私立短期大学	17名（男０名　女17名）
公立専門学校	３名（男１名　女２名）	私立専門学校	45名（男15名　女30名）
就　職	７名（男３名　女４名）	無業（浪人含む）	21名（男８名　女13名）

⑷　学務関係（奨学金，授業料免除，課外活動）

①　奨学金受領者数

ア　日本育英会

１学年　０名（男０名　女０名）
２学年　１名（男０名　女１名）
３学年　０名（男０名　女０名）
全学年　１名（男０名　女１名）

②　授業料免除延べ数

ア　全額免除

１学年　４名，２学年　11名，３学年　10名，全学年　25名

イ　半額免除

1学年　3名，2学年　0名，3学年　0名，全学年　3名

③　課外活動

・第51回ＮＨＫ杯全国高校放送コンテスト愛知県大会　朗読部門入賞　2年　釋　英吏佳
・第2回　日本数学コンクール　奨励賞　2年　高須　裕介
・科学部，名古屋地学会第55回総会　優秀賞「光触媒による水質浄化」
・水泳部，県大会出場　西三支部予選　男子100mバタフライ3位　3年　高木　優多
　県大会出場　西三支部予選　男子200mバタフライ2位　3年　高木　優多
　県大会　男子200mバタフライ18位　3年　高木　優多
　県大会出場　西三支部予選　男子50m自由形6位　1年　鳥居　駿登
　県大会　男子50m自由形37位　1年　鳥居　駿登
・書道部，第3回岐阜女子大学全国書道展　特賞　3年　山崎　智代
・合唱部，愛知県合唱連盟主催ボーカルアンサンブルコンテスト　銀賞
　第11回愛知県ボーカルアンサンブルコンテスト（混声の部）　金賞
　第11回愛知県ボーカルアンサンブルコンテスト（同声の部）　銅賞
・写真部，第17回愛知県高等学校文化連盟西三河支部展　奨励賞　2年　水野　香菜
・第19回愛知県内普通科高校生海外派遣事業「第11回平成遣中使」　3年　大嶋　拓人

④　その他

・アカデミック・クエスト講座
　専門講座（7月13日～8月14日）大学教官15名，受講生37名
　総合講座（12月14日～12月28日）大学教官22名，受講生134名
・サタデー・ボランティア
　実施回数34回，延参加者数412名

⑸ 教務関係（カリキュラム）

平成16年度入学生教育課程表（６月19日改訂）

教科	科目	標準単位	1年	2年 文系	2年 理系	3年 文系	3年 文理系	3年 理系	文系	文理系	理系
国語	国語表現Ⅰ	②				2			総合４	総合４	総合４
	国語表現Ⅱ	2							現文４	現文４	現文４
	国語総合	④	4						古典５	古典６	古典3,6
	現代文	4		2	2	2	2	2	表現Ⅰ２		
	古典	4		3	2	2	3	1，○3	講読0,2		
	古典講読	2				○2			計15・17	計１４	計11,14
地理歴史	世界史Ａ	②	3					2	世Ａ3	世Ａ３	世Ａ3,5
	日本史Ａ	②		2	2				日Ａ 2	日Ａ 2	日Ａ 4,2
	地理Ａ	②							地Ａ	地Ａ	地Ａ
	世界史Ｂ	④				4	4		世Ｂ 4	世Ｂ 4	
	日本史Ｂ	④							日Ｂ	日Ｂ	
	地理Ｂ	④							地Ｂ	地Ｂ	
									計９	計９	計７
公民	現代社会	②						2	倫理4,2	倫理２	現社２
	倫理	②		2		2			政経2,4	政経２	
	政治経済	②				2	2		計６	計４	計２
数学	数学基礎	②				○2			数Ⅰ３	数Ⅰ３	数Ⅰ３
	数学Ⅰ	③	3						数Ａ２	数Ａ２	数Ａ２
	数学Ⅱ	4		3	3		3		数Ⅱ３	数Ⅱ６	数Ⅱ３
	数学Ⅲ	3						4	基礎0,2	数Ｂ２	数Ｂ２
	数学Ａ	2	2								数Ⅲ４
	数学Ｂ	2			2		2				数Ｃ２
	数学Ｃ	2						2	計８・10	計１３	計16
理科	理科基礎	②				○2			総Ａ 3	総Ａ 3	総Ａ 3
	理科総合Ａ	②	3						総Ｂ	総Ｂ	総Ｂ
	理科総合Ｂ	②							生Ⅰ 3	生Ⅰ 3	化Ⅰ３
	物理Ⅰ	③			3				地Ⅰ	地Ⅰ	物Ⅰ 3
	物理Ⅱ	3						4	基礎0,2	生Ⅱ 3	生Ⅰ
	化学Ⅰ	③			3					地Ⅱ	地Ⅰ
	化学Ⅱ	3						○3			物Ⅱ 4
	生物Ⅰ	③		3							生Ⅱ
	生物Ⅱ	3					3				地Ⅱ
	地学Ⅰ	③									化Ⅱ3,0
	地学Ⅱ	3							計６・８	計９	計13,16
保健体育	体育	⑦⑧	3	3	3	2	2	2			
	保健	②	1	1	1				計10	計10	計10
芸術	音楽Ⅰ	②	2						音Ⅰ 2	音Ⅰ 2	音Ⅰ 2
	美術Ⅰ	②							美Ⅰ	美Ⅰ	美Ⅰ
	書道Ⅰ	②							書Ⅰ	書Ⅰ	書Ⅰ
	音楽Ⅱ	2		1					音Ⅱ 1	音Ⅱ 1	
	美術Ⅱ	2							美Ⅱ	美Ⅱ	
	書道Ⅱ	2							書Ⅱ	書Ⅱ	
	音楽Ⅲ	2				○2			音Ⅲ 0,2		
	美術Ⅲ	2							美Ⅲ		
	書道Ⅲ	2							書Ⅲ		
									計３・５	計３	計２
外国語	オーラル・コミⅠ	②	2						OCⅠ２	OCⅠ２	OCⅠ２
	オーラル・コミⅡ	4							英Ⅰ３	英Ⅰ３	英Ⅰ３
	英語Ⅰ	③	3						英Ⅱ６	英Ⅱ５	英Ⅱ３
	英語Ⅱ	4		3	3	3	2		R ５	R ５	R ５
	リーディング	4		3	2	2	2	3	W ３	W ３	W ３
	ライティング	4				3	3	3	計19	計18	計16
家庭	家庭基礎	②		2	2	○2			基礎2,4	基礎２	基礎２
	家庭総合	④									
	生活技術	④							計 2･4	計 2	計 2
情報	情報Ａ	②	2						情Ａ２	情Ａ２	情Ａ２
	情報Ｂ	②							情Ｃ0,2		
	情報Ｃ	②				○2			計 2･4	計 2	計 2
総合的な学習の時間		③～６	1	1	1	1	1	1	計３	計 3	計 3
その他（希望者履修）	アカデミック・クエスト	3	3						0 ～ 3		
	サタデー・ボランティア	3	3						0 ～ 3		
	ＳＰＰ	1	1						0 ～ 1		
ホームルーム			1	1		1			計３	計３	計３
合計			30	30		30			90～97	90～97	90～97

＊　文系○印は２科目を選択する。

⑹ 健康管理

① 平成16年度定期健康診断　全校生徒対象，平成16年 4 月13日㈫～ 6 月18日㈮実施

② 平成16年度日本体育学校健康センター利用状況（平成17年 3 月31日現在）
医療支払い請求件数　延べ33件（男子18件，女子15件）

③ 平成16年度学校保健委員会（平成16年 7 月 7 日実施）
生徒の生活実態や健康問題についての情報交換

6　附属養護学校

⑴　教育目標

子どもの発達に応じ，基礎的生活能力及び態度を養い，情操を高め，一人ひとりが可能性を十分に発揮して，社会的に自立できる力を育てる。

⑵　教育方針

家庭との共通理解に立って，

① 身辺自立の能力と基本的生活習慣を確立する。
② 日常生活に必要な知識，技能，態度を培う。
③ 社会に適応する能力，社会的態度，豊かな情操を培う。
④ 子どもに集団の秩序やきまりの大切さをとらえさせ，連帯と協調の精神を培う。
⑤ 家庭と学校の相互の理解を深めるとともに，地域社会の信頼と協調を得るように努める。

⑶　運営の重点

①　一人ひとりを大切にする指導

ア　一人ひとりの発達を踏まえ，その子どもにふさわしい指導内容，効果的な指導法を工夫する。
イ　障害，能力，特性を踏まえた活動を用意し，個に即した学習過程，指導の手だてなどを工夫する。
ウ　具体的な操作活動を繰り返すことを大切にし，一人ひとりが体得するまで，根気強く指導にあたる。
エ　常に子どもの姿を見つめて，新たな動きや小さな伸びをきめ細かく記録する。
オ　長期一貫した指導を進め，その評価をする。

②　子どもを育てる環境づくり

ア　喜んで活動したくなるような教具や遊具，施設を用意する。
イ　遊具，実習地などを楽しく活用させる中で，子どもの諸能力を育む。
ウ　明るく豊かな壁面構成を考えるとともに，子どもが生活するにふさわしい教室づくりをする。

③　うるおいのある学校づくり

ア　生活にリズムと規律を与える日課，週の予定を取り入れる。
イ　上級生と下級生とがふれあう作業タイム，附養タイムなど，全校で活動する場を大切にする。
ウ　一人ひとりが生かされる学校行事，学部行事を実施するよう努める。

④　生きがいのある職場づくり

ア　互いの長所を認め，学び合うとともに，協力を惜しまないチームづくりに努める。
イ　学部，学級の枠を乗り越え，互いに連結を密にしながら，全職員が一丸となって全校の子どもを育てる。
ウ　研修の場と時間を確保し，教養と見識を高める。

⑤　学校と家庭，その他関係諸機関との連携を重視

ア　学校や家庭における子どもの姿を連絡し合い，指導に生かす。
イ　子どもの指導に関して，共通理解を図り，同一歩調で指導にあたる。
ウ　保護者の意見に耳を傾け，相互の信頼関係を深める。
エ　地域社会にも進んではたらきかけ，信頼と協調を得るように努める。
オ　学校評議員会を開催し，より開かれた学校づくりに努める。

⑷ 学部運営の概要

① 小 学 部

学　級	さくら学級		すみれ学級		あおい学級		合　計
学　年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	
人　数	1人	3人	2人	2人	4人	3人	15人

小学部では，子どもたちの今の姿をしっかりと見つめ，将来の望ましい姿を押さえ，日々の指導にあたっている。一人ひとりの発達段階は異なっているが，「日常生活で，子どもができることを増やし，そのことを生かす場面を多くする」ことをねらいとしている。

○心と体の動きを育てる
・動きたくなる場を設定して
・生活にリズムを持たせて
・多くの生活経験をさせて

○身辺処理の力を育てる
・優しさと厳しさを兼ね備えて
・自分のことは自分でさせて
・体得するまで繰り返し行わせて

○集団に参加する力を育てる
・友だちとのかかわりの場を増やして
・集団の中で一緒に生活させて
・いろいろな人とかかかわる場を持たせて

・タイム学習

木曜日を除く第1校時は，1年生から6年生までの小学部全員で，全学級合同タイム学習の枠の中に「遊びの時間」を設けている。「遊び」を通して個々のさまざまなねらいに迫ろうとするものである。毎日の学習を楽しい遊びから始めることで，情緒の安定も図ることができる。

・日常生活の指導

各学級とも，月曜日から金曜日の第4校時に日常生活の指導を位置付けている。食事の指導を中心にして，衣服の着脱，手洗い，排せつなどの身辺自立ができるようになることをめざしている。

② 中 学 部

学　年	1　年	2　年	3　年	合　計
人　数	6人	6人	4人	16人

中学部では，社会自立の基礎づくりを目標としている。そして，友だちと活動する中で人とのかかわりをもたせたり，自分のことは自分でできたりする子どもを育てたりする。また，生活の中に生かすことのできる基礎的な学力を習得させるとともに，働くことの尊さも，体験を通して培うように指導にあたっている。

○基礎学力をつける
・一人ひとりの子どもに合った教材・教具を工夫して
・多様な学習集団を編制して

○できることを増やす
・一人一役の活動の場を設定して
・生徒会，委員会活動を通して
・作業学習を通して

○人やものとのかかわりを広げる
・きらきらタイムを通して
・学部集会を通して
・学校・学部の行事に進んで参加して

・タイム学習

学年の枠をはずし，集団の中で，子どもの興味・関心に基づいた学習活動を組みながら，人やもの，こととのかかわりを広げていくことをねらって実施している。

・習熟度別編制

国語，数学，職業・家庭の3教科については，3段階の能力別クラスに編制し，学習の効率化や集団への適応を図っている。

＊平成16年度進路状況

中学部3年卒業の4名・・・・附属養護学校高等部へ，全員，進学

③ 高 等 部

学　年	1　年	2　年	3　年	合　計
人　数	9人	10人	9人	28人

高等部では，卒業後，社会的にも職業的にも自立できるように，社会の中で，生きる力を身につけさせるとともに，生活経験を広げて，働く意欲や体力を高めることをねらいにしている。

○社会に生きる力を伸ばす　・日常生活にかかわる内容を学習対象にして
　・学校，学部の行事やタイム学習を通して

○働く意欲を高める　・現場実習，校内実習，職場訪問を通して
　・作業学習を通して

○社会とのかかわりを広げる　・校外学習を通して
　・他校との交流を通して

・タイム学習

買い物学習，外食学習，交歓ソフトボール試合など独自性のある活動や，教科の枠を取りはらった楽しい学習活動を通して，個々が社会自立をめざしたり，生きて働く力を培うことで，生活をひろげられるようにしている。

・作業学習・現場実習

農園芸・窯業・縫製・木工・織物の各班に分かれて作業学習を行う。1・2年生では，1週間の現場実習を行い，長期休業中には職場体験を随時実施している。3年生では，各事業所で前・後期，各2週間の現場実習を行っている。

＊平成16年度進路状況

高等部3年卒業の9名・・・・・就職者：5名
　作業所従事者：4名

7　附属幼稚園

⑴　入園者選抜

①　応募資格

・３歳児：平成13年４月２日から平成14年４月１日までに生まれた幼児

・４歳児：平成12年４月２日から平成13年４月１日までに生まれた幼児

・本園指定の地域内に居住する幼児（小学校区を単位とする）

・保護者又はそれにかわる者が必ず付き添って，徒歩又は公共交通機関で登降園できる幼児

②　選抜の方法

・第一次選考：グループ遊びを通しての行動観察及び親子面接

・第二次選考：抽選（募集人数を超えた場合）

③　志願者数その他

【３歳児】　募集人数：20名
　　志願者数：男児67名　女児64名　計 131名
　　入園者数：男児10名　女児10名　計　20名

【４歳児】　募集人数：50名程度
　　志願者数：男児68名　女児47名　計 115名
　　入園者数：男児25名　女児26名　計　51名

⑵　在園者数（平成17年３月１日現在）

【３歳児】　男児10名　女児９名　計19名

【４歳児】　男児34名　女児35名　計69名

【５歳児】　男児33名　女児34名　計67名

⑶　進学状況

平成16年度修了児：計67名　〔進学先〕

附属名古屋小学校	61名
名古屋市内公立小学校	４名
名古屋市内私立小学校	１名
富山県内公立小学校	１名

⑷　教務関係

①　年間教育日数

・第１学期（４月９日～７月16日）計15週

・第２学期（９月１日～12月13日）計16週

・第３学期（１月11日～３月18日）計11週　　総計42週

②　日・週の保育計画

○月・火・木・金：一日保育（弁当あり）　水：半日保育（弁当なし）

○８：45～９：00　登園
　　指導計画による保育
　11：30～　昼食　　※半日保育の場合は降園
　13：30～14：00　降園　　※時期，年齢によって変更あり

③　各種行事

・誕生会（毎月：保護者参加）　・避難訓練（年６回）

・運動会（10月），生活発表会（２月）

・園外保育：じゃがいも，さつまいも遠足《大学自然観察実習園》

水族館，科学館見学，矢田学区老人会誕生会参加《東ふれあい広場》
虫取り，親子遠足《小幡緑地公園》
散歩《附属小・中キャンパス内，矢田川緑地，大幸・矢田・宮の腰公園》
おやつやカレー会食の買い物《近隣スーパーなど》

・ＰＴＡとの共催行事：夏祭り（７月），クリスマスのお楽しみ会（12月）
もちつき（１月）
・保育参観・参加，休日保育参加，個人・学級懇談会，保護者会

⑸　学務関係

○　奨学金，授業料免除　なし
○　課外活動（預かり保育・未就園児関係）　なし

⑹　健康管理

・発育測定（年４回）
・尿検査（４月）　・寄生虫，ギョウ虫検査（５月）
・視力検査（５，６月）　・内科，歯科，眼科検診（６月）

⑺　その他

○　研究活動
・研究紀要第33集発行
・研究協議会開催（11月12日㈮）
「幼児期の数や量にかかわる体験を考える～一つ一つの場面を丁寧に見つめて～」

○　執筆者等の派遣，研修
・愛知県幼稚園教育研究会研究集録作成執筆者として派遣　年間12回
・平成16年度幼稚園教育課程研究協議会（文部科学省）に愛知県の代表として派遣
・平成16年度幼稚園教育課程理解推進事業（愛知県）保育技術専門講座に派遣
・平成16年度国際的な視野，見識を有する中核的教員を育成するための海外派遣研修参加

○　岐阜県総合教育センター研修講座（幼稚園教員12年目研修）開催
岐阜県公立幼稚園９名　岐阜県私立幼稚園11名　研修管理課１名　（計21名）

○　学生・院生の卒業，修士論文研究及び参観
・愛知教育大学幼児教育講座　５名　・同学校教育専攻生活科教育講座　１名　他

○　参観者
・三重県公立幼稚園教諭　８名　・滋賀県公立幼稚園教諭　１名　他

○　教育実習受け入れ

・基礎実習	幼児教育講座	９月６，７，８，10日	19名
	養護教育講座	９月８，10日	９名
・主免実習事前指導	幼児教育講座	９月３日　20名　・　15日　11名	
・主免実習	幼児教育講座	９月27日～10月22日	11名
・応用実習	幼児教育講座	12月６日～12月10日	７名
	養護教育講座	12月６日～12月10日	１名

第２節　附属図書館

本学附属図書館は，本学の理念に基づいた教育・研究活動を支援するために多様な資料・情報を収集整理し提供している。また，他大学等の研究者や初等中等教育教員を含む一般市民に対しても所蔵する資料・情報を迅速かつ確実に提供していく。なお，従来の紙媒体以外の資料・情報の収集も積極的に行い，本学の教育・研究活動のために提供していくとともに，他大学図書館との情報交換における協力を一層推進し，本学における教育・研究活動に関する情報を社会に対して発信していく考えである。このような附属図書館の考え方を遂行していくために，学術情報を収集・整理・提供するシステムを整備し，利用者にとって学術情報の検索・利用が容易にできることが不可欠であり，最も重要である。

１　事業

⑴　時間外開館延長の実施

2000年度より夜間大学院及び昼夜間コースが発足したのにあわせ，大学院授業開講日の開館時間を２時間延長した。そのため，授業開講日の開館時間は月・木曜日が９時から20時，火・水・金曜日が９時から22時，授業が行われない日は９時から17時，土曜日は10時から16時となった。また，2002年10月より日曜日・祝日の開館を試行的に実施し，さらに，2003年４月より開館時間をさらに延長して，授業開講日の月・木曜日の開館時間を22時までとした。これにより，授業開講日の月～金曜日はすべて22時までの開館とし，利用へのサービス時間の拡大を行った。また，土・日・祝日の利用者からの声を反映させて11時から17時までとした。開館日の増加並びに開館時間の延長により，夜間大学院生ばかりでなく，学部学生からも図書館の利用が便利になったとの声が多く聞こえ，図書館利用者の拡大に役立っている。

⑵　図書館利用説明会の実施

最近の図書館利用者の減少傾向の折り，本学図書館の理解と学生の読書意欲を高め利用の拡大を図るため，年３回の図書館利用説明会を実施した。第１回目は１，２年生を対象に「図書館ツアー，ホームページの紹介，蔵書検索方法」を４月に，第２回目，第３回目は全学生を対象に「論文作成のための文献収集法」を７月及び11月に実施した。なお，全般的には参加者数も多く，参加した学生からは，知らないことがわかり参加してよかったと大変好評であった。

⑶　電子ジャーナルの提供

近年，急速に発達した学術雑誌の電子化に対応して，本学でも，附属図書館のホームページからリンクを張り，学内のどこからでもアクセスできるようになっている。現在，利用可能な電子ジャーナルは，外国出版社のものとしてはエルゼビア・サイエンス社を始め５社と，国内では科学技術振興事業団（J-STAGE）と国立情報学研究所（NACSIS-ELS）が利用できるようになっている。

⑷　情報アクセス環境の整備

学内ＬＡＮの整備及び情報コンセントの設置により，学生が保持しているノート型パソコンから接続できるように，88ポートの情報コンセントが閲覧室に設置されている。学生には好評で，図書館での利用者も多くなっている。さらに，CD/DVD-ROMサーバの導入により，ネットワーク対応のデータベースとして，雑誌記事索引が利用でき，また，学外の図書館等の蔵書検索を各研究室からも利用できるようになっている。

⑸　共通科目図書コーナーと児童資料コーナーの併設

カリキュラム改革に対応して充実が図られた共通科目に対して，その担当教員が科目の目標と参考となる図書を選定のうえ，充実した「共通科目図書コーナー」を図書館 3 階閲覧室に設置している。また，子どもの成長・発達を支援する児童図書を整備し，学生あるいは多くの市民も利用できる資料として，幼児教育講座の教員によって選定された「児童資料コーナー」を図書館 3 階閲覧室に併設している。さらに，これらの図書・資料をできるだけ多くの学生等に利用し易いよう，それぞれの読書案内を作成し新入生などに配布している。

⑹　愛教大資料コーナーの設置

本学の教育・研究に関する活動状況等を学内外の方に広く知らせ，利用できるように本学が発行した報告書等を蔵書目録に登録し，2002年度より「愛教大資料コーナー」を図書館 2 階カウンター前に設置している。

2　利用

⑴　年間開館状況

開館総日数（日）	平日時間外開館日数（日）	土曜開館日数（日）	日祝日開館日数（日）	平日時間外開館時間数（時間）	土曜開館時間数（時間）	日祝日開館時間数（時間）
306	142	35	48	710	210	288

⑵　年間入館者数

（単位：人）

学内者	学外者	合計
237,891	1,713	239,604

⑶　年間貸出冊数

（単位：人）

	平日	土曜	日祝日	合計
教職員	3,749	181	196	4,126
学生	43,144	2,277	2,081	47,502
学外者	850	190	173	1,213
合計	47,743	2,648	2,450	52,841

⑷　相互利用件数

（単位：件）

	相互貸借		文献複写		合計
	受付	依頼	受付	依頼	
教職員		177		1,277	1,454
学生		45		626	671
学外	386		1,288		1,674
合計	386	222	1,288	1,903	3,799

⑸ **レファレンス件数**　（単位：件）

	所在調査	事項調査	利用指導	合　計
教　職　員	84	22	48	154
学　生	150	43	182	375
学　外	100	32	22	154
合　計	334	97	252	683

3　資料

⑴ **蔵書冊数（2005年３月31日現在）**　（単位：冊）

和　書	洋　書	合　計
542,214（341,490）	136,626（85,286）	678,840（426,776）

（注）（　）内は目録データベース入力冊数

年間図書受入冊数，年間雑誌受入種類数が，予算の減少に伴って減少していく中，資料の選定において出版状況を把握し，利用者の要求を反映すべき資料を選定することが必要であるが，特に外国雑誌については，教育・研究活動を支援するために電子ジャーナルの提供をはじめとして他大学との連携を図り，利用に供するための環境設定が早急に求められている。

⑵ **年間図書受入冊数**　（単位：冊）

和　書	洋　書	合　計
6,732	1,326	8,058

⑶ **雑誌種類数（2005年３月31日現在）**　（単位：種類）

和　雑　誌	洋　雑　誌	合　計
8,430	1,804	10,234

⑷ **年間雑誌受入種類数**　（単位：種類）

和　雑　誌	洋　雑　誌	合　計
2,355	461	2,816

4　刊行物

愛知教育大学附属図書館概要
図書館利用案内
図書館だより　年３回
共通科目のための読書案内
児童図書のための読書案内

第 3 節　センター

1　21世紀教育創造センター

⑴　センター設立の趣旨

本センターは本学における教育の充実・改善を図るため，学内共同教育研究施設として設置するものである。

⑵　センターの目的

本学の学部・大学院の教育課程・授業科目・教育内容等本学の行う教育全般について，専門的に調査研究を行い，教育課程・授業科目・教育内容などの改善や本学の教育研究を通じた社会との協力共同について，提起し実行に移すためのヘッドクォーターとしての役割をはたす。

特に教育研究に関わる中期目標・中期計画の年度計画や立案実行を行う中核的役割を担う。

⑶　センターの構成

このセンターは大学教育開発部門（主任研究員　教授１，研究員　助教授１），評価対応部門（主任研究員　教授１，研究員　助教授１），社会連携部門（現在欠員）の 3 部門からなる教員組織からなっている。

⑷　センターの活動

① 学生の生活と学びの支援システムの充実：４月実施の充実策をまとめる。提案が役員会で了承され，関連委員会から提案，役員会より 3 月18日の教授会に提案の部分抜粋が報告・了承される。センターとして，制度改革を含め今後このような学生支援システム・充実の検討を進めていく。

② 学習支援ＩＴシステム作成委員会：センター研究員以外の委員は 3 月12日まで委嘱済み。半年の計画と最初の専門委員会の開催日程（４／19）を決定し，４月から開始し，現在学習支援ＩＴシステムの構築を検討している。

③ センター専用Webの開設

④ 2000年度教育改革の現状分析：継続中。進行している改善・改革活動に資するために短期間に済ませるべく鋭意分析を継続している。2000年度教育改革の現状分析を行い，整理が済んでいる部分については４月の教授会に報告。

⑤ 関連委員会との連携：関連委員会に諮るべきものはそこで検討しているが，現在進行中である。「中期計画」における共同で取組む課題についてはどのように進めていくか具体的手順の話し合いが必要。センターの増員も必要。

2　教育実践総合センター

⑴　センター設立の趣旨

21世紀を迎え，国際化・情報化の進展，科学技術の発達，少子化・高齢化の進行，環境問題等，現代社会は複雑化・深刻化してきており，未来を生きる子どもたちの教育についても混迷を深めてきている。学校教育も大改革の時代を迎え，週５日制，新しい教育課程の創造，総合的学習，学力問題など新しい課題に直面している。子どもを取り巻く状況もいじめや不登校の益々の深刻化，低学年での学級崩壊，アスプレーション・クライシス等々の早急に対応しなければならない課題を突きつけてきている。

本学教育実践総合センターは，こうした学校教育を取り巻く諸問題に現実的に対処すべく，旧教育工学センターと旧教科教育センター（学内措置による）とを発展的に改組して，平成９年度に設立された。

⑵　センターの目的

センターは，“教育実践及び教育臨床にかかわる理論的，実践的並びに実際的研究を行うとともに，学校教育諸問題に適切に対処することのできる教員並びに教育実践の指導者の養成に寄与すること（愛知教育大学教育実践総合センター規程第２条)”を目的としている。

⑶　センターの構成

このセンターは２部門４分野（教育実践基礎研究部門－教育メディア開発分野・教科教育研究分野，教育臨床研究部門－発達支援基礎研究分野・教育臨床分野）からなり，教授２，助教授１，講師１，客員助教授２（愛知県教育委員会並びに名古屋市教育委員会から各１）の教員組織と事務職員１，事務補佐員１の事務組織及び学内外の研究員および研究協力員とによって運営されている。

平成16年度の各分野の研究員，研究協力員の実数は下表の通りである。

部　門	分　野	研　究　員			研究協力員
		学　内	附属学校園	合　計	
教育実践基礎研究部門	教育メディア開発分野	14	1	15	2
	教科教育研究分野	62	13	75	53
教育臨床部門	発達支援基礎研究分野	16	2	18	7
	教育臨床分野	8	0	8	47

⑷　センターの活動

研究活動

センターでは先に述べた，４名の専任教員と２名の客員助教授及び多数の研究員・研究協力員が教育研究に従事している。今年度は，主に次のような活動を行った。

◎教育実践基礎研究部門

＜教育メディア開発分野＞

１）日本の教育工学関連論文の英文抄録作成と出版

Abstracting Japanese Reports on Educational Technology Research into English [24] *Educational Technology Research*, 27, 71-82, 2004

２）「教育心理学」教材の作成－翻訳字幕スーパーの添付

・B.F.Skinner：A Fresh Appraisal

・Vygotsky's Developmental Theory：An Introduction
・Play：A Vygotskian Approach
・Scaffolding Self-Regulated Learning in Primary Classroom
・Bandura's Social Cognitive Theory： An Introduction
・Morality：Judgments and Action
・Erik H. Erikson：A Life's Work
・Perfomace Assessment：A Teacher's Way of Knowing

＜教科教育研究分野＞

分野研究会

第 1 回研究会（18名参加）／ 6 月16日㈬13:00～
平成15年度活動報告及び会計報告　②平成16年度活動計画

第 2 回研究会（11名参加）／6月25日㈮14:30～
附属高等学校との連携研究会
研究授業　ホームルーム活動（第 1 学年）　「ボランティア活動って何だろう」
授業者：附属高等学校　櫛田 敏宏
刈谷市社会福祉協議会　佐々木 孝
研究協議

第 3 回研究会（37名参加）／ 7 月14㈬11:45～
附属高等学校との連携研究会
研究授業　情報Ａ（第 1 学年）「情報の共有」
授業者：附属高等学校　野田 正幸
研究協議

第 4 回研究会（13名参加）／ 9 月24日㈮15:30
附属幼稚園との連携研究会
研究協議「幼児期の数と量にかかわる体験を考える」
レポーター：附属幼稚園　水谷　幸子
廣田　邦子

第 5 回研究会（15名参加）／10月27日㈬11:00～
附属高等学校との連携研究会
研究授業　選択政治経済（第 3 学年）「現代世界と日本」
授業者：附属高等学校　小笠原 敬一
研究協議

◎教育臨床研究部門

＜発達支援基礎研究分野＞

①　分野研究会

第 1 回研究会（ 7 名参加）／11月17日㈬15:30～
議題：平成１６年度活動計画

第 2 回研究会（ 5 名参加）／12月15日㈬16:00～
論題：「ドルトによる子どもの新しい教育法」
報告者：愛知教育大学外国語教育講座　山中哲夫教授

第 3 回研究会（ 8 名参加）／ 2 月 2 日㈬16:00～
論題：「職業資格は学歴主義を乗り越えられるか？―職業資格『効果』測定の試み」
報告者：愛知教育大学学校教育講座　阿形健司助教授

②　ＳＯＢＡ（いじめ通信相談プロジェクト）研究会（毎週火曜）

寄せられた投書（電子メール）に対する返答の作成と，子どもの発達（いじめ・不登校・虐待・障害）に関する学習会

＜教育臨床分野＞

① 愛知学校カウンセリング研修会（毎月第１・３金曜）関連文献の精読ならびに事例検討

② 愛知学校教育相談事例研究会（毎月第２金曜，夏期・冬期合宿各１）

③ 愛教大心理療法研究会（毎月第３木曜）

教育事業

センターでは，本年度に次の教育事業を行った。

① 教科教育研究分野によるフレンドシップ事業

『訪問科学実験教室』の実施

１）親子ふれあい祭り	５月29日㈯	幼稚園，小学生	参加学生数10名
２）西尾市立平坂小学校	６月23日㈬	５・６年生209名	参加学生数82名
３）刈谷市立平成小学校子ども会	７月24日㈯	小学生110名 保護者50名	参加学生数37名
４）西尾市立平坂小学校	９月22日㈬	３・４年生222名	参加学生数64名
５）岡崎市立広幡小学校	10月６日㈬	５・６年生192名	参加学生数32名
６）豊橋科学展	10月16日㈯	小・中学生	参加学生数12名
７）岡崎市立常磐東小学校	10月27日㈬	３年生～６年生66名	参加学生数19名
８）岡崎市立竜海中学校文化祭	11月13日㈯	１年生～３年生	参加学生数17名
９）三好町立北部小学校	11月17日㈬	３年生～６年生280名	参加学生数57名
10）日進市立香久山小学校	12月１日㈬	５・６年生360名	参加学生数70名
11）ミニミニ子どもまつり	12月12日㈰	幼稚園・小学生	参加学生数10名
12）岡崎市立岩津小学校	12月８日㈬	３年生～６年生295名	参加学生数70名
13）岡崎市立小豆坂小学校	12月15日㈬	５年生107名	参加学生数48名
14）刈谷市立住吉小学校	２月22日㈫	５・６年生166名	参加学生数41名

② 子ども対象の公開講座の実施

１）小学生を対象としたおもしろ科学実験教室

７月３日㈯ 講師：戸谷義明，平賀伸夫 参加児童：１年生～６年生14名，参加学生数13名

２）中学生を対象としたおもしろ科学実験教室

12月４日㈯ 講師：戸谷義明，平賀伸夫 参加生徒：１・２年生６名，参加学生数10名

③ 教師等のための公開講座の実施

１）『学校教育臨床－事例研究Ａ－』（16.6.5～17.3.5 全９回27時間，主任講師：生島博之，参加者７名）

２）『箱庭づくり体験』（16.6.6～6.26, 全２回９時間，主任講師：生島博之，参加者24名）

３）『学校教育臨床－事例研究Ｂ－』（16.6.19～17.3.19, 全９回27時間，主任講師：生島博之，参加者16名）

４）『教育臨床セミナー』（16.8.18～8.20, 3 日集中17時間，主任講師：佐藤勝利，参加者30名）

④ 附属岡崎中学校でのスクールカウンセリングの実施（16.4.12～17.3.26，全19回95時間）

⑤ 分野による教育事業

１）愛教大心理療法研究会 毎月1回 臨床心理士他10名

２）ケースカンファレンス①（センター協力員・院生対象）15回 院生ほか60名 教員３名～８名

ケースカンファレンス②（いじめ・不登校・学級崩壊プロジェクトを兼ねる）７回 教

員３名・院生10名　内地留学生４名 附属教員２名

３）学校教育相談事例研究会 （含宿泊研修＝夏期・冬期）毎月１回 小中高教員等30名

⑥　センター後援の虐待防止講座の実施

『学校関係者虐待防止講座・実践コース』

（16.8.19，子どもの虐待防止ネットワーク・あいち（ＣＡＰＮＡ）主催，当センターのほか，愛知県教育委員会後援）

相談事業

センターでは，本年度に次の相談事業を行った。

①　面接相談（H.15.12.1～H.16.11.30）

受付ケース数 126（208人）　前年度からの引継ぎ53（91人）　新規受付73（117人）

総面接時間3,347時間

②　対教師等相談

受付ケース数　74　　前年度からの引継ぎ　9　　新規受付65

総面接時間116時間

地域・教育委員会等と連携した活動

センターでは，本年度に地域・教育委員会等と連携して，次の活動を行った。

①　愛知県教育委員会派遣教員内地留学生の臨床教育（４名の教員内地留学生＝大学院レベルの受入れ）

②　県・各市教育委員会との連携

１）師勝町ＳＳＮ事業への協力 （主任講師：佐藤勝利，参加者100名）

２）刈谷市富士松東小学校・現職教育研修会 （主任講師：原口芳明，参加者20名）

３）三好町みよし悠学カレッジ（主任講師：原口芳明，参加者21名）

４）三好町立三好ヶ丘小学校・学校保健委員会（主任講師：坂井　誠，参加者290名）

５）西三北教育相談部会（主任講師：菊島勝也，参加者40名）

③　県・各市教育委員会のいじめ・不登校等関連委員会への協力（愛知県，同尾張教育事務所，名古屋市，豊田市，刈谷市，知立市，安城市，西尾市ほか）

④　「学校教育支援データベース」による愛知県内小・中学校を主とする校内研修会講師，保護者会講師，児童・生徒向けの講師等の紹介（16年１～12月の依頼件数55件）

⑤　学生ボランティアの派遣（名古屋市子ども適応相談センター＝フレンドリー・ナウ，名古屋市トワイライトスクール，豊田市注意欠陥多動性障害児親の会，知立市教育委員会，知多市教育委員会ほか）

⑥　ＳＯＢＡメンバーによる，フリースクール「クツナ池の原センター」（田原町）との交流事業

教育実践総合センター刊行物

センターでは，本年度に次の刊行物を刊行した。

１）『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第８号（平成17年２月）

２）『ＳＣＯＰＥⅡ』第８号（平成17年３月）

３）『学校教育支援データベ－ス－Ver.4－』（平成17年３月）

４）『みんなで「いじめ」をかんがえよう』（平成16年８月）

５）『教育臨床事例研究』第12号（平成16年９月）

『教育臨床事例研究』第13号（平成17年３月）

6）『教育臨床学研究』（愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室紀要）第6号（平成17年3月）
7）『ＳＯＢＡ活動報告書』第2号（平成17年3月）

その他の活動

その他，センターでは，本年度に次の活動を行った。

1）教科書データベースの作成
2）教育実践記録データベースの作成
3）教材作成環境の整備
4）教育実習ビデオライブラリーの公開

事業日誌

4月15日	愛教大心理療法研究会（以降毎月1回開催，対象：ＯＢ臨床心理士ほか）
4月16日	愛知学校教育相談事例研究会（以降毎月1回開催，対象：教員等）
4月23日	愛知学校カウンセリング研修会（以降毎月2回開催，対象：教員等）
4月24日	ケースカンファレンス（以降毎月2回の頻度で開催）
5月11日	第1回教育実践総合センター委員会
6月5日～6日	愛知学校教育相談事例研究会宿泊研修（伊良湖臨海教育実験実習施設）
6月5日～3月5日	公開講座「学校教育臨床－事例研究Ａ－」（全9回，対象：教員等）
6月6日～26日	公開講座「箱庭づくり体験」（全2回，対象：一般）
6月10日	第2回教育実践総合センター委員会
6月16日	第1回教科教育研究分野研究員会議・研究会
6月19日～3月19日	公開講座「学校教育臨床－事例研究Ｂ－」（全9回，対象：保育士等）
6月25日	第2回教科教育研究分野研究員会議・研究会
7月3日	公開講座「小学生を対象としたおもしろ科学実験教室」
7月12日	第3回教育実践総合センター委員会
7月14日	第3回教科教育研究分野研究員会議・研究会
8月	「みんなで「いじめ」をかんがえよう」（ＳＯＢＡリーフレット）刊行
8月	フリースクール「クツナ池の原センター」との交流事業
8月19日	ＣＡＰＮＡ「学校関係者虐待防止講座・実践コース」（対象：教員ほか）の後援
8月18日～20日	公開講座「教育臨床セミナー」（対象：教員等）
9月	「教育臨床事例研究」第12号発行
9月24日	第4回教科教育研究分野研究員会議・研究会
10月27日	第5回教科教育研究分野研究員会議・研究会
11月24日	センター紀要編集委員会
12月4日	公開講座「中学生を対象としたおもしろ科学実験教室」
1月24日	第4回教育実践総合センター委員会
2月19日～20日	愛知学校教育相談事例研究会宿泊研修
2月	第5回教育実践総合センター委員会
2月下旬	「愛知教育大学教育実践総合センター紀要」第8号発行
3月	平成16年度教育実践総合センター運営協議会
	「ＳＣＯＰＥⅡ」（教科教育研究分野ニュースレター）No.8発行
	「学校教育データベース－Ver.4－」発行

「教育臨床事例研究」第13号発行
「教育臨床学研究」（センター心理教育相談室紀要）第６号発行
「ＳＯＢＡ活動報告書」第２号発行

3　障害児治療教育センター

本センターは，①優れた資質をもつ障害児教育教員の養成，②障害児の治療教育に関する研究の推進，③地域社会との連携，以上の三本柱を中心にして運営されてきている。

⑴　臨床活動（地域との連携）

相談事業の項で述べたように，平成16年には，新規に41件の相談依頼があり，平成15年度より継続して治療教育を行っているケースは117件であった。また，同じクライエントが週１回ペースで通っている場合が多く，相談の総件数としては延べ3257件を数えた。

表１には，平成16年１月より12月までの１年間に相談に来所された総計158名の居住地域別内訳を示した。大学のある刈谷市が最も多く30名（19%），次いで知立市20名，名古屋市19名など大学の近辺が多いが，近隣地域を中心としながらも，愛知県全域から相談に来ている。

表１　平成16年　来談ケースの居住地域

刈谷市	30	名古屋市	19
豊田市	11	豊明市	5
知立市	20	日進市	3
西加茂郡	5	愛知郡	1
岡崎市	13	瀬戸市	2
安城市	7	春日井市	4
高浜市	3	犬山市	1
西尾市	3	丹羽郡	3
碧南市	1	一宮市	1
蒲郡市	3	東海市	3
幡豆郡	1	大府市	3
額田郡	1	半田市	3
豊橋市	3	知多市	1
豊川市	4	知多郡	2
		他府県	2
総計　158			

地域との連携は，本センターにとって極めて重要であり，いわば地域に貢献することが同時に教育・研究につながるのである。本センター設置以来，精力的に臨床活動を行ってきており，次第に地域社会より障害児の治療教育の機関として認められ，信頼されるようになってきた。最近では，新規の相談が年30～60件，継続的に治療教育を行っている件数は100件ほどであり，専任教員２名，教務職員１名では，このあたりが相談受け入れのキャパシティの限界と言えよう。

⑵　教育活動

優れた障害児教育教員を養成するためには，臨床実習は欠かせないであろう。学部生や大学院生のなかで希望する者は，センタースタッフとして参加し，教員の指導のもとで子どものプレイセラピーを担当する。そして週１回，１年間継続して実践しながら障害児の発達援助の原理や方法を学習していくのである。表２には，平成16年度に参加した学生，院生の数を示した。参加した学生の内訳は，一年課程（３課程）も含めた障害児教育教員養成課程の学生が大半を占めている。

表２　平成16年度　臨床教育実習生の内訳（人数）

学部生			院生		特専一年課程	研修生	合計
２年	３年	４年	M１	M２			
8	10	14	1	2	14	7	56

なお，障害児教育教員養成課程の４年生２名はセンターでの臨床実習の実践をまとめ，卒業論文として結実させている。また，障害児教育専攻の大学院生１名は，本センターで実践した障害児への音楽療法を素材として修士論文をまとめた。

本センターの専任教員２名（神野・吉岡）は，障害児教育教員養成課程の学生や障害児教育専攻の院生及び特殊教育特別専攻科の学生に対していくつか講義を担当しており，本センターにお

ける臨床実践活動で得た知見を学生・院生に教授している。

⑶ 研究活動

本センターでは，障害児教育講座の支援を受けながら研究誌「治療教育学研究」を発行しており，本センターの臨床活動を通して得られる研究成果の一部を発表している。平成17年３月には「治療教育学研究第25輯」を刊行することができた。

平成16年度は，これまで本センターと附属養護学校との連携のもとに行われてきた研究の５年目として，「障害児を育てること・教えること（本センターと附養との連携）－自閉症児の発達支援に関する事例研究⑸－」を行った。

⑷ 社会的活動

本センターでは，障害児通園施設，障害児学級，特殊教育諸学校等の教職員などを対象として平成11年度より継続して公開講座を開催している。本年度も10月から12月まで合計６回開催され，参加者は18名であった。講師として，神野，吉岡，森崎，田中が参加した。

4 保健管理センター

⑴ はじめに

学生に対する保健管理センターの役割については，本年次報告の「学生の健康管理と学生相談」の章の中で，保健管理センターの理念や歴史とともに紹介したので，ここでは割愛する。本章では，教職員の健康管理について重点的に述べる。周知の通り，平成16年度より本学は独立行政法人化され，国立大学法人（National University Corporation）となった。官（government）から民（citizen）への変換は，本学にとって未だかつて経験したことのない大きな変革である。教官・事務官は，教員・事務（職）員への名称が変更になった。教職員の健康管理の法的管轄は，それまでの人事院規則から労働安全衛生法へと移った。これによりさらに細かい制約が課せられると同時に，安全管理上の問題が発生した時の職場の管理監督責任が問われることになる。また労働災害（労災）の申請に問題が生じたりすると，労働基準監督署による立ち入り調査や監査が入ることもあり，場合によっては罰則を科せられることもあり得る。よって日頃から教職員の安全衛生管理活動を積極的に行う必要がある。

人事院規則時代の本学における教官・事務官の健康管理は，人事課安全管理担当が中心となり，保健管理センターの医師と看護師が医療面で協力するという体制で行われてきた。独立行政法人化に伴って人事課安全管理担当は，総務部人事課福祉係へと改変されたという経緯があるが，基本的に同じ部署で引き続き，安全衛生関係の庶務を行っている。労働安全衛生法時代に入ってからは，保健管理センターの医師が，大学の産業医を担当することになった。労働安全衛生法による職場の労働衛生管理の基本は，①労働衛生管理体制の確立，②作業環境管理，③作業管理，④健康管理，⑤労働衛生教育の５つに大別される。本学の労働衛生管理は，事業主である学長の義務であり，産業医はその活動を支援しなくてはいけない。保健管理センターは，このような重大な責務を背負うことになったのである。保健管理センターの業務は，これまでの学校保健法（主に学生を対象）のみならず，新たに労働安全衛生法（教職員を対象）に対しても責務を負うことになった。これが保健管理センターの最近の動向である。

⑵ 2004年度の活動の概要

学生の健康管理については，本年次報告の「学生の健康管理と学生相談」の章を参照していただきたい。本稿では，労働安全衛生に関して，既に述べた安全衛生管理の５つの柱に沿って，保健管理センターとしての貢献を述べる。

① 安全衛生管理体制の確立

2004年 4 月に独立行政法人化した後，労働安全衛生法では毎月開催することが義務づけられている安全衛生委員会に保健管理センターから医師の 2 名が産業医及び衛生管理者を代表して参加し，大学の安全衛生管理運営に積極的に協力してきた。人事院規則からの移行に対して大学システム面のみならず教職員の意識に至るまで，労働安全衛生法に適合するのには時間を要すると思われる。2004年度は，人事院規則時代の本学の安全衛生管理における弱点や盲点が徐々に明らかになった。それらの問題点を整理して，随時解決に向けて取り組んだ。本学では労働安全衛生法に向けての対策が遅れていたので，それを補う業務も多かった。中でも衛生管理者選定が遅れていたが，学内の建物ごとに衛生管理者を置き，業務を行うように整備できた。

② 作業環境管理

産業医及び衛生管理者による職場巡視を通じて，作業環境における問題点の情報収集とそのためのシステムの構築に貢献した。また，理科系教室を中心にした特定化学物質や有機溶剤，美術系教室を中心にした粉塵などの作業環境の調査が進んだ。それらの物質については定期的な環境測定を要し，作業者の特殊健康診断を行う義務がある。保健管理センターの医師の専門は精神科であることもあり，産業医として不得手領域であることで，積極的な助言ができなかったという印象はある。その他には，大学敷地内に不法に捨てられた猫対策についてボランティアと意見交換を行った。これは今まで本学では放置されてきた問題であったので，ボランティアとの協力的関係において，学内の有害動物対策が進むことは望ましいことである。最後に学内の禁煙対策についてであるが，全国的にみて，教育施設では敷地内禁煙の方向で進んでいる。本学は建物内禁煙と決定されたが，まだまだ社会的常識とは逸脱している面があるので，今後の課題である。

③ 作業管理

主に過重労働が問題になり，就業規則を遵守することが管理監督者に徹底された。月45時間を超える時間外労働を労働者に行わせた場合には，事業者は，産業医等に情報を提供し，職場における健康管理について産業医による助言指導を受ける必要がある。月100時間を超える時間外労働の場合には，事業者は，産業医等の面接による保健指導を，必要に応じて健康診断を受けを受けさせる必要がある。これらについては，本年度には十分な取り組みができたと必ずしも言えないだろう。

④ 健康管理

教職員を対象にした特殊検診について，これまで行われていた放射線物質の検診に加えて，有機溶剤，特定化学物質，粉じんなどに関する検診を行う必要があり，そのための基礎データの収集のために現状調査が行われた。保健管理センターにおける診療行為については，経費削減を受けて，学外医療機関との連携を強化した。本学の人事院規則時代のように教職員に対して，余裕のある投薬ができないので，これに戸惑われた教職員も多いと思われるが，徐々に効率的な新体制での教職員の健康管理体制を定着させていきたい。まだまだ問題は山積しているので，今後の活動が期待される。

⑤ 労働衛生教育

本学の保健管理センターでは精神科医 2 名体制で健康管理業務を行ってきたので，職場メンタルヘルス対策は，他大学に比して進んでいると思われた。保健管理センターでは毎年教職員に向けて健康講座を行っている。2004年度は，藤田定教授が人事課主催の健康講座「管理監督者教育」（平成16年11月17日）の講師を務めた。就職厚生課と人事課の共催で，藤田定教授が第 1 回健康講座「自殺予防について」（平成16年 6 月16日）と岡田助教授が第 2 回健康講座「生活習慣と胃潰瘍－ストレスから感染まで」を行い，メンタル面のみならず身体

面に至るまで，幅広い健康管理教育を行ってきた。

⑶ 2005年度の課題と展望

別章に記述のように，保健管理センター人事として，精神科医の藤田定教授の辞職により，労働衛生コンサルタントの久永直見教授が着任した。これは本学の安全衛生管理の追い風となる。保健管理センターの関与する領域の活動の課題と展望を述べる。

① 安全衛生管理体制の確立

本学が文部科学省に提出した大学の中期計画・中期目標の中に，学生への支援のみならず教職員の健康安全の推進に関連して「健康安全・環境保全センター（仮称）」の一部に保健管理センターを含め，健康教育や他の医療機関とのネットワーク作りを進めることが明記されている。この総合センター構想は，本学の学生の健康管理のみならず，教職員の労働安全衛生管理の要となるセンターである。従来の縦割り体制とは違った大学内の効率的・機能的運営体制の確立が求められる。

② 作業環境管理

建物内の照度など，学内の作業環境の基礎調査から始めて，学内の作業整備に取り組む必要がある。また本学では建物内禁煙となっているが，タバコによる健康被害対策の観点から学内全面禁煙へ向けて取り組んでいく必要があると考えている。さらに学内の環境保全問題は，これまであまり注目されなかったことであるが，作業環境の観点からも積極的に環境保全に取り組む必要があると考えられた。

③ 作業管理

大学はその特殊性からデスクワークが多い。よってVDT（visual display terminal）などパソコン作業に伴う諸問題について取り組む必要がある。基本的に作業の効率化が人的負担を減らすので，業務の見直しをさらに押し進めて，経済事情を考慮して外部発注と内部努力のバランスを検討する。

④ 健康管理

本学保健管理センターにおける健康管理は，治療的視点になった診療行為から予防的視点に立った保健相談へと変化している。これには既に述べたような医療費（特に薬剤購入）の削減が大きい。予防的視点の中には，一次予防（健康増進），二次予防（疾病の早期発見），三次予防（再発防止）がある。特に二次予防の要である健診・検診を重点的に効率化することが必要だと思われる。

⑤ 労働衛生教育

健康教育についてはこれまで保健管理センターで積極的に進めてきた。これまで行われてきたメンタルヘルスに関する健康教育が中心に行われてきた。産業衛生を専門とする久永直見教授が着任されたことで，今まで本学では行われなかった労働安全衛生に関する健康教育が期待されている。

5　情報処理センター

⑴　情報処理センターの目的

情報処理センターは学内共同利用施設として位置付けられ，本学の教育研究並びに学術情報処理に資することを目的としている。また，附属学校園を含めた学内の情報処理の推進を図ることも重要な目的である。

⑵　活動状況

今年度の活動は以下の 6 点の業務・研究にまとめられる。

①　学術情報のための情報処理や学術情報の利用と提供に関すること

これらの業務は情報処理センターの中心業務であり，情報処理センターの運営に関する事項を審議する情報システム委員会（委員長は学術総務担当理事）と連携を図りながら実施してきた。具体的には，

⑴　情報システム委員会システム管理専門委員会，及び情報処理センター教員会議での議論を踏まえて，学内ネットワークの更新を目指した概算要求を行った。

⑵　会議用文書の閲覧のため，文書サーバを開設した。このサーバにアクセスすることで，各会議の議事録や資料をいつでも閲覧できるようにした。

⑶　全教員へのメイリングリストの運用を行った。このメイリングリストと情報処理センターホームページを利用することで，センター，ネットワーク利用に関する情報や運用スケジュールなどを速やかに流している。またこのメイリングリストについては，チームウェアのフォーラムタイトル通知などに利用されている。

⑷　StarSuite7.0　のサイトライセンス契約を結び，学内に公開した。

②　対外接続ネットワーク更新に関すること

外部（名古屋大学）と接続しているネットワークを見直し，保障帯域を10Mbpsに増速するとともに，最大伝送速度を100Mbpsとすることで，通信ピーク時にもできるだけ支障がでないよう考慮した。また，東海地区における学術ネットワークの今後の展開を議論するため，中部アカデミックネットワーク準備検討会へ参加した。

③　セキュリティに関すること

⑴　セキュリティポリシーの策定

セキュリティポリシーの基本ポリシーをもとに，情報システム委員会システム管理専門委員会を中心にガイドラインの一部を策定した。

⑵　セキュリティ向上のための方策

大学外からの安全なアクセスのため，ＶＰＮ装置を設置し，運用を開始した。

また，継続的に不正侵入検知システムを運用し，このシステムから検出される攻撃から学内システムを守るため，ファイアウォールのフィルタの見直しを随時行っている。

⑶　学内のホスト調査

学内ネットワークに接続されているコンピュータの数，接続場所，管理責任者等を正確に把握するため，学内にて利用されているコンピュータの調査を行った。

⑷　個人情報の保護

個人情報が記載されている書類等の確認と管理体制の見直しを行い，個人情報の管理体制を確立した。

④　情報処理教育に関すること

学生に対して，コンピュータの利用やネットワークに関する操作や設定，さらにはプログラミングに関する質問などに迅速かつ適切に対応できるように，情報処理センターに「情報処理センター相談室」を置き，月曜日から金曜日の午後の 4 時間程度の間，8 名ほどの学生

によって交代で相談業務を行った。相談業務にあたる学生は情報処理センター教員とメイリングリスト等によって連絡を取りつつ，業務を遂行した。

平成13年度から，１年生で「情報教育入門Ⅰ・Ⅱ」という必修科目が新設され，全学生にノート型パソコンを持たせる形の教育が実施されてきている。情報処理センターは，この授業実施に対応した，情報コンセントを備えた教室の整備などハードウェア面の支援を行うとともに，「情報処理センター相談室」として，パソコン利用上の様々なトラブルに迅速に対応できるサポート体制の整備などソフトウェア面における学生のサポートに重要な役割を果たしてきている。

また，情報処理センターは学生に対して「情報処理センター相談室」の活用を働きかけ，また様々な種類の講習会（教育実習対策のワープロ講習会，情報処理センターの利用の仕方に関する講習会等）を開催したほか，コンピュータ・ウィルスに関する情報発信を積極的に行った。これらは，学生だけでなく教職員にも好評であった。但し，課題も残されている。その最も大きな点は，「情報処理センター相談室」の業務を担当する学生への謝金の問題である。現在，すべての学部学生がノート型パソコンを携帯しており，年々増加してきている相談件数や時間，トラブルの多様化に対応するために必要な「情報処理センター相談室」の運営に必要となる，情報処理センターへ配分される謝金は少なく，対応に苦慮している。

一方，情報処理センターとして，ノートＰＣ利用者のためのホームページの運用も行い，ノートＰＣ利用者に特化した情報を流す体制を強化した。

⑤　附属学校園の情報環境改善について

(i)　附属学校園と大学間のネットワークの見直し

附属学校園と大学間のネットワークを見直し，最大伝送速度10Mbpsのネットワークに変更した。この変更とマルチホーム構成との連携により，通信ピーク時にもできるだけ支障がでないよう考慮した。

⑥　その他情報処理センターに関係すること

(i)　情報処理センター専任教員，兼任教員が情報処理センターコンピュータシステムの維持・管理業務を日常的に行った。その業務内容はセキュリティ維持，プログラムのバージョンアップ，ネットワークシステムの調整，Webサーバレンタルやメイリングリストの設置・維持・管理，学術ネットワークへの接続の不良調整など多岐にわたる。

(ii)　情報処理センターのコンピュータシステムのスムーズな利用，及び授業実施のための部屋割りや使用計画の作成等を行った。

(iii)　８月に大学見学説明会を実施し，高校生をはじめとする学外見学者に情報処理センターの施設見学を含めた活動状況を説明した。ここでは，専任教員だけでなく，上述の「情報処理センター相談室」の業務を担当している学生も，情報処理センターのPRとコンピュータの実習を担当した。

(iv)　６月に「国立大学情報処理センター協議会」が千葉大学で開催された。そこでの議論を参考にして，大学の情報セキュリティの問題や情報処理センターの概算要求案を教員会議で議論した。

6　理系機器共同利用センター

(1)　目的・理念

理系機器共同利用センターは昭和61年に学内の強い必要性に迫れ学内措置センターして設置され19年が経過した。センター設置目的は「本学教員，学生の研究，教育に資するための理系機器を充実整備し，有効な共同利用の便を図ること」であり，現在もセンターの重要性が認められるとともに組織の更なる充実と強化が望まれている。

⑵ 活動状況・成果・現在の問題点

理系機器共同利用センターに所属する大型機器の活発な利用と成果が現れているにもかかわらず，ここ数年新しい大型機器の充実更新がなされなかった。しかし昨年度，本学が長年特別設備として要求していた「表面界面観測システム」の設置が実現し，本装置を含め「40cm天体望遠鏡」および「フーリエ変換赤外分光光度計」の 3 機器を新たに理系機器共同利用センターの所属とした。以下はセンター所属の大型機器に関して，①研究活動，②教育活動，および③現在の問題点と今後の改善，について報告する。なお各機器の業績論文等具体的な成果の詳細については各機器の責任教員の業績を参照されたい。

① 分析電子顕微鏡（責任者：理科教育講座　太田忠之）

1）受精に伴う魚卵表面の微細構造の撮影やSiC/Siヘテロエピタキシャル薄膜表面ZnO/Si表面の電子線反射回折像を明らかにするために本機器を使用した。

2）卒業研究（ 2 名）学部生の実験実習,見学説明会，高校の教員研修，テレビ番組へ資料提供などで本機を使用し,教育・社会的貢献で有効利用した。

3）設置後17年を経過し，大型機器の中では最も古い装置となった。全学の配慮による維持費で保守をしているが，機器の老朽化が進み入手困難な部品も生じ，対応に苦慮するところである。

② 超伝導核磁気共鳴装置（管理責任者：理科教育講座　中野博文）

1）硫酸転移酵素の生物学的意義解明を目的とした糖鎖の合成，金属錯体の配位子置換反応のダイナミックス，金属錯体のクロモトロピー，金属錯体のキラル識別と不斉触媒反応，食品の加工・保蔵工程における過酸化脂質とタンパク質との相互作用について等の研究において，化合物の構造決定に本機器を使用した。

2）14名の学生の卒業研究， 2 名の修士論文に利用した。また，教員研修，大学説明会，学部授業（分子機能化学，分子機能化学実験，機器分析演習）で活用した。

3）最近，原因不明のノイズを取り込み感度が低下してしまったり，二次元測定の不調を多発するなど修理故障を繰り返している。この状況は，研究および教育に大きな影響を及ぼしている。今後，早急な核磁気共鳴装置の更新が不可欠である。

③ ＩＣＰ発光分析計（管理責任者　理科教育講座　長沼　健）

1）環境調査として水，大気の成分の微量成分分析として利用した。学内で複数の教員の研究を支えている。

2）数名の学生の修士論文や卒業研究に利用した。また，聞き分析の授業での見学や学内の不明廃液の確認にも利用できた。

3）装置の老朽化が挙げられる。さらにアルゴンガスの消費などランニングコストの点で維持が苦しいと考えられる。

④ 多目的光分析計測装置：レーザー流速計（管理責任者：理科教育講座　矢崎太一）

1）エンジン内部のエネルギー流速を直接観測するため，作業気体の流速測定に本機器を利用した。本機器は地元企業や他大学からの利用もあり地域連携にも役立った。

2） 3 名の学生の卒業研究に利用した。地元の高校生の大学見学（総合的学習）・大学公開また教員研修の折，機器の説明を通して最近の科学の現状を伝えることができた。

3）学長経費で安全確保の一部が確保できた。しかし装置の老朽化や予算の欠如により装置の性能が維持できない問題点が生じている。

⑤ 多目的光分析装置：ストップトフロー分光光度計(管理責任者：理科教育講座　稲毛雅彦)

1）溶液内における化学反応の機構を明らかにするために，反応速度の測定に本装置を用いた。他大学との共同研究にも活用し，顕著な研究成果をあげた。

2）大学院生の修士論文や 4 年生の卒業研究に本装置を利用するとともに，大学見学説明会

やサイエンスパートナーシッププログラムなどの事業でも本装置を紹介し，学術研究の現状を社会に伝えることに貢献した。

3）装置の老朽化が進み，毎年，修理に多額の経費がかかるようになってきた。また，装置の光源のひとつであるパルスレーザーが故障したままであるため，光化学反応の研究に多大な支障を来している。教育研究活動を強力に推進するためにも，装置の更新が強く望まれている。

⑥ 多目的光分析装置：レーザーラマン分光光度計（管理責任者 理科教育講座 岩山勉）

1）ナノ構造半導体の微細構造評価，光学特性評価に本装置を使用した。また，本装置の一部（レーザー装置）をレーザーアニール用光源として有効に利用した。さらに，ダイヤモンド薄膜の形成確認にも本装置が役立った。

2） 3 名の学生の卒業研究に利用した。地元高校生の大学見学（総合的学習の一環として）・大学見学説明会また教員研修の折，機器の説明を通して最近の科学技術の現状を具体的に伝えることができた。

3）経費を獲得し安全面の対策を施した。しかし装置の老朽化や予算の欠如により装置の性能が維持できない問題点が生じている。レーザー管は極めて高価な消耗品であるため，現在使用中の管の寿命とともに使用が不可能となることが想定される。

⑦ 多目的光分析装置：エリプソメーター（管理責任者　技術教育講座　清水秀己）

1）研究活動：SiC/Siヘテロエピタキシャル薄膜, ZnO薄膜, SiO2薄膜等の光学定数（屈折率，膜厚）の測定に本機器を使用した。

2） 2 名の学生の卒業研究ならびに 2 名の修士研究に利用した。

3）予算が十分でないため，新しいバージョンアップされたソフトも購入することができず，データ処理に多大な時間を要している。光学系に故障等が生じた場合を考えると，将来的には不安である。

⑧ 多目的磁場装置（管理責任者 理科教育講座 岩山勉）

1）金属合金のホール係数，磁気抵抗係数の測定，ならびに，鉱物の残留磁化測定に本装置を使用した。

2） 3 名の学部学生，大学院生の研究に利用した。地元高校生の大学見学（総合的学習の一環として）・大学見学説明会の折，機器の説明を通して最近の科学技術の現状を具体的に伝えることができた。

⑨ 電子スピン共鳴装置（管理責任者　理科教育講座　石田 博幸）

1）タイ王国のラチャパット大学チェンライとの環境測定共同研究の一部として使用している。タイ国内各地の水道水の成分を分析し，地域差を見ようというものである。ESRは生物レベルの情報は与えないため，水道水の可飲の適否についての判断は得られないが源流の山地の構成や都市からの排出物などの情報が得られている。またタイの水道水と日本の水道水の分析結果の比較も行っている。食品化学の一端として，日常食物に含まれるESR対象体である鉄分やラジカルの定量に使用している。

2）上記の研究はタイからの留学生も一部を担当しており留学生教育として役立っている。タイからの留学生にとって物理学や科学の内容にふれるばかりでなく，日本と日本の大学の教育・研究の実情を学ぶ良い機会となった。

3）導入されて10年以上経過しており維持経費がわずかなため十分な消耗品を入手できない。本機器は購入当時からデジタル化（すなわち，コンピュータ化）されているが，オフライン使用に限られているため解析はアナログ的手法に頼らざるを得ない。得られたデータがワンタイムユースに限られ，現代求められている，多岐にわたるデータの利用ができない。今後，新しい機能と性能を持つ機器の更新が必要である。

⑩　遺伝子解析システム（管理責任者 理科教育講座 羽渕脩躬）

1）硫酸転移酵素の精製，遺伝子クローニング，遺伝子から発現したリコンビナント蛋白の性質解明に本機器を使用した。

2）５名の学生の卒業研究，４名の院生の修士論文，博士論文の研究，15名の３年生の学生実験などに利用した。地元高校生の大学見学では施設，設備の公開と説明を行った。

3）本システム導入後市販された新機能をもつ装置（PCR装置）を追加導入したことにより，現在も本システムの主要部分は最新の機能をほぼ完全に維持している。しかし超高感度画像解析装置は老朽化のため使用不能となっている。維持費の削減により，装置の性能が維持できない問題点が生じている。

⑪　液体窒素貯槽（管理責任者　理科教育講座　榊原洋子）

1）本貯槽によって「超低温」の実験条件を簡便かつ低廉に創出することができるため，様々な分野で活用された。たとえば生体組織の瞬間凍結固定や実験装置機材等の冷却材として使用することで最先端研究にも寄与している。

2）理科教育講座，養護教育講座，技術教育講座，家政教育講座，保健体育講座および附属高校において，学生実験や卒業研究実験等に利用された。また，公開講座や地域貢献事業での科学実験講座の素材としても活用されている。2004年度は，56名の学生使用者があった。

3）学生使用者が特に初心者であることから安全講習会の実施等保安教育に努めているが，使用者の安全意識に温度差があり，不適切な使用事例が報告されることがあった。今後一層，保安教育に努力したい。また，施設の老朽化が懸念されている。日常点検や年2回の外部機関による点検を実施し，現在良好な状態ではあるが，不安要素が見られたときには早急な対応を要する。

⑫　核酸解析システム（管理責任者　理科教育講座　渡邊幹男）

1）DNAの塩基配列を決定し，遺伝的多様性の有無等がわかる。得られた結果をもとに，絶滅危惧植物等の保全方法の確立を目指してる。

2）卒業研究はもとより地域貢献活動として豊明市からの委託研究（絶滅危惧植物ナガバノイシモチソウ集団の復元）にも利用された。さらに岡崎高等学校のスーパーサイエンス部もその活動のために利用し学生科学賞において環境大臣賞を受賞した。

3）維持管理費の減額により機器の維持管理がやや困難になってきている。

⑬　FT-IR（管理責任者　技術教育講座　清水秀己）

1）Si表面への微量吸着物質の同定にＲＡＳ（Reflection Absorption 測定Spectroscopy，高感度反射測定法）,ＳＲ（Specular Reflection 正反射測定法）測定，ならびにＡＴＲ（Attenuated Total Reflection,全反射測定法）測定の有効性に関する研究を行った。

2）２名の学生の卒業研究と２名の修士研究に利用した。

3）設置されてまだ間がないため，現在のところは問題点は見あたらない。この装置のための維持費が一切ないため将来的には不安は残る。

⑭　表面界面観測システム：ナノマニピュレーター（管理責任者　理科教育講座　三浦浩治）

1）昨年10月に納入された装置なので，半年間はセットアップに時間が費やされた。現在まで装置のすべての機能が利用可能になった。

2）装置の納入を近県周辺に新聞等で公表した。地元高校生の大学見学の一環として利用された。

3）装置のすべての機能が利用可能になったことで，今後の研究におおいに役立てたい。

⑮　40cm天体望遠鏡（管理責任者　理科教育講座　澤武文）

1）本機器は教育用に設置されたものであり，現在，研究活動には用いていない。

2）宇宙科学実験B（観測時間：2時間×7回）：SPP事業（2件：愛知教育大学附属高等学校，太陽のHα観測；愛知県立岡崎北高等学校，望遠鏡の仕組み），一般公開（6回：観望会の延べ参加者数約250名），大学紹介（2回）などに利用した。

3）屋上の床面に段差や突起物があり，夜の観望会ではつまづくなどの危険なヶ所が多く，安全面への改善が必要である。また，台風時に雨漏りなどもあり，機器の老朽化が促進されるという心配がある。今後何らかの対策が必要である．

⑶ 理系機器センターの今後の課題と対応

上記で指摘されているように多くの機器が老朽化し，時代の要求に対応できる性能を維持できなくなっている現状がある。このことは本学の教育・研究にとって重大な問題であり，理系分野の研究継続にとって障害となりつつある。本学の目標である教育をはじめとする種々の分野で優れた人材を送り出すためには，早急にこの問題を解決しなくてはならない。大学が独法化され，今後開かれた大学として地域と密接に連携していくためにも今後計画的に維持費の獲得および大型機器の充実更新を図る必要がある。

第７章　施設整備

第７章　施設整備

１　施設の現状

本学の施設は，昭和45年より井ケ谷団地に統合整備されたが，大半の建物は建築後30年以上を経過し，老朽化が進行している。学部改組及び大学院の充実整備により，狭隘化が進み，十分な教育・研究スペースの確保が難しくなってきている。今後は教育・研究内容の変化に伴う施設整備の充実が望まれている。また，各附属学校（園）においては，さらに老朽化が著しく，教育・研究内容の変化への対応も十分とはいえない状況にある。本学は，東海地震の強化対策地域に指定されたため，主要な建物の耐震診断は完了している。今後は耐震補強対策を含めた建物大型改修が必要である。なお，耐震補強・改修工事は17年度に第一共通棟校舎改修工事（学生サービス等を考慮したリフレッシュルーム等の設置計画を含めた）を実施予定である。

２　中期的視点における施設整備計画

本学の理念・目標に沿った教育・研究内容にふさわしい機能を備えるとともに，ゆとりと潤いのあるアメニティキャンパスの創造再生，施設維持保全等を実施するため，学内予算による環境整備特別経費として「環境の改善」「建物の改善」「バリヤフリー」の３本の柱を立て重点的に工事を実施している。また，学生の要望が強いバス停の改修は17年度に実施予定である。安全性確保のため耐震補強・改修工事及び施設の有効利活用を図るべく施設マネージメントを含めた施設整備はこれからも必要である。

３　施設点検・評価等

施設の実状を的確に把握し，安全性・省エネ・環境・快適性・インフラストラクチャーの機能の確保及び既存施設の効率的利用を促進し有効活用に努めるほか，改修計画，維持管理計画等の改善計画，施設設備の点検を定期的に実施するために「キャンパスレンジャーの日」を新たに設定し，各施設担当者による，毎月１回の点検を行った。その結果に基づいて各所屋上防水水漏れ修理，排水管の詰まり等修理他を含め工事を実施した。

４　工事の実施

大学等の教育・研究の快適な環境及び施設等の機能を維持するため，下記の工事を実施した。

⑴　安全性に対する配慮のための工事

○　高架水槽（25ｔ）撤去　　構造体力不足により危険回避のため
○　排水溝蓋敷設工事　　附属名古屋小学校通路（運動場隣接）
○　危険物貯蔵庫改修工事　　自然科学棟（屋外）

⑵　教育・研究を支える様々な活動に対する配慮のための工事

○　屋外階段設置　　アイソトープ実験施設
○　カウンセリング室改修工事　　教育実践総合センター１階

⑶　学生のサービスの観点からの工事

○　駐輪場の設置　　情報処理センター棟北側（80台）
○　スロープ設置　　美・技・家棟出入口，クラブハウス出入口
○　浴室ボイラー更新　　学生寮（男・女共）
○　厨房改修　　第二福利施設食堂
○　シャワー用ボイラー更新　　附属屋シャワー室（女子）
○　玄関，アコーデオンカーテン取設他　　伊良湖臨海教育実験実習施設

⑷　健康的かつ快適な環境の確保のための工事

○　職員休憩室取設　　車庫改修
○　男子トイレ排水管改修　　第一人文棟
○　樹木剪定，刈込み　　構内幹線道路沿い他

⑸　施設の老朽化等への対応のための工事

○　屋上防水改修工事　　附属高校音楽教室棟，音楽棟他
○　電話交換機改修　　井ヶ谷団地，附属岡中，附属名古屋小・中
○　第一人文棟床改修　　東側階段他
○　プール塗装塗り替え　　附属岡小

⑹　その他小工事　　約240件

5　保守点検等の実施

○　給水・排水設備　生活排水処理施設保全業務，給水設備等保全業務
○　電力・電話設備　電話保全業務，受配電設備保全業務，電気工作物保安業務
○　冷暖房設備　　ボイラー点検整備，空調機（個別空調）保全業務
○　その他設備　　昇降機保全業務

第８章　教員の教育研究活動

第８章　教員の教育研究活動

生活科教育

布谷　光俊　Nunoya, Mitsutoshi　　教授　　生活科教育講座　　学士

❶ 専門分野：生活科教育，関連分野：総合的学習，幼・小連携教育

❸ 日本生活科・総合的学習教育学会（事務局長，常任理事），日本教科教育学会，中部教育学会，他。

❹ 生活科教育Ａ（２年），生活科教育方法特論（大学院），幼・小連携教育特論（大学院），生活科授業研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

・「生活科授業研究Ⅰ」の授業内容とも絡んで，公立学校と密接に連携しながら，現場の授業参観・授業検討を主体とした大学院生指導に努めた。

・生活科教育分野専攻のすべての大学院生には，日頃の研究指導成果を全国学会で発表させるとともに，地域の諸研究会にもできる限り参加（又は手伝いを）させ，院生諸君の現場教師との日常的な交流による教育実践力の育成に努めた。

・附属小学校においても，校長の立場から教育実習生への講義・講話，その他を通して，本学学生の教育実践力の育成，特に「現場に学ぶ教育実践力の向上」に努めた。

・附属小学校の児童16名を引率して，韓国の晋州教育大附設小学校を訪問し，相互の国際交流教育に努めた（2005.２.３.～５.）。

❺・現在の研究テーマ：

「生活科教育の理論と実践に関する研究」「幼・小の接続と発展に関する研究」

・論文：

「生活科・総合的な学習における人とのかかわりの在り方についての研究―学習のねらい，かかわる対象，かかわり方の分析・考察を通して―」（共著），愛知教育大学教育実践総合センター紀要第８号　2005.２.

・平成16年度科学研究費補助金：

「生活科で育った学力についての調査研究」（基盤研究Ｃ－２）研究分担者

「総合的な学習における教科論―総合的な教科としての生活科の在り方―」（基盤研究Ｃ－２）研究分担者

・第13回日本生活科・総合的学習教育学会全国大会（６.19.～20.高知市）での研究発表及び公開研究授業のコメンテーター

❻ 愛知教育大学附属名古屋小学校校長（併任），附属学校運営委員会委員

❼・名古屋市教育委員会　学力向上パイロット事業推進校選定審査委員会（副会長）

・名古屋市教育委員会　小・中・養護学校教科用図書選定協議会（副会長）

・信州大学教育学部附属松本小学校学校評議員

・各県で開催の諸教育研究大会で講演又はコーディネーター等（５.28.高知市，６.30.松本市，７.29.名古屋市，９.３.岡谷市，10.23.名古屋市，2005.２.25.大町市他）

・各県教育センター，研究所等で講師（７.26.青森県教セ，７.30.茨城県自然博物館，他）

・学校・幼稚園等への指導助言（高知市初月小，信州大附属松本小，幡豆郡佐久島小・中，岡崎市三島小，宝飯郡萩小，名古屋市比良西幼・杉村幼，岡崎市広幡幼，他）

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

野田　敦敬　Noda, Atsunori　　助教授　生活科教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：生活科教育，関連分野：総合的学習，理科教育

❷ 日本生活科・総合的学習教育学会　第１回研究奨励賞（2003年６月）

❸ 日本生活科・総合的学習教育学会（常任理事，事務局）
日本理科教育学会，日本教科教育学会

❹ 生活科研究ＡⅠ（２年），生活科研究ＢⅠ（３年），生活科教育Ａ（４年），人間と生活「入門」（１年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），生活科教材論特論（大学院），生活科内容学特論Ⅱ（大学院），生活科授業研究Ⅱ（大学院）

・総合演習Ⅱ及び生活科授業研究Ⅱでは，公立学校の協力を得て，実際に授業参観及び事後検討会に参加する機会をできるだけ多くとり，実践的な指導力向上に努めている。

・指導する大学院生３名を４～６か月（週当り２日）県内の小学校の特定の先生の下に預けて実践的な指導力を高めながら研究を深める取り組みを行った。（協力校：岡崎市立連尺小学校，岡崎市立六ツ美西部小学校，一宮市立赤見小学校）

❺ 生活科教育の普及，改善及び生活科で育った学力についての研究

・論文：

「生活科で育った学力についての調査研究」日本生活科・総合的学習教育学会誌第12号，2005年２月

「子どもの生活科学習への思いについての調査研究」愛教大研報（教）第54号，2005年３月

「生活科学習の充実と改善」生活科教育講座紀要第３号，2005年３月

「地域に発信・貢献する特色ある学校づくり」教育愛知（愛知県教育委員会）第52巻，2004年８月

「評価の観点を正しく理解し，確かな学力を育てる」学習研究（奈良女子大学附属小学校）第412号，2004年12月

・著書：

野田敦敬監修，岡崎市立六ツ美西部小学校著『地域と共に学び合う学校づくり』（明治図書）2005年３月

・平成16年度科学研究費補助金：

（基盤研究Ｃ－２）研究代表者　「生活科で育った学力についての調査研究」130万円

・第13回日本生活科・総合的学習教育学会全国大会（高知）全体会にて研究発表

❻ 教育研究評議会評議員，学生支援委員会委員，生活科教育講座代表

❼・国立教育政策研究所教育課程研究センター　全国的かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校（小学校生活）企画委員会委員

・名古屋市次世代育成懇話会委員

・名古屋市立学校園教育研究推進事業審査委員（副委員長）

・名古屋市立橘小学校，老松小学校学校評議委員

・第11回愛知県生活科教育研究大会にて講演（10月13日，一宮市にて）

・教育センター及び教育研究所研修講師（仙台，鳥取など）

中野　真志　Nakano, Shinji　　助教授　生活科教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：生活科教育，関連分野：総合的学習，社会科教育，カリキュラム論

❸ 日本生活科・総合的学習教育学会（常任理事，事務局，学会誌編集委員）

日本教育学会，日本教育方法学会，日本カリキュラム学会，アメリカ教育学会，日本デューイ学会，International Society for Cultural and Activity Research

❹ 生活科研究ＡⅠ（３年），生活科教育Ａ（２年，３年），社会科教育Ａ（２年），社会科教育Ｂ（２年），英米思想演習Ⅰ（４年），英米指導演習Ⅱ（４年），国際社会と日本「入門」（１年），生活科思潮論特論（大学院），生活科カリキュラム演習（大学院），生活科授業研究Ⅲ（大学院）

・教科教育に関する授業では，基礎的な理論について解説しながら，その教科の授業を計画，指導し，評価する基本的諸能力の習得を目指している。受講生が能動的に授業参加できるように，調査活動や体験活動を採り入れたり，優れた実践事例を紹介したり，視聴覚教材を利用しながら，理論と実践を結びつける授業を心がけている。

・演習は主に英語の学術論文・著書の読解と考察であるが，テーマの選択に関しては，できる限り受講生の希望を採り入れ，また受講生同士が自由にディスカッションできるよう配慮している。学問に対する知的好奇心と知的興味を育てたいと考えている。

❺ ⑴生活科教育及び総合的な学習に関する研究。⑵デューイ実験学校のカリキュラムに関する研究。⑶合衆国におけるサービス・ラーニングに関する研究。

・論文：

「デューイ実験学校における教師レポート―教師レポートに基づく教師会議」日本生活科・総合的学習教育学会誌第12号，2005年２月

「デューイ実験学校のカリキュラム構想―デューイによる大学初等学校組織プラン―」生活科教育講座紀要第３号，2005年３月

・学会発表：

日本生活科・総合的学習教育学会　第13回全国大会（高知）自由研究発表

日本カリキュラム学会　第15回大会（愛知教育大学）自由研究発表

・平成16年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ－２）研究代表者

「総合学習時代における教科論―総合的な教科としての生活科の在り方―」90万円

❻ 大学院運営委員会委員，国際交流委員会委員，機種選定委員会委員

❼・愛知教育大学附属岡崎小学校　第55回生活教育研究協議会　生活科・助言

・岡崎市教育研究大会　生活科・助言

・愛知県教育研究集会　生活科分科会・助言

・愛知県総合教育センター「小学校10年目経験者（生活科）」講師

・鳥取県教育センター「教科の指導力向上研修（小学校生活科）」講師

・神戸市小学校教育研究会生活部会研修会　講演

・第５回宮崎県小学校教育研究会生活部会　講演

久野　弘幸　Kuno, Hiroyuki　　助手　　生活科教育講座　　博士（教育学）

❶ 生活科教育，社会科教育

❸ 日本生活科・総合的学習教育学会（常任理事），日本社会科教育学会，日本カリキュラム学会，日本グローバル教育学会（理事）

❹ 生活科教育・生活科研究（２～４年），共通科目「平和と人権」の内入門講座及びセミナー講座（１・３年）

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

教育活動の問題点：

フリースペースを持った教室があれば，ワークショップなどの多様な教育活動が行えるが，現在講義棟内にそれに適した教室環境がない点。

教育に対する抱負：

学生にとってなじみのない生活科に親しむとともに，生活科授業実践に対する関心を高められるよう工夫と努力を続ける。共通科目においては，学生の教養を一層深められるよう，新しくまた学生の関心のあるテーマの題材を取り上げたい。

❺ 現在の研究テーマ：

学術研究としては，ヨーロッパ教育においてヨーロッパ連合（EU）が果たす役割の実態を解明しつつ批判的に検討することをテーマとしている。また実践研究としては，幼小連携の中核として生活科を位置づけることにより生活科の新境地を開拓することを課題としている。

業績リスト：

“New Trends in Teacher Education in Japan”, Hans Hooghoff et. al. (ed.) “Challenges in Teaching & Learning in Higher Education, 2004（共著），『社会科教育実践学の構築』明治図書，2004年（共著）「幼小接続研究の現状と課題―文部科学省研究開発学校を事例にして―」，『生活科・総合的学習研究』，2004年（単著），“Selbstevaluation von Lehrern in Japan”, In: PH/FR, Zeitschrift der Pädagogische Hochschule Freiburg, 2004/1（共著），他

科学研究費補助金など研究助成の授業状況：

平成16年度科学研究費補助金「若手研究(B)」（日本学術振興会・50万円）

学術・研究交流等：

ドイツ・ハンブルク大学政治教育講座並びにフライブルク教育大学事実教授講座と継続的に実践研究の交流を続けている。

❼・公開講座「総合学習カリキュラムのデザインとその改訂」（全５回の内，第１回担当）
・岡崎市現職教育委員会　総合的な学習部「基礎研修会」講師
・高浜市立翼小学校学校評議員
・兵庫県三木市立口吉川小学校，岡崎市立広幡小学校，高浜市立翼小学校，額田町立夏山小学校他　実践指導講師

障害児教育

池田　勝昭　Ikeda, Katsuaki　　教授　　障害児教育講座　　教育学修士

❶ 障害児心理学

専門分野：リハビリテイション心理学，関連分野：肢体不自由児の心理・教育

❷ 学会賞　日本リハビリテイション心理学会（2003年11月８日受賞）

感謝状　東海・北陸心理リハビリテイション研究会（2004年６月26日受賞）

❸ 日本心理学会，日本特殊教育学会，日本心理臨床学会，日本リハビリテイション心理学会，東海心理学会

❹ 肢体不自由児教育演習Ⅰ，Ⅱ（４年），障害児発達臨床学特論Ⅰ（大学院），障害児発達臨床学演習Ⅰ（大学院），障害児臨床授業研究Ⅰ（大学院），障害児臨床授業研究Ⅱ（大学院）

肢体不自由児をはじめ障害児全般について心理臨床学の立場から，特に実践的な高度

の指導能力及び幅広く対応できる特別支援の教育が可能な指導者としての資質向上の育成を最重視して授業の工夫・改善に努力している。肢体不自由児及び障害児の多くは，発達臨床学的には運動・動作の基礎基盤に障害を有していることから，その特性を明らかにした上で心理臨床学や指導法の理解を深めることがきわめて重要である。そのためには種々の理論はもとより臨床実習等も含めてテキスト以外にも多々の最新論文・資料やビデオ等を駆使して具体的・実際的な授業が展開できるようにしている。

現況は障害の多様化，重度・重複化が，一方では学習障害児や注意欠陥多動障害児等の，いわゆる軽度発達障害児も増大の傾向にあって通常学校・学級を含めて特別支援教育のあり方及びインテグレーション・インクルージョン教育の実現が問われている。授業等で教育，研究活動等をいかに高めていくか急務課題であり，その充実，発展に努めたい。

❺ 長年の研究活動としては，障害児のリハビリテイション心理学に関する専門研究，並びに学生や卒業生，学外の現場教師等との連携，共同研究による教育，研究活動の一体化を図ることより常に社会に拓かれ，還元，貢献という認識の上で実践的な研究活動をしている。

個人研究のテーマは，一貫して障害児の直立及び歩行動作及び身体の重心，姿勢に関する分野であり，著書や論文等で公表してきた。関係の主要な研究成果は下記の通りである。最近では中国・上海市との学術国際セミナー開催（1999年～現在），障害児の適正就学指導，障害児交流教育推進等の責任者として尽力し，寄与している。

1．障害者の「こころ」，池田勝昭・目黒達哉，共編著，学術図書出版社，2003年
2．障害者の心理と支援，田中農夫男・池田勝昭・他２名，共編著，福村出版，2001年
3．交流教育地域推進事業と特殊教育の充実・発展，教育愛知，第46巻第９号，愛知県教育委員会編，1998
4．Principles and Practice of “Training of Standing Posture” for Cerebral Palsied, The Journal of Rehabilitation Psychology, Vol.ⅩⅦ・ⅩⅧ・ⅩⅨ，Special Edition, 1992，45-48
5．肢体不自由児の指導，障害児教育総論，共著，コレール社，1990年

❻ 日本教育大学協会全国特殊教育研究部門理事（2004年４月～2005年３月），愛知県就学指導委員会副会長（2004年４月～2005年３月），東海・北陸心理リハビリテイション研究会顧問（2004年４月～2005年３月）

❼ 教育科学系学長補佐・社会連携理事補佐担当（2004年４月～）

❽ 国際学術交流として中国・上海市との治療教育国際セミナー（1999年～）

佐野　竹彦　Sano, Takehiko　　教授　　障害児教育講座　　教育学博士

❶ 認知心理学，視覚障害

❸ 日本心理学会，日本教育心理学会，日本発達心理学会，視覚障害リハビリテーション協会，東海視覚障害研究会

❹ 知的障害児心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ（２年），障害児データ解析法（２年），障害児臨床心理診断法（２年），こころの発達と障害Ｂ（２年），知的障害児研究法Ⅱ（３年），知的

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

障害児臨床実地研究（３年），知的障害児教育演習Ⅰ・Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），障害児認知心理学特論一（大学院），障害児認知心理学演習一（大学院），障害児データ解析法（特専）

主に障害児教育教員養成課程（学部），障害児教育専攻（大学院）の授業を担当している。学部では，障害児を理解するための方法としての心理学実験を担当している。心理学実験についての基本的理解は十分に学生に伝えることができていると考えるが，障害児を対象に実際に実験をする時間がない点が問題である。この問題点は心理検査の実施方法の修得をめざす授業においても生じている。また，研究費の不足から実習に必要な心理検査用具を十分用意できていない点も問題である。データの整理方法についての授業に関しては，授業回数の制限から講義できない領域がある。この点は，卒業論文の指導時に個々の学生に対応している。３年生に対しては卒業論文作成の準備として，研究の進め方の習得をめざす授業を担当している。各々の学生の興味・関心を尊重して，卒業論文のテーマが決まるように努力しているが，学生が研究テーマを明確にするまでに時間がかかり，予備調査や予備実験等の時間を十分とれない点が問題である。４年生に対しては，演習を担当しており，各学生が関心を示す学術論文について，ディスカッションする形式をとっている。論文を読む上での留意点を会得させることと，卒業論文の書き方を習得させることを目的としている。大学院においては，心理検査及びデータ処理に関してより高度な授業を行おうとしている。また，研究論文の講読を通して，適切なデータ処理方法の選択方法を習得させることをめざしている。学部からの直進学生と現職教員の学生がいるために，レディネスが多様であり，授業の水準をどこにおくかが難しい。

❺ 視覚障害者が単独歩行をより安全にしかもストレスが少なく行えるようにするための人的環境について関心をもっている。まず，大学生を対象に実施したアンケート調査により，視覚障害者の単独歩行を援助する側の心理について報告した。次いで，援助を受ける側の視覚障害者に実施したアンケート調査のデータの分析結果を報告した。これらの調査結果に基づいて，より適切な援助―被援助関係についての考察を深めたいと考えている。

知能検査で何がわかるのか　そだちの科学　第３号　2004

❻ 大学院専攻代表，大学院入試部会委員，時間割編成専門委員会委員

都築　繁幸　Tsuzuki, Shigeyuki　　教授　　障害児教育講座　　教育学博士

❶ 聴覚障害教育学，比較障害児教育学，軽度発達障害学

❸ 日本特殊教育学会（学会誌編集委員，免許問題等研究会委員），日本聴覚障害教育実践学会（事務局長），日本国際聾教育学会（事務局長），愛知教育大学LD研究会（代表幹事），愛知教育大学障害児教育方法学研究会（代表幹事），米国高等教育学会

❹ 障害児教育概論（１年），聴覚言語障害児教育特論（２年），聴覚障害児指導法（３年），聴障害児指導法特論（大学院），聴覚障害児指導法演習（大学院）

障害学生支援：

障害児教育講座障害学生支援委員会委員として活動を行う。

フレンドシップ事業：

刈谷市教育委員会等と連携し，障害児教育の実践に関する活動を継続している。

地域支援活動：

「軽度発達障害児の学習支援者システム」に関する教育実践的活動を岡崎市大門小学

校と共同で行っている。

❺ ①聴覚障害児のコミュニケーション行動に関する発達研究，②軽度発達障害児の地域支援プログラムの開発研究，③障害児教育の比較教育学研究

業績リスト：

・監修・分担：

1）都築繁幸（監修）：地域の支援者と共に進める障害児の学びの創造　1－131．黎明書房。

・論文

2）都築繁幸：対話の成立状況とコミュニケーション・モードからみた聾学校幼稚部における教師―幼児間の相互作用　愛知教育大学研究報告，54（教育科学編），29－38。

3）都築繁幸：聾学校幼稚部における教師と聴覚障害幼児との相互作用　愛知教育大学教育実践総合センター紀要，８，99－105。

4）都築繁幸：アメリカ聴覚障害教育におけるトータル・コミュニケーションの発展過程に関する一考察(3)　治療教育学研究，25，89－97。

5）都築繁幸：軽度発達障害児の現状と課題：障害児教育学の立場から　学校保健研究，46，５，464－471。

6）都築繁幸：軽度発達障害児の支援の現状と実践的課題　軽度発達障害学研究，１，２，42－49。

7）都築繁幸：軽度発達障害児の発達を支える地域支援活動の実践―小学校・中学校のコンサルテーション活動を通して―　障害児教育方法学研究，２，１，９－21。

8）都築繁幸：軽度発達障害児の発達を支える地域支援活動の実践(2)―通常学級における学習支援者の効果的な在り方をめぐって―　障害児教育方法学研究，２，１，25－35。

9）都築繁幸：通常学級担任と障害児教育担当者の軽度発達障害児の指導観　障害児教育方法学研究，２巻，１，44－52。

10）都築繁幸・葛谷優子：通常学級担任の軽度発達障害児の受け入れ意識　障害児教育方法学研究，２，１，36－43。

11）安藤仁史・都築繁幸：情緒障害特殊学級における自閉症児の指導に関する事例的考察―家庭から特殊学級にスムーズに移行するために―　軽度発達障害学研究，１，３，１－10。

12）大島光代・都築繁幸：聴覚障害幼児の言語発達支援に対する視覚教材適用の試み　愛知教育大学教育実践総合センター紀要，８，231－236。

13）長田洋一・都築繁幸：通級指導教室で学ぶ軽度発達障害児の支援に関する事例的考察　軽度発達障害学研究，１，３，28－35。

14）小坂大介・都築繁幸：軽度発達障害児の音韻認識と読み　軽度発達障害学研究，１，３，21－27。

15）小池理恵・渡辺真理子・都築繁幸：軽度発達障害が疑われる聴覚障害児に対する国語科指導の授業分析的考察　治療教育学研究，25，99－109。

16）小濱眞奈美・都築繁幸：知的障害養護学校における個別の指導計画　障害児教育方法学研究，障害児教育方法学研究，２，１，１－８。

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

17）小濱眞奈美・都築繁幸：知的障害養護学校における個別の指導計画の実態―保護者との連携，評価，実態表に関する学部間の比較を通して―　障害児教育方法学研究，２，２，15－25。

18）小濱眞奈美・都築繁幸：知的障害養護学校における個別の指導計画の実態―地域の教育センターとの連携を中心に―　障害児教育方法学研究，３，１，28－47。

19）田中貞子・都築繁幸：米国の高等教育における学習障害学生への学習支援の実際　軽度発達障害学研究，２，１，28－36。

20）田中貞子・都築繁幸：米国の高等教育における学習障害学生への学習支援の実際に関する動向　障害児教育方法学研究，３，１，57－71。

21）野本裕子・都築繁幸：ムコ多糖症児の支援に関する事例的考察　障害児教育方法学研究，３，１，48－56。

❻ 特別専攻科運営委員，障害児教育講座障害学生支援委員

❼ 刈谷市地域福祉計画策定委員会委員長，西三河地区・豊田加茂地区・碧南市・刈谷市・岡崎市就学指導委員会委員，日本語能力検定委員会，名古屋市・碧南市巡回教育相談員

恒次　欽也　Tsunetsugu, Kinya　　教授　　障害児教育講座　　文学修士

❶ 心理学，専門分野：発達臨床心理学，関連分野：小児（母子）保健学

❷ 沖縄県県知事感謝状（1999年）

❸ 日本小児保健学会（査読委員，発育評価委員会同小委員会），日本心理臨床学会，日本発達心理学会

❹ 専門科目入門Ｂ（１年），肢体不自由児心理学基礎実験Ⅰ，Ⅱ（２年），障害児臨床心理診断法（２年），知的障害児研究法Ⅰ，Ⅱ（３年），乳幼児発達心理学特論（大学院），障害乳幼児心理学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

従来通り，学部の授業ではなるべく機会があれば施設等の見学・参加や地域のバリアーフリー・ユニバーサルデザイン調査などを学生が地域に出て個人研究としてまとめる機会を設けている。担当科目が実験や研究法が多いために必要な基本的な知識・考え方・統計手法の習得を目指している。大学院では演習形式や学生の発表や討議をできるだけ重んじているが，最近の研究の紹介等も行うようにしている。いずれもまだ十分な成果をあげるに至っていないのが実状だと思う。

❺・現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）：

⑴　育児不安に関する研究

⑵　男性・父親に関する研究

１．父親・男性研究　Ⅲ　日本子ども家庭総合研究所紀要第39集，2004。（共著）

２．育児事典（ことばの発達）朝倉書店，2004。（共著）

日本子ども家庭総合研究所（愛育相談所）の共同研究がここ10数年の研究の柱となっている。今後も学外の研究者との共同研究を中心に進めていきたいと考えている。いずれの課題も今日的な重要なものであると自認している。データマイニング手法を用いたアンケート調査の分析を行ったが，さらに，今後も，進めていきたい。

❻ 大学改革推進委員会第２部会（大学院ワーキング），６年一貫専門委員会

❼ 全国乳児福祉協議会中央推薦協議員（1990年４月～現在），刈谷市虐待防止ネットワーク協議会　事例検討会など，名古屋市立南養護学校　学校評議員（2004年）

❽ 大学が提供している「学校教育支援データベース」を通して，３回ほど依頼があった。１件は対応できたが，日程調整などの問題があり，期待に応えられないことがあった。

増田　樹郎　Masuda, Tatsuro　　助教授　障害児教育講座　　文学修士

❶ 社会福祉学，社会学

❸ 日本社会福祉学会，日本地域福祉学会，日本福祉社会学会，日本介護福祉学会，日本ソーシャルワーカー協会，現代思想研究会21（事務局員）

❹ 社会福祉学原論（２年），地域福祉論（１年），コミュニティワーク論（３年），障害者福祉論演習（３年），高齢者福祉論演習（３年），社会福祉学研究Ⅲ・Ⅳ（３／４年），福祉科教育（３年），障害児教育福祉制度論（２年），社会福祉現場実習（３年），障害福祉演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

❺・１）場所論・現象学を基盤とした福祉哲学の構想
２）ケアマネジメントの日本的展開の課題
３）ICF活用の試みとしての介護論

・著書：
『築く介護の福祉―より良く生きるために―（シリーズ介護の世界２巻）』（編著），久美出版，2004年８月。
『創る介護の実践―共に支え合うちから―（シリーズ介護の世界３巻）』（編著），久美出版，2004年11月。

・論文：
「特別養護老人ホーム優先入所指針のあり方について」『医療ソーシャルワーク』№32，静岡県医療ソーシャルワーカー協会，2004年５月。

・資料：
「新掛川市における地域福祉計画・地域福祉活動計画のための住民福祉意識調査：報告書」掛川市・大東町・大須賀町，2005年３月。
「ICFの出発点」『Bonくらーじゅ』第39号，静岡県介護福祉士会，2004年10月。
「生活機能とICF」『Bonくらーじゅ』第40号，静岡県介護福祉士会，2005年１月。
「ICFの概念構成（Ⅰ）―心身機能・身体構造―」『Bonくらーじゅ』第41号，静岡県介護福祉士会，2005年３月。

❼・静岡県「高齢者保健福祉計画作成・推進委員会」委員
静岡県「地域福祉支援計画策定委員会」委員
下田市「地域福祉計画等策定委員会」委員長
小牧市「高齢者保健福祉計画策定委員会」委員長
静岡県社会福祉協議会「小地域福祉活動委員会」委員長　ほか

・静岡県社会福祉士会「2004年総会・記念講演」講師（2004年５月）
静岡県「新任福祉行政職員研修会」講師（2004年５月）
不二聖心高等学校「職員研修会」講師（2004年８月）
静岡県看護協会「訪問看護研修会」講師（2004年10月）
静岡県「ケアマネジメント・リーダー研修会」講師（2004年12月）ほか

森﨑　博志　Morisaki, Hiroshi　　助教授　障害児教育講座　　教育学修士

❶・発達臨床心理学（臨床心理学，発達臨床学，発達心理学）

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

❷・日本リハビリテイション心理学会　研究奨励賞受賞（2004.11.８）

❸・日本心理学会（会員），日本特殊教育学会（会員），日本心理臨床学会（会員）

・東海･北陸心理リハビリテイション研究会（代表幹事，事務局）

❹・障害児心理概論，教育リハビリテイション，肢体不自由児指導法，肢体不自由児研究法，臨床実地研究（学部）

・障害児心理臨床学特論，障害児心理臨床学演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

・養護学校における中心的な指導技法である動作法や遊びを通した発達支援など発達臨床の場を設け，自らが臨床実践に携わると共に，そういった実践場面を通し学生の指導にも当たっている。特に養護学校の教師など障害児教育に携わる上で発達支援等の実践的な力を持った有能な人材の育成を意識している。

❺・発達障害児への発達支援に関する研究（自閉症児や脳性まひ児など様々な障害児を対象とし，動作法や遊びを通した実践を通し，乳幼児のコミュニケーション発達など最新の発達研究の視点なども取り入れながら，発達支援の在り方について幅広く検討していく）

・2004年度の研究業績（論文）：

「自閉的な子どもへの早期の発達支援に関する研究」治療教育学研究，25，69－77。

「動作法における援助者の関わりの様式に関する研究―自閉的な子どもへの関わり―」治療教育学研究，25，79－87。

「荒川さんの研究発表に関するコメント」東海・北陸心理リハビリテイション研究会会報，22，32－34。

「肢体不自由養護学校における自立活動“からだ”の時間の現状と課題」東海・北陸心理リハビリテイション研究会会報，22，１－６。

❻・入試委員，就職委員会委員，特別専攻科運営委員，治療教育センター運営委員，障害学生支援ワーキング

❼・公開講座，講演等：

東海市保育士研修会（8.26）

愛知教育大学障害児治療教育センター　公開講座（11.15）

・学校現場，研究会等での助言指導：

愛知県教職員初任者研修会（6.15）　講義・実技指導・相談

第36回どんぐり訓練会（刈谷市ひかりの家）（6.5～6）　講義・実技指導・相談

東海・北陸心理リハビリティション研究会第22回大会（6.26～27）　司会・助言等

愛知県立岡崎養護学校　動作法校内研修会（7.20～22）　講義・実技指導・相談

滋賀県動作法研修会（7.23～29）　講義・実技指導・相談

福井県心理リハビリテイション研究会主催　動作法研修会（7.30～8.1）　講義・実技指導・相談

愛知県教育委員会　認定講習（8.5～6）　講師

全国肢体不自由研究大会（千葉）（8.10）　講師

第32回愛知心理療育キャンプ（愛知心理療育親の会主催）（8.17～23）　講義・実技指導・相談

愛知県立岡崎養護学校　動作法校内研修会（8.27）　講師

第37回どんぐり訓練会（刈谷市ひかりの家）（11.6～7）　講義・実技指導・相談

福井県心理リハビリテイション研究会主催　動作法研修会（11.13）　講義・実技指導・相談

福井県立福井養護学校　校内研修会（11.14）　講義・実技指導・相談

日本心理リハビリティションの会2004年全国大会（奈良）（11.27～28）
助言等
九州大学　動作法研修会（3.25～30）　講義・実技指導・相談
愛知心理療育親の会主催　月例訓練会（年11回実施）　講義・実技指導・相談
がんばろう会（刈谷市ひかりの家）月例訓練会（年10回実施）講義・実技指導・相談
愛知教育大学障害児教育講座森﨑研修室主催　動作法訓練会（週１回実施）
実技指導・相談

佐野　真紀　Sano, Maki　助教授　障害児教育講座　社会福祉学修士

❶ 社会福祉学，専門分野：ソーシャルワーク，社会福祉実習教育，児童家庭福祉
❸ 日本社会福祉学会，日本社会福祉実践理論学会，日本子ども家庭福祉学会
❹ 社会科学入門：社会福祉概論（１年），ソーシャルワークⅠ（２年），ソーシャルワークⅡ（２年），社会福祉援助技術演習Ⅰ（３年），社会福祉援助技術演習Ⅱ（３年），ケースワーク（３年），児童福祉学演習（３年），グループワーク（３年），医学概論Ⅰ（３年），医学概論Ⅱ（３年），社会福祉学研究Ⅰ（３年），社会福祉学研究Ⅱ（３年），社会福祉実習（３年），福祉科教育ｃ２（４年），総合演習Ⅱ（４年），社会福祉援助技術論（大学院）
・ケースワーク，グループワーク，社会福祉援助技術演習Ⅰ，Ⅱ，社会福祉実習では，学生の実践力を高めるための授業を行うことを目指している。特に社会福祉援助技術演習では，NLP（神経言語プログラミング）理論に基づいた対人援助関係のトレーニングを取り入れており，高度な対人援助スキルを持った実践家の育成を意識している。
❺・現在の研究テーマ：
⑴　NLPを取り入れたソーシャルワークトレーニングプログラムの構築
社会福祉援助活動を行う上で必須である対人援助スキルの獲得について，NLPの理論に基づいたトレーニングプログラムの構築を試みてきている。2004年度は授業の他に合計10時間分の補講を行い，プログラムを実施した。引き続き学生に対するトレーニングプログラムの構築を目指すと共に，現職の社会福祉従事者に対するトレーニングプログラムの構築も視野に入れ，研究を進めている。
⑵　ソーシャルワークの専門性とEmotional Intelligence
ソーシャルワーカーは，専門職として高度な知識と技術と価値に基づいて実践しなくてはならない。その際にどのようにしてその専門性を発揮するかは個人の力量次第であるが，この「力量」の部分にEQ（Emotional Intelligence）的要素が多分に求められている。優れたソーシャルワーク実践はどのようにして行われるのか，「ソーシャルワークの援助技法」「対人援助スキル」「優れたEmotional Intelligence」などが，どのように関係しているのか，ソーシャルワークの専門性をテーマに考察したい。これによって，ソーシャルワークトレーニングのゴール設定を明確にしたい。
❻・セクシャルハラスメント相談員，特殊教育特別専攻科運営委員会委員，介護等体験事前指導
❼ アカデミック・クエスト講師，富士市ケアマネジャー研修講師，救世軍機恵子寮（児童

養護施設）職員研修講師，EQ・SQビジネスフォーラムパネリスト，愛知社会福祉実習連絡協議会幹事

岩田　吉生　Iwata, Yoshinari　　講師　　障害児教育講座　　教育学修士

❶ 聴覚言語障害児教育，関連分野：発達心理学（言語発達）

❸ 日本特殊教育学会，日本コミュニケーション障害学会（査読委員），ろう教育科学会，日本聴覚言語障害学会，日本聴覚障害教育工学研究会，聴覚言語障害研究会（事務局），日本国際聾教育学会，日本聴覚障害教育実践学会

❹ 障害児心理概論（１年），障害児心理診断法（２年），聴覚言語障害児基礎実験Ⅰ（２年），聴覚言語障害児基礎実験Ⅱ（２年），聴覚言語障害児研究法Ⅱ（３年），聴覚言語障害児臨床実地研究（３年），聴覚言語障害児教育演習（４年），障害児の発達と学習（特殊教育特別専攻科）

聴覚障害児教育における障害児心理，特に聴覚言語障害児心理に関する講義を中心に担当している。学部１，２年生時では，健常児の言語発達と，聴覚及び言語に障害のある子どものコミュニケーション発達に関する基礎を，教科書，学術論文などの文献資料を活用しながら指導を実施している。学部３，４年生時では，聴覚言語障害児教育について学生各自が関心のあるテーマを選択し，演習形式で発表していくような講義を進めることが多い。学生は自分自身で文献を収集し，数多くの文献を読み込み，レジュメを作成していく過程を積み重ねて行くことにより，障害児教育・障害児研究の現状について理解を深めていく。

また，担当する講義では，聴覚に障害のある学生が履修する場合が殆どで，音声言語と手話を併用しながら講義を進めている。聴覚に障害のある学生とは普段から話し合いを重ね，講義でハンディキャップが生じないように配慮をしている。しかし，まだまだ課題は山積しており，FD活動の一環として，学内の教官・事務官に理解を広める他，具体的な支援方法の検討を進めていきたい。

❺ ⑴　聴覚障害児者のコミュニケーション

日本の聴覚障害児教育においては，現在，各聾学校で手話の導入に関する議論が行われる一方で，徐々に聴覚口話法から手話を活用した指導方法が実践されるようになった。今後，手話導入に関して検討していくためには，さらなる基礎研究の集積が必要である。

⑵　聴覚障害児者の障害認識・障害受容及びアイデンティティ形成

近年，日本の社会ではろう者が聴者とは異なる「ろう文化・ろう社会」を主張する動きが強くなってきているが，青年期から成人初期における聴覚障害児・者の障害認識や，アイデンティティ形成の過程に関する調査研究も実施しており，今後も継続していきたい。

⑶　言語発達遅滞児の臨床指導

「ことばの遅れ」のある子どもの臨床指導や教育相談を，学校，家庭と連携を組みながら行っており，それらを事例研究の論文としてまとめている。

１．聴覚障害児教育における早期手話導入－聴覚障害児・者の言語獲得及び言語環境との関連―，コミュニケーション障害学17⑵，日本コミュニケーション学会，2000。

２．聴覚障害青年のアイデンティティ形成に関する一考察，治療教育学研究第21輯，愛知教育大学障害児治療教育センター，2001。

３．聾学校中学部・高等部生徒の読唇に及ぼす手がかり効果，ろう教育科学44⑴，ろう

教育科学会，2002。

４．側音化構音児選別検査作成に関する研究―書字検査及び単音聞き書き取り検査の適応学年に関する検討―，愛知教育大学研究報告第51輯，愛知教育大学，2002。

❻ 教育実地研究委員会委員（2004年４月－現在），障害児教育講座障害学生支援委員会委員（2002年４月－現在）

❼ 日本コミュニケーション障害学会・編集協力委員（論文の査読審査），愛知県蒲郡市教育委員会・専門相談員（1999年４月～現在），愛知県教育委員会教員免許認定講習会講師，聴覚障害児教育・聴覚障害者福祉に関する講演会講師，学会・研究会話題提供者・助言者など。

幼児教育

村岡　眞澄　Muraoka, Masumi　　教授　　幼児教育講座　　文学修士

❶ 専門分野：体育学（幼児体育），関連分野：発育発達，体育科教育学，健康教育学

❸ 日本保育学会（常任理事），日本体育学会，日本教育学会，発育発達学会，小児保健学会，保育園保健学会，OMEP（世界幼児教育会議）日本委員会会員，愛知幼児教育研究会

❹ 基礎技能ＩＡ（１年），小児保健Ｉ（１年），保育内容：健康Ａ（２年），保育内容：健康Ｂ（３年），保育内容演習Ｉ（３年），総合演習Ｉ（３年），小児保健実習（３年），共通科目（主題科目）“こころとからだセミナー”（３年），総合演習Ⅱ（４年），保育内容研究特論（大学院），保育内容研究演習Ｉ（大学院），保育内容研究演習Ⅱ（大学院），保育内容実践研究特論（大学院）

前年度と同様に，実技，実習，演習，講義と他形態の，しかもいくつかの分野にわたる授業をカバーせざるを得ない状況が続いており，保育実践力の育成という点での課題が十分解決できていない。しかし，本年度もまた三好町の保育園の協力を得て授業として保育観察や子どもと実際に触れ合う機会を持つようにしたことから，子ども理解を深めるという点でも効果があり，学生も意欲的に課題に取り組むことができた。保育理論をしっかりと踏まえ，子ども理解に基づいて，考え工夫し子どもと生活を創造していくことができるような保育者の養成に資するような授業の試みとして一定の成果があったように思う。学生が教師となって遊びを指導するといった経験もすることができ，基礎的な学習の授業にフィードバックされるというねらいもかなり達成されたように思われる。担当している授業を今後さらに有機的に連関させるという課題は十分ではなく今後努力していきたい。大学院の授業についても前年度と同じように，保育実践力の向上とその理論化を目指す意味で，研究のための基礎的な力を育成する授業をきちんと位置づけるようにしている。その他，授業に関する研究や情報の収集・講読はいうまでもなく，基礎的な知識，技能を伝える場合でも一方向的なものにならず，できるだけ学生が興味をもって参加できるような工夫を続けたい。

❺ 現在の主たる研究テーマは，幼児の遊びや生活習慣行動場面での指導・援助のあり方をフィールドワーク的な手法を用いて追究し，保育実践力の育成や向上に資するよう体系化することである。また，運動的な遊びに関する教材研究，運動発達と園舎環境との関

連などについても継続して研究を行っている。園舎環境に関する研究では，技術教育講座，養護教育講座の教員と共同で，幼稚園保育園の園舎環境と保育者の健康や幼児の発達・健康との関連を明らかにするため，林野庁の助成を受けて全国的規模での調査を行った。

著書：

木造校舎の教育環境　ix章　保育園・幼稚園の木質環境（橘田紘洋編）日本住宅・木材技術センター　2004

論文：

⑴ 村岡眞澄　これからの保育者養成に向けて―領域「健康」から捉える専門性―　愛知教育大学教育実践総合センター紀要　第8号　2005

⑵ 横井志保，岩田幸子，渡辺桜，村岡眞澄　保育者の実践的指導力の育成・向上に関する研究⑶―食事の場面で―　愛知教育大学幼児教育研究　第12号　2005

❻ 幼児教育講座代表，教育研究評議委員会委員，人事委員会委員，自然観察実習園

❼ 刈谷市情報公開・個人情報保護審査委員会委員，三好町教育基本計画推進委員会委員，三好町幼年期健全育成推進協議会会委員，三好町主任保育士研修会講師3回，西加茂郡主任保育士研修会講師，碧南市家庭教育講演会で生活習慣の指導について講演，刈谷市小高原幼稚園現職指導，刈谷市幼稚園で親子遊びの指導，愛知教育大学附属幼稚園教育研究発表会分科会助言者，昨年度に続き，名古屋市園長会会報誌「なでしこ」に幼小連携について寄稿。

梅澤由紀子　Umezawa, Yukiko　　教授　　幼児教育講座　　芸術学修士

❶ 保育内容学，音楽教育学（幼児音楽）

❸ 日本保育学会，日本音楽教育学会

❹ 基礎技能ⅠB（1年），保育内容：表現A　基礎技能ⅡB（2年），表現B（3年），保育内容演習Ⅱ（3年），保育内容：表現（他専攻4年），総合演習Ⅰ（3年），Ⅱ（4年），保育内容研究特論，保育内容研究演習Ⅲ（大学院）

基礎技能については，音楽的技能を中心にすえながら，狭義のピアノ演奏や音楽の技術のレッスンにとどめないよう，何ぶん，限られた時間と条件の枠内であるが，広く表現性の理解，受容に結びつけ考え，感じつつ表現し動くことができることをめざしてすすめている。少人数学生をいかし即興的にいろんな活動を提起し，また教材研究につらなるように，方法を開拓してゆきたいと考えている。

今年度も実践的，一部実習的内容の授業研究として，2年生後期に「幼稚園訪問音楽会」を行った。「基礎技能」及び「保育内容研究　表現」の一環として取り組んだ。

協力園とのうち合わせによる幼児の様子の把握，対象年齢と活動の設定，幼稚園の先生方との実践後の話し合い，子どもたちの様子や学生の表現のヴィデオ録画の内容検討など，多面的な学習が，相互に生かされる結果となった。学生の表現が生き生きとしたものになっていくこと，目前の幼児と関わる表現とは何であるかを考えつかむこと，幼児はどのように表現を受け止め，どのように返してくるか，それはどうしてかといった事柄について具体的に考える機会となり，学生ばかりでなく，協力園の先生方，教員に一定の課題性が現れてきた。今年度は，学生に構成に多くをまかせ劇的構成ですすめる内容にしたことで，一層子供のファンタジーの楽しみ方が強く現れたことは興味深く，収穫であった。授業として，個々の学生自身が自覚的に表現を楽しみつつ幼児と交流するには，どのようなことが必要か考えながらすすめられるよう，ガイダンス，授業構成

の方法を検討していきたい。また，この学習がその後の「保育内容演習」などの授業の学びに継続し生かされるよう授業構成も，むつかしいが課題としてゆきたい。

❺ 現在のテーマは，「幼児の音楽的，リズム的表現の様態」である。主に年長幼児の遊び場面での幼児の遊びの持続を観察分析することで，表現的，身体的リズム的な遊びの特徴を明らかにする基礎的な研究である。遊びの即興性，共同で遊ぶ場面でのイメージ生成，変化や個々の幼児の表現の表し方など，音，リズム的活動の展開を中心にすすめている。また，そのような自発的遊びの表現と並び，保育実践における表現的活動の内容，教材のもつ課題性，保育者の指導方法，援助のあり方の検討を幼稚園のフィールドをかり，行っている。

今年は，子どもたちの劇表現や劇遊びから，劇表現において中核となる表現とはどのようなものか，幼児にとって劇遊びの意味をテーマとして研究をすすめた。幼児の表現の様態を多面的に考え，ごっこ等の遊びのありようと関連づけながら考察してゆこうとした。表現の様子を場面づくりに注目し，記述，分析することは，幼児にとって表現とは何かを考える基礎資料となり，また，保育者自身の表現文化や表現観の検討に直接関わってくる。保育方法と，広い意味での教材研究，特に表現固有の観点のクローズアップに通じることである。今後，保育者の協力を得て，より直接に共同することで，資料内容を吟味，蓄積し整理していくことを目指してゆきたい。

・論文：

幼児の劇遊び・劇的表現における「場面」愛知教育大学　幼児教育研究　第12号　2005・３

口頭発表：

幼児の音楽的表現の様態　日本保育学会第57回大会（神戸親和女子大学）2004・５／16

❼ 研究協力園や近隣の幼稚園（刈谷市）の園内研修講師。「発達に即した幼児の劇表現，表現的活動の指導，援助について」

小川　英彦　Ogawa, Hidehiko　　助教授　幼児教育講座　　教育学修士

❶ 障害児保育，児童福祉

❷ 日本福祉大学学術奨励賞（1996年７月）

❸ 日本特殊教育学会，精神薄弱問題史研究会，中部教育学会，日本発達障害学会，社会事業史学会，日本社会福祉学会，日本教育学会，日本教育方法学会，日本特別ニーズ教育学会（全国大会実行委員長），日本保育学会

❹ 専門教育入門（１年），社会福祉学原論（２年），児童福祉論（２年），ソーシャルワークⅠ（２年），ソーシャルワークⅡ（２年），障害児保育（３年），養護原理（３年），養護内容（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），障害児教育福祉制度論（１年課程），保育実践研究演習（大学院），保育臨床研究特論（大学院）

わかりやすい講義を目標にしていることから，ビデオや身近な資料を併用して授業を進めている。また，保育士の資格取得に必要な施設実習に連動させて授業を組み立てている。この１年においては，児童福祉施設の見学を行ったり，夏季に岡崎で実施されている障害児のサマースクールに参加させたりして，学生が児童と実際にかかわることか

ら学べる点を重視して取り組んでみた。

❺ 現在の研究テーマ：

「障害のある子どもの保育研究」（障害児保育や児童福祉に関する歴史研究をはじめ，保育所や幼稚園，通園施設にいる知的障害幼児の保育方法と内容研究，「気になる子ども」と表現される軽度発達障害幼児に関する研究を計画している）

著書：

子どもの福祉と養護内容（共著），ミネルヴァ書房，2004年
児童養護の原理と実践的活用（共著），保育出版社，2004年
社会福祉援助技術論（共著），保育出版社，2004年
新子どもの問題ケースブック（共著），中央法規，2004年
養護学校における危機管理マニュアル（共著），明治図書，2004年
現代教育方法事典（共著），図書文化，2004年
障害児の授業研究，98号（共著），2005年

論文：

特別なニーズをもつ子どもの指導をめぐって，愛知教育大学附属幼稚園研究紀要，第33集，2004年
軽度発達障害幼児の理解と指導，岡崎女子短期大学教育研究所所報，第15号，2004年
石井亮一の知的障害児教育福祉思想に関する歴史研究―1891年から1919年までを対象に―，愛知教育大学幼児教育講座幼児教育研究，第12号，2005年

❼ 名古屋市教育委員会幼稚園教育研修会の講師，愛知県現任保育士研修の講師，岡崎女子短期大学オープンカレッジの講師，岡崎女子短期大学教育研究所の障害児保育事例研究会の講師，名古屋市立第二幼稚園の指導助言，名古屋市立大幸幼稚園の指導助言，刈谷市立富士松南幼稚園の指導助言，全国保育士養成セミナー分科会記録，愛知教育大学附属高等学校アカデミック・クエスト講座講師，愛知教育大学附属幼稚園教育研究発表会の分科会助言者

新井美保子　Arai, Mihoko　　助教授　幼児教育講座　　文学修士

❶ 幼児教育学・保育学（保育内容論，保育方法論）

❸ 日本保育学会，日本音楽教育学会，関西教育学会，OMEP委員会（世界幼児教育会議）

❹ 専門科目入門，幼児教育学，幼児の理解と指導，社会科学入門（現代教育論）（１年），幼児教育学演習，保育内容総論，保育実習B，保育内容研究・言葉Ａ，同・言葉Ｂ（２年），幼児教育課程論，保育内容研究・言葉Ａ，同・言葉Ｂ，総合演習Ⅰ，保育実習Ｃ（３年），総合演習Ⅱ（４年），保育方法研究演習Ⅰ，保育方法研究演習Ⅱ（大学院）

本学として保育所実習を実施して２年目となり，１年目に課題と考えられた２年生と３年生の実習目標・内容の違いの明確化（実習の構造化）や，実習と授業との関連性を考えたカリキュラム編成（カリキュラムの構造化）について，様々に検討し実施を試みた。例えば，２年生では保育所実習においてまず，保育所に慣れてその機能や役割を知ると共に，０～６歳までの各年齢クラスで観察・参加実習をさせていただき，年齢による発達の違いや保育士の保育方法・内容の違いについて学ぶことを目標とした。３年生の実習では１クラスに深く入り，個々の子ども理解を深め，個に応じた援助方法を学ぶと共に，クラス全体の運営方法を学ぶことを目標とし，それらの内容・方法について実習園にも文書で依頼し協力を仰ぐ等を行った。また，これらの目標の達成に向けて授業科目の配当時期も変更した。１年毎の学生の学びの深まりや人間的な成長は目を見張る

ものがあり，実習と日々の授業との有効な連携の重要性を感じている。このように大学がリーダーシップをとりながら実習園と協力してよりよい学生を育成していけるように，今後も実習先と連携を取りながら検討を進めていきたい。

❺ 現在の研究テーマは「幼児の発達過程と保育内容の構成について」であるが，小中学生の学力低下や，幼・保と小の連携のあり方が課題として指摘されていることを考え，今年度はその中から特に「幼児期にふさわしい知的発達を促す保育の内容・方法」について検討した。①知的発達の概念，②「わかる」「学ぶ」とはどういうことか，③幼児期の脳の発達的特徴，④幼児の日常生活に見られる知的な姿等を通して，幼児期の「学び」について文献を中心に検討を行った。今後は，保育観察も実施して幼児期にふさわしい学びを保障する環境構成等についても検討していきたい。

また，保育制度は現在，主として行政改革の一環と，保育を利用する保護者の立場からの改革がなされており，そこで働く保育者や生活する子どもの立場からの改革はなされていない。そこで，一クラスあたりの適正人数や保育者の負担感等についての意識調査を早急に実施する必要を感じ，愛知県内の保育者を対象に実施した。これらを集計・分析することで，「より良い保育実践を支えるための保育の諸条件」についても検討し，提案を行っていきたい。

・業績リスト：

・口頭発表：

保育者養成課程の教育内容について（その４），日本保育学会第57回大会（親和女子大学），2004.5.16

❻ 委員会：教育実地研究委員会（基礎実習，主免実習，応用実習のコーディネーター）

❼・安城市立さくの幼稚園講演会「遊びの中で学ぶこと・育つこと―学力低下問題と幼児教育」

・豊田市立住吉幼稚園，林丘幼稚園現職教育講師

・愛知県現任保育士指導者養成研修「保育内容総論」講師（尾張地区園長主任研修）

・愛知教育大学附属幼稚園教育研究発表会分科会助言者

山口　雅史　Yamaguchi, Masafumi　助教授　幼児教育講座　博士（心理学）

❶ 専門分野：発達心理学，関連分野：幼児教育学，教育心理学

❸ 日本心理学会，日本教育心理学会，日本保育学会，日本発達心理学会，日本家族心理学会

❹ 幼児心理学（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），幼児心理学演習Ⅰ（２年），保育学Ⅱ（２年），保育内容研究・人間関係Ａ（３年），保育内容研究・人間関係Ｂ（３年），精神保健学（３年），家族援助論（３年），こころとからだセミナー（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），幼児心理学演習Ⅱ（大学院昼間），幼児心理学演習Ⅱ（大学院昼夜間）

２年前期から始まる各種実習に向けて，１年次の幼児心理学では乳幼児の発達の基礎を教え，２年次の幼児心理学演習Ⅰでは課題研究等を取り入れて幼児期の発達についてさらに内容を深める授業展開を目指している。また，３年次の保育内容研究・人間関係Ａ，Ｂでは，幼稚園で撮影した映像資料を使ったり，事例の検討を取り入れたりしつつ

実践的な能力の養成に努めている。

❺・主な研究テーマ：

関係発達論的な観点から，幼児期の自己意識や自己概念がどのように形成され，成立するのかを，主に３歳児の遊びを通して検討している（幼児期の自己の形成過程に関する研究）。また，幼児を持つ親を対象に「親になるとはどういうことなのか」について検討している。現在は，親であることを親自身がどのように意味づけているのかを，質的に分析することを試みている（親の発達に関する研究）。

・業績：

論文：

母親同一性と育児ストレスとの関連　家族心理学研究，第18巻，第１号，17～28。

学会発表：

３歳児の遊びの展開(1)　日本発達心理学会第16回大会。

❻・時間割編成委員会委員，自然観察実習園管理運営委員会委員，情報システム委員会委員，システム管理専門委員会委員

❼・愛知県・名古屋市共催　私立幼稚園新規採用教員研修会シンポジスト・講師。

・東京都社会福祉協議会　東京都保育士試験準備講習会講師。

・東海市　子育てサロン：とうちゃんと遊ぼう実践講座講師。

・東海市　子育てサポート講座講師。

・豊明市　男女共同参画講座「子育てサポーターになろう」講師。

・全国保育士養成協議会　16年度全国保育士養成セミナー分科会運営担当。

・愛知県私立幼稚園連盟課題研究　私立幼稚園における子育て支援のあり方研究指導。

・全日本私立幼稚園連合会　16年度東海北陸地区私立幼稚園教育研究愛知大会助言者。

養護教育

野村　和雄　Nomura, Kazuo　　教授　　養護教育講座　　教育学修士

❶ 教育学，専門分野：学校保健，関連分野：健康教育学

❸・日本学校保健学会（評議員），日本特殊教育学会，日本公衆衛生学会，東海学校保健学会（理事），日本教育保健学会（常任理事）

❹・専門教育入門Ｂ（１年），主題科目（１年），学校保健実習（２年），障害児の保健管理（２年），学校保健演習（３年），保健科教育ＣⅡ（３年），保健科教育ＣⅢ（３年），保健科教育ＣⅣ（４年），教育保健（３・４年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），学校保健組織運営特論（大学院），学校保健組織運営演習Ⅰ・Ⅱ（大学院），養護実践研究Ⅱ（大学院），保健科授業研究特論（大学院），情報と健康教育特論（大学院）

不易と流行，大学において学生が学ぶべきことにもそれがあろう。しかしそれを誰が判断するのが正しいのか。我々にしても不易はこれだと決めつけてしまってはいないか。そんなものは流行にしか過ぎないとも。まずはその判断の見直しをしつつ，不断の改善を図らねばならないとは考えている。

FD活動：

今年度は大学主催のFD活動行事には参加していない。情報を得ることをしなかった。

教育に対する抱負：

今年度も学習を促す工夫を折り込んだつもりではあるが，なかなか思うような成果

が上がっていないことは常々反省していることではある。

大学院教育については昼間コースと昼夜間コースとの接点をどう拡大するか，とりわけ養護教育専攻の現況は接点が極めて乏しいことから，院生同士の議論の場を確保することが授業担当者としての最大の配慮事項となるのではなかろうか。このことが現在も課題として残ってしまった。

❺・現在の研究テーマ：学校保健活動の評価

・研究助成等：

重点教育研究費申請の代表者となり「教育委員会等との連携による，今後の養護教諭養成の充実策の検討」を提出，配分を受けることができた。鋭意，研究を進めているところである。

❼・安城市「健康日本21安城計画」策定指導助言

・愛知県教育委員会による認定講習講師

・豊田市立根川小学校の研究の指導助言

渡邊　貢次　Watanabe, Koji　　教授　　養護教育講座　　博士（歯学）

❶ 環境微生物学，環境保健学，歯科保健学

❸ 日本学校保健学会，東海学校保健学会，日本口腔衛生学会，日本教育保健研究会，日本公衆衛生学会，日本健康教育学会，日本科学史学会

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），科学・技術と人間展開２（２年），微生物学（２年），免疫学（２年），微生物学実習（３年），総合演習Ⅰ（３年），臨床実習（３年），環境衛生学（４年），総合演習Ⅱ（４年），保健医科学特論Ⅱ（大学院），情報と健康教育特論（大学院）

・授業でプロジェクターを活用し写真，図，表を提示したり，ビデオ教材などのビジュアル的な資料を用いることで，学生が授業内容を平易理解できるようにこころがけている。また，教科書だけでは不十分なものについては，独自の冊子や資料集を作成し，授業時に活用している。

❺ 論文：

・学校保健・学校歯科保健指導におけるパーソナル・コンピュータ利用の状況，日本健康教育学会誌，12：49-59，2004

発表：

・Detection of S.mutans and P.gingivalis within dental plaque formed under xylitol rising regimen, 51TH Annual ORCA Congress : 44, 2004(Germany)

・S. mutansとP. gingivalisの歯垢内分布に及ぼすキシリトール洗口の影響，第53回日本口腔衛生学会講演集54：436，2004（盛岡市）

・S. mutansの歯垢内分布に及ぼすキシリトール洗口の影響，第63回日本公衆衛生学会抄録集51：794，2004（松江市）

❻ 委員会活動：

・教育研究評議会委員（学生支援委員会委員，入試部会委員）

・入学者選抜方法等専門委員会委員，高大連携選抜検討プロジェクト委員

・養護教育講座代表，養護教育専攻代表

学外活動：

・教育大学協会全国養護部門連絡協議会委員

・教育大学協会全国養護部門研究委員会委員

坂井　誠　Sakai, Makoto　教授　養護教育講座　博士（医学）

❶ 専門分野：臨床心理学，関連分野：精神保健学

❷ 佐賀県精神保健事業功労者表彰（1990年11月）

❸ 日本自律訓練学会（評議員，編集委員，教育研修委員），日本行動療法学会，日本心理臨床学会，日本心理学会，東海学校保健学会（評議員），日本臨床心理士会，中部行動療法・行動変容研究会（副会長），名古屋心身医学研究会（幹事），養護教諭研究会秋桜の会（主宰）

❹・精神保健（２年），健康相談（３年），教育保健（３年），心の臨床（３年），総合演習Ⅰ（３年），健康相談活動（３年），学校精神保健（４年），総合演習Ⅱ（４年），学校精神保健特論（大学院），学校精神保健演習Ⅰ（大学院），臨床心理実習Ⅰ（大学院），臨床心理実習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）

・養護教諭として，あるいは教員として，これからの学校現場で要請される相談活動に関する実践能力の習得を目指した授業を模索している。近年，いじめ，不登校，軽度発達障害などさまざまな心の問題を抱えた子どもに対する，学校での効果的な支援が求められている。このような子どもたちへの，有効性のある相談活動能力の教授に腐心している。

❺・現在の研究テーマ：

神経症，心身症の行動療法：

不安を中核に持ついわゆる神経症や心身症，とりわけパニック障害，強迫性障害などの不安障害に関する臨床研究。

うつ病の認知行動療法：

認知の歪みの修正を中心とした認知再構成法によるうつ病の治療に関する研究。

軽度発達障害の応用行動分析：

注意欠陥/多動性障害やアスペルガー障害の応用行動分析による教室内での問題行動の修正。

ストレスマネジメント教育：

児童・生徒に対する，自律訓練法，筋弛緩法，社会的スキル訓練の有効性に関する教育臨床学的研究。

・論文：

学校教育に活かす自律訓練法―その可能性をめぐって，自律訓練研究，23巻，2004。

小学生における社会的スキルに関する研究―登校におよぼす影響を中心に，愛知教育大学研究報告，54輯（教育科学編），2005。（共著）

❻ 教育実践総合センター心理教育相談室専門員，保健管理委員会委員，就職支援担当教員

❼・愛知県教育委員会平成16年度保健室相談活動研修会講師，愛知県総合教育センター平成16年度新規採用養護教諭研修講師，名古屋市教育センター平成16年度養護教員研修講座講師，名古屋市教育センター教育相談初級講座講師，小牧市教育委員会こまきみらい塾講師，師勝町教育委員会教育相談研修会講師，骨髄移植推進財団ガイドライン策定ワーキンググループメンバー。

・愛知教育大学公開講座教育臨床セミナー講師，愛知教育大学免許法認定公開講座学校精

神保健演習Ⅰ講師，日本産業カウンセラー協会中部支部向上訓練講師，ほか。
・名古屋市公立中学校スクールカウンセラー，愛知県スクールカウンセラー研修会講師，名古屋市原中学校保健委員会講師，名古屋市吹上小学校現職教育講師，東三河養護部会講演会講師，ほか。

古田　真司　Furuta, Masashi　　教授　　養護教育講座　　博士（医学）

❶ 専門分野：公衆衛生学，関連分野：学校保健学，健康管理学

❸ 日本公衆衛生学会，日本衛生学会，日本小児保健学会，日本母性衛生学会，日本学校保健学会，東海学校保健学会（評議員及び機関誌編集委員）

❹・こころとからだ入門（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），衛生学実習（２年），薬理学概論（３年），公衆衛生学Ⅰ（３年），総合演習Ⅰ（３年），臨床実習Ⅰ及びⅡ（３年），公衆衛生学Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），保健統計（４年），学校疾病学特論、演習Ⅰ及びⅡ（大学院：養護教育専攻），特別研究Ⅰ及びⅡ（大学院：養護教育専攻），健康管理学特論（大学院：保健体育専攻）
・情報教育入門Ⅱでは，自専攻（養護教諭養成課程）の学生を対象としているため，授業中にインターネットを利用して，健康に関連する情報を検索させるなどの工夫している。養護教諭養成課程の必修科目である「公衆衛生学Ⅰ」では，今後，健康関連分野で活躍が期待される学生にとって必須の内容を吟味しているが，講義範囲が広いため，どうしても一方的な講義になりがちである。しかし，プロをめざす学生には最低限必要な内容であると考えているので，期末試験を課して，不合格の者には再履修させている。一方，選択科目である「衛生学実習」「薬理概論」「公衆衛生学Ⅱ」「保健統計学」では，すべてを網羅して講義することは避け，内容を厳選して，１～２コマで１つの内容（テーマ）を完結させる方式で授業を行っている。たとえば「薬理概論」では，純粋な薬理学の講義ではなく，日本における医学や医療の現状を「くすり」を題材に考える授業とし，大衆薬・医療用医薬品・薬価・治験・薬害などについて，新聞記事なども用いて講義している。また大学院では，現職教員を含む大学院生に対して，研究室内にインターネットが利用できるパソコンを数台用意し，授業の中でさまざまな文献や情報や検索して検討する授業を行っている。最近の健康管理学の分野では，巷にあふれたさまざまな健康にする情報から正しい役に立つ情報を選択して利用する能力が求められており，その実践的な力を身につける機会を提供したい。

❺・現在の主たる研究テーマは，『児童・生徒の不定愁訴とその対応に関する研究』である。1996～97年には科学研究費の助成を受け「女子生徒の周期的身体不調の要因に関する教育保健学的検討」を行い，引き続き1998～2000年には，科学研究費を得て「ライフスタイルと健康意識から見た生徒の不定愁訴の要因に関する検討」により小中学生の不定愁訴の要因を検討した。これらの研究から，児童・生徒の身体不調を検討する上で不可欠となる視点は「縦断的観察」であると考えた。この点を中心テーマとした「縦断的観察による生徒の身体不調の変化要因に関する検討」は，引き続き2001～04年にも科学研究費を得られ，2004年度はこれらをまとめて報告書を作成した。この中では，学校現場で利用可能な，子どもたちの愁訴に連動する客観的指標に関する知見を得ており，今後もこのテーマの研究を発展させていく予定である。

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

・2004年度の主要業績は次の通りである。

1．小学生のストレスの変化が重心動揺に及ぼす影響―個人ごとの縦断的観察による検討―，愛知教育大学研究報告（教育科学編）53，53-58，2004

2．加速度脈波を用いた自律神経評価値と不定愁訴の関連―女子大学生と被験者とした縦断的観察による検討―，東海学校保健研究28(1)，43-52，2004

3．家庭・学校・地域連携による児童生徒の生活習慣病予防活動の試み，日本公衛誌51(9)，709-797，2004

・2004年度は，平成16年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）(課題番号：13480060)「縦断的観察による生徒の身体不調の変化要因に関する検討」（研究代表者：古田真司）交付金額1,200千円　を受けた。

❻ 理系機器共同利用センター運営連絡協議会委員，教員選考委員会委員長（２件）

後藤ひとみ　Goto, Hitomi　　助教授　養護教育講座　　教育学修士

❶ 教育学，専門分野：養護教育学，関連分野：学校保健

❸ 日本養護教諭教育学会（理事），日本学校保健学会（理事），東海学校保健学会（評議員），日本小児保健学会，日本思春期学会，日本衛生学会

❹ 養護教諭論（１年），養護概説（２年），養護活動実習Ⅰ（２年），養護活動実習Ⅱ（３年），養護活動演習（４年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），主題科目：人間と生活セミナー（３年），保健科教育ＣⅠ（２年），養護教諭論特論（大学院），養護教諭論演習Ⅰ（大学院），養護教諭論演習Ⅱ（大学院），養護実践研究Ⅰ（大学院）

・教職科目である「養護教諭論」では，附属高等学校の保健室見学及び現職養護教諭（小学校・中学校・高等学校・養護学校）の講話を導入し，養護教諭の役割に関する具体的なイメージを持って４年間の学習が始められるような動機づけを行っている。また，養護教諭のための専門教育を充実させることをねらいとして，２年前期の「養護概説」を基礎として，２年後期の「養護活動実習Ⅰ」，３年前期の「養護活動実習Ⅱ」，さらには４年前期の「養護活動演習」という系統的な授業を展開している。

❺ 現在の研究テーマ：養護教諭が行う実践研究の分析と養護教育学の検討

・養護教諭の職制は60数年を経たところであり，固有の学問領域を明らかにする研究は十分に進められていない。したがって，養成カリキュラムの体系化，養護教諭に必要な専門的資質や能力の尺度化といった研究課題が残されている。そこで，これまで行ってきた養成カリキュラムの現状分析，専門的能力の構造，養護教諭の実践を深めていく研究能力の育成などの研究を深めながら，現職養護教諭との関わりを通して「理論と実践」「実践と研究」の結びつきに注目し，実践的研究と研究的実践という双方向の取り組みにおける養護教諭独自の方法論を明らかにしたい。また，このような方法論の確立とともに，養護学及び養護教育学の体系についても検証していきたい。

1．養護教諭が行う研究の考え方・進め方，健康教室，№807，30-33，東山書房，2004

2．日本学校保健会「養護教諭の専門性と保健室の機能を生かした保健室経営の進め方」，13-22，2004

3．木造校舎の教育環境―校舎建築材料が子ども・教師・教育活動に及ぼす影響」，62-69・99-106・116-117，（財）日本住宅・木材技術センター，2004

4．日本教育大学協会全国養護部門研究委員会「養護教諭の資質向上を目指したモデル・コア・カリキュラムの提案」，29-30・43-51，2004

5．三訂養護概説，39-41・50-58，ぎょうせい，2005

６．養護実習における「総合実習」の検討―総合実習記録用紙の活用を通して―，日本養護教諭教育学会誌，Vol.８(1)，47-56，2005
７．養成制度と教育―さらに求められる，教免法の改正や課程認定の充実―，子どもと健康，№80，48-53，2005
８．21世紀の養護教諭に期待する役割と「職のあり方」，学校保健フォーラム，Vol.９，13-16，健学社，2005
９．複数配置校における養護教諭の活動実態―一日の活動及び保健室来室者への対応から捉えた利点―，愛知教育大学研究報告，第54輯（教育科学編），47-55，2005

❻ 教育実地研究専門委員会副委員長

❼・三重県養護教諭経験10年研修会講師，平成16年度愛知県認定講習「養護概説」講師，愛知教育大学公開講座「学校における健康管理の新たな課題への対応」講師。埼玉県養護教員研修会，愛知県豊田加茂教育事務所足助支所主任養護教諭研修会，山梨県養護教諭研修会，北設楽郡教員会養護教諭部夏季研修会，愛知養護教育研究会保健指導・執務勉強会，刈谷市教育研究会保健委員会研修会，愛知県立高等学校学校保健会西三河支部養護教諭研究会，海部地区西ブロック養護教諭部会での講演。愛知県養護教育研究会調査研究部会，蒲郡市養護教諭研究会，岡崎市教育研究大会での指導助言

櫻木　惣吉　Sakuragi, Sokichi　　助教授　養護教育講座　　博士（医学）

❶ 生理学，神経生理学，心理生理学

❸ 日本生理学会，日本生理人類学会

❹ 生理学（１年），生理学演習（２年），診断学Ⅰ（３年），生理学実習（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），こころとからだ―からだのしくみ（２年），生体機能学特論（大学院）

❺ 情動の変化と自律神経指標との関連について研究している。
・2004年５月には，Interactive effects of task difficulty and personality on mood and heart rate variability.という論文をJ Physiol Anthropol Appl Human Sci. 2004 May;23(3):81-91.に発表し，性格傾向の違いによりタスクに対する自律神経系の反応が異なり，また，その差はタスクの難易度が，がんばれば何とかできる程度の時に最も大きいことを明らかにしている。
また，シナプスの可塑的変化に関する基礎的実験を，名古屋大学環境医学研究所でラットの脳のスライス標本を用いて行っている。

❻ 時間割編成専門委員会委員，衛生管理者

❼ 16年度愛知県免許法認定講習（解剖学及び生理学）

福田　博美　Fukuda, Hiromi　　助教授　養護教育講座　　人間科学修士

❶ 看護学

❸ 日本看護科学学会，日本学校保健学会，日本養護教諭教育学会，老年社会科学会，日本老年行動科学会，日本疫学会，東海学校保健学会，東海養護教諭教育研究会，東海学校保健学習会

❹ 看護実習Ⅰ（2年），看護実習Ⅱ（3年），成人看護学（3年），総合演習Ⅰ（3年），総合演習Ⅱ（4年），看護科教育CⅡ（4年）

「看護実習Ⅰ・Ⅱ」では，Ⅰでは看護基礎技術の習得（医療的ケアを含む），Ⅱでは患者を理解した看護実践を目的に，フィジカルアセスメントの学習やＰＢＬに基づいて事例展開の形式で授業を行っている。事例のイメージ作りで学生が戸惑っており，授業進行当初の解剖生理や疾患理解と統合させて，患者像を作成できるよう学生への支援の必要性を感じる。

「看護科教育CⅡ」においては，実際の高等学校衛生看護科の学校運営を視点においたカリキュラム作成を行っている。高等学校において，高校生に伝えるべき看護とは何なのかについて，学生と戸惑いながら検討している。

学校看護学特論（大学院），学校看護学演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

学生のニーズに合わせ，現代的看護課題より学校における看護を検討している。

❺ ⑴ 養護教諭の看護学：

養護実習における「総合実習の検討」―総合実習記録用紙の活用を通して―，日本養護教諭教育学会誌 8⑴，47-56，2005

⑵ 高齢者介助（家族）の援助：

痴呆高齢者に対する音楽療法に関するシステマティックレビュー，愛知教育大学研究報告，54（教育科学編），57-61，2005

⑶ 心身に障害を持つ人を学生が理解するための看護・教育学的研究・現在の研究テーマ

❻ 放射線障害予防委員会委員

❼・東ブロック校長研修会（7/6）講演，愛知教育大学附属幼稚園研究協議会＜養護分科会＞助言，養護教諭研究協議会（11/24）助言，日本二分脊椎症協会　東海支部会参加

学校教育

佐藤　勝利　Sato, Katsutoshi　　教授　　学校教育講座　　教育学修士

❶ 心理学，専門分野：臨床心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本心理学会，日本教育心理学会

❹ 臨床心理学（3年），臨床心理検査法演習（3年），児童生徒の生活の指導と相談Ｂ（4年），教育の心理学（1年），こころとからだ（1年），グループアプローチ特論Ⅰ（大学院），臨床心理基礎実習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

学部にあっては，不登校や集団不適応などの学校を巡る子どもたち問題行動について，臨床心理学の立場から自験例を引きながら論じ，将来、教員として効果的にそれらの子どもたちの理解と指導が行えるような力量の養成，すなわち，単なる how to 的な理解に終わることなく，個々の児童生徒の自我発達を把握し，柔軟に対処できる力の涵養を目指している。

大学院にあっては，スクールカウンセラーを初めとする教育臨床の専門家（臨床心理士）の養成に努めている。すなわち，臨床心理基礎実習Ⅰでは，少人数によるロールプレー形式の面接実習（対象のＭ1院生を2分し，1つのグループは毎週2時間，他の1つのグループは隔週4時間を当てて実施している）を行い，心理臨床の基礎としての“聴く”ことの意味を伝えようとしている。また同Ⅱでは，教育実践総合センター心理教育相談室に来所するケースの受理面接に院生を陪席させたり，併行面接の形で担当さ

せた上で，そのスーパーバイズを行っている。さらに，学内の臨床系教官と協同して行うケースカンファレンス方式の事例検討会に参加させることによって，院生に臨床技法・臨床マナーの修得を徹底させようとしている。

これらの院生に対する臨床教育は，その性質上，個別指導が中心であり，昼夜間，夜間，サテライトのいずれを選択してもほぼ等質な教育を保証しようしているので，その負担はかなり過重なものになっており，授業運営上の最も大きな問題点となっている。

❺ ⑴　児童～青年期の心理療法の実践的研究，⑵　エンカウンターグループに関する研究

現在，教育実践総合センター心理教育相談室に来所するクライエントに対してカウンセリングや心理療法を実施してきているが，今後もこれらの活動をより発展・充実させるとともに，児童～青年期の心理療法過程の把握と治療機序の解明に関わる臨床的・実践的研究を進めたい。

また，エンカウンターグループについては，現在，青年期グループ，成人グループ双方のグループプロセスについて関心を有しているが，今後もグループ実践を続ける中で，それらの特徴を明らかにしていきたい。

母親面接を通して思うこと　教育臨床学研究（愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室紀要）５　2005

❻ 大学院教育臨床専攻代表，治療教育センター運営委員会委員，入試部会委員

❼ 教育臨床セミナー（愛知教育大学公開講座）主任講師，師勝町SSN事業（愛知県委託）主任講師

❽ 教育実践総合センター心理教育相談室長

竹内登規夫　Takeuchi, Tokio　　教授　　学校教育講座　　社会学修士

❶・職業指導・進路指導・キャリア・カウンセリング

❷ ①　昭和62年11月５日　財団法人日本進路指導協会会長（表彰）「進路指導の研究と実践」

②　平成２年11月30日　財団法人日本教育研究連合会理事長（表彰）「進路指導の理論的研究」

③　平成８年11月23日　労働大臣（表彰）「労働相談員として労働行政の推進協力」

④　平成10年11月28日　愛知県知事（感謝状）「職業能力開発促進事業推進協力」

⑤　平成14年４月20日　東海郵政研修所所長（感謝状）「郵政事業発展への貢献」

❸・日本進路指導学会（会長）・日本進路指導学会中部地区研究会・財団法人日本進路指導協会（理事）・日本産業カウンセリング学会・日本カウンセリング学会

❹・職業指導概論（２年），教育の社会的研究（２年），産業・職業情報分析（３年），職業指導実験（３年），ライフコースセミナー（３年），生活の指導と相談Ａ（３年），現代の職業生活と職業指導（３・４年），キャリア･カウンセリング実習（４年），職業指導特論Ⅰ（大学院），職業指導演習Ⅰ（大学院）

・「職業指導概論」や「教育の社会的研究」といった講義主体の授業は別として，その他の授業では昨年に引き続き可能な限り実習や演習を取り入れ，実践力を養うことを目指した授業展開に努めている。

❺ ①　現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）：

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

「新規学卒者の職場適応」（今日，中学校・高等学校・大学等卒業者が初職を３年以内に辞めてしまう者が，７割・５割・３割と高率になっており，青少年の早期離転職が問題となっている。また，目的意識を持たないフリーターの急激な増加についても社会問題化している。更には，NEET（無業者）の問題がクローズアップされている。このような青少年の職場・職業適応の問題（メンタルヘルス問題も含む）に焦点を当てそのメカニズムを少しでも明らかにするとともに，青少年のキャリア形成支援の方策を究明していきたい。今後は，現在行っている研究の一層の深化･発展を期していきたい。

② 業績リスト：

・論文：

「『看護職の感情状態とコーピング方略・職業確認の関連』調査報告書」（共著）愛知きわみ短期大学（2004年愛知きわみ短期大学特別研究助成）2005年３月

・口頭発表：

「職業的アイデンティティの形成が入職後の職務態度に及ぼす影響―組織コミットメント・モティベーション・転職意思への影響―」共同発表　日本進路指導学会第26回研究大会　2004年10月　東洋大学白山キャンパス

「看護職の職業認知とコーピング方略との関連―研修受講生に焦点をあてた調査結果の検討―」共同発表　日本進路指導学会第26回研究大会　2004年10月東洋大学白山キャンパス

❻・共通科目「人間と生活」コーディネーター・附属学校運営委員会委員（2004年９月まで）・入学試験委員・進路指導コース代表

❼ ① 各種審議会委員，自治体等の教育組織における活動：

・教員の評価に関する調査研究会議委員（名古屋市教育委員会）・愛知県青年の家運営委員会会長（愛知県青年の家）・本郷小学校学校評議会評議委員（名古屋市立本郷小学校）

・愛知県商工会連合会人事管理委員会委員（愛知県商工連合会）

② 学校外の公開講座，講演会：

・独立行政法人教員研修センター中央研修「キャリア教育の工夫改善」など

鈴木　眞雄　Suzuki, Masao　教授　21世紀教育創造センター主任研究員　学校教育講座　教育学修士

❶ 心理教育測定・教育心理学

❸ 日本心理学会，日本教育心理学会，東海心理学会

❹ 主題科目「日本と韓国・朝鮮・コリア」（２年），心理学特殊実験（３年），教育心理統計学演習（２年），教育評価（１年），心理アセスメント講義（２年），心理検査法特論（大学院），教育評価演習（大学院），心理・教育統計法特論（大学院）

義務教育の歴史など，学生の教員養成以前の知識の欠如が目立ち，講義の前段階の準備の必要性を痛感している。

それぞれの領域の古典をきちんと読む習慣を身につけさせたい。

ユネスコの支援：ACCU　International Exchange Programme　の代表

❺ 現在の研究テーマ：

教師の自己効力感の測定とその評価，心理統計学の講義内容の精選

業績リスト：

鈴木眞雄・山田一郎・岩田直治　動的学校画における人物像の相対的な大きさと人物

像間の距離の大小についての分析　愛知教育大学研究報告，53，1-5，2004。
鈴木眞雄・永井靖人　不登校・別室登校児童の学習をいかに支援するか　愛知教育大学教育実践総合センター紀要　８．237-244，2005。
鈴木眞雄　新時代の校長に求められる資質について　小学校時報　通巻642号，55巻，２号．4-8。

学術・研究交流：
韓国晋州教育大学と「大学院の研究交流」の促進について，共同のシンポジウムを企画開催。

❻ 教育研究評議会，教員人事委員会，大学改革推進委員会，教育科学評議員会

❼ 教育大学協会　教員養成・専門職大学院に関するプロジェクト委員
愛知県公立高等学校入学者選抜方法における群・グループのあり方に関する懇談会委員
豊田市教育委員会学校評価検討委員会委員
春日井市行政改革推進委員会小委員会委員
刈谷市いじめ・不登校児童生徒適応指導調査協力者会議委員
稲沢市立下津小学校：学習指導カウンセラー派遣事業助言
名古屋市高年大学鯱城学園　教養講座「高年期はゴールデンエイジ」講師
愛知県学校事務講演会：学校教育と学校事務職員　講師

❽ 東海地区準硬式野球連盟副会長，全日本大学準硬式野球連盟理事，東海野球懇話会副会長

中野　靖彦　Nakano, Yasuhiko　　教授　　学校教育講座　　教育学博士

❶ 専門分野：発達心理学，関連分野：教育心理学，国際理解教育

❸ 日本心理学会，日本教育心理学会

❹ 道徳教育の研究（２年），教師論（１年），児童・青年心理学演習（４年），発達心理学（特論Ⅰ，演習）（大学院），発達心理学特論Ⅱ（夜間）
・学部の「教師論」や「道徳教育の研究」等の教育科目の授業は，教科書だけでなく実際の授業場面や体験を活用することが有効である。そのためには，附属学校と大学でテレビ会議システムの活用，あるいは附属の教員の大学での授業等，大学の授業により実践性を持たせることが実践的な指導力をもった教員の育成に大切である。

❺・学校教育のあり方についての総合的な研究
・子どもの心理，発達に関する研究・家庭教育のあり方など
『どうなる，どうする家庭教育（座談会報告）』（ゆう＆ゆう）
『思いやりを育てる』（ゆう＆ゆう）
『教育人名小事典』（安彦忠彦編：分担）
『ワンポイントアドバイス』（中日新聞）

❻ 附属名古屋中学校長

❼・各種審議会等の委員：
愛知県：教育委員会義務教育問題研究協議会（会長），教育委員会公立高等学校入学者選抜方法協議会（部会長），教育委員会初任者研修実施協議会（副会長），教育委員会道徳教育推進会議（議長），社会教育委員連絡協議会（副会長），愛知の教育を考え

る懇談会（副部会長），名古屋市：社会教育委員，青少年問題研究協議会，豊田市二学期制推進委員会，旭丘高校評議員

・公開講座，講演，現職教育等：

教育新生タウンミーティング（コーディネーター），愛知県初任者研修開講式講演，愛知県教育委員会道徳教育シンポジウム（コーディネーター），名古屋市社会教育関係新任研修会講演，東海北陸社会教育研究大会（助言者），愛知教育大学公開講座，セトティーチーズアカデミー（アドバイザー），尾中地域フォーラム講演（一宮市），附属高校アカデミッククエスト，農水省・食育セミナー（コーディネーター），豊川市学校保健大会講演，なごやかトーク（シンポジスト），四日市高齢者大学，メンタルヘルス協会，教育研究愛知県集会（助言者），教育研究岡崎集会（助言者），安城市中央公民館，みよし悠学カレッジ講座（三好町），岐阜西ロータリー合同例会，豊田市二期制シンポジウム，安城東高校模擬授業，知立市いじめ未然防止対策協議会，三河幼稚園理事会

・家庭教育セミナー：

名古屋市立（大幸幼稚園，明正，山田，天白，伊能，稲生小学校），豊川市立御油，日進西，知多市つつじが丘，春日井市立味美小学校

寺西　和子　Teranishi, Kazuko　　教授　　学校教育講座　　文学修士

❶ カリキュラム論，教育評価研究，総合的学習，授業研究

❸ 日本カリキュラム学会，日本教育方法学会，日本教育学会，中部教育学会

❹ 評価・指導演習（３，４年），教育の方法と技術（３年），道徳教育の研究（２年），現代教育論（１年），教育方法学特論（大学院），教育方法学演習（大学院），総合的学習特論（大学院）

❺・現在の研究：

総合的学習，教育評価（ポートフォリオ評価），授業研究

・業績リスト：

① 編著「保護者の理解と支持を得る創意と工夫」長尾彰夫編『総合的学習の充実』ぎょうせい

・啓蒙書：

① 「お金と仕事」についての責任感と価値観を育む道徳の授業づくり『教職研修』増刊８月号　教育開発研究所

② 「書評　西岡加名恵　教科と総合に活かすポートフォリオ評価法」日本教育方法学会紀要『教育方法学研究』第29巻

③ 中学校・高等学校の総合的学習の充実『中等教育資料』文部科学省　８月号

④ 小学校「総合的な学習」の評価をどう工夫するか『教職研修』教育開発研究所　６月号

・口頭発表：

日本教育方法学会　第40回大会　課題研究Ⅴ「学力評価の実態と改善策―子どもの成長・発達に役立つ評価とはなにか―」指定討論者

・文部科学省科学研究費：

基盤研究(C)２　代表者　寺西和子「ポートフォリオ評価の実証的研究その２　教科学習での活用とでデジタル化の試み」

❻・共通科目委員会　副委員長

❼・学内：
公開講座「総合的学習の現状と課題」
平成16年度サウジアラビア教育開発研究　講師（JICA）
・学外：
日本カリキュラム学会第15大会　大会実行委員長
文部科学省　教育課程審議会　専門部会委員（９月～）
日本教育大学協会専門職大学院プロジェクト委員（４月～９月）
松下視聴覚教育研究財団　研究助成審査委員
社会科教育研究センター　夏季講習講師（東京）
愛知県内の小・中学校の校内研修

原口　芳明　Haraguchi, Yoshiaki　教授　学校教育講座　教育学修士

❶ 臨床心理学，障害児心理学
❸ 日本心理臨床学会，日本人間性心理学会，日本心理劇学会，日本ブリーフサイコセラピー学会，東海心理学会
❹ 生涯教育概論Ⅰ（１年），こころとからだの展開２（こころの臨床），心理療法論Ⅰ，生涯発達心理学（２年），臨床心理学演習，共生社会と心理教育，心理療法論Ⅱ，臨床心理学研究Ⅰ，臨床心理学研究Ⅱ，生活の指導と相談（３年），臨床心理学研究Ⅲ，臨床心理Ⅰ学研究Ⅳ（４年），教育心理臨床学特論Ⅱ，教育心理臨床学演習（大学院）
・授業の中にできるだけ体験学習を取り入れるようにしている。心理教育的なエクササイズ，各種の表現的アプローチなど。また，受講生同士で感じたことを語り合うシェアリングも大切にしている。学生の語りから学ぶことは多い。
❺ ⑴ 心理臨床におけるからだ体験：
心理臨床のなかでのからだ体験の意味，からだからのアプローチの検討
「フェルトセンスとの関わり方―間をおく，一緒にいる，からだで表現する，からだ全体で味わう―」，愛教大学研究報告，54，2005年
⑵ 障害児臨床：
障害の重い子どもへの発達援助，親援助に関する実践研究
「静的弛緩誘導法を基礎とした障害児援助―東海心理学会発原稿集（1994年～2003年」，愛知静的弛緩誘導法連絡協議会編，2005年
⑶ 教育心理臨床：
教育相談，スクールカウンセリング活動に関わる実践と研究
❼ 名古屋いのちの電話研修講師，刈谷市富士松中学校スクールカウンセラー，三好町悠学カレッジ講師，愛知県静的弛緩誘導法研究会代表，社会福祉法人清流会白竹の里評議員

神谷　孝男　Kamiya, Takao　教授　学校教育講座　教育学修士

❶ 職業指導，学校進路指導，キャリア教育
❸ 日本キャリア教育学会，日本進路指導協会会員
❹ 進路指導原論（２年），進路指導の評価（４年），教師論（１年），道徳教育の研究（２

年），生活の指導と相談（３年），学校進路指導特論Ⅰ（大学院），学校進路指導演習Ⅰ（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：小中連携によるキャリア教育の推進
業績リスト：
キャリア教育とその評価『指導と評価』2005年１月号

❻ 附属岡崎小学校校長

❼ 愛知県教育委員会・中高一貫教育研究会議委員（会長）
愛知県総合教育センター・小中学校社会体験型教員研修連絡会議委員
瀬戸市立本山中学校区・小中連携教育推進事業の助言などに当たる

折出　健二　Oride, Kenji　教授　学校教育講座　教育学修士

❶ 生活指導論，学校社会臨床

❸ 日本教育方法学会理事，日本生活指導学会理事，あいち県民教育研究所所長，全国生活指導研究協議会常任委員会代表

❹ 現代教育論（１年），教育の社会的研究（２年），生活の指導と相談（３年），生活指導論演習（３年），学校社会臨床特論（大学院），地域生活指導特演（大学院）

・１年生の授業で，学習テーマ別グループ発表方式を継続しているが，とても鋭く教育問題を捉えたり，自発的に母校等に調査に行ってまとめるなど，「学びのエネルギー」には大変触発されている。

・FD活動の参考にするため，京都大学高等教育研究開発推進センター主催の大学教育改革セミナー（05年３月22日）に，前年度に続いて参加した。
今回は「教育評価とは」がテーマであったが，数値化しがたい，教育の質的なものを学生たちと共にどう創っていくかが重要であることを学んだ。
「カリキュラム」とは学生にとっての学びのプランであることが理解できた。

❺ 科学研究費補助金（国際学術研究）「臨床教育学と教師教育改革」（代表・都留文科大学教授田中孝彦）研究分担者として，2004年11月22日～12月２日までカナダ・ヨーク大学を中心とする調査研究の現地責任者として参加。

❻ 教育研究評議会評議員（財務委員会委員を兼任）
学長選考会議委員
05年度も，前年度に引き続いて，大学事業場の職員過半数代表者（労基法上の法定代表者）を務めている。

❼ 愛知教育大学教育実践総合センター付置「いじめ相談活動　SOBA」の助言者
標記の全国生活指導研究協議会役員として，子どもたちの「つながり」と学級・学校の再生の手引き書となる出版の刊行責任者として活動した（2005年８月刊行予定）。

坂柳　恒夫　Sakayanagi, Tsuneo　教授　学校教育講座　教育学修士

❶ 進路指導
専門分野：キャリアガイダンス・カウンセリング，関連分野：カウンセリング

❸ 日本キャリア教育学会（紀要編集委員），日本教育カウンセラー協会（評議員），日本カウンセリング学会，日本交流分析学会，日本応用心理学会，日本産業カウンセリング学会，日本教育心理学会，日本教育社会学会，日本青年心理学会，日本高等教育学会，愛知教育カウンセリング研究会（会長）

❹ 教師論（１年），専門教育入門（１年），キャリア発達基礎研究（２年），道徳教育の研究（２年），職業と人生（２年），職業選択と適性（３年），キャリア・カウンセリング演習（３年），生活の指導と相談Ａ（３年），進路指導の組織運営（４年），キャリア・ガイダンス特論（大学院），キャリア発達教育演習Ⅰ（大学院）

授業にあたっては，一方的な講義形式にならないように，受講生とのコミュニケーションを重視した。また，キャリアガイダンス・カウンセリングに関する検査，教育ゲームなども取り入れながら，できる限り主体的・体験的な学習となるように配慮した。この授業に対する受講生の感想をみると，教育ゲームや心理テストを活用したグループワークは興味を持って参加できたなど，概して好評であった。今後も講義形式だけでなく，主体的・体験的な学習の機会を導入していきたい。

❺ 現在の研究テーマ：

⑴ 青年期・成人期におけるキャリア発達に関する研究

⑵ キャリア成熟尺度の開発とキャリア・カウンセリングへの適用に関する研究

主な研究テーマは，キャリアガイダンス・カウンセリングの基礎をなす「キャリア発達」に関する理論的検討と，「キャリア成熟」を測定評価するための尺度の開発及びキャリア成熟に関する実証的研究である。

業績リスト（平成16年度分）：

⑴ 『教育カウンセラー標準テキスト・中級編』（共著）
「キャリア発達（演習）」図書文化社　2004年５月

⑵ 『社会を生き抜く力を育てる“お金と仕事”の学習』（共著）
「キャリア教育における“お金と仕事”」教育開発研究所　2004年８月

❻ 大学改革推進委員会委員，附属学校運営委員会委員

❼・文部科学省研究開発学校（名古屋大学附属中・高等学校）運営指導委員会委員
・愛知県勤労会館運営推進委員会（会長）
・福井県教育研究所「進路指導講座」講師

子安　潤　Koyasu, Jun　教授　学校教育講座　教育学修士

❶ 教育学，教育方法学

❸ 日本教育学会，日本教育方法学会，日本生活指導学会，日本カリキュラム学会，日本教師教育学会，中部教育学会

❹ 中国地区生活指導研究会講師，小牧市立篠岡中学校等の講師

❺ 日本カリキュラム学会シンポジスト，日本生活指導学会課題研究コーディネータ

❻ 時間枠作成委員

竹内　謙彰　Takeuchi, Yoshiaki　助教授　学校教育講座　博士（教育学）

❶・発達心理学，教育心理学

❸・日本心理学会，日本教育心理学会，日本発達心理学会，心理科学研究会，日本神経心理学会，日本国際地図学会

❹・該当なし（注記：2004年３月より12月までの期間，文部科学省の在外研究にて本学を離

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

れていたため，2004年度は直接担当した授業科目は無かった。）

❺・研究領域：認知の発達と個人差

・業績リスト：

［知能検査．児童心理学の進歩．第43巻．2004年］

［Can preschool children undestand aerial photographs? 第18回国際行動発達学会ポスター発表（Poster presentation at 18th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development）．2004年］

・学術交流：

文部科学省在外研究員として英国ミドルセックス大学（ロンドン）に留学

❻ 2005年１月より国際交流委員会委員

下村　美刈　Shimomura, Mikari　　助教授　学校教育講座　　文学修士

❶ 臨床心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本トラウマティック・ストレス学会，国際ロールシャッハ学会，日本描画テスト・描画療法学会（評議員），愛知県臨床心理士会（理事）

❹ 家族心理学（１年），共生社会生活教育論（１年），パーソナリティ論（２年），臨床心理学研究Ⅰ・Ⅱ（３年），臨床心理検査法演習（３年），児童発達支援実習（３年），臨床心理学研究Ⅲ・Ⅳ（４年），臨床心理査定演習Ⅰ（大学院），投影法特論Ⅰ（大学院），臨床心理実習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

学部では，臨床心理学及び，その関連分野における基礎的な知識を１，２年で習得し，３，４年次に子どもの臨床現場での実習体験授業により，援助職の実際を学び知識と実践との統合を図ることを目標にしている。おおむね授業目標に学生は到達できるが，各学生が自習体験を深めるために教員が提供している時間や労力は正規の授業時間に収まらないことが問題である。

❺ 児童及び思春期・青年期の適応障害におけるトラウマのアセスメント及び心理治療に関する研究

心理療法の実践　北樹出版

家族再生のための地域型家族支援マニュアル　愛知県件幸福支部児童家庭課

❻ 学生相談室運営委員及び相談員，子育て支援企画ワーキングメンバー

❼ 愛知県児童相談所児童家庭専門員，愛知県被虐待児家庭復帰援助事業調査研究委員会委員，名古屋市危機児童家庭サポート会議委員

大村　　恵　Omura, Megumi　　助教授　学校教育講座　　教育学修士

❶ 社会教育学，青年期教育学

❸ 日本教育学会，日本社会教育学会，日本教育法学会，中部教育学会，社会教育職員養成問題研究会

❹ 青年期教育学特論（大学院），青年期教育学演習Ⅰ/Ⅱ（大学院），教科外活動の研究（３年），社会的教育学講義（３・４年），教育学特別研究Ⅰ（２年），教育学特別研究Ⅱ（３年），社会教育演習Ⅰ（３・４年），生涯教育論演習（３・４年），生涯教育概論Ⅱ（１年），社会教育の基礎Ⅱ（３・４年）

外国人大学院学生（何聖雄）指導担当

「現代日本の社会と文化」展開・セミナーについて『教養と教育』に執筆。（近刊予定）

学生の参加型の教育形態，特に学外での体験活動・調査活動を組込んだ授業形態を目指している。

また，共通科目では，生活史学習の試みを行っているが，それについては上記の研究レポートに執筆している。

❺・研究計画としては，以下の２本の軸を中心に進めている。

⑴　青年教育研究：

働く青年の学習活動とその援助である青年教育についての今日的実践的研究。

⑵　高等学校定時制課程・通信制課程研究：

高等学校定時制課程・通信制課程の歴史的研究。

・2004年度の主な研究は次のとおりである。

岐阜県教育史　現代１　執筆

「教養教育における生活史学習の試み　その２～『現代日本の社会と文化』展開・セミナーの授業から～」『教養と教育　第５号』

❻　学校教育講座教育学教室教務担当，学校教育講座教育社会学補充人事教員選考委員主査

❼・社会教育活動：

日本青年団体協議会全国青年問題研究会助言者（1994-99，2001-04年度）

全国教育研究集会共同研究者（1992-2005年度）

愛知県教育研究集会助言者（1996-2001，2003-5年度）

名古屋市青年大学講座助言者（1985，1987-2004年度）

桑名市社会教育委員（委員長）（2003-5年度）など

・研究活動：

社会教育研究全国集会第２分科会（若者の学びと文化）世話人

・その他の社会的活動：

愛知県男女共同参画審議会（2002-5年度）

愛知県ユースワーカー地域活動推進委員会アドバイザー（2005年度）

（愛知県ユースワーカー事業について，2001年度より学識経験者として継続的に関わっている。）

豊田市児童育成計画策定懇話会委員（2003-4年度）

名古屋市瑞穂区社会福祉協議会地域福祉活動計画推進委員（2004-5年度）

愛知子どもNPOセンター理事（2003-5年度）

独立行政法人福祉医療機構子育て支援基金助成事業子育てネットワークによる小・中学生交流事業運営委員（2005年度）など

齋藤　眞　Saito, Makoto　助教授　学校教育講座　教育学修士

❶　臨床心理学，心理療法論，分析心理学

❸　日本心理臨床学会，日本箱庭療法学会，チューリッヒ・ユング研究所，日本ユング心理学研究所，ヘルメス心理療法研究会，愛知教育大学心理臨床の集い（事務局）

❹　教育の心理学（１年），生活の指導と相談Ｂ（３年），臨床心理学（３・４年），臨床心理学演習（４年），学校カウンセリング講義（４年），教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ（大学院），教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ（大学院），教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ（大学院），臨床心理面接

Ⅱ（大学院），臨床心理面接Ⅱ（大学院），箱庭療法特論（大学院），イメージ表現の心理学（留学生）

大学院の「教育臨床基礎実習Ⅰ・Ⅱ」は，教育実践総合センター心理教育相談室を実習施設として使わせていただいている。この相談室は，下記❼の「社会的活動」にもあたり，学外から相談に来られる人（来談者）に専門的な援助をしている。学校教育臨床専攻の大学院生は，この施設の院生スタッフとして登録され，指導教員である臨床心理士から随時助言を受けながら，実際の相談を担当することによって，臨床心理学の実践的な訓練と教育を受けている。また，院生は，厳密な守秘義務のもとで自分が担当している相談事例を上記教員の前で発表し，相談を進めていく上での留意点や見立てなどを学んでいく。複数の教員から様々な視点からの助言を受けることで，相談に携わっている自分と来談者との間で生起していることを客観的に理解できるよう，授業が工夫されている。さらに，発表や発言する院生が，長所も短所も含めた自分の「個性」に気づき，それを生かしていけるよう，支持的な雰囲気も堅持されている。

このために，一つの実習事例を丁寧に検討していく授業に費やされる時間とエネルギーはたいへん大きい。それに加えて，院生と共に実際に事例を担当する負担，複数の教員が同時に授業を担当する負担や個別に事例に則して助言する負担など，「実習」担当の教員の負担は計り知れない。しかし，臨床心理士資格受験が可能な本専攻における専門的な訓練としては，たとえ非効率ではあっても，このような授業形態が必要不可欠である。

なお，来談者に対する専門的な援助という意味での責任は，心理教育相談室長と上記指導教員とが負っている。このような専門的な援助に関わる責任や守秘義務という意味で，この「実習」の受講登録は専攻生のみに限定されている。

❺ 分析心理学，箱庭療法

「統合失調症の青年との心理療法過程」山中康裕・河合俊雄編『心理療法と医学の接点』（創元社，2005）所収

❻ 国際交流委員会，留学生通信編集委員会，特別専攻科運営委員会，学校教育講座心理学履修モデル図書担当

❼ 名古屋市教育センター嘱託臨床心理士，名古屋市子ども適応相談センタースーパーヴァイザー，三重県総合教育センター教育相談専門研修講座講師，名古屋市大高北小学校学校評議員，師勝町SSN事業適応指導教室運営研修会講師

❽ チューリッヒ・ユング研究所の資格候補生昇格試験に合格（2004年夏学期），日本ユング心理学研究所の資格候補生への編入試験に合格（2004/５冬学期）

藤井　啓之　Fujii, Hiroyuki　　助教授　学校教育講座　　教育学修士

❶ 教育方法学

❸ 日本教育方法学会，日本生活指導学会（2004年度選挙管理委員），中部教育学会

❹ 平和と人権　入門（１年），教師論（２年），平和と人権　セミナー（３年），教育の方法と技術（３年），教育実践論演習（３年）道徳教育方法特論（大学院），道徳教育方法論演習（大学院）

○「教育の方法と技術」では，学生がグループで担当して，学生対象に模擬授業を実施するという形式を基本とした。

毎回，具体的な授業の実践記録１つを教材とし，それを受講生が事前に読んでこなければ授業に参加できないよう工夫することによって，学生の予習を義務づけ，授業時間

の有効な活用が出来た。

また，学生に模擬授業をさせて，授業で獲得すべき内容を伝えさせたが，学生の模擬授業が失敗すると，教育目標が達成できないため，授業計画の立て方の指導を行い，授業計画を教員と共に事前検討し，問題があればそれを修正させて，確実に授業が成功するように導いた。

この他，毎回メーリングリストで，授業への感想を提出させ，教員自身も毎回，授業でのポイントと模擬授業へのコメントを投稿した。これらを読んでレスポンスすることも評価に加えることによって，受講生が授業の復習をすることができるようにした。

ただし，丁寧な指導のため，一回一回の授業の事前打ち合わせなどにかなりの時間を割いた。特に，オフィスアワーと学生の空き時間が全く一致しないので，打ち合わせ時間の調整に困難を極めた。

○「平和と人権」（セミナー）では，学生の発表が中心となるが，どのように発表すれば良いのかを示すために，第一回目に，教員自身が春期休業中に調査・作成した「平和と人権」についてのプレゼンテーションを見せた。

○「教師論」では，教員養成課程の学生ではなく，教員志望でない学生がかなりの数であったことを十分考慮に入れないで授業をしたため，学生とすれ違ったところがあった。

また，メーリングリストへの授業感想の投稿を評価に加えたが，他者の前に自分の意見を開陳できない学生がいたため，結果的に単位を落とすことになった。今後，このような学生への対応策を考える必要がある。

○大学院の授業では，中国人留学生が過半数を占めたため，教材の選定等が難しかった。また，理論と実践を結びつけるのに十分な成果をあげることができなかった。

❺・現在の研究テーマ：

メディアが人格形成に果たす役割に関する研究／メディア・リテリシーの研究

学びと自治を結合したカリキュラムの検討

・業績リスト：

「メディアと文化の政治」子安潤ほか編『学校と教室のポリティクス』フォーラムＡ，2004年４月。

❻ 21世紀教育創造センター研究員（2004年11月～）

❼ 知立保育行政審議会委員（～2004年２月24日）

山口　　匡　Yamaguchi, Tadasu　　助教授　学校教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：教育哲学，関連分野：教育思想史

❸ 教育哲学会，日本教育学会，日本カント協会，中部教育学会，東北教育哲学教育史学会

❹ 教師論（１，２年），教育入門（１年），道徳教育の研究（２年），教育の哲学（３年），教育哲学歴史学講義（３年），教育哲学演習（３年），教育学特別研究ⅠⅡ（２，３年），平和と人権セミナー（３年），教育思想特論（大学院），教育思想論演習Ⅱ（大学院）

教育科目では，教師論，教育原論，教育入門，道徳教育の研究を担当することが多い。いずれも大学入学後の早い時期に開設される科目であるため，わかりやすいテキストの指定と補助プリントの配布によって，できるだけ今日的問題との連関を意識した授業を心がけている。

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動

❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

学部の専攻科目や大学院の授業では教育哲学・教育思想関連の科目を担当し，邦訳文献の講読・演習を中心に，教育学における基礎的概念の分析を一貫したテーマとしている。授業に臨むにあたっては，テキストを原典と読み合わせることによってできるだけ不明な箇所を残さないこと，最低限おさえるべき要点を簡潔に提示することを心がけている。しかし，授業の内容をどのように現実的な教育問題の分析へと適用させるのかという点で困難さを表明する受講者も少なくない。また，大学院では現職教員の受講も多く，学校現場における問題状況への目配りがさらに要求されると感じている。

❺・現在の研究テーマ：

⑴ カントの判断力理論に関する教育学的研究

⑵ 教育学の基礎概念に関する概念史的研究

⑶ 教職についての存在論的分析

・業績リスト（論文）：

「Wie kultiviere ich die Freiheit bei dem Zwange?―カント『教育学』における内在的解釈の視点―」愛知教育大学研究報告（教育科学編）第54輯　2005年

❻ 広報誌編集会議

大学・附属学校共同研究会（授業実践力の向上プロジェクト代表）

大学院教育学研究科小学校教員免許取得コース受講選考部会

愛知教育大学における附属高等学校からの高大連携選抜等に関する検討プロジェクト

❼ 愛知県教育職員免許法認定講習講師

菊島　勝也　Kikushima, Katsuya　　助教授　学校教育講座　　博士（心理学）

❶ 心理学，専門分野：臨床心理学，関連分野：健康心理学

❸ 日本心理学会，日本心理臨床学会，日本健康心理学会，日本性格心理学会，日本臨床心理士会，愛知県臨床心理士会

❹ 共生社会生活教育論（１年）分担，カウンセリング演習（２年），臨床心理学（２年），コミュニティ援助論（３年），コミュニティ心理学演習（３年），臨床心理学研究１・２（３年），児童発達支援実習（３年）分担，臨床心理学研究３・４（４年），生活の指導と相談B（４年），卒論指導（４名），児童臨床心理学特論（大学院），児童臨床心理学演習１（大学院）

臨床心理学を中心に，心理学関連の授業を担当している。３年生時の研究（３名）及び４年生の卒業研究の指導（４名）を行った。児童発達支援実習では，学外の児童福祉施設において，３年生による臨床心理学的な実習指導を２名の教員で行った。また本学の学生相談員を担当した。

今後の抱負としては，受講生とのコミュニケーションを活発に行いつつ，受講生自身が，自分で考えながら研究や学習をすすめていけるように促していきたい。

❺ ⑴ 青年期における不適応行動にストレス等が与える影響について

⑵ 児童・青年期における心理的健康と生活環境との関係について

現在の研究テーマは，まず一つ目として，青年期における不適応行動に対して，ストレス等が与える影響を明らかにしたいと考えている。特に，青年期における食行動の面から不適応問題を取り上げている。二つ目としては，児童・青年期の心理的健康の維持に有効な実際の生活環境がどのようなものか探求していきたいと考えている。

児童青年期用ストレッサー尺度，大島正光（監）児玉昌久（編）ストレススケールガイドブック，実務教育出版，77-81，2004年。

❻　共生社会コース代表
❼　名古屋市立中学校スクールカウンセラー，日本心理臨床学会第23回大会調査・研究発表座長，愛知教育大学公開講座教育臨床セミナー講師，西三北地区高等学校教育相談研修会講師。

石田　靖彦　Ishida, Yasuhiko　　助教授　学校教育講座　　修士（教育心理学）

❶　心理学，専門分野：社会心理学，関連分野：教育心理学
❸　日本心理学会，日本教育心理学会，日本社会心理学会，日本カウンセリング学会，日本グループ･ダイナミックス学会，日本パーソナリティ心理学会，東海心理学会
❹・情報教育入門Ⅱ（１年），教師論（１年），発達と学習の心理学（１年），総合演習Ⅱ（４年），集団過程演習（４年），集団過程評価特論（大学院），集団過程評価演習Ⅰ（大学院）

社会的コンピテンスを育てる教育実践として，2000年度から名古屋大学教育学部附属中学校において「ソーシャル・ライフ」という授業を立案・実施している。

❺　研究テーマ：学級内の仲間集団の形成過程とその機能に関する研究

論文：

・中・高生の友人関係における自己評価維持機制と相互独立・相互依存的自己理解との関連　愛知教育大学教育実践総合センター紀要，８，245-252.　2005年２月
・児童・生徒の友人関係が学業達成に及ぼす影響（共著）愛知教育大学研究報告（教育科学編），54，109-115.　2005年３月

著書：

・ゲームで学ぶ協力行動　吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志（編）学校教育で育む「豊な人間関係と社会性」―心理学を活用した新しい授業例Part２―明治図書　Pp.141-166

科学研究費補助金：

・「集団の構造化過程における人間関係メンタル・マップに関する研究」400,000円（若手(B)　代表：石田靖彦）／平成16年度科学研究費補助金
・「不本意な社会的アイデンティティと差別的態度の関係に関する研究―日米を比較して―」1,100,000円（基盤(C)　代表：池上知子）／平成16年度科学研究費補助金
・「質問紙法による心理学的個人差測定尺度の構成の理論的・経験的基礎に関する研究」（基盤(C)　代表：村上　隆）／平成16年度科学研究費補助金

❻・就職委員会委員（2003年10月～2004年９月）
❼・愛知教育大学附属高等学校「アカデミック・クエスト（実験心理学）」講師（2004.７）
・名古屋大学教育学部附属中学校「ソーシャル・ライフ」授業案作成・指導（2000.４～）
・名古屋大学教育学部中等教育センター研究員（2005.４～）

三上　敦史　Mikami, Atsushi　　助手　　学校教育講座　　博士（教育学）

❶　教育学，専門分野：日本教育史
❸　教育史学会，日本教育学会，全国地方教育史学会，中等教育史研究会

❹ 専門教育入門（１年），教師論（１・２年），教育哲学歴史学講義（２年），平和と人権（２年），日本教育史演習（３・４年），「もう一つの学校」論（３・４年）

教育原理に属する科目が主だが，単に理論の解説にとどまらず，高等学校教諭としての現場経験に裏打ちされた授業となるよう努めている。

❺・研究テーマ：近代日本の「無学歴学校」

夜間中学，鉄道教習所，通信講習所など，中等段階の教育を行いながら，正規の中等学歴とならかった教育機関のありよう，そこに集った生徒たちの意識などを通じて，近代日本における中等教育の歴史的意義を明らかにする。

・業績：

著書：

『職業と選抜の歴史社会学』（共著）世織書房，2004年

『近代日本の夜間中学』北海道大学図書刊行会，2005年

学会発表：

「鉄道省勤務の若年労働者の学びと教育情報―『鉄道青年』の分析を手がかりに―」日本教育学会第63回大会（於北海学園大学），2004年

・科学研究費補助金など研究助成の受領状況：

① 平成16年度科学研究費補助金（若手研究(B)）「近代日本における「無学歴学校」の歴史的研究」（代表者）

② 平成16年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）「近代日本における教育情報の歴史的研究」（研究分担者）

❻・教育実地研究委員会委員

藤井　恭子　Fujii, Kyoko　　助手　　学校教育講座　　博士（心理学）

❶ 生涯発達心理学（青年心理学）

❸ 日本教育心理学会，日本発達心理学会，日本青年心理学会，日本社会心理学会

❹ 発達心理学講義（２年），心理学基礎実験（２年），道徳教育の研究（２年），こころとからだセミナー（３年）

教職科目の「道徳教育の研究」や共通科目の「こころとからだセミナー」は，多用な専攻の学生を含む大人数の混成クラスで行われる。そのため，学生の志向性や基礎的知識レベルが不揃いであり，授業への積極的な参加がなかなか望めない場合もあり，問題点であると認識している。

授業の工夫としては，毎回の授業ごとに学生からの質問・感想シートを集め，次回の授業冒頭で回答・紹介している。今年度もそれを継続し，学生との相互の意見交換の一助にできるように心がけている。また，講義の中では視聴覚教材を活用したり，学生同士の討論学習にも力を注いでいる。

❺ 現在の研究テーマ：

（個人）青年期の対人関係における山アラシ・ジレンマ

（共同）医療系大学生の職業的アイデンティティの形成

（共同）教員養成系大学生の職業的アイデンティティの形成

業績リスト：

口頭発表：

１）藤井恭子　青年期の対人関係によるヤマアラシ・ジレンマの比較　日本教育心理学会第46回大会発表論文集，385。

２）落合幸子・本多陽子・藤井恭子・落合良行　医療系大学生における職業的アイデンティティの形成と教育⑴　日本教育心理学会第46回大会発表論文集，642。
３）落合良行・藤井恭子・本多陽子・落合幸子　医療系大学生における職業的アイデンティティの形成と教育⑵　日本教育心理学会第46回大会発表論文集，643。

❼　愛知教育大学付属高等学校　アカデミック・クエスト　講師

瀬田　祐輔　Seta, Yusuke　　助手　　学校教育講座　　修士（図書館情報学）

❶　教育学，専門分野：学校図書館学

❸　日本学校図書館学会，日本図書館情報学会，図書館資料組織化研究会，コンピュータ利用教育協議会，情報科学技術協会

❹　「学校図書館メディアの構成」（３年），「読書と豊かな人間性」（４年），「情報メディアの活用」（４年），「情報メディアの活用」（３年），「教育実践学講義」分担（２年）
「学校図書館司書教諭資格取得のための科目」履修ガイダンス講師

❺・研究テーマ：メディア・センター論，件名目録論，図書館利用教育
・執筆物：
瀬田祐輔．コピー・カタロギングと「学習件名」．資料組織化研究．No.50，p.35-37（2005）
・研究助成の受領：
「教員養成大学における図書館利用教育の検討」（代表：斉藤秀平）2004年度学長裁量経費

❻・委員会活動：
附属図書館委員会　副委員長（2004.９まで），機種選定委員会　委員（2005.３まで），情報システム委員会システム運営専門委員会　委員（2004.９まで）
・系内運営活動：
初等教育教員養成課程教育科学系／中等教育教員養成課程教育科学専攻　専攻代表
・その他：
学校図書館司書教諭資格取得（学内）にかかわる教務事務全般担当，学校図書館司書教諭講習（文部科学省委託）にかかわる教務事務担当

❼・愛知県教育委員会平成16年度地域教育力・体験活動推進協議会専門部会　部会長
・平成16年度学校図書館司書教諭講習（文部科学省委託）開設科目「情報メディアの活用」講師（2004.８）
※清水秀美本学教授名義で開設し，瀬田が実質全てを担当した。
・海部郡十四山村立十四山東部小学校平成16年度校内研修「豊かな心をはぐくむ読書活動」講師（2004.７）
・安城市教育委員会平成16年度司書教諭研修会「司書教諭としての役割と学校図書館運営：活動への取り組み」講師（2004.８）

教育臨床学

岸　良範　Kishi, Yoshinori　教授　学校教育臨床学講座　文学修士

❶ 臨床心理学，心理療法

❸ 日本心理臨床学会，日本箱庭療法学会（理事），日本精神分析学会，日本児童青年精神医学会 日本学生相談学会

❹ 臨床心理学研究法（大学院），臨床心理学特論Ⅰ（大学院），教育臨床実習（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

❺・現在の研究テーマ：心理療法におけるパラダイムについての研究

・論文：

ファンタジーグループにおける体験の内容とリピーターに現れる変化の縦断的研究（共著），箱庭療法学研究，16巻１号，2004

❻・教育臨床学講座代表，教育研究評議会評議員，教務企画委員会委員

❼・学会における活動：

日本箱庭療法学会全国研修会講師，日本箱庭療法学会中部地区研修会講師，日本学校教育相談学会中部地区研修会講師　等

・教育組織における活動：

最高裁調査官研修所講師，新潟県教育庁夏期セミナー講師，神奈川県教育庁各支部における講演会講師　等

・公開講座，講演会等：

教育実践総合センター主催教育臨床セミナー講師，愛知県教育センター教員研修会講師　等

・学校現場などにおける指導助言（校内事例研究会講師等）：

三好町，師勝町，西春町，稲沢市等各小中学校，神奈川県平塚市こどもきょういく

中川美保子　Nakagawa, Mihoko　助教授　教育臨床学講座　教育学修士

❶ 臨床心理学

❷ 第十五回暁烏敏賞（青少年育成部門）受賞（1999.11）
受賞論文「現代子ども事情―新たな援助の視点を探る」

❸ 日本心理臨床学会，日本教育心理学会，日本カウンセリング学会，日本学校教育相談学会（学会誌編集委員），ヘルメス心理療法研究会，コラソン研究会（C. G. Jungに関する研究会）

❹ 臨床心理査定演習Ⅱ（刈谷校昼－M1，刈谷校夜－M1，M2，サテライト－M1，M2）
臨床心理学特論Ⅱ（刈谷校昼夜－M1，M2）
教育臨床実習Ⅰ（M1，M2）
教育臨床実習Ⅱ（M1，M2）

❺・現在の研究テーマ：

スクールカウンセリングの専門性について―関係性の視点から―

スクールカウンセリング活動は，これまでの個人臨床分野の専門性のみで対応できるような簡便なものではなく，学校という場で行われる独自の取り組みであるので，スクールカウンセラーならではの専門性を論じ，構築していかなければならないと考える。私はこれまでの実践や事例研究などから，その専門性へのアプローチの視点として，相

談者である子どもたちや保護者のみならず，管理職や教育相談係，担任などその事例に直接的あるいは間接的に関わっている人たちが織りなす「関係性」に注目してきた。つまりSCの専門性とは，固定的で一般的な確立された構造ではなく，さまざまな「関係性」の配置や動きをたえず意識しながら，行われている行為の意味と影響を読み解き，再構成する機能であると考えている。したがって今後ともこの視点からスクールカウンセラー活動について，実践をとおして成果と問題点を探り，スクールカウンセリングの専門性について自らの考えを発表し，研究としてまとめていく方針である。

・業績リスト：

論文：

過剰な攻撃性を表出する青年への援助について，京都大学大学院教育学研究科紀要，第50号，2004

スクールカウンセリングの現状について―教師アンケートの分析から―，京都大学大学院教育学研究科付属臨床教育実践研究センター紀要，第７号，2004

Words and transitional phenomena in psychotherapy 心理療法における言葉と移行現象，精神療法，第30巻第６号，2004

スクールカウンセリングについての一考察，心理臨床学研究，第22巻第６号，2005

口頭発表：

（共同発表）Invitation to expression therapy，28th International Congress of Psychology(IC2004), Beijing, China, August 8-13，2004

スクールカウンセリングの専門性とは―関係性という視点から―，日本心理臨床学会第23回大会，東京国際大学，2004

❼・各種審議会委員，自治体等の教育組織における活動：

平成16年度仮称京都市立不登校特区中学校入学審議委員

・学内外の公開講座，講演会など：

松任市青少年健全育成委員会主催講演会（６月26日）

京都府山城教育局管内学校不適応問題講演会（11月15日）

宇治市不登校問題対策委員会保護者ふれあい学習会講演（２月４日）

廣澤　愛子　Hirosawa, Aiko　　助手　　教育臨床学講座　　修士（人間科学）

❶ 臨床心理学

❸ 心理臨床学会，箱庭療法学会，子どもの虐待防止研究会

❹ 生活の指導と相談Ｂ（４年），こころとからだ（３年）

❺ 現在の研究テーマ：

「スケープゴート」に関する臨床心理学的研究

スケープゴート現象が人に及ぼす影響とそこからの治癒プロセスについて，臨床心理学的観点から考察する。いじめや被虐待といった「スケープゴート」の被害に遭った人の心理療法を通して得られたことをもとに，より普遍的な視点からまとめていきたい。

業績リスト：

2005年２月

「子どもの外傷体験に‘物語ること’がもたらす治療的効果について」愛知教育大学

教育実践総合センター紀要　第８号　p.p.269-p.p.278
2005年２月
「解離性同一性障害が疑われた女子の事例」第47回臨床心理士研修会　口頭発表

❻ 学生相談室　相談員

❼＊愛知県総合教育センター　教育相談中級講座　講師

❽ 愛知教育大学教育実践総合センター心理教育相談室において，来談者に対する心理療法を行っている。

教育実践総合センター

生島　博之　Ikushima, Hiroyuki　　教授　　教育実践総合センター　教育学修士

❶ 臨床心理学
専門分野：心理療法（カウンセリング，箱庭療法，遊戯療法），ユング心理学
関連分野：学校教育臨床，非行臨床，児童福祉臨床（情緒障害児短期治療施設）

❸ 日本心理臨床学会，日本箱庭療法学会

❹ 生活の指導と相談Ｂ（４年），臨床心理面接（大学院：昼間，昼夜間，サテライト），臨床心理実習（大学院），臨床心理実習（大学院），非行心理学特論（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

当教育実践総合センターの教育臨床分野の教員の主な仕事は，最近の学校教育現場で多発している様々な問題（いじめ・不登校・非行など）についての研究であり，そのために，当センターでは，心理教育相談室を開設し，来談者（児童・生徒及びその保護者）に心理療法を定期的に（毎週１回，各50分）実施してきている。また，当心理教育相談室は，学校教育臨床専攻臨床心理学コースの院生（平成16年度は40名）たちの臨床実習の場にもなっており，教員は院生とペアを組みながら治療活動にあたると同時に個人スーパービィジョンを定期的に行っている。そして，その経験を深めるために『教育臨床学研究』（心理教育相談室紀要）を年１回発刊し，事例研究などの研究論文の作成の指導も実践している。

一方，当心理教育相談室では，現場の教師たちの個別相談も受け入れており，気になる生徒をめぐる学級運営についてのアドバイスも行っている。また，現場の教師たちのために公開講座を通年にわたって開催したり，自主的な研究会（愛知学校教育相談事例研究会，愛知学校カウンセリング研修会，愛知教育大学心理療法研究会など）を夜間に定期的に（月１回）実施し，不定期（年２～３回）の合宿研修も行っている。そして，これらの成果にコメントをつけたものを『教育臨床事例研究』として13号まで発刊ずみであり，現場の教師たちに配布し，「現場の実践報告が載っているので参考になる」と喜ばれている。

なお，平成16年度も，愛知県教育委員会から４名の内地留学生（高校教員）を受け入れ，学校教育臨床専攻等の協力を得て，教育相談などに関する大学院レベルの教育を実施した。

❺ 研究活動としては，最近の教育現場で問題となっているテーマを取り上げ，『学級崩壊』と『キレる子ども』や『ADHDの子ども』，不登校の児童・生徒たちを対象とする『適応指導教室』の効果的な在り方，『学校での子どもの虐待の発見と対応』，『学校における危機対応』，等を分析し，その実践事例にコメントをつけたものを中心として，『教育臨床学研究』12号，13号を発刊した（以下はその一部）。

コメント：

親権者を中心にサポートをすることの大切さ（山本圭子論文：被虐待児とその保護者への関わり）教育臨床事例研究12号　2004年９月　46－48

警察，児童相談所等との連携の重要性（神谷美紀子論文：ネグレクトの母親，暴力をふるう義父の元で育つ姉弟に対する心理的支援）教育臨床事例研究12号　2004年９月　59－61

論文：

母子関係の悪い一少女の箱庭について―食事が終わるのに３時間かかるＳ子ちゃん―教育実践総合センター紀要８号　2005年２月　279－286

「規範意識」の欠落から見えてくる教育活動のありかた　三河教育研究会　2005年２月　ｉ－ｖ

❻ 心理教育相談室教員スタッフ（1998～2004年度），教育実践総合センター委員会委員（1998～2004），セクシャルハラスメント防止対策委員会委員（2002～2004年度），大学・附属学校共同研究会いじめ・不登校・学級崩壊分科会代表（2003～2004年度），合気道部顧問・師範代（1998～2004年度）

❼ 愛知県教育委員会（総合教育センター）教育臨床研修講師（1998～2004年度）
名古屋市教育委員会（教育センター）教育臨床研修講師（1998～2004年度）
安城市・子ども理解のための事例研究会スーパーバイザー（1998～2004年度）
豊川市教育委員会教育臨床研修（リレーションシップ研修）講師（1998～2004年度）
名古屋「いのちの電話」訓練委員（1998～2004年度）
西尾市いじめ・不登校・問題行動対策協議会委員（2003～2004年度）
岡崎市・適応指導教室（ハートピア岡崎）スーパーバイザー（2004年度）
豊田市・相談ネットワーク会議スーパーバイザー（2004年度）ほか

公開講座：

学校教育臨床―事例研究Ａ―（９回27時間，参加者７名：豊川市勤労会館）
学校教育臨床―事例研究Ｂ―（９回27時間，参加者16名：碧南市立中央公民館）
教育臨床セミナー（３日間集中17時間，参加者30名）
箱庭づくり体験（２回９時間，参加者24名）

学校現場などにおける指導助言：

豊明市不登校対策学習会講師，豊明市箱庭療法実習講師，岐阜県特殊地域センター機能充実事業講師，愛知県適応指導教室連絡協議会講演講師，愛知県生涯学習センター講師，名古屋市引山小学校現職教育講師，西尾市相談活動部会事例研究会講師，知多市不登校対策講演会講師，知立市小中学校研修講座講師，師勝町教育委員会SSN（スクーリング・サポート・ネットワーク）事業・教育相談研修会講師，豊田市浄水小学校現職教育講師，豊田市教育委員会適応指導教室事例研究会講師，西三東地区高等学校教育相談部会講師，豊田市「心の相談員・心の教室相談員」研修会講師，ほか

❽ 附属岡崎中学校でのスクールカウンセリング

平成14年度より，附属岡崎中学校からの要請で，スクールカウンセリングを実施してきている。平成16年度の実施は，19回で95時間である。（この内容については，正村理代子：スクールカウンセラーを生かした健康相談活動をめざして　教育実践総合センター紀要８号　287-294を参照のこと）それ故，先述した一般相談，教師の教育相談，院

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

生への個人スーパービィジョンに要した時間数479時間をプラスすると，総時間数は574時間になり，コマ数（1.5時間×15回）に換算すると25.5コマ，学部及び大学院の授業をプラスすると34.5コマ担当したことになる。

平賀　伸夫　Hiraga, Nobuo　　助教授　教育実践総合センター　博士（教育学）

❶ 教科教育学，専門分野：理科教育，環境教育

❷ 日本科学教育学会奨励賞（2001年）

❸ 日本科学教育学会，日本理科教育学会，日本教科教育学会，臨床教科教育学会，日本環境教育学会，日本生活科，総合的学習教育学会，日本化学会

❹ 環境教育概論（１年），理科研究ＢⅠ（２年），保育内容研究・環境Ａ（３年），環境と人間セミナー（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），環境教育方法論Ⅰ（大学院），環境教育方法論Ⅱ（大学院）

担当授業の他，大学Jr.サイエンス事業「おもしろわくわく訪問科学実験教室」を運営している。本年度は，本学学生・院生約130名をメンバーとして，のべ13の学校，地域を訪問し，科学実験教室を実施した。

❺ 論文：

⑴ 理科教育の立場から「学習臨床」を考える，日本科学教育学会『研究会研究報告』，18⑸，2004

報告書等：

⑴ 『SCOPEⅡ（教科教育研究分野ニュースレター）No.８』，愛知教育大学教育実践総合センター教科教育研究分野，2005（編集責任者）

⑵ 『学校教育支援データベース―Ver.４―』，愛知教育大学教育実践総合センター，2005（編集責任者）

科学研究費補助金などの研究助成の受領状況：

⑴ 授業方法の違いが実験結果の解釈のしかたに及ぼす影響，8000千円，平成16年度科学研究費補助金・基盤研究C⑵

⑵ おもしろわくわく訪問科学実験教室，500千円，平成16年度大学等開放推進事業「大学Jr.サイエンス事業」推進経費（戸谷との共同）

❻ 教育研究評議会評議員，教務企画委員会委員，教育実地研究専門委員会委員，教育実践総合センター運営協議会委員

❼ 公開講座：

⑴ 平成16年度愛知教育大学公開講座「小学生を対象としたおもしろ科学実験教室」（2004年７月）

⑵ 平成16年度愛知教育大学公開講座「中学生を対象としたおもしろ科学実験教室」（2004年12月）

委員会：

⑴ 平成16年度尾張地区学校教育活動へのボランティア導入推進連絡協議会委員（2004年９月～2005年３月）

講師等：

⑴ 文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県津具村立津具小学校）学習指導カウンセラー（2004年５月）

⑵ 文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県津具村立津具小学校）学習指導カウンセラー（2004年６月）

⑶　文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県稲沢市立下津小学校）学習指導カウンセラー（2004年６月）
⑷　文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県津具村立津具小学校）学習指導カウンセラー（2004年７月）
⑸　文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県稲沢市立下津小学校）講演者（2004年８月）
⑹　愛知県蒲郡市教育研究推進全体会　平成16年度理科部会　助言者（2004年９月）
⑺　文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県津具村立津具小学校）学習指導カウンセラー（2004年９月）
⑻　愛知県へき地・複式教育研究協議会　助言者及び講演者（2004年10月）
⑼　文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県稲沢市立下津小学校）学習指導カウンセラー（2004年10月）
⑽　第３回ソニー子ども科学教育プログラム入選プロジェクト校授業研究協議会　兼刈谷南中学校公開授業研究協議会　講師（2004年10月）
⑾　父母と教師の教育を語る会＜第54次教育研究愛知県集会＞理科教育（物理・化学）助言者（2004年10月）
⑿　文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県稲沢市立下津小学校公開授業）講演者（2004年10月）
⒀　愛知教育大学附属幼稚園　平成16年度研究協議会　共同研究者（2004年11月）
⒁　文部科学省研究委嘱「学習指導カウンセラー派遣事業」（愛知県稲沢市立下津小学校）学習指導カウンセラー（2005年１月）
⒂　愛知県田原渥美教職員会　平成16年度第５回理科部会　講師（2005年２月）

川北　　稔　Kawakita, Minoru　　講師　　教育実践総合センター　社会学修士

❶ 教育社会学（発達支援），社会問題・社会運動の社会学
❸ 日本社会学会，日本教育社会学会，日本社会病理学会，日本犯罪社会学会，関東社会学会，社会学研究会（『ソシオロジ』同人会）
❺ 現在の研究テーマ：

不登校・引きこもりなどの教育問題に，社会学の立場からアプローチする調査研究を行っている。研究内容は，以下のように分かれる。⑴マクロな視点からみた社会問題の定義や専門家言説に関する研究，⑵NPOや自助グループによる当事者のサポートに関する社会運動論的研究，⑶個人や家族の問題経験や回復過程の研究。若者の引きこもりについて，これまで上記⑴⑵に関する研究を行ってきたが，2004年度は，⑶の視点から個人や家族の回復過程に関する研究成果を発表した。

また，不登校・引きこもりに関する地域でのフィールドワークを，当事者のサポートに資する形で還元する活動を行っている。2004年度は，愛知県内の不登校生の学びの場に関する情報収集し，学生ボランティア派遣の観点から整理を行った。

論文：

「ストーリーとしての引きこもり経験」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第８号，pp.261-268

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

学会発表：

「引きこもりの回復過程と家族――『親が変わる』という戦略の両義性」日本社会学会第77回大会（熊本大学，2004年11月20日）

報告書論文：

「愛知県における不登校生の学びの場と学生ボランティアの可能性」『SOBA活動報告書　第２号』愛知教育大学教育実践総合センター

障害児治療教育センター

神野　秀雄　Jinno, Hideo　　教授　　障害児治療教育センター　教育学博士

❶ 心理学，専門分野：障害児心理学，関連分野：臨床心理学

❸ 日本教育心理学会，日本特殊教育学会，日本心理臨床学会

❹ 障害児教育特論（２年），知的障害児研究法Ⅱ（３年），障害児の治療教育（４年），障害児治療教育学特論Ⅰ（大学院），障害児治療教育学演習Ⅰ（大学院），治療教育学演習Ⅰ・Ⅱ（特殊教育特別専攻科，肢体，情緒），情緒障害児教育概論（情緒）

実践的教育力を身につけるためには，臨床実習が欠かせない。本学には障害児治療教育センターが設置されており，知的障害，自閉症，学習障害等の子ども達が継続的に多数来所している。臨床教育実習を希望する学生や院生は，教官の指導のもと障害児の治療教育を長期にわたって担当し，子どもたちの変化・発達をvividに体験することができる。このような経験をふまえ，学生達は障害のある子どもの何を育て，何を教えることが重要かを体験的に学習するのである。このように本センターは学生，院生の臨床実習の場として有効に機能しており，精力的に学生の指導にあたってきている。

❺ ⑴　自閉症スペクトラム障害の再整理の試み

⑵　軽度発達障害児（LD，ADHD，HFA/Asp）の治療教育

近年，自閉症を中核とした広汎性発達障害を自閉症スペクトラム障害（ASD）と呼ぶようになった。ASDには，知的に重度な自閉症から大学を卒業したアスペルガー障害まで，実に多様な自閉性障害を含んでおり，ASDを整理することの必要性を感じ，サブグループ化の研究をすすめてきている。

１．我慢できないことを主訴として来所した小６男子（ADHD）の10年間の治療教育の経過―Immatureな攻撃・破壊行動から眠りへ，そしてカレンダー計算への関心―治療教育学研究，第25輯，2005。

２．障害児を育てること・教えること（本センターと附養との連携）―ある自閉症児の治療教育の経過⑹―〔中島桂，鈴村由美，柴田昌一，鈴木美優紀と共著〕治療教育学研究，第25輯，2005。

❻ 障害児治療教育センター長，教育研究評議会評議員，財務委員会委員，施設整備環境保全部会委員，附属図書館委員会委員，教育実践総合センター運営協議会委員。

❼ 国立大学障害児教育関連施設・センター連絡協議会会長，名古屋市障害児保育指導委員会委員，名古屋市就学指導委員会委員，愛知県特別支援教育推進体制モデル事業調査研究運営会議委員及び専門委員会委員，愛知県特別支援教育連携協議会委員。

愛知教育大学附属高等学校第24回高校教育シンポジュウム講演，稲沢西中学校愛知県教育委員会委嘱「一人一人の教育的ニーズにあった教育の実践」研究発表会講演，障害児治療教育センター公開講座講師，刈谷市療育相談室講師，盲・聾・養護学校10年経験者研修講師（愛知県総合教育センター），盲・聾・養護学校初任者研修講師（愛知県総合

教育センター），名古屋市障害児教育研究会講師（名古屋市教育センター），宝井郡教育夏季研究会講師（小坂井中学校），師勝町教育相談研修会（師勝町民総合体育館），新川小学校現職教育講師（新川小学校）。

吉岡　恒生　Yoshioka, Tsuneo　　助教授　障害児治療教育センター　教育学修士

❶ 心理学
専門分野：臨床心理学，関連分野：障害児心理学，障害児臨床教育学，発達心理学

❸ 日本心理臨床学会，日本臨床心理士会，日本教育心理学会，日本精神分析学会，日本箱庭療法学会，愛知県臨床心理士会，愛知教育大学心理臨床の集い

❹ 障害児心理概論（１年），こころとからだ　展開１（２年），知的障害児指導法（３年），知的障害児研究法Ⅱ（３年），障害児臨床教育学特論（大学院）

１年生の概論では，障害児に接する際の基本的な心構えを，論文の購読，ビデオ視聴も交えて講義した。ほぼ毎回，論文，ビデオの感想レポートを提出させ，教室外の学習による単位の実質化に努めた。学生のレポートを教材にしたり，障害児の母親を講師として招くなど，対話的・実践的授業の構築を目指した。「こころとからだ」では，小グループ活動を中心とした，学生参加型授業を展開し，学生に好評であった。「指導法」では，知的障害をめぐる様々なトピックを含む教科書を使い，毎回の学生レポートをもとにディスカッションをするなど，学生の主体的参加を促した。大学院の授業では，昼間は一対一であったので，ある自閉症児の療育に院生が相談補助者として実際に関わり，スーパーヴィジョンを通して臨床的な知を伝えた。

❺ 自閉症児を始めとする障害児の治療教育。とりわけ最早期の発達障害児の母子援助と障害児とその家族への長期的視野にたった援助をテーマとする。

論文：

特殊教育諸学校教員が抱く「保護者の障害受容」イメージについて　治療教育学研究第25輯（愛知教育大学障害児治療教育センター）2005

アスペルガー症候群男児とのプレイセラピーの過程（八木奈緒子と共著）　治療教育学研究第25輯（愛知教育大学障害児治療教育センター）2005

論文コメント：

小野論文へのコメント　岐阜大学心理教育相談研究　第３号　2004

❻ 共通科目専門委員，附属図書館委員，障害児治療教育センター運営委員

❼ 2004年６月，10月　豊田市就学相談会相談員
2004年７月　愛知教育大学附属高等学校「アカデミック・クエスト講座」講師
2004年７月　愛知教育大学心理臨床の集い　症例検討会　助言者
2004年８月　平成16年度　盲・聾・養護学校10年経験者研修講師（愛知県総合教育センター）
2004年８月　愛知県教育委員会　認定講習
2004年９月　刈谷市社会福祉事業団しげはら園「クラス（母親）懇談会」講師（３回）
2004年11月　蒲郡市就学指導委員会（２回）
2004年11月　愛知教育大学附属養護学校　第37回特殊教育研究協議会　分科会助言者
2005年１月　愛知県総合教育センター　就学相談講座　助言者

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

2005年２月　上記しげはら園「父親参観及び懇談会」講師
2005年３月　三好町立天王小学校　講演「軽度発達障害児への理解と支援」

国語教育

塘　耕次　Tsutsumi, Koji　教授　国語教育講座　修士（文学）

❶ 中国哲学，中国書画論
❸ 日本中国学会，書論研究会，阪神中哲談話会
❹ 漢字文化論Ⅰ（２年），漢字文化論Ⅱ（２年），中国生活文化論（３年），書論・書道史特論（大学院）など。
❺ 中国の芸術家の思想と生活
『中国学問芸術史』改訂版（三恵社，2004年４月１日）発行
❻ 日本・東アジア履修モデル教務委員補佐

安藤　重和　Ando, Shigekazu　教授　国語教育講座　文学修士

❶ 専門分野：平安朝文学，関連分野：古代暦学
❸ 中古文学会　名古屋平安文学研究会
❹ 共通科目（１年），日本書誌学演習１（２年），国語科教育Ａ（３年），日本文学史概説（３年），日本言語文化演習２（３年），日本文学研究（３年），日本文化論演習１（４年），日本文化論演習２（４年），国文学演習Ｅ（４年），中古文学特論１（大学院），中古文学特論２（大学院），中古文学特論２（大学院夜間）
・「論」とは、必ず「根拠」を先に示してその後にその「根拠」に相即した「結論」を確定するものである、と思う。「結論」を最初に示す物言いは、「説明」や「言い繕い」の類であって、真実を解明するための武器にはなり得ないように思われる。それはおそらく「論」とは異質であろう。そのことを体得させることを目指して、授業を展開するように心がけている。具体的手法としては、「云々だから」という言い方を推奨し、「何故ならば」という言い方を禁じるなどの工夫をしている。
❺ ⑴　古今集の真名序・仮名序の解明
⑵　古代以来の時間の重層性の解明
論文：
「古今集付載真名序の『臣貫之等』という表現をめぐって」（愛知教育大学　日本文化論叢13号　2005年３月）
口頭発表：
「古今集付載『真名序』をめぐって」（名古屋平安文学研究会　2004年12月例会）
❻ 学長選考会議，学長選考等管理委員会，教育研究評議会，教員人事委員会

風岡　正明　Kazaoka, Masaaki　教授　国語教育講座　教育学士

❶ 専門分野：書道，関連分野：国語教育（書写）
❷・内閣総理大臣賞　作品「陳子昂詩」第１回東京書作展（1979.12）
・内閣総理大臣賞　作品「陸游詩」第２回東京書作展（1980.12）
❸・全国大学書道学会（地方幹事），書写書道教育学会

❹・書道演習Ａ（１年），書道演習Ｂ（２年），書道演習Ｄ（３年），書道演習Ｇ（３年），書道演習Ｊ（４年），国語科研究ＢⅡ（１年），書道史Ｂ（３年），共通科目（２年），作品研究Ａ（３年），作品研究Ｂ（４年），書道教育演習Ⅰ･Ⅱ（大学院）
・書写書道の教育に理解と情熱を持つ教員の養成に努めたい。課外のクラブ活動では，書道部の顧問として作品研究会等の指導助言を行っている。
❺・北魏の楷書の用筆法，結構法を分析的に研究すると共に，それを応用した楷書作品の制作。
・幕末から明治にかけて活躍した郷土の文人「村瀬太乙」の詩と書を中心とした研究。
・作品：
「渾々沌々」産経国際書展　サンシャイン文化会館　2004
「奔雷墜石」産経国際書会代表作家展　上野の森美術館　2005
❻・入試委員（副委員長）
❼・西春日井書写研究会講師「硬筆書写の実技と指導法」
・三好町立三吉小学校現職教育講師「書写指導法について」

今井正之助　Imai, Shonosuke　　教授　　国語教育講座　　博士（文学）

❶ 文学，専門分野：日本古典文学，関連分野：日本古典書誌学
❸ 日本文学協会，中世文学会，軍記・語り物研究会
❹ 日本書誌学概説（２年），日本言語文化演習演習Ⅰ（３年），日本文学演習Ⅱ（３年），国語科研究（３年），国文学講義Ｃ（３年），国文学演習ＧⅠ・Ⅱ（３年），日本書誌学研究（４年），日本文化論演習Ⅰ・Ⅱ（４年），中世文学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）
授業の目的と受講学生の関心を勘案し，必須の知識と調査・研究能力が身に付くように努めている。国語教室以外の学生を対象とする国語科研究では，最初に大野晋『日本語練習帳』等を用い，言語感覚の問題から始め，言語表現としての文学作品読解の要点に及び，自力で教材研究できる基礎力の習得を意図している。また，書誌学という，学生にとってなじみの薄い分野の授業の場合，次の点を心がけている。１．テキストの他に，必要に応じて項目ごとに内容をまとめたプリントを用意する。２．日本の近世以前を対象とするが，東洋（中国・朝鮮），西洋の動向との関連に注意する。３．「物としての図書」を基本的な対象とする学問であることから，できるかぎり実物若しくは図版などを提示する。４．講義科目であるが，前項との関係からも，実習的要素を取り入れる。ただし，広範・甚深な内容を含む分野だけに，いまだ充分な域に達しているとはいいがたく，概説の概説に留まっているのが現状である。
❺ ⑴　軍記物語の表現と構成：
軍記物語の特性を日付構成及び合戦叙述の両面から把握する。
⑵　太平記評判書の生成と展開：
『太平記秘伝理尽鈔』を中心とする太平記評判書の生成及び特質の解明。
著書：
『太平記秘伝理尽鈔　３』（加美宏，長坂成行と共著）［平凡社東洋文庫732，2004］
論文：
「三つの地名辞典と『太平記秘伝理尽鈔』（特集「日本歴史地名大系」完結!）」［月刊

百科508，2005.2］
「「賀名生」覚書」［日本文化論叢13，2005.3］

❻ 日本・東アジア履修モデル代表

❼ 市民講座「室町・戦国時代の武士の精神」［栄中日文化センター，2005.3.12］

高瀬　正一　Takase, Shoichi　　教授　国語教育講座　文学修士

❶ 国語学，国語学史・国語史

❸ 日本語学会，鈴屋学会，訓点語学会

❹ 国語学概説Ⅰ（2年），国語学概説Ⅱ（2年），国語学演習ＡⅠ（2年），国語学演習ＡⅡ（2年），国語学演習ＣⅠ（3年），国語学演習ＤⅠ（3年），国語学講義ＢⅡ（3年），国語学演習ＣⅡ（4年），国語学演習ＤⅡ（4年），総合演習Ⅱ（4年），国語学概講義Ⅰ（大学院），国語学概講義Ⅱ（大学院）

専門に対する興味が希薄なため，受講態度が良くない学生もみうけられる。初等における国語・社会の振り分けも原因の一つとおもわれる。

❻ 国語教育講座代表，財務委員会委員，附属図書館委員会委員

❼ 愛知県立豊田西高校において，愛知教育大学の国語専攻の紹介並びに模擬授業を行う。

中田　敏夫　Nakada, Toshio　　教授　国語教育講座　文学修士

❶ 国語学，国語教育史

❸ 日本語学会，全国大学国語国文学会，日本植民地教育史研究会，日本台湾学会ほか

❹ 国語科教育ＣⅡ，国語学講義ＢⅠ，日本言語文化概説，国語学基礎演習Ⅱ，国語学演習ＤⅠ，国語学演習ＤⅡ，国語学演習ＡⅠ，国語学演習ＡⅡ，国語学演習Ｂ，国語科教育特論Ⅲ，国語科教育特論Ⅳ，特別研究Ⅰ，特別研究Ⅱ

学生の専門の力が落ちていることを実感する昨今，どのように学問的な力量を身につけさせるかが課題である。2004年度は学生とともに3泊4日の言語調査を実践した。学問への動機付けにこのようなフィールドワークが有効であることを実感したが，それ以上に，学生にとっては現場調査を通して，人間や社会，時代を考える契機となったようで，改めてフィールドワークの重要性を認識した。今後継続したいと考えている。

❺ 現在の研究テーマ：

植民地統治時代の総督府編纂資料の国語学的研究並びに国語教育史学的研究を進めているが，さらに，軍隊・警備関係諸資料の収集・分析を通し，近代後を総合的に考えていきたい。

論文：

・「資料紹介『日治時期台湾公学校與国民学校国語読本』（『植民地教育年報7号』日本植民地教育史研究会）2005

・「『台湾教科用書国民読本』自立語総覧」（共著，『中京大学論叢45巻2号』中京大学教養部）2004

・「台湾総督府編纂『台湾教科用書国民読本』の教材編成」（『教科書フォーラム2号』東京書籍）2004

科学研究費：

・「植民地・内地編纂国語教科書教材と国民性形成に関する研究」（代表）基盤研究(C)(2)

・「地域の国際化による日系南米人増加の実態をふまえた教員養成システム導入のための研究」（分担者）基盤研究(C)(2)
・「植民地及び内地編纂国語読本の国語学的研究」（分担者）基盤研究(C)(2)
・「静岡県下「言語の島」における言語変容に関する基礎的研究」（分担者）基盤研究(C)(2)

❻・大学改革推進委員会委員，国際交流委員会委員長

❼・岡崎市教育研究集会助言者，2004年９月

山本　敏雄　Yamamoto, Toshio　　教授　　国語教育講座　　文学修士

❶ 中国古典文学，唐代文化史

❸ 日本中国学会，東方学会，日本道教学会，全国漢文教育学会

❹ 国際社会と日本（２年），中国言語文化概説（２年），中国言語文化演習（２年），中国文化史Ａ（２年），中国文化史Ｂ（３年），中国文学史Ａ（３年），中国文学演習Ａ（３年），中国文学研究Ｂ（４年），アジア文化論演習Ⅰ（４年），アジア文化論演習Ⅱ（４年），漢文学演習Ⅲ（大学院），漢文学演習Ⅳ（大学院）

現代漢語と文言文の理解力を高め，基本的な知識を習得した上で，多くの文献を通して幅広く中国文化に触れることを目標としている。今年度は，中国の喫茶の歴史に関する授業（中国文化史Ａ）で，実際に茶を淹れて受講学生に飲んでもらったり，「国際社会と日本」では中国の民族楽器をいくつか実際に見せて説明するなど，文献資料のみに偏らないよう配慮しつつ講義を行った。

教育課程の改変後四年経ったが，以前に比較して現代漢語の理解力の低下がみられ，今後は専門の授業の講義方法をより工夫する必要があると考えている。

❺・現在の研究テーマ：

「唐代音楽文化と文学」：唐代に隆盛をみた「琵琶」という楽器が唐詩の中でどのように詠われているかを，白居易を中心に分析し，詩とその背景にある音楽文化との関連を中心に研究を進めている。

❻ 大学院国語教育専攻代表，大学院入試部会委員，附属図書館委員会委員（年度途中まで）

佐藤　豊　Sato, Yutaka　　教授　　国語教育講座　　文学修士

❶ 専門分野：中国近代思想史，関連分野：漢文学

❸ 日本中国学会，東方学会，中国社会文化学会

❹ 中国政治社会思想概論（２年），中国政治社会思想特論（３年），アジア関係史概説（２年），アジア関係史特論（２年），日中関係史演習（３年），中国政治社会思想演習（３年），総合演習（３年），中国事情（２年），共通科目「国際社会と日本」展開（２年），アジア文化演習Ⅰ・Ⅱ（大学院），アジア文化特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）

国際理解教育課程にふさわしいアジア関係の授業について，特に専門と直接の関連はないがそれなりに対応していると自負している。その他の授業に対しては学生が独自に中国に対する情報にアクセスし，自分の考え方をもてるように語学力等の学力向上に資する授業を心掛けている。

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❺ 現在の研究テーマ：中国近代における西洋功利主義思想の受容。
業績：
再論「厳復と功利主義」，愛知教育大学研究報告，第五十四輯，人文・社会編　愛知教育大学，2005年３月

❻ 共通科目「国際社会と日本」コーディネーター

佐藤　洋一　Sato, Yoichi　教授　国語教育講座　教育学士

❶ 国語科教育学，日本近現代文学
国語科授業研究論・評価方法論，言語技術教育論，国語科から展開するメディア・リテラシー教育論。近現代詩の文体・表現論（谷川俊太郎・大岡信・中原中也等），戦後小説の文体論・描写論（大岡昇平・安岡章太郎等），現代文学批評理論など。

❸ 日本言語技術教育学会（常任理事，兼事務局長），同学会・名古屋支部代表。日本国語教育学会（理事），日本教育技術学会（幹事）。愛知県三河教育研究会（国語部常任講師），全国大学国語教育学会，日本近代文学会，昭和文学会，国文学・言語と文芸の会，日本文学協会，中原中也の会，四季派学会など。

❹ 21世紀に求められている国語科「授業力」の理論的・実践的指導
国語科教育ＣⅠ・ＣⅢ・ＣⅣ，日本文学講義Ｃ，国文学演習ＧⅡ，総合演習Ⅱ，国文学演習ＡⅠ・Ⅱ，国語科研究ＢⅡ，共通科目入門など。国語科教育特論（大学院），国語科授業研究Ⅰ（大学院），特別研究ⅠⅡ（大学院）
・国語科教育の講義と演習では，実践的で専門性な指導力を具体的に体得させるため，学生・院生による「学習指導案づくり」「模擬授業と討論」等の活動の充実。
・「教科専門」を生かし，「子ども達の現実」を正確に踏まえ，学校教育の基盤となる国語科学力（到達目標／評価基準としての「言語技術」）の観点から，21世紀に求められる国語科「授業力」としてのメディア・リテラシー教育・情報リテラシー・コミュニケーション論等を踏まえた授業構成にすることで，新しい時代に対応できる教師の資質や「国語学力」の基礎・基本を確実に身に付けられるような配慮の実施。
・学部生の論文作成や院生の修論作成の講義や演習では，講義とは別に定期的な発表会と討論などを実施し，段階的に専門的な力量と論文作成技術やリテラシーやコミュニケーション能力など，新しい時代に対応できる教員の資質・能力の育成を重視。

❺ 現在の研究テーマ：
21世紀に求められている国語科「授業力」の解明
・到達目標（評価基準）としての言語技術教育論／実践的授業方法論・評価論
・基礎学力から発展までを明確にした「国語学力」と学校教育論・カリキュラム論
・国語科「評価基準」論と学習モデル／教材開発論（小学校～高校モデル）
・詩・小説の言語技術教育論―基礎・基本から発展へ―など
主な研究業績：
『中学校国語科教育　授業実践資料集（全12巻／共編著／CD－ROM版）』（株式会社ニチブン，2005年12月刊）
「国語科『単元学習』批判（特別連載７回）」（『現代教育科学　2004年９月号～2005年３月号』明治図書）
「国語科“写真リテラシー”の基礎・基本学習から発信・評価学習へ」（『愛知教育大学教育実践総合センター紀要　第８号』2005年３月／共著）
「事実・生き方の記録（ノンフィクション）の『学び方・評価』学習」（『愛知教育大

学研究報告　第54輯（教育科学編）』2005年３月／共著）

全国的・地方的学会や研究会の企画・運営など：

日本言語技術教育学会の事務局長（兼，常任理事）として，年１回の全国大会の企画・運営（昨年度は「第13回大会　札幌大会」），数回の「会報」の作成と発送，理事会の企画や招集などの他，同学会「名古屋支部代表」として毎月１回の研究会，夏期研究会などによる先進的な「授業力」育成と会の企画・運営など。

❻ 大学・附属連携運営委員会委員，「国語教育」分科会副代表，その他。

❼ 文部科学省（愛知県教育委員会関連）では，昨年に引き続き文科省「『国語力向上』モデル事業」に学識経験者（県委員）として，同「学習カウンセラー」県委員として指定校の指導・助言，講演などに当たった。各県の教育センターや授業研究会講師としては，岡山県教育センター・三重県総合教育センター・新潟市教育センターなどの他，石川県小松市「21世紀セミナー」，三重県桑名市藤ヶ丘小学校，名古屋市教育センター支援事業講師として名古屋市内の数校に，講演や指導助言を行った。

愛知県内の授業研究会，講演講師などでは，愛知国語研究会（知多読解部会）・岡崎市国語科主任研修会・岡崎市さわらびの会（国語科）・渥美国語研究会（渥美ゼミナール）・海部国語研究会・小牧市国語研究会・東海市等での講演や提言など。研究指定研究校への指導助言は，岡崎市竜美丘小・同北野小・同南中学校，大府市共長小・同大府小，西尾市鶴城小，知多市岡田小，刈谷市住吉小・同東刈谷小，宝飯郡音羽中，御津南部小，丹羽郡大口南小，三好町天王小，小牧市光ヶ丘小・同小牧原小，東浦町森岡小，半田市成岩小学校などに関わった。

本学附属学校へは，附属岡崎小学校・名古屋小学校・岡崎中学校の国語科「助言者」として，公開研究発表会に向けての提案性の焦点化（理論的な整理）や新しい「国語科授業づくり」の開発・評価などの国語科の授業研究論・評価論で関わった。

有働　　裕　Udo, Yutaka　　助教授　国語教育講座　　教育学修士

❶ 国語科教育学，日本近世文学

❸ 日本文学協会，全国大学国語教育学会，日本近世文学会

❹ 専門教育入門Ａ（１年），専門教育入門Ｂ（１年），国語科教育Ａ（１年），共通科目平和と人権入門（１年），国文学講義ＢⅡ（２年），国文学演習ＢⅠ（２年），国文学演習ＢⅡ（２年），国文学史概説（２年），共通科目平和と人権セミナー（２年），国文学演習ＢⅢ（３年），国文学演習ＧⅠ（３年），課題研究Ｂ（４年），国語科教育演習Ⅶ・Ⅷ（大学院）

学生の国語国文学に関する基本的知識の欠如，各種の言語能力とりわけ表現力の不足にどのように対応するかが，教育活動上の大きな問題点である。教育に関する抱負としては，専門領域の内容を重視しつつ演習や論文作成を通しての言語技術育成をめざしている。

❺・現在の研究テーマ：

①　「戦後教育出発期における古典教育」17年度は資料収集とその整理とを中心に行う。

②　「『本朝二十不孝』の研究」17年度は研究史の整理を行いつつ，作品論を執筆す

る。

・業績リスト：

論文：

「『本朝二十不孝』研究史ノート㈡」『国語国文学報』63集　2005年

「西鶴この一行」『国文学解釈と鑑賞別冊　西鶴　挑発するテキスト』2005年

・科学研究費等：

平成十六年度科学研究費補助金　基盤研究(C)(1)「江戸時代初期草双紙の特色解明のためのデータ集積による集成的研究」（代表者黒石陽子，総人数８名）

❻・国語教育講座副代表

❼・岡崎市教育研究大会助言者（2004年９月）

田澤　基久　Tazawa, Motohisa　　助教授　国語教育講座　　文学修士

❶　日本近代文学

❸　日本近代文学会，昭和文学会

❺　大正文学研究，私小説研究

高橋みつる　Takahashi, Mitsuru　　助教授　国語教育講座　　文学修士

❶　中国近現代文学，中国映像文化

❸　日本中国学会，日本中国語学会，中国文芸研究会

❹　比較文化論Ⅰ（１年），中国語学演習Ⅰ・Ⅱ（２年），国際社会と日本セミナー（３年），中国文学特論（３年），中国文学史Ｂ（３年），中国映像文化論Ⅰ・Ⅱ（３年），アジア文化論Ⅰ・Ⅱ（４年），中国文化演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

主に，現代中国文学と中国語・中国映画に関する授業を担当している。「中国文学特論」「中国文学史Ｂ」では，学生たちが抱いている中国社会の現状や風俗・文化に対する漠然とした知識や関心を，より深く確実なものとするために，教材として，現代中国の社会事情と課題を反映した最新の小説を扱っている。短編でも半年の授業期間では読み終えることができないため，文学作品として深く読み味わう段階までいかないのが問題である。「中国映像文化論」は，中国を専門の研究対象としない学生が多く履修しているので，映画の背景となる歴史や社会をわかりやすく説明することに努めている。授業を通して，中国映画に初めて触れた学生には新鮮な感動と基礎的知識を，中国映画に関心のある学生には，テーマを定めて系統的に作品を取り上げることによって，作品分析や中国社会理解の方法を提示できていると思っている。

上記の授業は，学生たちの中国に対する関心を高めることが一つの目的であるが，動機づけと同時に重要なのは，やはり，中国語の学力である，と考える。語学力は，中国文化研究の基礎を為すものであり，卒業研究に不可欠である中国語文献の読解力は，現代中国語の文章を精読・多読する，という地道な努力の積み重ねによって習得する以外に方法はない。そこで，２年では発音と文法の定着を，３年では難易度の高い現代小説に取り組むことによって，語彙の増加と文脈の中で文意を読み取る力を養うよう，授業展開を図っている。

❺　現在の研究テーマは，中国近代における人力車夫である。中国において，人力車夫が文学作品に描かれるようになった歴史的・思想的背景や，その特徴，及び文学史における意義などを考察してきた。今後は，それらの分析を踏まえて，比較文学の観点から，

人力車夫を描いた日中両国の文学作品を比較検討し，両国における車夫観の違いや文学の特質を明らかにしてみたい。

また，卒論以来の郁達夫の伝記論的研究として，第二夫人王映霞との関係について考えていきたいと思っている。王映霞自身の回想録を分析して，離婚に至った原因や正夫人との関係などを明らかにしてみたい。それは，魯迅や郭沫若と同様，儒教倫理と近代的自我や自由恋愛などとの葛藤に生きた知識人の精神世界の一端を見ることができるからである。

❻ 時間割編成専門委員会委員，セクシュアル・ハラスメント防止等対策委員会委員

木村　博昭　Kimura, Hiroaki　　助教授　国語教育講座　　教育学修士

❶ 専門分野：書道，関連分野：書論，書道史，書写書道教育

❸ 全国大学書写書道教育学会，日本教育大学協会書道教育部門会

❹ 共通科目〈日本の社会と表現文化〉入門（１年），書道演習Ａ（１年），書道演習Ｃ（２年），国語科研究ＡⅠ（２，３年），書道演習Ｄ（３年），書道演習Ｅ（３年），書道演習Ｆ（３年），篆刻研究（３年），書式研究Ａ（３年），書式研究Ｂ（４年），書道教育特論Ⅲ（大学院）

・書道演習Ａ，Ｃ，Ｄ…国語科書写の基礎基本を指導している。一斉指導と個別指導を適宜取り入れて，書写能力向上を効率よく図れるよう工夫している。硬毛関連指導を重視している。

・書道演習Ｅ，Ｆ…古典の臨書を通して書の実技能力をつけることを目標に指導している。より専門的な内容を，理論と実技の両面から追求すべく今後も指導の充実を図りたい。個人個人のレベルに応じた指導の重要性を感じている。

・篆刻研究…基礎的な理論と実技の授業である。ほとんどやっていない学生が多いので，あまり専門的にはしていない。将来教育の現場で何らか生かせるものにと考えている。

・書式研究Ａ，Ｂ…より専門的に卒論につながる理論研究を行っている。学生の主体性を重視。

・大学院関係…学生の実態に合わせて，書写的内容と書道的内容を変えて行っている。2004年度は，現代の日本の書論を扱った。

❺ 現在の研究テーマは，⑴六朝北魏の書風をもとにした作品制作，⑵中国清代の書論における用筆論に関する研究，⑶書写書道教育の理論的研究，である。

⑴…古典に立脚した，力強さの中にも品格のある書を追及する。臨書不足を漸次改善していきたい。併せて，現代作家の優れた作風も適宜吸収してゆきたい。

⑵…清代の用筆論を精査に読み解くことにより，当時の論書家の考え方を検討，整理する。

⑶…附属学校等との連携を通して，授業実践研究等を，関係教員とともに進めていく。2004年度は，パソコンを利用した効果的指導法を検討。

・作品：

常建詩　第51回東海書道芸術院展　愛知県美術館　2004.4

李賀詩　第21回産経国際書展　池袋サンシャイン文化会館　2004.7

愛・地球博メッセージ　第30回宏道書展　電気文化会館　2004.8

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

李裕詩　'05今日の書展　愛知県美術館　2005.1
朱茂詩　第19回産経国際書会代表展　上野の森美術館　2005.1

・論文：
『書概』について　書芸中道〈財団法人晴嵐館発行〉409号～417号　総ｐ.18
『続書譜』の用筆論　書芸中道〈財団法人晴嵐館発行〉418号～420号　総ｐ.6

❻・時間割編成専門委員会委員

❼・中島地方教科等研究集会『基礎・基本を大切にし，意欲や関心を高めるための書写指導』中島地方書写研究部　講演「書写教育の今日的課題について」　稲沢市立千代田中学校 2004.10

・『東書芸会報』〈東海書道芸術院発行〉92号ｐ.4（2004.4），93号ｐ.12（2004.8），94号ｐ.6（2005.1）の編集発行

・産経国際書会（評議員），東海書道芸術院（常任理事），宏道書会（副理事長），日本書道教育学会（総務）等，書道に関する社会的・啓蒙的活動をしている。

矢島　正浩　Yajima, Masahiro　　助教授　国語教育講座　　文学修士

❶ 国語学（日本語学），近世～近代日本語

❸ 国語学会，日本文芸研究会，日本語文法学会

❹ 国語科研究ＡⅡ（１年），専門教育入門Ａ・Ｂ（１年），現代日本の社会と文化・展開（２年），国語学概説Ⅰ・Ⅱ（２年），国語学講義Ａ（２年），国語学演習ＡⅠ（２年），国語学演習ＡⅡ（３年），国語学基礎演習Ⅰ（３年），国語学演習ＤⅠ（３年），総合演習Ⅰ（３年），国語学演習ＤⅡ（４年），国語学演習Ⅲ・Ⅳ（大学院）

授業においては，「ことば」の運用を多角的に観察し，そのありようが意味するところを考察しながら，人間にとって「ことば」とは何なのかといった根源的な問いに対する自分なりの見解を得ることを目標としている。教育の現場において直接に役立つ知識や方法を学ぶ前提として，国語科の基礎となる「ことば」について，自分自身の持つ「ことば」によって，深く，精確な理解を有することが重要と考えるからである。

❺・現在の研究テーマ：
条件表現の推移の実態把握及びその推移を生じさせる原理の解明

・論文：
「条件表現の変化を促したもの―已然形＋バの位置付けに着目して―」『国語学研究』43　2004年
「条件表現における未然形＋バの衰退―近世期上方資料の使用状況から―」『国語国文学報』62　2004年
「言語資料としてみた近松世話浄瑠璃の文体」『江戸文学』30　2004年

❻ 国語・書道専攻代表

田口　尚之　Taguchi, Hisayuki　　助教授　国語教育講座　　文学修士

❶・上代文学，中古文学

❸・日本文学協会，萬葉学会，美夫君志会

❹・国語科研究ＡⅡ（１年），人文科学入門（１年），国文学講義ＡⅠ（１年），国文学演習ＡⅠ（１年），国文学演習ＡⅡ，ＢⅠ，ＢⅡ（２年），国文学史概説（３年），国文学演習ＧⅠ（３年），総合演習Ⅰ（３年），国文学演習ＧⅡ（４年），中古文学演習Ⅲ，Ⅳ

（大学院）
・教育活動の問題点は特になく，ほぼうまくいっている。教科教育の授業はより実践的に，専門教育は特に卒論指導に力を入れている。
❺・現在の研究テーマ：
万葉赤人歌の表現方法論及び伊勢物語可変論の研究，箏曲・地歌の注釈
・単著：
『伊勢物語入門』（平16・６　鼎書房）
・連載：
「箏曲・地歌を解読しよう」（月刊「邦楽ジャーナル」平16・４-17・３／計12号）
・論文：
「旧稿の訂正と補足―伊勢物語における業平集所載歌章段の位置関係を中心に―」（「愛知教育大学大学院国語研究」13号平17・3）
「赤人三七八番歌の表現方法―故太政大臣藤原家の山池を詠む歌をめぐって―」（「国語国文学報」63集平17・3）
❻・「愛知教育大学大学院国語研究」編集委員
❼・古典サークル「源氏物語講読会」講師（月２回／知立市中央公民館）
・斎宮歴史博物館王朝文学講座講師（平16・５-17・３／計11回）
・本学公開講座（平16・10-12／計５回）

西田谷　洋　Nishitaya, Hiroshi　　助教授　国語教育講座　　文学博士

❶　日本近代文学・日本現代メディア
❸　日本近代文学会，日本文学協会，昭和文学会，日本社会文学会，全国大学国語国文学会，物語研究会，筑波大学比較・理論文学会，日本語用論学会，日本認知言語学会，日本記号学会
（役職：日本近代文学会東海支部幹事）
❹　国語科研究ＢⅡ（１年），日本の社会と表現文化展開２（２年），国文学講義ＡⅡ（２年），国文学演習ＢⅠ（２年），国文学演習ＢⅡ（２年），国文学講義ＢⅡ（３年），日本文学講義Ａ（３年），国文学演習Ｃ１（３年），国文学演習Ｄ（３年），国文学演習ＧⅠ（３年），国文学演習ＧⅡ（４年），近代文学演習Ⅰ（大学院），近代文学演習Ⅱ（大学院）
❺　現在の研究テーマ：現代文学研究，文学理論研究
業績リスト：
著書：
『宮崎夢柳論』（マナハウス　2004・８）
論文：
「換喩・物語性・イデオロギー―認知物語論のコミュニケーション観から―」（『国語国文学報』63　愛知教育大学国語国文学研究室　2005・３）
書評：
「石原千秋著『テクストはまちがわない　小説と読者の仕事』（『日本文学』53-7　日本文学協会　2004・７）
❻　情報システム委員（～2004・12）

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

衣川　彰人　Kinukawa, Akihito　　助教授　国語教育講座　　修士（教育）

❶ 書道，書道史，書写書道教育

❷ 日本書芸院大賞（2000年・第54回日本書芸院展，1999年・第53回日本書芸院展）
文部科学大臣奨励賞（2001年・第53回全国書道展覧会〈道風展〉）
読売新聞社賞（2002年・第19回読売書法展，2001年・第18回読売書法展）

❸ 全国大学書道学会，全国大学国語教育学会，読売書法会（理事），社団法人日本書芸院（一科審査会員），社団法人中部日本書道会（二科審査会員），社団法人日本かな書道会（正会員），寒玉書道会（理事）

❹ 書道演習Ａ（１年），書道演習Ｂ（２年），書道演習Ｃ（２年），共通科目〈展開１〉（２年），国語科研究Ａ《書写》（２・３年），書道史Ａ（３年），書道演習Ｄ（３年），書道演習Ｈ（３年），書人研究Ａ（３年），書人研究Ｂ（４年），書道演習Ⅰ（４年），総合演習Ⅱ（４年）

○書道演習Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄでは，小中学校における書写指導のあり方について講義と実技指導を行うが，クラスによっては，受講者数が多いため，学生個人個人の能力に応じた十分な指導を行うことが難しく，改善が必要なところである。

○書道演習Ｈ・Ⅰでは，かなの基礎である「いろは」から「ちらし書き」へと段階的に発展させることができるように教材を精選し，かな古筆の研究とともに進めることにより，さまざまな用筆法が学習できるよう配慮している。

○書道史Ａでは，日本書道史を中心に，中国書道史とも関連付けながら講義中心にして行っている。図版やスライドなどの資料を多く用いることにより，特徴などについて視覚的にも学習しやすいように配慮している。

○書人研究Ａ・Ｂでは，受講者が興味関心をもった日本の書人に関して資料収集を行いながらレポート作成へと進めるが，受講生それぞれが個別に選択した研究内容を扱うため，受講生一人ひとりに十分な指導時間がとりにくい点が問題である。研究内容を限定したり，受講生が興味のある共通の内容について資料収集を分担するなどして十分な指導ができるような改善策を考える必要を感じている。

❺ 日本書道の中でも，「かな書道」に関する考察を中心として，国文学や日本美術との関連などについて研究を進めている。 主な研究テーマは下記のとおりである。

・かな書道と書式の関係に関する研究
・国文学とかな書道の関係に関する研究
・料紙と下絵の関係に関する研究
・古筆と大字かな書法の関連と発展性の研究
・年中行事と書式の関係に関する研究

また，古筆にみるかな美を現代の書美に生かした作品制作への発展を目指している。平成16年度の主な作品発表は下記のとおりである。

・第58回日本書芸院展（2004.４）
・第54回中日書道展（2004.６）
・第21回読売書法展（2004.８）

❻ 教育実地研究委員

❼ 平成16年度（第43回）愛知県書写書道教育研究協議会講師（2005.１）

日本語教育

岡田　安代　Okada, Yasuyo　　教授　日本語教育講座　文学修士

❶ 専門分野：日本語教育学，関連分野：日本語学，日本文学

❸ 日本語教育学会，異文化間教育学会，大学日本語教員養成課程研究協議会（理事），国立大学日本語教育研究協議会

❹ 主題科目「国際社会と日本」入門「異文化間の諸問題」（１年），日本語教育学概説Ⅰ（１年），日本語教育実習Ⅰ，Ⅱ（３年），日本語教授法（３年），児童と日本語教育（３年），日本語教育演習Ⅰ，Ⅱ（４年），日本語教育研究Ⅰ（４年），異文化間教育特論Ⅰ，Ⅱ（大学院昼間及び夜間），異文化間教育方法研究Ⅰ，Ⅱ（大学院昼間及び夜間）

学部では，日本語教育学分野の授業を主に担当するが，特に実践的な活動を通しての教育を意識して行っている。３年生の「日本語教育実習」では日本語教育施設の見学，模擬実習，教壇実習（日本語中級レベル）を授業の中心とし，４年生の「日本語教育演習」では，留学生のための「日本語（初級レベル）」のコース（週３コマ）を学生達と共に開講・運営し，その実践を通して問題提起されるさまざまな課題について研究を行っている。また，授業以外にも，地域におけるボランティア日本語教室，小中学校における外国人児童・生徒の日本語教育支援，留学生に対する日本語チューター活動への参加等を学生に呼びかけ，その活動の支援を行っている。本年度は，昨年度立ち上げた「外国籍の子どもと親のための教育サポート事業」を発展・継続させ，その充実を図った。

❺ 現在興味を持っている研究テーマは，言語運用におけるポライトネス・ストラテジーの問題を異文化間コミュニケーションの視点から分析することである。日本語運用の問題を中心に，異文化間の比較に進めたいと思っている。また，小中学校における外国人児童・生徒に対する日本語教育の問題も，緊急の課題として取り組まなければならないテーマであると考えている。本年度は，教育改善推進プロジェクト経費を得て，外国人児童・生徒教育のための補助教材『外国人児童のためのさんすう文章題（４～６年生）』の原案を作成した。

学術・研究交流の面では，タイ国ラチャパット大学（10大学）との大学間交流協定の調印のため，タイ国に出向いた。

❼・財団法人日本語教育振興協会専門委員（1996年４月―現在）
・公開講座「身近な外国人とのコミュニケーション」（2004.８.21　於名古屋市生涯学習推進センター）講師
・愛知教育大学名古屋附属中学校研究授業指導助言

安武　知子　Yasutake, Tomoko　　教授　日本語教育講座　文学修士

❶ 言語学，専門分野：理論言語学，関連分野：英語学

❸ 日本英語学会，日本言語学会，日本英文学会，日本語用論学会，Linguistic Society of America

❹ 対照言語学Ⅱ（２年），言語構造論（２年），言語とジェンダー（３年），言葉と人間

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

（3年），日本語コミュニケーション論（4年），日本語教育研究Ⅱ（4年），言語理論Ⅰ（大学院），言語理論Ⅱ（大学院）

学部では，言語学諸分野の基礎からゼミ形式の演習まで一連の授業の流れの中で，言語研究に対する学生の興味を喚起し，基本的知識を伝授し，学生個人が独自の興味を発展させ卒業研究に結び付けうるよう指導を心がけている。教育活動上の第一の問題点は，一般的な学生の抽象的思考力の低下，外国語研究に対する無関心及び一般教養の不足である。そこでこれらの補足を念頭にしつつ，全体として消化不良にならないよう，しかも，個人レベルでの知的渇望を満たすような授業運営を心がけている。教育目標としては，幅広い知識を身に付け，国際感覚に優れた言語の専門家の育成を目指し，同時に発信型の実践的言語能力養成を念頭に授業を行っている。第二の問題点は，多くの学生の主たる関心事が授業以外にあるため，予習・復習の習慣が身につかないことである。如何にして学問に向かわせるかが課題である。第三の問題点は，急速な時代の変化に伴って，4年前に改訂したカリキュラムでは，日本語教育をめぐる新しい社会のニーズに対応できなくなっていることであり，早期に改訂する必要がある。

大学院では，英語教育専攻の教科内容学の授業を担当している。院生の出身学科はさまざまに異なっており，入学前に研究生生活を経験するなど，下準備のできてきている院生もいる一方，学部段階で言語学の基礎を全く勉強してきていない院生もおり，授業展開やレベルの維持に困難が生じている。外国人研究生も一人聴講していたが，英語力・日本語力とも標準に達しておらず，指導不能であった。外国人研究生の受け入れ制度の見直し，質的に優秀な研究生を受け入れることができるような施策の必要を痛感している。

❺ ⑴ 文構造と談話のインターフェイス：機能主義的アプローチによる文法形式と意味の関係に関する研究

⑵ 言語表現と個体認定のパラダイム：指示対象の個体認定表示の言語類型論的研究

⑶ 異言語間コミュニケーションと語用論：会話スタイルとメタメッセージの研究

現在の研究テーマは，基本的にこれまでの4半世紀にわたる研究活動の延長線上に位置付けられる。主たる研究領域は，文レベルの文法研究の枠組みを超えた言語形式と意味の相関関係，談話研究・語用論との接点に注目した言語研究をさらに進める。また，国際化の流れの中で，研究分野を少々広げる形で，異言語間コミュニケーションに伴う諸問題に対して，言語学の面からのアプローチも試みてていく。

Communication across Linguistic Boundaries: Variation and Universals in Language and Cognition.『愛教大研報53』（人）2004

期間中，大学の管理運営に関わる仕事が多く，研究に専念できる時間が充分に確保できなかった。それでも近年のITの急速な発達の恩恵を受けて世界の学会の動きは把握できており，今後も海外での学会には努めて出席し，最先端の研究情報を教育現場に反映できるように最大限の努力を続けていきたい。

❻ 教育研究評議会委員（2004年度），国際交流委員会副委員長（2004年度後期）

❼ 公開講座：

「コミュニケーション重視の英語教育のあり方」(5/22)，「小学校での効果的な英語教授法」(7/22)，「身近な外国人とのコミュニケーション」(8/28)，「ネイティブの先生を通して世界を知ろう」(10/16, 30)

豊橋市教育委員会11年目（中堅）教員研修の講師「国際理解教育」(8/6)

田村　建一　Tamura, Kenichi　　教授　日本語教育講座　文学修士

❶ 言語学，ドイツ語学

❸ 日本独文学会，日本言語学会，社会言語科学会，日本言語政策学会

❹ 人文科学入門（１年），言語学と日本語教育（１年），外国語演習Ⅱ（１年），対照言語学Ⅰ（２年），社会言語学入門（２年），歴史言語学Ｂ（３年），言語学史（３年），日本語教育研究Ⅱ（４年），外国語教育研究Ⅰ（大学院），異言語接触問題教育特論Ⅱ（大学院）

学生に対して成績評価の基準を明示することが今後の課題とされているが，なかなか難しい問題である。とりあえず平成15年度「言語学史」のレポート採点基準を翌16年度に公表した。これはインターネットを利用した無断引用のレポートが若干見られたため，合否の線引きが明確にできたという事情にもよる。低学年のうちにレポートの書き方を指導する必要性を痛感する。

❺ 現在の研究テーマ：

１．ルクセンブルクの言語政策：三言語を公用語とするルクセンブルクの言語政策上の問題を特に国民語であるルクセンブルク語の標準化に焦点をあてて探っている。いずれはヨーロッパの他の少数言語の公用語化をめぐる問題との比較に進みたいと考えている。

２．ツングース諸語の格体系の比較

科学研究費補助金：

基盤研究Ｃ⑵「ルクセンブルク語の標準化をめぐる問題」（代表者，50万円）

❻ 学部入試部会委員，共通科目専門委員会委員，大学院専攻代表（国際理解教育領域）

❼ 本学連携講座「身近な外国人とのコミュニケーション」（名古屋市生涯学習推進センター，2004.８.21）

稲葉みどり　Inaba, Midori　　助教授　日本語教育講座　学術修士

❶ 心理言語学，専門分野：言語習得

❸ 日本言語学会，日本語教育学会，大学英語教育学会，日本英語学会，全国語学教育学会，日本認知科学会，日本語教育学会，大学英語教育学会，日本言語学会，日本プラグマティックス学会，Teachers of English to Speakers of Other Languages，全国英語教育学会（中部会員），中部地区英語教育学会，愛知教育大学国際教育学会，愛知教育大学英語英文学会，国立大学留学生指導研究協議会他

❹ 日本語Ⅰ，Ⅱ，Ⅴ（１年），日本語Ⅲ，Ⅳ，Ⅵ（２年），日本語教育評価法（３年），日本語補講　中級，上級（全学留学生），英語科教育特論Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺ 科学研究費補助金助成研究：

「中間言語発達における形式と機能のマッピングに関する研究」平成15年度～平成17年度文部省科学研究費補助金/基盤研究(Ｃ)(２)

研究論文：

１）Verifying the “Transfer to Nowhere” Principle,「愛知教育大学研究報告（人文・社会科学編）第54号」2005

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

2）米国における教育実習プログラムの成果と充実の方策，愛知教育大学教育実践センター紀要第８号」2005

3）日本語科目における総合的日本語運用能力の育成への取り組み，「愛知教育大学共通科目研究交流誌教養と教育第５号」2005

研究発表：

1）中国語を母語とする日本語学習者の空間表現「上・下・中」と助数詞の過剰使用，日本認知科学会第21回大会，2004.８　於日本科学未来館

❻ 国際交流委員会委員

❼ 「第二言語としての日本語の習得研究」編集委員

北野　浩章　Kitano, Hiroaki　　助教授　日本語教育講座　　文学修士

❶ 言語学（日本語学，フィリピン言語学，談話研究，言語類型論）

❸ 日本言語学会，Linguistic Society of America，Association for Linguistic Typology，International Pragmatics Association，日本認知言語学会

❹ 『異文化コミュニケーション論』（１年），『総合演習Ⅱ』（４年），『情報教育入門Ⅱ』（１年），『音声学』（２年），『言語文化教育特論』（大学院）

❺ ⑴　カパンパンガン語の記述研究

⑵　日本語の談話（特に話し言葉）をもとにした文法研究

論文：

「カパンパンガン語と日本語の他動構文」佐藤滋・堀江薫・中村渉編『対照言語学の新展開』ひつじ書房（2004年７月）

❻ 国際交流委員会委員（常任，『留学生通信』編集部会委員（前期），国際交流検討部会委員（後期）），教育実地研究専門委員会委員（基礎実習・応用実習（愛知教育大学附属高校担当）コーディネーター代表，インターンシップ関係部会），教員選考委員会委員（助教授昇任人事）

❼ 名古屋市民大学・大学連携講座『身近にいる外国人とのコミュニケーション』の「アジアと中南米の文化」を担当（2004年８月21日）

土岐留美江　Toki, Rumie　　助教授　日本語教育講座　　修士（文学）

❶ 日本語学（日本語史）

❸ 日本語学会，日本語文法学会，社会言語科学会，計量国語学会，全国大学国語国文学会，東京都立大学国語国文学会，名古屋言語研究会，関東日本語談話会

❹ 日本語学と日本語教育（１年），日本語学概説（２年），日本語学演習Ⅰ（２年），日本語学演習Ⅱ（２年），日本語学演習Ⅲ（３年），日本語学研究Ⅲ（３年），日本語学史（３年），日本語教育研究Ⅳ（４年），言語文化史特論（大学院）

授業については，知識の伝授だけにとどまらず，学生の自主的思考力や分析力を高めることができるような，真の大学教育にふさわしい教育を目指したいと考えている。授業中，及び休み時間やオフィス・アワーを通して，学生から伝えられる声を踏まえ，より充実した教育内容となるよう，毎年，いろいろな面で修正を加え，今後も努力を重ねたい。

また，ゼミ指導や学生の生活相談については，学生が相談しやすい雰囲気作りに努め，学生の現状を的確に把握して，きめこまやかな対応が出来るように心がけたい。

❺ 現在の研究テーマ：

日本語モダリティの通事的研究。特に意志表現に関する文末諸形式の分析。

今後の研究計画：

近代日本語の分析的文末表現形式の形成過程を分析し，古代日本語の様相とも比較しつつ，現代日本語のモダリティ体系の成立過程を明らかにする。

口頭発表：

平安時代の動詞連体形終止文（第18回名古屋言語研究会　於名古屋大学2004.11）

❻ 時間割編成専門委員会委員

義永美央子　Yoshinaga, Mioko　　助手　　日本語教育講座　博士（言語文化学）

❶ 日本語教育学，社会言語学，相互行為分析，会話分析，第二言語習得研究

❸ 日本語教育学会，社会言語科学会，全国語学教育学会，愛知教育大学国際教育学会，大阪大学言語文化学会

❹ 国際社会と日本・展開１（共通科目，２年），日本語教育学概説Ⅱ（２年），日本語教育教材研究（２年），異文化理解教育論（３年），日本語教育実習（３年），日本語補講中級ＩＡ・ＩＢ（留学生）

主として日本語教育学分野の授業を担当し，教育実践の基礎となる幅広い知識と問題意識の涵養を目指している。いずれの授業においても，学生自身による発表やグループでのディスカッション，ワークショップといった参加型学習，協同学習の手法を取り入れ，授業で扱われる話題を学生自身の問題として再認識することを促した。今後は特に，大人数クラスで学生個々の主体的な授業参加を促進する方法について工夫を重ねていきたいと考えている。

❺ 現在の研究テーマ：

⑴　日本語接触場面における相互行為の実証的研究

⑵　言語教育や言語研究における基本的概念の理論的再検討

⑶　社会文化的アプローチに基づいた言語教育実践の開発

論文：

「日本語のフォリナー・ライティングにおける社会言語的調整―ネイティブ・ライティングとの比較及び調整のメカニズム―」英語学論説資料第36号 論説資料保存会（『言語文化研究』28号より転載）2004年６月

著書：

『文化と歴史の中の学習と学習者―日本語教育における社会文化的パースペクティブ』（共著，凡人社，印刷中）

❻ 就職支援教員

❼ 大学連携講座「身近にいる外国人とのコミュニケーション」講師（2004年８月，於名古屋市生涯学習推進センター）

日本語教育学会学会誌『日本語教育』査読協力者（2004年１月現在）

社会科教育

沼田　隆　Numata, Takashi　教授　社会科教育講座　文学修士

❶ ドイツ実在哲学，宗教学
❸ 日本宗教学会，日本ヤスパース協会
❹ 比較文化論Ⅱ（１年），西洋思想史Ⅰ（２年），西洋思想史Ⅱ（２年），ヨーロッパ思想演習Ⅰ（３年），現代ヨーロッパ思想論（３年），西洋宗教思想（３年），ヨーロッパ思想演習Ⅱ（４年）
❺ 既存の哲学・宗教・科学の思想の批判的検討による整合的な生命存在論の構築。
・業績リスト：『生の意味』（三恵社，2004年）
❻・就職委員

佐藤　彰　Satoh, Akira　教授　社会科教育講座　工学博士

❶ 建築学，専門分野：建築史学，関連分野：歴史学，美術史学，技術史等
❷ 建築史学会賞（1997年）
❸ 日本建築学会（論文査読委員，東海支部歴史意匠部会委員），建築史学会（常議員，学会賞選考委員）
❹ イギリス社会史特論（３年），欧米生活文化購読Ⅰ（２年），欧米生活文化購読Ⅱ（３年），欧米生活文化購読Ⅲ（３年），英米文化演習Ⅰ（４年），英米文化演習Ⅱ（４年），国際社会と文化展開２〈英米の社会と文化〉（２年），英語Ⅲ（２年），英語Ⅳ（２年），英米文化史特論Ⅰ（大学院），英米文化史特論Ⅱ（大学院）
　主要には，英米文化史を中心に授業を行っている。適切なテキストの選択，視覚資料の提示に常々つとめている。学生全員から積極的な受講態度を引き出すのは容易ならぬことである。たゆまず努力を重ねたい。
❺ 19世紀建築史，都市史，建築と意識の関わり
上記のテーマの研究を行っており，目下それぞれについて発表を準備中。

目黒　克彦　Meguro, Katsuhiko　教授　社会科教育講座　文学修士

❶ 東洋史，専門分野：中国近代史，関連分野：中国近世史
❸ 東洋史研究会，中国文史哲研究会，愛知教育大学歴史学会（会長）
❹ 主題科目「平和と人権」（１年），外国史概説Ⅱ（３年），東洋史特論（３年），中国近代史特論Ⅰ・Ⅱ（大学院），中国近代史特論Ⅰ（夜間）
・主題科目は，学生グループの掲げた追究課題である「女性自衛官から見る男女の職業差別」というテーマについて，その追究・調査の方法や取材対象である陸上自衛隊豊川駐屯地への訪問取材のあり方等について指導・助言を与え，女性自衛官の在り方，自衛隊の中における女性の位置や役割と，性差による差別の有無等々の問題について，更に現代における自衛隊の存在意義について，憲法との関係も含めて，他の参考文献等も参照しつつ，追究を深めるように指導した。
❺・近代中国におけるアヘン問題：
　1858年にイギリスとの間で締結された「天津条約」に付随する「中英通商章程」により，鴉片貿易の合法化が規定され，以後外国アヘンの合法的な輸入と国産アヘンの

生産販売が為され，中国にはアヘンの蔓延・氾濫する状況が現れ，中国人民の健康問題はもとより，政治・経済・財政・外交・社会等の各方面に大きな影響を及ぼすことになる。こうした事態を解決する運動として，「禁煙運動」が展開され，清朝の最末期段階には一定の成果を収めたと評価されている。この全国的に展開された「禁煙運動」の実際の展開状況を，国産アヘン生産の中心的な地域であった中国西南部の四川・雲南・貴州等の省を対象に，その実状の検証とその意義について検討する。

❻ 附属養護学校長

❼ 刈谷市教育委員会　就学指導委員会専門委員，財団法人大幸財団　教育実践助成選考委員会委員

渡辺　和靖　Watanabe, Kazuyasu　　教授　　社会科教育講座　　文学修士

❶ 日本思想史，日本史，日本文学

❷ 『幻影城』新人賞・評論部門（1978年12月）

❸ 日本思想史学会，日本文芸研究会（委員）

❹ 日本倫理思想史特論Ⅰ，Ⅱ（大学院），宗教哲学演習（４年），宗教倫理演習（４年），倫理学原書講読（４年），哲学演習Ａ（３年），哲学演習Ｂ（３年），総合演習（３年），哲学史概説Ⅰ（２年），倫理学基礎演習（２年），専門教育入門Ａ，Ｂ（１年）

授業においては，近現代の文学作品をとりあげ，それを音読させることによって，内容の思想的な理解のみならず，日本語のリズムの味わいなどにもできるだけ触れることができるように工夫している。

❺ 現在の研究テーマ：

本年度は専門論文に加えて，大学における哲学，倫理学の授業はどのようにあるべきかという大学研究所に関する論文を執筆した。この後とも，こうした大学教育研究所に関する論文を制作していきたい。

業績リスト：

「渡辺和靖氏に聞く『保田與重郎研究』1930年代の時代精神　保田與重郎の思想形成を跡づける」『図書新聞』2004年７月３日（インタヴュー）

「Ⅳ　近現代の思想・概説」「第22章　都市と大衆の思想」『概説　日本思想史』ミネルヴァ書房　2005年４月

「萩原朔太郎「東京遊行詩篇」考」『愛知教育大学研究報告』2005年３月

「萩原朔太郎研究補遺Ⅱ」『哲学と教育』2005年３月

「音読による授業構成の試み―樋口一葉を例に」『教養と教育』（愛知教育大学共通科目委員会）2005年３月

❻ 教育研究評議会評議員

❼ 十六銀行（岐阜市）市民講座「くるる」講師，2004年８月，10～12月，2005年１～３，計11回

渋谷　克美　Shibuya, Katsumi　　教授　　社会科教育講座　　文学博士

❶ 中世哲学

❸ 中世哲学会（委員），日本哲学会，中部哲学会

❹ 哲学史演習，哲学演習

❺ オッカムの哲学，論理学の研究

著書：

オッカム，大論理学研究，創文社，1997

オッカム，大論理学註解Ⅰ，創文社，1999

オッカム，大論理学註解Ⅱ，創文社，2000

オッカム，大論理学註解Ⅲ，創文社，2001

オッカム，大論理学註解Ⅴ，創文社，2003

オッカム，スコトゥス「個体化の理論」への批判，知泉書館，2004

❻ 哲学専攻代表

❼ 名古屋大学文学部研究論集アドバイザリーボード委員

大澤　秀介　Osawa, Hidesuke　　教授　　社会科教育講座　　文学修士

❶ 哲学，専門分野：現代英米哲学，関連分野：政治哲学（多文化主義研究）

❸ 日本哲学会，日本科学哲学会，日本科学基礎論学会

❹ 比較文化論Ⅱ（1年），哲学史概説Ⅱ（2年），アメリカ文化史（2年），哲学の諸問題（3年），インターネットと文化（3年），哲学演習C（3年），英米思想演習Ⅰ（4年），英米思想演習Ⅱ（4年），英米思想演習（大学院）

私の専門は現代英米哲学であるが，授業においては，欧米文化の背景となる欧米思想史に重点を置いている（哲学史概説Ⅱ・アメリカ文化史）。これは複雑な問題であるが，欧米文化，さらには現代世界の理解にとっては欠くことができない前提的な知識である。本年は特にパソコンを利用して，ビジュアルに説明することを心がけた。また「哲学の諸問題」においては現代英米哲学に最も大きな影響を与えているウィトゲンシュタインの言語哲学を，特にブルームズベリー・グループとの関係を中心に講義した。また「英米思想演習Ⅰ（4年）」，「英米思想演習Ⅱ（4年）」においては，多文化主義研究に力を入れて，学生の卒業研究を指導した。「英米思想演習（大学院）」においては，未開拓の分野であるイギリス19世紀の宗教文化史の基礎的文献購読に力を入れた。「インターネットと文化」においては，インターネットがもたらした現代世界の文化的変容について学生とともに研究した。また「比較文化論Ⅱ」においては，明治時代初期の日本文化に対する英米文化の影響を英米の思想という観点で講義した。

❺ 現在の研究テーマは，アメリカ19世紀の哲学者，チャールズ・S・パースの哲学の理解と，それを梃子とした，現代分析哲学への根本的な批判である。研究スタイルとしては，CD-ROM化されたパースの旧著作集を基本として，6巻まで刊行されたパースのクロノロジカル・エディションその他のパース・テキスト，及びアメリカの哲学データベースにおいて検索されたパースに対する二次文献，現代分析哲学，特に心の哲学を中心とした雑誌論文，などを精読するという個人研究が中心であるが，中部地方に在住する現代哲学研究者との共同討議において，現代哲学の諸論点をパース的な視角から批判するというのも私の研究にとっては非常に有益なものである。この研究はまだ糸口についたばかりのこともあり，それほど多くの成果は上がっていない。

著書：『シリーズ　心の哲学Ⅰ　人間篇』（共著），勁草書房，2004年

❻ 大学改革推進委員会委員

舩尾日出志　Funao, Hideshi　　教授　　社会科教育講座　　教育学修士

❶ 教科教育，教育哲学

❸ 日本教育学会，日本社会科教育学会

❹ 国際理解教育概論（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），平和と人権セミナー（３年），社会科教育Ａ（４年），宗教哲学演習Ａ（４年），宗教倫理学演習Ａ（４年），宗教哲学演習Ｂ（４年），宗教倫理学演習Ｂ（４年），総合演習Ⅱ（４年），社会科授業研究Ⅰ（大学院），社会科教育特論Ⅳ（大学院），社会科授業研究Ⅱ（大学院），社会科教育特論Ⅴ（大学院）

そのほかに基礎実習の引率教員を務めた。

日々授業について反省し，少しでも良い授業を心がけている。たとえば学生が「欠席して損をした」と思えるような授業をしたいと思っている。しかし現実にはそのような状況にはほど遠いことを自覚させられる毎日である。

そもそも授業は学生のためのもの。教室のなかで教員がもっとも張り切り，授業が終われば教員が一番成長しているようでは本末転倒である。そこで受講生が数十名になるような講義の場合でも学生が主役になるような授業を心がけている。もちろん多人数授業の場合，学生とのコミュニケーションは途絶えがちであり，すべての学生から意見表明を求めることも難しい。そこで最近では頻繁にＥメールによる簡単なレポート提出を要求している。

❺・目下の研究関心：

徹底的学校改革者同盟の教育思想と活動，東ドイツの教育哲学

上記のほかに，現在は優秀な若手同僚や卒業生たちとともにドイツにおいて最近出版されたシラーに関する研究書の翻訳刊行に向けて取り組んでいる。

・論文：

「S. カヴェラウの社会科教育論序説―1924年の「歴史教授のための国際大会」から―」愛知教育大学教育実践総合センター紀要　第８号　2005年２月

「ヨヘン・フーンの歴史教授学―歴史とは何かを問うことは重要である―」（共著）愛知教育大学教育実践総合センター紀要　第８号　2005年２月

「精神分析的観点からみた子ども教育―アンナ・フロイトが1932年に語ったこと―」（共著）愛知教育大学研究報告　第五十四輯　教育科学編　2005年３月

❻ 大学附属共同研究会，社会部会副部会長，６年一貫具現化専門員

❼ 家庭教育企画委員（愛知県教育委員会生涯学習課），附属高等学校研究会共同研究者，三河教育研究会社会部会常任講師，子育て支援・乳幼児発達についての講師（豊橋市教育委員会社会教育課），消費生活講座講師（尾西市びさい消費生活学校）

見崎　恵子　Misaki, Keiko　　教授　　社会科教育講座　　経済学修士

❶ フランス社会経済史，女性史，ジェンダー問題

❸ 社会経済史学会，比較家族史学会，日本西洋史学会，日仏女性研究学会，日本風俗史学会

❹ 平和と人権（女性と人権）（１年），ジェンダーと文化（２年），比較女性史，比較女性

史研究（３年），西洋経済史（３年），総合科目（Ⅰ）（３年），欧米社会史演習（Ⅰ），（Ⅱ）（４年），西洋社会史特論（Ⅰ），（Ⅱ）（大学院），比較生活史特論（大学院）

ジェンダーの視点による歴史及び社会・文化の考察を軸に授業を行っている。「常識」とされてきた歴史像，文化及び社会状況を，マイノリティの側から問い直すための観点や方法を受講生が身に付けてほしいと考え，できるだけ身近な素材，映像や絵画資料等を用いて，受講生自身が考え，発言できるように工夫している。しかし，問題提起型授業が効果をあげるためには，基礎的な知識や研究の方法等の訓練も必要であり，この点での問題が残っている。また参加形式では，集団の作り方や議論への介入方法に，教員側のもう一工夫が必要であることを痛感している

大学院の授業は，専門の異なる院生が集まるため，授業内容や方法でいつも困難を抱えがちであり，今後はもう少し専門重視の授業を検討したい。

❺ 研究テーマ：第三共和政フランスにおける社会変革思想とフェミニズム

論文：

「S. フォール『アナキズム事典』とM. ペルティエ～20世紀初頭フランスにおけるアナキズムとフェミニズムの接点をめぐって～」『愛知教育大学研究報告』第54輯（人文・社会科学編）2005.3

科学研究費：

科研基礎研究Ｃ分野「ジェンダー」（代表：水田珠枝）「20世紀初頭のラディカル派フェミニズムの比較研究」において研究を進行

上記以外に以前からの継続的研究交流として「食と文化フォーラム」（味の素食の文化センター）のメンバーとして，研究会への参加，雑誌への小文掲載等を行った。

❻ 研究評議会，及びそれとの関係で学生生活支援委員会

西宮　秀紀　Nishimiya, Hideki　　教授　　社会科教育講座　　博士（文学）

❶ 歴史学，専門分野：日本古代史，関連分野：地域史・宗教史

❸ 日本史研究会，大阪歴史学会，続日本紀研究会，木簡学会，祭祀考古学会，延喜式研究会，古代学研究会，正倉院文書研究会，条里制・古代都市研究会，出雲古代史研究会，名古屋古代史研究会ほか

❹・専門教育入門（１年），基礎実習（１年），日本史概説（２年），日本の社会と文化（３年），日本史書講読ⅡＡ・ⅡＢ（３年），総合演習Ⅰ（３年），日本古代史特論Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

・教育活動であるが，専門教育について少し記しておきたい。日本史概説は社会科の学生が対象の講義である。テキストを使用しているが，最新の概説を試みるようにしている。方法としては，最新の学説の話や，新しく発掘された遺跡や遺物の話も，できれば次週位には新聞記事などを手がかりに解説を行っている。現地説明会に参加して確認できればよいのだが，残念ながら時間的・経済的な余裕がない。ただ，年何回かは直接現場を見せていただいており，その時はなるべくスライド写真を撮り，講義に活用している。百聞は一見に如かず，で学生の評判はよい。日本史書講読は史料読解法の伝授を目的としている。基本的には古代史料読解の基本訓練であり，１年たつとほぼ六国史は読めるようになる。ただ，それだけでは学界の最前線の卒業研究を書いてもらえないので，史学専修の自主的制度として，３年生の前期（後期から本格化）から，卒業研究を書きたい学生に対する自主ゼミを開いている。私の古代史ゼミではこれに４年生も参加し，木曜日の３時から夜の８時位まで，報告と討論を行っている。そして，４年生で本格的に

日本古代史で卒業研究を書きたい学生に対しては，卒業研究ゼミを別に開き指導を行っている。また，４年の前期にはさらに史料読解を深めるために，史書講読の自主ゼミを開催している。以上のことは，正規の授業ではないが，学生の空き時間と私の空き時間を利用して行っている。正規の講義・演習だけでは，とても学界の最前線の卒業研究が作成できないからである。小学校課程の学生に対しては専門教育は必要ないという議論もあるが，それは大きな間違いで，広く浅く学んだことは結局役にたたないと思われる。総合学習にせよ，一つ学問の最前線を知るすべを体得しないと，現場で自信をもち応用がきかないと思われる。また，春と秋には学生と一緒に飛鳥・奈良などの古代の遺跡や寺社めぐりを行い，生きた教材を前に，それらの見方を教授し，見聞を広めさせている。また，何泊かすることによって，学生との交流を深めている。以上の自主ゼミや旅行等の準備負担は大きいが，学生の知的成長こそ教育の最大目的の一つと考える私にとって，赴任以来の大切な時間である。総合演習は社会科の学生として，総合学習に直面したとき，自分たちの郷土・地域をどのように歴史素材として扱えばよいか，また博物館・遺跡の利用法などを伝授することを目的としている。大学院では，原史料の写真版などを使用しさらに高度な史料批判の方法を伝授している。

❺・現在の研究テーマは大きく，⑴古代国家と神祇祭祀及び官僚制の研究，⑵古代尾張・参河国研究，⑶は古代伊勢神宮の研究の三つである。⑴については博士論文を公刊し，その後も，さらに研究を深化させつつある。⑵については愛知県史や安城市史で，史料収集を共同で行っている。安城市史の資料編を刊行することができた。⑶については三重県史で，史料収集を共同で行っており，2005年度の公刊予定である。

・『律令国家と神祇祭祀制度の研究』，塙書房，2004年11月

論文：

・『日本後紀』に見える幣・幣帛記事について―奉幣制度論Ⅱ―（『続日本紀の諸相』所収，2004年10月）

・共著：

『新編　安城市史５　資料編古代・中世』，安城市，2004年５月

❻ 社会科専攻代表，史学専修代表

❼・愛知県史編纂委員会調査執筆委員，三重県史編纂専門委員，安城市史編集委員会編集委員（古代中世部会長），蒲郡市史編纂委員（監修），斎宮歴史博物館専門委員

前田　勉　Maeda, Tsutomu　教授　社会科教育講座　博士（文学）

❶ 日本思想史

❷ 岡崎義恵学術研究奨励賞（1994年６月）

❸ 日本思想史学会（評議員），日本史研究会，中国社会文化学会，日本文芸研究会

❹ 日本思想概説（２年），日本思想史演習Ⅰ・Ⅱ（３年），外来思想摂取史論（３年），倫理学演習Ｂ（３年），日本文化論演習Ⅰ・Ⅱ（４年），現代日本の社会と文化（２年），日本文化論特論Ⅱ・Ⅲ（大学院）

ここ数年，日本思想概説・外来思想摂取史論のような講義には，教室いっぱいの受講生が集まるのに，演習の受講生は数人しかいない。ここには，カリキュラム上の問題点があるが，主体的な参加が要求される演習を避けて，受身的な講義に流れる学生諸君の

「悪しき」傾向があることは明らかである。自己教育できるような学生を育てたいと願っている私としては，少し拍子抜けの感じがしている。

❺・現在の研究テーマ：近世日本思想史，ナショナリズム

・業績リスト：

著書：

・『新編日本思想史研究―村岡典嗣論文選―』（東洋文庫726，平凡社，2004年）

論文：

・「近世神道と国学における系譜尊重の意味」（『神道宗教』194号，2004年）

・「蘭学者の国際社会イメージ―世界地理書を中心に―」（『愛知教育大学研究報告』54輯，2005年）

・「渡辺崋山の「志」と西洋認識の特質」（『日本文化論叢』13号，2005年）

口頭発表：

・「近世日本の封建・郡県論のふたつの論点―日本歴史と世界地理についての認識―」（国際日本文化研究センター共同研究会，2004年５月22日）

・「近世日本の兵学と朱子学」（国際日本文化研究センター共同研究会，2004年８月28日）

・「蘭学者の国際社会イメージ―世界地理書を中心に―」（日本思想史学会大会，京都大学，2004年10月31日）

・学術・研究交流等：国際日本文化研究センター共同研究員

寺本　潔　Teramoto, Kiyoshi　教授　社会科教育講座　教育学修士

❶ 社会科教育学，人文地理学

❷ 第二回中部開発センター懸賞論文（2001年２月）優秀賞

❸ 日本地理教育学会（評議員），日本地理学会（代議員），日本生活科総合的学習教育学会（理事）

❹ 社会科研究ＡⅡ（１年），社会科学入門（１年），社会科教育Ａ（２年）（３年），地理歴史科教育法（４年），総合演習Ⅱ（４年），地理学研究法（４年），地理学論文演習（４年），環境地理学Ⅱ（３年），地理学野外実験Ⅱ（２年），社会科教育特論Ⅱ（大学院），社会科教育演習Ⅲ（大学院）

社会科の基礎基本を大切にしたい。講義演習実験とさまざまな形態の持ち味を生かして教材開発に取り組んでいる。昨年は学内環境を生かした社会科指導法も試みた。今後も地図，写真，野外，実物資料などを駆使し，実感あふれる授業をつくっていきたい。地理学野外実験では沖縄県を題材に「暖かい土地の暮らし」の教材開発や地域環境教育の現場を見学調査している。

❺ 現在の研究テーマ：

子どもの地図嫌いを生じる原因究明，社会科授業における地図の活用法，学校と地域を結ぶ総合的学習の実践的研究，子どもの防犯リテラシー研究

研究業績：

「子どもと住民の防犯リテラシーを高める学校と地域連携型事業の試み」愛知県企画振興部学生提案型地域づくり協働支援事業　2005年３月

科学研究費：

基盤研究(C)「地図嫌いの要因解明と地図教材の開発」（上越教育大学志村喬代表）研究分担者

「こども環境学会」設立準備委員

❻ 附属名古屋小学校授業研究会助言者，学部　地理学専修４年担任

❼ 国立教育政策研究所教育課程実施状況調査委員，ちゅうでん教育振興財団理事
文部科学省教育研究開発実践学校指導（愛知県一色長小中学校）
その他，教え子を中心に学校現場からの相談助言に当たっている。

黒川　知文　Kurokawa, Tomobumi　助教授　社会科教育講座　博士（文学）

❶ 西洋近代史，宗教史，キリスト教神学

❷ 大畠記念学術奨励賞，日本宗教社会学研究会（1994年４月）

❸ 日本宗教学会（評議員），日本西洋史学会（懇談員），歴史学研究会，比較文明学会，ロシア史研究会，キリスト教史学会，日本福音主義神学会，キリスト教文学会

❹ 専門教育入門（１年），外国史書講読Ⅰ，Ⅱ（２年），外国史概説Ⅰ（２年），西洋史特論Ⅰ，Ⅱ（３年），西洋近代史特論Ⅰ，Ⅱ（大学院），西洋近代史演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

歴史的事件を学生が実感するように，できる限り同時代資料である歴史画，地図，一次文献などを紹介している。さらに，歴史的事件に関するテレビ特集番組，外国映画も上映している。授業にはレジュメを配布して，それに付け加える形式で講義を行っている。出席は毎回とり，出席カードの裏に質問を書いてもらい，次回の授業で答えるようにしている。授業の後にも個別に質問を受けている。

歴史とは暗記の学問ではなくて時間的流れの中で歴史的事件の本質を考察する学問であることを授業で教えたい。また，歴史は繰り返さないが，同じパターンは起こり売る。従って歴史を学ぶことにより，今日起きている問題も，将来起こりうる問題にも対処できる。そういう知識も授業で教えたい。

❺ 現在の研究テーマ：

・ユダヤ史の研究

「ロシアとユダヤ」に関する研究を継続し，新しい史料に基づき，さらに民衆の生活と意識構造の観点から考察する　「さまよえるユダヤ人伝説」の分析

・宗教と民族紛争に関する研究

宗教と民族主義との関わり合いの観点から宗教戦争の本質を希求し，さらに宗教紛争や民族紛争と比較して考察する

・世界史上における宗教運動の研究

ウェーバー宗教社会学を吟味して，宗教運動に関する普遍的理論を構築する

業績リスト：

・論文：

「宗教戦争の本質構造」『宗教研究』（日本宗教学会）2004年４月
「学際的な研究発表の場」『公共的知識人』（公共哲学研究会）第148号　2004年４月
「クリスチャンは政治にどうかかわるか」『幸いな人』2004年６月
「中間時代における福音の準備」『無教会研究』第７号　2004年９月

・口頭発表：

「RELIGIOUS WARS AND RELIGIOUS CONFLICTS」19TH INTERNATIONAL ASSOCIATION OF HISTORY OF RELIGION 2005 MARCH（第19回国際宗教学

宗教史学会世界大会）

❻ 社会科教育講座代表　就職委員会委員

❼ 公開講座「マタイ福音書の研究」聖書講座，講義「一神教について」附属高校アカデミック・クエスト，特別講義「西欧キリスト教史」無教会研修所，特別講義「中間時代の歴史」東京神学校

❽ 日本ペンクラブ会員として小説の創作に従事

松島　周一　Matsushima, Shuichi　　助教授　社会科教育講座　　文学修士

❶ 日本中世政治史

❸ 歴史学研究会，日本史研究会，中世史研究会（委員）など

❹ 人文科学入門（１年），日本社会形成史論（２年・４年），日本史書講読ＩＡ・Ｂ（２年），日本史特論Ⅰ・Ⅱ（３年），日本対外交流史演習Ⅰ（３年），日本対外交流史論（３年），総合演習Ⅰ（３年），日本文化論演習Ⅰ・Ⅱ（４年）

講義においては，最新の研究成果に依拠しつつ，平明に講述することの工夫がさらに必要となる。多人数の講義では，どうしても一方的に説明する形になりがちなので，史料をプリントで配布したり，板書を多めにするなどの対応をとっている。また，演習では，教員免許をとろうとする学生に対しては，単なる専門ではなく，社会という教科の内容への認識を深める機会としてもらうとともに，自ら考え，調べたことをどのように分かりやすく且つ興味深く説明するかという点にも留意して指導している。教員免許をとらない学生に対しては市民的教養を深め，日本社会への理解を磨くような形での指導を心がけている。どちらの場合にも，基礎的な知識や技法の修得と，それらを応用した自力での学習をどのように組み合わせて，より効果的な指導を行うか，毎年，学生の様子を見ながら，試行錯誤の連続である。

❺・現在の研究テーマ：

①中世の貴族社会と武家社会，②平家物語と内乱史，③愛知県の中世史　など

・業績リスト：

著書：

『新編安城市史　資料編　古代中世』（共編著），安城市，2004年

『愛知県史　資料編９　中世２』（共編著），愛知県，2005年

論文：

「元弘の乱と三河」（『日本文化論叢』13，2005年）

科学研究費：

基盤研究(C)(2)「尾張・三河武士における歴史再構築過程の研究」（研究代表者・南山大学青山幹哉助教授）研究分担

❻ 学部入学試験部会委員

❼ 愛知県史（中世史部会）調査・執筆委員，安城市史（古代中世部会）編集委員

土屋　武志　Tsuchiya, Takeshi　　助教授　社会科教育講座　　教育学修士

❶ 社会科教育学，教科教育学，歴史教育学，歴史学，総合的学習

❸・日本社会科教育学会（評議員），全国社会科教育学会（理事），日本生活科・総合的学習教育学会（理事），日本グローバル教育学会（理事），日本教科教育学会，歴史学会，歴史学研究会，日本公民教育学会，日本学校教育学会

❹ 社会科研究ＡⅡ（１年），社会科教育Ｂ・社会科教育ＣⅠ（２年），総合演習Ⅱ・卒業研究（４年），平和と人権入門（１年），社会科教育特論Ⅰ（大学院），社会科教育演習Ⅱ（大学院）

受講者の主体的な参加を前提としたワークショップ型の授業をおこなっている。

❺・現在の研究テーマ：

社会科教育及び総合的学習の時間に関する評価基準とその方法に関する研究。

歴史教育における思考力育成型の教材開発についての研究。

前者は，国立教育政策研究所と継続的に研究している。後者は，中学校社会科教科書の改訂作業（帝国書院）にも携わる形で研究している。

・業績リスト（著書，論文，口頭発表，作品，演奏発表など）：

著書：

教員養成系大学における歴史教育―「東アジア史」教育の実践的提案とその意義―，越境する歴史教育（共著・加藤章編），教育史料出版会，2004

自国史教育と世界史教育，21世紀の歴史認識と国際理解（共著・二谷貞夫編），明石書店，2004

・科学研究費補助金など研究助成の受領状況：

日韓における思考力育成型共通歴史教科書の開発とその開発システムに関する研究，180万円（萌芽研究，代表者）

・学術・研究交流等：

インドネシア・スラバヤ大学社会科学部との共同研究（研究交流・2004年６月，11月）

インドネシア・スラバヤ大学との学術交流協定締結（学術交流・2005年３月）

❻・大学改革推進委員会６年一貫教員養成具現化専門委員・共通科目コーディネータ（平和と人権）・時間割編成委員・大学院社会科教育専攻代表

❼・愛知県教育委員会義務教育問題研究協議会委員及び同専門部会長・国立教育政策研究所高等学校評価基準作成委員会日本史部会長・豊明市史総集編編纂部会長・蒲郡市史編纂委員会監修委員・愛知県学校教育活動へのボランティア導入推進事業連絡協議会会長・知立市教育委員会二学期制協議会座長

・現職教育助言及び講演（附属岡崎小学校・愛知県教職員組合教育研究集会・岡崎市現職教育研究集会・知立市現職教育研究集会・中島郡教育研究集会，小牧市立岩崎中学校，一色町立一色南部小学校，知立市立来迎寺小学校，豊田市立伊保小学校・知立市立知立南中学校・尾張旭市立西中学校・津具村立津具小学校・浜松市教育委員会５年経過教員研修会・愛知県教育委員会社会科５年経過研修会等）

・岡崎市生涯学習サークル「学びあい岡崎」・岡崎市社会科サークル「セーリング」顧問

❽ 岡崎市・愛知教育大学国際理解セミナープロジェクトマネージャー（岡崎市との地域連携・共催事業）

愛知教育大学地域連携フォーラムプロジェクトコーディネータ（2004年11月）

吉田健太郎　Yoshida, Kentaro　　助教授　社会科教育講座　　博士（文学）

❶ 哲学，専門分野：西洋近世哲学史，関連分野：倫理学　科学思想史

❸ 日本哲学会，日仏哲学会，中部哲学会，デカルト研究会

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❹ 専門教育入門（１年），哲学基礎演習（２年），社会科教育Ａ（２年），社会科教育Ｂ（２年），倫理思想史概説（３年），倫理学演習Ｃ（３年），環境倫理（３年），宗教哲学演習ＡＢ（４年），宗教倫理学演習ＡＢ（４年），哲学原書講読（４年）

１年生向けの入門講義では，「哲学的思考に親しむ」ことをテーマに授業を展開している。１年生の「哲学」「倫理学」の対するイメージは，高等学校公民科「倫理」の学習である。すなわち特定の哲学者の学説を網羅的に暗記していくというイメージである。まずは，そのイメージを払拭することに努めている。身近な事象に対して「哲学的」に思考することの楽しさを感じ取ってもらうことを授業実践の目標としている。

２～４年の専攻科目では，彼らが将来教壇に立った時のことを想定しながら，理論と実践の橋渡しを心がけている。すぐれた実践にはそれを支える理論が必要なこと，哲学にしても教育実践にしても「人間」に関わることであるから，人間についての哲学的考察は将来の教育活動のすぐれたバックボーンになること，を常に力説している。問題があるとすれば，専攻（専修）科目の必修単位数が減少した影響で，学生の専攻（専修）科目に対する目的意識が以前よりも落ちているという点であろうか。自分の得意分野を深めることは，同時に幅広い教養の取得可能性を含むこと，そしてその逆も言えること，を伝えていきたい。

２年生向けの社会科教育ＡＢは，社会科という教科の目標でもある「求められる公民的資質」について討議していくという形で展開している。どちらかといえば基礎的･理論的な部分に力点を置いて授業を行っている。

❺ ⑴ 西洋近世哲学における「理性」概念の考察及び「自由意志」概念の考察。
⑵ 西洋近世哲学における情念論の系譜の探究。
⑶ 倫理の自然主義的基礎付けの可能性。
⑷ 心身問題。近世哲学のパースペクティブと現代哲学のパースペクティブの比較検討。

論文：

「デカルトの意志決定の自由（arbitrii libertas）論」（愛知教育大学研究報告第54輯 2005年３月）

科学研究費補助金（萌芽研究）：

「デカルト『省察』の原本第二版による翻訳と有機的註解の試み」（研究協力者）

現在の研究テーマは，西洋近世哲学における「情念」と「自由意志」を巡る諸問題である。近世哲学はのちの近代哲学とは異なるパースペクティブで「情念論」というジャンルを築いている。とりわけデカルト・スピノザ・ヒュームの「情念論」での議論を追いながら，「情念」に関する近世的理解の確定を課題としている。この作業は，同時に，現代の心身問題に対して新たなパースペクティブを提供するのではないかと思われる。

❻ 時間割編成専門委員会委員

❼ アカデミック・クエスト講座（科学史）

地域社会システム

梅下　隆芳　Umeshita, Takayoshi　　教授　　地域社会システム講座　経済学修士

❶ 経済学，専門分野：経済政策，費用便益分析，環境経済政策

❸ 日本経済政策学会（理事・本部幹事），日本公共選択学会，日本環境経済・政策学会

❹ 世界経済システム論（１年），国際理解と経済（２年），日本経済論演習Ⅰ・Ⅱ（３年），環境経済学（３年），日本経済論実習Ⅰ・Ⅱ，経済政策論研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

経済学の世界では，一昔前には正しいとされていた理論が今では否定され，逆に否定されていた理論がいま評価されるということはよく生じる。それは実態としての経済環境が大きく変動するからである。従って，教科書の理論のみならず，現実の経済にいかに関心を持たせるかが重要になり，新聞の経済記事などを資料に使っている。

❺ 地球温暖化問題が現在の研究課題。特に，京都議定書で認められた京都柔軟メカニズム（共同実施，排出量取引，クリーン開発メカニズムCDM）がどのように制度設計され，利用されているかを研究している。

「地球温暖化問題と京都メカニズム」『社会科学論集』第42・43合併号　愛知教育大学地域社会システム講座　2005. 3

❻ 地域社会システム講座代表，教育研究評議会評議員，財務委員会委員

近藤　潤三　Kondo, Junzo　　教授　　地域社会システム講座　博士（法学）

❶ ドイツ現代政治，ドイツ政治思想史，比較政治学

❸ ドイツ現代史学会，社会思想史学会，ドイツ現代史研究会，中部ドイツ史研究会

❹ 比較政治学，現代政治史，現代政治論，比較政治研究，国際理解と政治など（学部），政治原論研究，比較政治学演習（大学院）

高等学校での履修と大学入試での選択科目による基礎知識の落差が大きく，ヨーロッパと日本の政治，及びそれらを比較した形で先進国政治の構造や特徴を理解させるのに問題がある。

講義ではプリントを使い，ビデオも利用するが，半期という制約の授業では効果を上げるのに一層の工夫が必要だと感じている。

❺ 現在の研究テーマ：

統一後のドイツ現代政治，ドイツ連邦共和国成立期の政治秩序の形成

論文：

ドイツにおける移民法の成立過程　社会科学論集42・43号　2005年３月　69-131頁

ドイツにおける移民法成立のクロノロジー　社会科学論集　42・43号　2005年３月　409-412頁

研究発表：

現代ドイツのアシール政策　比較家族史学会45回大会　2004年６月６日　専修大学

自著『統一ドイツの政治的展開』を語る　83回中部ドイツ史研究会　2004年６月26日　愛知大学

統一ドイツにおける社会国家の問題状況　84回中部ドイツ史研究会　2004年９月25日　愛知大学

統一ドイツにおける社会国家の問題状況　社会思想史学会　2004年10月10日　早稲田大学

自著を語る　ドイツ現代史研究会　2005年１月23日　京都キャンパスプラザ

❻ 国際文化コース代表

❼ 大阪防衛施設地方審議会委員

阿部　和俊　Abe, Kazutoshi　　教授　　地域社会システム講座　文学博士

❶ 都市地理学

❷ 日本都市学会賞（1994年10月）

❸ 日本地理学会（評議員），日本都市学会（常任理事），経済地理学会（中部幹事），人文地理学会（協議員），フランス地理学会（名誉会員）

❹・地理学特論Ⅰ（３年），地理学実験Ⅰ（１年），地理学基礎演習（２年），地理学論文演習Ⅰ・Ⅱ（３年），地理学論文演習Ⅲ・Ⅳ（４年），地誌概説Ⅰ（２年），人文地理学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）

❺・［『変貌する日本のすがた―地域構造と地域政策』山﨑朗と共著，古今書院，2004］
・［都市景観の変遷とその背景―北九州・東京・名古屋を例として―，CREC vol.147，中部開発センター］
・［Major Cities and the Urban System of Japan from the Standpoint of Large Private Firms' Head and Branch Offices，経済地理学年報，vol.50，no.２，経済地理学会］
・［日本の主要都市間結合の推移とその模式図化の試み，愛知教育大学研究報告　人文・社会科学　第54輯，愛知教育大学］

❼・土岐川庄内川流域委員会委員，安城市史編集委員長，国際連合地域開発センターを支援する会

❽ 日本都市地理学会の創設を提案し活動中

岩崎　公弥　Iwasaki, Kimiya　　教授　　地域社会システム講座　博士（文学）

❶ 地理学，専門分野：歴史地理学，関連分野：地誌学

❷ 日本地理学会研究奨励賞（1986年）

❸ 日本地理学会，人文地理学会，歴史地理学会，地理科学学会（評議員），広島史学研究会，愛知教育大　学地理学会

❹ 専門教育入門Ａ・Ｂ（１年），論文演習Ⅰ・Ⅱ（３年・４年），地理学野外実験Ⅲ（３年），課題研究Ｂ（４年），地誌学特論Ⅲ・Ⅳ（大学院）

2004年度は管理職（学長補佐）を務めている関係で，授業が例年にくらべて少なかった。地理学の専門の授業として，人文地理学，地誌学の講義をするとともに，地理学の基礎的演習や野外実験（巡検）を通して，地理学の基礎的素養と地理的な見方考え方を育成できるよう教育を行っている。地理学基礎Ⅰの授業は高等学校の地歴科の免許用に開設されているものであり，主に地理学・史学・教育学の学生諸君が受講している。野外実験（巡検）は，現地に赴いて実際に観察したり調査をしたりする授業である。最近は飛騨・礪波地方，西伊豆地方，琵琶湖湖東地方などに出かけ，歴史地理的な事象はもとより，地形的に特徴のある事象の観察を行っている。また大学周辺での土地利用調査や景観観察を通して地域の調査法を指導している。大学院教育では地誌を講義・実験を担当している。大学院の受講者は昨年度までは数名の受講であったが，今年度から倍増傾向にある。その他，小学校社会の内容として社会科研究を担当してきた。小学校社会科教育との関連では，最近10年ほど，小学校社会教科書の編修に携わることとなり，その関係から三河部において市町村単位で作製されている社会科副読本の監修を務めている。時々学校現場での研究会などに出向き助言などを行っている。

❺ ⑴　近世綿作の歴史地理学的研究
⑵　英国の地誌的研究

１．地誌叙述に関する一試論―イギリス地誌・自然環境を事例として―　愛知教育大学研究紀要　2004
２．歴史的景観の観察法　CREC　中部開発センター2004-9　vol.148

現在の研究テーマは，わが国近世における綿作の地域的展開状況を歴史地理学的視点から究明することである。わが国の綿作地をいくつかの地域的類型に分け，それぞれについてその地域的・類型的特色を明らかにしていく予定である。すでに，尾張や三河といった東海地域の綿作については，単著としてまとめたので，今後は西日本の瀬戸内や山陰地域の綿作について究明を進めていく必要がある。研究のスタイルは，地方文書に依拠しながら，メソ・スケールとミクロ・スケールの研究を基本としている。地形条件，水利，気候環境などの自然条件を考慮しながら，過去の地域の景観的復原を行うことによって，テーマに迫るという方法を採っている。

最近の関心あるテーマは，地誌である。特にイギリスの地誌について深めていきたいと考えている。地誌は国際理解教育の必要性が高まる中で，今後ますます重要になっていくであろうと思われる。イギリスにはかつて在外研究員として10ヶ月滞在した経験があり，親しみ深い国でもある。イギリスの地誌については，その歴史地理的背景をふまえた地誌叙述を行いたいと考えている。

❻　人文社会科学系学長補佐（2004年４月―）

❼　蒲郡市史監修者，愛知シルバーカレッジ講師，岡崎市教育研究集会中学校社会科助言者，県内複数市町村の小学校社会科副読本の監修

渡邉　雅弘　Watanabe, Masahiro　　教授　　地域社会システム講座　法学修士

❶　政治学，ヨーロッパ政治思想史，洋学史

❸　日本政治学会，日本西洋古典学会

❹　日本国憲法（１年），政治学概論（１年），専門教育入門Ａ（１年），専門教育入門Ｂ（１年），社会科学入門演習Ⅳ（２年），現代政治演習Ⅰ（３年），西洋政治思想（３年），比較政治演習Ⅱ（３年），総合演習Ⅰ（３年），政治学演習（４年），政治文化論研究（大学院），政治思想史演習Ⅰ＆Ⅱ（大学院）

政治学を含めて社会科学は本来，学生には馴染みのない大人の学問であるから，平明な解説に努めても，受け身の学生に理解させるには限界があるので，社会に対する関心を喚起しつつ，学生が強いて背伸びをして，自発的に勉学するようにし向けたい。例えば，数年前，政治学概論を担当した時，試験の答案に，NHK放映の「日曜討論」がとても面白く感じられるようになったという，ある学生の感想が添えられていたことがあった。

❺　エピクロスの政治哲学，A. D. リンゼイの政治思想，西洋古典学の受容史
「友愛」（古賀敬太編『政治概念の歴史的展開』，晃洋書房，2004年）
「日本におけるギリシア学・ローマ学の流入・移植・受容と展開の文献史（七）」社会科学論集（愛知県教育大学社会科学会）42・43合併号

❻　共通科目委員会・研究交流雑誌編集部会長／人文社会科学系評議員会議教育組織代表

青嶋　敏　Aoshima, Satoshi　　教授　地域社会システム講座　法学修士

❶ 法律学，専門分野：民法学，関連分野：法社会学

❷ 日本農業法学会賞（1991年５月）

❸ 日本私法学会，日本法社会学会，日本農業法学会，信託法学会，日本不動産学会，比較家族史学会，中日本入会林野研究会（運営委員）

❹ 社会科学入門・法律学（１年），国際理解と法律（２年），比較法制度論（３年），比較法制度論演習Ⅰ（３年），比較法制度論演習Ⅱ（３年），比較法研究（３年），比較法制度論演習Ⅲ（４年），比較法制度論演習Ⅳ（４年），法社会学演習Ⅰ（大学院），法社会学演習Ⅱ（大学院）

日本の司法制度や訴訟手続に関するテーマを取り上げている「社会科学入門・法律学」と「国際理解と法律」では，授業の一環として，地方裁判所の刑事裁判の傍聴を行っている。大半の受講学生にとって裁判を傍聴するのは初めての体験という事もあり，教室の講義だけでは得られない生きた学習をする機会となっている。裁判員制度が導入されることが決まり，裁判の傍聴という体験型学習の重要性が高まってきているので，これを一層拡充する方向で学習方法や教材の選定等について工夫したい。

❺・現在の研究テーマ：

沖縄における近代土地法の形成，公益法人制度・公益信託制度の研究

・業績リスト：

口頭発表：

浮掛地報償金廃止運動とふたつの沖縄縣土地整理法改正（法）案，「沖縄における近代法の形成と現代における法的諸問題」研究会，沖縄大学，2004年

・研究助成の受領状況：

研究課題：

「沖縄における近代法の形成と現代における法的諸問題」（研究分担者）／（科学研究費補助金基盤研究Ａ(1)）

❻ 情報公開委員会開示・不開示検討専門委員会副委員長

❼ 小坂井町個人情報保護審議会委員

小坂井町情報公開審査会委員

新城設楽地区市町村職員研修協議会平成16年度一般職員中期研修講師（民法）

丹葉中地区町職員研修協議会平成16年度一般職員中期研修講師（民法）

松岡　和人　Matsuoka, Kazuto　　教授　地域社会システム講座　経済学修士

❶ 経済学，専門分野：国際金融論，関連分野：金融論

❸ 日本金融学会，生活経済学会，日本経済政策学会，中部経済問題研究会

❹ 国際社会と日本・世界の諸地域Ａ（１年），専門教育入門Ａ（１年），専門教育入門Ｂ（１年），社会科学入門演習Ⅱ（２年），国際金融論（３年），国際金融論演習Ⅰ（３年），国際金融論演習Ⅱ（３年），総合演習Ⅰ［公民］（３年），国際金融論実習Ⅰ（４年），国際金融論実習Ⅱ（４年）国際金融論演習Ⅰ（大学院），国際金融論演習Ⅱ（大学院）

教育活動の現状と問題点についてはいろいろな機会に述べているが，経済学という分野は常識として誰もが身につけなくてはいけない部分と，そうではない専門的な部分から構成されているため，そのバランスをどうとるかということが常に大きなテーマとなっている。なかでも国際金融論，国際金融論演習Ⅰ，国際金融論演習Ⅱにおいては理論，

歴史，制度，政策などもバランスよく扱う必要があるため，参考文献などの紹介の際配慮している。

また教育学部という性格上，経済学関連の授業を大学で一講義のみ受講するという学生もいるため配慮が必要となる。特に国際社会と日本・世界の諸地域Ａ，専門教育入門Ａ，専門教育入門Ｂ，総合演習Ⅰ［公民］は複数の教官が一講義を担当するため，興味のもてそうなテーマのうち時間数に合ったものを選ぶ必要が出てくる。これらの授業では最新の経済専門誌などから資料を得て，一定の結論を提示できるよう努力している。

次に国際金融論演習Ⅰ，国際金融論演習Ⅱなどの大学院の講義についてであるが，多くの受講生が大学学部時代に経済学の授業をほとんどとっていないため，大学院本来の国際金融論演習の授業をそのまま行うことはむずかしい。したがって一つのテーマについてじっくり考えてもらうことを念頭に資料などを配布している。

❺ ⑴　外国為替理論の展開

⑵　外国為替理論に纏わる通貨の諸問題（通貨統合など）

755－1192年の西ヨーロッパ通貨圏（銀本位制）に関する一考察　「愛教大研報」（人社）第54輯，2005年３月.

現在の研究テーマは広い意味では貨幣論といえる。一つの研究テーマは外国為替理論の展開（歴史的な因果関係）について考察し，各外国為替理論の特徴を探ることである。最近は特に18-19世紀のイギリス及びフランスの貨幣論，為替論争などを扱っている。その時代，ヨーロッパの貨幣論は国境という枠組みを越えて展開していたためイタリア，スウェーデン，スペインなどの貨幣論の研究もある程度行う必要がある。したがって時間のかかる研究テーマとなっている。また文献の入手も大きな仕事となっている。外国為替理論は貨幣論の中においては一部分とはいえこのような状況にある。

一方，貨幣論に関するもう一つの研究テーマである外国為替理論に纏わる通貨の諸問題については，主に通貨統合についての考察である。19世紀の貨幣論では，金本位制と金・銀複本位制のどちらが国際通貨体制として適しているかが問題となっていた。そして19世紀後半には金本位制を主張する国々，金・銀複本位制を主張する国々それぞれが別個の通貨統合を試みることとなった。現在のEUにみられるような通貨統合の精神もこの時代の通貨統合に見出すことができよう。したがって現在のEUとともに19世紀後半の通貨統合に注目している。

❻ 共通科目専門委員会委員

清田　雄治　Kiyota, Yuji　　教授　　地域社会システム講座　法学修士

❶ 憲法，フランスにおける人権保障

❸ 日本公法学会，全国憲法研究会，憲法理論研究会，フランス憲法研究会，中部憲法判例研究会

❹ 日本国憲法，情報教育入門など。2004年度は共通科目日本国憲法のコーディネーターとして，担当教官の協力を得て，日本国憲法の独自授業アンケートを実施した。また，日本国憲法の授業自体については，当者会議や共通教科書作成の起案など，授業改善を進めた。

❺・研究テーマ及び研究計画：

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

「フランスにおける表現（コミュニケーション）の自由」

フランスでは2004年に個人情報保護法が全面改正され，その概要は下記の業績でも紹介・分析した。今年度はとりわけ，フランスの個人情報保護法における「プレスの自由」,「報道の自由」に焦点を当て，個人情報保護の憲法上の位置づけの検討，改正前の旧法における報道に関する諸規定，旧法下での運用を含めた実態，新法における位置づけを実例や議会での審議過程をトレースして分析する計画である。次にその作業を前提に日本の個人情報保護とフランス法との比較法的考察を進めたいと考えている。

なお，個人の研究計画とは別に教育活動にも関わって，共通科目「日本国憲法」の全額共通教科書の執筆・編集作業も本年度研究作業の課題の一つと位置づけている。

・業績

「フランスにおける個人情報保護法の現況」（研究ノート，『社会科学論集第42・43合併号』所収）（単著）

『情報と法　2004年度版情報教育入門Ⅰ』（情報教育入門及び日本国憲法教材，CD－ROM版）（単著）

・科学研究費

科学研究費基盤研究(B)(1)「転換期における市民的安全構築の比較憲法的研究」研究分担者

・その他学術・研究

『社会科学論集』第42・43合併号を編集（編集長）

❻ 組み換えDNA委員会委員

野地　恒有　Noji, Tsuneari　　助教授　地域社会システム講座　博士（文学）

❶ 民俗学・文化人類学，博物館学

❷ 第７回日本民俗学会研究奨励賞（1987年10月）

❸ 日本民俗学会，歴史人類学会，相模民俗学会，山陰民俗学会，静岡県民俗学会

❹・日本民俗文化概説（３年），日本民俗文化誌論（３年），日本民俗文化演習Ⅰ（３年），日本民俗文化演習Ⅱ（３年），日本文化論演習Ⅰ（４年），日本文化論演習Ⅱ（４年），博物館学演習Ⅰ（３年），博物館学演習Ⅱ（３年），博物館実習（４年），民俗学特論（大学院），民俗学演習Ⅰ（大学院），民俗学演習Ⅱ（大学院）

・教養教育及び専門教育において，民俗学という分野からみた日本文化論を幅広くとらえて授業を進めている。その内容は，民俗学の基本的な考え方とその調査法（地域研究法・郷土研究法），民俗学からとらえられる日本・郷土の具体的な伝承的世界の説明である。地域社会の伝統的な産業・行事祭礼における参与観察や聞き取り調査を学生に試みてもらうことにより，日本・郷土の文化を体験的・具体的にとらえることを目標としている。ビデオ映像を活用して，民俗事例を提示して授業を進めている。教員養成課程社会専攻と学芸４課程国際文化コースの博物館学芸員資格取得にかかわる運営と授業を担当している。その授業では，博物館展示の見学や実習をとおして，郷土研究と博物館活動の関係を実践的・具体的に進めることを目標としている。

❺・郷土研究と博物館活動の関係。日本における漁村・島嶼社会の地域研究，とくに現代漁業の漁業技術に関する民俗学的研究。観賞用動植物（改造自然物）の飼育技術・鑑賞の伝統，その中国との比較研究。

・業績リスト：

「随順化する自然―金魚（ナンキン・トサキン）飼育の改造技術―」『日本文化論叢』13号，愛知教育大学日本文化研究室，2005年

「海と生きる」愛知県史編さん委員会編『愛知県史　別編　民俗３三河』愛知県，2005年

「移住地域における民俗文化の空洞化と組成化」小島孝夫編『海の民俗文化―漁撈習俗の伝播に関する実証的研究』明石書店，2005年

・科学研究費補助金：

「観賞用動植物の飼育・栽培の改造技術にみる伝承的特徴に関する民俗学的研究」（基盤研究(c)(2)，代表者：野地恒有，100万円）

・学術・研究交流：

成城大学民俗学研究所・共同研究「漁撈習俗の伝播に関する実証的研究」に参加

愛知大学綜合郷土研究所・共同研究「三河湾東部における人と海の関わりの変遷に関する学際的共同研究」に参加

❻・人文社会科学系ホームページワーキング委員

❼　愛知県史編さん委員会民俗部会調査執筆委員，蒲郡市史編さん事業実行委員会編さん委員監修者

伊藤　貴啓　Ito, Takahiro　　助教授　地域社会システム講座　博士（理学）

❶　人文地理学（経済地理学：農業地理学），ヨーロッパ地誌，地域農業学習

❸　日本地理学会，人文地理学会，経済地理学会，東京地学協会，日本地理教育学会，愛知教育大学地理学会，日本農業市場学会，日蘭学会，Koninkijk Nederlands Aardrijkskundig Genootschap（Royal Dutch Geographical Society），Association for Borderlands Studies

❹　現代日本の社会と表現文化入門（１年），専門教育入門Ｂ（１年），社会科研究Ａ２（１年），地理学実験（２年），地理学演習（３年），地理学基礎Ⅰ（３年），総合演習Ⅰ（３年），地理学野外実験（３年），地理学論文演習Ⅰ～Ⅳ（３・４年），地理学研究法Ⅰ・Ⅱ（４年），人文地理学史及び方法論Ⅰ・Ⅱ（大学院）

このほか，岐阜大学教育学部と筑波大学大学院生命環境科学研究科で集中講義を行った。

教育活動の工夫としては，特定の授業科目で授業毎に学生の授業評価を行いながら，次時以降の授業の改善をはかっている。具体的には，彼ら自身の授業への取り組みと本時の授業評価をそれぞれ３段階で行わせ，その評価平均点を次時冒頭に報告するとともに，個別記述の感想（授業の疑問，評価できる点や改善点など）とそれら評点を連動させて分析することで授業改善をはかっている。ただし，これを全授業で行うのは時間的に難しいので特定授業（地理学基礎Ⅰ受講生90名ほど）のみにとどまっている状況にある。

❺　研究テーマ：

①　知識経済下における農業地域の自立的発展とその条件，アグロフードシステムのグローバリゼーションとその構造

②　ヨーロッパ国境地帯における越境地域連携の展開と構造

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

③　社会科における地域事象の教材化とフィールドワーク技法，食農教育と地域農業学習の展開について

口頭発表：

2004年４月「農業地域の自立的発展とその条件―協同的競争と共生をめぐって」日本地理学会（於，東京経済大学）

同８月「Land Use Changes and Self-sustained Evolution of Agriculture in the Central Japan: Local Actors Answer to the Impact of Increased Imports on Japan's Food Market」IGUの持続的農村システム研究グループ（於，アバディーン大学，スコットランド）これは「Knowledge, learning system and self-sustained evolution of agriculture in Central Japan」と改題して印刷中

同11月「地域統合と変貌する欧州―国境地帯の空間動態を中心に―」日本社会科教育学会（於，愛知教育大学）

❻　社会専攻地理学専修代表，時間割編成専門委員会委員

❼　安城市史現代編調査執筆委員

2005年１月18日　全国ハウスミカン青年農業者交流会にて「知識経済下の産地発展と若者・ばか者・よそ者」と題して講演

中筋由紀子　Nakasuji, Yukiko　　助教授　地域社会システム講座　博士（社会学）

❶　社会学（文化の社会学，現代社会論，比較社会学，社会意識論）

❸　日本社会学会，日本宗教学会，関東社会学会，日本都市社会学会，家族社会学会

❹　日本文化概説（１年），日本文化理解教育論（２年），日本文化演習Ⅰ，Ⅱ（２年），現代日本社会論（３年），日本文化特論（４年），日本文化論演習（４年），共通科目「現代日本の社会と文化」，比較社会学特論（大学院），比較文化演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺・地域社会におけるボランタリズムの可能性についての研究

・戦後日本における社会意識論の歴史社会学的研究

・科学研究費基盤研究Ｂ「歴史社会学の方法と可能性に関する研究」（研究分担者）

❻　教育実地委員

足立　重和　Adachi, Shigekazu　　助教授　地域社会システム講座　教育学修士

❶　環境社会学，地域社会学，社会調査論

❸　日本社会学会，関西社会学会，環境社会学会

❹　国際理解と社会（２年），コミュニケーション論演習Ⅰ・Ⅱ（３年），現代社会学Ⅰ（３年），コミュニケーション論実習Ⅰ・Ⅱ（４年），環境社会学研究（大学院）

教育に関しては，特に学生のコミュニケーション能力を向上させるため，できるだけ学生の意見を聴取し，全員によるディスカッションに発展するように努力している。また，このような授業運営によって，学生自らがテーマを設定・追及できる教育環境を整えてきた。

❺　伝統文化（郡上おどり）の保存・継承に関する研究，郡上八幡における生活文化の研究

「地域づくりに働く盆踊りのリアリティ――岐阜県郡上市八幡町の事例から」『フォーラム現代社会学』３号，関西社会学会・世界思想社，2004年

「ノスタルジーを通じた伝統文化の継承――岐阜県郡上市八幡町の事例から」『環境社会学研究』10号，環境社会学会・有斐閣，2004年

❼　環境社会学会運営委員，環境社会学会編集委員

水野　英雄　Mizuno, Hideo　　講師　　地域社会システム講座　経済学修士

❶　経済学，専門分野：国際経済学，計量経済学，関連分野：農業経済学
❸　日本経済学会，日本経済政策学会，日本国際経済学会，経済教育学会
❹　情報教育入門Ⅱ（１年），国際経済学Ⅰ・Ⅱ（３年），国際経済学実習Ⅰ・Ⅱ（４年）

基本的な授業方針は，現代社会における様々な経済問題を身近な問題と関連づけてわかりやすく解説し，学生が経済学に興味を持てるようになることを目標としている。講義では理論分析に重点をおいて指導している。

情報教育入門Ⅱではワープロや表計算ソフトの使用方法，さらにはパソコンを用いた統計処理の基礎を講義している。国際経済学Ⅰは講義形式，国際経済学Ⅱはゼミ形式として，知識としての経済学だけでなく議論する能力をも身につけることを目標にしている。個別テーマとしては貿易摩擦，地域経済統合（EU，APEC）等を取り上げて考察している。国際経済学実習Ⅰ・Ⅱでは世界経済の様々な諸問題（世界的な不況，円高による構造変化等）について，ゼミ形式での議論を通じて深く考察することを目標としている。

理論に基づいた経済分析を行うことを目標にしているが，学生の関心が理論的な部分よりもコンピューターを用いた実証的な部分にあり，講義でのバランスをとることが難しい。また，経済学という学問は大学生になってはじめて学ぶ学生が多く，そのためどうしても学生に違和感があり，理解しにくい分野かつ現実社会に出て役に立たない分野との錯覚を抱きがちである。そのため学生に理解しやすいような事例を多数紹介し，経済学に対する理解をしやすくするように努めている。

❺　⑴　貿易障壁の経済厚生に及ぼす影響の計量分析
⑵　狂牛病などの様々な問題の影響による社会的厚生の変化の計量分析
⑶　経済教育のカリキュラム開発と実践に関する研究

「日本における食肉需要体系に関する考察」愛知教育大学研究報告（社会科学）第54輯　2005年
「経済教育の必要性と目標：何をいかに教えるべきか」経済教育学会発表　2004年

現在の研究テーマは，貿易障壁や狂牛病などの様々な問題の影響による社会的厚生の変化の計量分析である。特に計量分析が困難である非関税障壁（輸入数量制限，輸出補助金，輸出自主規制，等）や制度的な問題について，応用ミクロ経済学の理論モデルに基づいた実証研究を行っている。

このような研究を行うことによって，自由貿易主義に基づく「競争」と保護貿易主義に基づく「規制」について，経済学的評価を与えることが出来る。また，様々な農産物の貿易自由化について，計量経済学の手法に基づいた実証分析を行うことも可能であり，貿易自由化の意義について経済学的評価を与えることが出来，農業保護と消費者厚生についての考察を可能にする。

また，狂牛病などが貿易にどのような影響を及ぼすのかについても同様の手法により分析することが可能である。

さらに，経済教育に関する研究も行っている。経済教育は学校教育の現場でこれまで

積極的に行われていなかった分野である。その理由は経済教育の体系的なカリキュラムや教材が存在しないためであり，社会科教員だけでなくあらゆる分野の教員にとって活用出来る経済教育のためのカリキュラム開発や教材作成について，特に経済学の理論に基づいて行っていくことを研究している。

❻ 時間割編成専門委員会委員，就職支援教員

外国語教育

山本　勉　Yamamoto, Tsutomu　教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 専門分野：英語学（中期英語），英語文体論，関連分野：中期英文学

❸ 日本英文学会，日本英文学会中部支部（理事），日本中世英語英文学会，日本中世英語英文学会西支部（運営委員），日本英語表現学会，広島大学英文学会，広島英語研究会，英語史研究会，愛知教育大学英語英文学会（会長）

❹ 英語コミュニケーションⅠ（1年），英語Ⅲ（2年），英語Ⅳ（2年），英語学講義Ⅰ（2年），英語史Ⅰ（3年），英語史Ⅱ（3年），英語学特殊講義（3年），英語学講義Ⅰ（大学院），英語学講義Ⅱ（大学院）

実践的英語表現力の修得が重視されている中で，基本的知識をおろそかにしない意識を植え付けることに努めている。

❺ 中期英語物語詩の言語と表現の研究。特に広範囲の文体的技巧を示す大ローマ物長編物語詩 *Kyng Alisaunder* と，初期イングランド物物語詩 *Havelok the Dane* の言語と表現研究を中心テーマとしている。今後はイングランド物物語詩全体に対象を拡げ，中期英語イングランド物物語詩作品群全体の言語表現の特徴を明らかにしていきたい。

口頭発表：

Narrative Technique in *Kyng Alisaunder*　広島英語研究会　2004.8　広島大学

❻ 時間割編成専門委員

❼ アカデミック・クエスト講師

野呂　忠司　Noro, Tadashi　教授　外国語教育講座　修士（教育学）

❶ 英語教育学，専門分野：リーディング習得と指導，語彙習得と指導

❸ 全国英語教育学会，中部地区英語教育学会，関西地区英語教育学会，外国語教育メディア学会，大学英語教育学会

❹ 英語Ⅰ・英語Ⅱ（1年），英語Ⅲ（2年），英語コミュニケーションⅠ（1年），英語コミュニケーションⅡ（2年），総合演習Ⅰ（3年），英語科教育CⅢ（3年），英語科教育CⅣ（4年），英語科教育研究Ⅲ（大学院），英語科教育演習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院）

学部の授業は役に立つ英語力の養成を目指した。学部の専門科目では理論に基づいた指導方法に焦点をあてた。大学院の授業では，語彙習得理論を概観したあと，研究論文を読み，実証研究の方法，論文の書き方について考えた。

❺ 現在の研究テーマ：

1）リーディングにおける単語認知，統語的処理，意味処理の自動化，2）多読指導の効果，3）リスニングなどの4技能のおける語彙知識の役割，4）小学校英語活動，英語教育における指導内容，指導方法と教材作成

研究助成：
「現行の英語活動と将来の小学校での英語教育のためのシラバスの提案と教材作成」プロジェクトに対し学長経費125万円
研究交流：
韓国晋州教育大学，附属小学校へ「韓国における小学校英語教育」に関する視察交流。

❻ 英語専攻代表
大学・附属学校共同研究会英語分科会代表

❼・「試験をするから単語を覚えてきなさい，でよいの？」名古屋市民大学・愛知教育大学連携講座【コミュニケーション能力高めるストラテジー】講師，於：名古屋市生涯教育センター，2004年５月
・「英語指導技術を高めるための講義･演習（リーディング指導)」平成16年度福井県英語教育集中研修　講師，於：福井県青少年センター，2004年８月
・「英語指導技術を高めるための講義･演習（語彙を効果的に習得させる指導法)」平成16年度徳島県英語教育集中研修　於：徳島県教育会館，2004年８月
・「英単語　こう教えれば忘れない！こう覚えれば忘れない」大阪国際大学語学研究センター主催　講座「Teachers' Seminar」講師，於：大阪国際大学　総合教育推進機構語学教育センター，2005年３月
・愛知教育大学附属名古屋中学校英語科共同研究者

岩渕　邦子　Iwabuchi, Kuniko　　教授　　外国語教育講座　　修士（文学）

❶ フランス文学，フランス美術史，フランス文化史
❸ 日本フランス語フランス文学会（語学教育委員会委員)，同中部支部学会，フランス教育学会，ユイスマンス協会，自然主義文学研究会
❹ フランス語Ⅰ，Ⅱ（１年)，ヨーロッパ言語文化概説Ⅱ，ヨーロッパ文芸演習Ⅱ（４年)，フランス文化特論，フランス文化演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）
FD活動：
イ）出席調べ票による出席回数確認の実施
ロ）授業毎に提出させる課題による学力把握の実施（平常点に反映させる）
読み聞き話す，三拍子揃った学力が身に付くようなフランス語授業を心掛ける
❺ 現在の研究テーマ：
ユイスマンス研究（その生涯について，キリスト教との関係，美術批評家としてのユイスマンス，作品論，etc.）
業績リスト：
《ユイスマンス研究―作家活動後半期のユイスマンスについて―》日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集　No.28　pp.58～62　2004年
❻ 国際文化コース欧米文化履修モデル代表
❽ NPO法人エコークラブ・インターナショナル・ジャパン会員（⇒ジンバブエ支援）

杉浦　正好　Sugiura, Masayoshi　　教授　　外国語教育講座　　Master of Science

❶ 英語教育，専門分野：教材論，関連分野：談話分析

❸ 全国英語教育学会（幹事），中部地区英語教育学会（運営委員長），日本時事英語学会，日英・英語教育学会，大学英語教育学会

❹ 英語科教育ＣⅡ・ＣⅢ（３年），英語コミュニケーションⅠ（１年），英語コミュニケーションⅡ（２年），英語Ⅰ（１年），英語Ⅱ（２年），音声学（１年），英語科教育研究Ⅰ（大学院），英語科授業研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

英語教育の実践と理論の融合を具現化するために次の点に留意する。⑴英語コミュニケーション能力を養う。⑵英語教育の専門的知識を深める。⑶指導技術を高める。

❺ 理論的な枠組みを「談話分析」に置き，実践的な英語教育指導法を追求したい。基礎基本を重視した実践的コミュニケーション能力を養成することを当面の課題としている。なお，英語になった日本語の収集と分析も継続して研究する。具体的なテーマは次の５項目である。⑴生徒のmotivationを高めるためのauthenticな教材。⑵実践的コミュニケーション能力の養成。⑶談話分析：英語教育への応用。⑷ライティング指導のための発信用和英辞典。⑸英語になった日本語。⑹小学校英語教育。

論文：

Developmental Changes in English Language Teaching: A Lexical Analysis of ***ELT Journal*** Article Abstracts，愛教大研報（人文社会）第54輯，2005.

「大学の英語教育―教養と実用の狭間で―」愛教大共通科目研究交流誌「教養と教育」第５号，2005.

口頭発表：

英語の中の日本語―ニュージーランドを中心に―，日本時事英語学会第46回年次大会（成蹊大学），2004.10.

科学研究費補助金：

基盤研究Ｃ（代表）「英語科教員養成における英語圏の文化的教養教育の意義と必要性に関する研究」120万円

❻ 共通科目専門委員会委員

❼ 千葉県八千代市英語研究会「英語教材のあり方と実際―実践的コミュニケーション能力の育成に向けて」（５月）

愛知教育大学公開講座「アウトプットを多くして言語活動を活発にしよう」（５月）

スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール研究運営指導委員（愛知県立御津高等学校）

愛知教育大学附属岡崎中学校英語科共同研究者（2005年３月まで）

愛知県立岡崎東高等学校進路説明会「進路目標設定のために」（７月）

三河教育研究会英語部会夏季研修会助言者（８月）

愛知県教育委員会「平成16年度英語教員のコミュニケーション能力の向上のための研修」講師（８月）

岡崎市教育研究大会助言者（９月）

安城市中学校英語スピーチコンテスト審査委員長（10月）

愛知県立天白高等学校進路説明会（10月）

西三河中学校英語スピーチコンテスト審査委員長（11月）

愛知県立岡崎北高等学校進路説明会（11月）

平成16年度JICA国別特設研修講師「日本の英語科教育」（１月）

山中　哲夫　Yamanaka, Tetsuo　　教授　　外国語教育講座　　文学修士

❶ フランス文学，比較文学，精神分析

❸ 日本フランス語フランス文学，日本フランス語フランス文学会中部支部学会（常任理事），日本比較文学会，日本比較文学会中部支部学会，日本近代文学会，日本マラルメ研究会，関西マラルメ研究会

❹ フランス語Ⅰ（１年），フランス語Ⅱ（１年），フランス語Ⅲ（２年），フランス語Ⅳ（２年），ヨーロッパ文化史（２年），国際社会と日本（２年），ヨーロッパ文化講読Ⅳ（３年），ヨーロッパ言語文化演習Ⅱ（４年），卒業研究（４年），フランス文化演習（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：

精神分析的手法によるマラルメ研究，サン＝テグジュペリ研究及び夏目漱石研究，フランソワーズ・ドルト研究

業績リスト：

「文鳥を殺したのは誰か―漱石『文鳥』解読の試み―」文學論叢，第130輯，2004年

「漱石『夢十夜』の精神分析的解釈の試み―「第三夜」について（一）―」文學論叢，第131輯，2005年

「サン＝テグジュペリの超自我について―『星の王子さま』を中心に―」日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集No.29，2005年

「断章」（Ⅵ）愛知教育大学研究報告第54輯，愛知教育大学，2005年

「ドルトによる子どもの新しい教育(1)」愛知教育大学教育実践総合センター愛知教育大学，2005年

❻ 入試委員，共通科目委員会副委員長，「教養と教育」「パイデイア」編集部会長，共通科目コーデイネーター

❼ 愛知教育大学公開講座「ドルトによる子どもの新しい教育」

中村　正廣　Nakamura, Masahiro　　教授　　外国語教育講座　　文学修士

❶ 十九世紀アメリカ文学

❸ 日本英文学会，日本アメリカ文学会，ホーソーン協会，シムズ協会，中四国アメリカ文学会，ホーソーン協会中部支部

❹ 英語コミュニケーションⅠ（１年），人文科学入門（１年），英語Ⅰ，Ⅲ（１年，２年），米文学概説（２年），英米文学演習Ⅴ（３年）

学部の授業では米国の文化と歴史とできるだけ関連づけて小説等を読むように心がけている。特にアフリカ系アメリカ人やアメリカ先住民の白人文化との衝突を描いたテクストを用いて歴史と文化について考察するようにしている。

❺ 現在の研究テーマ：

William Gilmore Simms 研究：旧南部の文化

Nathaniel Hawthorne 研究：南部とアメリカ先住民の視点からの研究

業績リスト：

論文：

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

“The Removal of the Preface of Hawthorne’s ‘Rappaccini’s Daughter’ and the Indian Question”『愛知教育大学研究報告』(2004)

書評：

「増永俊一著『アレゴリー解体――ナサニエル・ホーソーン作品試論』」『フォーラム』(日本ナサニエル・ホーソーン協会，2005)

翻訳：

「オウカティッビ，又の名チョクトー族のサムソン」(ウィリアム・ギルモア・シムズ作)『外国語研究』(愛知教育大学英語研究室，2005)

❻ 教育研究評議会評議員，学生支援委員会委員，附属学校運営委員会委員（副委員長），外国語教育講座代表，大学院英語教育専攻代表

南　守夫　Minami, Morio　教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 専門分野：ドイツ現代文学及びドイツ現代史
関連分野：日独比較文学及び日独比較現代史

❸ 日本ドイツ文学会，世界文学会，日本比較文学会，日本平和学会，大学教育学会，日本科学者会議，平和博物館市民ネットワーク

❹ ドイツ語Ⅰ・Ⅱ（1年)，平和と人権（2年)，ヨーロッパ現代史（2年)，ヨーロッパ現代文学論（3年)，西洋史特論（3年)，ヨーロッパ言語文化演習（4年)，ドイツ文化特論（大学院)

語学（ドイツ語）は学生たちにとって言語と外国文化の認識への契機となることを期待している。また，教養科目の「平和と人権」の基本目標は現代の社会において高等教育を受けた市民として必要だと思われる自立的，民主的，及び平和主義的認識を学生が深める契機となることである。専門的な知識・認識を含んだ広い意味での「教養」形成の活動として，授業方法の意識化を進めることが，今後の課題だと考えている。専門の授業は，内容的にはドイツの現代史と現代文学，特にナチズムと戦争に係わる事柄を主題としているが，その際に，近年は特に，近代の日本の戦争の歴史と戦争に関わる文学作品との比較を中心的な課題として，自分の生きている社会の直接の前史と現在との関連を学生たちが自ら意識化することに役立つことを期待している。

❺ 現在の研究テーマ：

⑴ ドイツ及び欧米のナチズムと近現代の戦争に関する追悼所・記念碑・記念館等の調査・研究及び日本の戦争記念碑・記念館との比較研究

⑵ ドイツのナチズムと戦争に係わる文学作品の研究，及び日本の戦争文学との比較研究

業績リスト：

・研究会報告：東京基督教大学共立研究所主催「宗教の公共性」研究会，2005年1月29日，東京・お茶の水クリスチャンセンター
報告テーマ：『ノイエ・ヴァッヘ』の歴史的位置―国民国家と戦没者追悼

❻ 教育研究評議会評議員，大学改革推進委員会委員，教務企画委員会委員

❼・学習会報告，「女たちの戦争と平和資料館」主催連続学習会，2004年7月24日，東京・江戸東京博物館
報告テーマ「戦争のための戦争記念館と平和のための戦争記念館」

・学習会報告：平和のための博物館・市民ネットワーク第4回全国交流会，東京スポーツ文化会館

報告テーマ「ドイツの軍関係戦争展示をめぐって～国防軍展とベルリン・ガトウ空軍博物館について～」

小泉　直　Koizumi, Naoshi　教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 英語学，専門分野：統語論，意味論，関連分野：言語習得
❸ 日本英語学会，日本英文学会，英語語法文法学会，英語コーパス学会，筑波英語学会
❹ 英語Ⅰ・Ⅱ（１年），英語コミュニケーションⅠ（１年），英語コミュニケーションⅡ（２年），国際社会と日本展開１（英米の社会と文化）（２年），英文法（２年），英語学演習Ⅰ・Ⅱ（３年），英米言語文化演習Ⅰ・Ⅱ（４年），言語学演習Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）
・外国語科目に関しては，学生の関心を引き，かつ英語力や専門知識の向上に役立つようなテキストが乏しいため，独自に補助教材などを用意するよう努めている。
❺・研究テーマ：
動的文法理論に基づく英語の構文分析
・研究業績：
「英語における中間動詞の統語的資格」『外国語研究』第38号，愛知教育大学　英語研究室，2005年３月
❻・水質汚濁防止検討委員会委員
❼・英語語法文法学会第12回大会（2004年10月23日，名古屋大学）司会

フレス　アントワーヌ　Fraysse, Antoine　助教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 中国文学，フランス語，フランス現代社会
❹ フランス語コミュニケーションⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ（２年），フランス語コミュニケーションⅤ，Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ（３年），フランス語コミュニケーションⅨ，Ⅹ（４年），フランス語Ⅱ（１年），ヨーロッパ社会事情Ⅰ（２年），国際社会と日本セミナー（３年）
❺ French contemporary history, history of the French Fourth Republic.
La Crise de Suez et les motivations françaises de l'opération anglo-franco-israélienne. Deuxième partie. 愛教大研報（人）第54輯　2005年３月。
❼ 2004年10月30日『ネイティブの先生を通して世界を学ぼう』愛知教育大学公開講座。
愛知県東郷町教育委員会発行フランス語講座担当。

道木　一弘　Doki, Kazuhiro　助教授　外国語教育講座　文学修士

❶ 専門分野：英文学
❷ 日本英文学会新人賞（佳作論文1991年１月）
❸ 日本英文学会，国際アイルランド文学協会（評議員），日本ジェイムズ・ジョイス協会，日本アイルランド協会
❹ 英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ（１・２年），英語Ⅳ（２年），英文学概説（２年），英米文学演習Ⅲ（２年），英米文学演習Ⅴ・Ⅶ（３年），英米文学特論Ⅲ・Ⅳ（大学院）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

授業を行う上で最も配慮しているのは，学生参加型の授業を如何に作るかという点である。一般英語に関して言えば，高校までの語彙と文法を基に，グループ活動やドラマ制作を通して，自己表現やコミュニケーション能力を身に付けられるような授業を心がけている。ただ内容のある英文をしっかり読めるようになることは，これからの社会で活躍するためにも，また幅広い知識と教養を身につけるためにもとても重要になってくると思う。その意味で，英語の専門以外の学生達にも，優れた文学作品を鑑賞できるような高いレベルの読解力も並行して習得させてやりたい。

❺ ⑴ James Joyce の研究：

代表作*Ulysses*を中心に，ジョイス文学の特質を研究している。特に現在は，⒜この作品が持つ独特な「語り」の構造が当時のアイルランド社会・文化に対してどう関わるのかという問題と，⒝彼の斬新な言語実験を通して見えてくる詩的言語の解明に取り組んでいる。

⑵ 現代アイルランド女性詩人を代表するEavan Bolandの翻訳と研究。

論文：

⑴ 『ユリシーズ』…アイルランド文学での位置（『英語青年』vol.150，No. 7，2004.10.）

⑵ トネリコ杖の奇妙な音―『ユリシーズ』におけるオノマトペについて（『愛知教育大学外国語研究』2005. 3 .）

口頭発表：

⑴ From James Clarence Mangan to James Joyce: A Semantic Change in “Homesickness”（静岡芸術文化大学，2004.10. 9 .）

❻ 大学院入試部会委員

❼ ⑴ 名古屋アイルランド研究会での講演：「ジェイムズ・ジョイスを御存知ですか」（つながれっとNAGOYA，2004. 3 . 7 ）

⑵ ブルームズ・デー100周年記念巡回パネル展での講演：「ジョイスと蝶々夫人」（愛知淑徳大学星ヶ丘キャンパス，2004. 6 .12）

中川ジェーン　Nakagawa, Jane　　助教授　外国語教育講座　　修士（言語学）

❶ 語学；教育心理学；語学教育；文学

❷ Contemporary Poetry Series 2001年 (University of Georgia), Finalist
Four Way Books Poetry Competition 2001年 Finalist
Cleveland State University Press Poetry Competition, 2002年 Finalist
Gorsky Press Poetry Book Competition, 2004年 Finalist,

❸ 日本協同教育学会（JASCE）理事（2004-5年）
全国語学教育学会（JALT）GILE SIG Publicity Chair（2004-5年）
発表：
Cooperative learning and teacher training in Japan. IASCE Conference, シンガポール　2004年 6 月
Introducing the JASCE [panelist]. IASCE Conference, シンガポール　2004年 6 月

❹ 英語科教育ＣⅠ，英語科教育ＣⅣ，ジェンダーと社会，国際社と日本，英語コミュニケーションⅠ，英語コミュニケーションⅡ，英語コミュニケーション演習Ⅵ；卒業論文ゼミ

❺ 講演会：

「学生のモチベーションを高める協同学習」（講演会）中京大学，2005年 1 月

本：

Success in English communication. Tokyo: Tokyo Shuppan Service Center. 2004年 9 月

Language teaching approaches: current practice and future directions. Tokyo: Tokyo Shuppan Service Center. 2004年 9 月

Learn to use English, use English to learn. Tokyo: Tokyo Shuppan Service Center, 2005年 3 月

論文：

A spoonful of sugar... GALE Newsletter Spring, 2004年 4 月

Individual differences and teaching style. TESL Reporter 37:1, 2004年 4 月

Cooperative learning. In Makarova, V. and Rodgers, T. (eds.) English as a foreign language: the case of Japan (Lincom). 2004年 7 月

Spencer Kagan's cooperative learning structures. In Newfields, T. (ed) Peace as a global language II conference proceedings (PGL2/JALT), 2004年11月

Methods and materials in EFL global education classrooms in Japan (with Cates et al). JALT 26th annual conference proceedings, 2004年11月

A course in progress: gender and society. GALE Newsletter, 2004年12月

Course materials for the engaged pedagogue. The journal of engaged pedagogy, No. 4, 2005年 3 月

作品（詩）：

Splitting the atom (poem). Poets Against the War (Port Townsend: Poets Against the War), 2004年 4 月

The boatman (poem) How2 Vol 2 No 2（Sydney: How2; 2004年 5 月）.

Ordinary dread (poem) How2 Vol 2 No 2（Sydney: How2; 2004年 5 月）.

News report (poem) How2 Vol 2 No 2（Sydney: How2; 2004年 5 月）.

How I feel about you (poem) How2 Vol 2 No 2（Sydney: How2; 2004年 5 月）.

Woman with scarf and bundle (poem) How2 Vol 2 No 2（Sydney: How2; 2004年 5 月）.

❻ Cooperative learning で英語活動は活発になる！（公開講座）名古屋生涯学習推進センター2004年 5 月

Cooperative learning can help you & your students（公開講座）愛知教育大学2004年 7 月

アメリカと日本の多文化主義（公開講座）愛知教育大学，2004年10月

❼ AWFJ; GWW

❽ Help with university internationalization project

南　　隆太　Minami, Ryuta　　助教授　外国語教育講座　　修士

❶ イギリス演劇

❷ ラ・トローブ大学先端研究所客員教授　2003年 1 月～ 3 月

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

（A Visiting Professor in the Institute of Advanced Studies, La Trobe University）

❸ 日本シェイクスピア協会（協会委員：1998～2000，2005～2009），日本英文学会，日本演劇学会，スチュアート朝研究会，17世紀英文学会，国際融合文化学会（役員：2004～），中部英語教育学会

❹ 英語Ⅰ・Ⅱ，英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ，英米文化研究，英米文化演習，英文学概説，イギリス事情，国際文化と社会

英語及び英語コミュニケーション科目においては，同時通訳者養成のための訓練法として近年関心の高いシャドーイングやシンクロナイズド・リーディング，サイト・トランスレーションといった学習法を導入し，読解・聞き取り・発話をつなぎ合わせた英語力向上の方法を指導することで，単に当該科目の成績のみを考えるのではなく，学習意欲のある受講生が自立した学習者として授業の外でも積極的に学習が続けられるよう心掛けている。

❺ 「いくつものシェイクスピア―『シェイ屑ピア』を拾い集める」，『図書』（岩波書店）2005年 2 月号，18-22.（単著）

口頭発表（招聘）：

“Shakespeare *à la Kyogen* or Kyogen *à la Shakespeare*?” ***Shakespeare in Asia Event*** at Stanford University, 1-4 April 2004. (2 April)

第17回スチュアート朝研究会（成蹊大学：2004年 9 月19日）

発表：演技は絵画を志向する：17世紀イギリスの演技観を考える

第43回日本シェイクスピア学界（同志社大学：2004年10月10日）

セミナー 3「王政復古期演劇を読む」

発表：喜劇の変容と俳優の変容：BettertonからMountfort，そしてCibberへ

第19回スチュアート朝研究会（成蹊大学：2005年 3 月25日）

発表：*The Way of the World*を読む

❽ 科学研究費補助金（研究代表者）：

平成14年度　科学研究費　基盤研究(C)（平成14年～17年）

研究課題：17世紀後半のイギリスにおける市（fair）の演劇と内乱期のパンフレット演劇

科学研究費補助金（研究分担者）：

1．平成13年度　基盤研究(C)（平成13年～16年）
研究代表者：荒木正純　筑波大学教授
研究課題：日本及び東アジアにおける英米文学の受容と変容（19・20世紀）

2．平成16年度　基盤研究(C)（平成16年～19年）
研究代表者：杉浦正好　愛知教育大学教授
研究課題：英語科教員養成における英語圏の文化的教養（Cultural Literacy）教育の意義と必要性に関する研究

3．平成16年度　基盤研究(C)（平成16年～19年）
研究代表者：立木ドナ　神戸市外国語大学助教授
研究課題：映画を使った英語教育研究を目的とするコーパスの構築とその語用論的分析

時　　衛国　Shi, Weiguo　　助教授　外国語教育講座　　博士（文学）

❶ 中国語学，日本文学

❸ 日本語学会，日本中国語学会，世界漢語教学学会，中国言語学会，中国外国文学研究学会日本文学部会等

❹ 中国語Ⅰ，Ⅱ（１年），中国語Ⅲ，Ⅳ（２年），中国語コミュニケーションⅤ，Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ（３年），日中言語教育特論Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺ 訳書：

『能剧世家』立原正秋著　山东文艺出版社　2004年５月（中国済南）PP1-320

『残雪』立原正秋著　山东文艺出版社　2004年５月（中国済南）PP1-384

解説論文：

「立原正秋与『能剧世家』」（訳書『能剧世家』所収）山东文艺出版社　2004年５月　PP1-8

「立原正秋与『残雪』」（訳書『残雪』所収）山东文艺出版社　2004年５月　PP1-6

学術論文：

「更＋動詞＋量性成分」『愛知教育大学研究報告』54号（人文・社会科学編）2005年３月　PP93-97

「还＋動詞＋量性成分」『愛知教育大学共通科目研究交流誌　教養と教育』第５号　愛知教育大学共通科目委員会　2005年３月　PP41-47

エッセー：

「中国の外国語教育」『パイデイア』No.7　愛知教育大学共通科目専門委員会　P5-6　2005年３月

❻ 放射線障害予防委員会委員

❼ 公開講座：2004年10月16日㈯に「中国と日本の文化比較」というテーマについて
日本中国語学会東海支部世話役
2004年11月24日付で山東大学客員教授

尾崎　俊介　Ozaki, Shunsuke　　助教授　外国語教育講座　　文学修士

❶ アメリカ文学，アメリカ文化

❷・第38回　中村英語教育賞（第１位）（1990.７）
・第９回　福原賞（2001.４）

❸・日本アメリカ文学会（中部支部・運営委員長），日本英文学会，日本アメリカ学会

❹ 国際社会と日本（１年），英語コミュニケーションⅠ（１年），英語Ⅳ（２年），アメリカ事情（２年），米文学概説（２年），英米言語文化特論Ⅰ・Ⅱ（３年），英米文化演習Ⅰ・Ⅱ（４年），英米文学研究Ⅲ・Ⅳ（大学院）

近年要望の強い英語運用能力の向上を目指す授業のために，「ラピッド・リーディング」及び「ベーシック・イングリッシュ」を応用した独自教材開発に力を入れたい。またその参考とすべく，FD関連の講習会などに積極的に参加している。

❺・現在，研究活動の主眼は，19世紀以来アメリカで出版されてきた紙表紙の本（ペーパーバック）の出版史を発掘することに置いている。出版史の観点から見た文学史という新しい研究ジャンルが，従来の文学研究の空白を埋めることになればと考えている。

・著書：

『紙表紙の誘惑』（研究社出版，2002）

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

『英米文学にみる家族像』（共著）（ミネルヴァ書房，1997）
『ことばのシンフォニー』（共著）（英宝社，1999）
『文化のカレードスコープ』（共著）（英宝社，2003）ほか
・論文：
「ハーレクイン対フェミニズム」『中部アメリカ文学』（第８号）所収（日本アメリカ文学会中部支部紀要2005年３月）ほか
・科学研究費補助金による研究助成（2001年度・2002年度）
❻・時間割編成委員会委員

久野　陽一　Kuno, Yoichi　　助教授　外国語教育講座　　文学修士

❶ 18世紀イギリス文学
❸ 日本英文学会，日本18世紀学会，日本ジョンソン協会（大会準備委員），American Society for Eighteenth-Century Studies，18世紀英文学研究会，18世紀イギリス文学・文化研究会，英語圏ポストコロニアル文学研究会
❹ 専門教育入門（１年），英米文学特殊講義（２年），英米文学演習Ⅵ（３年），総合演習Ⅰ（４年），英語コミュニケーションⅡ（２年），英語Ⅲ，Ⅳ（２年），英米文学特論Ⅴ，Ⅵ（大学院）
❺・現在研究中のテーマ：
18世紀イギリス小説，特にSamuel Richardson，Laurence Sterneの研究。18世紀の女性作家の再評価。センティメンタル小説論。アフリカ系イギリス作家。
・業績：
Felicity A. Nussbaum, *The Limits of the Human: Fictions of Anomaly, Race, and Gender in the Long Eighteenth Century* (Cambridge: Cambridge UP, 2003)（書評）『Ivy』37 (2004): 83-87。
「彼ら」と「あなたたち」の『興味深い物語』―オラウーダ・イクイアーノのセンティメンタリズム―，『英語青年』2005年１月号，609-13。
バーバ・マーサー・「あいだ」―『文化のロケーション』のエピグラフについて―『愛知教育大学研究報告（人文・社会科学編）』54 (2005): 99-105。
・学術・研究交流等：
日本ジョンソン協会大会準備委員，日本英文学会中部支部編集委員
❻ 学部入学試験部会委員

濱嵜　通世　Hamasaki, Michiyo　　助教授　外国語教育講座　　教育学修士

❶ 英語学，統語論
❸ 日本英語学会，筑波英語教育学会，機能主義言語学研究会
❹ 英語Ⅰ・Ⅱ（１年），英語コミュニケーションⅠ（１年），人文科学入門（１年），英文法（２年），英語Ⅲ・Ⅳ（２年），英語コミュニケーションⅡ（２年），英語学演習Ⅱ（３年）
専門教育科目：
文構造とは何かをテーマに，言語固有の特質を発見することを目標とする。その中で英語という言語の特性を理解し，英語教育の基礎を養う。
外国語科目：

４技能にわたる総合的な英語の運用能力の養成を目指し，学生の主体的な表現活動に重点をおいた授業の構築を目標とする。

❺ 主題役と文構造，照応表現

論文：

「主題役付与と前置詞句」『愛知教育大学研究報告』第54号（人文・社会科学篇）2005年３月

❻ 就職委員会委員

❼ 教育実習（主免・副免）の連絡指導教官

建内　高昭　Takeuchi, Takaaki　　講師　　外国語教育講座　　教育学修士

❶ 英語教育学

❸ 大学英語教育学会，全国（中部地区）英語教育学会，言語文化学会

❹ 英語Ⅰ・Ⅱ（１年），英語Ⅲ・Ⅳ（２年），英語コミュニケーションⅡ（２年），英語科教育法（２・３年）

英語コミュニケーションI･Ⅱに関しては，英語リスニングからスピーキングにつながるようにコミュニケーションの指導を行っている。受講者の専攻に応じた補助教材を使用し，より学生のニーズに合った指導を心がけている。例えば英語によるグループ発表に向けて，各グループごとにシナリオを作成するよう促し，それを基にドラマ仕立てのプレゼンテーションを行うように指導している。学生の視点を盛り込むために学生同士による相互評価を取り入れた。また演じた場面をビデオカメラで録画し，直後に映像によるフィードバックを行うことで，発表者たち自身が客観的に自分たちの英語力，発音，演技力などを振り返る機会を設けている。これらの映像を編集し直し，次年度に生かしていきたいと考えている。また学生の動機付けを高めるために，映像を用いた教材，最新の洋楽などを利用している。今後の授業においても，英語のコミュニケーション活動を積極的に進めていく予定である。

❺ 研究テーマ：

外国語の聴解に関する研究

外国語指導における教授法のあり方に関する研究

論文：

・英語授業を振り返る―教員志望者の示唆する「良い授業」「悪い授業」愛知教育大学共通科目交流誌『教養と教育』第４号，21-26頁，2004年３月

・Learners' Self-Reports of Listening Comprehension Strategies.『言語文化学会論集』第23号，357-367頁，2004年10月

・シャドーイング実践を利用したリスニング指導『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第８号，149-154頁，2005年２月

❻ 教育実地研究委員　基礎実習コーディネータ（附属名古屋小学校）

❼ 愛知教育大学連携講座・公開講座・講師（名古屋市教育委員会）「シャドーイングはリスニングに効果があるのか」（2004年５月）

愛知教育大学附属高校・高校教育シンポジウム・共同研究者（愛知県教育委員会）「英語学習意欲を高める授業工夫」（2004年11月）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

大野　寿子　Ono, Hisako　　講師　外国語教育講座　文学博士

❶ ドイツ文学，比較伝承文学，ドイツ民俗学（文化学）

❷ 第43回（2002年度）ドイツ語学文学振興会奨励賞受賞（2003年５月）

❸ Internationale Vereinigung f r Germanistik〈国際ゲルマニスト（ドイツ学）学会〉，International Society for Folk Narrative Research〈国際伝承文学学会〉，日本独文学会，日本独文学会西日本支部，日本独文学会東海支部，九州大学独文学会，日本グリム協会九州支部，東ドイツ文学会（イルムの会），グリム民話の会，比較民話研究会

❹ ドイツ語Ⅱ（１年），ヨーロッパ文化概説Ⅰ（２年），ヨーロッパ文化講読Ⅲ（３年），ヨーロッパ文学特論（３年）

❺ 研究テーマ：

・ドイツ伝承文学における「森」についての研究

・森と人間との精神的関わりの歴史についての研究（特にドイツの樹木信仰や神話における世界観をてがかりに）

・グリム兄弟の学術業績（言語学，法学，民俗学，文学研究等）の研究

・少数民族ソルブの伝承文学とドイツ伝承文学との比較研究

業績リスト：

著作（ドイツ語教科書，共著）：

R tsel der Zeit―「時」の文化史（2004年４月，同学社）

論文（ドイツ語論文）：

Die Idee *des Waldes* bei den Br dern Grimm ― unter besonderer Ber cksichtigung des Begriffs einheimisch.（In: Chinesische Gesellschaft f r Germanistik (Hrg.): Neues Jahrhundert, neue Herausforderungen ― Germanistik im Zeitalter der Globalisierung. Asiatische Germanistentagung Beijing 2002. Beijing 2004, S.152-163.）（和訳説明）グリム兄弟における理念としての「森」―「土着のもの」の概念をてがかりに―（2004年10月〈北京〉，中国独文学会〈編〉『新しい世紀，新しい挑戦―グローバリゼーション時代のゲルマニスティック（アジア地区国際ゲルマニスト会議北京大会2002報告）』，152-163頁）

翻訳：

ソルブの民話２（パウル・ネド編）（2004年５月，東ドイツ文学会〈編〉「東ドイツ文学」第６号，22-40頁）

学会発表：

ヤーコプ・グリムの『ゲルマーニア』研究（2004年６月５日，日本独文学会2004年春季研究発表会，於日本大学）

研究助成：

日本学術振興会，人文・社会科学振興プロジェクト研究事業研究員（研究領域Ⅳ-２「豊かな人間像の獲得―グローバリズムの超克―」，研究グループ「伝承の現場からの考察」）

❼・Kariya Abend（社会人のためのドイツ語講座）のドイツ語講師（2004年10月９日―11日，東海地区ドイツ語ネットワーク主催，於愛知教育大学）

・招待講演：

グリムの森・ドイツの森―『グリム童話集』における「森」についての一考察―（2005年３月26日，日本グリム協会九州支部例会講演会，於福岡市赤煉瓦館）

マイヤー　オリバー　Mayer, Oliver　講師　外国語教育講座　文学修士

❶ ドイツ語教育，ドイツ文学，現代ドイツ社会，地理学，交通学，日本学

❸ 東海ドイツ語ネットワーク（副代表），日本独文学会，日本独文学会教育部会，日本都市地理学会，愛知教育大学地理学会，中部産業遺産研究会，金属鉱山研究会，Deutsche Gesellschaft für Geographie, Deutsche Verkehrswissenschaftliche Gesellschaft, Vereinigung für sozialwissenschaftliche Japanforschung, Deutsche Gesellschaft für Asienkunde, European Association for Japanese Studies (全て会員)

❹ ドイツ語Ⅲ，ドイツ語コミュニケーション演習Ⅰ-Ⅹ，ヨーロッパ事情Ⅱ

❺ 現在の研究テーマ：ドイツ語教育，現代ドイツ文学，都市交通問題，産業遺産

論文：

「Yakuza, Kampfsport und roher Fisch: Japan im deutschen Kriminalroman」Martin Kubaczek und Masahiko Tsuchiya（編集）: “Bevorzugt beobachtet”. Zum Japanbild in der zeitgenössischen Literatur. München: iudicium, 2005, 206-217頁

「ドイツ語の外国語教育について」パイデイア，第７号，3-4頁。

「Nazionalsozialismus und Neonazis im sozialkritischen Kriminalroman - gezeigt an Ruhrgebiets-Krimis」愛知教育大学研究報告，第45輯（人文・社会科学編），115-119頁

「Von Japan lernen heißt Qualität lernen. Wie die Japaner ihre Eisenbahnen betreiben」Der Fahrgast, Nr. 98 (Mai-Juli 2004), 17-18頁

「Das erste “Tokai Deutsch” Intensiv-Wochenende in Nagoya」Lektorenrundbrief, Nr. 23 (April 2004), 4-6頁

「Landeskunde und Länderkunde - zwei Konzepte und ihre Vermittlung im Unterricht in Japan」教養と教育，第４号，37-43頁

口頭発表：

「ドイツのルール地方の炭鉱―歴史，現在の問題と産業遺産」金属鉱山研究会，第120回例会，東京（2005.３.５）

「ドイツの現代発達：観光と産業遺産。技術と労働のマーケティング」中部産業遺産研究会，第72回研究会，名古屋（2005.１.23）

「Intensive German Language Course Weekend」30th International JALT Conference, 帝塚山大学，奈良（2004.11.20）

「グローバル化とドイツの学校教育」国際シンポジウム「グローバル化する地域・国家・世界と教師―大学・地域連携の中で―」日本社会科教育学会，第45回全国研究大会「グローバル化する地域・国家・世界」（2004.11.７）

「Kriminalromane als neue Form von Heimatliteratur? - Regionalkrimis aus dem Ruhrgebiet」日本独文学会の2004年度春季研究発表会，日本大学，東京（2004.６.６）

「Universitätsreformen in Japan」Ruhr-Universität Bochum（2004.５.６）

学会参加：

日本独文学会：2004年春季研究発表会（2004.６.６-７）

Japan Association for Language Teaching: 2004年学会（2004.11.20-21）

❻ 情報システム委員会，人文社会科学系ホームページ作成ワーキングループ，国際文化化

コースの学芸4課程再編ワーキンググループ（全て委員），国際文化コース・欧米文化履修モデルの2年生担当

❼ 口頭発表：

「ドイツの環境問題について」名古屋藤が丘小学校（2005.2.24）

「Industrial Heritage in Germany」Japanese Railway Society，東京（2005.1.9）

「楽しいドイツ語，第4回」名古屋独楽会Kreisel日独協会（2004.5.22）

公開講座：

「ドイツの都市と日本の都市」愛知教育大学（2004.10.16）

「第2回ドイツ語週末の集い」東海ドイツ語ネットワーク（2004.10.8-10）

❽ 附属図書館「世界の教科書展」で協力した。

数学教育

金光　三男　Kanemitsu, Mitsuo　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ 専門分野：代数学，関連分野：グラフ理論

❸ 日本数学会，日本数理科学協会，日本数学教育学会，全国数学教育学会，数学教育学会，日本総合学習学会（評議員），日本数学協会

❹ 離散数学B（3年），情報学・情報数学研究Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ（3・4年），代数学講究Ⅱ（大学院），代数学演習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院）。離散数学で，多人数教育の効果的授業方法が課題。

❺ 半群や環に付随したグラフ理論及び可換環の拡大環の研究。学長補佐と教授の職務の両立を視野に入れ，グラフ理論の研究及びその一部分の授業への応用を目指した。スウェーデンや韓国及び国内研究者の論文のレフリーを行った。

・Idealizers, complete integral closures and almost pseudo-valuation domains,（共）Kyungpook Math. J. 44 (2004), 557-563 ＜韓国＞［レフリーのある学術雑誌］

・On powerful ideals in semigroups, International Review of Pure and Applied Mathematics (2005), Vol. 1 No. 1 75-82 ＜インド＞［レフリーのある学術雑誌］

・口頭発表：

「環や半群に付随したグラフ理論について」京都大学数理解析研究所

・研究集会：

「代数系・形式言語と計算理論」2005年2月

・信州大学西田憲司科研費，京都大学数理解析研究所共同利用掛（研究事業により研究会），名古屋大学浪川幸彦科研費によりそれぞれ旅費の受領

❻ 学長補佐（自然科学系・教務企画担当），教育研究評議員，教員人事委員会委員（教員評価・制度改革部会（部会長）），大学改革推進委員会委員（第一，四部会員，大学と大学院との連携による6年一貫教員養成コース専門委員会（委員長）），教務企画委員会委員（時間割編成専門委員会（委員長），大学院課程運営改善委員会委員），財務委員会委員（施設専門部会員），役員部局長会議会員，自然科学系評議員会議（議長），セクシャルハラスメント防止対策委員会委員，国際交流委員会委員，水質汚濁防止検討委員会（委員長），放射線障害予防委員会(委員長)，理系機器共同利用センター運営連絡協議会委員，防災・防火委員会委員，情報公開委員会委員，発明委員会委員，仕様策定委員会委員，愛知教育大学後援会常任理事，概算要求ワーキング等その他

❼ 「科学フォーラム名古屋」でノーベル賞受賞者（リヒャルト・エルンスト氏・野依教

授・白川英樹氏・田中耕一氏）の話を聞いた。（財）神戸市民大学講座で「数学者からみた生物界にあらわれる数の話」を講演。公開講座：数学再入門「音楽と数学」主任講師。高校数学発展研究会（会長）。学術会議数研連付置数学教育小委員会委員及び将来計画小委員会委員。教員養成系大学・学部数学教員懇談会責任者として活動，日本数学会発行の「数学通信」にその報告を掲載。外国学術雑誌JP Journal of Algebra, Number Theory and Applications及びThe Global Journal of Applied Mathematics and Mathematical Sciencesのエディター。東海地区国立大学文化祭運営委員会参与

渡邉　　治　Watanabe, Osamu　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ 一変数関数論
❸ 日本数学会
❹ 自然科学入門（１年），複素数の基礎（２年），集合と位相（３年），計算機による数値計算Ａ（３年），解析学講究Ⅳ（大学院），解析学演習Ⅳ（大学院）
❺ 現在の研究テーマ：
リーマン面上の境界値問題：1961年のKoppelman によって創られたリーマンの境界値問題と特異積分方程式，リーマン･ロッホの定理を結びつける理論の一般化を目指す。
❻ 数学教育講座代表，評議員，大学改革推進委員会委員，財務委員会委員

古川　靖邦　Furukawa, Yasukuni　　教授　　数学教育講座　　理学博士

❶ 専門分野：位相幾何学，関連分野：微分幾何学
❸ 日本数学会，日本数学会代議員
❹ 自然科学入門（１年），線形数学Ⅰ（２年），線形数学Ⅱ（２年），図形処理Ａ（３年），図形処理Ｂ（３年），組み合せ幾何学（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究Ⅲ（４年），幾何学講究Ⅱ（大学院），幾何学演習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）
❺・On the Lusternik-Schnirelmann category of real Stiefel manifolds, 高麗大学（ソウル），2005年２月。
・高麗大学校開校百周年記念国際学術会議に招待され講演を行った。Hsiang教授（Princeton univ.），Woo教授（Korea unuv.）やGottlieb教授（Purdue univ.）等多くの研究者と研究交流を行う事が出来大変有意義な会議であった。
・On the cohomology of classical groups，広島大学教育学部セミナー　2004年12月。
・学術雑誌 JP Journal of Geometory and Topology の編集委員。
❻ 教員選考委員会委員長
❼・公開講座「コンピュータによる数学」10月２日㈯
・学長プロジェクト研究成果発表会で報告　７月７日
・教育実習連絡指導，南山高等学校男子部　５月～６月
・教育実習連絡指導，愛知教育大学附属高等学校　６月24日
・教育実習事後指導，７月14日

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

・基礎実習引率指導，附属岡崎小学校　9月6日～10日
・教育実習連絡指導，稲沢市立大里西小学校　9月～10月

浦田　敏夫　Urata, Toshio　　教授　数学教育講座　理学博士

❶ 専門分野：多変数複素関数論，関連分野：複素多様体論
❸ 日本数学会，日本数学教育学会（代議員）
❹ プログラミング入門（1年），科学技術と人間（2年），微分積分演習Ⅰ（2年），微分積分演習Ⅱ（2年），情報教育入門Ⅱ（2年），情報学・情報数学研究Ⅰ（3年），情報学・情報数学研究Ⅱ（4年），解析学講究Ⅵ（大学院），解析学演習Ⅵ（大学院）

微分積分演習Ⅰ（2年），微分積分演習Ⅱ（2年）は情報数学モデル専攻の学生の中学校数学及び高校数学教員免許取得に必要な専門科目として，中学校・高校教員に必要な数学理解を獲得させるために丁寧な演習を行っている。

2年の教養科目の一つ「科学技術と人間」では，機械，計算，意味に関わる最近の研究の進展について，討論を通して視野を広げることを目指している。

❺ 複素平面C上の正則関数の反復がもたらす力学系の性質に興味を持っている。整関数のFatou集合やJulia集合の一般論及びある種の特殊な超越整関数へのこの理論の適用を具体的に研究している。

論文：

Positive Values of a Holomorphic Function connected with the Collatz Problem，愛知教育大学研究報告 第54輯（自然科学編），1～10，2005.

JICA「サウジアラビア教育カリキュラム開発」の研修への協力に関連した数学教育研究

❼ 愛知県数学教育会副会長，愛知教育大学数学教育学会会長

林　　誠　Hayashi, Makoto　　教授　数学教育講座　理学博士

❶ 代数学（有限群論），離散数学（符号理論など）
❸ 日本数学会
❹ 離散数学A（1年），自然科学入門（1年），代数学Ⅰ（2年），数の体系（2年），代数学演習Ⅲ（大学院）

代数学Ⅰ，離散数学については試験結果もよく，比較的理解が得られたと考えている。自然科学入門については学生の基礎知識の把握が十分ではなかったと反省している。数の体系についても担当が急であったこともあり，反省点が多々ある。

❺ 線形符号の右からの作用（列変形）による構成を考えているが，成果といえるものは得られていない。
❻ 大学院入試実施委員

石戸谷公直　Ishitoya, Kiminao　　教授　数学教育講座　理学博士

❶ 代数的位相幾何学，数学教育
❸ 日本数学会，日本総合学習学会（評議員），愛知教育大学数学教育学会（理事）
❹ 自然科学入門（1年），離散数学A（1年），線形数学Ⅰ（2年），線形数学Ⅱ（2年），グラフ理論（2年），数の体系（3年），組合せ幾何学（3年），変換と幾何学（3年），

幾何学講究Ⅳ（大学院），幾何学演習Ⅳ（大学院）

❺ 口頭発表（共同）：

「教員養成系大学における数学の授業での操作的な活動」，第86回全国算数・数学教育研究（鹿児島）大会，2004.８.５，鹿児島大学教育学部

❻ 愛知教育大学数学教育学会誌「イプシロン」編集委員長

❼ 秋田県教育委員会　科学する心を育む夢プランシンポジウム　講演「科学の言葉，科学の眼としての算数・数学」（2004.10.15）

小牧南高等学校サタディースクール特別講義「円の数学」（2004.11.６）

志水　廣　Shimizu, Hiroshi　　教授　数学教育講座　教育学修士

❶ 数学教育学

❸ 日本数学教育学会（編集部幹事），愛知教育大学数学教育学会（理事），新算数教育研究会（理事），愛知数学教育会（顧問）

❹ 算数科教育法，算数科研究（学部），算数科教育論（大学院），算数科授業研究（大学院）

上の算数科授業研究においては，新城市立千郷小学校，千郷中学校の協力を得て，飛び込み授業を大学院生，学部生にさせる合宿研修を実施した。また，志水自身は講演をした。

❺ 現在の研究テーマ：

１．算数科の授業における教師と子どもとの「ずれ」について

２．現職教育の方法論について

３．○つけ法・復唱法による算数の授業改善

・著書：

基礎基本定着テスト＆発展補充ミニ教材集　中学校第１学年，明治図書　2004.10

基礎基本定着テスト＆発展補充ミニ教材集　中学校第２学年，明治図書　2004.12

算数科：○つけ法で授業が変わる・子どもが変わる，明治図書，2004.６

算数科：習熟度別少人数指導ハンドブック：３・４年編，明治図書，2004.６

算数科：習熟度別少人数指導ハンドブック：５・６年編，明治図書，2004.６

・教材＆著書：

わくわく算数掛図とガイドブック，啓林館，2005.３

・論文：

○つけ法を実施している教師の意識の変化に関する調査研究，イプシロン，2004.12，Vol.46．45～51

「復唱法」で授業が変わる・子どもが変わる，楽しい算数の授業，2005.１，245，pp４～６

復唱法を生かした算数授業の創造，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，第８号，2005.３，愛知教育大学教育学部教育実践総合センター，pp155～161

算数の授業における復唱法の意義と実践，愛知教育大学研究報告第54輯，2005.３，愛知教育大学，pp139～144

・口頭発表：

教師が机間指導において，子どもの解決過程を肯定的にとらえていく指導技法「○つ

け法」の提案，第37回数学教育論文発表会（岡山），日本数学教育学会，2004.11
算数授業における復唱法の活用，第37回数学教育論文発表会（岡山），日本数学教育学会，2004.11

・研究代表者飯島康之，基盤(C)テクノロジーを利用した数学のじに適した教授方略の研究―作図ツールを中心に　研究種目基盤研究C(2)課題番号14580189
・研究代表者飯島康之，特定領域研究，インターネットを用いた図形の動的探究を支援する学習環境とコンテンツの開発　研究種目Ａ０４　課題番号15020233

❻ 教育実地委員会委員，教育実践総合センター委員会委員

❼・国立教育政策研究所　研究指定校（教科別指定）に係わる企画委員会の協力者　小学校算数，平成16年４月１日～17年３月31日
・愛知県高等学校学力向上フロンティアスクール推進委員，平成16年４月～17年３月
・愛知県一宮市教育推進委員会副委員長，平成16年４月～17年３月
・京都府久世郡久御山町教育委員会，スーパーバイザー，平成16年４月～17年月
・長野県学力向上学習カウンセラー，平成16年４月～17年３月
・愛知教育大学公開講座「算数好きにする授業力２」，平成16年６月19日，20日
・文部科学省指定学力向上フロンティアスクール研究指定校等への助言，公開研究会での講演
学校名：愛知県刈谷市立日高小学校，同県岡崎市立竜美丘小学校，名古屋市立千成小学校，長野県岡谷立岡谷小学校，京都市立松陽小学校，広島県世羅郡甲山町小学校等
・各地の教育センターでの講演，福岡県教育センター，長野県総合教育センター，新潟市教育センター，石川県教育センター，福井県教育センター，鳥取県教育センター
・教育セミナー関西2004，16年７月31日(土)，ワークショップ・「○つけ法と復唱法で授業が変わる～講演と実技講習」大阪国際会議場　主催日本教育新聞社
・日本数学教育学会（鹿児島大会）講習会，小学校部会，2004年８月２日，講演「確かな学力の定着を目指す授業づくり」，場所鹿児島大学教育学部講義棟
・愛知県数学教育研究会小中学校部研究大会で講演，平成16年８月６日(金)　豊川勤労福祉会館，主催愛知県数学教育研究会小中学校部会，三河教育研究会，三河教育研究会算数数学部会，講演「算数数学の確かな学力を目指す授業の創造」
・平成16年度　児童生徒の学習状況を適切に評価するための指導者の養成を目的とした研修（小・中学校　近畿ブロック），主催独立行政法人教員研修センター，和歌山県教育委員会
平成16年８月17日(火)教科別分科会講師＆コーディネータ，会場紀州南部ロイヤルホテル，対象教育委員会の指導主事，教育センターの主事，教員等
・第42回愛知数学教育研究会，平成16年８月21日，一宮市市民会館，講演「確かな学力の定着を目指す授業の創造」，助言：小学校第一分科会，主催愛知数学教育研究会
・FD研修会「法人評価及び認証評価等に関する説明会」参加，2005年２月９日，431教室
・教師教育のための授業力アップセミナー志水塾を開催，2004.１.８～９，愛知教育大学

佐々木徹郎　Sasaki, Tetsuro　　教授　　数学教育講座　　教育学修士

❶ 数学教育学

❷・平成12年２月５日　平成11年度全国数学教育学会　学会奨励賞

❸・国際数学教育心理学会，日本教科教育学会，日本数学教育学会，全国数学教育学会（理事），愛知教育大学数学教育学会（副会長）

❹・数学科教育（２・３年），算数科教育（３・４年），総合演習Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究（３・４年），数学科教育論（大学院），特別研究（大学院）
・基礎の数学・基礎の確率（名古屋商科大学）
・授業においては，学生との対話を重視し，話し合いや発言を求めるようにしている。そのためには，資料を事前に配布し，学生がそれを読んでおくように，‘assignment’を与えている。資料の準備は容易ではないので，最小限のものにならざるを得ない。

❺・数学教育における構成主義・教室文化の研究
・数学教育における「意味の連鎖」に基づいた「学習軌道仮説」について，全国数学教育学会誌　数学教育学研究　第10巻，2004年
・算数・数学科における「目標に準拠した評価」，愛知教育大学数学教育学会誌　イプシロン，第46号，平成16年
・教室文化の構成過程と数学学習への影響についての研究，60万円，科学研究費補助金基盤研究Ｃ
・広島大学教授　岩崎秀樹教授　科学研究費補助金によるドイツ　ドルトムント大学教授ビットマン博士の招聘に際して，研究交流を行った。

❻ 大学院数学教育専攻代表，数学教育講座副代表，教育研究評議会委員，学生支援委員会委員，附属学校運営委員会

❼ 豊田市教育推進委員会指導力向上検討委員会委員，山口県中学校教育研究会夏季講座講師，東郷小学校学力向上支援事業連携委員，評議委員，名古屋市立小学校現職教育講師，日本数学教育学会夏季全国大会助言者，三河学校数学研究会助言者，岡崎市教員研修助言者

❽ 21世紀教育創造センター研究員

飯島　康之　Iijima, Yasuyuki　　助教授　数学教育講座　　教育学修士

❶ 数学教育学

❸ 日本数学教育学会，日本科学教育学会

❹ 数学科教育ＣⅡ（２・３年），算数科研究ＢⅠ，Ⅱ（１年），算数科教育Ａ（３・４年），数学教育方法論Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺・現在の研究テーマ：

作図ツールGeometric Constructorの開発・教材開発・授業研究を基礎としつつ，数学教育におけるコンピュータ利用とインターネット利用の理論的・実践的な研究を行っている。特に，GC/Javaを利用した複数の学習環境の開発と対応するコンテンツの開発。他に，授業研究の方法論や授業のデジタルライブラリ化とその活用についても関心を持っている。

・業績リスト：

飯島，図形の動的探究支援における「複数の学習形態」―様々な学校で実際に使ってもらうために―，日本科学教育学会，年会論文集28（2004），119-122

飯島，多様な利用形態に対応するための学習環境・コンテンツの開発―作図ツールの「部品化」とそれによって広がる可能性―，日本数学教育学会，第37回数学教育論文発表回論文集，529-534

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

佐橋郁美・飯島，授業記録のWebライブラリ化のための試み，日本数学教育学会，第37回数学教育論文発表回論文集，719-720

「数学教育」（明治図書），９月号（特集「教育の情報化」で数学教育はどう変わるか）の執筆・編集

・科研費などの受領状況：

特定領域研究「インターネットを用いた図形の動的探究を支援する学習環境とコンテンツの開発」，（代表者，260万円）

基盤研究C(2)「テクノロジーを利用した数学の授業に適した教授方略の研究―作図ツールを中心に―」，（代表者，80万円）

・学術・研究交流等：

特定領域研究「理数科系教育の展開研究」A04班第一グループのリーダーをつとめ，異なる分野の研究交流を行った。

❻・図書館委員会，大学・附属連携運営委員会

❼・文部科学省「学力向上フロンティア事業」に関連して，愛知県学力向上推進協議会委（アドバイザー）として参加した。合計21回，各学校の研究発表，研究授業等に参加した。

・共同研究（本学附属名古屋中学校，岡崎中学校）

・助言者（岡崎市河合中），講演（福岡県田川町大浦小）

・現職教育（名古屋市ほのか小，名古屋市福田小分校，岡崎市新香山中）

・講師（愛知県総合教育センター）

・NPO ゆーらっぷの活動に関わり，ゆーらっぷが設立した「IT活用教材標準化委員会」の第二回シンポジウムにおいて，「標準化の事例研究作図ツールが数学教育に果たす役割」を行った。(10/30)

鈴木　将史　Suzuki, Masashi　　助教授　数学教育講座　　理学修士

❶ 専門分野：確率論，関連分野：解析学，統計学

❸ 日本数学会

❹ 確率統計Ⅰ（２年），プログラミング入門（２年），プログラミングⅠ（２年），確率統計Ⅱ（３年），計算機と数学（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ～Ⅲ（３・４年），応用数学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）

教育活動については，専門科目のスタート時期が遅いことによる予備知識の不足を補うため，確率統計に関連する数学的知識を復習しながら，学生の理解度をよく見て授業を進めるようにしている。

2003年12月13日に本学教員の第１号として授業公開を行ったが，活発にFD活動を行っている他大学に比べると，授業改善への本学の取り組みはまだ及び腰であるように思われる。今後も自らの授業に対しては厳しく評価して，現状に満足することなく積極的な改善活動に取組んでいきたい。

❺ 研究テーマ：

１．後退確率微分方程式の解とその応用：ファイナンス理論等への応用を持つ後退確率微分方程式について，解の性質を調べるとともに，数値的な解を求める方法を考察する。

２．追求意欲を起こさせる確率教材の研究：確率の持つ面白さや意外性を感じ，興味を深めて追求する意欲を持てるような教材を開発・提案する。

３．途上国への数学教育支援活動：カンボジアの理数科教育改善計画に参加している。

業績リスト：

論文：

カンボジアにおける数学教育の課題と展望，愛知教育大学数学教育学会誌イプシロン第46巻，2004年12月

条件つき確率を用いた無限個の事象の導入，愛知教育大学教育実践総合センター紀要第８号，2005年２月

Further Study on the Additive Walk with Uniform Steps，愛知教育大学研究報告第54輯・自然科学編，2005年３月

口頭発表：

カンボジアに見る授業の課題と授業研究，日本科学教育学会第28回年会「自主企画課題研究　国際協力への授業研究からのアプローチ」，2004年８月，千葉大学

❻　時間割編成専門委員会（2004年度より），過半数代表候補者連絡協議会（2004年度）

❼・2004年８月４日㈬，愛知県教育センターにて高等学校数学教員の５年研修を担当し，「考える力を育てる指導」と題して，２時間の講演を行った。

・2004年９月19日㈰～25日㈯放映の，ケーブルテレビKATCHの番組「J's Power」の研究室訪問コーナーに５分間出演した。

・2004年10月２日㈰，愛知教育大学数学教育講座主催の一般向け公開講座「数学再入門」の第１回を担当した。

・2004年11月17日㈬，第35回愛知県私学教育研修会において，「もっと面白い確率の話題」と題して，２時間の講演を行った。

・2004年12月11日㈯，第35回愛知教育大学数学教育学会研究大会の小学校部会において，助言者としてコメントを述べた。

❽　カンボジアの中等理数科教育支援を目的として，東海地区を中心とする多くの大学教員で組織されている「カンボジア理数科教育改善研究会」において，代表を務めている。

植村　英明　Uemura, Hideaki　　助教授　数学教育講座　　理学博士

❶　確率解析，確率過程論

❸　日本数学会

❹　確率入門（１年），情報理論（２年），確率統計Ⅰ（２年），確率統計Ⅱ（３年），確率統計Ⅲ（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究Ⅲ（４年），応用数学特論Ⅳ（大学院）

・モチベーション付けと数学的厳密さが大事だと考え，これらを念頭に講義を行った。モチベーション付けについては，「確率入門」において，冒頭にその日のテーマを学生の興味を引く（であろう）問題として提示し，その解答過程において確率の理論を説明していくという形態を取り，更に１コマで話を完結させた。また，数学的厳密性に関しては，「確率統計Ⅲ」において，過去の講義において説明された確率の定理を，数学的に厳密に証明していくことを主眼とした。

❺・最も典型的なランダムネスであるブラウン運動の関数について研究している。ウィナーカオスの手法を用いて多次元ブラウン運動の超関数である局所時間に対する田中の公式

を導き出した。今後は加法的汎関数などの，ブラウン運動をはじめとする確率過程の関数の解析を行っていく予定である。

・論文：

Tanaka formula for multidimensional Brownian motions, J. Theoret. Probab., vol. 17-2, (2004), 347-366.

口頭発表：

「Positive continuous additive functionals of multidimensional Brownian motion and the Brownian local time」（Cadi-Ayyad大学（モロッコ）談話会　2005年３月）

・研究助成：

科研費分担者　基盤研究(A)(1)「確率解析の総合的かつ統合的研究」（代表者：谷口説男教授（九州大学大学院数理学研究院）

❻・時間割編成専門委員会委員

❼・日本数学会統計数学分科会運営委員

竹内　義浩　Takeuchi, Yoshihiro　助教授　数学教育講座　理学博士

❶ 位相幾何学，微分幾何学

❸ 日本数学会

❹ 基礎数学演習，微分積分学１，２，プログラミング入門，プログラミング１，２，幾何学特論１，２，等

❺ 軌道体のホモロジーとコホモロジーについて研究中

❻ 講座内図書委員

❼ 公開講座担当

小谷　健司　Odani, Kenzi　助教授　数学教育講座　博士（理学）

❶ 常微分方程式，力学系

❷ カンボジア王国教育大臣名の感謝状（2002年９月）

❸ 日本数学会，アメリカ数学会（AMS）

❹ 情報教育入門Ⅱ，微分積分基礎（１年），科学技術と人間セミナー，基礎数学演習Ⅲ，総合演習Ⅰ，情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ，情報学・情報数学研究Ⅱ・Ⅲ（４年），解析学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）

❺ 常微分方程式のリミットサイクルの存在と一意性に関する研究。

カンボジア中等理数科教育改善。

業績リスト：

［１］図でみる日本の算数・数学授業研究，明治図書，2005。（『カンボジアにおける授業研究』の部分を執筆。）

［２］A strange property of floating bodies (共著), Mathematical Gazette 87 (2003), 572-576. [Mathematical Association, UK]

❻ 学部入試部会委員（平成16，17年度），就職指導教員（平成16，17年度）

❼ カンボジア理数科教育改善研究会委員，新城市数楽チャレンジ大会実行委員会顧問

山田　篤史　Yamada, Atsushi　　助教授　数学教育講座　　修士（教育学）

❶ 数学教育学：数学的問題解決，表現・表象

❷ 全国数学教育学会学会奨励賞（1998）

❸ 日本数学教育学会，全国数学教育学会，日本科学教育学会，日本教科教育学会，中国四国教育学会，National Council of Teachers of Mathematics, International Group for the Psychology of Mathematics Education

❹ 自然科学入門（１年），基礎実習（１年）

2004年度は「基礎実習」を担当したが，他専攻の学生に対して，専門教科でない授業についても授業観察等に関する指導をしなければならなかったため，苦労をする場面があった。特に，授業観察で指導案が配付されないため，授業の目標等に関して指導することは困難であった。但し，事前指導では，具体的な授業のビデオを見て，観察・評価・議論等のあり方についてかなり指導を行ったため，実習校での授業観察やその後の議論が比較的有意義なものになったと思われる。

❺ 研究テーマ：

⑴　数学的問題解決における認知プロセスに関する研究

⑵　数学的問題解決における自己参照的活動に関する研究

業績リスト：

・論文：

逆思考問題の問題解決に関する調査とその分析：正答率と正誤パターンの学年間での変化に焦点をあてて（単著），愛知教育大学数学教育学会誌『イプシロン』，第46巻，pp.21-30，2004年。

・学会発表：

「数学的問題解決における自己参照的活動に関する研究：複数の変数を視点とした自己参照的活動の分析」，全国数学教育学会第21回研究発表会（2005.１.29-30，埼玉大学）。

科学研究費：

・（研究代表者）「逆思考問題の解決における問題表象の構成とその発達に関する研究」，若手研究(B)，50万円。

・（研究分担者）「インターネットを用いた図形の動的探求を支援する学習環境とコンテンツの開発」，平成16年度特定領域研究⑴「理数科系教育」。

❻ 情報処理センター兼任教官

❼ 愛知県数学教育研究会小中学校部研究大会指導助言者

功刀　直子　Kunugi, Naoko　　助手　　数学教育講座　　博士（理学）

❶ 有限群のモジュラー表現論

❸ 日本数学会

❹ 専門教育入門Ａ（１年），集合と整数論（１年），初等整数論とアルゴリズム（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ，Ⅲ（４年）

❺ 現在の研究テーマ：有限群のブロックの導来圏に関するブルエ予想の研究

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

業績リスト：

・論文：

・Broue's abelian defect group conjecture for the Held group and the sporadic Suzuki group, Journal of Algebra 279 (2004), no. 2, 638-666（共著）

・Blocks of central p-group extensions, Proceedings of the American Mathematical Society 133 (2005), no. 1, 21-26（共著）

・口頭発表：

・Some topics on derived equivalent blocks of finite groups，第37回環論及び表現論シンポジウム（2004年 9 月）松本市Mウィング
（Proceedings of the 37th Symposium on Ring and Representation Theory (2005) pp.51-54）

科学研究費補助金：

若手研究(B)「有限群のブロックの導来圏に関するブルエ予想の研究」研究代表者

学術・研究交流等：

スイス連邦工科大学ローザンヌ校（EPFL）ベルヌーイ・センターを訪問し，研究プログラム“Group Representation Theory”に参加した。(2005年 3 月)

❻ セクシュアル・ハラスメント防止等対策委員

情報教育

小川　秀夫　Ogawa, Hideo　　教授　　情報教育講座　　工学博士

❶ 専門分野：パターン認識，画像情報処理・理解，コンピュータグラフィックス
関連分野：知識情報処理

❸ IEEE, Pattern Recognition Society, 電子情報通信学会，情報処理学会

❹ 情報教育概論（１年)，情報理論（２年)，コンピュータグラフィックス（２年)，電子計算機通論（２年)，科学・技術と人間　展開（情報の科学）（２年)，画像情報処理（３年)，知識情報処理（３年)，情報学・情報数学研究Ⅰ（３年)，情報学・情報数学研究Ⅱ（４年)，情報学・情報数学研究Ⅲ（４年)，パターン認識特論（大学院)，画像情報処理特論（大学院)，画像情報処理演習Ⅰ（大学院)，画像情報処理演習Ⅱ（大学院）
学生に配布する講義資料の改善と充実に努めた。

❺ 研究テーマ：

・物体形状の部分整合法に関する研究
部分的に隠ぺいされ，種々の変形を受けて観測される物体形状の高速で汎用性の高いパターンマッチング法を確立すること。(射影変換に不変な部分パターンマッチング法の開発)

・顔画像の認識に関する研究
顔画像による人の同定，表情の認識，視線の方向，瞬きの検出など，総合的な顔認識システムを開発すること。

・線画理解システムの開発
「樹木画」を対象として研究を進めている。

業績リスト：

・確率的弛緩法による樹木画の領域分割，愛教大研報（自然科学)，第54輯（2005）

❻ 教育研究評議会，教員人事委員会

中津　楢男　Nakatsu, Narao　　教授　　情報教育講座　　工学博士

❶ 情報科学，専門分野：データベース，組み合わせアルゴリズム，学習支援システム

❸ 情報処理学会，電子情報通信学会，日本教育工学会，ACM（Association for Computing Machinery）

❹ 電子計算機入門（１年），情報教育概論（１年），データ構造とアルゴリズムⅠ（２年），データ構造とアルゴリズムⅡ（３年），データベースⅠ，Ⅱ（３年），科学技術と人間セミナー（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，ネットワーク利用教育特論（大学院），メディア教材開発演習（大学院）

学部１年の授業は入門の授業であるが，今後の学習の動機付けとして重要な科目である。情報教育概論では情報科学の主要分野を，情報と知識の表現方法という立場から解説している。一方，教員養成課程向けの情報教育概論では，学校教育現場におけるコンピュータの利用という視点から講義を進めており，タイトルは同じであるが，内容は全く異なっている。

２～３年の講義は情報科学の専門の授業であるが，教員免許の取得のために受講する学生が年々増え，情報科学の専門に対する勉強意欲の乏しい学生が増えつつある点が悩みである。データ構造とアルゴリズムⅡは，コンピュータを用いたさまざまなアルゴリズムの説明とプログラミング課題を出題しているが，コンピュータを用いた問題解決に関心が薄く，受講生が少ないため，次年度からは隔年開講にする予定である。

学部の講義ではあらかじめ講義資料を作成し，ホームページからダウンロードできるようにしている。また，過去の試験問題とその解答例も掲載している。試験的ではあるが，Eラーニングによる講義の配信を行っているが，学部生には評判はよくない。

大学院では，教育におけるコンピュータの利用という点を重点的に講義し，また，Webを介したデータベースアプリケーションの開発演習を行っている。また，徐々にではあるが，講義内容のWeb化を進めている。

❺ 研究テーマ：

１）自己説明に基づく算数文章題の学習支援システムの開発

２）オンライン会議システムの研究

３）情報の３次元表現とその応用（特に，３次元部品について）

業績リスト：

多鹿他，「算数問題解決におけるメタ認知方略の分析」，愛教大研報，54輯（教育科学），2004。

中津，「自己説明による算数文章題の解決の支援」，情報処理学会全国大会，４巻，2005。

科研費等：

平成16年度「子どもの問題解決と転移を促す知識の構成の分析と支援に関する研究」，基盤研究(B)(2)，代表者。16年度の金額は350万円。

❻ 2004年度は大学改革推進委員会の委員をつとめ，学芸４課程の改組に関する議論を行った。年の後半は，大学の法人化対応委員会に関係し，主に，就業規則の作成に追われた。

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

佐々木守寿　Sasaki, Moritoshi　　教授　情報教育講座　理学博士

❶ ファジィ理論

❸ 日本知能情報ファジィ学会

❹ 人間と生活展開（２年），情報教育入門Ⅰ（１年），プログラミングⅡ（２年），ファジィ理論（２年），オートマトン（３年），総合演習Ⅰ（３年），人工知能演習（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ（４年），情報学・情報数学研究Ⅲ（４年），ファジィ理論考究Ⅰ（大学院），ファジィ理論演習Ⅰ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院）

プログラミングの実習で配布するサンプルプログラムを見直し，学生が無理なく正しく理解できるように，一つのプログラムに含まれるポイントとなる命令や文法事項が３～５個になるようにした。

数学的な証明を扱う場合，証明の内容を正確に把握させることはもちろん大切であるが，証明の大きな流れや組み立て方を説明することにより，学生の応用力を高めるようにした。

❺・現在の研究テーマ：

ファジィ集合を特徴づけるメンバシップ関数の終域として，［０，１］閉区間以外の適切な集合を見いだし，ファジィ集合の同型等の概念を導入すること。

・学術・研究交流等：

日本知能情報ファジィ学会東海支部の運営委員として，研究会等の企画運営に積極的に参加している。

❻・講座，コース代表など：情報教育講座代表，情報教育課程代表

・各種委員会委員活動：教育研究評議会評議員，教務企画委員会委員

竹田　尚彦　Takeda, Naohiko　　助教授　情報教育講座　博士（工学）

❶ 情報工学・情報教育・技術者教育・ソフトウェア工学・要求工学

❸ 情報処理学会会員（コンピュータと教育研究会，ソフトウェア工学研究会）
情報処理学会・コンピュータと教育研究会幹事，コンピュータ利用教育協議会会員

❹ 情報教育入門Ⅰ，プレゼンテーション技法，プログラミング入門（以上，学部１年），プログラミングⅠ，システム設計論（以上，学部２年），ソフトウェア工学（学部４年），情報学・情報数学研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（学部３・４年），ソフトウェア工学特論Ⅰ・特別研究Ⅰ（大学院）

平成15年度より大学の基礎教育として，より有意義なリテラシ教育のあり方を研究活動の主軸としてさまざまな試みを行っている。また，平成18年度からは，高等学校で教科「情報」を履修した学生が入学してくる。これらを踏まえ新しいタイプの教科書を執筆する予定である。専門教育では，プログラミング教育カリキュラムに少しずつ改善を加えてきたが，ほぼ教育スタイルは確立した。今後は，これを体系化する予定である。また，作文技法に関する教科書の執筆とプレゼンテーション技法に関する書物の翻訳を予定している。

最近では，授業活動そのもののe-Learning化の試みに特に力を入れている。Wikiを用いてゼミナールにおけるコミュニケーションの活性化を図りつつ情報集約ツールとして活用したり，非同期（授業時間外）の議論・討論の場を提供したりするなど，多面的に利用している。この活動は，竹田研究室のWebサイト（http://gilels.ics.aichi-

edu.ac.jp/~takeda/info/）で公開しており，学内外からアクセスできる。今後は，大学教育におけるe-Learning，特にLMS（Learning Management System）の導入やOCW（Open Course Ware）の公開へと発展させていきたい。

❺ 現在の研究テーマ：

・EduWiki：共同作業を促進するプラットフォーム（Wiki）を利用した情報教育支援・授業支援
・相互評価システムを用いた授業実践に関する研究
・決議論を応用した情報倫理教育と教育ソフトウェアの開発
・ユービキタス・コンピューティングとスマートタグ（RFID等）の大学教育への応用
・高等学校・普通教科「情報」に関する教科教育及び入試問題研究等

主な業績：

・吉田宏史，高橋岳之，竹田尚彦「自由記述を重視した相互評価システム」IPSJ-SSS2004
・竹田尚彦，角谷典子「決議論を用いた情報倫理教育の試み」CIEC-PC-Conf.2004
・竹田尚彦，吉田宏史「相互評価システムを利用したプレゼンテーション演習」67thIPSJ全国大会
・吉田宏史，竹田尚彦，野田正幸，高橋岳之「相互評価システムを利用した教科「情報」の授業実践」67thIPSJ全国大会（本発表は大会奨励賞を受賞した）

学術・研究交流：

・情報処理学会「情報教育シンポジウム（SSS2004）」プログラム委員長

❻・共通科目専門委員会委員（予算配分に関する専門部会・研究交流誌等編集委員専門委員会）
・共通科目「情報教育入門」グループ・コーディネータ
・情報処理センター兼任教官

❼・愛知教育大学附属高等学校シンポジウム・「情報」分科会共同研究者（2004.11）及び授業実践の助言，TT運用支援，授業研究会における助言等。
・愛知教育大学附属名古屋中学「技術・家庭」の授業において「インターネットとモラル」という題目でTV会議システムを用いた遠隔授業（2004.４）を行った。

髙橋　岳之　Takahashi, Takeyuki　　助教授　情報教育講座　　工学修士

❶ 情報工学，情報教育

❸ 情報処理学会

❹ 情報教育入門Ⅰ，プログラミング入門，プログラミングⅠ，プログラミングⅡ，情報学・情報数学研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（３・４年）

❺ コンピュータ利用に関する研究を中心に行っている。

・タッチタイピングに関する研究（ログ解析等）
・高齢者等を対象としたコンピュータ利用時の補助ツールの開発

❻ 情報処理センター専任教員，情報システム委員会委員

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

中西　宏文　Nakanishi, Hirobumi　　助教授　情報教育講座　　工学修士

❶ 情報工学，教育工学

❷ J. C. BOSE Memorial Award［インド電子通信学会論文賞］(1990年)

❸ 電子情報通信学会，日本教育工学会，教育システム情報学会

❹ 情報教育入門Ⅰ・Ⅱ（1年)，プログラミング入門（1年)，プログラミングⅠ（2年)，プログラミングⅡ（2年)，オペレーティングシステム（3年)，情報学・情報数学研究（3・4年)

教員免許取得の必修科目である「情報機器の操作」に相当する情報教育入門が，全学共通の必修科目になり，通年で該当授業を担当するとともに，その学習カリキュラムの作成などにも携わっている。これからの学校教育で必要となるコンピュータの操作とは何かについて,時代の流れを読み損なうことのないように注意深く教授する必要があり，常に，最新技術動向の把握が必要不可欠である。

また，自分でソフトウェアを開発する能力を習得するためのプログラミング関係の講義を数多く担当している。3年次以降の授業においては，学生自らが，最新技術に触れ，情報処理システムの開発を行う上での必要不可欠な能力を習得できるよう，留意している。

❺ ⑴ 情報リテラシー教育：

コンピュータ初心者に対するコンピュータ利用などに関する教育方法の研究

⑵ 電子シラバスの開発：

シラバスの電子化に関する問題点の研究及びシステム開発

❻ 教務企画委員会，アカデミック・クエスト講座担当

伊藤　俊一　Ito, Toshikazu　　助教授　情報教育講座　　文学修士

❶ 専門分野：認知科学，自然言語処理，関連分野：ヒューマンインターフェース

❸ 認知科学会，言語処理学会，日本心理学会，日本教育心理学会，北海道心理学会

❹ 主題科目：人間と生活入門（1年)，レポートライティング（1年)，プレゼンテーション技法（1年)，人間と情報（2年)，認知行動研究Ⅰ（2年)，認知行動研究Ⅱ（2年)，インターフェースデザイン（3年)，情報学・情報数学研究Ⅰ（3年)，情報学・情報数学研究Ⅱ（4年)，情報学・情報数学研究Ⅲ（4年)，認知科学教育特論（大学院)，教育ヒューマンインターフェース論演習（大学院)

以前は講義で話す内容を文章化したプリント（講義メモのようなもの）を事前に配布していたが，プリントを受け取っただけで安心してしまい聴講する意欲を持続させられない学生が少なからず存在することがアンケート調査等から明らかになった。そこで，本年度からは，プリントの代わりに，授業時にプロジェクタで提示する図表等を画像ファイル化したものを専用のサーバからダウンロードさせる方式に改めた。このことによって，プロジェクタに映し出される図表と手元のノートパソコンにダウンロードした図表とをつき合わせながら，それらに対する教師の解説に注意深く耳を傾ける学生が増えたと考えられる。

❺・現在の研究テーマ：

言語を情報伝達のための手段として捉えるなら，いかにしてその伝達効率を高めるかが重要な問題となる。「文章の要約」「文章の推敲」といった，言語の情報伝達効率を高めることに寄与すると考えられる言語処理過程について，重点的に研究を進めて

いる。これらの研究から得られる知見は，担当する授業，特に「レポートライティング」「プレゼンテーション技法」等の授業で，実践的にも応用していくつもりである。また，これらの研究と関連して，レポート作成の技法についての概説書を執筆する予定である。

❻ 大学院学校教育専攻総合教育開発分野代表，大学院入試部会委員，時間割編成委員会委員

安本　太一　Yasumoto, Taichi　　助教授　情報教育講座　　博士（工学）

❶ 計算機科学，専門分野：プログラミング言語処理系，関連分野：数理科学

❸ 日本ソフトウェア科学会，情報処理学会，ACM，IEEE Computer Society，電子情報通信学会

❹ 情報教育入門Ⅰ（１年），プログラミング入門（１年），プログラミング入門Ⅱ（２年），科学技術と人間：展開１（２年），計算機ネットワーク（３年）２クラス，計算機ネットワーク実習（３年）３クラス，総合演習Ⅱ（４年），計算機科学特論Ⅰ（大学院），計算機科学特論Ⅱ（大学院）

授業の運営は，できるだけ受験生の方に自ら考えていただく機会があるように工夫しているつもりである。しかしながら，レポートや試験の結果をみる限り，受験生の踏み込みが今一つな感じがある。自ら考え工夫することの達成感が得られるよう，今後改善していきたい。

❺ 現在の研究テーマは，Lisp言語処理系の実装である。とりわけ，64ビットプロセッサにおけるLisp言語処理系の実装，マルチメディア命令（SIMD命令）を生かしたLisp言語処理系の実装に重点を置いて取り組んでいる。

❻ 就職支援教員，防災・防火委員会地震対策専門委員，第二種衛生管理者取得

❼ 平成16年度JICA集団研修産業技術教育Ⅱ講師，平成16年度JICAサウジアラビア学校教育改善研修講師

松永　　豊　Matsunaga, Yutaka　　助教授　情報教育講座　　博士（工学）

❶ ニューロコンピューティング，人工知能，人工生命，プログラミング

❸ 電子情報通信学会，情報処理学会，人工知能学会

❹ WEBを用いた授業支援システムを構築し，授業，ゼミ，卒研指導等で利用し，教育能率向上に取り組んだ。また，WEBを用いた個別授業進度確認システムを構築し，授業改善に取り組んだ。

❺ 情報教育シンポジウムSSS2004にてステアリングチーム（主査，座長等）として活動
愛知教育大学研究報告　第54輯「PHPによる授業支援システムの構築」
実機を使ったロボットの行動獲得の研究

❼ 教科「情報」の入学試験に向けての試行試験の実施

野崎　浩成　Nozaki, Hironari　　助教授　情報教育講座　　博士（工学）

❶ 教育工学，情報教育，日本語教育，計量国語学

❷ 1996年２月　全NEC　C&Cシステムユーザー会　優良論文賞受賞
1997年９月　日本教育工学会　1997年度　学会論文賞受賞

❸ 日本教育工学会，電子情報通信学会，日本心理学会，日本語教育学会，日本認知科学会，計量国語学会，行動計量学会，各会員。教育システム情報学会　学会誌編集委員，研究会委員会委員。

❹ 教育工学研究，教授学習システム，コンピュータ利用教育等

❺ 科学研究費補助金（若手研究Ｂ）研究代表者
「日本語におけるカタカナ語の使用実態調査と語彙習得支援環境の構築」（320万円）

❻ 教育実地家研究専門委員会委員，基礎実習・応用実習コーディネーター，インターンシップ担当教員

江島　徹郎　Ejima, Tetsuro　　講師　　情報教育講座　　教育学（修士）

❶ 教育工学・メディア開発

❸ 教育システム情報学会，電子通信情報学会，日本教育情報学会，日本教育工学会，日本教育メディア学会，日本数学教育学会

❹ 情報教育入門Ⅰ（１年），教育と情報（１年），人間と生活展開Ⅱ（２年），教授学習システム（２年），メディア制作演習（２年），メディア表現論Ⅰ（２年），メディア表現論Ⅱ（３年），情報学・情報数学研究Ⅰ（３年），情報学・情報数学研究Ⅱ・Ⅲ（４年）

❺ 現在の研究テーマ：コンピュータ等の情報機器の教育利用
業績リスト：
論文：
江島徹郎：初等中等教育におけるシミュレーション利用に関する事例と考察，教育システム情報学会誌 Vol.21 No2.，pp.122～129（2004.４）
江島徹郎，梅田恭子，野崎浩成，平田賢一：本学におけるｅラーニングのあり方に関する実践研究，愛知教育大学研究報告，54（教育科学編），pp.163～166（2005.３）
口頭発表：
江島徹郎，梅田恭子，野崎浩成，平田賢一：学校の生徒や保護者専用のWeb頁システムの運営と改良，日本教育工学会第20回全国大会講演論文集，pp.813～814（2004.９）

❻ 学部入学試験部会委員，大学改革推進委員会６年一貫具現化専門委員会委員，愛知教育大学における附属高等学校からの高大連携選抜等に関する検討プロジェクトメンバー

❼ 豊橋市立津田小学校メディアリテラシー研究「情報を活かしたくましく生きぬく子どもの育成」指導
額田郡教育研究会学習情報部指定教科研究「学習情報」講師
国際協力機構国別特設研修「サウジアラビア学校教育改善」コース・コースリーダー
愛知教育大学公開講座「学校におけるホームページ制作演習―デジタルビデオによる情報発信を中心に―」講師

梅田　恭子　Umeda, Kyoko　　助手　　情報教育講座　　博士（学術）

❶ 教育工学　情報教育

❷ 情報処理学会東海支部　学生論文奨励賞（2001年５月）

❸ 情報処理学会、電子情報通信学会、教育システム情報学会、日本教育工学会、日本科学教育学会、AACE

❹ レポートライティング（１年)、情報教育入門１（１年)、メディア制作実習（３年)、プレゼンテーション技法（１年)、情報教育入門２（１年)、プレゼンテーション演習（３年)、情報学・情報数学研究Ⅰ（３年)、情報学・情報数学研究Ⅱ・Ⅲ（４年）

❺ 現在の研究テーマ：学校におけるe-learningの実践に関する研究

業績リスト：

論文：

梅田恭子，江島徹郎，野崎浩成，平田賢一：大学生におけるパソコンと携帯電話によるインターネット利用の実態調査、愛知教育大学教育実践総合センター紀要第８号，pp69-74，(2005.２)

国際会議：

Kyoko UMEDA, Shinsuke TAKITO, Tetsuro EJIMA, Hironari NOZAKI, and Kenichi Hirata. “The development of SWMS: A System for Easily Creating Dynamic School Websites and Individualized Web Newspaper”, Proc of International Conference on Computers in Education, p1821-1829, 2004.

口頭発表：

本多裕子，梅田恭子，江島徹郎，野崎浩成，平田賢一：電子マネー学習教材の開発～高等学校　普通教科「情報」における授業実践～，教育システム情報学会第29回全国大会講演論文集，pp21-22，2004

研究助成金：

科研費代表：

Webページによる学校・保護者・児童生徒間のコミュニケーションに関する研究，若手Ｂ，平成16年度交付金170万円

科研費分担：

ポートフォリオ評価の実証的研究（その２）代表　寺西和子(2) 科学研究費　基盤研究(C)

❻ 時間割編成専門委員会委員，広報誌編集会議委員

❼ 講師（分担）：

愛知教育大学公開講座　学校におけるホームページ制作演習―デジタルビデオによる情報発信を中心に―やさしいWebページ講座（2004.７）

JICA国別特設サウジアラビア「学校教育改善」コース（2004.10）

福井　真二　Fukui, Shinji　　助手　　情報教育講座　　博士（工学）

❶ 情報工学：コンピュータビジョン

❸ 電子情報通信学会，情報処理学会，画像電子学会

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

❹ 情報教育入門Ⅰ（1年），プログラミングⅠ（2年），プログラミングⅡ（2年），情報学・報数学研究Ⅰ（3年），情報学・情報数学研究Ⅱ（4年），情報学・情報数学研究Ⅲ（4年）

❺ 現在の研究テーマ：

⑴ 移動物体抽出手法

⑵ コンピュータビジョンのGPUを利用した高速化

業績リスト：

“Extraction of Moving Objects by Estimating Background Brightness”，画像電子学会誌　Vol. 33，No. 3，2004

“輝度変化に対する頑健な背景差分法”，画像の認識・理解シンポジウム2004（MIRU2004）論文集，Vol. Ⅱ，pp. 305-310，Jul，2004

❻ 情報処理センター専任教員，情報システム委員会委員，システム運用専門委員会委員長

齋藤ひとみ　Saito, Hitomi　　助手　　情報教育講座　　修士（情報学）

❶ 認知科学，教育工学

❷ 2003年度　認知科学会奨励論文賞受賞

❸ 認知科学会会員，人工知能学会会員

❹ 情報教育入門Ⅰ（1年），情報教育入門Ⅱ（1年），プログラミング入門（1年），コンピュータ社会論（2年），情報科教育ＣⅠ（3年），情報学・情報数学研究Ⅱ（4年）

「情報教育入門」系の授業では，学生毎の情報リテラシー能力の違いなどが年々顕著になると考えられるため，そういったスキルの違いに対応できる授業というのを今後，実践していきたいと考えている。また「情報科教育ＣⅠ」では，教科「情報」に関する教師教育の在り方を模索している。まだ新しい教科であり，特色のある授業展開を実践していきたいと考えている。

❺ 現在の研究テーマ：

以下のようなテーマについて，人間の行動を分析する認知科学的アプローチと，人間の学習を支援する教育工学的アプローチの両方から研究に取り組んでいる。

・情報教育における「操作手続き」と「その背後にある理論・概念的知識」との乖離を解消するための自己説明活動やリフレクションを取り入れた学習環境の構築に関する実験的検討

・「考える力」の育成を目的とした，インターネットを用いた情報の収集・分析・調査に関する統合的な情報教育環境の構築・実践

業績リスト：

学術論文：

・齋藤ひとみ・三輪和久（2004），Web情報検索におけるリフレクションの支援　探索行動フィードバックシステムの構築，人工知能学会誌，19，214-224。

・Saito, H., & Miwa, K. (2004). Educational Effects of Reflection on Problem Solving Processes: A Case of Information Seeking on the Web. Proceedings of CogSci 2004, 1191-1196.

・三輪和久・齋藤ひとみ（2004），学習科学に基づく学習/教育支援システムの設計と実現―リフレクションに基づく学習支援を題材として―, 教育システム情報学会誌，21，145-156。

・Miwa, K., Ishii, No., Saito, H., & Nakaike, R. (2004). A microworld learning for

psychology experiments by combining real and virtual experiments. Proceedings of the 6th international conference of the learning sciences, 342-349.

口頭発表：

・齋藤ひとみ・三輪和久（2004），問題解決プロセスに対するリフレクションの学習効果に関する実験的検討，『日本認知科学会第21回大会発表論文集』，150-151。

理科教育

石田　博幸　Ishida, Hiroyuki　　教授　　理科教育講座　　理学修士

❶ 理科教育，物理教育

❷ タイラチャパットインスティチュートチェンライ名誉博士（2000・３）

❸・応用物理学会，物理教育学会，環境教育学会，理科教育学会，応用物理教育研究会，WCCI，科学応用物理学会

❹・理科教育Ａ（４年），理科教育Ａ（３，４年），総合的学習演習（３，４年），教養科目（１年），理科教材論Ⅰ，Ⅱ（大学院），理科授業研究（大学院）

❺・現在の研究テーマ：国際理科教育協力研究，国際環境教育協力研究

・業績リスト：

キリンじゃなくても進化論：理科の教育，618号，2004

On the Prosocial And Environmental Attitude of Students in Thailand and Japan：愛知教育大学教育実践総合センター紀要８号，2005

・科学研究費補助金など研究助成の受領状況：

科研費　基盤研究Ｃ日・タイ環境教育意識調査と環境教育協力実践　1,000,000円　代表

❻・各種役職・講座，コース代表など（各部内における運営に関する活動）・各種委員会委員活動

❼・各種審議会委員，自治体等の教育組織における活動：

そうであることを表明することが秘守義務に反する活動　１件

・学内外の公開講座，講演会など：

・学校現場などにおける指導助言，西尾市立平成小学校における指導助言

・附属学校における指導助言は省略

川上　昭吾　Kawakami, Shogo　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 関連分野：生活科教育，環境教育，総合的学習，生物学（植物学）

❷ 日本教育研究連合会表彰（1991年）

❸ 日本理科教育学会（会長），日本生物教育学会（理事，編集委員），日本生活科・総合的学習学会（理事），染色体学会（評議員），日本科学教育学会，日本教科教育学会，日本高等教育学会，日本環境教育学会

❹ 理科教育Ｃ（２年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），生物学ゼミナールⅠ（４年），生物学ゼミナールⅡ（４年），理科教育史特論（大学院），理科カリキュラム論

（大学院），理科教育特論演習（大学院）

・大学院の授業で，受講者のレディネスの差が非常に大きく，講義の質を維持することが難しい。

・学生が「知的興奮」を感じる授業を作っていきたい。

❺・現在の研究テーマ：

理科教育論，理科授業論，カリキュラム論，生物教材研究，学校と博物館連携

・業績リスト：

川上昭吾・雨森真司・佐藤真歩，中学校理科におけるDNA抽出実験の改良，理科教育学研究45巻３号，pp.23-30，2005。

川上昭吾・前畑朱里，発砲塩ビ板を用いた無菌箱の作製と培養方法の改善，生物教育第44巻４号，pp.216-222，2004。

加藤万幸・川上昭吾・加藤淳太郎，スイバの性比，愛知教育大学研究報告第54輯（自然科学編），pp.37-45，2005。

加藤万幸・寺田安孝・川上昭吾，スイバの教材研究と高等学校生物におけるスイバの性比の観察を通した性決定機構の学習に関する実践的研究，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，第８号，pp.175-182，2005。

寺田安孝・永田祥子・川上昭吾，博物館と学校との連携による学習プログラムの開発，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，第８号，pp.45-49，2005。

川上昭吾，あなたの授業も“天動説”の子供をつくっていないか，楽しい理科授業No.463，３月号，p.12，2005。

川上昭吾，直接体験単元の理想と落とし穴，総合的学習を創る，No.173，11月号，p.29，2004。

川上昭吾，得意分野を生かす指導，楽しい理科授業Vol.36，No.459（11月号），p.6，2004。

・口頭発表：８件

・科研費：

教養と専門を両立させる科学カリキュラムの構築（代表），（基盤研究(B)(1)），350万円，平成16－18年度

科学技術立国を支える小・中学校の新しい自然科学教育課程編成のための基礎調査（分担），（基盤研究(C)(1)），18万円，平成16年度

❻・役職：附属学校部長

・委員会：役員部局長会議，附属学校運営委員会，大学改革推進委員会，他。

❼ 日本理科教育学会会長，日本学術会議科学教育研究連絡委員会幹事，日本学術振興会審査会専門委員，染色体学会評議員，日本生活科・総合的学習教育学会理事，日本生物教育学会「生物教育」理事・編集委員，J. of Biological Education（イギリス発行）海外査読者，University of the Phillipines(UP)・National Institute for Science and Mathema-tics Education (NISMED)海外査読者，国立教育政策研究所「教科等の構成と開発に関する調査研究」研究協力者，尾張旭市教育委員会尾張旭の教育を考える協議会会長，日本理科教育振興協会理事，日本科学技術振興財団「2005年国際博覧会における青少年向け行事モデルの作成」事業プロデューサー会議特別委員，ちゅうでん教育大賞審査委員，コンピュータ教育開発センター・評議員，科学技術教育関連学協会連合・運営委員

❽ シンガポール教育事情調査（2004.12），ソニー受賞校連盟愛知支部講演，2005.２.５.，教科「理科」関連学会協議会第９回シンポジウム提案，2004.12.11.，福岡市立笹丘小学

校講演，2004年10月22日，尾張旭市教育委員会管理職員講演会，2004.９.24.，知立市教育委員会研修講座講義，2004.８.24.，豊橋市教育委員会理科教育講演会，2004.８.20.，愛知県総合教育センター講義，2004.７.27.，文部科学省委嘱，（社）日本理科教育振興協会実施 「『その道の達人』派遣事業」により，彦根市立若葉小学校（2004.10.25），那覇市立与儀小学校（２.25）ほか９校で訪問授業を実施。
吉良町立萩原小学校研究授業助言（2005.１.27），岡崎市立矢作北小学校研究授業助言（2004.11.９）.

羽渕　脩躬　Habuchi, Osami　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 生化学，糖鎖生物学
❸ 日本生化学会，アメリカ生化学・分子生物学会，日本糖質学会，日本結合組織学会
❹ 自然環境論（１年），化学Ⅰ（１年），化学Ⅱ（２年），生物化学演習Ⅰ（２年），環境物質代謝論（３年），化学ゼミナールⅠ（４年），生物化学特論Ⅰ（大学院），生物化学特論演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）
❺ 現在の研究テーマ：
グリコサミノグリカンの動物の高次生命機能における機能，特にコンドロイチン硫酸の硫酸化の生物機能の解明
著書論文：
⑴ Yamada, T., Ohtake, S., Sato, M., and Habuchi, O. (2004) Chondroitin 4-sulphotransferase-1 and chondroitin 6-sulphotransferase-1 are affected differently by uronic acid residues neighboring the acceptor GalNAc residues. ***Biochem***. J. 384, 567-575
⑵ Habuchi, H., Habuchi, O., Kimata, K. (2004) Sulfation pattern in glycosaminoglycan: Does it have a code? ***Glycoconj***. J. 21, 47-52
⑶ Yusa, A., Kitajima, K., and Habuchi, O. (2005) N-linked oligosaccharides are required to produce and stabilize the active form of chondroitin 4-sulphotransferase-1, ***Biochem***. J. 388, 115-121
口頭発表：
⑴ Osami Habuchi. Sulfation Mechanisms of Chondroitin Sulfate, (Gordon Research Conference, Proteoglycan (Proctor Academy, Andover, NH, USA)
⑵ Shiori Ohtake，Toshiko Morisaki，Sachiko Kondo，Kaori Matsumura，Koji Kimata and Osami Habuchi. Involvement of GalNAc 4-sulfate 6-O-sulfotransferase in the Synthesis of Chondroitin Sulfate E in Bone Marrow Derived Mast Cells（US/JAPAN GLYCO 2004，Hawaii）
⑶ 近藤幸子，大竹しおり，森崎寿子，松村香理，羽渕脩躬　マウスN-アセチルガラクトサミン４硫酸６-O-硫酸転移酵素のクローニングと発現（第77回日本生化学会（横浜））
研究助成：
・奨学寄付金：「硫酸転移酵素に関する研究」生化学工業中央研究所　1,000千円
❻ 理系機器センター長，放射線障害防止委員会（放射線取扱主任者），遺伝子組換え安全

委員会，安全衛生委員会，理科教育講座代表，教育研究評議会，教務企画委員会

大和田道雄　Owada, Michio　　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 自然地理学，気候学，気象学，都市大気環境学

❸ 日本地理学会（代議委員），日本気象学会（中部支部理事），日本農業気象学会，日本生気象学会，大気環境学会，国際環境研究協会，愛知教育大学地理学会

❹ 理科研究Ａ（１年），地球環境科学Ⅱ（２年），環境と人間（２年），地学Ⅱ（２・３年），大気水圏科学Ａ（３年），地球環境科学演習（３年），総合演習（３年），大気・水圏科学演習Ｂ（４年），地球環境気象学教育論（大学院）

地球温暖化に伴う大気大循環変動のメカニズムを理解させ，身近な地域環境に及ぼす影響と環境の維持･改善に向けての意識を認識させるよう努力している。

❺ 地球温暖化に伴う大気大循環場の変動と異常気象の関係について，東アジアとヨーロッパとのテレコネクションについて解析を進めている。また，極循環変動については北極圏（ラップランド）で調査中である。

業績リスト：

口頭発表：

大和田道雄（2004）：渥美半島先端部における局地気候調査。日本地理学会春季大会，日本経済大学。

大和田道雄・内山智穂（2004）：北太平洋高気圧の盛衰に伴う名古屋市のヒートアイランドの挙動について。日本気象学会春季大会，気象庁。

大和田道雄・畔柳洋子（2004）：100hPa面における夏季の亜熱帯高圧帯と異常気象との関係について。日本地理学会春季大会，日本経済大学。

石川由紀・大和田道雄（2004）：東アジアにおける秋季の豪雨発生に関わる帯状流のトラフと亜熱帯高圧帯。日本地理学会春季大会，日本経済大学。

大和田道雄・畔柳洋子・石川由紀（2004）：100hPa面における亜熱帯高圧帯のイランモードとヨーロッパの異常気象について。日本気象学会春季大会，気象庁。

大和田道雄・中川由雅（2004）：北太平洋高気圧時における名古屋市の局地降雨変化特性。日本気象学会，気象庁。

大和田道雄・中山祐貴（2004）：東アジアの梅雨前線活動期における水平風ベクトル解析からみた大気大循環場の変動。日本気象学会春季大会，気象庁。

川崎泰一・大和田道雄（2004）：都市内における緑地配置の都市循環モデル評価の検討。日本気象学会春季大会，気象庁。

論文発表：

大和田道雄・石川由紀（2004）：環境教育への気候学的アプローチ―愛知教育大学キャンパスの温度環境―。愛知教育大学自然観察実習園報告，No.24，１～９。

大和田道雄・石川由紀（2004）：環境教育への気候学的アプローチ―愛知教育大学の風力ポテンシャル―。愛知教育大学共通科目研究交流誌「教養と教育」，第４号，11～19。

大和田道雄・石川由紀（2004）：東アジアと西ヨーロッパの気候特性と最近の異常気象。安城市史研究，第５号，⑴～⑿。

大和田道雄・畔柳洋子（2004）：北半球におけるZonal indexの季節別経年変動について。愛知教育大学研究報告，第53輯，（自然科学編），pp.55～62。

❻ 教育実地委員，水質汚濁委員

❼ 中部国際空港調査専門委員，同環境委員会委員，岐阜県環境影響評価審査委員，名古屋市都市計画審議会委員，名古屋市環境審議会大気部会長，日進市環境基本計画委員会会長，安城市史編集委員会自然部会長，その他講演等

❽ NHK名古屋放送局ラジオ「中部あさいちばん」隔週水曜日「暮らしの気象学」担当

牛田　憲行　Ushida, Noriyuki　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 物理学，素粒子・原子核物理学，物理学一般，物理教育・理科教育

❷・日本物理学会論文賞（2002年３月）

❸ 日本物理学会，アメリカ物理教師協会，高エネルギー物理学同好会，宇宙線研究者会議

❹ 専門教育入門（１年），物理学Ⅰ（２年），物理学Ⅱ（３年），理科研究Ａ（２年），基礎物理学実験（２年），放射線科学Ⅰ（３年），環境と人間セミナー（３年），高エネルギー物理学Ⅰ・Ⅱ（大学院），高エネルギー物理学演習（大学院）

戦後最悪の学習指導要領の「策定」と連動した，教科専門半減の教免法の「改正」に対応した現行カリキュラムで，教科の力量低下は進行している。副免取得条件を見れば明らかなように「教科に関する科目」の半減化をカバーしないで，「教職に関する科目」を教免法以上にきつく縛っていることを至急見直すべきである。

物理の勉強では，教科書に書かれた，確立され体系化されたものを学ぶ正統的方法だけでなく，物理が日常の実生活に満ちており，身の回りの現象から出発して物理や自然の基本法則に接近していくこと。自然科学の発展が仮説と試行錯誤の歴史であり，人間の自然認識の発展と物理学の段階をふまえながら歴史的に見ていくこと。また，さまざまな科学者の生き方，考え方を知ることなどを強調している。

本学に勤める教員は，現行学習指導要領等に翻弄されている学校現場の実状を，いろいろな方法でもっと知る必要がある。

❺ ⑴　ニュートリノ振動の探索：日欧共同研究であるOPERA実験に参加

⑵　K中間子―エマルジョン反応による二重ハイパー核の研究

⑶　小学校・中学校理科教育現場の実態調査と分析　理科教科書・指導書の検討・分析（小学校から高等学校まで）

Experimental study of trimuon events in neutrino charged-current interactions, Physics Letters B596 (44-53) 2004

Measurement of charm production in antineutrino charged-current interactions, Physics Letters B604 (11-21) 2004

Measurement of fragmentation properties of charmed particle production in charged -current neutrino interactions, Physics Letters B604 (145-156) 2004

❻・日本教育大学協会評議員，日本教育大学協会東海地区会評議員，理科教育講座代表

❼・大学評価・学位授与機構大学評価委員会評価員（分野別教育・研究評価「総合科学」），西尾市立鶴城中学校学校評議員，日本科学者会議大学問題委員会委員，日本科学者会議愛知支部代表幹事

長沼　健　Naganuma, Takeshi　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 分析化学，化学教育，環境分析

❸ 日本化学会（東海支部幹事），日本分析化学会，日本理科教育学会（評議員），日本環境教育学会，化学教育協議会（東海支部副会長），大学等環境安全協議会，カンボジア理数科教育改善研究会

❹ 教育関連：

理科研究Ａ，総合演習Ⅰ・Ⅱ

専門科目：

環境ゼミナールⅠ・Ⅱ，自然環境論Ⅰ，分析化学，分析化学実験，分子機能化学Ａ・Ｂ，分子機能化学実験Ａ・Ｂ，化学教材論，化学教材実験，環境化学教育論，化学実験

分析化学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院），理科教材論Ⅲ（大学院），環境教材特論（大学院），総合研究（大学院）

問題点：

学生との接点が少ない。学生の望む授業が制限される可能性がある（キャップ制）。

FD活動：

附属中学校において授業観察，授業研究会に出席し，大学の総合演習に生かす。

抱負：

自らが動き出す教育を目指したい。そのためコミュニケーションが一番と考えている。

実践的教育活動：

附属岡崎中学校での日常活動とゲスト授業。学生と一緒に中学校へ出前実験を実施。

❺・現在の研究テーマ（内容及び今後の研究計画）：

１）イオン会合系の結合様式の教材化と分析的適用・・イオン結合的な概念の理解

２）実験の簡略化とその教育的効果・・発展途上国への支援を探る意味において

３）自然水の性質と化学成分の関連・・微量で関与している物質について検討

・業績リスト（著書，論文，口頭発表，作品，演奏発表など）：

「色素結合法による河川水中の溶存タンパク質の比色定量」愛教大研究報告（自然科学）

「カンボジアにおける理科ワークショップの教育効果」愛教大教育実践総合センター紀要

「酸化と還元は体の中でどのように行われているか」理科の教育No.12

口頭発表：

「カンボジアにおけるワークショップの教育的効果」第54回日本理科教育全国大会

「“燃焼”の教材史と科学性」第51回日本理科教育学会東海支部大会

❻ 附属岡崎中学校長，附属学校運営委員会

❼ 刈谷市環境審議会（会長），刈谷市科学技術・理科教育推進委員（顧問），中学４校，高校１校で出前講義，名古屋市立小学校現職研修，名古屋市科学館ボランティア研修，刈谷市・豊橋市実験イベント担当，JICA研修員の指導

太田　忠之　Ohta, Tadayuki　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 細胞生物学，発生生物学

❸ 日本生物教育学会（学会誌編集委員），日本魚類学会，日本動物学会，医学生物学電子

顕微鏡技術学会

❹ 細胞生物学（学部），動物生理学実験（学部）ほか。
細胞生物学特論Ⅰ（大学院），細胞生物学演習（大学院）ほか。

❺ 現在の研究テーマ：
魚類の体色変化における一次反応。タイリクバラタナゴの配偶行動。魚卵における精子侵入過程とアクチンフィラメントの関係など

論文：
The physiological response to light of scale melanophores of the rose bitterling *Rhodeus ocellatus ocellatus*. Bull. Aichi Univ. Educ., 53:67-72 (2004)
小学校５年理科教科書に描かれたメダカの向きに関する一考察，愛教大教育実践総合センター紀要，7:171-173 (2004)。

学会発表：
タイリクバラタナゴの配偶行動における産卵管の役割，日本生物教育学会（第76回大会）。

❻ 教育研究評議会評議員（平成16，17年度），理系器機共同利用センター運営会議委員

❼ 県内の高校教員（生物）を対象にSPP事業の一環として，半日講義・実習を行った。

佐藤　洋一　Sato, Hirokazu　教授　21世紀教育創造センター主任研究員　理科教育講座　理学博士

❶ 物理学，物性物理学，金属電子論，大学教育

❸ 日本物理学会，日本金属学会，大学教育学会

❹ 科学技術史（１年），理科研究Ａ（２年），基礎物理学実験（２年），電磁気学Ⅱ（３年），電磁気学演習（３年），環境と人間セミナー（主題科目3年），量子物理学演習（４年），固体物性論Ⅰ＆Ⅱ（大学院）
本学においてどのように授業が行われ，学生がどのように学んでいるかという現実を，きちんと見ようとする段階に入った。次年度は，自主性と協働性を重んじながら，授業の改善活動が全学的に大きく進展する土台づくり。

❺・現在の研究テーマ：
「複雑な電子化合物の安定機構」，第一原理のバンド計算（LMTO, FLAPW methods）を用いての電子構造の解明によるHume-Rothry ruleの証明

・業績リスト：
論文：
共著　Verification of Hume-Rothery electron concentration rule in Cu5Zn8 and Cu9Al4 γ brasses by ab initio FLAPW band calculations, Phys.Rev.B71, 165103, 2005

・口頭発表：
⑴「Studies Atomic and Electronic Structures of γ-phase Zn-X (X=Cu, Ni, Co, Fe, Pd) Electron Compounds」(Uichiro Mizutani, Hirofumi Takahashi, Tsunehiro Takeuchi, Hirokazu Sato, Ryoji Asahi, Aomori Univ., 2004.9.15)，⑵Al-Cu-Li近似結晶の擬ギャップに寄与するゾーン面の特定（佐藤洋一，旭良司，竹内恒博，水谷宇一郎，日本金属学会2004年秋期（第135回）大会，秋田大，2004.9.28-30)，⑶Phase Stability and Electronic Structure of Zr-based Glassy Alloys and Relevant

Compounds（長谷川正，武富剛士，加藤秀実，竹内恒博，佐藤洋一，水谷宇一郎，日本金属学会2004年秋期（第135回）

❻ 教育研究評議会評議員・教務企画委員会委員，21世紀教育創造センター主任研究員

寺中　久男　Jichu, Hisao　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 物性物理学（理論）

❸ 日本物理学会

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），理科研究ＡⅠ（１年），力学Ⅰ（２年），基礎物理学実験（２年），物理数学演習Ⅰ（２年），共通科目「環境と人間」（２年），量子物理学Ⅰ，Ⅱ（３年），量子物理学演習Ⅱ（４年），環境教育ゼミナール（４年），凝縮体の物理学（大学院）ほか卒業研究の指導等に関すること。

昨年度も触れたが，2000年度の教育課程改革の弊害が顕在化し，物理学領域の基礎科目を履修せずに卒業研究に臨む学生が多くなった。物理学の性格上関連領域の積み上げが必要であるので，大学教育にふさわしいカリキュラムの再検討を急ぐ必要がある。基本的な大学教育を充実し，「大学における教員養成」の原則を実質化することによって，現在の学校現場で要求されている教師としての力量が養成されると考えている。学部段階における専門教育は基本的には広い意味での教養教育であるので，この充実が高い教養を身につけた卒業生の輩出につながり，教育大学といえども，大学教育の使命の一つを果たすことになると思っている。

❺ 研究テーマ：強相関電子系の物性

金属等の物質中の多数の電子の間に働く相関効果が非常に大きい場合，通常の金属中の電子の状態とは異なり，特異な状態を引き起こす。それが物質の特異な性質に反映し，物性物理の内容を豊かにし，かつ興味深いものにしている。

本学では，外国の物理学関連の主要な学会雑誌は読めず，共同者がいない現在，研究環境としては孤立した感がある。

❻ 委員会等：大学改革推進委員会（第二部会，連合大学院設置構想部会），図書館委員会

市橋　正一　Ichihashi, Syoichi　　教授　　理科教育講座　　農学博士

❶ 花き園芸学

❷ 名古屋国際蘭会議奨励賞（2004.３），名古屋国際蘭会議賞（1999.３），名古屋国際蘭会議奨励賞（1997.３），名古屋国際蘭会議奨励賞（1993.３）

❸ 園芸学会，同東海支部会（評議員），日本農業教育学会（評議員），日本生物環境調節学会（評議員），日本植物細胞分子生物学会，日本植物工場学会，植物化学調節学会

❹ 環境教育ゼミナールⅠ（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），生物学Ⅱ（２年），生物学実験（２年），植物環境機能論（３年），植物生産学（３年），環境緑化実習（３年），保育内容研究・環境Ｂ（３年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），生物学ゼミナールⅠ（４年），応用生命科学特論演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

２年，３年の講義では，ビデオプロジェクタを利用したプレゼンテーション形式の授業を行った。前年度に続き資料をすべてHPからダウンロードできるようにしたため意欲的に取り組む学生は，事前に，HPから資料をプリントアウトしており，この方式の授業でも問題は無いものと考えられた。しかし，授業中に眠る学生も見られ，この方式には問題もある。この点を改善するため，授業中に出欠調査を兼ね発問を多く行うよう

心がけ，眠る学生を減らすよう努力した。４年では卒論作成に向け，パソコン，インターネットを積極的に利用した実際的な教育を行った。これらの経験は社会にでてからも必要で，その効果は大きいものと考えている。卒論指導では，英語論文の読解力の向上に努力している。残念ながら卒論生の英語に関する能力は十分ではない。翻訳のきめ細かな個別指導によって，英文を完全に理解できるように訓練している。大学院では，英文誌を読解しながら，専門的知識の習得を目指し，また各自の持つ個別の知識との関連付けを行い，生きた役立つ知識になるよう配慮している。

❺ ラン科植物の栽培管理，増殖，育種に関する研究：主にファレノプシスを用いその生育の改善を目的として，CO_2吸収と施肥管理の観点からの解明を行っている。その成果は，学会での発表を通じ，また生産者を対象にした講演会で，あるいはインターネットを利用して普及を行っている。

・論文：

「ドリテノプシスの生育とイオン吸収量に及ぼす培養液のイオン組成の影響」，園芸学会雑誌73(3)：280-286. 2004. 5

「施肥潅水時期と植込み材料がドリテノプシスの生育と化学組成に及ぼす影響」，愛知教育大学研究報告，2005

・ポスター発表：

「*Cymbidium pumilum*の第一世代交配種が形成した非還元雌性配偶子」，園芸学会平成16年度秋季大会．静岡大学

「Effects of nutrient solutions on the growth, ionic absorption and chemical contents of *Doritaenopsis*」，18th WOC, Dijon, France

❻ 自然観察実習園管理運営委員会委員，同小委員会委員，国際交流委員会委員

❼ 中日園芸文化協会理事，名古屋国際蘭展組織委員会委員長，アジア太平洋蘭会議委員，世界蘭会議委員

・講演：

「洋らんの栽培管理技術について」，埼玉県花と緑の振興センター（埼玉県種苗センター，2004. 7 .23）

「洋蘭の栽培管理技術について」，栃木県洋蘭生産組合（ホテルニューイタヤ，2004.10.15）

「コチョウランの国際的なリレー栽培の発達史と現状について」，ラン懇話会（東京農業大学グリーン・アカデミーホール，2004.11.13）

「コチョウラン生産における日本，東南アジアでの現状と今後の展望」，（愛知県立鶴城丘高等学校社会人講師，2005. 2 .14）

「コチョウランの栽培と種苗生産技術について」，（徳島県阿南農業協同組合アグリあなん農業総合センター，2005. 2 .16）

・平成16年度全国花き品評会洋らん部門審査長（豊明花き株式会社，2004.12. 1 ）

・平成16年度アカデミック・クエスト講座「花王国愛知での花研究」（2004.12.15）

・全国花き生産協会胡蝶蘭部門肥料試験勉強会講師（愛知県中小企業センター，2005. 1 .17）

・放送大学客員教授　2003. 4 . 1 －2005. 3 .31

❽・韓国農村開発局名誉研究員（2003. 7 . 1 －2006. 6 .30）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

・タイワンのファレノプシス生産状況の視察を行う（2004.4.10－2004.4.15）
・インドネシアのファレノプシス生産状況の視察を行う（2004.7.24－2004.7.29）
・カンボジア・プノンペン並びにパイリン周辺の野生ランの視察を行う（2004.9.16－2004.9.20）
・ベトナム・ホーチミン市並びにラダット周辺の花生産と利用状況の視察を行う（2005.2.2 －2005.2.6）
・中国河南省南街村からの招聘により花生産状況の視察とファレノプシス生産に関する指導を行う（2005.3.26－2005.3.31）

芹澤　俊介　Serizawa, Shunsuke　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 生物学・環境科学，専門分野：生物多様性，地域自然環境

❸ 日本植物学会，日本植物分類学会，日本環境教育学会，International Association of Plant Taxonomy

❹ 環境教育概論（1年），自然環境論Ⅱ（1年），生物環境教育論（2年），総合演習Ⅰ（3年），総合演習Ⅱ（4年），環境教育特論（大学院），多様性生物学特論（大学院）など

FD：自然科学入門授業記録の公表（「評論文の批判的読解による環境教育」に掲載）

生物環境教育論では，その一部を使って，中学生にもできるログハウス開発を試みた。昨年度は中越地震のため電動工具の修理ができなくなり，最終的な組立には至らなかったので，今年度再実施したいと考えている。

総合演習Ⅱでは，一昨年度に続き学生が教育実習で見てきた「総合的な学習の時間」の観察記録をまとめて，「私の見た総合的な学習　第2集」（76頁）を作成した。レポートは全員A評価の方針で，A評価相当になるまで何回でも書き直させた。昨年以上に手間がかかったが，一般校の実践事例をランダムに抜き出したものであること，第三者の観察記録であることの2点で，類例の少ない事例集ができたものと考えている。

その一方で，昨年は学生のグウタラ・ハラスメントに悩まされた1年でもあった。教育実習でいい加減な研究授業をした学生を厳しく叱りつけたら，「怖くて顔が合わせられない」と理事に訴える。理事があわてて対応する。これでは大学の秩序は保てない。大学は主体的に問題意識を持ち，勉学に取り組む場所，このことを改めて確認したいものである。

❺ ⑴ 日本産絶滅危惧植物（特にシダ植物，テンナンショウ類）の現状調査と保全
環境省版レッドリストの見直し作業，屋久島におけるシカ食害対策等に関与した。

⑵ 愛知県産維管束植物の多様性に関する調査と地方版レッドデータブックのあり方
平成16年度は以下の1論文といくつかの雑録を公表した。

芹沢俊介，2005，愛知県のムヨウラン類，分類5：33-38。

⑶ タンポポ，サクラ，ミゾソバ等の種分類・種分化
この分野は渡邊幹男助教授と共同で研究を行っているので，渡邊氏の頁を参照されたい。論文3件。

芹沢俊介，2004，雑種性帰化タンポポの増加とタンポポ調査の意義，関西自然保護機構会誌26⑴：43-50。

Oohara, T., S.Serizawa and M.Wakabayashi, 2004. A new species of Prunus (Rosaceae) from the Tama hills, west Tokyo, Japan. J. Jpn. Bot. 79:343-349.

花井隆晃・渡邊幹男・芹沢俊介，2004，ミゾソバ（タデ科）の分類学的再検討⑴愛知

県及び岐阜県南東部における単位群の識別，植物地理・分類研究52：167-174。

⑷　環境教育

以下の小冊子 2 点を公表した（発行は2003年度だが，昨年の年次報告に未記載）

評論文の批判的読解による環境教育（愛知教育大学ブックレット　環境教育の展開と実践②，29頁）

分子生物学的手法を用いた環境調査（愛知教育大学ブックレット　環境教育の展開と実践③，37頁）

❻ 環境教育課程代表。正規組織外では愛知教育大学ブックレットを企画・編集した。

❼ 審議会：

愛知県環境審議会委員，同都市計画審議会環境影響評価部会委員，同環境影響評価審査会委員，愛知県文化財保護審議会委員，三重県環境影響評価審査会委員，同生物多様性調査検討委員会委員，経済産業省2005年日本国際博覧会に係る環境影響評価会委員，博覧会協会環境影響評価アドバイザー会議委員，愛知県植物誌調査会代表など

講演会講師：三好悠学カレッジ（ 5 回），東郷町春の自然観察会など

その他の普及活動：名古屋鉄道広報誌Windに「名鉄沿線野の花紀行」を連載

教科書の編集：大日本図書・中学校理科第二分野 7 章を執筆・編集した

教材図書等の供給：平成16年（暦年で集計）の注文73件，配布部数合計4054部

遠西　昭壽　Tonishi, Shoju　　教授　　理科教育講座　　教育学修士

❶ 理科教育学，地学（岩石学）

❸ 日本理科教育学会　理事・事務局長，日本科学教育学会，日本地学教育学会　評議員，日本教科教育学会，日本教育学会，初等教育研究会，日本地質学会，名古屋地学会　副会長，National Association for Geoscience Teachers（NAGT，米国）など

❹ 理科教育ＣⅡ，理科教育Ｂ，総合演習Ⅰ及びⅡ，地学ゼミナール，教育実習事前指導，教育実習事後指導（学部），理科教育方法論Ⅰ及びⅡ（大学院），理科教育方法論演習（大学院），授業研究Ⅲ（大学院），特別研究（大学院）

❺ 文部科学省科学研究費補助金：

基盤研究⑹⑵「新しい科学観からの理科授業再考」研究代表者

基盤研究⑹⑵「理科教育における臨床的研究と理科教師教育への適用」研究分担者，代表者　吉田　淳

基盤研究⑹⑴「教養と専門を両立させる科学教育カリキュラムの構築」川上科研研究分担者，代表者　川上昭吾

その他の委託研究：

財団法人社会経済生産性本部エネルギー環境教育情報センターエネルギー教育調査普及事業「中学生の健全なエネルギー・環境観の形成を目指す体験学習プログラムの開発」研究分担者，代表者　吉田　淳

論文・報告書等：

遠西昭寿「新科学観からの理科授業の再解釈」理科の教育，16-19，2004

遠西昭寿「小学校及び中学校における資源・エネルギーの扱いについて」愛知教育大学エネルギー環境教育研究会報告書，11-27，2005　など

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

口頭発表：

遠西昭寿「概念変換をめざす授業への方法論的示唆」日本理科教育学会全国大会

など

❻ 附属高等学校長，附属高等学校の入試改革，カリキュラム改革，附属高校と大学の「高大連携選抜入試」の導入

❼ 鳳来寺山自然科学博物館学術委員，愛知県教職員組合教育研究集会助言者，名古屋市教職員組合教育研究集会助言者，その他，公立学校の研修会講師　など

澤　　武文　Sawa, Takeyasu　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 天文学（銀河天文学）

❸ 日本天文学会（教育問題懇談会委員），名古屋地学会（会長），天文教育普及研究会（会長）

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），理科研究ＢⅡ（１年），地学Ⅰ（１年），地学教材研究（２年），地球環境科学Ⅱ（２年），地学Ⅱ（３年），宇宙科学Ａ（３年），宇宙科学実験Ｂ（３年），環境情報処理演習（３年），宇宙科学演習Ｂ（４年），地学ゼミナールⅠ（４年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），天体物理学特論Ⅰ（大学院），天体物理学特論Ⅱ（大学院），天体物理学特論演習Ⅰ（大学院），天体物理学特論演習Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）

理科教育講座では教員養成課程と環境教育課程の学生を全教官で教育するというシステムを採用しているため，教育科目の枠の関係やキャップ制によって専門の授業を受講できない課程の学生がいる。そのため，積み上げの授業を行うことができず，自然科学を体系的に教育することが非常に困難になっている。また，地学の特性かもしれないが，多くの異なる学問分野があるため細切れの講義が多くなってしまい，十分な教育ができない状況である。

FD活動は行っていない。

❺ 局所銀河群の起源と運動に関する研究

宇宙初期に銀河系とアンドロメダ銀河が衝突し，その結果大小マゼラン雲などの局所銀河群内の多くの矮小銀河が形成され，現在の位置にまき散らされたという，局所銀河群の起源についてのこれまでにない新しい説を提唱するもので，2005年６月発行の日本天文学会欧文報告書（PASJ）に掲載予定である。

❻ 教育研究評議会評議員（学生支援担当）

❼ 平成16年度SPP研究者招聘講座（対象：愛知県立岡崎北高等学校生徒30名）「銀河系の成り立ちとわが地球」第１回（於：愛知県立　岡崎北高等学校，90分）

平成16年度SPP研究者招聘講座（対象：愛知県立岡崎北高等学校生徒30名）「銀河系の成り立ちとわが地球」第２回（於：愛知教育大学自然科学棟，90分）

平成16年度SPP教員研修「ナノ太陽系」（対象：愛知県中学校教師７名）（於：愛知教育大学自然科学棟，120分）

第21回天文台一般公開，講座「巨大隕石の衝突と恐竜絶滅」

第22回天文台一般公開，講座「ブラックホール何でも質問箱」

第23回天文台一般公開，講座「宇宙人はどこにいる？―宇宙人探査―」

第24回天文台一般公開，講座「星まで届く定規はあるの？―星の距離の測り方―」

第25回天文台一般公開，講座「天文何でも質問コーナー」

第26回天文台一般公開，講座「本日のキーワード」，「私の研究から―高速度雲の起源―」

天文講演「ブラックホール質問箱」（於：四日市市立博物館）
天文講演「宇宙の果てはどこにある―パワーズオブテンの世界―」（於：ディスカバリーパーク焼津，90分）
「その道の達人」派遣事業「宇宙の達人コース」福岡市立舞松原小学校にて 6 年生100人を対象に宇宙に関する講義（90分）
NHK文化講座「夕日はなぜ赤い？空はなぜ青い？スペクトルの話」（90分）
NHK文化講座「磁場が織りなす宇宙の不思議」（90分）
NHK文化講座「なぜ銀河は渦をまく？」（90分）
NHK文化講座「ブラックホールの不思議」（90分）
NHK文化講座「宇宙何でも質問箱」（90分）
NHK文化講座「私の研究から　銀河系とアンドロメダ銀河の衝突」（90分）

吉田　　淳　Yoshida, Atsushi　　教授　　理科教育講座　　教育学修士

❶ 理科教育学，科学教育，教科教育学

❸ 日本理科教育学会事務局次長，日本科学教育学会理事，日本教科教育学会理事，日本初等理科教育研究会，National Association of Research in Science Teaching，National Science Teachers' Association，愛知教育大学エネルギー環境教育研究会（代表）

❹ 理科教育Ｂ，ＣⅣ（2 - 4 年次），化学教材論，総合演習Ⅰ，総合演習Ⅱ，環境教育ゼミナールⅡ，化学ゼミナールⅠ・Ⅱ，理科授業研究特論Ⅰ（大学院），理科授業研究特論Ⅱ（大学院），理科授業研究演習（大学院），理科授業研究（大学院）

学部授業では，理科教育に関する理論を具体的な事例を交えて扱っている。また，理科教育ＣⅣでは学生による学習指導案の作成，発表など実践的な側面を重視し，発表能力や討論を通して資質能力を高めている。大学院教育では，小，中，高等学校の理科教員の受講生を交えて，実践から見た理論の省察や理論から実践を振り替えることを促し，理論と実践の融合を図っている。学部直進の大学院生が，理論面だけの研究ではなく実践につながる研究を目指すなどの成果が上がっている。

❺○科学研究費補助金による研究：
・「理科教育における臨床的研究と理科教師教育への適用」（代表：1,400千円）
・「優れた小中学校理科授業構成要素に関する授業ビデオ分析とその教師教育への適用」（分担：600千円）

○その他の補助金による研究：
・中学生の健全なエネルギー・環境観の形成を目指す体験的学習プログラムの開発（代表：4,200千円）
・小，中，高等学校向け理科実験クリップビデオの開発とその適応（代表：2,600千円）

○研究論文：
・吉田　淳他「科学観を取り入れた理科授業の形成について　Ⅰ―理科授業観と科学観―」日本理科教育学会論文集　第 2 号
・吉田　淳他「科学観や理科授業観が授業に与える影響について―教員養成系学生と中学校理科教師が持つ科学観と授業観の現状と課題―」日本科学教育学会　年会論文集 28

・吉田　淳他「中学校理科教師が持つ科学観や理科授業観について―中学校理科教師と教員養成系学生が持つ科学観と授業観の比較」日本教科教育学会全国大会論文集，第30巻
・吉田　淳「初等・中等レベル教員養成における「教科内容」の検討―アメリカ合衆国の大学における教員養成プログラムとの比較」理科教育研究，第13・14合併号
・A Yoshida, Developing and Using Digital Materials in Science Education in Japan, 2005 International Seminar on The Comparison of Science Education Materials of Western and Asian Countries, Korean Association for Research in Science Education.
・吉田　淳他「米国の理科教育における指導法と教材の現状と課題」，日米理数教育比較研究会
・吉田　淳他「中学生の健全なエネルギー・環境観の形成を目指す体験的学習プログラムの開発」，愛知教育大学エネルギー環境教育研究会報告書（編著）

○口頭発表：

国内学会全国大会３件，国際学会（韓国）１件

研究活動においては，科学研究費補助金のテーマである理科授業に関する一連の研究から，授業のあり方を理論面，実践面の相互関係を明らかにしてきた。その成果を小，中学校の理科授業研究に還元するとともに，学部大学院授業や卒業研究，修士論文指導などの学生指導において適用できる内容を抽出してきている。平成14-16年度の３カ年にわたり刈谷市内６中学校との共同研究で「エネルギー環境教育」の実践研究を推進してきた。最終年度として研究成果を報告書にまとめることができた。高等学校理科実験ビデオクリップ開発から始めたデジタルコンテンツの開発や事例研究は小，中学校向けまで拡大している。これまでの研究成果を国内学会等で発表するとともに，韓国科学教育学会（KARSE）の国際セミナーで発表することができた。

❻・教育研究評議会評議員，財務委員会委員，社会連携部会他

大学運営に関して，教育研究評議員としてあるいは財務委員として，大学運営にさまざまな提案を行った。その一部は大学の運営に反映された。また，社会連携を推進する立場から「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」の企画に中心的に参加した。

❼・文部科学省：日米理数教育比較研究会（カルコン）委員（理科教育指導法教材班班長）として11/14-11/23の間アメリカ合衆国にて面接調査，授業調査
・岡崎市立上地小学校，名古屋市立五反田小学校等において講演，指導助言
・愛知県総合教育センター10年目研修（高校理科）において講義担当

平成14-16年度文部科学省の委嘱による「日米理数科比較研究会（カルコン）」において，アメリカ合衆国の理科教材指導法に関する小，中，高等学校現地調査や全米科学財団（NSF），全米理科教師協会（NSTA）などにおいて資料収集を行ってきた。この成果は，今後我が国が取り組むべき科学教育の方向について示唆するものと考えられる。この研究の一環として，我が国の理科学習指導要領の英訳作業に従事し，我が国の理科教育の理解普及に貢献することができた。

大学教員の重要な使命として，研究成果の社会への還元がある。附属学校，愛知県内をはじめさまざまな小，中学校，研究会，教育総合センターなどにおいて理科授業の研究を通した授業改善について助言指導，講演を行ってきた。この社会的活動においても，研究成果を実践レベルに反映させることを通して評価されることを期待している。

矢崎　太一　Yazaki, Taichi　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 物理学，非線形物理，音響工学

❸ 日本物理学会，低温工学・超伝導学会，日本音響学会，熱音響自励振動研究会

❹ 自然科学入門（１年），基礎物理学演習（２年），基礎物理学実験（２年），理科研究ＡⅡ（１年），環境と熱力学（２年），物理学実験Ⅰ（３年），低温物理学特論Ⅰ（大学院）等

共通科目について非専門分野の学生が積極的に授業に参加できるように内容を改め，特に「物理学」の意義・価値及び歴史について時間をかけた。授業後多数の質問があったのには驚いた。改革すべきは専攻科目である。授業内容の予習・復習をしない学生はもちろん，試験勉強すること無しに試験を受ける学生が増加している現状に憂慮している。授業内容よりはむしろ学習意欲を高めるための環境改善が必要と考える。

❺ 「非平衡熱力学」を確立するための基礎研究の遂行と，非平衡の観点から「エンジン」を理解するための新しい方法と概念を実験的に提案することを目的する。

・Experimental demonstration of thermoacoustic energy conversion in a resonator. Phys. Rev. E69, 066304 (2004).

❻・共通科目委員会委員，就職委員会専門委員，理系機器共同利用センター長

河村　善也　Kawamura, Yoshinari　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 古生物学，関連分野：地質学，第四紀学，哺乳類学，考古学，人類学

❸ 日本古生物学会，日本地質学会，日本第四紀学会（評議員，企画担当幹事，日本第四紀学会50周年記念事業実行委員会委員），日本哺乳類学会，日本洞窟学会，地学団体研究会，化石研究会

❹ 専門教育入門Ａ（１年），自然科学入門（１年），地学Ⅱ（２年），地学教材研究（２年），地球環境科学Ⅰ（２年），地史学演習Ａ（２年），地学野外実習Ⅰ（２年），地学野外実習Ⅱ（３年），地球環境科学演習（３年），地史学Ａ（３年），地史学実験Ｂ（３年），環境地学教材実験（３年），地学ゼミナールⅠ（４年），地史学演習Ｂ（４年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），古生物学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院），古生物学特論演習Ⅰ・Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ・Ⅱ（大学院）

担当は地学のうち，古生物学と地質学の分野である。この分野では実際の自然を観察して学ぶことが重要と考えられるので，授業では特に野外での実習，自然史系博物館での実習，実物標本の観察などを出来るだけ多く取り入れて，学生の興味を引き出し，わかりやすく身につく授業を行うよう心がけている。

❺ 現在の研究テーマ：

新第三紀・第四紀の脊椎動物化石の研究と新第三系・第四系の層序学的研究。今後は日本での研究だけでなく，海外での研究もさらに推進していきたい。

・業績リスト（著書・論文など）：

Kawamura, Y. (2004) Die Säugetiere der japanischen Inselkette vom Pleistozän zum Holozän. Wieczorek, A., Steinhaus, W. und Sahara, M. (ed.) Zeit der Morgenröte: Japans Archäologie und Geschichte bis zu den ersten Kaisern. p.40-44. Reiss-

Engelhorn-Museen.

稲田孝司・河村善也（2004）岡山県新見市足見で発見された中期更新世洞窟堆積物とその哺乳類化石群集，第四紀研究，vol. 43，no. 5，p. 331-344。

稲田孝司・河村善也・樽野博幸（2005）原ノ辻遺跡下層（幡鉾川層）の後期更新世哺乳類化石，「国指定特別史跡原の辻遺跡調査報告書（総集編）」，p.213-225．長崎県教育委員会。

・業績リスト（研究発表）：

河村善也（2004）東アジアの第四紀タケネズミ類と新たに記載された絶滅種，2004年日本第四紀学会大会，山形大学。

河村善也（2004）哺乳類の絶滅史から現在を見る，日本学術会議地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会主催シンポジウム「私たちの明日を考える：地球史が語る近未来の環境」，明治大学。

・科学研究費補助金などの受領状況：

平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「第四紀の日本列島とその周辺における陸橋・氷橋の形成と人類の渡来―地質学・古生物学と考古学・人類学の学際的研究―」（代表者）240万円，平成16年度科学研究費補助金基盤研究(S)「分子系統学及び化石記録に基づく日本の生物相の起源と形成プロセスの研究」（分担者），平成16年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「在日本脊椎動物化石標本データベース」（分担者）

❻ 講座内大学院担当委員

❼・各種審議会等：

日本学術会議古生物学研究連絡委員会委員，日本学術会議地質科学総合研究連絡委員会第四紀学専門委員会委員，国際第四紀学連合（INQUA）層序・年代委員会アジア・太平洋地域分科会委員，国立科学博物館研究報告編集委員会編集顧問，豊橋市自然史博物館資料収集委員会委員，鳳来寺山自然科学博物館学術委員

・講演会など：

2004年４月「私の化石発掘記―野外のデータからモデルの構築まで」東海化石研究会・中日新聞社主催　第34回「化石を語る」文化講演会での講演。

柳澤　寛　Yanagisawa, Hiroshi　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 植物生理学

❸ 日本植物生理学会，ASPB

❺ 高等植物のポリアミン代謝関連酵素の研究

三浦　浩治　Miura, Kouji　教授　理科教育講座　理学博士

❶ 物理学，専門分野：表面物理，関連分野：摩擦物理

❷ 「2005 BEST REFERENCE WORK AWARD」by American Society for Engineering Education, USA

❸ 日本物理学会，日本応用物理学会，日本表面科学会，日本トライボロジー学会，マイクロマシンのトライボロジー研究会

❹ 基礎物理学実験（２年），物理学実験Ⅰ，Ⅱ（３年），物理学Ⅱ（３年），物理特別実験（４年），自然数学演習（１年），理科教育Ａ（１，３年），表面科学特論Ⅰ（大学院），表面科学特論演習Ⅰ（大学院）

理科，環境の学生に対する実験，講義を中心に授業を行っている。講義では，卒業研究を行うために必要な数学的な基礎，物理の基礎の習得を目標にしている。実験では，実験機具の使い方から，実験を行うに当たっての心構えなどが身につくように指導している。

❺ ⑴　摩擦の物理：原子，分子レベルからの摩擦現象の解明。
⑵　超潤滑状態の実現：摩擦がゼロになる状態の実験的研究。
⑶　分子操作の物理：分子の任意操作に必要な物理の構築。

・Key Issues of Nanotribology for Successful Nanofabrication-From Basis to C60 Molecular Bearings, Jpn. J. Appl. Phys.43(2004)4486-4491.
・Superlubricity of C60 Intercalated Graphite Films, e-J. Surf.Sci.Nanotech. Vol.3(2005)21-23.
・ナノマテリアルハンドブック（分担）：力学物性，ナノトライボロジー，エヌ・ティ・エス　2005年。
・MoS2(0001)/MoO3(010)/MoS2(0001) friction-reducing system, Wear 257(2004) 1133-1136.
・ナノ構造体の滑り・回転・転がり運動の拓く摩擦と超潤滑　固体物理（2004）６月号 388-398。

❻ 学芸４課程改革検討委員会委員（2004年度）
❼ 日本トライボロジー学会マイクロマシンのトライボロジー研究会委員（1999年４月～現在）

戸谷　義明　Toya, Yoshiaki　　教授　　理科教育講座　　農学博士

❶ 専門分野：有機化学（生物有機化学），理科教育
関連分野：天然物化学，光化学，生体物質化学
❸ 日本農芸化学会，日本化学会，日本理科教育学会，生物発光化学発光研究会
❹ 有機合成化学特論（大学院），化学特別実験（４年），化学ゼミナールⅠ，Ⅱ（環境教育ゼミナールⅡ）（４年），有機化学実験（３年），総合演習Ⅰ（３年），有機化学演習Ⅰ（２年），環境と人間展開Ⅰ「自然環境と化学」（２年），他全20科目
本学独自の訪問科学実験を，全学学生を対象とする有為な教員養成のための教育的な学校行事のボランティア活動とし，法人化に対応した運営システムを開発・整備して学生を指導・引率するために奔走した。
❺ １）甲殻類の殻に存在し，キチンに親和性を有する新規脂溶性ペプチドの単離，及び構造決定。これまでに，タラバガニから脂溶性という極めて稀な特性を有する１つのペプチドを単離したが，今後，さらに同様のペプチドを単離するとともに，それらのキチンへの親和性を確認し，機能を調べたい。
２）ウミホタルルシフェリン，及びその類似体の生物・化学発光における高効率発光機構の解明。特に，ルシフェリン中のインドール構造が果たす役割について詳細に調べるために，モデル化合物ICLAの改良合成経路を確立した。ルシフェリンモデルMCLA を凌駕する化合物設計，合成したい。
３）ウミホタルの生物発光の教材化・演示実験法開発のための検討及び基礎研究。ウミ

ホタルの凍結乾燥サンプルを大量に調製し，授業のための教材化，及び訪問科学実験のための演示実験法の開発を検討するとともに，学術的な応用を含め，ウミホタルの生物発光の応用のネックとなっている発光物質ルシフェリンを，抽出や化学合成により供給を可能にしたい。

4）訪問科学実験運営システムの開発・整備と化学への興味を喚起し，化学の理解を助長する新しい演示実験の開発。対外的な説明責任が果たせる訪問科学実験運営システムの開発・整備した。研究テーマでもある化学発光・生物発光を題材とした新しい化学マジックを演示実験として開発・検討し，訪問科学実験で実践した。

BIOSYNTHESIS OF ***VARGULA HILGENDORFII*** LUCIFERIN, ARISEN FROM L-ARGININE, L-TRYPTOPHAN, AND L-ISOLEUCINE, The 13th International Symposium on Bioluminescence and Chemiluminescence, 8/4, Pacifico Yokohama.

愛知教育大学の学生のボランティア活動による訪問科学実験システムの開発と実践，日本化学会第85春季年会，3/27/2005，神奈川大学。

おもしろわくわく訪問科学実験教室，￥500,000（共同担当者，平賀伸夫），大学等開放推進事業（大学Jr．サイエンス事業），放送大学（文部科学省）。

学生のボランティア活動による訪問科学実験システムの開発と実施，￥400,000，日産科学振興財団　理科・環境教育助成。

❻ 大学院入学試験部会委員，共通科目「環境と人間」コーディネーター（12/2004-）。

❼ 1）訪問科学実験で多くの学校等を訪問し，小中学生や科学展来場者に，科学への興味を引き起こし，理科好きを育む科学実験に接する機会を提供した。2004年度訪問回数（13回）：刈谷市立住吉小5/29，西尾市立平坂小6/23，刈谷市立平成小7/24，西尾市立平坂小9/22，岡崎市立広幡小10/6，豊橋「子どものための科学展」10/16，岡崎市立常磐東小10/27，岡崎市立竜海中11/13，三好町立北部小11/17，日進市立香久山小12/1，岡崎市立岩津小12/8，岡崎市立小豆坂小12/15，刈谷市立住吉小2/22/2005。訪問科学実験の新聞取材掲載〔主要紙，中日新聞11/29朝刊（全地域），讀賣新聞3/23/2005（愛知岐阜三重)〕，テレビ取材放映（主要局，中京テレビ3/1/2005ニュースプラス１，２分42秒)。

3）愛知県立明和高校，平成16年度１年生文化講演会講師10/29。

4）三重県立宇治山田高校，三重県理科教育研究会化学部会３学期研修会「化学マジックの種明かし」講師3/4/2005。

5）名古屋市科学館，古川為三郎サイエンス企画展「光る生きものたち」3/19/2005-4/3/2005，協力，原稿執筆「おもしろわくわく生物発光」，及びミニトーク「熱い光・冷たい光」講師4/1/2005。

菅沼　教生　Suganuma, Norio　　教授　　理科教育講座　　農学博士

❶ 植物生理学

❸ 日本植物生理学会，日本土壌肥料学会，American Society of Plant Biologists, International Society for Molecular Plant-Microbe Interactions，植物微生物研究会

❹ 環境教育ゼミナールⅠ（１年)，理科研究ＡⅠ・ＡⅡ（１年)，生物学Ⅱ（２年)，生物学実験（２年)，環境生物学（３年)，生物環境調節法（３年)，植物生理学実験（３年)，生物学ゼミナールⅠ・Ⅱ（４年)，環境教育ゼミナールⅡ（４年)，生物教育教材演習Ｂ（４年)，生物環境特別実験Ｂ（４年)，植物生理学特論Ⅱ（大学院）

学生が聞くだけの一方的な授業にならないように，１回の授業で可能な限りすべての

学生を指名して，問いかけるように努めている。これにより，学生の理解度を確認すること，授業に参加しているという意識をもたせることが，多少なりも可能になったと考えている。

❺ 現在の研究テーマ：マメ科植物と根粒菌の共生機構

業績リスト：

論文：

・cDNA macroarray analysis of gene expression in ineffective nodules induced on the *Lotus japonicus sen1* mutant. Mol Plant-Microbe Interact 17:1223-1233 (2004)

・Large-scale analysis of gene expression profiles during early stages of root nodule formation in a model legume, *Lotus japonicus*. DNA Res 11:263-274 (2004)

学会発表：

・Legume transcriptomics and the renaissance in symbiotic nitrogen fixation research. 2nd International Conference on Legume Genomics and Genetics (2004)

・A system biology approach to legume nodules metabolism and transport. 6th European Nitrogen Fixation Conference (2004)

・根粒特異的に発現が増大するミヤコグサnicotianamine synthase遺伝子，第14回植物微生物研究交流会（2004）

・ミヤコグサの自然老化根粒及び早期老化根粒における遺伝子の発現解析，第14回植物微生物研究交流会（2004）

❻ 組換えDNA実験安全委員会委員，学芸４課程改革検討会議委員

❼ 「小柴記念賞」審査員（豊橋市教育委員会），「学びとふれあい子ども教室」協力者（豊川市教育委員会），サイエンス・パートナーシップ・プログラム「教員研修」講師（愛知教育大学）

三宅　　明　Miyake, Akira　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 岩石学，鉱物学，地質学

❸ 日本地質学会，日本岩石鉱物鉱床学会，日本地学教育学会，名古屋地学会

❹ 学部授業では，教養科目，専門教育入門科目，理科専攻教科専門科目，環境教育課程専門科目について，合計14科目の授業（一部担当を含めて）を担当した。専門科目では，地質学や岩石学関連の内容であるが，実物を実際に観察することが内容の理解に重要であると考え，実習の授業以外であっても，教室内での講義とは別に野外での教育を積極的に取り入れた。大学院においても，２つの授業を担当したが，野外実習を主としたものであった。卒業研究では，３人の４年生学生を，テーマの設定から，野外での調査の仕方，室内作業の方法，論文作成や口頭発表まで指導した。また一人の大学院２年の学生の指導を昨年に引続き行った。

❺ 山口県岩国-柳井地域の領家変成帯の地質調査を４月，７月，８月，１月の４回にわたり（１回につき，３～７日間）実施し，またそこで多くの岩石試料を採取し，さらに採取した岩石の顕微鏡観察を行った。その結果，さまざまな新しい知見が得られたが，現在その結果を論文として作成中である。

❻ 理科教育講座（地学領域）の時間割作成委員として，時間割作成委員会と講座（又は領

域）との連絡を行うとともに，平成17年度の理科教育講座（地学領域）の時間割作成に携わった。

❽ 名古屋地学会の編集委員として，雑誌「名古屋地学」の編集を行い，地域の地学普及活動に寄与した。

稲毛　正彦　Inamo, Masahiko　　教授　　理科教育講座　　理学博士

❶ 無機化学

❷ 日本分析化学会ポスター賞（2000年 9 月）

❸ 日本化学会，日本分析化学会（中部支部幹事），錯体化学会，光化学協会，溶液化学研究会，The American Chemical Society

❹ 専門教育入門（1年），化学Ⅰ（1年），理科研究（1年），無機化学演習Ⅰ（2年），分析化学演習Ⅰ（2年），分析化学演習Ⅱ（2年），化学教材研究（2年），化学実験（2年），無機化学（3年），総合演習Ⅰ（3年），無機化学実験（3年），分子機能化学A（3年），化学ゼミナールⅠ（4年），化学ゼミナールⅡ（4年），化学特別実験（4年），無機化学特論Ⅰ（大学院），無機化学特論Ⅱ（大学院），無機化学特論演習Ⅰ（大学院），無機化学特論演習Ⅱ（大学院）

教育活動については，学部及び大学院における無機化学関係の専門教育の充実と発展を目指して学生の教育に当たるとともに，化学に関係した教養教育を通して，化学を専門としない学生にも化学の面白さと重要性を理解してもらえるよう心がける。また，卒業研究などを通して，学生が科学的な考え方や研究方法を習得し，問題解決能力を高めることができるよう努めたい。

❺・現在の研究テーマ：金属イオンの関与する溶液内化学反応の研究

金属イオンの関与する溶液内化学反応を平衡論，速度論，及び，構造化学的見地から研究して，その反応の機構を明らかにすることを目的として，次のような研究課題に取り組んでいる。

⑴ レーザーフラッシュフォトリシスを用いた金属錯体の光化学反応の研究

⑵ 金属錯体の関与する電子移動反応や配位子置換反応の研究

⑶ 多核金属錯体を含む分子集合体の生成反応の動的機構の研究

・業績リスト：

1）Electron Transfer Reactions between Copper(II) Porphyrin Complexes and Various Oxidizing Reagents in Acetonitrile, ***Dalton Transactions*** 2004, 1703-1707.

2）Oxidation Reaction of $[Ni(1,4,7\text{-triazacyclononane})_2]^{2+}$ by $[Fe(o\text{-phenanthroline})_3]^{3+}$ in Aqueous Acidic Solution at Elevated Pressures: Determination of the Activation and Reaction Volumes for the Ni(III)/(II) Couple, ***Dalton Transactions*** 2004, 1862-1866.

・科学研究費補助金：

「金属ポルフィリン錯体の分子構造と反応性の相関の解明」（基盤研究C，200万円）

❻ 学芸 4 課程改革検討会議委員

❼ 日本分析化学会 *Analytical Sciences* 編集委員

中島　清彦　Nakajima, Kiyohiko　　助教授　理科教育講座　　理学博士

❶ 専門分野：錯体化学，関連分野：有機金属化学

❸ 日本化学会，アメリカ化学会，錯体化学会，溶液化学研究会

❹ 環境教育ゼミナール（１年），化学Ⅰ（１年），無機化学演習Ⅰ，Ⅱ（２年），化学実験（２年）環境物質化学Ⅰ（２年），無機化学（３年），無機化学実験（３年），分子機能化学（３年），総合演習Ⅰ（３年），化学ゼミナールⅠ，Ⅱ（４年），化学特別実験（４年），無機化学特論Ⅰ（大学院），無機化学特論演習Ⅰ，Ⅱ（大学院），など

主として，金属錯体や無機化合物を題材とした講義，演習，実験を担当している。我々の身の回りには金属及び金属イオンを含む物質が数多く存在しており，その重要性や利便性と共にこれらの物質が関わる環境問題等も教育現場で日常的な話題として登場している。学生がこのような今日的な化学の話題を理解し，考察するために必要な知識を習得できるように，体系的な講義，演習，実験のカリキュラムを心がけている。学生が，３年次までに化学的基礎を身につけた上で，４年及び大学院においては，最新の研究論文を理解し，自ら実験的な取り組みができるレベルにまで到達できることを目標としている。なお，アカデミック・クエスト講座「化学への招待」を高校生対象に開講した。

❺ ⑴ 外場応答性金属錯体の開発と，構造，電子状態及び反応性の制御：光，電位，プロトン濃度等の外場変化に対して可逆的な応答性を示す金属錯体の合成と，分子レベルでの反応理解。

⑵ 金属錯体の不斉触媒反応：光学活性な金属錯体を触媒とする不斉触媒反応における，金属錯体の立体構造と不斉選択性の検討。

業績リスト：

１．An Unexpected Chelate Conformation in *Trans*-[(R)-*N*,*N*'-bis(α-phenylsalicylidene) propane-1,2-diaminato(2-)-bis(l-methyl-1H-imidazole-κN^3)cobalt(Ⅲ)Perchlorate].
M. Hirotsu, M. Kojima, K. Nakajima, S. Kashino, and Y. Yoshikawa, *Acta Crystallogr. Sect.* C60, m431-m432(2004).

２．Coordination Behavior of Phosphino-phosphaferrocenes: Monodentate versus Bidentate Coordination to Divalent Palladium.
M. Ogasawara, Y. Ge, K. Nakajima, and T. Takahashi, *Inorg. Chim. Acta*, 357, 3943-3949(2004).

３．Reversible Ring Opening and Closure Reactions of the Triazine Ligands Derived from 1-Phenylazo-2-naphthylamine and Pyridine-2-aldehyde or Quinoline-2-aldehyde —Structure and Reactivity of the Palladium(Ⅱ) Complexes
Z. Zhu, M. Kojima, and K. Nakajima, *Inorg. Chim. Acta*, 358, 476-488(2005).

研究助成：

１．「機能性色素配位子を有する金属錯体に固有な複合的新規外場応答性の発現」（基盤研究⑹⑵，代表）/科学研究費補助金

２．「多置換π電子系分子の開発と応用」/受託研究費

❻ 理科教育講座化学領域代表

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

澤　　正実　Sawa, Masami　　助教授　理科教育講座　　理学修士

❶ 専門分野：発生生物学，関連分野：遺伝学

❸ 日本動物学会，日本遺伝学会，日本節足動物発生学会（将来計画検討委員会委員）

❹ 発生遺伝学（大学院），発生遺伝学演習Ⅰ（大学院），発生遺伝学演習Ⅱ（大学院），環境教育概論（１年），生命環境論演習（１年），生殖技術と生物学（２年），生物学基礎演習Ａ（２年），発生生物学（２年），発生生物学実験（２年），生物教材研究（２年），臨海実習（２年），生物情報論演習（３年），生物教育教材演習Ａ（４年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），生物学ゼミナールⅠ（４年），生物学ゼミナールⅡ（４年），生物環境科学特別実験Ａ（４年）

学部及び大学院学生に対する教育は，学生の基礎学力低下が年々激しくなり，難しくなっているのが現状である。このことをふまえ，講義については，これまで一方通行の講義をできる限り避けるため，受講学生の名前を覚え，受講生に発問をして講義の理解度を見ると同時に，講義中に受講生側から気楽に質問できるような授業の雰囲気作りを心がけている。また，学生実験については，できる限り生き物の標本ではなく，生きた生物を学生達に観察させ，生き物の生き様を見てもらうことを心がけている。さらに，学生の「考える力」の低下も年々激しいことから，演習・実験の時間を使い，学生達に自由研究を課し，自分でいろいろなことを調べ，考えていくという姿勢を身につけさせる試みを行っている。これにより，学生が少しでも自分で，疑問に思ったことを調べ，解決できる力を身につけさせることが出来ればよいと考える。卒論及び修論指導においても，論理的に物事を「考える力」を身につけさせることに重点を置き，教官側からの指示は必要最小限とし，できる限り学生にいろいろなことを考えさせるように心がけている。

❺ 現在の研究テーマ：

⑴ 単為発生のメカニズム：カブラハバチを実験材料とし，卵形成と精子形成における減数分裂過程及び受精過程を詳細に調べ，単為発生という生殖様式がどのように確立されてきたかを探る。

⑵ 昆虫の体外受精：カブラハバチで開発した体外受精の方法を，キイロショウジョウバエに応用し，キイロショウジョウバエの系統保存に役立てる。

現在の研究テーマは，主に，進化の過程において単為発生という生殖様式がどのように確立されてきたかについて，カブラハバチを実験材料として探ることであり，これまでに，基本的な減数分裂過程と受精過程の細胞学的な記載をほぼ終了し，現在，実験発生学的な手法を用いて，これらの過程をさらに解析中であり，受精直後の卵に温度処理を加えると，複数の精子が発生に参加できること等が明らかになった。今後は，さらに実験発生学的手法を用いて，細かく解析していく予定である。また，私がカブラハバチで開発した昆虫の体外受精法をキイロショウジョウバエでも，可能にする試みを行い，突然変異系統の精子を凍結保存することによる系統維持を目指す。

❻ 共通科目専門委員会委員，時間割編成専門委員会委員

❼ 教育実習において，６月と10月の２回，連絡指導担当となった学校に実習前の挨拶に出向き，学生の研究授業を観察し，学生と研究授業の反省会を行った。また，１年生基礎実習の引率を行った。さらに，８月のサイエンスパートナーシップにおいて，高校の先生に対して，キイロショウジョウバエを用いた簡単な遺伝実験方法について，講義を行った。

児玉　康一　Kodama, Koichi　　助教授　理科教育講座　　理学博士

❶ 物理学，特に素粒子・原子核物理学実験

❷ 日本物理学会論文賞　2002年３月

❸ 日本物理学会

❹ 基礎物理学演習Ⅱ（２年），コンピュータ物理学演習（２年），物理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ（２年），基礎物理学実験Ⅰ（３年），放射線（４年），原子核物理学特論（大学院），原子核物理学特論演習（大学院）

現在は，主として実験の授業を担当しています。『実験装置を教科書の指針のとおりに操作してデータを出すだけ』でなく，『学生が自主的に考えてデータを出す』授業にしたいと考えていますが，なかなか出来ていません。１つの試みとして，３年次の実験では４人程度の小グループを作り，半年かけて１つの実験テーマに取り組む様にして，学生に実験装置を工夫して作ったり，自主的に考えたりできる時間的な余裕を持たせています。また最近では，ほとんどの学生が，将来，程度の差はあれコンピュータを道具として使わざるを得ない様になってきているので，どうしたら効率的にその知識を修得させる事が出来るかについても興味を持っています。

❺ ⑴　エマルションを使った素粒子物理学の実験的研究

Experimental Study Of Trimuon Events In Neutrino Charged-Current Interactions, Physics Letters B596(2004)44

エマルションという特殊な写真を使って素粒子の研究をしています。非常にまれにしかおきない大事な現象をとらえるためには，この写真をできる限り高速に大量に解析しなければなりません。そのために，近年進歩の著しいコンピュータやエレクトロニクスを活用した画像処理を開発導入し，今まで１年かかっていた解析を１月で済ませる事ができるようになってきました。今後はこの画像解析の技術をもっと進歩させて，もっとまれなおもしろい素粒子反応を研究していきたいと思っています。

⑵　盲学校の理科の授業で使う音声読上げ機能を持つ電圧・電流計の開発，科学研究費補助金特定領域研究⑵，代表，200千円

❻ 情報システム委員会委員，理科教育講座物理領域の入試委員

❼ サイエンス･パートナーシップ･プログラム「盲学校で使用する理科教材の開発」
平成16年度アカデミッククエスト講座「霧箱でアルファ線を見る」

高橋　真聡　Takahashi, Masaaki　　助教授　理科教育講座　　理学博士

❶ 宇宙物理学（ブラックホール物理学），理論天文学

❸ 日本天文学会（特別会員），理論天文学懇談会，JGRJ：一般相対論と重力研究会，天文教育普及会

❹ 宇宙物理学（大学院），宇宙物理学演習（大学院），環境教育ゼミ（４年），宇宙科学Ａ（３年），宇宙科学実験Ａ（３年），地学教材実験（３年），環境情報処理実習（３年），地球環境科学Ⅱ（３年），宇宙科学演習Ａ（２年），理科教育ＢⅡ（２年），地学Ⅱ（２年），環境教育ゼミナール（１年）

「宇宙科学」を履修する上で，数学（微分積分など）及び物理学の基礎（力学・電磁

気・熱力学など）が不可欠であるが，新課程への移行後カリキュラム編成上，これらを学習せずに宇宙科学の科目を受講する学生が増えている。その結果，準備的学習に時間を割かれ，講義内容の削減・レベル低下を招いている。それでも講義においては，個々の知識の伝授に終わらせず基本的概念の理解を目指し，「なるほど！」と思わせる努力をしている。

今年度は特に，講義目標を見直し学生の興味を引き出す方策を実践して来た。高校で，天文分野を履修していない学生がほとんどなので，あえて高等学校の教科書や参考書を示し，自己学習するよう勧めている。一方で，基礎力のある学生に対しては，能力に応じた課題を出し，学生の興味を延ばす工夫をしている。講義だけでは時間的な制限もあり，学生自身のさらなる自主的学習の必要性を感じている。

❺ 『ブラックホール磁気圏』の研究：

活動的銀河中心核に存在する「巨大ブラックホール」が引き起こす天体現象について研究している。ブラックホールへの降着プラズマ流は膨大なエネルギー放出の源になっているが（重力エネルギーが輻射として放出される），強力な磁場をもまた生成していると考えられる。この磁場とブラックホールが相互作用することで，「宇宙ジェット」（光速度近くまで加速されたプラズマの放出流）が発生する。ブラックホール近傍での磁場構造及び強重力場と磁場の相互作用について詳しく解析してきたが，その成果を論文にまとめる作業を始めている。また，磁気流体ショックについても解析を進めており，これも論文の執筆作業中である。この磁気流体ショックに関しては，モンタナ州立大学（米国）との共同研究であるが，研究の最後の詰めを行うため，2005年 3 月始めに渡米した。

論文：

“Angular Momentum Transport from a Rotating Black Hole via Magnetohydrodynamical Accretion”

Takahashi & Tomimatsu 2004, Prog. Theo. Phys. Suppl., 155, 423

口頭発表（招待講演）：

“Accreting Plasma in a Black Hole Magnetosphere” Takahashi 2004，研究会“Dynamics of strongly magnetized plasmas in astrophysics”（スタンフォード大学：米国）

“一般相対論的磁気流体力学入門：ブラックホール磁気圏へのアプローチ”高橋真聡 2004，研究会“天体プラズマ夏の学校”（葉山）

口頭発表：

“ブラックホール＋降着円盤システムにおける磁場構造について”高橋真聡，冨松彰　2004，日本天文学会（盛岡）

ポスター発表：

“Magnetohydrodynamical Shock Formation in a Black Hole Magnetoshere” Takahashi 2004，研究会“ポスト西宮湯川シンポジウム”（京大）

口頭発表：

“Structure of Magnetic field in a Black Hole-Disk System” Takahashi & Tomimatsu 2004，研究会“General Relativity and Gravitation”（京大）

“ブラックホール・エンジン”高橋真聡　2004，研究会“ガンマ線バースト”（京大）

口頭発表（招待講演）：

“ブラックホール磁気圏：一般相対論的磁気流体力学”高橋真聡　2005，研究会“太陽圏シンポジウム”（名古屋大）

ポスター発表：

“Black Hole Magnetosphere Initial Model for Dynamical Evolutions” Takahashi 2005，研究会 “MHD Accretion Flows and Jets”（京大）

口頭発表（招待講演）：

“Black Hole Magnetosphere and Stationary MHD Flows” 冨松　彰，高橋真聡 2005，研究会“プラズマ科学シンポジウム2005”（名古屋市）

口頭発表（特別講演）：

“ブラックホールの不思議？”高橋真聡　2005，（名古屋市科学館）

口頭発表（特別セッション）：

“ブラックホール磁気圏とブラックホール回転エネルギー抽出機構”高橋真聡　2005，日本天文学会（日野市）

❻ 情報公開委員会委員，情報処理センター兼任教官

❼ 名古屋市科学館企画調査委員，SPP（教員研修プロジェクト）

❽ 刈谷看護専門学校非常勤講師（物理学），海外出張（モンタナ州立大学：10日間）

岩山　勉　Iwayama, Tsutomu　助教授　理科教育講座　博士（理学）

❶ 物理学，半導体光物性，ビーム物性，光機能性ナノ材料

❸ 応用物理学会，日本物理学会，日本放射線化学会，Materials Research Society，European Materials Research Society

❹ 力学Ⅱ，基礎物理学実験，物理教材研究，理科研究ＡⅠ（２年），物性科学Ⅰ，物理学実験Ⅰ，Ⅱ，物理教材実験，環境物理教材実験，エレクトロニクス実験，野外物理学実験Ⅰ，Ⅱ，科学・技術と人間セミナー（３年），半導体物性，環境物性教育特別実験，物理学ゼミナール，論文講読（物理学），環境教育ゼミナールⅡ（４年），基礎物性科学特論，基礎物性科学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

一方的な授業にならないよう，授業に体験的要素も取り込むことを実践している。また，理科教材（物理的分野）の研究・開発・実践を通してその有効性，意義を学生に伝えていきたい。

❺ ⑴ ナノ構造半導体の微細構造制御とその光学特性評価（半導体光物性）

ナノサイズ半導体超微粒子（クラスター）の作製とその物性（微細構造制御，光学特性評価など），さらに，ナノクラスターの光電子機能デバイス応用としての可能性を探索している。

⑵ イオン，レーザービームと物質の相互作用（固体物質に対するビーム照射効果）

イオン注入法 (Ion Implantation)，並びにレーザーアブレーション法 (Laser Ablation, Pulsed Laser Deposition) により機能性薄膜の形成，及び非熱平衡プロセスによる高機能性材料の開発を行っている。

⑶ 自然エネルギー有効活用のための教材開発

太陽光エネルギー，風力エネルギーなどに代表される自然エネルギーを有効に活用するための技術の開発，並びにそれをより効果的に演示するための融合システム，教材の開発を行っている。

業績リスト：

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

・Enhancement of luminescence from encapsulated Si nanocrystals in SiO_2 with rapid thermal anneals., Nucl. Instrum. Methods B 230, 203 (2005).
・RTA effects on the initial formation of Si nanocrystals in SiO_2., Proceedings of the 23rd Symposium on Material Science & Engineering Research Center of Ion Beam Technology, 23, 51 (2005).

科学研究費補助金：

イオン打ち込み法によるナノ構造半導体の微細構造制御とその光機能新材料としての応用（基盤研究C，単独（代表））

❻ 時間割編成専門委員会委員，理系機器共同利用センター委員，共通科目（科学・技術と人間）サブコーディネーター

❼ 英国物理学会誌査読，米国物理学会誌査読　等

渡邊　幹男　Watanabe, Mikio　　助教授　理科教育講座　　博士（理学）

❶ 生物学，専門分野：植物分子系統学，関連分野：植物分類学

❷ 四手井賞（関西自然保護機構）2004. 6

❸ 日本植物学会，日本植物分類学会，種生物学会（会計幹事・地区幹事），日本生態学会，植生学会，日本熱帯生態学会

❹ 環境教育概論（１年），環境と人間―入門―（１年），生命環境論演習（１年），環境の評価と保全（２年），多様性生物学（２年），環境と人間―環境と生物―（２年），環境と人間―環境の調査―（２年），生物学基礎演習Ａ（２年），生物教材研究（２年），里山体験実習（２年），多様性生物学演習（３年），多様性生物学実験（３年），生物学ゼミナール（４年），環境教育ゼミナール（４年），多様性生物学（大学院）

近年分子データを用いた研究は飛躍的に進歩している。しかし直接目に見えないものを扱う学問分野であり，学生にとっては理解しにくいところがあると思われる。環境の評価と保全では，高等学校の復習も兼ねた講義内容にしている。多様性生物学では，植物の進化を分子生物学的方法によってどのように明らかにするかを学ぶ授業である。分子マーカーは常に新しいものが導入され，それによって過去の知見と比較され系統関係が議論されるため，特に最新の研究例を多く紹介し進めるように心がけている。また，簡単な分子生物学的実験も取り入れ，その内容をまとめさせ発表させた。発表に際しては，プリントを作成させ要点をまとめさせた。発表した内容について，議論し理解を深めさせた。学生による授業評価でも，自分たちがまとめることによって，より理解度が深まったという学生もおり，この取り組みは成功だったと思われる。特に自分たちで調べることによって，幅広い分野の参考文献等を参照し，興味・関心がかなり広がった学生もいた。また，実験では野外での活動を取り入れ，特に直接日常目にすることができにくい植物に接することができるように心がけている。夏休みに北海道大学檜山地方演習林で行う里山体験実習（炭焼き）は，木の利用法や里山のあり方を考える目的で行っている。なかでも約５日間，昼夜をとわず交代で，炭窯に薪をくべる作業は学生同士の連帯感を育んでいくのに最適であり，衣食住をともにして，一つのものを作り上げる貴重な経験である。この実習は1995年から続けており，北海道新聞でもたびたび記事として取り上げられている。

❺ 現在の研究テーマ：

⑴　日本列島における植物の種分化の研究

⑵　分子データを用いた環境の保全

分子生物学的手法を用いてさまざまな植物の系統関係の推定を行っている。特にタンポポにおいては，分子データによって無融合生殖種どうしが雑種を形成するといる現象を発見した。このことは，従来考えられていた遺伝子の交換が，有性生殖のみではなく無融合生殖種も行っているというきわめて興味深いものである。今後は，更に詳しい解析を行う予定である。

業績リスト：

帰化タンポポは日本に来てどのように変化したか（共著）

豊明市ナガバノイシモチソウ集団の遺伝的多様性（共著）愛教大ブックレット（分子生物学的手法を用いた環境調査）2004

Geographical patterns of allozyme variation in Angelica japonica and Farfugum japonicum on the Ryukyu Islands, Japan. Acta Phytotax. Geobot.. 55(1)29-44 2004

栃木県足利市における雑種性帰化タンポポの頻度と分布　フロラ栃木12. 8-15. 2004

立山における外見上セイヨウタンポポと見なされる植物に実体　富山市科学文化センター研究報告27. 53-60 2004

ミゾソバの分類学的再検討⑴愛知県及び岐阜県南東部における単位群の識別　植物地理分類52 167-174 2004

分子マーカーを用いた雑種性帰化タンポポの起源とクローン性　日本植物学会　2004

帰化タンポポは日本に来てどのように変化したか　植生学会　2004

ミゾソバの分類学的再検討⑵日本植物分類学会　2005

豊明市に生育するナガバノイシモチソウ集団の復元　委託研究　15万円

奥尻島とその周辺域における植物の分子系統学的研究とその教材化　奥尻町工藤組　50万円

❻ 自然観察園運営委員，理系機器委員会委員

❼ 附属高等学校アカデミッククエスト講座，岡崎高校スーパーサイエンス部の指導，北海道奥尻島奥尻高校，奥尻中学及び青苗中学における分子生物学実験の指導，豊明市に生育する絶滅危惧植物ナガバノイシモチソウ集団の保全と復元のための活動

中野　博文　Nakano, Hirofumi　　助教授　理科教育講座　　博士（理学）

❶ 化学，専門分野：有機化学，関連分野：糖質科学

❸ 日本化学会，有機合成化学協会，American Chemical Society，日本糖質学会

❹ 環境教育ゼミナールⅠ（１年），化学Ⅰ（１年），環境化学演習（１年），化学実験（２年），有機化学演習Ⅱ（２年），化学教材研究（２年），有機化学（３年），有機化学実験（３年），総合演習Ⅰ（３年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），化学特別実験（４年）

私は，有機化学に関する講義，演習，実験を担当している。有機化学は，高校化学においてただ暗記すればよいという認識ができてしまっているので，これを改めるため次のような点に注意している。ひとつは，有機化学が化学の基本的な原理の上に成り立っており，それらを応用して，分子の物理的な性質や化学反応を理解することである。つまり，有機化学の教科書には多数の反応が出てくるが，それらの反応は基本的ないくつかのパターンの繰り返しや組合せであり，それを見抜けるようになる能力が必要である。二つ目として，分子の実際の形を個人個人が分子模型を使用することで認識することで

ある。これは，分子の形を三次元的にとらえられるようになることと，分子中の個々の官能基が認識できるようになることである。

講義は板書中心であるが，反応機構等を丁寧に一段階ずつ書いたり，分子模型の組立方を説明して学生と同時に組み立てる，パソコン上で３次元的に表示する，日常生活との関わり説明するなどして理解しやすいようにしている。試験は，理解度を高めるために半期に２回行い，持ち込みは一切不可という条件で行っている。問題は基本事項から応用問題まで幅広く出題し，先に記述した点について評価できるよう努力している。

実験は火災，爆発，薬品による中毒，ガラスによる怪我や火傷等の危険性や，実験後の後始末の重要性特に環境を破壊しないようにするにはどうしたらよいかという点を強調して行っている。これらのことは，将来理科の教師としての素養として重要であろう。また，それぞれの実験操作がどのような意味をもっているか，なぜそのような操作をしなければならないのか強調している。

❺ ⑴ 糖鎖硫酸化の生物学的意義解明を目的とした選択的な硫酸転移酵素阻害剤の開発
⑵ コンドロイチン硫酸の機能ドメインの精密合成
⑶ カルベノイドを用いた1,3-双極子の生成と反応
⑷ 新規メソイオン化合物の合成と反応性

現在精力的に行っている研究テーマは，「糖鎖硫酸化の生物学的意義解明を目的とした糖鎖合成」である。元々の専門は「有機反応活性中間体の化学」であるが，異分野からの参入を生かして新たな合成反応・合成経路・糖鎖設計を行いたい。最近の成果としては，効率的なGalNAcβ1-4GlcNAcβ1-octylの合成法，グルコサミン塩酸塩からのTroc基を用いるGalNAc(4SO_4) β-OAr の合成などがある。

❻ 教育実地研究専門委員会

❼ 日本化学会東海支部化学教育協議会会計，東西三河地区合同高等学校理科（物理・化学）教育研究会で講演，SPPにおける教員研修の講師

戸田　　茂　Toda, Shigeru　　助教授　理科教育講座　　博士（理学）

❶・固体地球物理学，地震学，物理探査

❸・日本地震学会（査読），日本応用地質学会，活断層研究会（査読），名古屋地学会（委員）

❹ 科学技術と人間（展開）（２年），地球環境科学Ⅰ（２年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），地学ゼミナールⅠ（４年），地学野外実習Ⅰ（２年），理科研究ＢⅠ（２年），固体地球科学Ａ（３年），総合演習Ⅰ（３年），固体地球科学演習Ｂ（３年），地球環境統計学（３年），地学実験（２年），固体地球科学実験Ｂ（３年），地球環境調査法（１年），固体地球科学特論Ⅰ（大学院），固体地球科学特論演習Ⅰ（大学院），固体地球科学特論演習Ⅱ（大学院）

・FD講演会に出席。理科教育講座所属学生以外にもＬ科目・ＳⅡ科目を通して，地震防災について講義をして，東海地震等の大地震発生時に学校教育現場で使用できる内容を重点に講義を実施した。

❺・現在の研究テーマ：

中部・近畿地方における活断層調査　養老断層・鈴鹿山地東縁断層における反射法地震探査

地表変形を伴う地震断層の地下構造調査　新潟県中越地震震源域のおける重力探査

安定大陸地殻の地下構造調査　東南極大陸における地震波速度・密度統合地下構造モデルの構築

極東ロシアにおける屈折法地震探査

・業績リスト：

Toda, et. al., Multidisciplinary Surveys for the Crustal Structure of the Lützow-Holm Complex, Enderby Land, East Antarctica: SEAL-2000, -2002, AGU Fall meeting, San Francisco.

Toda, et. al., Conversion tectonics and crustal structure around Magadan-Kolymsoe region, Far East, Russia, from deep seismic exploration，国立極地研究所北極圏研究集会.

・研究交流：

ロシアアカデミーとの共同研究．マガダン支所に１週間滞在

❻・理科教育講座地学領域代表，就職委員会委員，防災・防火委員会東海地震部会副部会長

❼・小牧市プラネタリュームでの講演会，三好町立南中学校での指導（地震災害について）

❽・本学「地震防災ハンドブック」の作成，第２種衛生管理者取得

伊東　正人　Ito, Masato　　助教授　理科教育講座　　理学博士

❶ 素粒子論，宇宙論

❸ 日本物理学会

❹ 自然科学入門（１年），理科研究ＡⅡ（１年），物理学Ⅰ（２年），電磁気学Ⅰ（２年），物理数学演習Ⅱ（２年），電磁気学Ⅱ（３年），電磁気学演習（３年），量子物理学演習Ⅰ（３年），原子核と素粒子（４年），素粒子論的宇宙論Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺・研究テーマ：

物質の起源を探る素粒子理論から現代宇宙論の謎に迫る。特に，宇宙加速膨張を引き起こすダークエネルギーの起源と超弦理論との関連について現在研究中。また，高次元空間に埋め込まれたブレーン模型から４次元素粒子物理の起源について探求している。

・論文：

“Scalar potential from de Sitter brane in 5-D and effective cosmological constant.” Journal of High Energy Physics, 06(023)2004

“On the solutions to accelerating cosmologies.” Journal of Cosmology and Astroparticle Physics, 09(003)2003

“Casimir energies due to matter fields in T(2) and T(2)/Z(2) compactifications.” Nuclear Physics B, 668(322)2003

・口頭発表：

“$1/H^2$項をもつ加速膨張モデル”日本物理学会にて発表（平成17年３月，東京理科大学野田キャンパス）

・科学研究費：

若手研究Ｂ「ブレーンワールド模型から４次元物理現象の起源を探究する」（平成17年－20年，130万円）

❻ 大学院入試委員

赤倉松次郎　Akakura, Matsujiro　　助教授　理科教育講座　　博士（工学）

❶ 理論化学計算，有機合成化学，有機金属化学，高分子合成化学

❸ 日本化学会，アメリカ化学会，有機合成協会，高分子学会，量子化学データベース研究会，名大応化会

❹ 情報教育入門Ⅰ（1年），理科研究ＢⅡ（1年），化学Ⅱ（2年），自然環境と化学（2年），高分子化学（2年），基礎化学演習（2年），物理化学演習Ⅱ（2年），環境化学Ⅱ（3年），分子機能Ａ（3年），総合演習Ⅰ（3年），分子機能化学実験Ａ（3年），分子機能化学実験Ｂ（3年），工業化学演習（4年），環境教育ゼミナールⅡ（4年），分子機能化学Ｂ（4年），化学特別実験（4年），化学反応特論Ⅰ（大学院）

教育活動の問題点：

1）学生にキャップ制を厳格に強いているために，意欲・能力ある学生が十分な大学教育を受けないでいる現状。

2）入試制度の多様化のため，学生全体を見た時に，かなり大きな学力・能力・意欲の差が存在する。授業を行う場合に十分に対応できていない状況にあること。

教育に対する抱負：

今，愛知教育大学は大きく変化をしようとしている最中である。教員の使命は教育を十分に行うことである。変化に迅速に対応し，目標達成のために尽力をつくす使命を持っている。常に幅広い知識修得をし豊かな考察を行えるように努力し続け，フットワークの軽い行動を採れるような教育姿勢を維持することが重要となると思う。

❺ 現在のテーマ：

1）理論化学計算を用いた有機合成反応・有機金属錯体反応・高分子合成反応の機構解明の研究

2）理論化学計算を用いた新規合成反応の開発の研究

業績リスト：

1）QUNTUM CHEMISTRY DATA BASE, *J. Mol. Struct.*(Theochecm), *669-670*, 2004

2）Rational Design of L-Histidine-derived Minimal Artificial Acylase for the Kinetic Resolution of Racemic Alcohols, *J. Am. Chem. Soc., 126*, 2004

学術・研究交流等：

1）招待講演（京都大学大学院・理学研究科，2005年2月，「理論化学計算を用いた有機合成化学・高分子合成化学の研究」）

2）Chicago University (U.S.A.), Yamamoto Laboratoryとの共同研究

3）名古屋大学大学院・情報科学研究科・古賀伸明研究室との共同研究

4）名古屋大学大学院・工学研究科・石原一彰研究室との共同研究

5）化学データベース研究会（QCLBD）（自然科学研究機構・岡崎共通研究施設）の講習会・懇親会など

❻ 時間割編成専門委員，衛生管理者（自然科学棟）

❼ 各種審議会委員，自治体等の教育組織における活動：

化学データベース研究会（QCLBD）（自然科学研究機構・岡崎共通研究施設）のデータベース作成委員

加藤淳太郎　Kato, Juntaro　　助教授　理科教育講座　　農学博士

❶ 生物学，専門分野：植物育種学，関連分野：遺伝学

❸ 日本育種学会，園芸学会，日本植物細胞生物学会，日本遺伝学会，日本植物学会

❹ 自然科学入門（１年），生物学Ⅰ（２年），生物学実験（２年），理科研究ＢⅠ（２年），遺伝子資源利用実験（２，３年），植物遺伝学（２年），生物統計演習（３年），生物教材演習Ｂ（４年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），生物学ゼミナールⅠ（４年），生物学ゼミナールⅡ（４年），生物環境科学特別実験Ｂ（４年），遺伝学特論（大学院）

理系１年生学生向けの自然科学入門を４年間続けて担当した。学生を指名し今週の科学のニュースを答えさせ解説若しくは鳥インフルエンザなどの現代的な生物現象について解説等を行ってきた。また授業終了時に質問を書かせ，次週に全員分について解説するということも行ってきた。しかし，結果的に学生には，課題が多く内容も難しかったということだけしか残っておらず，その授業内容について得られたものはほとんど無いのではないかという不安を抱くようになった。一つの原因として考えられるのは，教科書を指定していないという点が挙げられる。2005年度は文庫本的な読みやすい科学書を教科書として選定してみる試みを行い，理解度及び興味関心の上達を引き出してみたい。

❺ １．非還元性配偶子形成に関する研究，２．*Primula*属の種間交雑親和性に関する研究，３．Ｂ染色体の遺伝性に関する研究，４．DNA含量と種及び変種の識別に関する研究，５．異型花不和合性に関する研究

１．に関しては２倍体が２倍体の配偶子を作るという現象の研究であり，2004年度*Primula*属以外に*Cymbidium*属に関してユリ型の非還元性配偶子形成と推測されるタイプを発見したので，タイプの確定のために単為発生系の確立及び，非還元雄性配偶子の受精能力について研究を試みる。２．については大きく三タイプの組み合わせ系について雑種作出を行っているが，2004年度に遠縁交配により雑種細胞の獲得まで成功した組み合わせもあるので，遠縁雑種の獲得を試みる。３．については通常の常染色体以外に余分な小さな染色体（Ｂ染色体）を持つ種がある。この遺伝子に関してはメンデル遺伝するものとしないものがある。現在までに材料の作出が行われたので，2005年度はメンデル遺伝するか否かについて調べていく。４．については種によって保有するDNA含量が異なるので，*Primula*属以外の様々な属を扱い事例収集を行う。５．については，まだ未解明な不和合性タイプであるので，異型花を持たないものと持つものの間の雑種を作出する。

論文：スイバの性比，愛知教育大学研究報告（分担）。

口頭発表：

Primula sieboldii(SS)と*P. obconica*(OO)の2基3倍体種間雑種(SOO)の*P. obconica*への戻し交配におけるBC1世代の作出と特性，日本育種学会第106回講演会（三重大学），2004年9月。*Primula sieboldii*と*P. jesoana*の交配により得られた種間雑種の倍数性の差異，育種学会中部地区談話会第12回講演会（名古屋大学），2004年12月。*Cymbidium pumillum*の第一世代交配種が形成した非還元雌性配偶子，育種学会中部地区談話会第12回講演会（名古屋大学），2004年12月。

ポスター発表：

PRODUCTION OF INTER=SECTION HYBRIDS BETWEEN ***PRIMULA***

FILCHNERAE AND *P. SINENSIS* THROUGH IMMATURE OVULE CULTURE, 5th IN VITRO CULTURE AND HORTICULTURAL BREEDING SYMPOSIUM（Debrecen，ハンガリー），2004年９月。カーネーションあるいはイセナデシコとハマナデシコ間の交雑親和性及び種間雑種作出，園芸学会平成16年度秋季大会研究発表（静岡大学），2005年９月。*Cymbidium pumillum*の第一世代交配種が形成した非還元雌性配偶子，園芸学会平成16年度秋季大会研究発表（静岡大学），2005年９月。Sporophyte production by induced apogamy in ferns and the characteristics of the induced sporophytes，The international Conference on “Evolutionary Botany of Certain Plant-Groups of the Wast Eurasian Floristic Element Related to Japanese flora on the Basis of Chromosomes”（広島大学），2005年10月

❻ 組換えDNA実験安全委員会委員，仕様策定委員（表面界面観測システム）

❼ 平成16年度名古屋生物同好会講演会講師

星　博幸　Hoshi, Hiroyuki　助教授　理科教育講座　博士（理学）

❶ 地質学，岩石磁気・古地磁気学，地質年代学，テクトニクス

❷ 日本地質学会研究奨励賞（1998年３月）

❸ 日本地質学会（代議員，地質学雑誌編集委員，地質学雑誌企画委員，層序部会連絡幹事），日本地質学会中部支部（愛知県幹事，事務局員），地球電磁気・地球惑星圏学会（アウトリーチ部会員），石油技術協会，構造地質研究会，フィッション・トラック研究会，American Geophysical Union

❹ 地質学特論（大学院），地質学特論演習Ⅰ（大学院），地質学特論演習Ⅱ（大学院），地学ゼミナール（４年），地質岩石科学Ａ（３年），固体地球科学演習Ｂ（３年），地球環境科学演習（３年），固体地球科学実験Ａ（３年），地学野外実習Ⅱ（３年），理科研究ＢⅠ（２年），地球環境科学Ⅰ（２年），地史学演習（２年），地学野外実習Ⅰ（２年），地学実験（２年），自然科学入門（１年）

❺ 公表論文：

星　博幸・神谷直宏・川上　裕・中島和夫，紀伊半島中央部，奈良県中奥地域にみられる中新世岩脈の古地磁気と岩石磁気．地質学雑誌，110，686-697，2004。

星　博幸・石渡　明，石川県，戸室火山溶岩ドームの岩石磁気と古地磁気．地質学雑誌，110，536-544，2004。

星　博幸・塚本知佳，傾いた地層に発達する小断層と火山岩岩脈：愛知県北設楽郡東栄町における地学教材，愛知教育大学自然観察実習園報告，no.25, 13-17, 2005.

学会発表：

星　博幸・岩野英樹・檀原　徹，設楽層群の地質，古地磁気，及びFT年代から探る西南日本弧の中新世テクトニクス，第29日本フィッション･トラック研究会，愛知教育大学，2005年１月。

星　博幸，古地磁気からみた東北日本の回転運動，2004年日本地質学会東北支部総会・シンポジウム「最近20年間の東北地方における地質研究の進展」，弘前大学，2004年11月。

星　博幸，東北日本，福島県会津地方の時計回り回転運動：古第三紀火砕岩の古地磁気測定結果，第116回地球電磁気・地球惑星圏学会，愛媛大学，2004年９月。

星　博幸，東北日本，福島県会津地方の時計回り回転運動：古第三紀火砕岩の古地磁気，日本地質学会第111年学術大会，千葉大学，2004年９月。

星　博幸・川上　裕・中島和夫，紀伊半島中央部，奈良県中奥地域にみられる中新世岩脈の古地磁気と岩石磁気，地球惑星関連学会2004年合同大会，幕張メッセ，2004年５月。

星　博幸・川上　裕，古地磁気方位の比較からみた熊野酸性岩類北部と南部及び室生火砕流堆積物の時間関係，地球惑星関連学会2004年合同大会，幕張メッセ，2004年５月。

科研費等の採択状況：

科研費若手研究(B)，高密度古地磁気サンプリングから東北日本の回転移動時期を解く，代表，1500千円。

❻　学部入学試験部会委員

❼　フィッション・トラック研究会2004年総会の開催誘致・開催（愛知教育大学）

愛教大附属岡崎中学校生徒に対する教育研究指導（理科）

日野　和之　Hino, Kazuyuki　　助手　　理科教育講座　　博士（理学）

❶　物理化学，クラスター化学，レーザー分光学

❸　日本化学会

❹　環境化学演習（１年），情報教育入門Ⅱ（１年），物理化学演習Ⅰ（２年），化学実験（２年），基礎化学演習（２年），分子機能化学Ａ（３年），物理化学実験（３年），分子機能化学実験Ａ・Ｂ（３年），環境教育ゼミナールⅡ（４年），化学特別実験（４年）

❺・現在の研究テーマ：

有機金属ナノクラスターの創製：構造と機能制御

質量選別化学種の電子・振動分光と反応過程の追跡

・学会発表：

日野和之，中野博文，西信之「チオカルボニル分子を用いた金ナノ粒子の創製」分子構造総合討論会　2004

・科学研究費補助金など研究助成の受領状況：

「チオール化した液晶分子を用いた金属ナノ粒子の創製―外部電場による光学特性の制御―」2,400千円（若手研究(B)，代表）／科学研究費補助金

・学術・研究交流等：

平成16年度分子科学研究所ナノサイエンス支援「分子・物質総合設計・解析支援プログラム」による協力研究（前期・後期）

❻・各種委員会委員活動：水質汚濁防止検討委員会，学部入学試験部会

❼　第52回質量分析総合討論会（2004）実行委員会委員

音楽教育

栗原　一身　Kurihara, Kazumi　　教授　　音楽教育講座　　学士

❶　芸術，演奏分野：ピアノ

❷　第28回　毎日学生ピアノコンクール　東日本第２位（1958）

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

第12回　文化放送音楽賞受賞（1965）

❸ 日本ピアノ教育連盟
日本ショパン協会

❹ ピアノⅠ（1年），音楽科研究（ＳⅡＡⅠ）（1年），ピアノⅡ（2年），ピアノ演習（2年），音楽科研究（ＳⅡＢⅠ）（2年），器楽（ピアノ）演奏法研究Ⅰ（3年），器楽（ピアノ）演奏法研究Ⅱ（3年），ピアノ教育法（3年），器楽（ピアノ）ゼミナール（4年），卒論指導（4年），ピアノ実技（大学院），チェンバロ奏法研究（大学院），ピアノ奏法研究（大学院），鍵盤楽器アンサンブル実習Ⅰ（大学院），鍵盤楽器アンサンブル実習Ⅱ（大学院）

❺ ピアノという楽器での表現力（自分自身納得のいく演奏）についてが永遠の追求テーマであるが，年齢に見合った表現を模索中である。

❼ 日本ショパン協会中部支部　理事

村尾　忠廣　Murao, Tadahiro　　教授　音楽教育講座　芸術学修士

❶ 音楽教育学，認知音楽学

❸ 日本音楽教育学会会長，国際音楽教育学会（ISME）理事，日本音楽知覚認知学会　理事，日本音楽学会，国際音楽知覚認知学会

❹ 心理音楽学概論，音楽科教育法，音楽教育学演習（大学院），管弦打，合奏
　音楽科教育法の授業では，課程認定審査委員による授業評価を受けた。この授業は委員から非常に高い評価を受けたと聞いている。

❺ 2004年7月，国際音楽教育学会ISMEのスペイン，テネリフェ大会を理事として開催，運営にあたる。8月，アメリカ，エヴァンストンのノースウェスターン大学で開催された第8回国際音楽知覚認知学会ICMPC大会で研究発表をおこなう。10月，日本音楽教育学会会長として全国大会を武蔵野音楽大学で開催，研究発表をもおこなう。12月，台北で開催された国際音楽教育台湾大会で招待講演をおこなった。一連の研究発表は，科学研究費による研究「視覚フィードバックにおけるフラットシンギングの測定と治療法の研究」に関するもの，また，和洋折衷の唱歌の構造に関する研究などである。

❻ 平成16年度共通科目プロジェクト「人間と性のカリキュラムと教材の開発」の代表（コーディネイター）をつとめ，報告書を作成，配付した。教育実習センター委員会委員，就職委員

❼ 科学研究費専門審査委員，教科書（音楽，小学校）編集委員，愛知県教育研究集会助言者

隈本　浩明　Kumamoto, Hiroaki　　教授　音楽教育講座　芸術学修士

❶ 音楽，専門分野：ピアノ

❸ 音楽教育学会

❹ 音楽科研究ＡⅠ（2，3年），音楽科研究ＡⅡ（1年），音楽科研究ＢⅠ（2年），ピアノ実習（2年），ピアノ奏法研究Ⅰ・Ⅱ（3年），ピアノゼミナール（4年），ポピュラーピアノ奏法（大学院）

他専攻の学生を対象にした音楽科研究について：
　音楽の基礎習得をピアノ実技を通して行っているが，1クラス60名程の受講生の内，約半数を占める初心者に対しては，共通の課題をグループ指導する事により効率化を

計り，経験者にたいしては各受講生のレベルにあわせて個別指導を行っている。
自専攻学生を対象としたピアノ実技指導について：
楽曲の学習を通して，「楽譜を見て単に弾きこなす」から「楽譜の内容がその通りに聞こえてくる」演奏表現能力を習得すべく助言，指示を与えている。

❺ 若干のアンサンブル活動を行ったが，当年は講座代表及び評議会としての運営に忙殺され，特に成果はなし。

❻ 講座代表，教育研究評議会評議員

滝澤　達子　Takizawa, Tatsuko　　教授　　音楽教育講座　　芸術学修士

❶ 音楽学，音楽科教育

❷ 安宅賞（1972）

❸ 国際音楽教育学会(International Society for Music Education-ISME)，21世紀改革委員，同上学会部会CMA（Community Musical Activity）コミッショナー，
日本音楽学会，東洋音楽学会，音楽学会

❹ 音楽史（１年)，ワールド・ミュージック（１年)，音楽科教育Ａ（２年)，音楽科教育Ｂ（２年)，音楽学特論Ⅰ，Ⅱ（大学院)，比較音楽学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）
学部では，自ら考え，探求するよう，調べ学習としての課題を課し，それと共に，音楽実践（演奏，創作）に積極的に関わるTogather 精神を培う事を授業の主眼として，グループ活動を課してきたが，学生の授業評価アンケートからすると，宿題が多く，またグループ活動には学生の互いの時間調整が困難だとして，これまでの授業のやり方が不評であるので，課題提示及び共同作業スタイルの音楽実践の授業方法を，全面転換する必要がある。教員としての志について問いかけ，学生自らに，自己啓発，学究する姿勢を願って，毎授業に鋭意，資料，映像，最新の情報提供，話しかけ，フィードバックをする授業をしてきたが，それが学生には逆効果であり，大学教育への抱負を記述するこの項目には，抱負を記すより先に，大学教員の使命の問い直し，自己改革の必要性を記すに留めておく。

❺ ISME　スペイン　カナリー諸島・テネリフェ市での世界大会―プレ会議　・CMA部会発表「日本におけるコミュニティ音楽活動―山形県米沢市への沖縄エイサー民俗芸能の移植とヨサコイ　ソーランを例に」―2004年７月８日
同上世界大会/本会議でのCMAとMISTEC（学校教育/教員養成部会）のジョイントセッションで，CMA委員として代表発表「学校教育とCMA活動―日本の例」2004年７月12日
「世界音楽―ワールド/ミュージック」の教材化について，アジア地域の（タイ・フィリピン・シンガポール・マレーシア）研究者との共同研究継続（1992年以来の継続プロジェクト）ト，ISMEのアジア地域への普及活動

❻ 東海地区教大協評議委員

❼ タイ　マヒドン大学音楽学部に招聘され，講演，集中講義「音楽教育の哲学」「音楽教育のグローバル化」など
ロシア　モスクワ・コンセルバトワールで行われた「優秀なら音楽教員の為のセミナー」に招聘され，「グローバル化する音楽教育と日本の音楽教育」について講演と日本音楽

教材のワークショップ及び中学生に授業（舞台上での模擬授業）。同じくロシア・カンティマンシスク市（西シベリア）の芸術教育センターで，日本音楽教材の模擬授業

❽ 中学校，高校の音楽教科書編集に参画

中川　洋子　Nakagawa, Yoko　　教授　　音楽教育講座　　芸術学修士

❶ 芸術，専門分野：音楽，関連分野：声楽（ソプラノ）

❸ 社団法人　日本歌曲振興会

❹ 声楽Ⅰ（1年），声楽Ⅱ（2年），歌曲伴奏法概論（3年），声楽曲演奏法研究Ⅰ，Ⅱ（3年），声楽曲概論（3年），声楽ゼミナール（4年），音楽教科研究ＡⅠ（1年），音楽科研究ＢⅡ（2年），現代日本の社会と文化セミナー（3年），声楽曲研究Ⅱ（大学院），ドイツ歌曲演習（大学院）

音楽をすることのまず第一は「うたうこと」にあると思う。声楽曲の演奏は本学入学試験の課題にもあるが，器楽（特にピアノ）の次に考えられて，1～2年足らずの学習で入学してくる者が多い。個々の能力の差が個性と同じように様々で，指導は個人レッスンで行っている。声を出して曲を歌えば，それがうたであると思っている学生が多いが，心の中にある音楽を表現するには，声のテクニックを学び修得する必要がある。カリキュラムが新しくなって1年の後期から専門の科目を受講することになって，必修としての声楽の学習期間が1年間となったため，以前と同じような力をつけて3年，4年の選択の授業に入ることができなくなった。卒業の専門として学び続けたいと望む学生に対して根気強く助言を与え，体の中から出てくる声を客観的に聞く耳を育て，音楽を表現できる声が自分で選択できるように指導しなければならない。1～4年へと声域を広げ曲の難度も上げて，音楽の表現できる曲を増やせるよう努めている。

大学院の学生に望むことは，もっと向学心を持って深くを高くを求めて授業に臨んで欲しい。学部で学んだことの上に積み重ねて，各々の内にある音楽を幅広くするような研究の場でありたい。

❺ 声楽を始めてから一貫した研究は，自分の中にある音楽を声を通していかに演奏表現するかにある。そのために声のテクニックを修得し，自分の欲しい音色を出せるように努めている。作品の演奏発表はその時々の成果を世に問うたものである。ドイツリートや自国語の歌曲やオペラを演奏研究することで身に付けようと試みている。また，ベルカント唱法のレッスンを受けたり，ドイツのフスラーの発声法のレッスンを受けたりと試行錯誤している中に，自分の体の部分部分が意識出来るようになり，表現できることが多彩になった。そのことで学生の声を聞き分ける範囲も広がったように思う。体の中から出てくる声を客観的に聞くことは体のコンディションによっても変わるので困難なことである。しかし教育現場にいて研究を続けていくということは，その姿勢と成果を学生に伝えることが重要だと考えている。今後もこれまでの研究をより深めながら，それを演奏発表できるように研究を続けたい。

❻ 大学院入試委員会

❼ 三好北部中学校，三好中部小学校へ合唱指導
知立市小中学校音楽会講評者
愛知県主催　レクリエーションコーディネーター，インストラクター養成講座講師（1996年～），ボランティアコンサート（師勝町総合福祉センターもえの丘）月1回（2000年8月～）（羊蹄会しらゆりの里）

武本　京子　Takemoto, Kyoko　　教授　　音楽教育講座　　芸術修士

❶ 音楽，専門分野：ピアノ演奏法，関連分野：音楽分析法

❷ ＮＨＫ洋楽オーディション最優秀賞（1976）
東京文化会館新人演奏家オーディション最優秀賞（1976）
名古屋市文化会館新進演奏家オーデション最優秀賞（1982）
名古屋市民芸術祭賞（1991）
愛知教育文化芸術賞（1994）
クラスノダール国際音楽祭芸術賞（1995）
名古屋市芸術奨励賞（1996）
愛知芸術文化選奨文化賞（1996）
愛知県三好町文化功労賞（1997）
日本クラッシックコンクール優秀指導者賞（2000）（2001）（2002）（2003）（2004）
ピティナ・ピアノコンペティションコンクール優秀指導者賞（2002）（2003）（2004）
ピティナ・ピアノコンペティションコンクール特別優秀指導者賞（2004）
カワイ音楽コンクール最優秀指導者賞（2003）（2004）

❸ 日本音楽教育学会，日本ショパン協会，ショパン国際コンクールin ASIA 組織運営委員，全日本ピアノ指導者協会正会員，愛知芸術文化協会，楽曲イメージ研究会主宰

❹ ピアノⅠ（１年），ピアノⅡ（２年），ピアノ演奏法研究Ⅰ（３年），ピアノ演奏法研究Ⅱ（３年），ピアノ曲概論（３年），音楽科研究ＡⅠ・音楽科研究ＢⅡ（１・２年），こころとからだ（３年），ピアノゼミナール（４年），楽曲イメージ奏法Ⅰ・Ⅱ（大学院），ピアノ演奏法Ⅰ・Ⅱ（大学院）

音楽の解釈法，分析法，表現法などをピアノの演奏法実技を通して行っている。個人指導が最適だが，授業時間受講生の多さから，一人当たりの指導時間の短さが問題である。しかし自宅学習において自分なりに楽曲を解釈した自習の結果をピアノ実技だけでなく，音楽と文学と美術を融合した方法でのディスカッションも交える独自の「楽曲イメージ奏法」で，生徒が何を考えて何を表現したいかを具体化させて，それを奏法に的確に結び付けられるよう授業を行っている。音楽の実習を通して音楽の持つ価値と素晴らしさを伝えることのできる教師になることとその具体的能力の育成を目指している。

❺ ピアノ演奏法：

音楽を文学と美術など具体的なイメージをふくらませて奏法に結びつく独自の「楽曲イメージ奏法」を通じて，楽曲の解釈，分析，演奏法を研究している。作品の奥底にある内面を具体的なタッチでどのように工夫するかという「楽曲イメージ奏法」の理論をいかに演奏会のステージ上で実践できるかを研究している。

今年度は，ウィーンフィルハーモニー交響楽団の首席の世界的クラリネット奏者エルンスト・オッテンザマー氏とのデュオコンサートを４ヵ所で開催して，CDレコーディングを行い，2005.2 推薦CDに選ばれた。

演奏発表：

「エルンスト・オッテンザマー＆武本京子デュオ・リサイタル」４ヵ所

⑴　エルンスト・オッテンザマー＆武本京子デュオ・リサイタル
鈴鹿市文化振興事業団主催　三重県　鈴鹿市文化会館　2004.5.7

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

ウェーバー：歌劇「シルヴァーナ」の主題による協奏的変奏曲　作品33
ウェーバー：協奏的大二重奏曲　変ロ長調　作品48「グラン・デュオ」
ヴェルディ：歌劇「椿姫」の旋律による演奏会用幻想曲
シューマン：幻想小曲集　作品73
シューマン：三つのロマンス　作品94
シューマン：アダージョとアレグロ　変イ長調　作品70

⑵　エルンスト・オッテンザマー＆武本京子デュオ・リサイタル
NPOイエロー・エンジェル主催　岐阜県　イエロー・エンジェルコンサートホール　2004.5.8
ベートーヴェン：「ドン・ジョバンニ」の主題による変奏曲
ウェーバー：歌劇「シルヴァーナ」の主題による協奏的変奏曲　作品33
ヴェルディ：歌劇「椿姫」の旋律による演奏会用幻想曲
シューマン：三つのロマンス　作品94
シューマン：アダージョとアレグロ　変イ長調　作品70
ウェーバー：グランドデュオコンチェルト　作品48

⑶　エルンスト・オッテンザマー＆武本京子デュオ・リサイタル
ヤマハミュージック東海主催　小牧市　小牧味岡市民センター　2004.5.9
シューマン：幻想小曲集　作品73
ショパン　：「ノクターン遺作」「ワルツ　作品64-1」「幻想即興曲　作品66」
クライスラー：愛の喜び&愛の悲しみ
ブラームス：ソナタ第2番
ヴェルディ：歌劇「椿姫」の旋律による演奏会用幻想曲
ベートーヴェン：「ドン・ジョバンニ」の主題による変奏曲
プーランク：クラリネット・ソナタ

⑷　エルンスト・オッテンザマー＆武本京子デュオ・リサイタル
名古屋ウィーン・クラブ主催　名古屋市　電気文化会館ザ・コンサートホール　2004.5.11
ヴェルディ：歌劇「椿姫」の旋律による演奏会用幻想曲
プーランク：クラリネット・ソナタ
ベートーヴェン：「ドン・ジョバンニ」の主題による変奏曲
ウェーバー：歌劇「シルヴァーナ」の主題による協奏的変奏曲　作品33
ブラームス：クラリネットとピアノのためのソナタ
ウェーバー：協奏的大二重奏曲　変ロ長調　作品48「グラン・デュオ」

CD出版：
CD「グラン・デュオ」オクタビアレコード　2005.2
ウェーバー：歌劇「シルヴァーナ」の主題による協奏的変奏曲　作品33
ウェーバー：協奏的大二重奏曲　変ロ長調　作品48「グラン・デュオ」
シューマン：幻想小曲集　作品73
シューマン：三つのロマンス　作品94
シューマン：アダージョとアレグロ　変イ長調　作品70

❻　芸術教育専攻代表，セクハラ防止等対策委員会，学生生活委員会

❼・名古屋市文化振興事業団の評議員

・講座：
「楽曲イメージ奏法」2004　カワイ，「ハノンの効果的活用法」2004　ヤマハ，「ツェ

ルニーからショパンのエチュードへ」2004,「日本人作曲家作品」2004　ヤマハ
・ショパン国際ピアノコンクールin ASIA　アジア大会審査委員
・日本クラッシックコンクール，県下ピアノコンクール，春日井ピアノコンクール他の審査委員

林　　剛一　Hayashi, Kouichi　　助教授　音楽教育講座　　芸術学修士

❶ 声楽，音楽教育
❷ 第５回こうべ市民音楽祭市長奨励賞（1982年），第３回摂津音楽祭奨励賞（1988年）
❸ 名古屋オペラセミナー
❹ 音楽科研究Ａ（３年），オペラ概論（共通科目），声楽Ⅰ（１年），声楽Ⅱ（２年），声楽実習（２年），声楽演奏法研究Ⅰ（３年），声楽演奏法研究Ⅱ（３年），声楽ゼミナール（４年），合唱Ⅱ（３年），合唱指揮法（４年），声楽演奏法研究（大学院）
❺ 現在の研究テーマ：
１）呼吸法と声の保持について
２）気持ち（ニュアンス）の変化による声の音色の変化について
・業績リスト（演奏発表）：
１）長屋弘子，林剛一　ジョイントコンサート（2004／５，重要文化財　服部家）
２）林剛一　バリトンリサイタル（2004／11，電気文化会館ザコンサートホール）
３）岐阜バッハ合唱団　モーツァルト　レクイエム，ヴェスペレ　バスソロ（2004／12，サラマンカホール）
４）名古屋大学交響楽団　ベートーヴェン　第９交響曲　バスソロ（2005／12　愛知芸術センターコンサートホール）
５）長久手オペラ　ウェーバー（魔弾の射手）カスパール役（2005／３，長久手文化の家）
・研究内容及び今後研究計画：
私の研究活動の中心は私自身の演奏発表（発表に至るまでの練習過程を含む），そして1996年在外研究員として行ったイタリア（ローマ）における世界的名歌手G・タッデイ氏のもとでの研鑽，その後，年１・２回ローマにて引き続きレッスンを受けていること，及び本学や非常勤として勤務する大学，個人的生徒のレッスンを行うことによりなされるものである。
私の研究の最終到達点は，師であるG・タッデイ氏の声（声質ではなく）発声法，歌である。なぜならば私の知る限り氏をこえる歌手はいないと確信するからである。
氏はその方法論を直接的に指導されない為，研究は氏の声を聴き，顔の表情，身体の使い方を見ることにより吸収する方法と氏のCD，DVD，VIDEOを収集しそれらをもとに研究する方法をもってすすめている。
今後も出来る限り氏のレッスンを受け，生の氏の声，歌に接して研究を継続して行きたいと考えるものである。
❻ 附属図書館委員会委員，国際交流委員会委員（2004／９まで）
❼ 日本クラシックコンクール審査員，名古屋オペラセミナー代表

新山王　政和　Shinzanou, Masakazu 助教授　音楽教育講座　　教育学修士

❶ 音楽科教育学，関連分野：演奏学（ファゴット）

❷ 山口県学生音楽コンクール：コンクール大賞（1980.８），山口県文化賞：栄光のメダル（1987.３），コニカミノルタテクノロジーセンター「イメージングに関する研究論文」優秀賞受賞（2004.11）

❸ 日本音楽教育学会，日本管打吹奏楽学会，日本音楽知覚認知学会，日本音楽表現学会

❹ 管弦打１（２年），管弦打２（２年），管楽器演奏法研究１（３年），管楽器演奏法研究２（３年），合奏実技２（４年），器楽（管弦打）ゼミナール（４年），音楽科研究Ｂ２（１年），総合演習２（４年），国際社会と日本（３年），音楽科教育特論１（大学院），特別研究１（大学院）

管弦打は，専門以外の金管楽器や打楽器の指導も行わなければならず負担がかなり大きい。また１時間に20名以上の学生をマンツーマンで指導しなければならないため指導効果が悪くなりやすい。合奏実技は，受講生一人一人の技術レベルの開きが大きいため教材曲の選択や指導に困難を感じている。しかしいずれの授業においても，受講生は自らの予習や復習を熱心に行い，受講生同士でも互いに教え合うことによって筆者の指導が及ばない部分を自主的に補っていた。

❺ 現在の研究テーマは，音楽科教育学とファゴット（演奏実技）の２本柱である。音楽科教育学に関しては，動作タイミングとビートの関係に関する分析的研究，及び音高ピッチの知覚に関する分析的研究を行っている。また教育現場の教師と共に授業研究にも取り組んでいる。ファゴットに関しては，独奏のみならず室内楽やプロ及びアマチュアオーケストラにおける演奏活動などを通じて自己研鑽に努めている。

論文：

学校吹奏楽における新しいスタイルによる外部指導者導入の問題点と今後の課題，招聘費用の確保・人材養成・学校や部活動の運営面を視点とした考察，全日本音楽教育研究会大学部会平成15年度会誌，2004.５

（共著）ピッチマッチにおけるフラットシンギングの様相，モデル音や発声の違い，性差及び学習レベルの相互比較を通して，日本音楽知覚認知学会平成16年度研究発表論文集，2004.５

学校音楽教育の授業実践における「イメージ形成力」の発達をめざした試み，コニカミノルタテクノロジーセンター「イメージングに関する研究論文」優秀賞受賞論文，2004.11

指揮基本動作における初心者と熟達者の動作タイミングの違いに関する分析的研究，拍点と打点の関係，及び速度変化に基づく指揮基本原則の再考察，日本音楽教育学会学会誌第34-2号，2004.12

今，この時代だからこそ「クリエイティブな音楽活動」の実践を！，ユビキタス社会における「音楽の基礎・基本の力」としてのイメージングに着目して，日本音楽教育学会音楽教育実践ジャーナルVol.2，No2，2005.３

ユビキタス化された社会における音楽の基礎・基本の力の問い直しと，子ども自身の思考プロセスを重視した授業実践の模索，イメージングと授業の構造化を視点とした分析とその考察，愛知教育大学研究報告第54号，2005.３

ユビキタス化された社会における「音楽の基礎・基本の力の問い直し」(2)，子ども自身の「思考を伴ったイメージング・プロセス」を活用した授業実践，愛知教育大学教育実践総合センター紀要第８号，2005.２

口頭発表：

（共同）ピッチマッチにおけるフラットシンギングの様相，モデル音や発声の違い，性差及び学習レベルの相互比較を通して，日本音楽知覚認知学会平成16年度春季研究発表会，2004. 5

指揮経験の多寡による基本的な指揮動作の違いに関する分析的研究，日本音楽表現学会札幌大会，2004. 6

各種モデル音に対する異なったフラットシンギングの様相，音源の違いによる微小ピッチの知覚の差とその影響について，日本音楽教育学会第35回全国大会，2004.11

文部科学省科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）：

研究分担者，視覚フィードバックにおけるフラットシンギングの測定と治療法の研究

研究助成：

コニカミノルタテクノロジーセンター「イメージングに関する研究論文」優秀賞受賞賞金

❻ 時間割編成専門委員会委員，システム運営専門委員会委員

❼ 岡崎市教育研究大会：講師，額田郡教育研究大会：講師（３回），岡崎市矢作南小学校現職教育研究会：講師（３回），第３回ソニー子ども科学教育プログラム入選プロジェクト校授業研究協議会（刈谷市立刈谷南中学校）：講師，知立市小中学校合同音楽会：講師

❽ 「平成17年度全日本音楽教育研究会全国大会愛知総合大会（幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学)」総合事務局長。Expo2005 AICHI JAPAN（愛知万博）愛知県主催「市町村企画・刈谷デー」企画実行委員。

蒲郡フィルハーモニー管弦楽団トレーニングコンダクター

小泉　恭子　Koizumi, Kyoko　　助教授　音楽教育講座　　Ph. D.

❶ 応用音楽学

❸ 日本音楽教育学会，日本ポピュラー音楽学会，日本音楽学会

International Association for the Study of Popular Music

❹ 応用音楽概論，共通科目「ポピュラー音楽とジェンダー」，音楽教育学研究，専門教育入門，和声学，音楽科教育，音楽科研究（学部），音楽科教育特論Ⅱ（大学院）

ポピュラー音楽研究，応用音楽学，クリエイティブ・ミュージックの３本柱を軸に展開

❺・現在の研究テーマ：ポピュラー音楽とジェンダー

・業績リスト：

論文：

「諸外国の動向　イギリス」CD-ROM版音楽科教育実践講座刊行会編『セレーノ―CD-ROM版音楽科教育実践講座　理論編　１』ニチブン（2004年４月）

・科学研究費補助金：

平成16年度科学研究費補助金＜若手研究(B)＞武満徹の映画音楽における語法の継承性と実験性の解明（課題番号15720023）

❻・教育実地研究専門委員

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

❼・公開講座：
京都女子大学発達教育学部児童学科前期公開講座「音楽ゲームで遊ぼう―ボディパーカッション＆電子楽器」（同大・深見友紀子教授と２名で担当）（2004年７月）
・学校現場における指導助言：
平成16年度岡崎市教育研究大会助言者（音楽・中）（2004年９月）

橋本　剛　Hashimoto, Goh　講師　音楽教育講座　芸術学修士

❶ 作曲
❹ 作曲概論（２年），合唱Ⅰ（２年），合唱Ⅱ（３年），情報教育入門Ⅱ（１年）
❺ 作品発表：
・『管絃講』（尺八・Vn・Pf）東京・日暮里サニーホール　2004.4
・ミュージカル『星眼鏡ノオト』全30曲より
『星眼鏡ノオト』『Welcome to Alhambra!』『Do it!』『つくろひ』『さびしいときには』『Say Wah!』『思い出のアルハンブラ』『星はいつも』８曲抜粋。自らピアノ伴奏。長崎・ブリックホールラウンジ（2004.７）
・『君と生きていく～ロングロングタイム～』（演劇『砂の絵の具』劇中歌）大阪・HEP HALL（2004.７），福岡・西鉄ホール（2004.７），長崎・ブリックホール（2004.７），東京・こまばアゴラ劇場（2004.８）
・『秋潦～フルートと箏のための～』東京・日暮里（2004.11），東京文化会館（2005.１）
・『時空戦士エアロマン』（演劇『冒険王04』劇中歌）北九州芸術劇場　2004.12
・『春の庭』（混声５部・Pf）愛知教育大学卒業演奏会にて改訂初演。指揮。2005.3

学生の大半が作曲に関しては初心者であったため，１年生を対象とした情報教育入門においては，パソコン上で小規模な作品を自由に作った上で，みずからの音楽の表現意図を文で伝える（解説する）ことを目的として，作曲過程のレポート化を課すことを試みた。今後は動画を取り入れ，「視覚的要素と音楽の関わり合い」も研究の対象としたい。

２年生を対象とした作曲概論においては，全員に短い詞を１篇共通して与え，旋律を付して歌にするよう指示。優秀作品を３つ選出のち，それらを合唱化し，学内演奏会で３曲とも全員で合唱して発表したが（2004.12），同じ詩でも作曲者によって調や拍子，曲調などに違いが出ることを認識できただけでも，学生たちには貴重な体験となったといえよう。

作曲するにあたり，ときとして演奏者の人数や年齢層，個々の技量，使える楽器の種類，演奏時間等に限りがあるといった場面に遭遇することがある。作曲専攻生には，将来現場で起こりうるあらゆる事情に臨機応変に対応できる柔軟さを養ってもらいたい。

作品評価のポイントは「アイデアのおもしろさ」。最初は感覚的でもよいが，理論に裏打ちされたおもしろさを追求する積極性が望まれるところである。学生たちへは，五感をくすぐるような音楽を創作していくことを通して，児童・生徒の発想力を喚起できる心豊かな教員へと育ってくれることを願う。

❼・和光大学人間発達学科特別講師として Dance Performance Project [Merry Zome 001] において音楽指導及びピアノ演奏担当。グリーンホール相模大野　2004.6
・合唱祭において十八銀行混声合唱団を指揮。『茶摘』『野に咲く花のように』（２曲とも発表用に編曲）長崎市公会堂　2004.6

・十八銀行混声合唱団を指揮。『野に咲く花のように』『翼をください（発表用に編曲）』長崎・平和の泉　2004.８
・ラウンジコンサートにてピアノ演奏。長崎・ブリックホールラウンジ　2004.８

美術教育

藤江　　充　Fujie, Mitsuru　　教授　　美術教育講座　　芸術学修士

❶ 美学・美術教育学，特に日米のカリキュラム比較，鑑賞教育論，美術館教育など

❸ 美学会，比較思想学会，日本教育学会，美術科教育学会（理事，学会誌委員），大学美術教育学会（論文査読委員），日本描画テスト・描画療法学会，国際美術教育学会（InSEA）

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），美術科内容論Ⅰ（２年），美学概論（３年），美術科内容論Ⅲ（３年），美術教育演習Ⅰ（３年），美術科教育法Ⅳ（４年），美術教育演習Ⅱ（４年），造形研究（４年），美術教育学演習（大学院），美術科授業研究（大学院），特別研究（大学院）

・パソコンの活用に関しては，学生が情報教育入門で学習したことを教育法の授業でも応用できるように，関連の授業で機器を活用するような活動を取り入れている。美学概論では，東西の美術作品を放送ビデオデジタル映像で紹介するなど具体的にイメージできるように提示している。卒業研究や修了研究の指導では，学生が学校や美術館など実践の現場で活動体験ができるように，美術館などの学外組織との連携を保ってきた。また，JICA研修生に日本の美術教育について講義をした。美術館教育について学芸員や他大学の大学院生などの要請に応じて情報提供や資料貸与をしている。また，公開講座に参加した教員からの要請に応じて授業研究の指導し教材などを貸し出している。

❺ 研究テーマ：日米美術教育の比較，鑑賞教育方法論など

科学研究費：

基盤研究(C)「日米の比較を通した図画工作科・美術科における『学力』の研究」（2004～2007年度計画）研究代表者。海外研究協力者を招いて愛知教育大学と大阪教育大学附属小中学校で授業を観察しビデオ収録しDVD化した。

2004年12月“InSEA Asian Congress in Beijing”（北京・首都師範大学）にて招待発表。テーマは「“Three Learning Themes” as Scopes of Curriculum　in Art Textbook」

◯研究論文

単著：

「全米美術教育評価の考え方と実際，そして今後の課題」『大学美術教育学会誌・第36号（大学美術教育学会誌）』（2005年３月）

「美術教育のカリキュラムに関する研究　アメリカの美術教科書における『領域』の分析を通して」『美術教育研究（美術教育研究会誌）』（2004年８月）

「学校と美術館との連携から見えてくるもの」『美術フォーラム21・第11号（醍醐書房』（2005年２月）

❻ 教育研究評議員（財務委員会委員及び大学改革推進委員会委員），美術教育講座代表，附属図書館運営委員会委員など。

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

❼・学外委員会関連：
名古屋市美術館運営協議会（会長），名古屋市造形教育研究会顧問，豊橋市初任者研修協議会委員，教育美術振興会評議員（教育美術賞審査員兼任）
・岡崎市及び愛知県教育研究集会（図工・美術科）の講師，各地域の現職研修会の講師など。

宇納　一公　Uno, Kazuhiro　　教授　　美術教育講座　芸術学士，教育学士

❶ 彫刻，環境造形，アートによる地域貢献の実践研究
❷ 第18回中部国展新人賞（1980年）　第19回中部国展国画賞（1981年）
第55回国展前田賞（1981年）　第58回国展Ⅰ氏賞（1984年）
❸ 大学美術教育学会，野外彫刻保存研究会，金属造形研究会
❹ 彫刻基礎（１年），彫刻実技Ⅱ（２年），彫刻制作Ⅰ（３年），彫刻制作Ⅱ（３年），彫刻論（３年），彫刻研究（４年），彫刻演習（４年），造形研究（４年），図画工作科研究Ａ（２年），図画工作科研究Ａ（３年），環境と人間・入門（１年），環境と人間・展開（２年），彫刻研究（大学院），特別研究（大学院）
・入学時の学生の造形力の基礎的レベル及び美術教育への興味関心の向上を計るには，専門教育の充実が必要であるが，時間数の削減による低下は避けられず到達目標が下がってきているのが気になる。彫塑教育プログラムでは，学生は，大学で学び研究すること，将来社会に向けて貢献出来るための勉学の意義を改めて問うことから始め，その為に大学内で出来ることと出来ないことに分けて実習の機会を作っている。以下は，地域に出かけて取り組み学ぶ機会の実践例である。
・平成12年から大学近隣の自治体において教員の指導のもとで有志の学生と卒業生たちによるアート事業を展開し，まちの人と交流を続けている。継続事業として，通勤通学の玄関である知立市駅前では，毎年12月から１月にかけてまちを彩るイルミネーションがあり，学生たちが中心となって市民や商工会の人たちと取り組んでいる。また知立市文化会館パティオ池鯉鮒の入り口には，野外彫刻プロムナードがあり，卒業生や大学院生の作った石彫や金属製のオブジェが展示され，今年で第６回を迎えた。１年ごとに作品の入れ替えをして，愛教大生たちの研究成果を市民に親しんでもらいながら，文化向上とまちの活性化に寄与して今日に至っている。
・2004年度愛知教育大学美術教育講座フレンドシップ事業を企画し，彫塑プログラムの担当をした。知立市教育委員会との連携により，１年生の美術の学生は地元の知立市立来迎寺小学校児童との交流を通じて子どもたちの様子を知る機会を得て，教育のスキルアップを図ることが出来た。なお，1999年から美術教育講座で実施されているフレンドシップ事業の集大成として，報告集の編纂をしており2005年の夏に発刊の予定である。
❺・オーバルコート大崎マークイースト新築工事アートプロジェクト計画によるパブリック・アート彫刻作品「空／緑」を設置。（アソシエイテッド・アーツK.K提案によるプロポーザル／プレゼンテーションにより採択される。）東京都品川区東五反田
・「水に浮かぶ形」（2004響命の刻展・パティオ池鯉鮒）に出品
❻・就職委員会・地域連携部会
❼・ちりゅう芸術創造協会事業企画運営委員会委員
・パティオ池鯉鮒野外彫刻プロムナード展実行委員会顧問
・西枇杷島町生涯教育公開講座講師
・豊田市民美術展彫刻部審査員

・愛知万博「刈谷市の日」市町村催事企画実行委員会委員
・知立市文化会館シニアカレッジ講師
・愛知教育大学附属名古屋中学校研究大会美術科助言者
・「2004ガラスアート博覧会in知立」の企画統括
平成16年度「ガラスアート博覧会in知立」の開催が決定され，ちりゅう芸術創造協会主催，愛知教育大学共催，名古屋芸術大学の協力により準備を進め実現した。なおガラス教育プログラムとの組み合わせ，学生たちによるワークショップ開催，知立市文化協会の協力による華道家とのコラボレーションも実現し好評であった。

黒澤　千春　Kurasawa, Tiharu　　教授　　美術教育講座　　芸術修士

❶ 美術・工芸
❷ 1976年　第16回伝統工芸新作展　奨励賞（瑠璃螺鈿合子)
1977年　第24回日本伝統工芸展　日本工芸会会長賞（乾漆合子・煌く流れのように）
❸ 日本工芸会，漆工史学会，道具学会
❹ 造形基礎Ⅰ・Ⅱ（１年），造形基礎Ⅲ・Ⅳ（２年），漆芸実技Ⅰ・Ⅱ（３年），造形材料学Ⅰ・Ⅱ（３年），造形研究Ⅰ・Ⅱ（３年），造形研究Ⅲ・Ⅳ（４年），漆芸実技Ⅲ・Ⅳ（４年），芸術作品研究Ⅰ・Ⅱ（４年），造形制作指導Ⅰ・Ⅱ（４年），工芸実習Ⅰ・Ⅱ（大学院）
❺ 研究テーマ：漆芸装飾技法の研究
作品発表：第35回東海伝統工芸展（銀平文中次・白銀）名古屋
学術・研究交流：道具学会（沖縄芸術大学），漆工史学会（東京根津美術館）
❻ 大学院・学部　入学試験委員

野澤　博行　Nozawa, Hiroyuki　　教授　　美術教育講座　　芸術学士

❶ 専門分野：銅版画，関連分野：版画，絵画，美術教育
❷・日本版画協会会員推挙（1986年）など
❸・日本版画協会，大学版画学会，大学美術教育学会，美術科教育学会
❹ 風景写生（１年），図画工作科研究ＡⅡ（１年），絵画実技Ⅰ（２年），図画工作科研究ＢⅠ（２年），絵画論（３年），絵画制作Ⅱ（３年），版画実習（４年），絵画研究（４年），造形研究（４年），図画工作科教育Ａ（４年），総合演習Ⅱ（４年），絵画論Ⅰ（大学院），絵画論Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ（大学院），特別研究Ⅱ（大学院）
❺・銅版画のメチエの研究
・日本版画協会展に出品（４月，東京都美術館），その他，グループ展２件
❻・大学院専攻代表，主題科目コーディネーター
❼・本学における公開講座，豊田市生涯学習（ヤング・オールドサポートセンター）講師，岡崎市幼児教育講座

中島　晴美　Nakashima, Harumi　　教授　　美術教育講座　　芸術学学士

❶・現代陶芸

❷・毎日ID賞特選二席（1980年），国際陶磁器展美濃'89　銅賞（1989年），国際陶磁器展美濃'95　金賞（1995年）

❸　国際陶芸学会（Ⅰ・A・C）会員，東洋陶磁学会

❹・造形基礎Ⅰ，Ⅱ，（1年），Ⅲ，Ⅳ，（2年），陶芸実技Ⅰ，Ⅱ，造形材料学Ⅰ，造形研究Ⅰ（3年），陶芸実技Ⅲ，Ⅳ，造形研究Ⅲ，芸術作品研究Ⅰ，造形制作指導（4年），造形演習Ⅰ，造形演習Ⅱ（大学院）

・素材をひとつに限定して制作する方法（工芸的造形あるいは陶芸的造形）は，素材に対するアプローチの仕方にあると考え実践を通して，又は作品を鑑賞することからそのことを自覚できるような授業を実施している。

❺　個展：

・ギャラリーTAO（2004年／東京）

グループ展：

・机上空間のためのオブジェ展X'04（2004年・コンテンポラリーアートNIKI／東京）
・『土から陶へ』の造形展―PARTⅠ：美濃（2004年・目黒陶芸館／三重・京都文化博物館／京都・NIKI　GALLERY　SATSU／東京）
・国際陶芸学会（IAC）会員展（2004年・ソウル／韓国）
・鹿児島陶芸展（招待出品2004年・鹿児島）
・教官展（2004年・刈谷市美術館）
・酒器展（2005年・陶彩／東京）
・MINO　CERAMICS　NOW　2004（2004年・岐阜県現代陶芸美術館）
・Terra Nova Sculpture & Vessels in Clay（2004年・Museum of Arts and Design／New York）

パブリックコレクション：

・World Ceramic Exposition Foundation（韓国）

作品・作家紹介：

・現代日本の陶芸（ARTBOX IN JAPAN　2005年）
・近代工芸案内（東京国立近代美術館）
・茶碗をつくる（株式会社　双葉社）
・伝統を作る①　やきもの（株式会社　学習研究社）

❼　講演：

・シンポジュウム「教育の現場から」パネラー（岐阜県現代陶芸美術館）
・鹿児島陶芸展審査員（2005年4月）

礒部　洋司　Isobe, Hiroshi　　教授　　美術教育講座　　芸術学修士

❶　美術科教育

❷　1985年展　特別賞（1985.10）

❸　美術科教育学会，大学美術教育学会

❹　専門教育入門B（1年），図画工作科研究BⅡ（1年），図画工作科教育A（2年），図画工作科教育B（2年），現代日本の社会と文化セミナー（3年），美術科教育CⅡ（3年），美術教育演習Ⅰ（3年），美術教育演習Ⅱ（4年），美術教育演習C（4年），造形

研究（４年），美術科教育演習Ⅰ（大学院），美術科教育演習Ⅱ（大学院）

美術教育関連の科目をおもに担当しているため，できる限り現場での指導に直結した授業を心がけてきた。2005年５月に全学で実施された学生の授業評価に関するアンケートを見ると，内容や一時間あたりの量はおおむね適切だと判断されているようである。ただ，授業外での学習時間をあまり取らせていないことと授業中に学生自身に考えさせることに不足があるようである。アンケート自体は授業科目の性格を勘案されないことや項目設定に問題も残るようにも思うが，それはさておき，このことは今後の授業経営に反映していきたいと考えている。

❺ 現在の研究テーマ：

美術教育史を研究している。ここ数年は科学研究費補助金をいただいていることもあって，日本各地及びイギリスで調査旅行を実施して明治･大正期の美術教育関連文献の検索･収集につとめるとともに，後進のために文献目録の作成を行ってきた。これらの作業の傍ら，収集文献の検討から浮かび上がってくる美術教育史上のエポックに関する論文を執筆･発表している。以後もしばらくはこのようなスタイルで研究を続けていくつもりである。

論文：

「黒板画の本――教育略画の系譜に関する研究　２――」（共著），『大学美術教育学会誌』第37号，2005

科学研究費補助金：

「明治中期以降の我が国美術教育思想に与えたE.P.ヒュースの影響に関する研究」，2.100千円，（基盤研究(C)(2)，代表）

❻ 教育実地研究委員会委員

❼ 第50回　西尾市小中学生絵を描く会二次審査会　講師
平成16年度　岡崎市教育研究大会　美術科助言者
愛知教育大学附属岡崎小学校　第55回生活教育研究協議会　助言者
第44回西尾市小・中学生美術展　指導を受ける会　講師
真宗大谷派保育従事者研修会　講師
『はっぴーママ』連載「絵からわかる子どもの世界」監修

浅野　和生　Asano, Kazuo　　教授　　美術教育講座　　文学修士

❶ 西洋美術史

❷ 1999　三浦アンナ・辻荘一記念学術奨励賞

❸ 美術史学会，美学会，民族芸術学会，西アジア考古学会，地中海学会，日本ビザンツ学会

❹ 西洋美術史概論Ⅰ，Ⅱ，西洋美術史研究Ⅰ，Ⅱ，西洋美術史特論Ⅰ，Ⅱ，美術作品研究Ⅰ，Ⅱ，美術鑑賞演習，芸術概論，博物館実習，人文科学入門（ギリシア語入門）

すべての講義の授業では，授業に関する意見，感想，質問を毎週メールで提出させ，次の授業までにその回答を返信している。これにより，学生の疑問に直接答えることができると同時に，授業時間外での学習を促し，授業への関心を継続させるなどの効果があると考えている。

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

大学院の授業では，専門分野の研究を授業に反映させるよう努力している。

❺ ビザンティン時代の美術作品と文献の解釈を結びつけた研究をおこなっている。

❻ 評議員，大学広報編集委員長，美術教育講座代表

❼ NHK文化センター講師。その他社会教育機関での講演を随時おこなっている。

安田　篤生　Yasuda, Atsuo　　助教授　美術教育講座　　文学修士

❶ 日本美術史（近世絵画史）

❸ 美術史学会，美学会

❹・造形芸術概論（1年），日本美術史概論Ⅰ・Ⅱ（2年），日本美術史研究Ⅰ・Ⅱ（3年），芸術学演習Ⅰ・Ⅱ（3年），美術史現地指導Ⅰ（3年），芸術作品研究Ⅰ・Ⅱ（4年），日本美術史特論Ⅰ・Ⅱ（4年），美術史現地指導Ⅱ（4年），美術史特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）

・学部の授業では，美術史の初歩から始め，2年では日本美術史の基礎，3年では文化状況とも関連した美術史のさらに発展した研究について講義している。講義形式で行う授業としていくつかの問題点もあるが，大学から初めて学ぶ美術史の研究方法や成果について学年進行とともに学生が一定程度理解を示すようになってきており，ゼミでの発表等から判断しても一定の教育成果が上がっていると思われる。大学院では，美術史専攻者が極めて少数であるので，受講学生の知識や興味に合わせた授業内容にせざるを得ないのが問題であろう。担当している授業数が過大であると思われるのが最大の問題点ではあるが，内容の水準を落とすことなく，学生が理解しやすい授業を念頭に一層努めていきたい。

❺・現在，江戸時代前期に活躍した尾形光琳について研究を進めている。特に，光琳が没してから江戸時代末にかけて，光琳に対するイメージがどのように移り変わって行ったのかを究明することに近年取り組んできた。今後は，光琳イメージの形成に大きく関わった，酒井抱一周辺の活動についてさらに考究するとともに，それらの成果を踏まえて，光琳作品の分析に取り組む予定である。

・論文：

「江戸時代における光琳像の変遷について（下―一）」愛教大研究報告，第54輯，2005年

❻ 時間割編成専門委員会委員，基礎実習・応用実習コーディネーター

富山　邦夫　Tomiyama, Kunio　　助教授　美術教育講座　　美術工学修士

❶・デザイン，専門分野：デザイン教育，関連分野：マーケティング

❷・福岡広告協会賞・SP部門　銅賞（1996），福岡広告協会賞・アーバンアド部門　銅賞（1995），企業シンボルマーク・デザインコンペ　金賞（1995），福岡広告協会賞・アーバンアド部門　銅賞（1994），郵政省・全日本DM大賞　佳作（1994），福岡広告協会賞・アーバンアド部門　銀賞（1993），東京国際文具フェア'90　招待出品（1990），福岡広告協会賞・PR誌部門　銀賞（1985）

❸・日本デザイン学会，道具学会，日本広告学会，基礎造形学会，知的生産の技術研究会

❹・デザイン基礎（1年），デザイン基礎Ⅱ（1年），デザイン実技Ⅱ（2年），デザイン制作Ⅰ（3年），デザイン制作Ⅱ（3年），デザイン研究（4年），造形研究（4年），デザイン演習（4年），現代日本の社会と文化・セミナー／広告文化（3年），図画工作科教育A（2年），デザイン研究Ⅰ（大学院），デザイン研究Ⅱ（大学院）

デザインの意味と，社会認識：

デザインとは，幾つかの条件を満たしながら，市場を観察し，目的達成のために，問題点を明らかにし，課題を抽出し，それに対しての解決策を発見する一連の造形思考プロセスのことです。したがって，「デザインの教育」とは，日常生活において，筋道を立てて問題を解決していく学習そのものだと見立てることができます。

「デザインすること」とは，単に外観だけを扱うものでも，視覚だけを扱うものでも，レイアウトをすることでもありません。

しかし，現状，多くの人々にとって「デザイン」とは，「構成」や「装飾」のことかのごとく認識されています。これはおおいに問題だと思います。

「デザイン教育」を「美術」に限定しない：

学校現場における「デザイン教育」の大体の拠り所となっているのは，「構成教育（平面構成・立体構成）」です。この認識をもって「デザインである」と妄信・教育してしまっては，全く実効性はなく，とんでもなく限定的な世界観を子どもたちが受け継ぎ，その認識が社会に再生産されてしまいます。

デザインとは，常に社会生活との関係の上に成り立っていますので，むしろ「デザイン」は，教科としての領域の一部ではなく，各教科を関連づけする「総合学習」の中核的な存在として活きる「思想」です。

「総合学習」としてのデザイン教育を，教員養成の立場で考える：

さて「総合学習」ですが，教育現場では四苦八苦されて扱われているようです。また，縦割り教科の「合科」でもないはずです。「美術科」という教科は，また，その一領域に過ぎない「デザイン」は，教育においては周辺的な役回りを余儀なくされる傾向にあります。しかし「デザイン教育」を本来のデザイン思考の基礎として捉え直しますと，教科としてではない「学際的な学習システム」として「総合的な学習」が成立します。

将来の教師を育てる大学の教員として，私は，担当する幾つかの授業（学際度の差異はあるが「デザイン実技」「図画工作科教育」など）及び指導（「卒業研究」）で，この指導の組み立てを試行・実践中です。

この啓蒙活動と教育プログラムづくりこそが，教員養成系大学で「デザイン教育」を担当する私の責務だと考えています。教育は，子どもたちを通して再生産されるものですから…。

❺ 制作：

愛知教育大学「大学見学説明会」ポスター（グラフィックデザイン）６月
愛知教育大学「大学案内2005」パンフレット（エディトリアルディレクション）８月
愛知教育大学「大学概要」（ジャケットデザイン）８月
愛知教育大学「公式フォルダー＆レターヘッド」（設計デザイン）10月
愛知教育大学「大学院２次募集」ポスター（グラフィックデザイン）11月
愛知教育大学広報誌「Campus Now!」創刊号（エディトリアルデザイン）１月
愛知教育大学広報誌「Campus Now!」第２号（エディトリアルデザイン）３月
愛知教育大学「シラバス」（ジャケットデザイン）３月

❻ 広報部会・委員，時間割編成専門委員会・委員，６年一貫教員養成コース具現化専門委員会・委員，施設部会ワーキング（第一共通棟耐震化工事）グループ，広報誌編集会

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

議・委員

❼ 全国大学協同組合連合会（書籍部門セミナー）・基調講演（9月）

松本　昭彦　Matsumoto, Akihiko　　助教授　美術教育講座　　教育学修士

❶ 絵画，専門分野：絵画教育，絵画制作，関連分野：絵画技法・材料学

❷ 第51回全日本肖像美術協会展新人賞（2004），第78回白日展東海テレビ放送賞（2002），第77回白日展一般佳作賞（2001），第76回白日展名古屋タイムズ社賞（2000），第26回中部白日展名古屋タイムズ社賞（2000），第22回中部白日展中部白日賞（1996），第7回日産童話と絵本のグランプリ優秀賞（1991），第2回毎日メルヘン画佳作賞（1990），第1回毎日メルヘン画大賞（1988）

❸ 大学美術教育学会（会員），全日本肖像美術協会（会員）

❹ 絵画基礎（1年），風景写生（1年），図画工作科研究ＡⅠ（1年），絵画実技Ⅱ（2年），図画工作科研究ＢⅠ（2年），絵画制作Ⅰ（3年），絵画制作Ⅱ（3年），絵画研究（4年），絵画演習（4年），造形研究（4年），絵画演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

・従来の絵画指導法では「自由」「個性」「感性」に重点が置かれていたが，「自分で頑張りなさい」「自分で考えなさい」というのは教えることを放棄するのに等しい。また「自分らしさ」や「オリジナリティ」を強調するあまり，作者自身にも理解できないような作品や独りよがりで作為的な作品を生ませてきた点も見過ごすことができない。こうした美術教育の反省点を踏まえ，他者との比較による満足感ではなく，作者自身の喜びや満足感を大切にした教育活動を展開していく必要がある。

FD活動には積極的に参加し，他の教員の実践から多くを学び吸収していきたい。

❺・キミ子方式による「わかる」「できる」絵画指導法：

よりよい絵画の授業作りについて松本キミ子の著作や通信指導等を通して学び，さらに絵画指導法に関する研究を進めていきたい。

・キミ子方式の他技法への応用について：

不透明水彩以外のキミ子方式の技法研究として，これまでに水可溶性油絵具における三原色の選定，支持体についての実験を行い，その成果を論文として報告した。今後は，水可溶性油絵具独自の絵画技術について研究を進める予定である。

・人物肖像画の構図的研究について：

画像資料の収集を通して，人物と背景，前景の役割等について分析する。

・黒板画の本―教育略画の系譜に関する研究2―：大学美術教育学会誌37号　2005.3

・「キミ子方式」と水可溶性油絵具(2)：愛教大研報（芸）54　2005.3

・「キミ子方式」と大学生：教育実践センター紀要第8号　2005.2

・絵を描く自画像：油彩　F30号　第51回全日肖展（上野の森美術館）2004.4

科学研究費：

・明治後期以後の我が国美術教育思潮に与えたE. P.ヒュースの影響に関する研究（基盤研究(C)(2)課題番号16530580：研究分担者）2004.4～2006.3

❻・芸術系会議代表・入学試験部会委員，入学者選抜方法等専門委員会副委員長

❼・三好町文化協会絵画部理事

・三好公募美術展審査委員長　2004.11

・本学公開講座「楽しく絵が描けるキミ子方式入門」講師

・キミ子方式全国合宿研究大会講演「なぜキミ子方式なのか」講師　2004.8（横浜）

❽ 朝日チャリティー美術展に作品寄贈（社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団主催）

遠藤　　透　Endo, Toru　　助教授　美術教育講座　　芸術学修士

❶・工芸，専門分野：美術鋳造，精密鋳造，関連分野：金属材料
❷ 内藤賞，1988，第19回淡水翁賞，2002，第３回佐野ルネッサンス鋳金展奨励賞，2002
❸ 日本鋳金家協会会員
❹ 造形基礎Ⅰ（１年），造形基礎Ⅱ（１年），造形基礎Ⅲ（２年），造形基礎Ⅳ（２年），金工実技Ⅰ（３年），金工実技Ⅱ（３年），造形材料学Ⅰ（３年），造形材料学Ⅱ（３年），造形研究Ⅰ（３年），造形研究Ⅱ（３年），総合演習Ⅰ（３年），金工実技Ⅲ（４年），金工実技Ⅳ（４年），造形研究Ⅲ（４年），造形研究Ⅳ（４年），芸術作品研究Ⅰ（４年），芸術作品研究Ⅱ（４年），造形制作指導Ⅰ（４年），造形制作指導Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），造形演習Ⅲ（大学院），造形演習Ⅳ（大学院）
　美術鋳造作品制作には，数多くの作業工程（粘土原形制作，石膏原形制作，シリコーン型制作，蝋原形制作，湯道，埋没，仕上げ，色付け等）と，長い時間を必要とする。そのため，授業時間外にも制作を行うことが多い。近年，ジュエリー制作会社に就職する学生も増え，精密鋳造やクラフト作品制作にも取り組んでいる。短い時間で多くの技法を教えるのが課題といえる。
❺ 石膏鋳型による鋳造作品制作及び，精密鋳造，第45回日本クラフト展（東京，福岡），金属造形作家展ARAGANE　EXHIBITION（東京），第20回教官展（愛知）
❻ 教育実地研究専門委員，共通科目委員
　安全衛生管理者免許習得

樋口　一成　Higuchi, Kazunari　　助教授　美術教育講座　　教育学修士

❶ 美術，専門分野：構成，関連分野：工芸，工芸教育
❷ 第１回全国ウッドクラフト公募展奨励賞（1988年）
　第２回全国ウッドクラフト公募展優秀賞と兵庫県議会議長賞（1989年）
　第22回毎日・DAS学生デザイン賞公募展金の卵賞とサントリー賞（1990年）
　第３回全国ウッドクラフト公募展大賞と文部大臣賞（1990年）
　第４回全国ウッドクラフト公募展最優秀賞（1991年）
　第５回全国ウッドクラフト公募展特別賞（1992年）
　第６回全国ウッドクラフト公募展アイデア賞（1993年）
　第７回全国ウッドクラフト公募展アイデア賞（1994年）
　第１回CCDO〈中部デザイン団体協議会〉デザインアオード2001賞（2002年）
❸ 日本教育大学協会美術部門（全国委員），大学美術教育学会（全国理事），美術科教育学会，日本デザイン学会（評議員），意匠学会，アジア民族造形学会（中部支部役員），日本おもちゃ会議，中部デザイン協会，中部デザイン団体協議会，ものづくり教育協議会［ハンド101］，日本インテリア設計士協会，愛知県インテリア設計士協会，ものづくり教育会議（代表）
❹ 工芸基礎（１年），工芸基礎Ⅱ（１年），教養科目「人間と生活入門」（１年），工芸実技Ⅱ（２年），図画工作科研究ＡⅠ（２年），工芸制作Ⅰ（３年），工芸制作Ⅱ（３年），工芸論（３年），図画工作科研究ＡⅠ（３年），クラフト演習（４年），工芸研究（４年），

造形研究（４年）

構成領域工芸分野は，紙工芸・木工芸・窯工芸・金工芸・染め・織り・インテリアデザイン・玩具デザイン・ジュエリーデザイン・服飾デザインなど幅広い内容を含んでいる。この広範囲に及ぶ分野を限られた時間の中で扱うため，内容を精選し，より効果的な組み立てを考えながら授業を進めている。特に「試行錯誤しながら問題解決できること」「取り扱う素材について理解すること」「自然の素材に触れること」「子どもたちのものづくりを実感すること」「地域と連携すること」などを意識しながら授業を構成している。

❺・特別展「おと・うごき・木のおもちゃ展」に出品（愛知こどもの国）2004.３.～５.
・アジア民族造形学会中部支部会員展に出品(国際デザインセンターデザインギャラリー) 2004.８.
・ものづくり教育会議会員展に出品（国際デザインセンターデザインギャラリー）2005.２.
・HAPPY DESIGN展に出品（国際デザインセンターデザインギャラリー）2005.３.

❻ 安全衛生委員会委員

❼・愛知こどもの国における特別展「おと・うごき・木のおもちゃ展」の企画・監修（愛知県，愛知こどもの国）
・刈谷市南部生涯学習センターにおける「小学生を対象としたものづくり体験教室(2004.６.～2005.３.)」の企画・監修（刈谷市教育委員会）
・国際子どもワークショップin美濃における指導講師（美濃市，美濃市教育委員会　他）
・文部科学省フレンドシップ事業［岐阜大学］における招聘講師（岐阜大学）
・愛・地球博におけるLEDあかり展実行委員会委員（中部デザイン団体協議会　他）
・愛・地球博におけるLEDあかりワークショップの企画・実践（中部デザイン団体協議会　他）
・愛・地球博における「刈谷市の日」の実行委員（刈谷市）
・日本玩具博物館，名古屋市科学館に作品常設展示

鷹巣　純　Takasu, Jun　　助教授　美術教育講座　　文学修士

❶ 美術史，専門分野：仏教絵画史，関連分野：日本絵画史

❷ 第５回鹿島美術財団賞（1998年５月）

❸ 美術史学会，密教図像学会，東海印度学仏教学会（理事），美学会，仏教文学会，絵解き研究会，仏教文化在学研究会

❹ 人文科学入門（１年），西洋美術史（２年），東洋美術史（２年），日本美術史（３年），総合演習Ⅰ（３年），日本美術史演習Ⅱ（３年），総合演習Ⅱ（４年），日本美術史演習Ⅰ（４年），造形研究（４年），東洋美術演習Ⅰ（大学院），東洋美術演習Ⅱ（大学院）

私の教育活動は専門である日本美術史，方法論的に専門と共通する美術史一般，本来の専門とは領域を異にする美術教育法の３分野からなる。このうち美術教育法については，当該年度においては美術教育経験者を非常勤講師として任用できたためたまたま担当から外れたが，学校教員の免許を有しない部外者として，学校教育の外からの視点を維持するよう心がけている。美術史一般については，学校教員養成の理念に立って，スライドなどを用いて可能な限り多様な作品を紹介し，限られた時間内で教師の必須の教養であるところの美術史の全体像を理解させるように心がけている。日本美術史においては，美術史一般と同様の手法に加えて，美術史の方法論について体験的に学べるよう

工夫している。さらにこれらの正規の授業とは別に，博物館などの協力を得て展覧会の見学会などの企画をし，学生相互のふれあいを通した生きた美術体験の機会を設けている。大学院対象の授業については，当初は漢籍などの原典講読を含むレベルに設定していたが，受講者が少なかったためやや難度を下げた作品分析の演習を行ってみたものの，なお受講者は少ない。さらに難度を下げる必要性がある。

❺ 現在の研究テーマは２点，すなわち六道十王図の図像解析と，水陸画の現存作例探索である。今後，両者を統合するパースペクティヴを提示できればと考えている。

１：「六道絵にみる絵と語り」，『歴博』，第127号，国立歴史民俗博物館，2004.11

２：「六道絵に表れたイメージとテクストの関連性について」（口頭発表），「総合テクスト科学の構築」第５回国際研究集会（於，名古屋大学），2005.１

３：「密蔵院所蔵地蔵十王図について」，『安城市歴史博物館研究紀要』，第12号，安城市歴史博物館，2005.３

❻ 就職委員

❼ 愛知県史編纂委員会　文化財部会　特別調査委員，豊川市桜ヶ丘ミュージアム　美術資料購入選定委員

アイビー　ピーター　ラッセル　Ivy, Peter, Russell　講師 美術教育講座 芸術学士

❶ 美術，専門分野：ガラス

❷ コーニング美術館　作品永久収蔵（1997年），ロードアイランドデザインスクールよりFaculty Development Grant（2001年），マサチューセッツ美術大学よりFaculty Development Grant（2001年）

❸ G. A. S. ガラスアートソサイアティー，G. E. N. ガラス教育機関ネットワーク，アメリカンクラフトカウンシル　会員

❹ 造形基礎Ⅰ，Ⅱ（１年），造形基礎Ⅲ，Ⅳ（２年），ガラス実技Ⅰ，Ⅱ，造形研究Ⅰ，Ⅱ，造形材料学Ⅰ，Ⅱ（３年），造形研究Ⅲ，Ⅳ，ガラス実技Ⅲ，Ⅳ（４年）ガラス実技Ⅰ，Ⅱ（大学院），国際社会と日本セミナー（共通科目）

愛知教育大学の美術，工芸分野において，学生が，卒業後も美術，工芸の専門家としてその分野で活躍し続けて挑戦していくよう真剣に取り組んでいきたいと考えます。私は，１年生～４年生，そして，大学院生を教えるにあたり，それぞれに段階を踏まえて教えることを考慮しています。ガラス工芸は，技術的に大変難しい素材であり，はじめての学生には，まず創造的なものづくりよりも技術面の向上を重視し，基礎的な感覚をやしない，世界中の様々なガラスの作品のスライドを見せることなどから，ガラスの可能性について知識を高めていきます。また，実際に塊のガラスや，砂に鋳込むといった熱いガラスを扱う制作を通して，それらに，慣れ親しみ楽しんで取り組むことが目的です。

２年目では，宙吹き技法に始まり，その練習，技術的発展に的を絞っていきます。課題を完成させるために，時に授業時間外もそれらに取り組むこともあります。最終的には，３つの基礎的な宙吹きガラス，パートドヴェール（鋳込みガラス），コールドワーク（ガラスの加工）の理解を深めます。

３年目は，更なる技術習得，そして学生それぞれが，興味ある分野を模索し，創造的

な制作に重点を置き，独自の発展を深めるよう努めていきます。また幅広い技術の紹介と，創造的思考の発達を促すべく，一連の課題から制限することなく各々の特徴，技量をのばしていく指導をこころがけます。またそれぞれが，ガラスに関するスライドレクチャーを行うなど，プロフェッショナルとしての意識を養っていきます。

4年目では，さらに創造性を高めることに重点を置き，個々のリクエストに答え技術的デモンストレーションも進んだ高度なものになります。最終的には，独自の研究制作を追求し，熟練された技術を必要とします。また，プロフェッショナルな学習として今後どのように制作を続けていくか進むべき方向を模索する時期でもあります。研究生，院生も同じく，自分の方向性を提案し，さらに研究を深めるべく，各自の創造の源を追求するよう指導します。

❺ ⑴ 吹きガラスによる実用的なオブジェクト制作(伝統的なローマングラスの形の研究)
⑵ ホットワーク，又は，吹きガラスによる造形制作（建築物とガラスの融合の可能性）
⑶ 吹きガラス，ミクストメディアによる彫刻作品の制作

個展：

伝統的ローマングラスのケーンを使った技法と日本のテキスタイルの融合したガラス作品発表

建築の中の窓ガラスに自作の窓ガラスを組み込んだ作品発表　瑞浪芸術館（2004年）

伝統的ローマングラスのケーンを使った技法と日本のテキスタイルの融合した実用的ガラス作品の発表　画廊　凛（2004年）

伝統的ローマングラスのケーンを使った技法と日本のテキスタイルの融合した実用的ガラス作品の発表　オーバーレイの色の重なりを使った形の作品発表　ギャラリー濫觴（2004年）

ガラスアート博覧会in知立　伝統的ローマングラスの技法と建築物における彫刻作品発表　パティオ池鯉鮒（2004年）

花とガラスのコラボレーション展　吹きガラスによる有機的な形から生け花作家とのコラボレーション　パティオ池鯉鮒（2004年）

彫刻作品及び伝統的ローマングラス技法と日本のテキスタイル融合作品発表　アラバマ大学　図書館（2004年）

私自身の研究では，いくつかの異なる分野に関心があります。技術的な面で，大物の制作，ガラスとガラスを組み立てていくことを考えています。特に植物と器との関係性に関心があり，特定の植物のための一連の器をデザイン予定です。

そして，オリジナルの微妙な色合いのガラスを使用した作品の研究をしたいと考えています。そこからシンプルなガラスの器の制作。アート，彫刻的な制作もあわせて進めていきたいと考えています。

ガラス溶解炉のガス効率，そして，学生の卒業後の可能性を考え，自宅でも使用できる小型のガラス溶解炉のデザイン，実際に築炉に取り組みました。

❼ G. E. N. 総会　2004年代表校

G. E. N. 総会開催　ガラスホットワークデモンストレーション

シンポジウム「ガラスアートを学ぶ」☆国内外で活躍するガラス作家のシンポジウム「ガラス工房の現場―その可能性とは―」パネリスト　パティオ池鯉鮒

フレンドシップ事業：

知立小学校にて　学生によるバーナーワークを使ったワークショップ

教育プログラム　富士松東小学校の子供たちとリサイクルガラスを使った吹きガラス体験とサンドブラスト

アメリカ　アラバマ大学　図書館にて　制作についてのレクチャー
アメリカ　タスカルーサ　ニュース　テレビ出演
アメリカ　タスカルーサ　マガジン　記事
大阪芸術大学　吹きガラスデモンストレーション，スライドによる講義
名古屋芸術大学　中間講評会　指導
名古屋芸術大学　卒業制作展覧会講評会　指導

井戸　真伸　Ido, Masanobu　　講師　　美術教育講座　　芸術学士

❶ プロダクトデザイン
❷ 陶磁器デザインフォーラム　入賞　1992年
第２回土鍋デザインコンペティション　三重県知事賞　1995年
第１回日本茶茶器国際デザインコンペティション　奨励賞　1995年
国際デザインフェア　MIYAGI　審査員特別賞　1995年
世界炎博ストリートファニチャーデザインコンペティション　第３位　1996年
第６回テーブルウェア大賞展　最優秀賞　1996年
第５回国際陶磁器展美濃　デザイン部門　審査員特別賞　1998年
工芸都市高岡クラフトコンペティション　審査員特別賞　1998年
第６回国際陶磁器展美濃　デザイン部門　銅賞　2002年
The 3rd World Ceramic Biennale 2005　金賞　2005年
第７回国際陶磁器展美濃　デザイン部門　グランプリ・金賞　2005年
❹ 総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），デザインⅠ，Ⅱ（２年），デザイン論（３年），プロダクト研究（３年），造形研究Ⅰ，Ⅱ（３年），造形研究Ⅲ，Ⅳ（４年），プロダクトデザインⅠ，Ⅱ（３年），プロダクトデザインⅢ，Ⅳ（４年），造形材料学Ⅰ，Ⅱ（３年），芸術作品研究Ⅰ，Ⅱ（４年），造形制作指導Ⅰ，Ⅱ（４年）
❺ プロダクトデザインにおけるデジタルとアナログの関係
　手で使うモノは手で考える良さがあります。アナログとしての手と，デジタルテクノロジーの，各々の利点を活かしたプロダクトデザインの研究を続けています。
韓日陶磁器デザイン交流展　出品（韓国2004年）
❻ コース代表

保健体育

松井　利幸　Matsui, Toshiyuki　　教授　　保健体育講座　　体育学士

❶ 学校保健，体育実技（ハンドボール）
❸ 日本学校保健学会，東海学校保健学会，日本体育学会，日本発育発達学会，日本公衆衛生学会，全国大学ゴルフ研修会
❹ 学校保健Ⅱ（３年），ハンドボール（３年），スポーツⅠ（１年），スポーツⅢ（２年），健康教育特論（大学院）
　学生の課外活動としてのハンドボール部男女の部長として，インターカレッジクラス

の大会には参加指導している。本年度は女子部が西日本インカレ（大阪）に出場権を獲得して参加したが，全日本大会への出場権は得られなかった。日常の指導は公務等でほとんどみていないのを反省している。また，他大学に比べて，部員数がきわめて少ないのが残念である。

❺ 現在の研究テーマは，学校保健活動及び発育発達であるが停滞している。

❻ 教育研究評議会評議員（教務企画委員会/共通科目専門委員会），保健体育講座講座代表

米田　吉孝　Yoneda, Yoshitaka　　教授　　保健体育講座　　体育学修士

❶ 運動学・バイオメカニックス，体育実技（柔道）

❷ 愛知県体育表彰　平成10年３月21日　愛知県体育協会
Honorary Member　1996.3.29　Muncie Delaware Country of Commerce
Honarary Citizenship　2002.8.29　City of Muncie
Distinguished International Educator Award　2002.8.29　Ball State University

❸ バイオメカニックス学会，日本体力医学会

❹ 体育統計処理（３年），主題科目，体育科教育Ａ（３年），総合演習Ⅱ（４年），体育実践教育特論Ⅰ（大学院），運動方法学（大学院），運動方法学演習Ⅰ（大学院），運動方法学演習Ⅱ（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：小学校体育科授業への視聴覚機器の応用
著書：小学校体育の教材・指導事例集（共著），黎明書房，2004年

❻ 図書館長
大学改革，財務，教務企画，情報などの各種委員会委員

❼ 愛知県教科用指定図書審議会会長，愛知県体育協会理事，岡崎市教育委員会OC委員会会長，愛知県柔道連盟理事長，全日本柔道連盟総務委員会委員，愛知教育大学附属岡崎中学校指導助言

市野　聖治　Ichino, Shoji　　教授　　保健体育講座　　経済学修士

❶ 体育・スポーツ経営学，野外運動（スキー）

❷ Honorary Citizenship　City of Muncie State of Indiana 2000. 9 .20
International Educator Award　Ball State University 2002. 8 .29
体育功労賞　愛知県体育協会　平成12年３月

❸ 日本体育学会，東海体育学会，日本体育・スポーツ経営学会（理事），日本スキー学会，愛知教育大学体育学会（会長），全日本スキー連盟（企画委員長）

❹ 体育経営学，スキー，体育科教育，スポーツ（学部）
体育経営学特論，体育経営学演習，体育科教育特論（大学院）
演繹的思考の重視，体育・スポーツを公共サービスと市場メカニズムから考察

❺ スポーツチームのマネジメント（組織と個人の統合関係から）
スキーにおけるターンのメカニズムと指導への応用
著書：
SAJ教育本部オフィシャルブック2005年度版（共著）スキージャーナル社　2004/10
論文：
「新たなる試みー帰納法から演繹法へ」SKI journal　3　2004/04
「メンバーのバーンアウトに影響を与えるスポーツチームのマネジメントについて」

愛知教育大学研究報告　Vol.54　2005/03

❻ 保健体育講座研究紀要編集代表者，教育実地研究委員会委員

❼ 愛知教育大学附属名古屋小学校研究協議会指導助言，西尾市教育委員会「総合型地域スポーツクラブ」講師，御津町教育委員会「体力づくり」講師，愛知県体育研究会助言者，全日本スキー連盟　スキー大学「スキー技術と指導」講師，全日本スキー技術選手権大会コーデイネーター

野々宮　徹　Nonomiya, Toru　　教授　　保健体育講座　　体育学修士

❶ 体育学，専門分野：体育史，関連分野：スポーツ史

❸ 日本体育学会，スポーツ史学会（理事，編集委員），日本レジャー・レクリエーション学会，国際体育スポーツ史学会，スウェーデン・スポーツ史学会

❹ 社会科学入門（１年），身体文化史演習（２年），スポーツ史演習Ⅰ（３年），スポーツ史演習Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），体育史特論Ⅰ，Ⅱ（大学院），体育史演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

これまでの授業評価で得られている「学生の理解度を確認しつつ授業を進める」ことや「学生とのコミュニケーションをうまくとる」ことなどに配慮が足りないことへの改善の努力は，さらに進めていかなければならないと自覚している。授業から得たもの，感じたことなどについて短いレポートを提出させ，授業の理解度，要望等の把握に努めているが，発問や回答の時間を一定時間内に設けることはなかなか難しく，次の授業との関係等さらに工夫していく必要性を感じている。また，学生が関心をもつ講義の内容が，広く浅くなる傾向もあり，学生は情報提供を受けると納得してしまい，新たな課題を求めて自ら考えたり調べたりする契機になりにくい点も，新たな改善点として感じており，取り組んでいきたい。

❺ ⑴ 幼小連携等の課題について：

幼稚園における研究活動に参加し「幼児期における数や量にかかわる体験を考える」のテーマで２年目の研究に参画した。

⑵ 地域におけるスポーツの振興及びクラブの育成について：

主として関連する学外の各種の委員会等に参加し,生活に根を下ろしたスポーツライフの構築に向けて取り組んだ。

・幼児期の数や量にかかわる体験を考える～一つ一つの場面を丁寧に見つめて～「研究紀要」第33集（共同）愛知教育大学附属幼稚園　2004

・安城市スポーツ振興計画　2005～2014　（共同）安城市　2005

❻ 附属幼稚園長

❼・愛知県スポーツ振興審議会委員・愛知県広域スポーツセンター企画運営委員会委員

・愛知県体育協会普及・広報委員会委員・愛知県体育協会愛知県総合型地域スポーツクラブ育成委員会委員・愛知県レクリエーション協会理事・安城市スポーツ振興計画策定委員会顧問・日本レクリエーション協会生涯スポーツ推進委員会委員・日本レクリエーション協会あそびの城づくり運営協議会座長

・岡崎市スポーツ大学　岡崎市教育委員会　2004

・平成16年度Ｂ級スポーツ指導者養成講習会　愛知県体育協会　2004

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

・安城市スポーツ指導者講習会　安城市教育委員会　2004

村松　常司　Muramatsu, tsuneji　　教授　　保健体育講座　　保健学博士

❶ 衛生学，専門分野：衛生学，関連分野：学校保健学，公衆衛生学

❷ 第40回全国大学保健研究集会優秀演題賞（2002年10月）

❸ 日本学校保健学会（理事），日本教育医学会（評議員），東海学校保健学会（理事・編集委員長），日本スポーツ整復療法学会（理事），日本公衆衛生学会，日本衛生学会

❹・衛生学（２年），身体科学演習（３年），衛生公衆衛生学実習（３年），衛生学研究Ⅰ（３年），健康情報処理（４年），衛生学研究Ⅱ（４年），保健科教育特論（大学院），保健科教育演習（大学院），学校保健活動特論（大学院），環境と健康教育特論（大学院）

・衛生・公衆衛生学実習においては，衛生学で学んだ水や空気並びにゴミ処理の大切さを知った上で，学生が居住している市町村の浄水場，下水処理場，ゴミ焼却場に見学に行き，自分の生活の中での浄水，下水処理，ゴミ処理の現状を知り，その大切さを確認することを目的としている。

❺ 研究テーマ：

⑴　青少年の好ましい生活習慣獲得とセルフエスティームとの関連

⑵　青少年の攻撃性と生活習慣に関する研究

⑶　青少年の攻撃受動性（いじめられやすさ）と社会的スキルの関連性の追究

⑷　青少年の清潔行動と生活習慣に関する研究

研究論文：

⑴　Effects of subjective intensity self-resistance training on oxygen consumption, blood lactate concentration, and heart rate in male university students. Bulletin of The Faculty of Education, Chiba University, Vol.52, 381-387, 2004

⑵　学校保健用語集（Terminology of School Health）日本学校保健学会，学校保健用語集刊行委員会，2004

⑶　小学生のストレス対処に関する実践教育の効果　愛知教育大学保健体育講座紀要，第28号，9-16，2004

⑷　大学生の生活習慣からみた自覚症状について　東海学校保健研究，28⑴，29-42，2004

⑸　セルフエスティーム向上に視点をあてた朝食欠食児童への健康支援　東海学校保健研究，28⑴，13-22，2004

⑹　戦争が青少年の身長・体重発育に与えた影響について　IRIS HEALTH，Vol.３，3-7，2004

科学研究費補助金など研究助成：

2004年度日本スポーツ整復療法学会研究助成　100千円　「大学生の清潔行動と生活習慣に関する研究」研究代表者　村松常司，共同研究者　村松園江，服部洋児，平野嘉彦，村松成司

❻ 保健管理センター長（2001年～現在），評議員，教員人事委員会委員，学生支援委員会委員

❼・愛知県教育委員会健康推進学校審査会委員（1994年～現在）

・一色町の教育を考える懇談会委員（2004年～2005年）

・日本学校保健研修会IN名古屋（2004年４月６日）「セルフエスティームからの支援」講演

・木曽川中学校現職教育（2004年６月22日）「セルフエスティームを取り入れた心と体の健康支援」
・全日本柔道連盟医科学委員会副委員長（1990年～現在）
・日本学校保健学会理事（編集委員）（2004年～現在）
・東海学校保健学会理事（編集委員長）（2001年～現在）

合屋十四秋　Goya, Toshiaki　　教授　　保健体育講座　　体育学修士

❶ バイオメカニクス，水泳，野外運動学
❷ バイオメカニクス学会奨励賞（1992）
❸ 日本体育学会，東海体育学会（学術研究交流委員），日本バイオメカニクス学会，International Society of Biomechanics，International Society of Biomechanics in Sports，日本水泳水中運動学会，日本スポーツ方法学会，トレーニング科学研究会，水泳研究会
❹ 運動学，水泳，野外活動実習，体育科研究，運動学演習，総合演習，スポーツ科目（学部），身体運動学特論，身体運動実践演習，特別研究（大学院）

実践的教育活動として，昨年に続き，フレンドシップ事業は小学校２校（名古屋市立東山小学校，刈谷市立富士松北小学校）を対象とした児童の夏休み水泳初心者指導を現職教員の協力の下，実施し展開することができた。

教科専門科目（水泳，野外生活実習）及びフレンドシップ事業の授業記録を，画像，ムービー，感想文分析結果などをCDに焼き付け，参加学生や非常勤講師，専任教員などに配布しその内容やねらいの理解を深めた。今後，継続的に保存し，教育現場での活用とフィードバックを期待している。フレンドシップ事業では，過去２年間の成果報告書を作成し，関係諸機関に配布した。次年度は，さらに１校追加（附属岡崎小学校）し，連携，協力の模索・検討を行う。

❺ 現在の研究テーマ：

これまでの取り組みは，「けのび動作の認識の度合いとパフォーマンスが一体どのようにマッチングしていくのか否か」を大学生を対象に横断的かつ縦断的に追跡・検証してきた。これまで，対象とした被検者が大学生のみであったので，１）主としてAging，すなわち小学生，中学生及び高校生までをカバーした「けのび」動作と力発揮の様相を明らかにすることと，２）牽引による「けのび」の受動抵抗の測定と壁を蹴る「けのび」実験と並行して行い，様々な速度で牽引された時の受動抵抗と，自己推進時での抵抗に差が生じるか否か？を調べ，ストリームライン（けのび姿勢）の巧拙と技能レベルを明らかにすることをテーマとしている。

研究業績：

合屋十四秋，野村　照夫，杉浦加枝子，（2005）３月，女子水泳選手におけるクロール泳の速度出力調整と動作との関係，スポーツ方法学研究，18：75-83。

小山田早織，合屋十四秋（2005）３月，大学生男子トップスイマーのけのび動作と力発揮―泳能力別による横断的検討を中心として―愛知教育大学保健体育講座研究紀要29：1-6。

柱谷　彰則，合屋十四秋（2005）３月，水球ゲーム時のカウンターアタック発生要因

～日本高校総体及び日本選手権のゲーム分析から～愛知教育大学保健体育講座研究紀要29：7-12。

合屋十四秋ほか４名（2004）９月，水泳基本動作「けのび」の横断的及び縦断的追跡研究，第18回日本バイオメカニクス学会，鹿屋体育大学。

合屋十四秋ほか５名（2004）９月，水泳基本動作「けのび」の習熟度別にみた到達距離の横断的及び縦断的評価，第55回日本体育学会，信州大学．長野。

平成16年度フレンドシップ事業（代表者）（990千円）

❻ 生活スポーツ系　体育専攻代表

❼ 学外の審議会等：刈谷市水泳連盟副会長

研究会等：東海体育学会学術研究交流委員会，日本発育発達学会情報推進委員

小笠原サチ子　Ogasawara, Sachiko　教授　保健体育講座　修士（教育学）

❶ 舞踊，体育方法学

❸ 教育舞踊日本研究所，日本体育学会

❹ 体育科研究ＢⅡ（舞踊），体育科研究ＢⅠ（表現），こころとからだセミナー，スポーツ科目，運動方法学演習ⅠⅡ，総合演習Ⅱ，運動表現学演習ⅠⅡ

❺ 舞踊カリキュラムについて

舞踊ソロ作品発表：

「向日葵」教育舞踊日本研究所　2004.5

「田植え」教育舞踊日本研究所　2004.12

❻ 保健体育　大学院専攻代表

吉田　正　Yoshida, Tadashi　教授　保健体育講座　体育学修士

❶ 体育科教育学，スポーツ医学，学校保健，バレーボール

❸ 日本教科教育学会，日本体力医学会，日本体育学会，日本教育医学会，学校保健学会，バレーボール学会，東海体育学会，東海学校保健学会

❹ コーチ学（３年），体育科教育Ａ（２年），こころとからだ：健康と環境（２年），スポーツⅢ：ゴルフ集中（２年），スポーツⅡ（１年），スポーツⅡ：スキー集中（１年），バレーボール（４年），総合演習Ⅰ・Ⅱ（３，４年），運動方法学演習Ⅰ・Ⅱ（３，４年），スポーツ指導実践特論（大学院），スポーツ指導実践演習Ⅰ・Ⅱ（大学院），体育実践教育特論（大学院）

❺ 研究テーマ：

最近の主たる研究は運動習慣と体の健康に関連した「スポーツ活動と骨密度」，また，生活習慣と心の健康の関連した「ストレス対処」についてである。

実践的活動としてはボールゲーム系の指導としての大きなポイントは「視覚情報入力の洗練化」が課題であり，パフォーマンスの向上を目指し，東海選抜チーム及び本大学女子バレーボールチームに対し指導助言を行っている。

研究論文：

○大学生の骨音響評価値と運動習慣との関係（IRIS HEALTH Vol.３，2004）

○高校生の身体活動からみた生活習慣に関する研究（愛教大保健体育講座紀要No.28，2004）

○小学生のストレス対処に関する実践教育の効果（愛教大保健体育講座紀要No.28，

2004）

❻ 教育研究評議会評議員，学生支援委員会副委員長，入学者選抜方法等専門委員会委員

❼ 全日本大学バレーボール連盟　運営理事，東海地区大学バレーボール連盟　副理事長，愛知教育大学バレーボール部　部長及び監督

鬼頭　伸和　Kito, Nobukazu　　教授　　保健体育講座　　体育学修士

❶ 体育学
専門分野：運動生理学（理論），サッカー（実技），テニス（実技）
関連分野：バイオメカニクス（理論）

❸ 日本体育学会，日本運動生理学会（監事），日本バイオメカニクス学会，日本フットボール学会，日本体力医学会

❹ 生理学（運動生理学を含む）（１年），スポーツⅠ（サッカー）（１年），こころとからだ展開Ⅰ（２年），体育科研究ＢⅠ（２，３年），生理学演習Ⅰ（３年），生理学演習Ⅱ（４年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），テニス（４年），運動生理学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院），運動生理学演習Ⅰ・Ⅱ（大学院）

スポーツ科目，教科研究科目，教科専門科目で理論と実技を主にして教育活動をしている。教科専門科目の理論は，体育の授業やスポーツなどの身体運動が，「からだ」に及ぼす一過性の変化と短･長期的な身体適応，発育発達とスポーツトレーニング，スポーツ技術の上達などついて，運動を調節・発現・持続する機能を中心にして講義をしている。それらの機能は目に見えない現象なので，その内容を深く理解させるためにITを利用して，教育効果を高める工夫をしている。教科研究科目は，小学校体育で行われる身体運動の基礎的技能を身につけ，指導方法を研究することを目的として，ボール運動教材を通じて実践教育をしている。学生と一緒になって教材研究をして，楽しいボール運動の指導方法の工夫と開発に心がけている。実技科目は，いい授業環境を確保する工夫をして実施している。しかし，老朽化によるサッカー場やテニスコートの劣化やスポーツ科目との同時開講などで，雨天時に満足な指導ができる施設の確保ができない課題が積み残しになっている。

❺ 現在の研究テーマは，ａ）間欠的高強度持久能力と技術・体力の関係，ｂ）視覚入力情報とスポーツの基本動作，ｃ）運動準備電位と運動調節，の３つである。今後は，間欠的高強度持久性能力のトレーニング効果について発育発達の視点から研究活動をしていく計画である。

１）U-12の間欠的持久力と技術からみたインターバル形式ミニゲームのトレーニング効果，第２回日本フットボール学会抄録集，36

２）運動に必要なエネルギー供給システム，マイスポーツなごや

❻ 学部入学試験部会

❼ 全日本大学サッカー連盟評議員，愛知県サッカー協会技術委員会指導部会長，東海大学サッカー連盟副委員長，東海地区大学体育連合理事，日本サッカー協会公認Ｃ級コーチ養成講習会講師，日本サッカー協会公認Ｄ級コーチ養成講習会講師，AIFA審判員養成講習会講師，豊橋市８ブロック教員研修会講師，天白スポーツセンタースポーツ実践セミナー講師

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

春日　規克　Kasuga, Norikatsu　　教授　　保健体育講座　　教育学修士

❶ 生理学，運動生理学

❸ 日本体力医学会（評議員），日本生理学会，日本運動生理学会，東海体育学会，American College of Sports Medicine

❹ 生理学を柱とする授業展開を主に担当している。身体科学の基礎となる生理学を１年生対象に講義している。この中では，将来の体育教師やスポーツ指導者となる学生にとって，ヒトの体に関しての必要な知識を中心に講義する。実習もその設備も無い現状で効率よく理解を深める手段を常に模索している。２年生には運動生理学を，2002年に編集担当したテキスト「運動生理学基礎と発展」（フリースペース）を用いて，講義している。このテキスト製作には，図の構成や記述法を整え，学生の興味事などに合わせるなど１年半の時間をかけ作成された。その後も小修正を加え，さらに現在大幅修正をしつつある。３・４年の学生対象に運動生理学演習として実験演習を含む指導により，運動ストレスと生体応答を指導している。実技では野外教育を担当している。野外実技として冬の野外生活（野外活動Ⅰ）と夏の野外生活（野外活動Ⅱ）を集中授業により実技指導し，また，大学において野外活動教育論により講義を行っている。単なる野外での炊飯やファイヤーに終わらず，野外での生活やスポーツを通して，自然の意義との関わり，仲間との協力，「創意工夫による快適な生活づくり」をテーマとした指導を行っている。

❺ 研究内容をまとめる。筋収縮はダイナミックな筋細胞内の構造変化とともに自らの細胞に機械的ストレスを与え，また筋収縮が連続した場合には，連結する骨に対してひずみを引き起こし，さらには呼吸循環系・内分泌系・泌尿器系など生体全体の的確な反応を必要とする。このため運動時の生体内は急激かつ過激な変化を起こしている。発育期における骨の長育はそれに起止・停止する腱と筋を引き延ばし，筋線維の長育を促す。発育発達が急速に起こる思春期のような時期には，筋力発揮の最小単位である筋節構造の１日の新生が50-100に及ぶと考えられる。このような時期に行われる運動が過度であった場合，筋活動は自らの筋細胞構造に対して，また，発生学的に異なる発達する骨に対して多大なストレスを及ぶすことが考えられる。最近の研究テーマとして，発育期の筋と骨の形態・構造的変化を調べると共に，伸張性収縮という最も筋に力学的負荷のかかる運動負荷を与えた際の筋の形態，機能特性，骨の発育層である骨端成長板内細胞変化を動物実験により確かめている。発育期の過度な筋活動は自らの筋細胞に対し損傷を引き起こすだけでなく，骨の発育に対しても好まざる影響を与えることが示され，思春期と言われる形態発育急速期における運動指導には，十分な配慮が必要であることが示唆されている。

１．一過性の除神経から再支配にかけての神経筋接合部の変化，春日規克，堀田典生，平野朋枝，竹倉宏明，愛知教育大学研究報告，54，53-59，(2004)

２．ラット腓腹筋外側部表層の筋線維形態に及ぼす自発走トレーニングの影響，辻本尚弥，鈴木英樹　春日規克，久留米大学比較文化研究，33，169-181，(2004)

❻ 実験動物委員長

❼ 社会的活動愛知キャンプ協会理事

筒井清次郎　Tsutsui, Seijiro　　助教授　保健体育講座　　博士（理学）

❶ 体育心理学，陸上競技

❸ 国際スポーツ心理学会，北アメリカ大陸スポーツ心理学会，日本体育学会，日本スポー

ツ心理学会，東海体育学会，運動学習研究会

❹ 体育心理学（２年），陸上運動（２年），野外生活実習（２年），体育科研究Ⅰ（１，２年），体育心理学演習Ⅰ（３年），体育心理学演習Ⅱ（４年），総合演習Ⅱ（４年），こころとからだ展開Ⅱ（２年），スポーツⅢ（２年），体育心理学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院），特別研究Ⅰ，Ⅱ（大学院）

・体育心理学　大まかにはわかったつもりではいるものの，実際にはよくわからないままに済ませていることが少なくない。理解しているつもりの知識を他の学生に説明させてみると，相手に上手く伝えられないことが多く，また，質問に的確に答えられないことが多い。そのことを実感させるために，毎回の授業の最初に，先回の範囲からテストを行った。

・陸上運動　教員採用試験に出題されることが多い，ハードル走の基礎的技能が不十分なものが少なくない。それらの学生を対象に，昨年度は７回の補講を実施した。

理解したつもりでいたが本当には理解できていなかったと学生自身が実感できるような場を意図的に設定し，教師になる前に，理解するということの意味を教えたい。

❺ 研究テーマ：「運動技能習得における動きの変容と心の変容が相互に及ぼす影響」

論文：

スポーツ指導に活かすためのスポーツ心理学，スプリント研究14巻　2004年

Effectiveness of the Use of a Learning Model and Concentrated Schedule in Observational Learning of a New Bimanual Coordination Pattern，International Journal of Sport and Health Science ２，2004

著書：

小学校体育の教材・指導事例集（共著），黎明書房，2004年

中学校体育の教材・指導事例集（共著），黎明書房，2004年

口頭発表：

学習者による結果の知識の選択的利用，日本体育学会，2004年9月，信州大学

ポスター発表：

引退離脱者と途中離脱者の心理的ストレス比較，日本スポーツ心理学会，2004年12月，大阪中央体育館

科学研究費補助金：

基盤研究Ｃ（代表），50万円，「運動技能習得における動きの変容と心の変容が相互に及ぼす影響」

❻ 大学院入試部会委員

❼ 日本体育協会公認スポーツＢ級指導員養成講習会講師，愛知教育大学体育学会理事（会計担当），東海学生陸上競技連盟評議員，東海学生陸上競技連盟強化委員，全日本女子学生選抜駅伝大会　東海選抜チームコーチ

三原　幹生　Mihara, Mikio　　助教授　保健体育講座　　修士（体育学）

❶ 体育・スポーツ原論

❸ 日本体育学会，体育原理専門分科会（監事），日本体育・スポーツ哲学会

❹ 体育原論（２年），体育科研究（１年），スポーツ科目（２年），こころとからだ入門

（1年），野外活動実習（2年）

❺・現在の研究テーマ：古代ギリシアの体育論（特にプラトンの教育論の観点から）

・口頭発表：

「『楽しい体育』を考える―プラトンを手がかりとして―」，日本体育学会体育原理専門分科会，2004.12.4

❻ 主題科目「こころとからだ」コーディネーター

❼ 名古屋市立名東高等学校：「大学・学部・学科紹介」講師

高橋　裕子　Takahashi, Yuko　　助教授　保健体育講座　　修士（教育学）

❶ 学校保健学，健康教育（保健教育），学校衛生史

❸ 日本学校保健学会，日本教育保健学会，日本公衆衛生学会，東海学校保健学会（幹事），教育史学会，日本教育学会，生徒指導学会，身体運文化学会，日本スポーツ教育学会，日本武道学会

❹ 平素の学部，大学院における授業や学生・院生指導の他に卒論指導（3，4年），修士論文指導（1年）

4年生担任（卒業論文集の編集・発行，卒論発表会の学生運営を指導した）

❺ 著書・論文・口頭発表など：

1）著書：『日本学校保健学会50年史』日本学校保健学会（共著）

2）報告：

「課題別セッション報告　病児の近代学校保健史―トラホームと学校衛生―」日本教育保健学会年報，第12号

FDの取り組みなど（授業改善活動，学内の協同研究含む）：

1）共通科目／主題科目「人間と生活」グループにおけるプロジェクト研究

検討会において互いの授業実践を検討し（報告者：山根，村尾，出席者：小泉，澤，橋本，高橋），検討会においてカリキュラム上の課題を明らかにした（討論者：小泉，澤，橋本，村尾，山根，高橋）。報告書では「入門」の授業実践を執筆した。

小泉恭子，後藤ひとみ，坂田利弘，澤正実，高橋裕子，橋本尚美，*村尾忠廣，山田綾，山根真理『「人間と性」のカリキュラムと教材の開発　平成16年共通科目プロジェクト研究報告書』2005年3月（*は研究代表者）

高橋裕子「「人間と性　入門」授業実践報告―性／入門の内容構成考―」pp.19-24

「「人間と性」プロジェクト討論会「人間と性」カリキュラム上の問題点」pp.42-47（討論者，記録者）

2）「愛知教育大全体に関わる平和・人権・障害者の教育のための改善・充実」プロジェクト研究（2004年度重点教育研究経費，代表：南守夫）

❻ 委員会など：

共通科目専門委員会委員（予算部会員），同コーディネータ（スポーツ科目）

大学院の教務関係（保健体育専攻）

他：スポーツ科目の見直しWG（保健体育講座），演習の2単位化問題の取り組み

❼ 学会などの役員など：

1）日本学校保健学会『学校保健研究』編集委員

2）日本教育保健学会　常任理事

3）査読　1本（『学校保健研究』）

４）学会座長（日本学校保健学会）
学会課題別セッションコーディネータ・司会（日本教育保健研究会）

杉浦　恭　Sugiura, Takashi　助教授　保健体育講座　博士（教育学）

❶ 専門分野：教育社会学，関連分野：余暇教育学

❸ 日本教育社会学会，日本レジャー・レクリエーション学会，日蘭学会，日本スポーツ社会学会

❹ 生涯教育概論Ⅰ（１年），こころとからだ入門（１年），スポーツ科目（１年），現代余暇論（２年），生涯学習論演習（３年），レクリエーションスポーツ（３年），余暇生活論演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅰ（３年），余暇生活論演習Ⅱ（４年），遊戯特論（大学院），遊戯論演習Ⅰ（大学院），遊戯論演習Ⅱ（大学院）

学部の授業は，講義，演習，実習を担当している。講義の授業については，相互の関連づけを考え，上級学年に進むにつれて，より発展した内容になるよう心がけている。いずれの講義においても，余暇における生きがいの問題を視野に入れている。一貫していることは，遊びを通して，いかに余暇を有意義に過ごすことができるかである。

これまでの授業は，教官からの一方的な知識の伝達になりやすかったため，最近は，講義の中でディスカッションの時間を設けたり，学生に課題を与えて発表する時間をつくる工夫をしている。

全体として，今後は，学生が積極的に参加できる授業をどう創るか，そして，現代社会における余暇生活の意義について，いかに分かりやすく説くかが課題であると考える。生涯学習社会に対応できるよう，学生が，それぞれに生きがいをもって社会生活を営み，自己実現・自己開発的な余暇活動を行う動機づけにつながるような授業を展開できるよう心がけたい。

❺ ⑴　ヨハン・ホイジンガの遊戯文化論に関する研究
⑵　オランダ社会の近代化に関する研究
１．ヨハン・ホイジンガの遊戯文化論の特質と社会的・思想的背景―近代社会認識と近代文明批評を手掛かりに―　博士（教育学）論文，筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科，2004.7
２．オランダにおける労働環境の変化―19世紀後半から20世紀前半にかけて―　愛知教育大学研究報告，第54輯，2005.3

❻ 学部入学試験部会委員，就職委員会委員

上原三十三　Uehara, Satomi　助教授　保健体育講座　体育学修士

❶ 器械運動指導論，スポーツ運動学，体育科教育学

❸ 日本スポーツ運動学会，日本体育科教育学会，日本体操競技･器械運動学会，日本スポーツ方法学会，日本体育学会

❹ 体育実践教育特論Ⅲ（大学院），体育実践演習Ⅰ（大学院），体育実践演習Ⅱ（大学院），体育科研究ＡⅠ，体育科研究ＡⅡ，総合演習Ⅱ，スポーツⅡ（スキー），スポーツⅢ（器械運動），スポーツⅢ（ゴルフ），スキー実習，主題科目「こころとからだ入門」，情

報教育入門Ⅱ，保健体育科教育演習Ⅰ，保健体育科教育演習Ⅱ

実技科目では，教授内容をさらに精選することと，学習者が学習した知識内容を再構成し確かめる機会をつくる授業を展開することが必要。演習科目では新しい知見を提供できるようさらに研究を進める。

❺ スポーツ運動における動きの意味構造分析と伝承方法研究：

器械運動やなわとび運動の技をはじめ各種のスポーツ運動の動きについて，発生論的運動感覚論的な運動類似性に基づいた運動の学習指導の仕方を探求している。

なわとびの新しい教材，愛知教育大学保健体育講座紀要，第29号，2005.3.

なわとび運動の新しい教材について―連鎖とび―，第2回動きの研究会設立準備会，信州大学，2004.6.

❻ 時間割編成委員会委員

❼ 東海北陸学生体操連盟副会長

愛知県体操協会審判部委員

岡崎市教育研究大会･中学校体育部会，指導助言，岡崎市葵中学校（9月）

愛知県教員組合研究集会･体育部会，指導助言，名古屋国際センチュリーホール（10月）

小牧市スポーツ振興会･スポーツ講座，講師，小牧市光ヶ丘小学校（11月）

小牧市教育委員会･スポーツ指導員養成講座，講師，小牧市スポーツアリーナ（12月）

愛知教育大学附属高校･アカデミッククエスト･体育，講師（12月）

一宮市小中学校体育研究会･研究課題「体育の評価」，講師，一宮市丹陽中学校（2月）

森　勇示　Mori, Yuji　助手　保健体育講座　教育学修士

❶ 体育科教育学，教師教育

❸ 日本体育学会，日本体育科教育学会，日本スポーツ教育学会，日本教師教育学会，日本体育・スポーツ哲学会

❹ 体育科教育法（3年），保健体育科教育法（3年，4年），保健体育科教育演習Ⅰ，Ⅱ（3年，4年），スポーツ（バスケットボール，スキー，1年），共通科目「心と体セミナー」（3年），総合演習Ⅰ，Ⅱ（3年，4年），教育実習事前指導・事後指導（3年，4年）

問題点：

理論と実践をセットで考えないと学生に課題意識が生じない。そのため現場フィールドに積極的に関与するような教育活動であるべきである。しかしながら，大学は専門学校でも師範学校でもないので実践力だけを問うわけにも行かない。両者の立場で内容を検討できるように教員が努力すべきである。

教育に対する抱負：

本学が教員養成として突出するような大学になるように全力を尽くす。教育界に有用なマンパワーの育成を追求する。授業で常に学生に問題提起し「使命感」の育成をめざす。卒業後，教育界に進んだ学生と関係を持ち続ける。

❺ 現在の研究テーマ：体育教師の力量形成研究。質的授業研究の方法論の確立。

業績：

・「車椅子を使用している子の体育学習への支援」スポーツ教育学研究，24巻1号，2004年

・「子どもはスポーツの何に楽しさを感じるのか」『体育科教育』，52巻1号，2004年

・「教員養成における教育委員会と大学の連携―愛知教育大学における保健体育科の

『10年経験者研修』―」愛知教育大学保健体育講座研究紀要，29号，2005年

❼・刈谷市立富士松東小学校体育授業助言，刈谷市立富士松北小学校体育授業助言，刈谷市立富士松北小学校バスケットボール指導，一宮市大和東小学校研究会助言者，愛知県10年経験者研修講師，愛知県豊橋市体育研究会助言者，刈谷市立富士松東小学校現職教員研修会講師，岡崎市教育研究集会助言者，小牧市スポーツ指導者養成講座講師

寺本　圭輔　Teramoto, Keisuke　　助手　　保健体育講座　　人間環境学修士

❶ 学校保健，身体組成学，運動生理学

❸ 日本体育学会，日本生理人類学会，日本肥満学会，日本発育発達学会，日本水泳・水中運動学会，福岡身体組成研究会

❹ 水泳，運動処方実習，体力測定評価論，体育科研究ＡⅠ

❺ 研究テーマ：「小児期おける身体組成学研究」

小児期，身体組成，体脂肪分布，及びエネルギー代謝をテーマとしている

業績リスト：

論文：

・大学生の運動習慣と骨音評価値に関する研究―運動群と非運動群の比較検討―，愛知教育大学保健管理センター紀要，３：９-16，2004.10

発表：

・水泳基本動作「けのび」の習熟度別にみた到達距離の横断的及び縦断的評価，日本体育学会第55回大会，信州大学，2004. 9

・大学体育の実践（水泳の授業），愛知教育大学体育学会，愛知教育大学，2004.11

・小児の縦断的な肥満度の上昇に伴う身体組成の変化，発育発達・測定評価合同学会，東京大学，2005. 3

❻ 時間割編成専門委員会

❼ 常滑市中学校部活指導者及び地域スポーツ指導者養成講習会講師，小牧市公認スポーツ指導員養成講座講師，安城市スポーツ指導者講習会講師，刈谷市水泳連盟理事，NPO法人げんき理事，ゆりかご保育園健康管理指導者（宮崎県）

木越　清信　Kigoshi, Kiyonobu　　助手　　保健体育講座　　博士（体育科学）

❶ トレーニング・コーチング論，陸上競技指導論

❸ 日本体育学会，日本体力医学会，バイオメカニクス学会，日本陸上競技学会

❹ 陸上運動（２年），体育科研究（１年），コーチ学（３年）運動方法学演習（３年），こころとからだ入門（１年）

❺ 現在の研究テーマ：

高いパフォーマンスを獲得するためのトレーニング法及びコーチング法の開発

業績リスト：

ドロップジャンプにおける姿勢が下肢関節Kinetics及びジャンプパフォーマンスに及ぼす影響，体育学研究，49巻，2004年

科学研究費補助金若手研究Ｂ，180万円，走幅跳の技能習得を目指した下位教材の開

発

技術教育

加藤　正義　Kato, Masayoshi	教授	技術教育講座	工学博士

❶ 機械工学，機械力学

❷ 日本機械学会賞論文賞（1987年４月），日本産業技術教育学会賞功労賞（2001年８月）

❸ 日本機械学会，日本産業技術教育学会

❹ 専門科目入門Ｂ（１年），機械工学概論（１年），基礎情報技術（１年），材料力学（２年），科学・技術と人間（３年），総合演習Ⅰ（３年），機構学（３年），機械力学（３年），機械実験（３年），熱力学（４年），総合演習Ⅱ（４年），機械技術特論（大学院），機械技術演習（大学院），特別研究Ⅰ（大学院）

技術教育においては，ものづくりにかかわる様々な問題の解決能力を高めることが求められる。その能力の基礎となるものの一つが，工学的知識である。工学的知識は，ものづくりにかかわる問題の所在を明らかにするための手がかりを与えてくれる。すなわち，見通しのない試行錯誤ではなく，科学的な方法により，問題解決への道がひらかれる。こうしたことを念頭において，専門的な内容を教授することはもちろんであるが，将来，中学校等で技術科を担当する教員になるものにとって，工学等の専門知識がなぜ必要なのか，それをなぜ学ぶ必要があるのかについても理解を深めるような教育をすすめたい。なお，2004年度後期からは学生への学習支援として，オフィスアワーが設けられた。そのための態勢を整え，また，授業の中でも学生に対してオフィスアワーの利用を促すなどしたが，結果的にその利用者はなかった。学生に対する勉学意欲を高めるための方策も必要かと思われる。

❺・現在の研究テーマ：

⑴ 風のエネルギー取得・利用のための教材開発

運動する空気（風）の運動エネルギーの見積り方と，風車を用いた場合の空気の運動エネルギーの取得割合を知るための教材を開発する。

⑵ 倒立振子の運動解析

物理振子の水平支持軸を鉛直方向に振動運動させると，振子は，ある特殊な条件のもとで，鉛直上向きの平衡位置を中心として振動運動することが知られている。直感的には奇妙に見えるこの現象を物理的に分かり易く説明することを目的として，解析と実験を行う。

❻ 教育実地研究専門委員会

❼・日本産業技術教育学会機械分科会代表

・平成16年度フレンドシップ事業『大学Jr. サイエンス＆ものづくり』「プロペラひこうきをつくろう」

・免許法認定公開講座「機械教育特論」

❽ JICAにおける講義担当：

「産業技術教育Ⅱ」研修コース：教員養成の内容―機械

「教育カリキュラム開発」研修コース：日本のものづくり教育２

橘田　紘洋　Kitsuta, Kouyou　　教授　　技術教育講座　　農学博士

❶ 木材工学

❸ 日本木材学会，持続性木質資源研究会（幹事），日本木材加工技術協会，日本産業技術教育学会，日本産業教育学会，日本人間工学学会，International Technology Education Association

❹ 木材加工法（１年），木材加工実習Ⅰ（２年），木材加工実習Ⅱ（２年），木材加工論（３年），木材加工実習Ⅲ（３年），木材加工演習（３年），課題研究Ａ（３年），課題研究Ｂ（４年），木材加工教育術特論（大学院），木材加工教育演習（大学院），木材加工技術特論（大学院），木材加工技演習（大学院）

学生には総じて自己啓発的な生活態度が見られるので，支援する指導に心掛けている。担当している授業はいずれも専門教科なので，学生達が将来技術教育に携わることを前提とした授業を行っている。従って，出来る限り教師としての柔軟な発想や応用力・転移力を身につけさせるべく配慮した授業に心がけている。学生の学習姿勢が甘くなっているため，授業の仕方が難しくなっている。特に製作実習に当たっては，初歩的な技能や作業工程を見通す基本的な能力が身に付いていない。そのため，技術教師としてものづくり学習を指導できるだけの力を身に付けさせることに苦慮している。

❺ 研究課題は学校教育の場から取り上げるように心がけている。

現在，①子どもの成長・発達と道具使用上の巧緻性の変容，②校舎建築材料が及ぼす教育的環境の形成効果，③竹の産業資源化技術開発に関する三つの研究課題をもっている。①については，最近の子どもの道具使用能力の低下を問題視しており，技能獲得の発達的変容を明らかにすると共に，技能獲得の学習の適時期を探っている。②については，教師と生徒の教育活動・学習活動を支援するための物理的環境のあり方を，校舎を構成する建築材料に視点を当てて調べている。③については，無秩序に繁茂している放置竹林による環境破壊を防ぐために竹を産業資源化する技術の開発を行っている。

②，③についてはそれぞれ「木の文化創造推進事業」「生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業」からの研究助成を受けている。①，②の研究は，その性質上学校教育の世界を実験の場にすることが多いが，研究に協力していただく学校あるいは教師に対する公的な配慮が必要であることを痛感している。

各研究成果は，学術誌，研究成果報告書，講演，パネル展示として発表・纏められた。

❻ 大学院技術教育専攻代表，各種委員会委員

❼ 中小企業技術開発産学官連携推進事業・産学官連携推進委員会委員長（愛知県），木材を活用した学校施設に関する調査研究委員（文教施設協会），あいち木づかい出前講座パイロットモデル事業準備委員会委員（愛知県），専修免許取得のための免許法認定公開講座「木材加工教育特論」，中学校技術・家庭担当教員地域研修の指導助言，大学等地域解放特別事業「サイエンス＆ものづくり」木材加工講習会，国際協力事業団集団研修「産業技術教育コース」木材加工教育講義，国際協力機構国別特設「教育カリキュラム開発研修コース」ものづくり教育講義

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

大西　研治　Ohnishi, Kenji　　教授　　技術教育講座　　工学修士

❶ 金属加工，機械

❷ 功労賞，日本産業技術教育学会，平成13年８月４日

❸ 日本産業技術教育学会，日本材料学会，日本機械学会

❹ 金属加工法Ⅰ（２年），金属加工法Ⅱ（２年），金属加工法Ⅲ・Ⅳ（３年），金属加工実習Ⅰ（２年），金属加工実習Ⅱ（２年），金属加工実習Ⅲ（３年），金属加工演習（４年），情報教育入門Ⅱ（１年），金属加工技術特論（大学院），金属加工技術演習（大学院），金属加工教育特論（大学院），金属加工教育演習（大学院）

担当領域の教育を行うに当たり，新しい教育用実習機械が乏しい。学生には科学的な思考方法や積極的な応用力を習得させたい。

❺・現在の研究テーマ：

Visual Basicによる教材用シミュレーションプログラムの作成

・業績リスト：

「産業技術教育」のための国際教育協力シンポジウムの成果，日本産業技術教育学会誌，2004.８，第46巻第３号

International Training Course in Industrial Technology Education: The First Five Years, Beyond Tomorrow: International Cooperation in Industrial Technology Education，愛知教育大学，2004.３

Information Communication Technology Education in Japan, Educational Curriculum Development，愛知教育大学，2005.１

・学術・研究交流：

台湾国立彰化師範大学で開催の教育研究交流調印式に参加

❼・学内外の公開講座，講演会など：

国際協力事業団（JICA）の集団研修「産業技術教育コース」2004.６～７，「工業教育コース」2004.９，「教育カリキュラム開発コース」2005.１～２，愛知教育大学他，運営並びに講師

公開講座，技術教育のための教材開発講座「ものづくりとエネルギー変換」，2004.８，愛知教育大学，講師

平成16年度「大学等地域解放特別事業」たのしいものづくり，2004.10～11，愛知教育大学，講師

宮川　秀俊　Miyakawa, Hidetoshi　　教授　　技術教育講座　　農学博士

❶ 専門分野：技術科教育，関連分野：技術教育，工業技術教育

❷ DTE (Distinguished Technology Educator) Award (2003, 3), Lawrence Prakken Professional Award (2001, 3), Gold Key Award (1998, 3), Epsilon Pi Tau (1997, 3)

❸ 日本工業技術教育学会（副会長），日本産業技術教育学会（国際関係委員長，理事，技術教育分科会代表），日本教材学会（常任理事），日本教科教育学会，日本科学教育学会，日本木材学会，日本木材加工技術協会，ITEA (International Technology Education Association)-Japan International Information Center (Director), Council on Technology Teacher Education, CPSC (Colombo Plan Staff College) (Liaison Officer)

❹ 専門科目入門Ｂ（１年），技術科教育ＣⅠ（２年），技術科教育ＣⅢ（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），技術科教育特論Ⅰ（大学院），技術科教育特論Ⅱ（大

学院），技術科教育演習Ⅰ（大学院），技術科授業研究Ⅰ（大学院）

「技術科教育ＣⅠ」は，技術科教育の目標と役割，教育内容，教育方法，及び評価について，既往の研究成果を実際の授業実践と関連づけながら考究している。「技術科教育ＣⅢ」は，主免実習後に設定されているので，指導計画や学習過程，授業の評価について，様々な観点から教育実践を行うための応用能力を身に付けることをめざしている。「総合演習Ⅰ，Ⅱ」は，卒業研究遂行のための基礎教育を行うが，ここでは課題に応じた文献研究と研究の方法論の教授に重きをおいている。「技術科教育特論Ⅰ，Ⅱ」は，国際的な視野から我が国の技術教育を検討するために，諸外国の技術教育を考究している。「技術科教育演習Ⅰ」，「技術科授業研究Ⅰ」は，技術科の授業研究を行うための方法論や実際の授業の分析を行う。なお，これらの専門教科においては，特にこれからの技術科教育の充実・推進をめざして，技術科教育で用いる教材の選択や開発，またそれらの配列や利用など，授業の設計や学習活動に関わる諸課題，さらに課題の解決のための理論や方法論について追究している。

❺ 最近の主な研究成果は（論文，著書）は，以下の通りである。

1．「産業技術教育」のための国際教育協力シンポジウムの成果，日本産業技術教育学会誌，第46巻３号，2004.（共）

2．International Training Course in Industrial Technology Education: The First Five Year, Beyond Tomorrow: International Cooperation in Industrial Technology Education, AUE, 2004.（共）

3．諸外国の木材教育における教材・教具の利用，日本木材加工技術協会誌，第59巻３号，2004.

4．創造的思考力を育成する教材のあり方―「エネルギー変換と利用」における学習題材について―，日本教材学会「教材学研究」，第14巻，2003.（共）

5．Technology Education in Junior High School in Japan, ITEA-Japan Information Center, 2003.

現在の研究活動は，１つは，技術科教育の授業実践に関わるもので，実際の授業を通して本教科の価値を追究している。具体的には，技術科教育の授業において，生徒の創造性の育成や自己教育力の育成，また問題解決能力の養成について検討しており，本教科の履修による生徒の変容を測定する診断テストの作成を試み，それを用いて技術科教育の有効性の検証を行っている。２つは，環境問題や社会の情報化，国際化等，現実的かつ国際的な視野に立った技術科教育のカリキュラムのあり方を研究している。そのため，比較研究として諸外国の技術科教育の研究を行っているが，主として米国で進められている“Technology for All Americans”プロジェクトについて，現地取材を通して検討している。

この他，2003年度より科学研究費補助金基盤研究（A）（研究代表者：前大阪市立大学児玉隆夫学長）による研究課題「知の創造・活用を目指す体験的教育の開発に関する総合的国際的比較研究」の分担者として従事している。

❻ 大学改革推進委員会，就職委員会教員就職部会長

❼ 国際協力機構による集団研修「産業技術教育」コースとサウジアラビア国別特設「教育カリキュラム開発」研修コースの実施責任者である。「大学Jr.サイエンス＆ものづくり」“たのしいものづくり―紙すき器の製作とハガキ作り―”の担当者である。愛知県総合

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

教育センターにおける高等学校10年経験者研修（高等学校・工業）」の講師である。全国中学生ものづくり競技大会の審査委員を務めた。豊田市ものづくりフェスタで万博プレイベント「間伐材で作ろう」を実施した。

❽ 2005年日本国際博覧会（愛知万博）市民プロジェクト「ものづくりと教育」（2005年7月25日～31日）のプロジェクトリーダーで，2004年よりそのための準備を行っている。

清水　秀己　Shimizu, Hideki　　教授　　技術教育講座　　工学修士

❶ 電気分野，電気・電子工学，電気材料，プラズマプロセッシング研究会

❸ 電気学会，応用物理学会，日本産業技術教育学会（理事），プラズマプロセッシング研究会

❹ 専門科目入門Ｂ（１年），電気Ⅰ（１年），基礎情報技術（１年），電気Ⅱ（２年），科学・技術と人間「展開Ⅱ」（２年），電気実習（３年），電子工学Ⅰ（３年），電子工学Ⅱ（３年），総合演習Ⅰ（３年），総合演習Ⅱ（４年），電気Ⅲ（４年），電気技術特論（大学院），電気技術演習（大学院）

❺・SiC/Siヘテロエピタキシャル成長に関する研究，ZnO薄膜の作製に関する研究，カーボン薄膜成長に関する研究，エネルギー変換教育に関する研究

・論文：

Hideki Shimizu, Kensaku Hisada and Yosuke Aoyama, “Key Radicals for Hetero-epitaxial Growth 3C-SiC on Silicon Substrates.”, Materials Science Forum, Vols. 483-435, (2005) pp.209-212

宮川秀俊　他共著「産業技術教育」のための国際教育協力シンポジウムの成果，日本産業技術教育学会誌，2004.８，第46巻　第３号

Hidetoshi Miyagawa et.al. International Training Course in Industrial Technology Education: The First Five Years，Beyond Tomorrow: International Cooperation in Industrial Technology Education，愛知教育大学，2004. 3

宮川秀俊　他共著「産業技術教育」のための国際教育協力シンポジウムの成果，日本産業技術教育学会誌　2004. 8　第46巻　第３号

Hideki Shimizu, “Energy Education in Japan”, Educational Curriculum Development，愛知教育大学，2005.1

・口頭発表：

Hideki Shimizu Kensaku Hisada and Yosuke Aoyama “Effects of Plasma on 3C-SiC/Si Epitaxial Growth” 7th APSPST & 17th SPSM, June 29 － July 2, 2004, Fukuoka International Congress Center

Hideki Shimizu, Kensaku Hisada and Yosuke Aoyama, “Key Radicals for Hetero-epitaxial Growth 3C-SiC on Silicon Substrates.”, 5thECSCRM2004, August 31 － September 4, Conference Center of CNR, Bologna, Italy

岩田　航，清水秀己，“高周波スパッタリングによるZnO薄膜の作製（Ⅱ）”，日本産業技術教育学会東海支部大会，岐阜大学教育学部，2004.11.13

青山陽介，清水秀己，“ACプラズマアシストによる3C-SiC/Siヘテロエピタキシャル薄膜作製におけるプロパンの効果”，日本産業技術教育学会東海支部大会，三重大学教育学部，2004.11.13

望月　壮，清水秀己，“半導体薄膜作製時における膜厚測定について”，日本産業技術教育学会東海支部大会，三重大学教育学部，2004.11.13

・学術・研究交流：
台湾国立彰化師範大学との教育研究交流調印式に参加（2004.５.26-５.28）
International Conference on “ACCREDITATION AND CERTIFICATION FOR TET INSTITUTIONS”, Seoul Institute for Vocational Training in Advanced Technology, Incheon, Korea, 2-3 December 2004に招待参加

❻・講座代表，教育研究評議会評議員，人事委員会委員

❼・公開講座：技術教育のための教材開発講座,ものづくりとエネルギー変換「鋳造技術による永久磁石作製」「エネルギー変換装置作製」講師2004.８.20-21
・国際協力事業団（JICA）の集団研修「産業技術教育コース」「工業教育コース」,「教育カリキュラム開発コース」2004.６～2005.２，愛知教育大学他，運営並びに講義
・平成16年度フレンドシップ事業　たのしいものづくり「電池のいらないラジオをつくろう」講師，2004.12.04
・第54次愛知県教職員組合主催教育研究集会技術教育文科会助言者　2004.10.23

太田　弘一　Ota, Koichi　　助教授　技術教育講座　　農学博士

❶ 栽培学，園芸学，農学，環境教育

❸ 産業技術教育学会，農業教育学会，環境教育学会

❹ 栽培実習Ⅰ，Ⅱ（１年），栽培学（２年），栽培Ⅰ，Ⅱ（３年），農学（３年），教養科目主題科目「科学・技術と人間」入門（１年），同「環境と人間」セミナー（３年），栽培技術特論（大学院），栽培教育特論（大学院），栽培技術演習（大学院），栽培教育演習（大学院）

❺ 現在の研究テーマ：
環境保全型農業に関する研究（混作の有効性に関する研究）
コチョウランの栽培と光合成に関する研究
業績リスト：
「共通科目の授業改善のための調査報告Ⅴ
第一章　調査の概要―2003年度後期/2004年度前期主題科目全体の傾向について
第二章　基礎科目と主題科目のアンケート結果の年次変化
第三章　科目ごとの分析　3.3.6　主題科目『科学・技術と人間』」
教養と教育　第５号　愛知教育大学共通科目専門委員会　2005年

❻ 自然観察実習園運営委員会副委員長・小委員会委員長，共通科目専門委員会副委員長，時間割編成委員

❼ International Cooperation in Industrial Technology Education（JICA事業）
Educational Curriculum Development（JICA事業）
「たのしいものづくり」（フレンドシップ事業）

鎌田　敏之　Kamada, Toshiyuki　　助教授　技術教育講座　　工学修士

❶ 計算機科学
専門分野：プログラミング言語，オペレーティングシステム，関連分野：情報教育

❸ 日本ソフトウェア科学会，Association for Computing Machinery，IEEE Computer Society，日本産業技術教育学会，日本ロボット学会

❹ 専門科目入門Ｂ（１年），基礎情報技術（１年），情報Ⅰ（２年），ソフトウェアⅠ（２年），ソフトウェアⅡ（３年），プログラミング実習Ⅰ（３年），プログラミング実習Ⅱ（３年），情報Ⅱ（４年）

学生がノート型PCを所持していることを前提に，できる限り多くの授業でPCを活用する場面を提供するように心がけている。演習・実習授業での作業はいうまでもないが，情報Ⅰにおいても調査とプレゼンテーションを全学生が行う場面を取り入れている。また，学生の体験を補う目的で，専門教科入門Ｂでは音声のデジタル化を自らコイルを巻いてマイクロフォンを作らせるところから行ったり，プログラミング実習Ⅱで自律ロボットを設計・製作させそれをプログラムさせたりというように，学生が手を動かし肌で感じる場面を増やすよう工夫している。一方で，基礎情報技術と情報Ⅱでは数学を背景とする抽象的な理論を扱い，計算とはなにかを学ばせようとしているが，一部の学生を除いては一定水準の理解には至らない状況である。最近，選択科目の履修者が非常に少なくなってきており，特に実習授業で授業を成立させることが困難になっていることが問題である。

❺ ⑴ 自律ロボットを通したプログラミングの学習

プログラミング初学者を対象とした，プログラミングの習得に必要な基礎的諸概念の獲得を支援する学習環境についての研究である。自律ロボットはプログラミングに際して，抽象的な概念を学習者に対し視覚・触覚を通して直感的にフィードバックする教材として活用できると考え，授業実践を重ねながら学習環境の評価・検討を進めている。

⑵ 学習用自律ロボットシステム構築

一般に入手可能な自律ロボットシステムとは異なり，プログラミングの学習を念頭に置き，初学者に理解しやすく高度な抽象概念を用いたプログラミングも可能なシステムを検討している。そのため，オブジェクト指向に基づく分析・設計との親和性が高いプログラミング言語と，並列オブジェクトに基づくオペレーティングシステムの設計を進めている。

⑶ センサによる計測を取り入れた情報教育の教材開発

自律ロボットでの利用の他に，加速度センサ・地磁気センサなどとノートブック型PCを組み合わせたプログラミングにより現実世界をデジタル情報として取り扱う体験を伴う学習を進めるための教材開発を行っている。既存のセンサ及びインタフェースは高価であり使い勝手も必ずしも良好ではないため，実際の使用を念頭に新たに設計しようとしている。

・学術・研究交流等

2005年１月，韓国情報教育学会（済州大）参加を中心に，韓国高麗大及び一橋大の研究者とともに上記テーマについて議論し，交流を深めた。

❻ 入試委員会，学生生活委員会，情報システム委員会，福祉委員会

❼ 国際協力事業団（JICA）集団研修「産業技術教育Ⅱ」コース講師
国際協力機構（JICA）国別特設研修「教育カリキュラム開発」コース講師
公開講座「たのしいものづくり」講師

家政教育

野田満智子　Noda, Machiko　　教授　　家政教育講座　　家政学士

❶ 家庭科教育学，家政教育史
❸ 日本家庭科教育学会，大学家庭科教育研究会
❹ 家庭科教育ＣⅠ（２年），家庭科教育ＣⅡ（３年），卒業論文指導（３～４年），家庭科教育特論（大学院），修士論文指導（大学院）
　最近は論文指導の際，進路指導，採用試験の受験指導に関する相談をされることが多くなった。専門職大学院の設置が近いようであるが，教育現場のエリートだけでなく，現場の本当の苦労が分かる教師が，大学にも多くなることを期待したい。
❺ 封建社会における家政教育，新版家政学事典，朝倉書店
近代学校教育制度の成立と家政教育，新版家政学事典，朝倉書店
❻ 創造科学系学長補佐
❼ 教育研究愛知県集会家庭科教育分科会助言者，「サウジアラビア教育カリキュラム開発」研修コース講師（JICA），日本家庭科教育学会東海地区会長

長井　茂明　Nagai, Shigeaki　　教授　　家政教育講座　　工学修士

❶ 専門分野：被服材料学，関連分野：被服管理学，家政学
❸ 繊維学会，日本繊維機械学会，日本繊維製品消費科学会（東海支部幹事），日本家政学会，日本衣服学会（幹事，会計委員長）
❹ 生涯教育概論Ⅰ（１年），共生社会生活教育論（１年），生活機器（２年），生活関連情報論（２年），商品サービス論（３年），生活技術演習（３年），商品実験Ⅱ（３年），生活技術・情報研究Ⅰ～Ⅳ（３，４年），商品科学特論Ⅰ・Ⅱ（大学院）
　商品サービス論，生活機器，生活技術演習及び大学院の授業等では生活用品としての商品について消費科学的な立場から，学生が生活人として適切な商品を選択したり，入手した商品の取り扱いができるように，いわゆる，賢い消費者として実践科学的な立場で生活術が身に付くように努めている。また，商品実験Ⅱは教免法の被服学の教科としているため，商品としての衣料品に関係する実験項目を取り上げて，日常生活の中で商品について理解し，さらには商品購入の選択の際に有益となるようにしている。また，演習や実習では各種の消費者問題に関する実際例（欠陥商品や消費者苦情など）を調査し，問題の本質を追究して，分析し，討議することによって学生自身の研究心を養えるように努めている。
❺ 現在の研究テーマ：
　布地の曲げ変形機構の解析の一貫としてのドレープ形態の相似性
発表報文：
「相似則のπナンバーを用いたFRLドレープ形態の表示の試み」繊維製品消費科学 Vol.46　No.３（2005/３）
　被服の素材である布地の曲げ変形機構の解析である。布地（繊維製品）は典型的な柔らかい材料（柔構造材）であり，その変形においては大変形のたわみが起こるため，通

常の材料力学（機械工学の弾性論）で取り扱われる微小変形による近似計算を用いた理論的解析ができないことから，コンピュータシミュレーションによる逐次近似法の利用や相似模型の実験に適用される相似則（模型の設計，製作，実験に関する規約）を導入することによって布地の変形機構を解明しようとするものであり，具体的に取り組んでいるのは布地の自重による垂下形状を表すドレープ形態の相似性に関するものである。この柔構造である布地の変形機構が解析されれば，従来の剛構造材を主とした変形機構の理論を，より一般的に通用する材料の変形理論として確立できるものとして追究している。

❻ 時間割編成専門委員会，就職支援委員会

小川　正光　Ogawa, Masamitsu　　教授　　家政教育講座　　工学博士

❶ 建築学，専門分野：住宅計画，住生活

❷ 水戸市タウンハウス設計競技最優秀賞（1982年）

❸ 日本建築学会（高齢者居住研究委員会委員，東海支部設計計画委員会委員，同都市計画委員会委員），都市住宅学会東海支部常議委員

❹ 住生活論（２年），住宅設計論（２年），家庭科研究（２，３年），住宅設計演習（３年），生活科学演習Ⅰ（３年），生活科学演習Ⅱ（３年），生活科学実験実習Ⅰ（４年），生活科学実験実習Ⅱ（４年），住居学特論（大学院），住居学演習（大学院）

住宅設計演習では，学生作品を懸賞に応募して社会的評価を求めて賞を得ている。また，インテリア作品の見学を行った。主題科目では講義棟の改善計画を課題に取り上げ，学生作品の発表時は公開授業とし，実施計画に示唆を与える実践的なものとした。

❺ 現在の研究テーマ：

⑴ 高齢者向け住宅の計画・設計

⑵ デンマークの住宅建築

⑶ 住宅平面の変遷と地域的特徴

⑷ 学校校舎の計画と居住性

著書：

木造校舎の教育環境―校舎建築材料が子ども・教師・教育活動に及ぼす影響―，日本住宅・木材技術センター，2004（共著）

論文：

１．デンマークにおける「高齢者住宅」の住棟計画，日本建築学会東海支部研究報告集第43号，2005

２．愛知県シルバーハウジングにおける計画の変遷と居住実態からみた方向性，愛教大家政教育講座研究紀要　第36号，2005

３．高齢者による生活空間の評価に関する研究―ケアハウスにおける談話スペースの快適性に対する評価構造―，愛教大家政教育講座研究紀要　第36号，2005

研究助成：

１．「生活支援型高齢者住宅」の住宅条件と運営システムに関する検討，科学研究補助金基盤研究Ｃ（代表）

２．デンマークの高齢者の住まい，高齢者住宅財団委託研究（代表）

３．環境共生型教育研究施設の計画に関する提案的研究，学内重点教育研究費（代表）

研究成果は，自治体などの公的機関が実施する施策に実際に生かされることを意図したものである。提案内容は，居住者の検討を受けながら実現しつつある。

❻ 評議委員会委員，家政教育講座代表，財務委員会委員

❼ 委員会：

１．わが家のリフォームコンクール審査委員長，愛知ゆとりある住まい推進協議会

２．住まい・まちづくり協働戦略会議提案委員，愛知県

講演：

１．デンマークの高齢者住宅の実態，愛知県建築士会女性部会，2004.４.15

２．デンマークにおける高齢者住宅の実態，都市住宅学会中部支部，2004.４.17

３．住民要求にもとづくまちづくりの提案―安城市碧海桜井駅周辺地区について―，桜井駅周辺地区土地利用相談会，2004.６.11

４．デンマークの高齢者住宅，愛知県住まい・まちづくり協働戦略会議，2004.12.17

早瀬　和利　Hayase, Kazutoshi　　教授　　家政教育講座　　農学博士

❶ 食物学，専門分野：栄養学，関連分野：食品学

❸ 日本栄養・食糧学会（本部評議員），日本農芸化学会，必須アミノ酸研究委員会客員

❹ 家庭科研究Ａ（１，２年），食生活論（２年），食品栄養学実験Ⅰ（２年），食品栄養学実験Ⅱ（３年），栄養学（３年），生活科学演習Ⅰ，Ⅱ（３年），栄養学演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

学生による評価，他の教員との検討を通じ，より良い授業を目指したい。特に「家庭科研究Ａ」は，小学校教員免許取得を希望する家庭専攻以外の学生に開講されている専門授業科目であり，わかりやすい授業が重要である。このような観点より，家政教育講座教員数名により，小学校家庭科の内容をわかりやすく解説したテキストを作成し，「家庭科研究Ａ」で使用しており，受講学生にもおおむね好評である。

問題点としては，担当授業コマ数が多く，研究活動，授業改善の阻害要因であると考えられる。

❺ 研究テーマ：

⑴ 栄養と脳タンパク質代謝：脳タンパク質合成とタンパク質栄養・加齢・ホルモン・食品成分との関連について検討している。

⑵ 尿素生合成とタンパク質栄養：食餌タンパク質の質的影響による尿素生合成調節機構について検討している。

業績リスト：

１）Lyou, S., Tujioka, K., Hirano, E., Mawatari, Y., Hayase, K., Okuyama, S. and Yokogoshi, H. (2004) Effect of adding dietary methionine to a low soy protein diet on the brain protein synthesis rate in ovariactomized female rats. *Nutr. Neurosci.* 7, 185-190.

２）Tujioka, K., Lyou, S., Sano, A., Hayase, K. and Yokogoshi, H. (2004) Changes in tissue protein synthesis are involved in regulating urea synthesis in rats given proteins of different quality. *J. Nutr. Sci. Vitaminol.* 50, 356-361.

３）辻岡和代，早瀬和利，横越英彦：食餌タンパク質の質的影響による尿素生合成の変動におけるアセチルグルタミン酸分解とオルニチン細胞内輸送の役割，必須アミノ酸研究　172，41-44。

研究助成：

「小麦グルテン摂取による尿素生合成の変動における組織タンパク質合成の役割に関する研究」25万円　日本栄養・食糧学会　栄養・食糧学特定研究基金

❻ 放射線障害予防委員会委員（放射線取扱主任者として毎年委員），時間割編成委員会委員

加藤　祥子　Kato, Syoko　　教授　家政教育講座　家政学修士

❶ 被服学，被服構成学

❸ 日本家政学会，日本繊維製品消費科学会，日本衣服学会

❹・専門教育入門（１年），被服構成実習Ⅰ（１年），家庭科研究Ａ（２年），被服構成実習Ⅱ（２年），衣生活と技術（３年），被服学（３年），生活科学研究Ⅰ（３年），生活科学研究Ⅱ（３年），L展開：くらしの中の衣（３年），総合演習Ⅰ（３年），生活科学実験実習Ⅰ（４年），生活科学実験実習Ⅱ（４年），被服構成学演習Ⅰ（大学院），被服構成学演習Ⅱ（大学院）

・被服実習では小中高の現場で十分に活躍できるよう，また教員の資質向上のためにもプロの技術を教えている。さらに被服教材を短時間で仕上げることができるよう工夫して数多くの教材に触れさせ，合わせて美しい作品作りを目指している。

・教養科目では身の回りの被服に関する事例を取り上げて関心を持たせ，中でも特に不便を感じている事例に関しては科学的に分析，その解決を図っている。

❺ 小中学生及び高校生の家庭科（被服）教材研究（短時間で仕上がる被服教材シリーズ）

❻ 大学改革推進委員会委員，図書委員会委員

❼ 平成16年度岡崎市教育研究大会助言

山田　　綾　Yamada, Aya　　助教授　家政教育講座　教育学修士

❶ 教育学

専門分野：教科教育学（家庭科教育），関連分野：教育方法学

❸ 日本教育学会，日本教育方法学会，日本生活指導学会，日本教科教育学会，日本家庭科教育学会（理事），日本家庭科教育学会東海地区会（2004年度事務局），中部教育学会

❹ 家庭科研究ＡⅡ（１年），家庭科研究ＢⅡ（１年），家庭科教育ＣⅢ（３年），家庭科授業研究（３年），総合演習Ⅱ（４年），共生社会とジェンダー（４年），生活科学演習Ⅰ・Ⅱ（３年），生活科学実験実習Ⅰ・Ⅱ（４年），家庭科教育特論Ⅱ（大学院），比較教育演習（大学院）

授業では，学生が消費生活と環境や家族・ジェンダーなど他者との関係性について探究・考察し，家庭科や総合学習の授業実践を創造できるように，対話・討論，調査プロジェクト，ラウンドテーブルなどを導入し，授業の改善を試みた。また，実際に授業を記録して共同分析を行うことにより，実践的力量をつけることを試みた。

❺・現在の研究テーマ：

子どもが現代の生活課題をどのように学ぶ必要があるのか，現代生活を捉える視点とそれを学ぶ過程に必要な視点を明らかにすることである。そのために，以下の研究を進めた。

⑴ 家族や性に関する家庭科学習・総合学習の検討と教育の取り組み

特に，スウェーデンのアクション・リサーチ事例の検討

⑵　環境問題・大量消費などの衣食住の生活課題を探求する家庭科学習・総合学習の開発

・業績：

「生活課題を共同で探究する家庭科授業の創造―現代生活を探究する視点としての「環境」を中心に」（福田公子他編『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』大学教育出版，2004年所収）

「家族・保育から学びの世界が広がる」「問題解決学習から課題提起型学習へ」（日本家庭科教育学会編『衣食住・家族の学びのリニューアル―家庭科カリキュラム開発の視点―』明治図書，2004年所収）

「『新たな親密圏』をめぐる議論―フェミニズム視点からの批判的考察―」（愛知教育大学研究報告第54輯，2005年）

・科学研究費：

○科学研究費補助金基盤研究Ｃ・代表者・「教室におけるジェンダー・エクイティのためのアクション・リサーチ―理科・数学・家庭科の授業場面を中心に―」

○科学研究費補助金基盤研究Ｂ⑴・分担者・「生涯学習の基礎基本を培うための教科教育の枠組みと内容の再構成」

○科学研究費補助金基盤研究(C)・分担者・「20世紀初頭のラディカル派フェミニズムの再考―日米欧の比較研究―」

❻　教育実地研究専門委員会

❼・名古屋市科学館企画調査委員，名古屋市科学館協議会委員，西尾市ジェンダーフリー教育推進プログラム検討委員会委員，名古屋市の男女平等教育ハンドブックの検討など

・小・中・高の教員研究集会や校内研修会などにおいて，家庭科や総合学習の授業づくり，ジェンダーの授業づくりや教育的な取り組みに関する講演を行ったり，助言者を務めた。また，「男女共同参画」「ジェンダーと教育」「子育てセミナー」関連の講座の講師やジェンダー・フリー教育検討委員会のアドバイザーなどを務めた。

山根　真理　Yamane, Mari　　助教授　家政教育講座　　教育学修士

❶　家族社会学，ジェンダー研究

❸　日本家族社会学会，日本女性学会，比較家族史学会，日本家政学会家族関係学部会　他

❹　家族論（学部），家庭経営（学部），専門教育入門（学部），家庭科授業研究（学部），家族論演習Ⅰ，Ⅱ（大学院）

❺　著書・論文：

山根真理，2004「ジェンダー形成と教育―中学生調査のデータ分析を中心に―」日本人権教育研究会『21世紀の人権・同和教育への展開』学術図書出版社，82-97頁。

落合恵美子・山根真理他，2004「変容するアジア諸社会における育児援助ネットワークとジェンダー―中国・タイ・シンガポール・台湾・韓国・日本―」『教育学研究』第71巻第４号，日本教育学会，2-18頁。

山根真理，2005「韓国女性にとって『結婚』がもつ意味―2002～2003年プサン市，テグ市インタビューデータから―『東アジア比較文化研究　３』東アジア比較文化国際会議日本支部，44-57頁。

---

❶ 専門分野，関連分野　　❷ 受賞歴　　❸ 所属学会，協会，研究会など　　❹ 教育活動
❺ 研究活動　　❻ 大学運営　　❼ 社会的活動　　❽ その他特記事項

山根真理，2005「韓国の家族とジェンダー」北原淳編『東アジアの家族・地域・エスニティ』東信堂，77-94頁。

学会発表：

Emiko Ochiai & Mari Yamane et.al. Childcare Support and Gender Roles in East and Southeast Asian Societies: Evidence from a Comparative Research Projet, 36th World Congress in Beijing, the Inter-national Institute of Sociology

❻ 国際交流委員

❼ 愛知県「男女共生フォーラム」委員

❽ 2004年度　日韓文化交流基金訪韓フェローとして嶺南大学校に滞在

関根　美貴　Sekine, Miki　助教授　家政教育講座　家政学修士

❶ 家政学，専門分野：生活経済学，関連分野：生活経営学

❸ 日本家政学会，生活経済学会，消費者教育学会，地域農林経済学会

❹ 生活経営論（2年），くらしとお金（2年），生活経済論（3年），消費経済論（3年），生活関連情報分析（3年），消費者研究Ⅰ（3年），消費者研究Ⅱ（3年），消費者研究Ⅲ（4年），消費者研究Ⅳ（4年），生活設計（4年），家庭経済学演習Ⅰ（大学院），家庭経済学演習Ⅱ（大学院）

授業全体としては生活者・消費者に関する諸課題を経済的な側面から実証的に分析し，さらに問題解決のための施策についても考察できる能力を養うことを目標としている。そのための基礎的科目として生活経営，生活経済，消費経済等を，発展的な科目として消費者研究Ⅰ～Ⅳ等を位置づけている。基礎的な科目では生活者・消費者の経済的な行動の実態の把握や，その理論的な理解に目標を置いている。これらの科目で得られた基礎能力をもとに発展的な科目では生活者・消費者に関する現代的課題を取り上げ，それについての検討をより深く行っている。またその中で分析に必要な手法についても学べるように配慮している。また近年の経済社会状況の急激な変化の中，生活者は自立した生活経営を行う必要性がこれまで以上に高まっている。生活設計等の授業ではそのために必要な能力の養成を目指している。

授業では受講生が自ら考えることができるように心がけている。そのためにできるだけ多くの関連資料を配布し，随時質問を促しながら授業を進めている。また受講生による調査・報告を積極的に取り入れ，受講生のより主体的な授業参加を図る工夫をしている。

❺ 現在の主な研究テーマのひとつはライフスタイルの多様化と家計である。本年度は世帯主の年齢階級及び出生コーホート等の世帯属性の違いに着目し，家計の住宅・土地のための負債行動の実態に関する分析を中心に研究を行った。

また消費者教育についても，子どもたちにくらしの中のお金と仕事について目を向けさせる授業づくりについて研究する機会を得させていただいた。今後このことについてもさらに研究を続けていきたいと考えている。

くらしの中の「お金と仕事」に目を向けさせる家庭科の授業づくり　教職研修8月号増刊　2004

家計の住宅・土地のための負債行動に関する計量分析―世帯主の年齢階級効果及び出生コーホート効果に着目して―　愛知教育大学家政教育講座研究紀要　36号　2005

❻ 入学試験部会委員

❼ 愛知県消費生活審議会専門部会専門委員

板倉　厚一　Itakura, Koichi　　助教授　家政教育講座　　農学博士

❶ 食品学

❸ 日本農芸化学会，日本過酸化脂質・フリーラジカル学会

❹ 情報教育入門Ⅱ（１年），家庭科研究ＡⅠ（２年），生活関連情報演習（２年），商品実験Ⅰ（３年），生活技術・情報研究Ⅰ（３年），生活技術・情報研究Ⅱ（３年），消費と流通の諸問題（４年），生活技術・情報研究Ⅲ（４年），生活技術・情報研究Ⅳ（４年），食品学演習Ⅰ（大学院），食品学演習Ⅱ（大学院）

担当授業は，情報教育に関わるもの（１，２年生）と食物に関わるものに大きくわけられる。情報教育に関わる授業（情報教育入門Ⅱ，生活関連情報演習）では，主にエクセルを利用した情報処理と，パワーポイント等を利用したプレゼンテーションの仕方に主眼をおいて授業計画を行った。内容は，今後学年が進行するに従って必要不可欠となってくると想定されるものに限定し，それぞれの項目に対して課題を課して理解度をチェックしながら授業を行った。ただ，３，４年生の様子をみると，授業で学んだことがその後十分活かされているとは言い難い。今後はその点も十分考えながら授業内容を見直していくべきと考えている。

❺ 現在のテーマは，脂質過酸化に伴うタンパク質の酸化修飾についてである。脂質過酸化の過程では，様々な脂質酸化分解物が生成している。その中にはタンパク質と容易に反応し，タンパク質の構造や機能に大きな変化を引き起こすものが少なくない。そこで，脂質酸化分解物のなかでも，以前から生体に対して毒性が強いとされているアルデヒド化合物に注目し，タンパク質修飾の観点からその毒性について化学的な検討を行っている。

❻ 大学院家政教育専攻代表，大学院家政教育専攻入試委員，共生社会コース消費生活履修モデル代表

❼ 農芸化学会代議員

杉浦　淳吉　Sugiura, Junkichi　　助教授　家政教育講座　　博士（心理学）

❶ 社会心理学，環境心理学，コミュニケーション教育，環境教育，消費者教育

❷ 日本社会心理学会平成９年度「若手研究者奨励金」受賞（1997年10月）
廃棄物学会平成11年度「廃棄物学会論文賞」受賞（2000年５月）
日本シミュレーション＆ゲーミング学会2004年度「論文賞」受賞（2004年６月）

❸ 日本シミュレーション＆ゲーミング学会・理事，運営副委員長（2003年～現在）
日本パーソナリティ心理学会・学会誌編集委員（2000年10月～2004年９月）
日本心理学会，日本社会心理学会，日本グループ・ダイナミックス学会，日本教育心理学会，廃棄物学会，日本環境教育学会，科学技術社会論学会（以上会員，一部）

❹ 環境と人間・入門（１年），共生社会生活論（１年），共生社会行動論（２年），グループ・ダイナミックス（３年），社会調査法（３年），生活環境論（３年），消費環境研究Ⅰ～Ⅳ（３，４年），生活環境学特論（大学院）

授業では教員・学生間だけでなく，学生同士の相互作用を促すべく，ゲーミングによるプログラムを開発・実践している。開設学年の異なる授業の受講者間の連携をはかり，

カリキュラムの連続性・相互関連性の理解を深める工夫をしている。

❺ 現在の研究テーマ：

ゲーミング・シミュレーションによる環境教育のカリキュラム開発とその教育効果／合意形成のための説得・交渉技術に関連する参加型プログラムの設計・開発と評価／環境配慮行動の普及プロセスに関する社会心理学的研究

査読付論文（一部）：

Ohnuma, S., Hirose, Y. Karasawa, K., Yorifuji, K. & Sugiura, J., 2005, Why do residents accept a demanding rule: Fairness and social benefit as determinants of approval of a recycling system. Japanese Psychological Research, Vol. 47, No.1, 1-11.

前田洋枝・広瀬幸雄・安藤香織・杉浦淳吉・依藤佳世，2004，環境ボランティアによる資源リサイクル活動とエンパワーメント―参加者の有能感・連帯感・有効感の獲得と今後の活動意図―　廃棄物学会誌論文誌，15(5)，398-407.

科学研究費補助金など研究助成の受領状況：

1）環境教育ツールとしての「説得―納得ゲーム」の開発に関する社会心理学的研究　科学研究費補助金　若手B，H14-H16，研究代表者

2）コミュニケーション教育ツールとしての「説得―納得ゲーム」の開発に関する研究　財団法人科学技術融合振興財団助成，H14-H16　研究代表者

3）環境配慮行動の規定因に関する日独比較調査―社会制度・文化差の影響に関する環境社会心理学的アプローチ　科学研究費補助金基盤研究(B)(1)，H14-H16，研究分担者（研究代表者：名古屋大学大学院環境学研究科・広瀬幸雄教授）

4）マイクロ－マクロ関連に基づく社会特性の創発に関する研究　科学研究費補助金基盤研究(B)(1)，H15-H17，研究分担者（研究代表者：埼玉大学教養学部・高木英至教授）

5）フィールドの語りを捉える質的心理学の研究法と教育法　科学研究費補助金，基盤研究(B)(1)　H16-H19，研究分担者（代表者：京都大学大学院教育学研究科・山田洋子教授）

6）市民参加による循環型社会の創生に関する研究　独立行政法人科学技術振興機構「社会技術研究プログラム：循環型社会」，H14-H17，研究分担者（研究代表者：名古屋大学大学院環境学研究科・柳下正治教授）

学術・研究交流等：

平成16年度文部科学省「海外先進教育研究実践支援プログラム」による在外研究「教員養成を軸とした改革推進のための海外調査：環境教育を中心として」2004年12月15日～2005年９月30日　ドイツ連邦共和国

❻ 教育実地研究専門委員会・委員，自然観察実習園管理運営委員会・委員

❼ 市民がつくる津島市環境基本計画策定委員会・委員　ほか

❽ 教育活動，研究活動，社会的活動については，今日の大学の社会的位置づけを鑑み，相互の連携・連接を考慮しながら協働を重視して活動を行っている。次のサイトで研究・教育活動等，報告している。http://homepage2.nifty.com/jsugiura/

橋本　尚美　Hashimoto, Naomi　　助教授　家政教育講座　　教育学修士

❶ 教育学，専門分野：教科教育学（家庭科教育），関連分野：教育方法学

❸ 日本教育学会，日本教育方法学会，日本教科教育学会，日本家庭科教育学会，日本生活指導学会，日本社会福祉学会

❹ 人間と生活（人間と性）入門（１年），家庭科教育Ｂ（２年），家庭科教育Ａ，家庭科教育ＣⅡ，家庭科教育ＣⅣ，生活科学演習Ⅰ・Ⅱ（３年），総合演習Ⅱ，生活科学実験Ⅰ・Ⅱ（４年），家庭科教育特論Ⅳ，家庭科授業研究（大学院）

教育活動の中心は，家庭科の授業を構想するための視点や方法，家庭科における学びのあり方を学生とともに探求していくことにある。現代生活の重要なテーマとして，個人・家族・ジェンダー・福祉に関する課題，衣食住を中心とした消費・環境に関する課題を見定め，それらに関する子どもの現実や家庭科の授業実践を取り上げながら，現代の生活課題を捉える視点や，それらを学習する方法を検討している。

講義の進行については学生と協議し決定するが，生活課題や授業実践をグループや全体で検討したり，調査・発表したりする時間を設けるようにしている。限られた時間のなかで，クラス全体の関係をつくりながら議論を深めていくことはなかなか難しいため，今後さらに講義の全体構想を検討していきたい。

❺ 現在の研究活動の中心は，家庭科を中心にした日本とスウェーデンにおける福祉の学習に関する歴史的研究・実践的研究，及び，スウェーデンを中心にした教室におけるジェンダー・エクイティのためのアクション・リサーチに関する研究にある。今年度も，スウェーデンに渡航し，歴史的資料の収集，教育文化省・学校庁・研究者へのインタビュー，学校訪問と授業観察を進めた。今後は，それらの分析を行うとともに，日本の家庭科教育における福祉・ジェンダーに関する総合的学習の可能性と方策を明らかにしていく。

著書：

１．福田公子，山下智恵子，林未和子編『生活実践と結ぶ家庭科教育の発展』大学教育出版，2004年８月（共著）（「現代生活を問い直す福祉の学び」第Ⅱ部第７章）

科学研究費補助金：

１．研究題目「スウェーデンにおける「福祉・人権」の総合的学習と子どもの参加―カリキュラムと授業実践の分析を中心に―」（若手研究(B)，研究代表者，100万円）

２．研究題目「教室におけるジェンダー・エクイティのためのアクション・リサーチ―理科・数学・家庭科の授業場面を中心に―」（一般研究(C)，研究分担者（代表山田綾），130万円）

他の研究助成：

１．テーマ「「人間と性」のカリキュラムと教材の開発」（愛知教育大学　共通科目プロジェクト経費，研究分担者（代表　村尾忠廣））

２．テーマ「男女共同参画実現のための高等教育のカリキュラム開発及び学習・研究環境の整備プランの検討」（愛知教育大学　重点教育研究費，研究分担者（代表山田綾））

❻ セクシュアル・ハラスメント防止等対策委員会委員

❼ 平成16年度国際協力機構（JICA）国別特設研修（サウジアラビア国における教育カリキュラム開発の推進），講師（「日本の福祉教育」）（開催責任者 愛知教育大学 宮川秀俊）

---

❶ 専門分野，関連分野　❷ 受賞歴　❸ 所属学会，協会，研究会など　❹ 教育活動
❺ 研究活動　❻ 大学運営　❼ 社会的活動　❽ その他特記事項

保健管理センター

岡田　暁宜　Okada, Akiyoshi　　助教授　保健管理センター　　医学博士

❶ 専門分野：精神分析，関連分野：精神医学，心身医学

❷ 第40回全国大学保健研究集会優秀演題（平成14年10月）

❸ 日本精神分析学会（認定精神療法医，認定スーパーヴァイザー），日本心身医学会（認定医，代議員），日本臨床心理士資格認定協会（認定臨床心理士），日本内科学会（認定医），日本精神神経学会（会員），日本心理臨床学会（会員），日本精神病理・精神療法学会（会員），日本集団精神療法学会（会員），日本思春期青年期精神医学会（会員），精神分析的精神医学会（会員），日本医師会（産業医），日本精神分析協会（候補生），日本語臨床研究会（会員）

❹・心身医学特論（学校臨床・大学院），心身医学特論（保健体育・大学院），こころとからだ展　開２―こころの臨床―（共通科・学部）

・愛知教育大学保健管理センター健康講座「生活習慣と胃潰瘍―ストレスから感染まで―」，講演（2005年２月２日，愛知教育大学）

❺・現在の研究テーマ：

１．大学生のメンタルヘルスに関する症例研究

２．精神分析的精神療法及び精神分析に関する研究

・業績リスト：

論文：

１）岡田暁宜（2004）学生相談における自己愛的な青年の精神分析的精神療法―転移の重層性とそのwork through―，精神療法：30巻６号

２）岡田暁宜（2004）児童虐待に対する電話相談について―民間施設と公的機関の比較―，IRIS HEALTH第３巻

３）岡田暁宜，高橋哲郎（2005）男性恐怖を呈する混血女性の精神分析的精神療法，精神療法：31巻１号

４）岡田暁宜（2005）学校教育におけるコンサルテーション・リエゾン―精神分析の視点から―，愛知教育大学紀要54

５）岡田暁宜（2005）本学における実験・研究に関する倫理的問題について，環境保全広報2004

発表：

１）岡田暁宜：精神科診療における精神分析療法の理論と実際，第100回日本精神神経学会（精神医学研究コース），札幌，2004年５月

２）岡田暁宜：双子の兄をもつ転換ヒステリー女性との一終結―「儀式」と「脱儀式」―，第50回日本精神分析学会，東京，2004年10月

３）草野美穂子，岡田暁宜ら：神経性無食欲症患者の治療動機及び治療中断理由について―質的研究による摂食障害患者への調査―，長野，第27回日本精神病理・精神医学会学会，2004年10月

❻・大学産業医及び保健管理医としての活動

・保健管理委員会，安全衛生委員会，水質汚濁防止検討委員会，組換えDNA実験安全委員，放射線障害予防委員会，防災防火委員会，東海地震対策専門委員会，愛知教育大学保健管理センター紀要編集委員

❼・講演：「20代・30代のためのメンタルヘルス」，名古屋市教育委員会精神保健管理者研

修会（名古屋市中区鯱城ホール）2004年12月24日
・本学付属学校の教職員，生徒，家族に対するメンタルヘルス活動
・精神分析的精神療法の指導

法人化後の取り組み

法人化後の取り組み

本学も法人化後１年が経過したが，その間，外部資金の導入あるいは社会に向けて本学からの情報発信を行うため，色々な事業を試みた。これらの事業のいくつかを紹介する。

まず，外部資金の導入については次の三つの事項について述べる。

１　科学研究費補助金の獲得に向けての対応

本学では，外部資金として科学研究費（単に「科研費」という。）は極めて重要な位置にある。平成17年度から科研費の獲得に向けて，採択されなかった申請者に対して，非実験系について６万円，実験系について９万円を支給して，科研費の申請率を向上させる方策をとることとした。

その結果，平成16・17年度における科研費の申請件数，採択件数は下記表の通りであり，今のところ，その対応が効果的であるとは言い難い。

<table>
<tr><th rowspan="2">種　　類</th><th colspan="2">平成16年度</th><th colspan="2">平成17年度</th></tr>
<tr><th>申請件数</th><th>採択件数</th><th>申請件数</th><th>採択件数</th></tr>
<tr><td>特定領域研究</td><td>0</td><td>0</td><td>4</td><td>3</td></tr>
<tr><td>基盤研究(A)一般</td><td>0</td><td>0</td><td>2</td><td rowspan="2">0</td></tr>
<tr><td>基盤研究(A)海外学術調査</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>基盤研究(B)一般</td><td>10</td><td rowspan="2">2</td><td>10</td><td rowspan="2">1</td></tr>
<tr><td>基盤研究(B)海外学術調査</td><td>4</td><td>0</td></tr>
<tr><td>基盤研究(C)一般分</td><td rowspan="2">32</td><td rowspan="3">10</td><td rowspan="2">34</td><td rowspan="3">5</td></tr>
<tr><td>基盤研究(C)時限細目分</td></tr>
<tr><td>基盤研究(C)企画調査</td><td>1</td><td>2</td></tr>
<tr><td>萌芽研究</td><td>9</td><td>0</td><td>10</td><td>2</td></tr>
<tr><td>若手研究(A)</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr>
<tr><td>若手研究(B)</td><td>17</td><td>6</td><td>16</td><td>6</td></tr>
<tr><td>計</td><td>75</td><td>18</td><td>78</td><td>17</td></tr>
</table>

２　大学教育支援プログラムへの対応

文部科学省が公募する大学教育支援プログラムは現在のところ次の４つである。

⑴　特色ある大学教育支援プログラム（特色ＧＰ）

大学教育の改善に資する種々の取り組みのうち，特色ある優れたものを選定し，今後の高等教育の改善に活用することを目的とするものである。

本学では，本プロジェクトとして，平成16年４月12日に「グローバル化対応の教師養成と国際連携」を申請したが，不採択であった。そして，平成17年４月６日に「科学教育出前授業等による自立支援事業」を申請した。採択結果は７月下旬に公表される予定である。

⑵　現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代ＧＰ）

各種審議会からの提言等，社会的要請の強い政策課題に対応した取り組みを選定し，今後の高等教育の更なる活性化を促進することを目的とする。

本学では，本プロジェクトとして，平成16年７月23日に「地域活性化への貢献」を申請したが，不採択であった。そして，平成17年５月23日に「教員養成のためのe－グローバルラーニング」及び「外国人児童生徒のための教材開発と学習支援」を申請した。採択結果は８月下旬に公表される予定である。

⑶　大学教育の国際化推進プログラム

本プログラムは，「海外先進教育研究実践支援」と「戦略的国際連携支援」の二つに分けられている。

①　海外先進教育研究実践支援

大学等の教職員を海外の教育研究機関等に派遣し，先進的な研究や優れた教育実践に参画させることなどにより，教育研究能力の向上を図る優れた取り組みを選定し，高等教育改革を一層促進させることを目的とするものである。

本学では，平成17年度に「アジアの協定大学等と連携した教員養成調査」を申請した。採択結果は７月下旬公表される予定である。

②　戦略的国際連携支援

大学が自らの特色を生かし，海外の大学等と教育研究活動で連携し，国際的な共同プログラムを実施するなど，総合的な国際教育活動の取り組みを支援することを目的とするものである。

本学では，本プロジェクトとして，平成17年６月20日に「言語文化相異を基礎にした教員養成比較交流」を申請した。採択結果は７月下旬に公表される。

⑷　大学・大学院における教員養成推進プログラム

近年，学校教育が抱える課題の複雑・多様化に適切に対応できる，高度な専門性と実践的指導力を兼ね備えた教員の養成，現職教員の再教育の一層の充実を図り，教員の資質能力の向上を目指すことを目的とするものである。

本プロジェクトは今年度初めて公募されるものである。

本学では，本プロジェクトとして，「拓き，つなげる力が育つ市民参画型教員養成」を平成17年６月21日に申請した。そのとき，愛知県・名古屋市等からの支援をもいただきながら対応した。採択結果は８月下旬に公表される。

3　特別教育研究経費

新たな教育研究ニーズに対応し，各国立大学等の個性に応じた意欲的な取組みを重点的に支援することを目的としている。それは次に５項目に分けられる。

①　大学教育の改革を推進するための取組みを支援する「教育改革」

本学では，平成17年度２件要求し，１件が採択された。

②　大規模基盤研究の推進や新たな研究分野・領域への挑戦等の学術研究の推進を支援する「研究推進」

本学では，平成17年度は要求しなかった。

③　特定の国立大学等において国内外の研究者等に教育研究環境を開放して行う教育研究水準の向上に向けた事業を支援する「拠点形成」

本学では，平成17・18年度も要求しなかった。

④　国際機関を含む公共的団体と連携してコスト・シェアの考え方に基づき一定期間にわたって行われる教育研究活動を支援する「連携融合事業」

本学では，平成17年度は要求しなかった。

⑤　学術研究上，特殊な価値を有する情報の保存・収集（古文書，生物遺伝資源等）等を支援する「特別支援事業」

本学では，平成17年度は 6 件要求して，ルーチンなもの 2 件が採択されたのみであった。

4　愛知県内高等学校訪問

本学で昨年 7 月から 9 月にかけて，愛知県外の高校の中で，本学の教職員の出身者がいる高校には，本学の「大学案内」等を含めて校長先生宛てに，本学を紹介したものを送った。そして，愛知県内のすべての高校については，「高校訪問プロジェクト」として，9 月下旬からの秋期休講を利用して，教員と事務系職員がペアで，県内の全高校228校を個別訪問した。

そして，本学の特色，入試の概要，カリキュラムの概要，卒業後の進路等を説明しつつ，高校との意見交換等を行い，それぞれの高校からの本学に対する要望等をも把握してきた。

現在，各高等学校から得られた要望・意見等をまとめているところであるが，その中の主なものは次の通りである。

①　知立から大学間のバス所要時間の短縮・工夫
②　大学の諸施設・設備の環境整備
③　入試科目についての考慮（例えば数学ＩＢを指定するのではなく，数学ＩＡあるいは数学ＩＢのどちらかを選択できる余地を残すこと）

その結果として，本学への受験志願者数の増大等に繋がり，外部資金の獲得に寄与することが期待される。

次に，本学からの社会に向けた情報発信については，本学が積極的な情報発信を行うことにより，本学の特色ある教育研究を紹介し，その結果として本学への受験志願者の増大に繋がることが期待できる。法人化に伴って，公金を使用している大学の情報公開は大学の社会的責任でもある。本学からの社会に向けての情報発信は，以下のようなものがある。

5　広報部会を通した情報発信

本学の広報に関しては，役員会の下に広報部会を設置し，広報全般に関する基本方針の策定，企画・立案及び各担当部局間の連絡調整等を総括的に実施することとしている。毎月 1 回定期的に朝日新聞，毎日新聞，中日新聞，ケーブルテレビの記者に対して本学の情報発信を行っている。

6　本学教員による社会的教育研究活動等の紹介を通した情報発信

本学には，約290名の教員が存在し，それぞれの教員による地域と連携した社会的教育研究活動が色々な分野・方面において展開されている。それらの中のいくつかが新聞等のマスコミを通して紹介され，その結果として本学を紹介する役目を果たしている。

7　学長の紹介等を通した情報発信

私が平成13年 7 月に本学学長に就任以来，学長の自己紹介を通して本学の紹介を行った。

①　読売新聞（平成13.7.16）
②　中日新聞（平成15.9.30）
③　毎日新聞（平成16.4.19）
④　第 3 回読売教育シンポジウム（平成16.4.19）
⑤　教育家庭新聞（平成17.3.5）
⑥　朝日新聞（平成17.3.9）
⑦　関塾タイムス（平成17.7）
⑧　リクルート「社会人・学生のための大学・大学院を選ぶ情報誌」（平成17.7.25）

8　学生による文化活動あるいはスポーツ活動等を通した情報発信

本学の中には，文化活動あるいはスポーツ活動において，極めて優秀な成績を記録することによって，本学の名前を宣伝し，大学の知名度を上げることに貢献することが過去何回かあった。

① 第18回日本ジュニア陸上選手権大会（平成14.6.30）
② シンクロ・ナイズドスイミング　スイスオープン2002大会（平成14.7.14）
③ 日本シンクロチャレンジカップ2002（平成14.8.25）
④ シンクロ・フィギュアトライアル2002大会（平成15.2.1）
⑤ 第79回日本選手権水泳競技大会（平成15.4.6）
⑥ 第72回日本学生陸上競技対抗選手権大会（平成15.7.6）
⑦ 第25回全日本軽量級選手権大会　ボート（女子）（平成15.7.6）
⑧ 第１回日本学生陸上競技ジュニア選手権大会（平成15.9.27）
⑨ 第30回日本オリエンテーリング大会（平成16.3.28）
⑩ 第80回日本選手権水泳競技大会（平成16.5.5）

あとがき

本学は，2004年４月，国立大学法人愛知教育大学となり，各法人が自主性・自立性を確保し，大学を運営することができるという，新しいシステムの下での１年間でした。法人化後，本学も新たな試みとして，幾多の事項を実施してきました。大学憲章を踏まえた全学会議や教職員会議の設置，講義や演習における学生の質問に答えるため，全教員が週２時間のオフィスアワーを設定し，ホームページで公開していること，本学の教育改善の取組のセンターとして教育創造センターが設置（2004年11月）されたこと，学生の代表が教育改善や学生生活の充実のため，関係の教務企画委員会や学生支援委員会に参加していること，また教員の管理運営負担を削減し，教育研究の充実を図るため，委員会の見直しを図り，委員会の数や委員数を大幅に削減したこと（ただし，評議員の先生には主要委員会の委員を兼任したため，管理運営業務が大幅に増えた），また，本学を知り理解していただくために，県下の全高校を教員と職員が一緒に訪問したこと，小学校免許取得を希望する学卒者を大学院に受け入れ小学校免許取得が可能となるコースを大学院に設置したこと等，様々な取り組みや規程の見直しを行いました。

また，法人化に伴い，それまでは人事院規則の下に管理されていた公務員と異なり，教員及び事務職員全てが労働基準法を初めとする労働法制の下で，法人運営を行うことになりました。国立大学法人法成立後６ヶ月の準備期間しかなかったこともあり，就業規則などを大急ぎで作成し，なんとか４月発足の法人に間に合わせたため，何度か就業規則を改定しなければなりませんでした。また，労働安全衛生法も適用され，そのための衛生管理者や産業医の確保も大変な作業でした。様々な環境測定も必要になり，こうした事態への対応も急がれました。

このように，法体系の変更により必然的に生まれた新たな対応を含め，より良い教育と研究の確立を目指してきた１年でしたが，国からの財政援助がそれまでの義務的経費から，裁量的経費に変更され，運営費交付金という補助金と授業料を中心とする自己収入で法人の運営をしていくシステムのため，効率化による交付金削減が，今後じわじわと効いて来るでしょう。いずれにせよ，教育研究の課題を達成するためには十分な資金が必要なことは言うまでもありませんが，本学は，可能な限り基盤的な教育研究費を削減しないようにということで，予算配分を04年度は行いました。その結果。一人当たり約100万円の教育研究経費が配分されました。この，１年間の各教員の教育研究の成果の集大成が，この年次報告書です。今年度は，04年度の実績，特に業務運営に関する実績を中心に，６月末に実績報告書を提出しました。８月には，この報告書に対する評価も国立大学法人評価委員会から出されました。これは，財務諸表の提出とともに，毎年度提出が義務付けられているものです。また，教育研究に関する評価は，第一期中期目標終了の２－３年前から大学評価・学位授与機構により評価されます。また，７年に一回の評価が義務付けられている認証評価は，本学は2007年度に受けることを決めています。この年次報告書は，こうした各種評価の基礎資料を提供するもので，いわば本学の自己評価所の集大成というべきものです。

したがって，大学の社会貢献や説明責任が鋭く求められている今日，本報告書が，本学が大学憲章や中期目標に記載された本学の社会的責任を果たしていく上での一助になることを願っています。この年次報告書をお読みいただき，広くご批判・ご叱責をいただければこれに優るものはありません。

2005年10月

愛知教育大学理事・副学長（学術総務担当）
松田　正久

愛知教育大学憲章

（2003年４月16日制定）

愛知教育大学の理念

愛知教育大学は，学術の中心として深く専門の学芸を教授研究するとともに，幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い，豊かな人間性を涵養する学問の府として，日本国憲法，教育基本法，ユネスコの高等教育に関する宣言等の理念を踏まえ，教育研究活動を通して世界の平和と人類の福祉及び文化と学術の発展に努めることが，普遍的使命であることを自覚し，愛知教育大学憲章を定める。

愛知教育大学は，学部及び大学院学生，大学教職員，附属学校教職員等を構成員とし，大学の自治の基本理念に基づき，大学における自律的運営が保障される高等教育機関として，また国により設置された国立大学として，その使命を果たすため，本学の教育目標と研究目標，教育研究及び運営のあり方を定め，これを広く社会に明らかにするものである。

愛知教育大学の教育目標

愛知教育大学は，平和で豊かな世界の実現に寄与しうる人間の教育をめざす。

学部教育においては教養教育を重視し，教員養成諸過程では多様な教員養成プログラムを通して，平和な未来を築く子どもたちの教育を担う優れた教員の養成をめざし，学芸諸過程では，社会の発展と文化の継承及び創造に貢献できる広い教養と深い専門的能力を持った多様な社会人の育成をめざす。

大学院教育においては学部教育を基礎に，学校教育に求められるさらに高度な能力を有する教員の養成をめざすとともに，諸科学の専門分野及び教育実践分野における理論と応用能力を備えた教育の専門家の育成をめざす。また，大学院を教員の再教育の場としても位置付け，教師教育の質的向上を図る。

愛知教育大学の研究目標

愛知教育大学は，教育諸科学をはじめ，人文，社会，自然，芸術，保健体育，家政，技術分野の諸科学及び教育実践分野において，科学的で創造性に富む優れた研究成果を生み出し，学術と文化の創造及び発展に貢献する。さらに，その成果を社会へ還元することを通して，人類の平和で豊かな未来の実現，自然と調和した持続可能な未来社会の実現に寄与する。

愛知教育大学の教育研究のあり方

１．学問の自由と大学の自治

愛知教育大学は，自発的意思に基づく学術活動が，世界平和と持続可能な社会の形成に寄与することを期して，学問の自由を保障する。また，大学の自治が保障された自律的共同体として，教育が国民全体に責任を負って行われるべきであることを自覚し，不当な支配に服することなく，社会における創造的批判的機能を果たす。

２．世界の平和と人類の福祉への貢献

愛知教育大学は，学術の基礎研究と応用研究をはじめ，未来を拓く新たな学際的分野にも積極的に取り組み，世界の平和と人類の福祉及び学術と文化の発展に貢献する。

３．教師教育に関わる教育研究の推進

愛知教育大学は，広く人間発達に関わる諸学問と教育方法の統合を図りながら，教員養成や教員の再教育などの教師教育に関する実践的教育研究を行うとともに，教師の専門性と自立性の確立をめざした教育研究を推進する。

４．国際交流の推進

愛知教育大学は，国内外の高等教育諸機関との連携や国際交流を推進し，留学生の積極的受け入れ及び派遣を通して，アジアをはじめ，世界の教育と文化的発展に貢献する。

５．大学の社会に対する責任と貢献

愛知教育大学は，学外への情報公開及び広報活動を通して，社会に対する説明責任を果たし，学外からの声に恒常的に答え，社会に開かれた大学を実現する。

また，教育界をはじめ広く社会と連携し，社会からの要請に応えて，教育研究の成果を還元し，社会の発展に貢献する。

愛知教育大学の運営のあり方

１．大学の民主的運営

愛知教育大学は，全ての構成員が，それぞれの立場において，本学の目標を達成するため，大学の諸活動へ参画することを保障し，民主的運営を実現する。構成員は，大学の自治を発展させるための活動を相互に尊重するとともに全学的調和をめざす。

２．学生参画の保障

愛知教育大学は，学生の学修活動を支援し，教育改善への学生参画を保障する。

３．教育研究環境の整備充実

愛知教育大学は，豊かな自然環境を保全活用し，施設整備を含む教育研究環境の整備充実を図るとともに，障害者にもやさしい大学づくりを進める。

４．自己点検評価と改善

愛知教育大学は，本学の教育目標と研究目標に照らして，恒常的な自己点検評価により，不断の改善に努める。

５．人権の尊重

愛知教育大学は，全ての構成員が相互に基本的人権と両性の平等を尊重し，教育研究活動における，あらゆる差別や抑圧などの人権侵害のない大学を実現する。

愛知教育大学

年 次 報 告 書

2005年10月　発行

編　集　　愛知教育大学評価委員会

発　行　　愛　知　教　育　大　学
〒448-8542　刈谷市井ヶ谷町広沢１
☎(0566)26－2114
http://www.aichi-edu.ac.jp/

印　刷　　名鉄局印刷株式会社

ANNUAL REPORT AICHI UNIVERSITY OF EDUCATION

愛知教育大学

〒448-8542　刈谷市井ヶ谷町広沢1
総務部企画課（0566）26-2114

AD:Yutaka TAKEHARA　DESIGN:Takashi KONNO